

鳥取県羽合町

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書

天神川流域下水道事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

(本文編)

1983

財団法人 鳥取県教育文化財団



V
寄
贈



正 誤 表 (長瀬高浜遺跡、本文編)

頁	誤	正
57 P 19行	枯土	粘土
58 P 1行	周構	周溝
74 P 13行	封土	埋土
83 P 15行	外	他
104 P 4行	3 m ²	38 m ²
125 P 9行	注1	注2
142 P 3行	測る	測る。
299 P 2行	観	み
299 P 3行	依来	依頼
315 P 4行	構の違いに 表われ	遺構の違いに 表われた。

序 文

天神川流域下水道事業に伴う長瀬高浜遺跡発掘調査は、昭和52年8月開始以来既に5年余の歳月が流れ、この間四季折々の砂丘地独特の悪条件に悩まされてきたが、ようやく年内に現地調査を終了できる見通しとなった。

現地調査を優先しなければならない事情もあって、本書は昭和53、56年度の調査結果をまとめたもので、竪穴住居跡、掘立柱建物跡、古墳、石棺墓、埴輪棺墓等が記録されている。

今までに刊行した報告書とともに、本書がより多くの方々の埋蔵文化財の理解に役立てていただければ幸いである。

本書の刊行にあたり、指導、助言、協力をいただいた関係各位に対し厚くお礼を申し上げる次第である。

財団法人 鳥取県教育文化財団 理事長 平林 鴻三



例 言

本書は、天神川流域下水道事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の、昭和53・56年度調査地区の報告書である。

財団法人鳥取県教育文化財団が、県土木部下水道課の依頼を受けて発掘調査を実施したものである。発掘および整理・報告書作成作業の実施にあたっては、鳥取県教育委員会文化課・鳥取県埋蔵文化財センターの指導と、各研究機関・大学等の考古・人類・自然科学等の専門家の助言・協力を得た。

本書の作成については、中部埋蔵文化財調査事務所で昭和57年度調査員が行ない、下記の専門家の方々と昭和53・56年度調査関係者の方々の指導・助言を得た。

記して感謝の意を表します。

調 査 指 導 鳥取県教育委員会文化課

県文化財保護審議会委員	山本清・佐々木謙・手嶋義之
京都大学	池田次郎
鳥取大学	豊島吉則・赤木三郎・井上晃孝・井上貴央
奈良国立文化財研究所	田中 琢・佐原真・沢田正昭・町田章
東京国立博物館	本村豪章
同志社大学	森浩一・石野博信・堀田啓一
岡山理科大学	三好孝夫
和洋女子大学	寺村光晴
平安学園高校	萩本勝
北九州市立歴史博物館	小田富士雄・武末純一
県立博物館	大谷博・清末忠人
県研修センター	山名巖
倉吉文化財協会	名越勉・真田廣幸・森下哲哉

長瀬高浜遺跡の報告書の刊行は次のとおりである。

長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅰ—北条バイパス調査地区	昭和55年3月刊行
〃 Ⅱ—昭和53年度緊急調査地区	昭和56年3月刊行
〃 Ⅲ—昭和54年度調査地区	昭和56年12月刊行
〃 Ⅳ—昭和55年度調査地区	昭和57年3月刊行
〃 — 〃 (埴輪群)	昭和57年9月刊行
〃 Ⅴ—昭和53・56年度調査地区	昭和57年9月刊行
〃 Ⅵ—昭和57年度調査地区	昭和58年3月予定

凡 例

当遺跡の発掘調査は浄化センター工事の工事順位（a～g）〔1図参照〕に従って調査を進めている。53年度はb・f₁地区の一部とa地区、54年度はb地区、55年度はc・d・e地区とf₁地区の一部を、56年度はf₁・f₂地区とg地区の一部の調査を行った。本報告書では1号墳周辺地区（f₁地区）を調査年度でわけて報告する。

1. 本書における方位はすべて真北を示す。
2. 当遺跡では20mのメッシュを組み（1図）ライン交点、大グリット（地区）の名称を決め表わす。大グリット間は2図のように座標を組み表わす。大グリットを10×10mの中グリットで区分する場合は（2図）NWG・SEG・NWG・SWGと表わす。
3. 本書における遺構記号は次のように表わす。

SA：柵状遺構 SB：掘立柱建物跡 SD：溝状遺構 SE：井戸跡 SF：火葬墓
 SI：竪穴住居跡 SK：土壇状遺構 SP：祭祀用ピット SQ：井戸状遺構
 SR：道状遺構 SX：古墳・墳墓 SZ：方形周溝状遺構 SX'：中世墓（火葬墓を除く）
 SXA：飛鳥時代の墳墓 SXY：弥生時代の墳墓

4. 遺構挿図中における遺物略記号は次のように表わす。

B：銅製品 C：古銭 D：土製品 H：埴輪 J：玉製品 M：鏡 F：鉄製品
 P₀：土器 S：石製品 W：木製品

5. 遺構挿図中における遺物略号のはいらないものは次のように表わす。

P₀23 → 23 F15 → ⑮

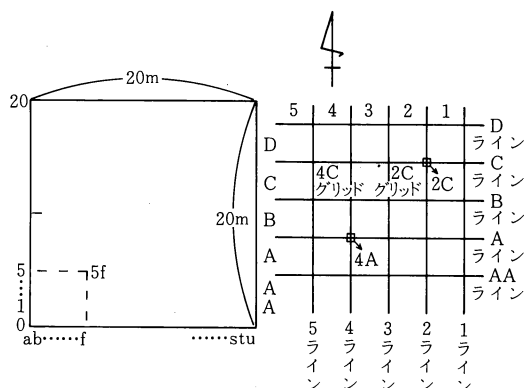
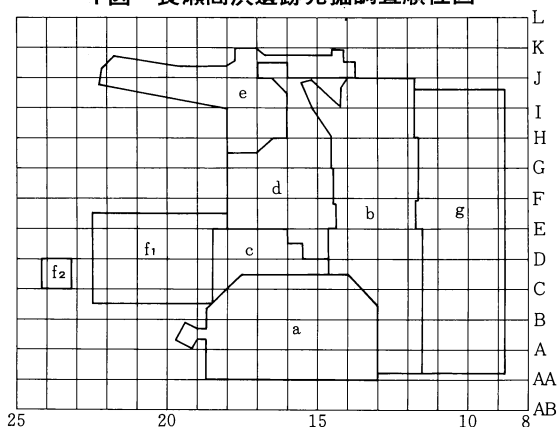
6. 遺構挿図中における黒砂上層面を ▽▽▽，発掘前の地表面を ▽▽▽ のように表わす。

7. 遺構挿図中，セクション・エレベーションの基準線標高は〔L=〕の記号で表わす。

8. 遺構挿図中における遺構検出面は TTTTT のように表わす。

9. 土器の拓本・実測図において粘土帯の継ぎ目がみられるものは ✕ で表わす。

1図 長瀬高浜遺跡発掘調査順位図



2図 グリッド・設定略図

目 次

序 文
例 言
凡 例
目 次
挿図目次

第Ⅰ章	長瀬高浜遺跡の調査経過	1
第1節	発掘調査までの経過	1
第2節	遺跡の発見	1
第3節	試掘調査（昭和52年次）	1
第4節	昭和53年度調査	2
第5節	昭和54年度調査	3
第6節	昭和55年度調査	4
第7節	昭和56年度調査	4
第Ⅱ章	昭和53年度調査地区（ f_1 地区）	11
第1節	中世墓	11
第2節	1号墳及び周辺墳墓	42
第3節	竪穴住居跡	74
第4節	掘立柱建物跡	79
第5節	その他の遺構・遺物	80
第Ⅲ章	昭和56年度調査地区（ f_1 ・ f_2 地区）	85
第1節	中世墓	85
第2節	墳墓	86
第3節	竪穴住居跡	96
第4節	掘立柱建物跡	147
第5節	その他の遺構	150
第6節	f_2 地区	162
第7節	f_1 地区出土弥生土器	166
第8節	f_1 地区出土初期須恵器	171
第9節	f_1 地区出土須恵器	177
第Ⅳ章	昭和56年度後期調査地区（ g 地区）	181
第1節	墳墓	181

第2節	竪穴住居跡	203
第3節	建物跡・柵列等	268
第4節	その他の遺構	283
第V章	長瀬高浜遺跡出土人骨の報告・花粉分析の報告	299
第1節	昭和54～56年度出土人骨の報告	299
第2節	長瀬高浜遺跡出土の人骨について	300
第3節	長瀬高浜遺跡（鳥取県）の花粉分析	308
第VI章	まとめ	313
	調査関係者名簿	314

挿 図 目 次

挿図	1	長瀬高浜遺跡と周辺の遺跡…… 5	挿図	29	S F 25遺構図………26
〃	2	長瀬高浜遺跡黒砂 分布図……… 6	〃	30	S F 26・27遺構図………27
〃	3	長瀬高浜遺跡調査 位置図……… 7	〃	31	S F 28遺構図………28
〃	4	f 地区全体遺構図…… 9	〃	32	S F 29 〃 ……28
〃	5	g 地区全体遺構図…… 9	〃	33	S F 30 〃 ……29
〃	6	S F 01遺構図………11	〃	34	S F 31 〃 ……30
〃	7	S F 02 〃 ……12	〃	35	S F 32 〃 ……30
〃	8	S F 03 〃 ……12	〃	36	S F 33 〃 ……31
〃	9	S F 04 〃 ……12	〃	37	S F 34 〃 ……31
〃	10	1号墳上層中世 墓群位置図………13	〃	38	S F 36・37・38 遺構図………33
〃	11	S F 05遺構図………15	〃	39	S F 37 古銭拓影………33
〃	12	S F 06 〃 ……16	〃	40	S F 40遺構図………34
〃	13	S F 07 〃 ……17	〃	41	S F 41 〃 ……35
〃	14	S F 08 〃 ……17	〃	42	S F 42 〃 ……35
〃	15	S F 09 〃 ……18	〃	43	S F 43遺構図…39・43・44…37
〃	16	S F 10 〃 ……19	〃	44	S F 45遺構図………38
〃	17	S F 11 〃 ……19	〃	45	S F 46 〃 ……38
〃	18	S F 12 〃 ……20	〃	46	S F 48 〃 ……39
〃	19	S F 13 〃 ……21	〃	47	S F 49 〃 ……39
〃	20	S F 14・15・16遺構図………22	〃	48	SX' 16 〃 ……39
〃	21	S F 17遺構図………23	〃	49	1号墳並びに周辺 石棺群位置図………43
〃	22	S F 18 〃 ……24	〃	50	1号墳第1埋葬施設 遺物図………45
〃	23	S F 19 〃 ……24	〃	51	1号墳遺物出土状況図 その1 ①区・②区・ ③区………46
〃	24	S F 20 〃 ……24			
〃	25	S F 21 〃 ……25			
〃	26	S F 22 〃 ……25	〃	52	1号墳遺物出土状況図 その2 ④区・⑤区・ ⑥区………47
〃	27	S F 23 〃 ……26			
〃	28	S F 24 〃 ……26			

挿図	53	1号墳出土遺物図……48	挿図	79	S I 96・97遺物図
〃	54	47号墳遺構図……50			その2……77
〃	55	〃 遺物図……51	〃	80	〃 〃
〃	56	〃 第1埋葬施設 遺構図……51	〃		その3……78
〃	57	S X41遺構図……52	〃	81	S B38遺構図……79
〃	58	S X42 〃 , 周辺出土遺物図……53	〃	82	S B39 〃 ……79
〃	59	S X43遺構図……55	〃	83	20D S K01遺物図……80
〃	60	S X44 〃 , 周辺出土遺物図……58	〃	84	〃 遺構図……80
〃	61	S X45遺構図……59	〃	85	19D S K01 〃 ……80
〃	62	S X46 〃 ……60	〃	86	S A01・02 〃 , 遺物図……81
〃	63	〃 周辺出土 遺物図……61	〃	87	遺構外出土遺物その1…81
〃	64	S X48遺構図……62	〃	88	〃 〃 その2…83
〃	65	S X49 〃 ……63	〃	89	〃 〃 その3…84
〃	66	S X50 〃 ……64	〃	90	S F71遺構図……85
〃	67	S X51 〃 ……65	〃	91	S F72 〃 ……85
〃	68	S X52 〃 , 遺物図……67	〃	92	62号墳 〃 ……86
〃	69	S X53 〃 ……69	〃	93	〃 第1埋葬施設 遺構図……87
〃	70	〃 遺物図その1…69	〃	94	〃 遺物図……87
〃	71	〃 〃 その2…70	〃	95	64号墳遺構図……87
〃	72	S X54遺構図……72	〃	96	〃 第1埋葬施設 遺構図……88
〃	73	〃 遺物図……73	〃	97	〃 第2埋葬施設 遺構図……89
〃	74	石蓋土壇遺構図……73	〃	98	67号墳遺構図……90
〃	75	1号墳下層遺構図……74	〃	99	64号墳遺物図……90
〃	76	S I 92遺構図, 遺物図……75	〃	100	S X40遺構図……91
〃	77	S I 96・97遺構図……76	〃	101	S X55 〃 ……91
〃	78	〃 遺物図 その1……76	〃	102	〃 遺物図……92
			〃	103	S X56遺構図……93
			〃	104	S X57 〃 ……94
			〃	105	S X63 〃 ……94

挿図	106	S X63遺物図……………94	挿図	132	S I 113遺構図…………… 114
〃	107	S X57 〃 ……………95	〃	133	〃 遺物出土
〃	108	S X65遺構図……………96			状況図その1…………… 115
〃	109	〃 遺物図……………97	〃	134	S I 113遺物出土
〃	110	S X66遺構図……………97			状況図その2…………… 116
〃	111	S I 91 〃 ……………98	〃	135	S I 113遺物出土
〃	112	〃 遺物図その1…98			状況図その3…………… 117
〃	113	〃 〃 その2…99	〃	136	S I 113遺物出土
〃	114	S I 93遺構図…………… 100			状況図その4…………… 118
〃	115	〃 遺物図…………… 101	〃	137	S I 113遺物出土
〃	116	S I 94遺構図…………… 102			状況図その5…………… 119
〃	117	〃 遺物図	〃	138	S I 113遺物出土
		その1…………… 102			状況図その6…………… 120
〃	118	〃 〃	〃	139	S I 113遺物出土
		その2…………… 103			状況図その7…………… 121
〃	119	S I 95遺構図…………… 104	〃	140	S I 113遺物図
〃	120	〃 遺物図…………… 105			その1…………… 122
〃	121	S I 98遺構図…………… 106	〃	141	S I 113遺物図
〃	122	〃 遺物図…………… 107			その2…………… 123
〃	123	S I 98遺構図…………… 107	〃	142	S I 113遺物図
〃	124	S I 111 遺構図…………… 108			その3…………… 124
〃	125	〃 遺物図…………… 109	〃	143	S I 113遺物図
〃	126	S I 112 遺構図…………… 110			その4…………… 125
〃	127	〃 遺物図	〃	144	軟質碧玉製玉類製作
		その1…………… 110			工程模式図…………… 126
〃	128	〃 内S K01土器	〃	145	S I 114 遺構図…………… 127
		出土状況図…………… 111	〃	146	〃 遺物図
〃	129	S I 112遺物図			その1…………… 128
		その2……………111	〃	147	〃 〃
〃	130	〃 〃			その2…………… 129
		その3…………… 112	〃	148	〃 〃
〃	131	〃 〃			その3…………… 130
		その4…………… 113	〃	149	S I 115遺構図…………… 131

挿図	150	S I 115遺物図	挿図	169	S I 120遺構図…………… 144
		その1…………… 131	〃	170	S I 120遺物図
〃	151	〃 〃			その1…………… 145
		その2…………… 132	〃	171	S I 120遺物図
〃	152	S I 116遺構図…………… 132			その2…………… 146
〃	153	〃 遺物図…………… 133	〃	172	S B22遺構図…………… 147
〃	154	S I 117遺構図	〃	173	S B23 〃 …………… 147
		その1…………… 134	〃	174	S B24 〃 …………… 148
〃	155	S I 117遺物図	〃	175	S B25 〃 …………… 149
		その1…………… 134	〃	176	S B26 〃 …………… 149
〃	156	S I 117遺構図	〃	177	S B27 〃 …………… 150
		その2…………… 135	〃	178	S B28 〃 …………… 150
〃	157	S I 117遺物図	〃	179	20 E S K01遺構図…………… 151
		その2…………… 135	〃	180	〃 遺物図…………… 151
〃	158	S I 117遺物図	〃	181	20 E S K03遺物図
		その3…………… 136			その1…………… 151
〃	159	S I 117遺物図	〃	182	20 F S K03遺構図…………… 152
		その4…………… 137	〃	183	20 F S K03遺物図
〃	160	S I 117遺物図			その2…………… 152
		その5…………… 138	〃	184	20 F S K03遺物図
〃	161	S I 117遺物図			その3…………… 153
		その6…………… 139	〃	187	馬の骨の出土状況図… 156
〃	162	S I 118遺物図	〃	188	南側斜面全体遺構図… 157
		その1…………… 139	〃	189	第2粘土層粘土面
〃	163	S I 118遺構図…………… 140			遺構図……………157
〃	164	S I 118遺物図	〃	190	南側斜面遺物図
		その2…………… 140			その1…………… 158
〃	165	S I 118遺物図	〃	191	第2粘土層遺構図…………… 159
		その3…………… 141	〃	192	南側斜面遺物図
〃	166	S I 118遺物図			その2…………… 160
		その4…………… 142	〃	193	浜井戸遺構図…………… 163
〃	167	S I 119遺構図…………… 143	〃	194	f ₂ 地区 〃 …………… 164
〃	168	〃 遺物図…………… 143	〃	195	〃 遺物図…………… 165

挿図	196	f ₁ 地区出土弥生土器 その1…………… 167	挿図	213	71号墳第1 埋蔵施設 遺構図・枕出土状況図… 185
〃	197	〃 〃 その2…………… 168	〃	214	71号墳遺物図…………… 185
〃	198	〃 〃 その3…………… 169	〃	215	75号墳遺構図・遺物 出土状況図…………… 186
〃	199	〃 〃 その4…………… 170	〃	216	75号墳第1 埋葬施設 遺構図…………… 187
〃	200	〃 〃 その5…………… 171	〃	217	〃 遺物図その1… 187
〃	201	f ₁ 地区出土初期 須恵器その1…………… 173	〃	218	〃 〃 その2… 189
〃	202	f ₁ 地区出土初期 須恵器その2…………… 174	〃	219	76号墳遺構図…………… 190
〃	203	f ₁ 地区出土初期 須恵器その3…………… 175	〃	220	76号墳第1 埋葬施設 遺構図…………… 191
〃	204	f ₁ ・f ₂ 地区出土初期 須恵器拓影…………… 176	〃	221	76号墳第2 埋葬施設 遺構図…………… 191
〃	205	f ₁ 地区出土須恵器 他分布図…………… 178	〃	222	76号墳周溝内 S K01 遺構図…………… 192
〃	206	f ₁ 地区遺物図 その1…………… 179	〃	223	76号墳遺物図…………… 192
〃	207	f ₁ 地区遺物図 その2…………… 180	〃	224	77号墳遺構図…………… 193
〃	208	5号墳遺構図…………… 181	〃	225	77号墳第1 埋葬施設 遺構図…………… 194
〃	209	〃 第1 埋葬施設 遺構図…………… 182 (蓋石)	〃	226	77号墳第1 埋葬施設 玉出土状況図…………… 195
〃	210	5号墳第1 埋葬施設 遺構図…………… 183	〃	227	77号墳第2 埋葬施設 遺構図…………… 197
〃	211	〃 遺物図…………… 183	〃	228	77号墳遺物図その1… 198
〃	212	71号墳遺構図・遺物 出土状況図…………… 184	〃	229	〃 〃 その2… 199
			〃	230	78号墳遺構図…………… 200
			〃	231	78号墳第1 埋葬施設 遺構図…………… 200
			〃	232	S X68遺構図…………… 201
			〃	233	〃 遺物図…………… 201
			〃	234	S X69遺構図…………… 202
			〃	235	S X70 〃 …………… 202

挿図	236	S X70遺物図……………	202	挿図	255	S I 124遺構図……………	218
〃	237	S I 121遺構図……………	203	〃	256	S I 124遺物図	
〃	238	S I 121遺物図				その2……………	219
		その1……………	204	〃	257	S I 125遺構図……………	220
〃	239	S I 121遺物図		〃	258	S I 125遺物図……………	221
		その2……………	205	〃	259	10H S K01遺構図……………	222
〃	240	S I 122遺構図……………	206	〃	260	10H S K01遺物図	
〃	241	S I 122遺物図				その1……………	222
		その1……………	207	〃	261	10H S K01遺物図	
〃	242	S I 122遺物図				その2……………	223
		その2……………	208	〃	262	S I 126遺構図……………	224
〃	243	S I 122遺物図		〃	263	S I 126遺物図	
		その3……………	209			その1……………	225
〃	244	S I 122遺物図		〃	264	S I 126遺物図	
		その4……………	210			その2……………	226
〃	245	S I 122遺物図		〃	265	S I 126遺物図	
		その5……………	211			その3……………	227
〃	246	11 I S K11遺構図…	212	〃	266	S I 126遺物図	
〃	247	11 I S K10・11				その4……………	228
		遺物図……………	212	〃	267	S I 126遺物図	
〃	248	S I 123遺構図……………	213			その5……………	229
〃	249	S I 123遺物図		〃	268	S I 127遺構図	
		その1……………	213			その1……………	230
〃	250	S I 123遺物図		〃	269	S I 127遺構図	
		その2……………	214			その2……………	231
〃	251	S I 123遺物図		〃	270	S I 127遺物図	
		その3……………	215			その1……………	232
〃	252	S I 123遺物図		〃	271	S I 127遺物図	
		その4……………	216			その2……………	233
〃	253	S I 123遺物図		〃	272	S I 127遺物図	
		その5……………	217			その3……………	234
〃	254	S I 124遺物図		〃	273	S I 127遺物図	
		その1……………	217			その4……………	235

挿図	274	S I 127遺物図 その5…………… 236	挿図	293	S I 133・10 J S K 02遺構図…………… 253
〃	275	S I 127遺物図 その6…………… 237	〃	294	S I 133遺物図 その1…………… 254
〃	276	銅鐸出土状況図…… 238	〃	295	S I 133遺物図 その2…………… 255
〃	277	銅鐸…………… 239	〃	296	10 J S K02遺物図…… 255
〃	278	S I 129遺物図 その1…………… 240	〃	297	S I 135周辺遺構図… 256
〃	279	S I 129・134 遺構図…………… 241	〃	298	S I 135遺物図…………… 256
〃	280	S I 129遺物図 その2…………… 242	〃	299	S I 135遺構図…………… 257
〃	281	S I 129遺物図 その3…………… 243	〃	300	S I 136遺構図…………… 258
〃	282	S I 134遺物図…… 243	〃	301	S I 136遺物図…………… 259
〃	283	S I 130遺構図…… 244	〃	302	S I 137遺構図・ 遺物図…………… 259
〃	284	S I 130・11 J P36 遺物図…………… 245	〃	303	S I 138遺構図…………… 260
〃	285	S I 131遺構図… 246	〃	304	S I 138遺物図 その1…………… 261
〃	286	S I 131・133, 10 J S K02遺構図… 247	〃	305	S I 138遺物図 その2…………… 262
〃	287	S I 131遺物図 その1…………… 247	〃	306	S I 138遺物図 その3…………… 263
〃	288	S I 131遺物図 その2…………… 248	〃	307	S I 138遺物図 その4…………… 264
〃	289	S I 132遺構図…… 249	〃	308	S I 139遺構図…………… 265
〃	290	S I 132遺物図 その1…………… 250	〃	309	〃 遺物図…………… 265
〃	291	S I 132遺物図 その2…………… 251	〃	310	S I 140遺構図…………… 266
〃	292	S I 132遺物図 その3…………… 252	〃	311	〃 遺物図…………… 267
			〃	312	S B29 〃 …………… 268
			〃	313	〃 遺構図…………… 269
			〃	314	S B30遺物図…………… 272
			〃	315	〃 遺構図…………… 273
			〃	316	S B40遺構図…………… 275

挿図	317	S B40, P 4 遺物 出土状況図…………… 276	挿図	337	11 H S K01遺構図…………… 294
〃	318	S B40遺物図 その1…………… 277	〃	338	〃 遺物図…………… 294
〃	319	S B40遺物図 その2…………… 278	〃	339	S E06遺構図…………… 295
〃	320	S B40遺物図 その3…………… 279	〃	340	〃 遺物図…………… 296
〃	321	S B40遺物図 その4…………… 280	〃	341	石囲い遺構遺構図…………… 296
〃	322	S A01・02遺物図… 280	〃	342	石囲い遺構遺物図…………… 297
〃	323	S A01・02遺構図… 281	〃	343	土器片集積遺構 遺構図…………… 298
〃	324	76号墳下層 S K01～03, P 1～P 2 遺構図… 282	付図	1	長瀬高浜遺跡遺構図
〃	325	S D01～09遺物図… 283	〃	2	1号墳第1埋葬施設 遺構図, 遺物図
〃	326	S D01～09遺構図 その1…………… 284	〃	3	S B40遺構図
〃	327	S D01～09遺構図 その2…………… 286	〃	4	長瀬高浜遺跡出土古式 土師器編年表
〃	328	11 H・11 I 板石集積 遺構遺構図…………… 287			
〃	329	11 H・11 I 板石集積 遺構遺物図…………… 289			
〃	330	10 J S K01遺構図… 289			
〃	331	11 I S K01遺構 図・遺物図…………… 290			
〃	332	11 I S K20遺構図… 291			
〃	333	11 I S K20遺物図… 291			
〃	334	10 H S K05遺構図… 292			
〃	335	10 H S K05遺物図 その1…………… 292			
〃	336	10 H S K05遺物図 その2…………… 293			

第1章 長瀬高浜遺跡の調査経過

第1節 発掘調査までの経過

- 昭和47年 天神川流域下水道整備総合計画策定。
- 48年 天神川流域下水道整備総合計画申請。
- 49年 都市計画地方審議会諮問。
- 49年 計画決定告示。
- 49年 事業認可。
- 49年5月 長瀬高浜遺跡（長瀬遺跡）の発見。
- 49年7月 天神川流域下水道関係部課長会議。
- 50年 用地買収。
- 52年6月 県土木部下水道課と県教委文化課埋蔵文化財についての協議。
- 52年7月 県教委，下水道課長へ開発事業計画と文化財保護について通知。
- 52年8月 県知事埋蔵文化財発掘について通知（法第57条の3）。
- 52年8月 教育文化財団理事長、埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
- 53年5月 教育文化財団理事長、埋蔵文化財発掘調査届提出（法第57条）。
- 53年8月 日本下水道事業団へ工事発注。

第2節 遺跡の発見

昭和49年5月7日県教育委員会文化課が一般国道9号線改築工事（北条バイパス）建設計画に伴い、現地踏査を実施したところ北条砂丘の東端部，鳥取県東伯郡羽合町長瀬字高浜・浜根荒神地，通称「高浜」の一带の砂丘畑地に弥生土器，土師器等が濃密に散布していたのでこの遺跡発見のきっかけとなった。踏査時，北条バイパス建設予定地の南に接して天神川流域下水道処理場建設計画のあることを知り，その一带にも広く遺物散布地が及ぶことがわかった。

第3節 試掘調査（昭和52年次）

遺跡発見以降，再三にわたり県教育委員会文化課と県土木部下水道課の協議が始まった。その結果，昭和52年8月から遺跡の性格の追及とその範囲を把握し，工事との調整を図るため，遺跡散布地を試掘することにより砂丘遺跡の確認調査を実施することになった。

調査は，財団法人鳥取県教育文化財団（理事長知事）が行ない，経費は県土木部の委託費によった。調査対象地は，施設用地10haのうち第1期工事予定地で工事により埋蔵文化財に直接影響を及ぼすと考えられる約5haとした。調査方法は，グリッド方法により，

5 m×5 m, 5 m×10 m, 10 m×10 mとし計32か所約3,000m²の試掘を行った。その結果、この砂丘遺跡でも遺物包含層は砂丘活動の停滞期によって形成された黒砂層（黒褐色腐植砂層）と密接な関連があることをつきとめた。黒砂層は、浅いところは数mのところであり、少量の黒砂面でも必ず土器片を含んでいた。砂丘地であるため、試掘表面は100m²でも7 mも掘り下げれば底面積は1 m²程度となってしまった。試掘には、

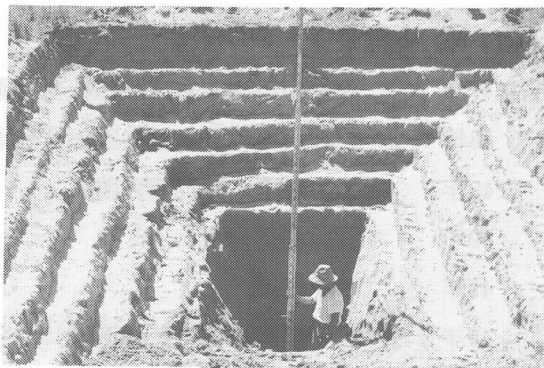


写真1 試掘調査

検土杖・ハンドオーガーパーリングも使用した。地下深く掘り下げた場合には重機（ユンボ）の併用も行った。

試掘（約3,000m²）及び一部拡幅調査（約1,500m²）の調査を行った。その結果、砂丘下に円墳1基、箱式石棺6基、中世火葬墓25基を検出した。また、出土遺物は、多量の弥生土器・土師器で、壺・甕・高坏が主であったが、石斧・石鏃・砥石・土錘・紡錘車などの生活用具も含まれ、遺跡との関連を暗示した。

（昭和52年度試掘調査費委託料 11,830,000円）

第4節 昭和53年度調査

試掘調査結果に基づき関係部局と協議の結果、下水処理場建設計画、施設配置計画の変更は不可能という結論のため、調査員を増強して全面発掘調査を教育文化財団が実施することとなった。そして、調査は次の4点を主に行うこととした。

(1) 黒砂分布範囲を明確にし、上層の灰白色砂を除去すること

調査の一環として事業課に50,000m³の砂除去を依頼し、そのあと起伏する黒砂面を露出するため、灰白色砂の排除を始めた。その結果18,000m²の黒砂面をよく観察すると、わずかな起伏に気づきこれも古墳と考えるに至り、11基の追加となった。黒砂面は、今後増々拡大していくものと推定される。

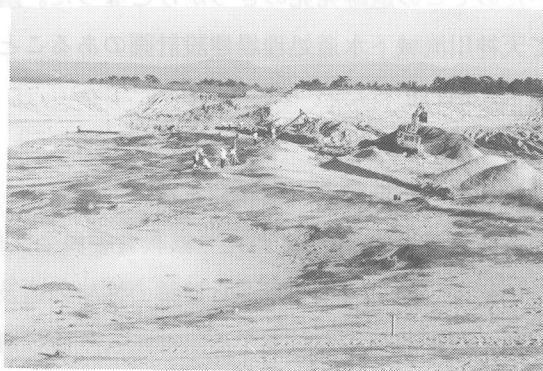


写真2 黒砂層検出中

(2) 1号墳とその周辺の発掘調査

砂丘に埋り、姿を見ることができなかつた1号墳が、径33m・高さ約2mの円墳として確認された。まず、1号墳墳丘の全貌を出す上層部調査過程で中世火葬墓群48基、周溝部とその周辺調査で箱式石棺等14基、主体部の箱式石棺より「つづらさわまき」によく似た鉄刀を副葬した25歳～40歳頃の女性人骨が発見された。墳丘築成状況調査では竪穴住居状遺構の調査へと発展したため、調査地区の拡大も余儀なくされた。



写真3 1号墳全景

(3) 東部黒砂地区の発掘調査

東部黒砂面において、竪穴住居状遺構2棟、火葬墓4基、黒砂と灰白色砂の境界付近で合口土器棺墓1基、灰白色砂中で中世墓1基を検出した。しかし、年度内に黒砂下層まで調査を進めることができず課題を残した。

(4) 中央管理棟建設工事中の発見に伴う発掘調査

昭和53年10月25日、中央管理棟建設工事掘削作業中、南の13A標高3m付近で黒砂が露出していることを発見、直ちに工事を中断し緊急調査に入った。五輪塔群の出土により黒砂が傾斜して歴史時代まで続き、それ以降10数mの砂が被覆した等の知見も得られた。

(昭和53年度発掘調査費委託料 41,000,000円)

第5節 昭和54年度調査

昭和54年度は工事の第1系列の南北約200m、東西50mの区画内1万㎡の黒砂面について全面発掘調査が行われた。厚さ60～100cmの黒砂層の下に多数の住居跡と3・4・10号墳をはじめとする古墳、墳墓が確認された。この地区の南端区域では水田面と考えられるグライ土壌が検出された。時代的にみると弥生時代前期から中世末などの遺構をもつ複合遺

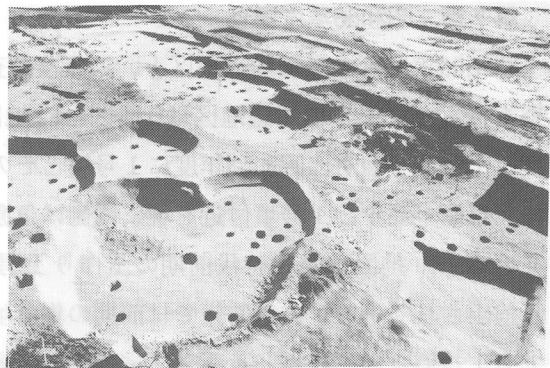


写真4 竪穴住居跡

跡である。総計すると弥生時代前期の竪穴住居跡1棟、土壙3基、古墳時代の竪穴住居跡74棟、掘立柱建物跡10棟、井戸跡4基、古墳時代の墳墓14基、飛鳥時代の墳墓9基、中世墓33基である。

遺物としては竪穴住居跡内からは多量の土師器に加えて、釣針、鉄鎌などが出土している。その他剣先型鉄製品、鉄鏝、素文鏡、石製模造鏡、玉製品（勾玉、管玉、切子玉、小玉など）、古銭、土馬、陶磁器等が出土している。

これらの遺構、遺物から古代の村落の一端をうかがい知ることができた。

（昭和54年度発掘調査費委託料 61,270,000円）

第6節 昭和55年度調査

55年度の発掘調査は、54年度調査区の西側及び北側の一部約8,500㎡について調査を行った。この地域には54年度調査区の北側に集中していた古墳時代の住居跡群が続いており、西側の端を確認するに至った。西側の高い部分は風雨蝕で削られながらも前方後円墳の壘を留めていた。また、この下には弥生時代前期の墳墓が集中して検出された。北側では住居



写真5 55年度調査区住居跡

跡群に加えて、埴輪祭祀跡が井戸跡上面から検出された。全発掘調査で検出した主な遺構は竪穴住居跡35棟、掘立柱建物跡11棟、井戸跡1基、墳墓24基、弥生時代の墳墓49基、中世墓2基、埴輪祭祀跡などである。

（昭和55年度発掘調査費委託料 89,700,000円）

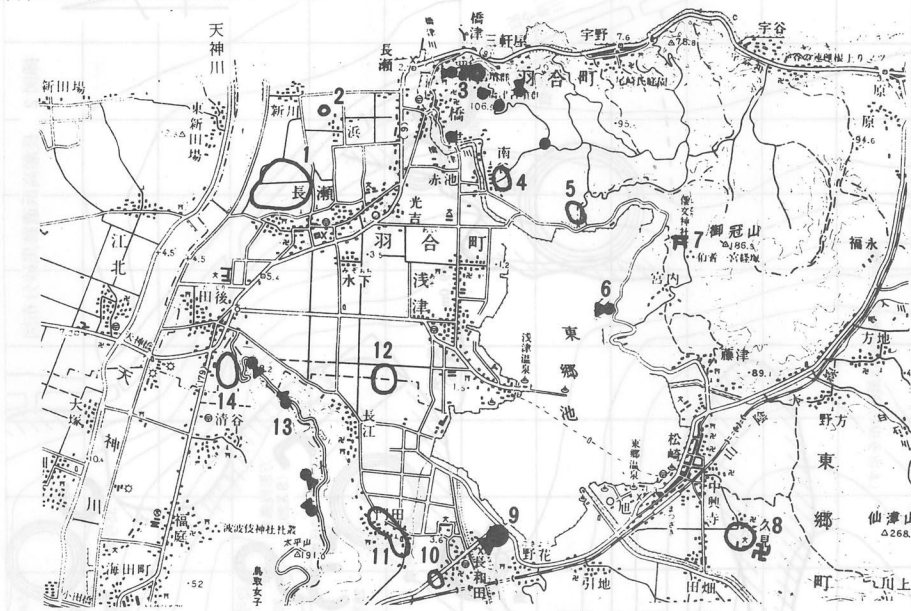
第7節 昭和56年度調査

昭和56年度は1号墳周辺地区と、54年度調査地区の東側（g地区）の一部約6400㎡の調査を行った。1号墳周辺地区はf1地区とf2地区の2ヶ所を調査した。f1地区は昭和52年度に1号墳上層を、昭和53年度に1号墳とその下層及び周辺の石棺を調査した。この地区は北東側が高く、1号墳付近を境に南側は急激に落ち込み、その南側は青色シルトが続いている。f1地区は弥生時代前期の玉作り工房跡を始め、弥生時代前期の遺構・遺物が多く検出されている。古墳時代では前期の集落址や中期から後期の墳墓が多くみられた。中でも1号墳は周溝総径33m高さ2mの当地区最大の円墳で、中央部にある大型の箱式石棺にはほとんど完全な女性の遺骨、「つづらさわまき」によく似た鉄刀など貴重な発見が相つぎ、周溝内外には15基もの付属する墓が作られていることがわかった。この地区は中世になっても墓地として盛んに利用されており、火葬墓が51墓も検出された。また南側の青色シルトは水田として利用された可能性があることがわかった。f2地区は前述の青色シ

ルトが続いており、漆器などが出土している。g地区は54年度調査地区の続きで、主に古墳時代前期の集落址と中期から後期の墳墓が主な遺構である。中でもSB28は大型の高床の建物で「むら」の中心的な建物と推定できよう。またこの地区では住居跡の上面から小型の銅鐸が出土した。

56年度調査区の主な遺構は竪穴住居跡35棟、掘立柱建物跡10棟、古墳・墳墓19基、井戸跡2基などである。

(昭和56年度発掘調査費委託料 76,300,000円)



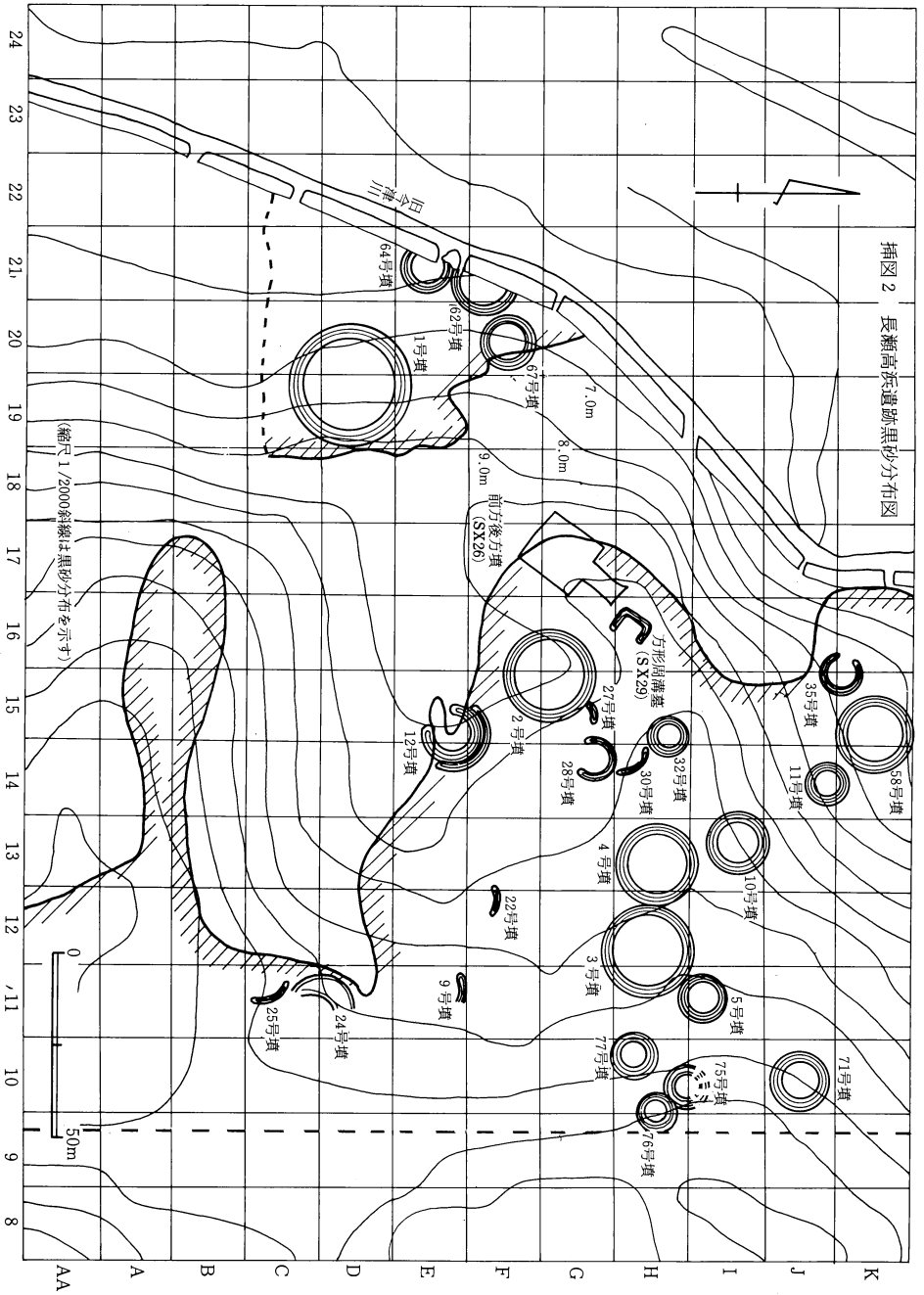
挿図1 長瀬高浜遺跡と周辺の遺跡 1/50,000

遺跡地名

1. 長瀬高浜遺跡
2. 和助北遺跡
3. 馬ノ山古墳群
4. 南谷遺跡
5. 乳母ヶ谷遺跡
6. 宮内孤塚古墳
7. 倭文神社 (伯耆一の宮経塚遺跡)
8. 久見廃寺
9. 北山一号墳
10. 長和田・津浪遺跡
11. 門田遺跡
12. 隅ヶ坪遺跡
13. 大平山古墳群
14. 溝口遺跡

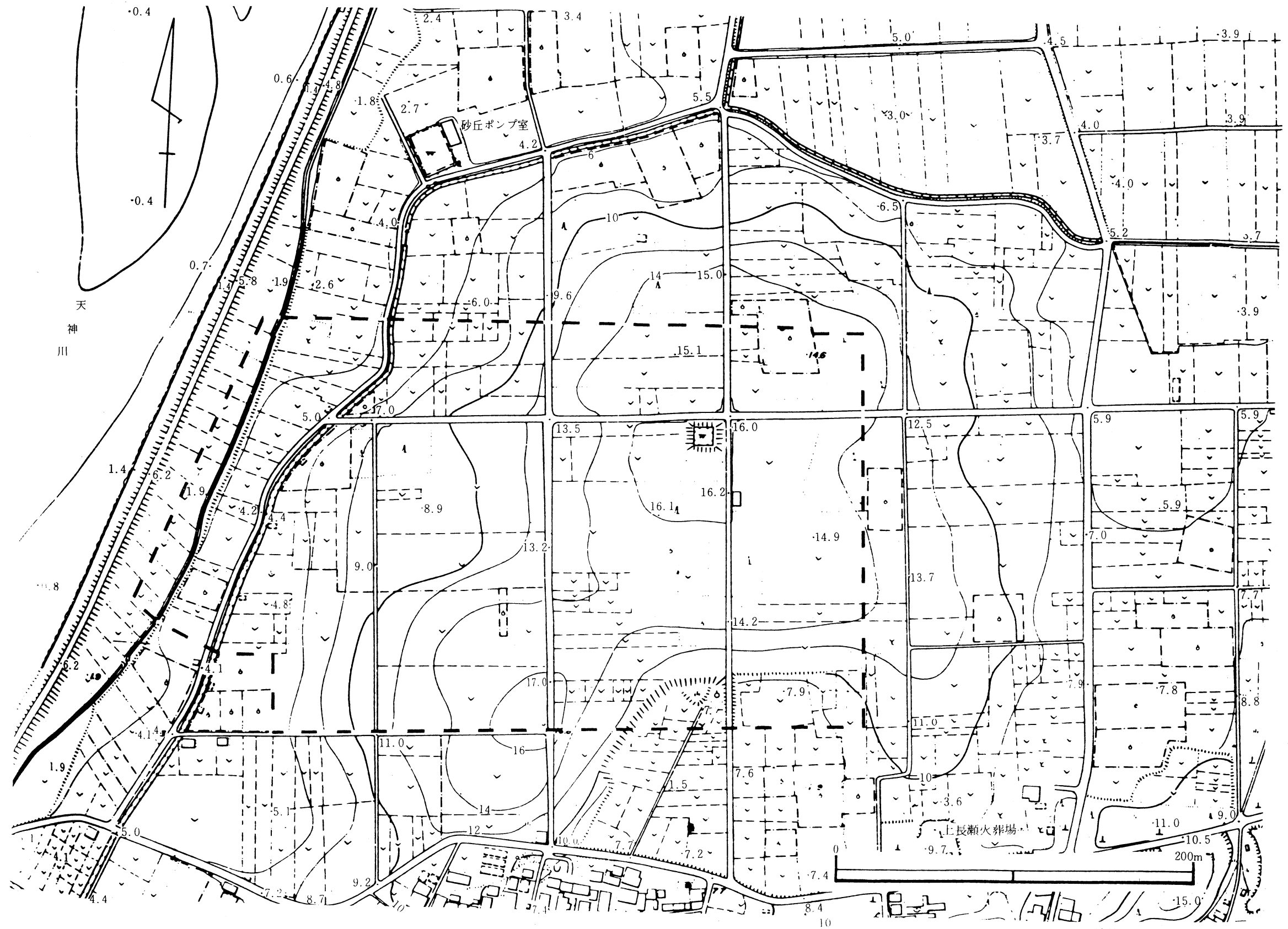


写真6 長瀬高浜遺跡航空写真



挿図 2 長瀬高浜遺跡黒砂分布図 (S=1/2000)

挿図3 長瀬高浜遺跡調査位置図



(点線内は下水処理場施設を示す)

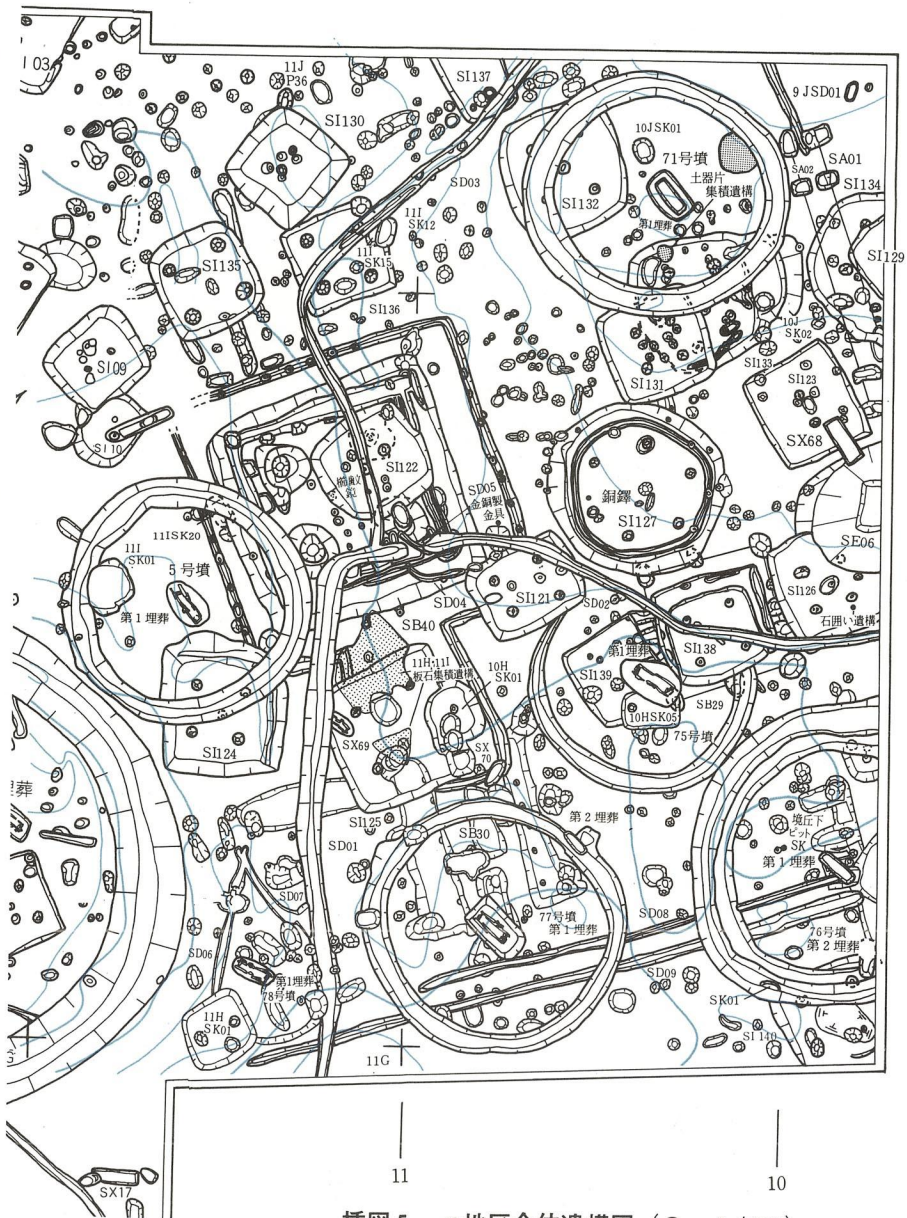
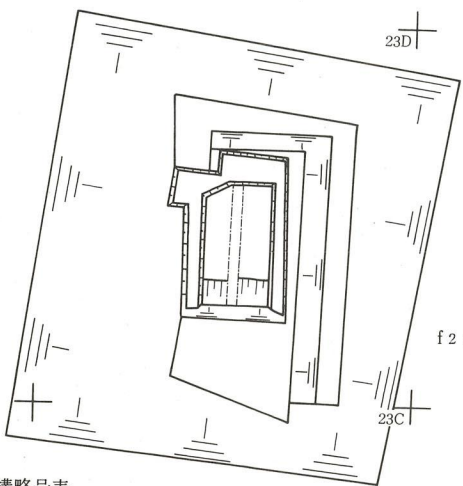


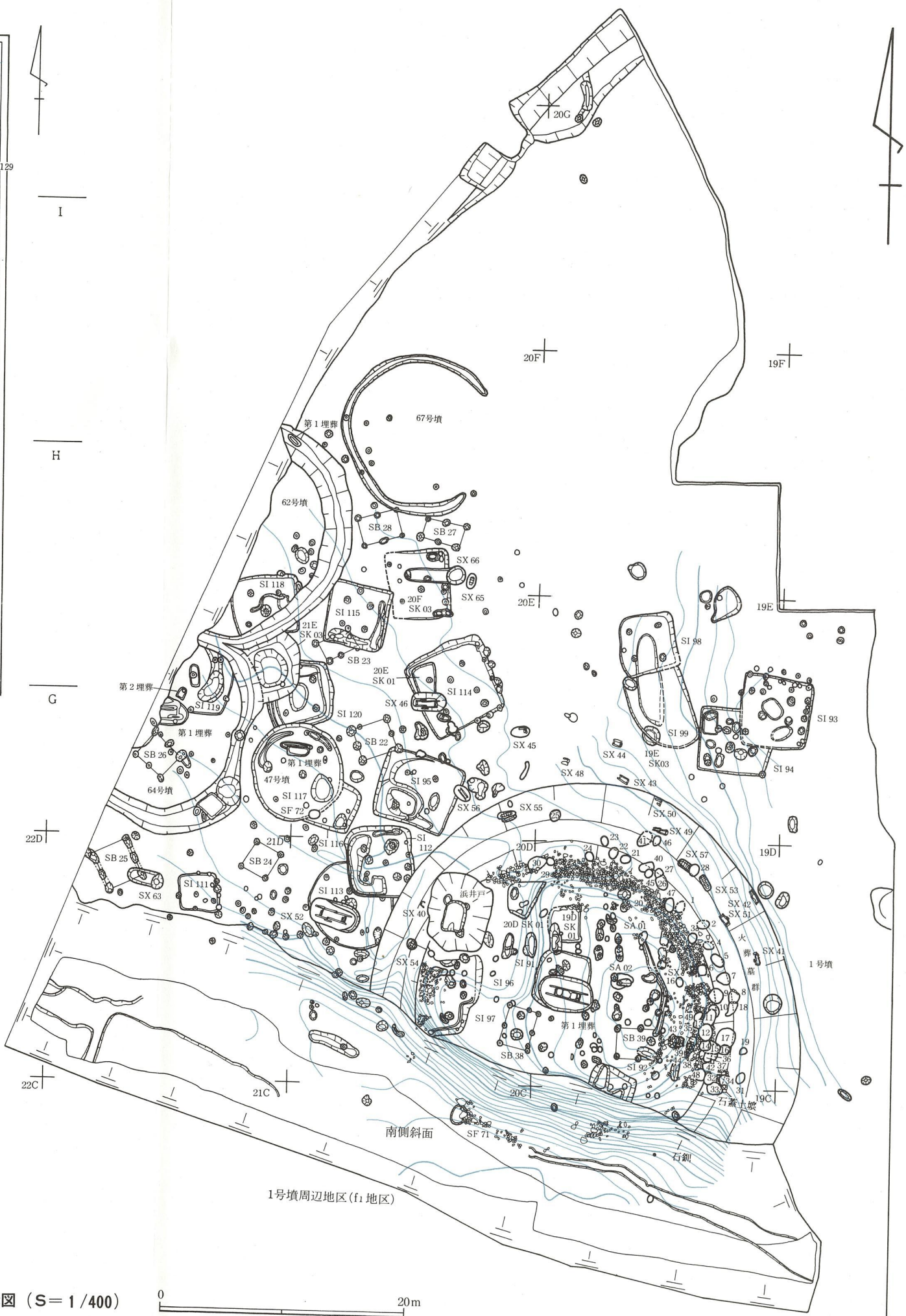
插图5 g地区全体遺構図 (S=1/400)



遺構略号表

- SA 柵列
- SB 掘立柱建物跡
- SD 溝状遺構
- SE 井戸跡
- SF 火葬墓
- SI 竪穴住居跡
- SK 土壇
- SX 古墳・墳墓・石棺墓
- SX' 屈葬墓

插图4 f地区全体遺構図 (S=1/400)



1号墳周辺地区(f1地区)




第Ⅱ章 昭和53年度調査地区 (f1 地区)

第1節 中世墓 (SF・SX')

1号墳および1号墳周辺の上層で49基の火葬墓(火葬跡?)と、1基の屈葬墓を検出した。49基ある火葬墓のほとんどから、炭・焼けた骨片が出土している。この事だけでは火葬墓と断定しがたいが、整理の都合上火葬墓とし、後に若干の考察を述べる。なお本文中では火葬墓の形態上の区分として「長瀬高浜遺跡Ⅱ」(天神川流域下水道事業に伴う砂丘遺跡の発掘調査概報(1)1979)の火葬墓の分類をそのまま用いた。

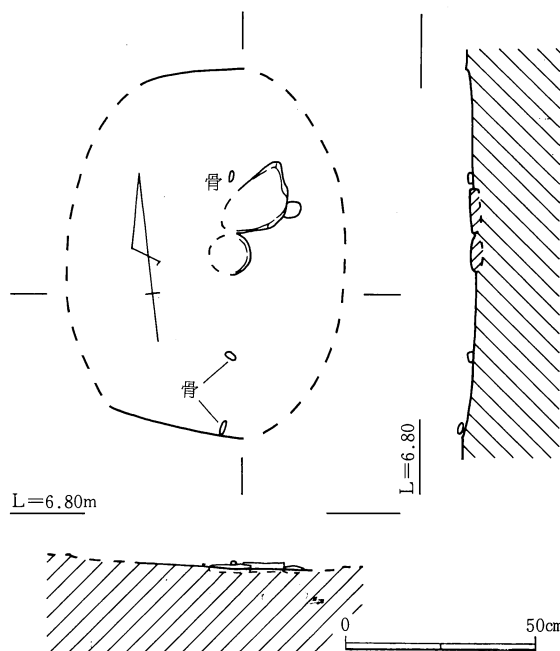
項目 タイプ	石材使用の有無	炭・骨・灰の有無
A	石材不使用	炭片・灰混入
B	石材不使用	炭片・灰・骨片混入
C	平面的配石	炭片・灰・骨片混入
D	石櫃状配石	炭片・灰・骨片混入
E	石材不使用	骨片混入

なお、骨・炭の範囲を網点で表わした。

- ①  炭片のみ
- ②  炭片・骨片混入
- ③  焼砂

SF01 (挿図6)

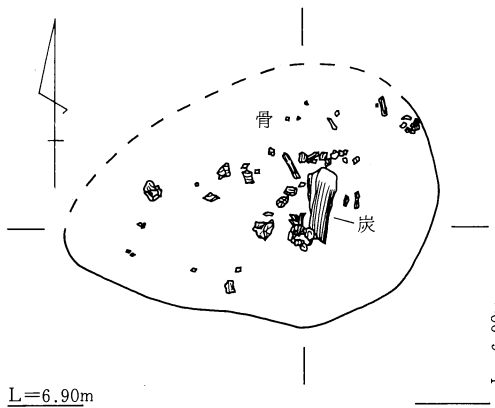
SF01は19D地区の中央やや北にあり、SF02の北西、SF47の東に位置する。遺構は東西の範囲をつかめなかったが、浅い土壌の火葬墓で楕円形を呈していると推定される。土壌の大きさは長軸99cm、短軸74cm(推定)を測り、主軸はN-10°-Eである。検出時、骨片の広がりや色の違いで範囲を確認したが遺構そのものは浅かった。土壌の中央やや北東に板石が2枚検出された。遺構内から骨片が少量、炭片が極少量検出された。Cタイプの火葬墓である。



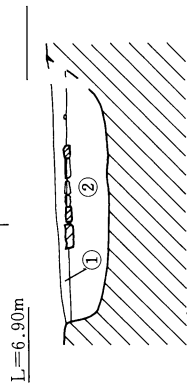
挿図6 SF01遺構図 (S=1/20)

SF02 (挿図7, 図版1)

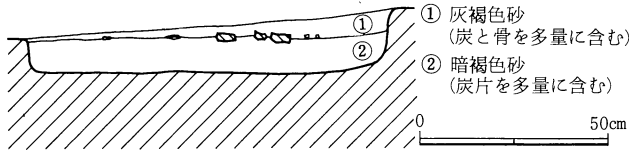
SF02は19D地区の中央やや北東にあり、SF03の北東に位置する。遺構は土壌状の火葬墓で卵形を呈し、長軸100cm、短軸68cm(推定)、深さ13cmを測り、主軸はN-76°-W



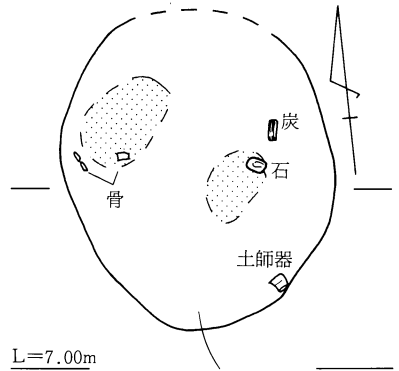
L=6.90m



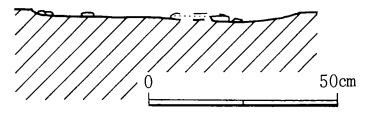
- ① 灰褐色砂
(炭と骨を多量に含む)
- ② 暗褐色砂
(炭片を多量に含む)



挿図7 SF02遺構図 (S=1/20)



L=7.00m



挿図8 SF03遺構図

(S=1/20)

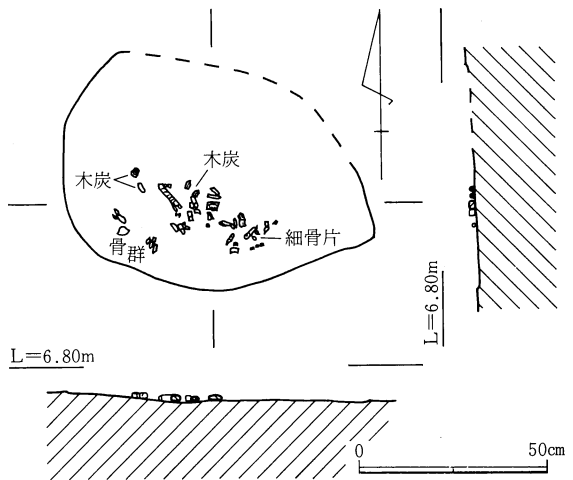
である。土壌内には多量の炭と骨が検出された。特に①層と②層の上面からは大きな炭塊が出土した。焼砂はなく、灰もみられなかった。遺物は他になく、Bタイプに属する。

S F 03 (挿図8, 図版1)

S F 03は19D地区の中央やや北東にあり、S F 04の西に位置する。遺構は土壌状の火葬墓で楕円形を呈し長軸85cm(推定)、短軸70cmを測り、主軸は南北方向である。墓壇は浅く、墓壇内に炭化物が集中しているところが2ヶ所検出された。炭化物は主に木炭で細かく焼けた骨片も混じる。墓壇内は3~4cm程度の骨片が散乱していた。骨・炭の他に遺物はなく、Bタイプの火葬墓である。

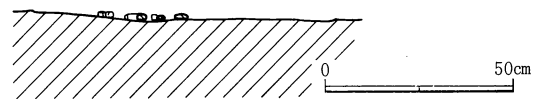
S F 04 (挿図9, 図版1)

S F 04は19D地区の中央やや東にあり、S F 02の南に位置する。遺構は浅い歪な楕円形を呈し、長軸86cm、短軸60cm(推定)を測り、主軸はN-74°-Wである。遺構内からは多量の木炭片が検出され、骨片も数ヶ所に集中してみられた。また遺構の上層には灰を多量に含んだ砂層を確認した。骨・炭片の他に遺物はなく、Bタイプの火葬墓である。



L=6.80m

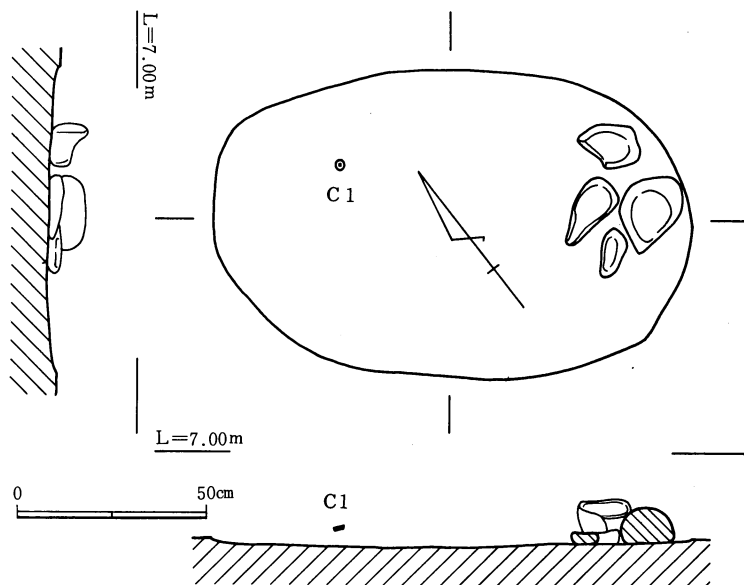
L=6.80m



挿図9 SF04遺構図 (S=1/20)



插图10 1号填上層中世墓群位置图 (S = 1/200)



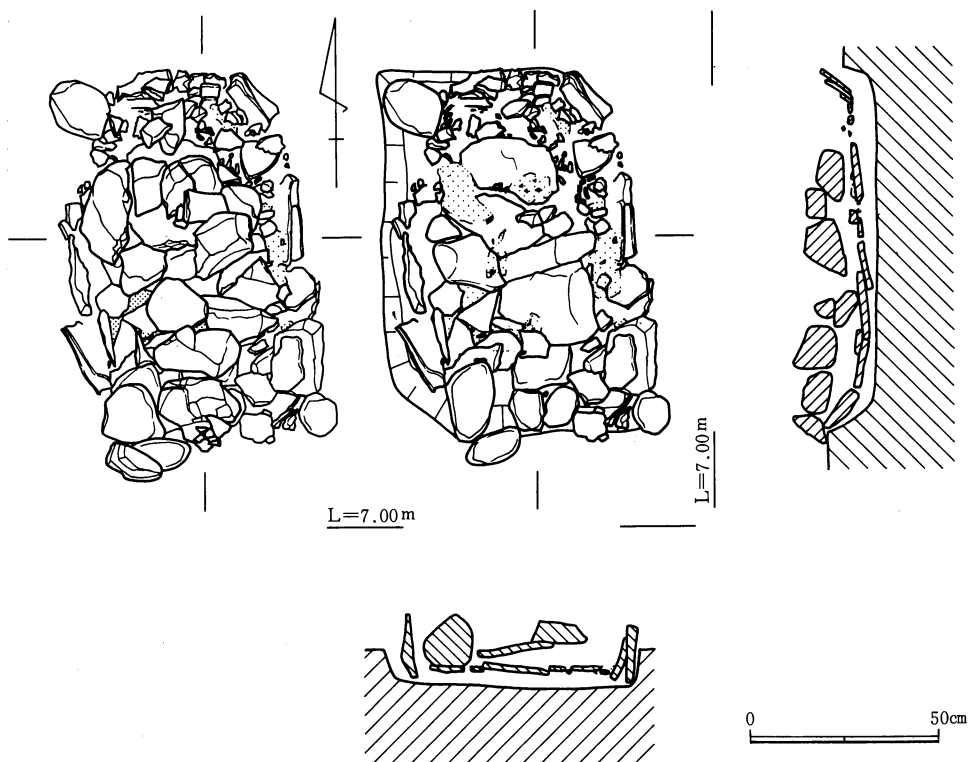
挿図11 SF05遺構図 (S = 1/20)

S F 05 (挿図11, 図版1)

S F 05は19D地区の中央にあり、S F 04の南に位置する。遺構は浅い楕円形を呈し、長軸128cm、短軸80cmを測り、主軸はN-75°-Eである。遺構の南東には10~20cm大の円礫が4個集中して検出された。また遺構の北側で古銭C 1 (開元通宝)を床面より5~6cm上で検出した。これらの石・古銭はS F 05に伴うものであろう。S F 05は埋砂に骨片、炭片を含み、また少量の灰も検出されていることから、Cタイプの火葬墓である。遺構としては極めて浅いが、これは上層ですでに検出されていたにもかかわらず、不明瞭なためこのレベルまで掘り下げてしまったからである。

S F 06 (挿図12, 図版2)

S F 06は19D地区の中央やや東にあり、S F 02・03・04の南に位置する。遺構は土壌内に石を櫃状に組んだものである。土壌は方形を呈し、長辺97cm、短辺67cmを測り、主軸は南北方向である。遺構は板石 (円礫も含むが) を床と壁に用いて箱形に配石しており、その石組の中に円礫・板石が投げ込まれたように入っていた。石組の中に入っている石と石の間、あるいは床石との間に大量の炭片、骨が検出された。また板石・円礫共に赤変したり、ひび割れたりしており、掘り方内の砂も赤色を呈する。火をうけたと思われる。石組の中に入っている石も焼けている。これらの石と石の間には炭と骨がぎっしりつまっている事などから、この場所で火葬したとも考えられるが、周辺には炭等を含む焼砂はみられないことから詳細は不明である。一応火葬墓と考える。石材の円礫は大きさがそろっている。1号墳の葺石がない所がある事などから古墳の葺石を用いたと推定する。Dタイプの火葬墓である。



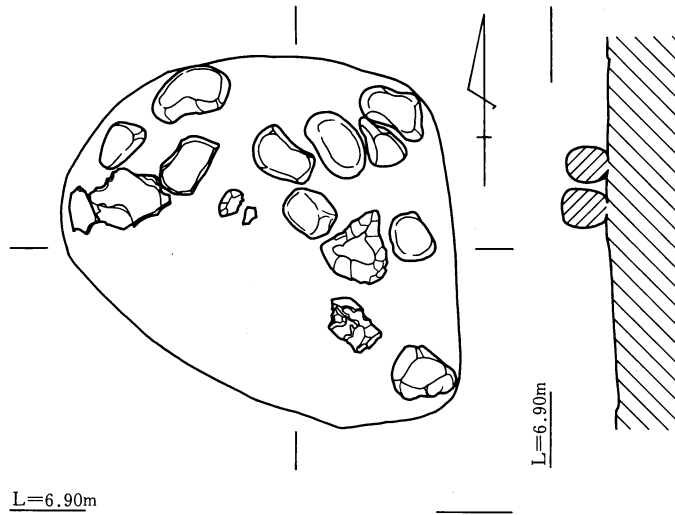
挿図12 S F 06遺構図 (S = 1 / 20)

S F 07 (挿図13, 図版 2)

S F 07は19D地区の中央やや東にあり, S F 05の南に位置する。遺構は浅く三角形を呈し, 長軸118cm, 短軸95cmを測る。土壌内北側で円礫が14~16個平面的に検出された。炭片・骨片・灰などが少量ではあるが検出された。骨片は掘り方検出面上層の青灰褐色砂中からも検出されている。その他の遺物は検出されなかった。遺構上面に置かれた石は無秩序で, 特に墓としての意識は見られない。Cタイプの火葬墓である。

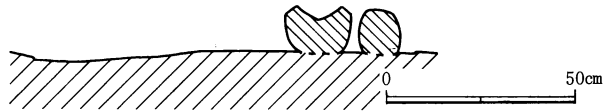
S F 08 (挿図14, 図版 2)

S F 08は19D地区の中央やや東に位置し, S F 07の南東に位置する。遺構は長辺150cm, 短辺103cm, 深さ37cmを測る方形の土壌に板状の石を櫃状に組んだものである。用いられている石は板状安山岩で, それぞれ側板・床板とも火を受けた跡がある。特に, 北側の側板は板石が火を受けたため数十枚に剝離していた。石組の大きさは長辺120cm, 短辺105cm, 深さ32cmを測り, 主軸はN-10°-Eである。石組の東西の側板はほぼ垂直に立てられているが, 南北は約45度に傾いて作られている。石組の中には炭化物・骨が大小の板石と石組の間などに多量に検出された。炭化物を多く含む砂が床板の下からも検出された。石組内には他に遺物はなくDタイプの火葬墓である。

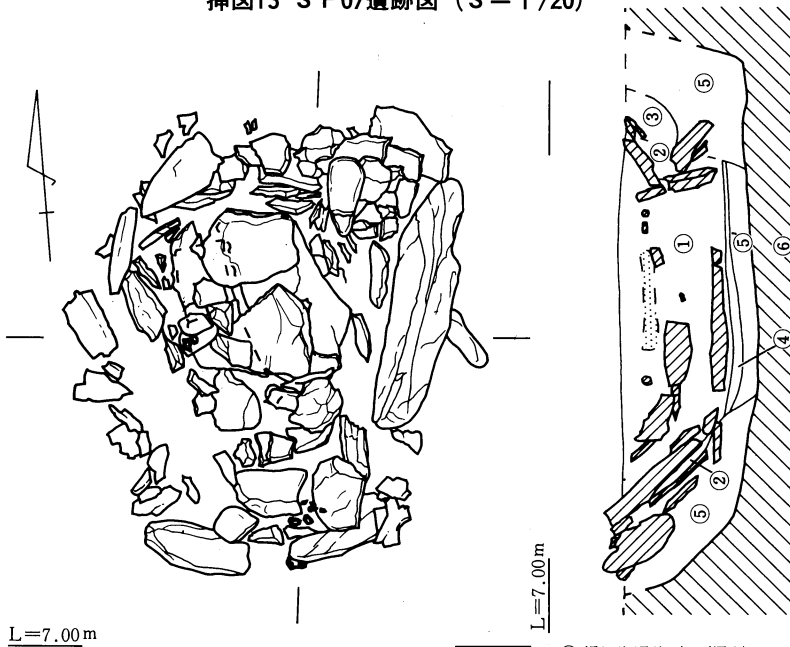


L=6.90m

L=6.90m



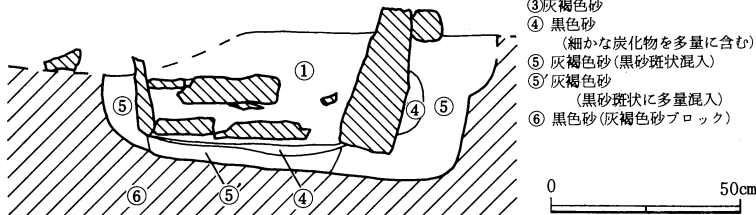
挿図13 S F 07遺跡図 (S = 1/20)



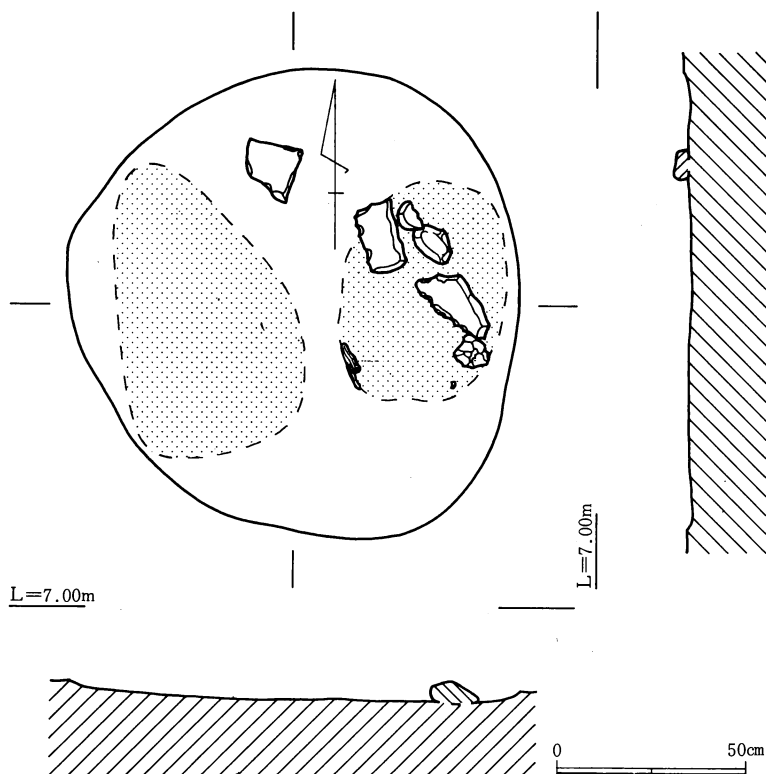
L=7.00m

L=7.00m

- ① 褐色砂(骨片、炭、灰混入)
- ② 黄褐色砂
- ③ 灰褐色砂
- ④ 黒色砂
- (細かな炭化物を多量に含む)
- ⑤ 灰褐色砂(黒砂斑状混入)
- ⑤ 灰褐色砂
- (黒砂斑状に多量混入)
- ⑥ 黒色砂(灰褐色砂ブロック)



挿図14 S F 08遺構図 (S = 1/20)



挿図15 S F 09遺構図 (S = 1 / 20)

S F 09 (挿図15, 図版3)

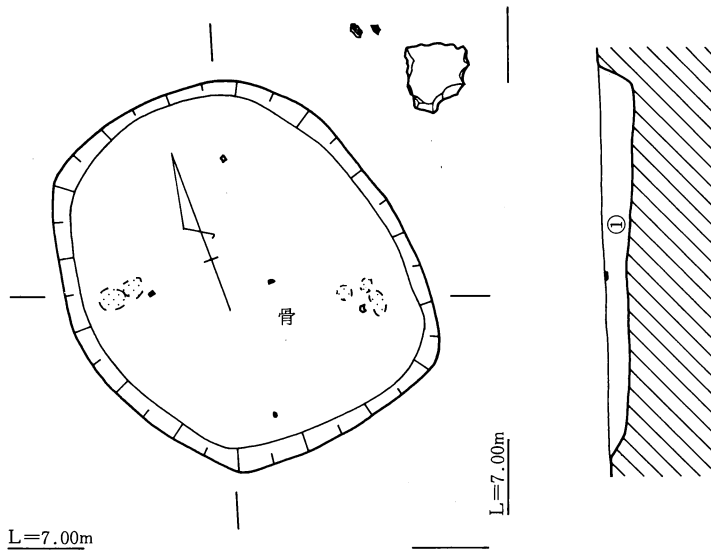
S F 09は19D地区の南東にあり, S F 07の南西に位置する。遺構は歪で浅い円形を呈し, 径約120cmを測る。遺構内には円・角礫が6個北西-南東方向に並んで検出された。他, 炭化物と骨片が集中してみられ, 骨は火を受けて, ひび割れ, 小さくなったものが多数混入していた。焼砂はなく, 灰は上層で少量検出されたにすぎない。遺構内には他に遺物がなく, Cタイプの火葬墓である。

S F 10 (挿図16, 図版3)

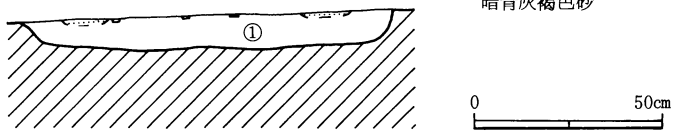
S F 10は19D地区の中央やや南東, S F 01の東にあり, S F 11に南西の一部を切られている。遺構は歪な楕円形を呈し, 長軸103cm, 短軸90cm, 深さ9cmを測り, 主軸はN-16°-Wである。墓壙内は炭化物・骨片が散乱していた。特に集中してみられる所が西と東にみられた。墓壙内に炭化物・骨片以外は遺物がなく, 焼砂はみられなかったが, 灰が多少確認された。Bタイプの火葬墓である。

S F 11 (挿図17, 図版3)

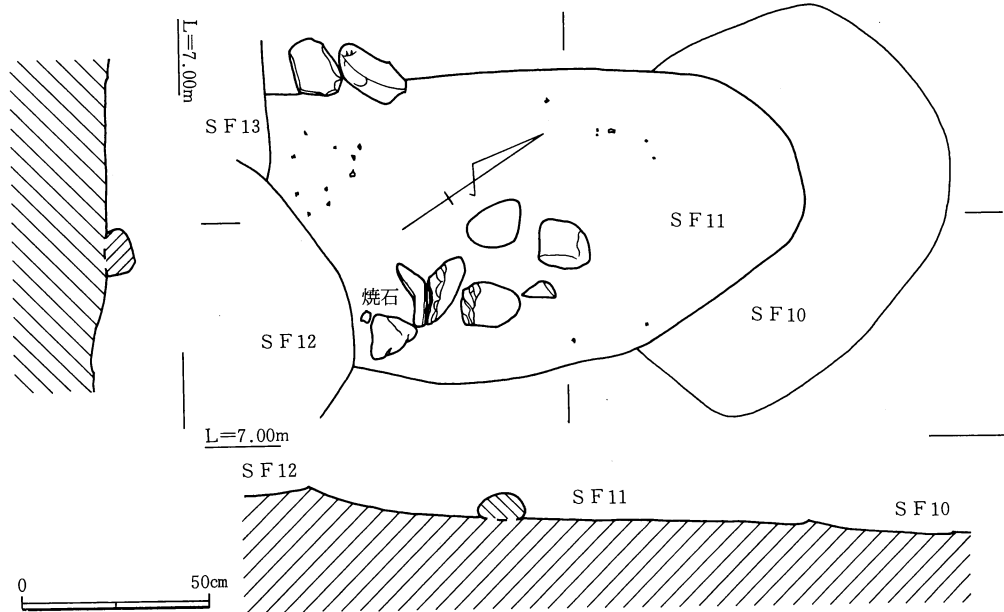
S F 11は19D地区の中央やや南東, S F 01の東にあり, S F 12・13に南を切られ, S F 10の南を切っている。遺構は浅く歪な楕円形を呈す。長軸は不明, 短軸81cmを測り, 主軸はN-28°-Eである。墓壙内西側では7個の礫を, 南西隅の墓壙の肩部では2個の礫を



①炭化物褐骨片を含む
暗青灰褐色砂

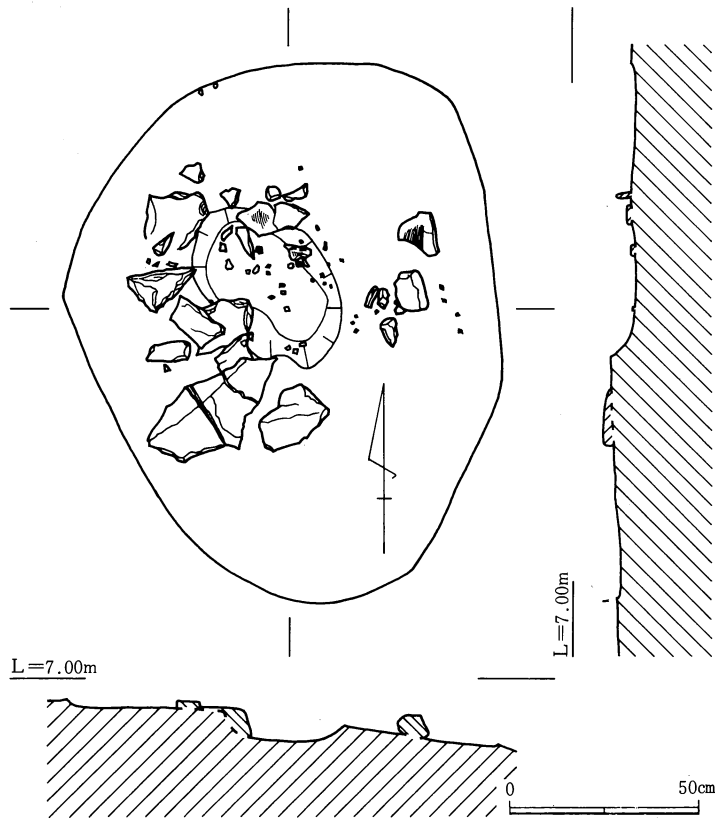


挿図16 SF10遺構図 (S = 1/20)



挿図17 SF11遺構図 (S = 1/20)

検出した。石の配置は平面的だが、意図的なものはみられない。墓壙内からは炭化物・骨片が散乱した状態で検出された。他に遺物はなく、灰・焼砂などもみられなかった。Cタイプの火葬墓である。



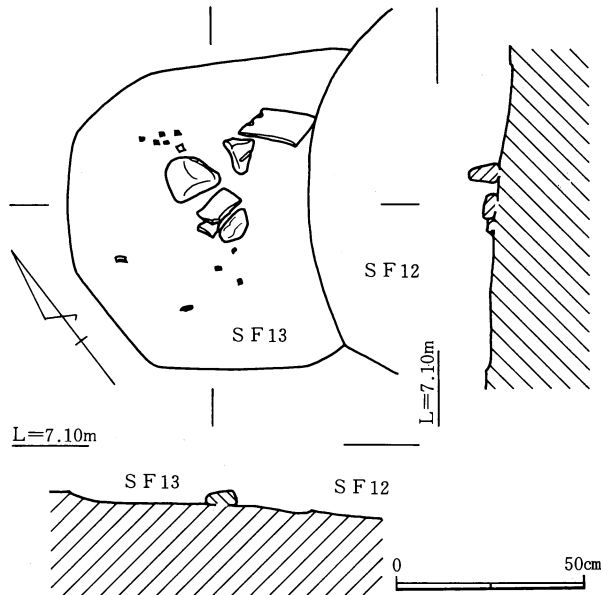
挿図18 S F 12遺構図 (S = 1 / 20)

S F 12 (挿図18, 図版 3)

S F 12は19D地区の中央やや南東, S F 17の西にあり, S F 11・13・14・15を切っている。遺構は浅く歪な楕円形を呈し, 長軸143cm, 短軸110cmを測る土壌である。主軸はN-6°-Wである。中央に長軸48cm, 短軸31cm, 深さ約7cmの小さな土壌が設けられている。この土壌内には角礫が散乱していた。これらの石は一部赤変したり, 炭化物が付いて黒くなっている。火をうけたと思われる。埋砂内で炭化物・骨片を検出した。他に遺物はなく, 灰・焼砂などもみられなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 13 (挿図19, 図版 3)

S F 13は19D地区の中央やや南東, S F 17の西にあり, S F 11を切り, S F 12に東側を切られる。遺構は浅く, 歪な楕円形の土壌で, 長軸は不明, 短軸は82cmを測り, 主軸はN-57°-Wである。S F 12に南東の大半を切られていたため全貌はわからないが, 残っている部分で角・円礫を6個検出した。石は床面に一様にあるが, 意図的なものはみられない。一部の石は赤変している。火を受けたと思われる。また, 炭化物・骨片が散乱した状態で検出された。他に遺物はなく, 灰・焼砂は検出できなかった。Cタイプの火葬墓である。



挿図19 SF13遺構図 (S = 1/20)

S F 14 (挿図20, 図版4)

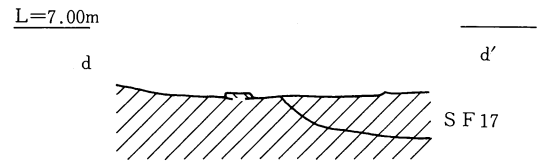
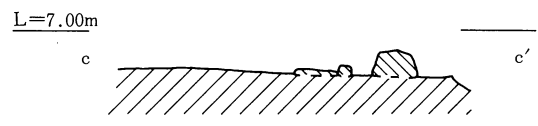
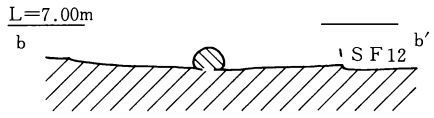
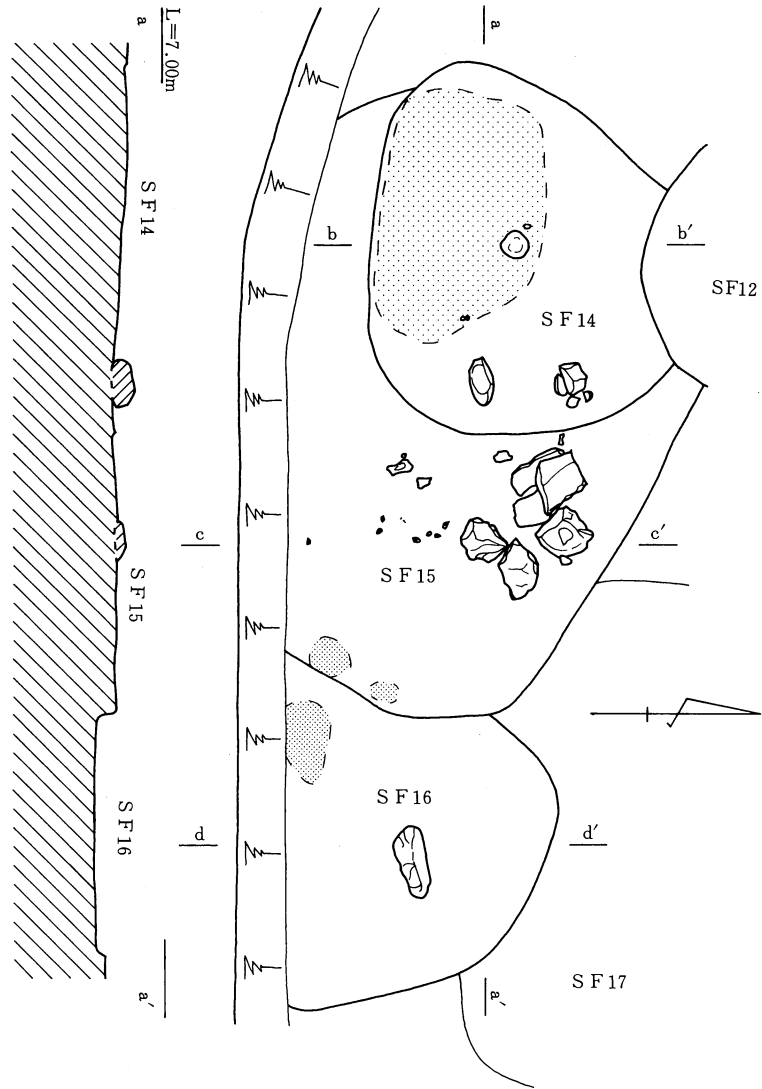
S F 14は19D地区の南東, S F 11の南にあり, S F 12で北側の一部を切られ, S F 15の西側を切っている。遺構は浅く歪な円形の土壌で, 径約80cmを測る。床面上で石を6個, 南側では集中して炭化物を検出した。骨は少量しか検出されなかった。石は焼けておらず, 墓壙内に灰・焼砂などはみられなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 15 (挿図20, 図版4)

S F 15は19D地区の南東, S F 11の南にあり, S F 12・13に西側を切られ, S F 16の西側とS F 17の南西を切る。遺構は浅く歪な楕円形の土壌で, 長軸は156cmを測り, 短軸は不明である。主軸はN-60°-Wである。北側の床面上で石が数個検出された。これらの石の一部には煤が付着している。西側には炭化物の集中箇所が2ヶ所みられる。骨の出土量は少なく, 骨粉が全体に見られた。炭は2~3cm大のものが西側を中心に検出された。焼砂・灰などはほとんどみられない。他に遺物も検出されなかった。Cタイプの火葬墓である。

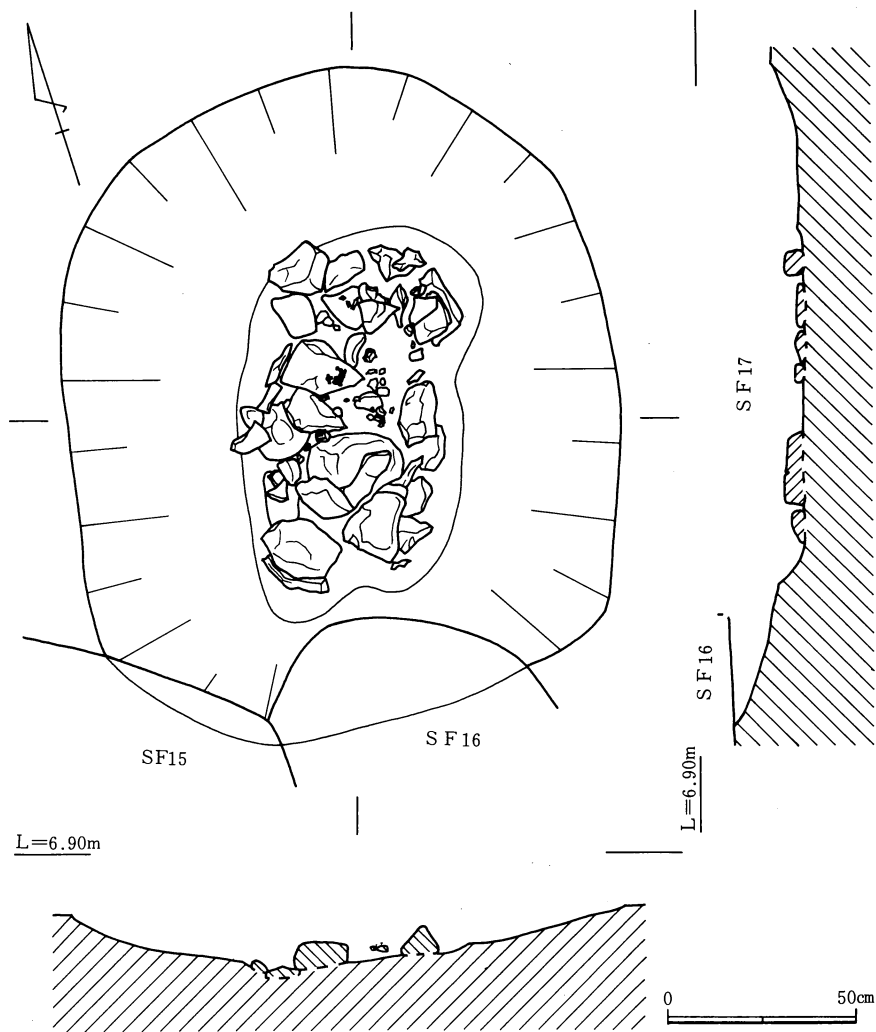
S F 16 (挿図20, 図版4)

S F 16は19D地区の南東, S F 11の南東にあり, S F 15に西を切られ, S F 17を切っている。遺構は浅く, 歪な楕円形を呈すと思われる。大きさは不明。北側の床面上で角礫が1個, 南西部ではS F 15にみられたような炭化物の集中している箇所を検出された。骨も少量混じっている。焼砂, 火を受けたと考えられる石はない。遺構から他の遺物は出土しなかった。Cタイプの火葬墓であろう。



0 50cm

挿図20 SF14・15・16遺構図 (S = 1/20)



挿図21 SF17遺構図 (S = 1/20)

S F 17 (挿図21, 図版4)

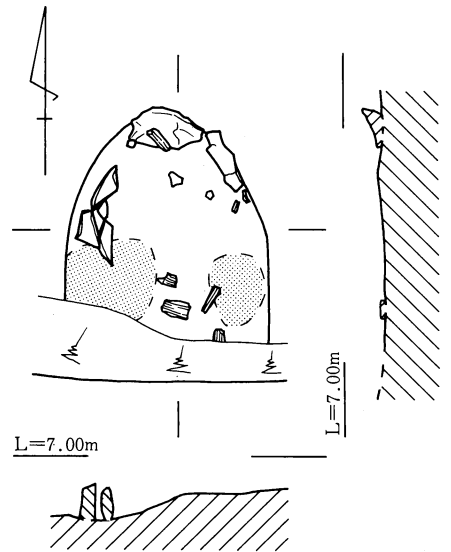
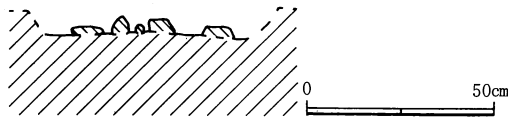
S F 17は19D地区の南東, S F 18の南にあり, S F 15・16の下層で検出された。遺構は歪な楕円形の土壇である。長軸175cm, 短軸146cm, 深さ17cmを測り, 主軸はN-18°-Eである。床面部分で数十個の角礫がほぼ全面に敷きつめられたような状態で検出された。赤変したり, 煤が付着して黒くなった石があることから火を受けたと考えられる。石の下の砂もところどころ焼けて赤くなっていた。また, 石と石の間には多量の炭化物・骨片が, 埋砂内には少量の灰が混入している。炭化物・骨の他に遺物は出土しなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 18 (挿図22, 図版2)

S F 18は19D地区の南東, S F 17の北にあり, S F 08と接している。遺構は歪な形をしており, 床面上に角礫が数十個検出された。焼けているものはほとんどない。埋砂内では



挿図22 S F 18遺構図 (S = 1/20)



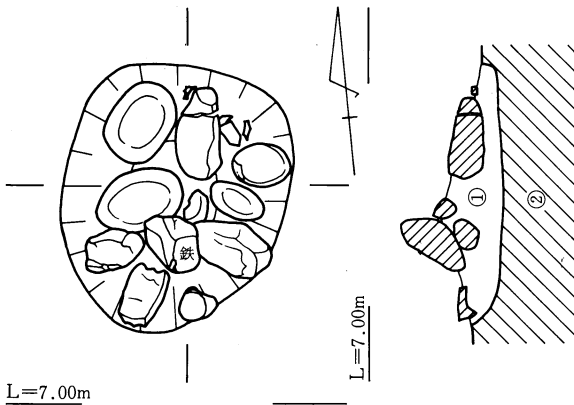
挿図23 S F 19遺構図 (S = 1/20)



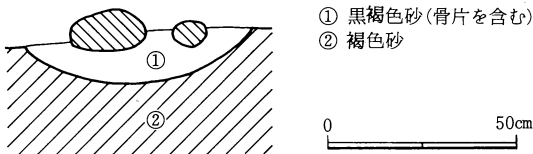
炭化物・骨片が少量ではあるが出土した。焼砂・灰などはない。他に遺物は出土しなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 19 (挿図23, 図版4)

S F 19は19D地区の南東にあり, S F 17の東に位置する。遺構は浅い楕円形の土壌で, 長軸は不明, 短軸60cmを側る。主軸は南北方向である。土壌の西側に4枚, 北側に2枚, 板石が立てて置かれており, 多少石組みを意識していると考えられる。埋砂には大量の炭化物が混入しており, わずかだが骨



挿図24 S F 20遺構図 (S = 1/20)



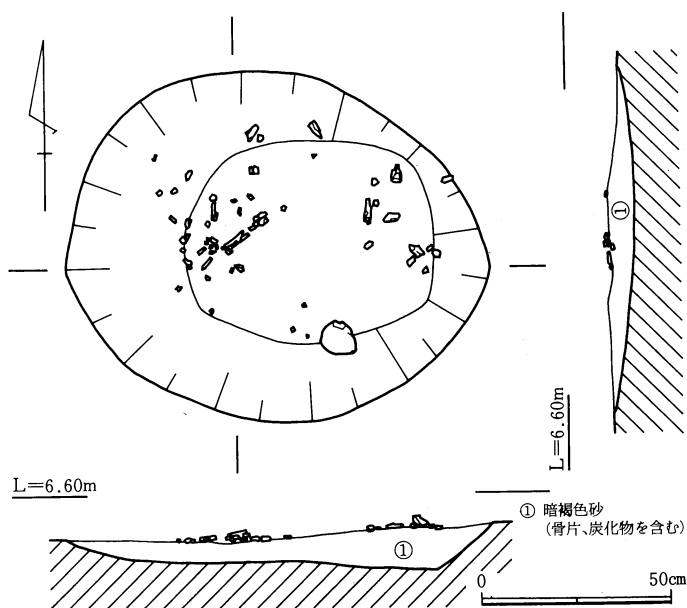
- ① 黒褐色砂(骨片を含む)
- ② 褐色砂

片の混入も見られる。炭化物の集中している箇所は東西にそれぞれ1ヶ所づつあり, 10~15cm程の炭片も出土している。焼砂・灰などはみられなかった。他の遺物も出土しなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 20 (挿図24, 図版4)

S F 20は19D地区の北西にあり, S F 22の南に位置する。遺構は歪な楕円形の土壌で,

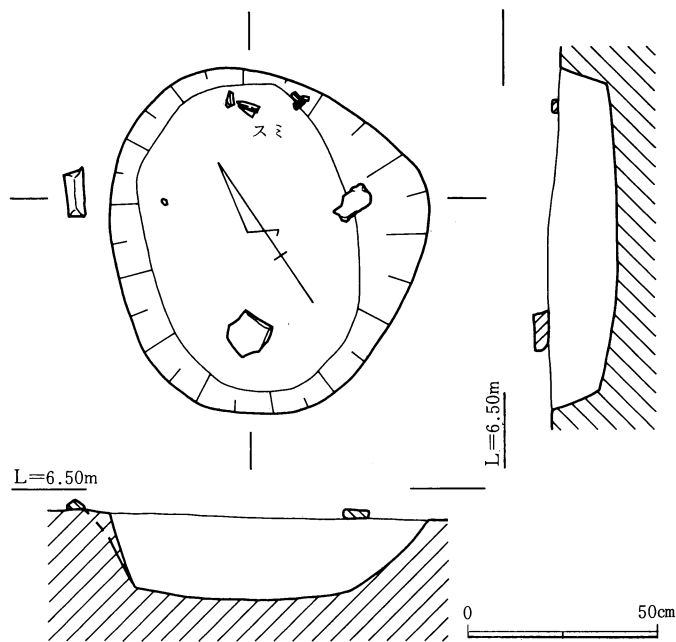
長軸72cm, 短軸58cm, 深さ15cmを測り, 主軸N-22°-Eである。土壌内の埋砂①層に浮いた状態で円・角礫が置かれていた。これらの石は赤変したり, ひび割れていたのでは火を受けたと思われる。石と石の間には骨片・炭化物が集中している箇所があった。埋砂には骨片・炭化物が混入しており, 土壌外の砂も一部焼けていた。遺物は埋砂内に鉄器片(棒状の鉄器で紛失)が出土した。Cタイプの火葬墓である。



挿図25 SF 21遺構図 (S = 1/20)

S F 21 (挿図25, 図版 5)

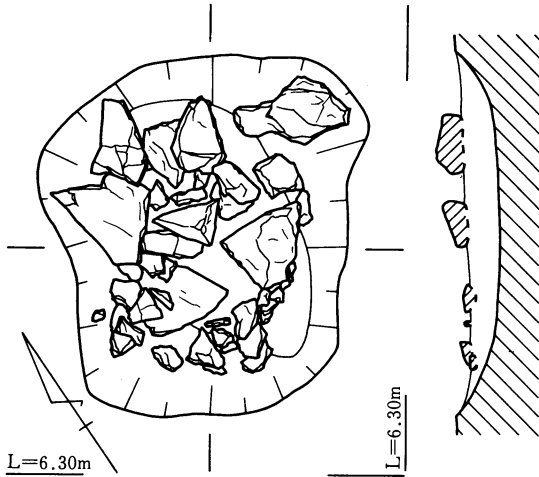
S F 21は19D地区の北西にあり, S F 22の西に位置する。遺構は楕円形の土壌で, 長軸112cm, 短軸92cm, 深さ7cmを測る。主軸は東西方向である。土壌の埋砂中には多量の骨片と, 炭化物が混入している。骨は焼けており, ひび割れている。土壌内には焼砂はなく, 灰も少量検出されただけである。その他に遺物はない。Bタイプの火葬墓である。



挿図26 SF 22遺構図 (S = 1/20)

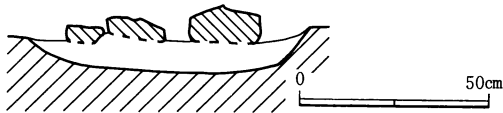
S F 22 (挿図26, 図版 5)

S F 22は19D地区の北西にあり, S F 20の北に位置する。遺構は径約90cmの歪んだ円形の土壌で深さは22cmを測る。埋砂内では10cm程度の炭化物や細かな骨片が検出された。炭化物は大きなもので10cm程度あり, 南側に集中している。炭化物・骨片の他には遺物はなく, Bタイプの火葬墓である。

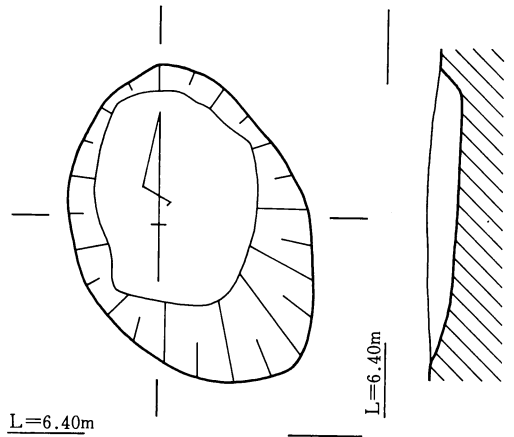


L=6.30m

L=6.30m

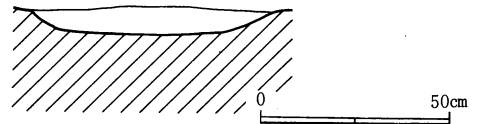


挿図27 SF 23遺構図 (S = 1/20)



L=6.40m

L=6.40m



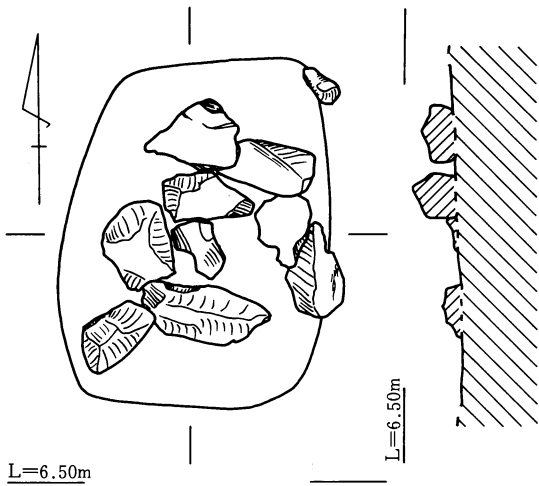
挿図28 SF 24遺構図 (S = 1/20)

S F 23 (挿図27, 図版 5)

S F 23は19D地区の北西にあり、S F 22の北に位置する。遺構は長軸95cm、短軸80cm、深さ8cmの土壌で、角礫を平面的に配している。石は部分的に炭が付着し黒くなったり、赤変しており、火を受けたと思われる。埋砂内に混入する炭化物・骨片はともに出土量は多くなく、集中箇所もなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 24 (挿図28)

S F 24は19D地区の北西にあり、S F 22の西に位置する。遺構は楕円形の土壌で、長軸87cm、短軸61cm、深さ7cmを測る。



L=6.50m

L=6.50m

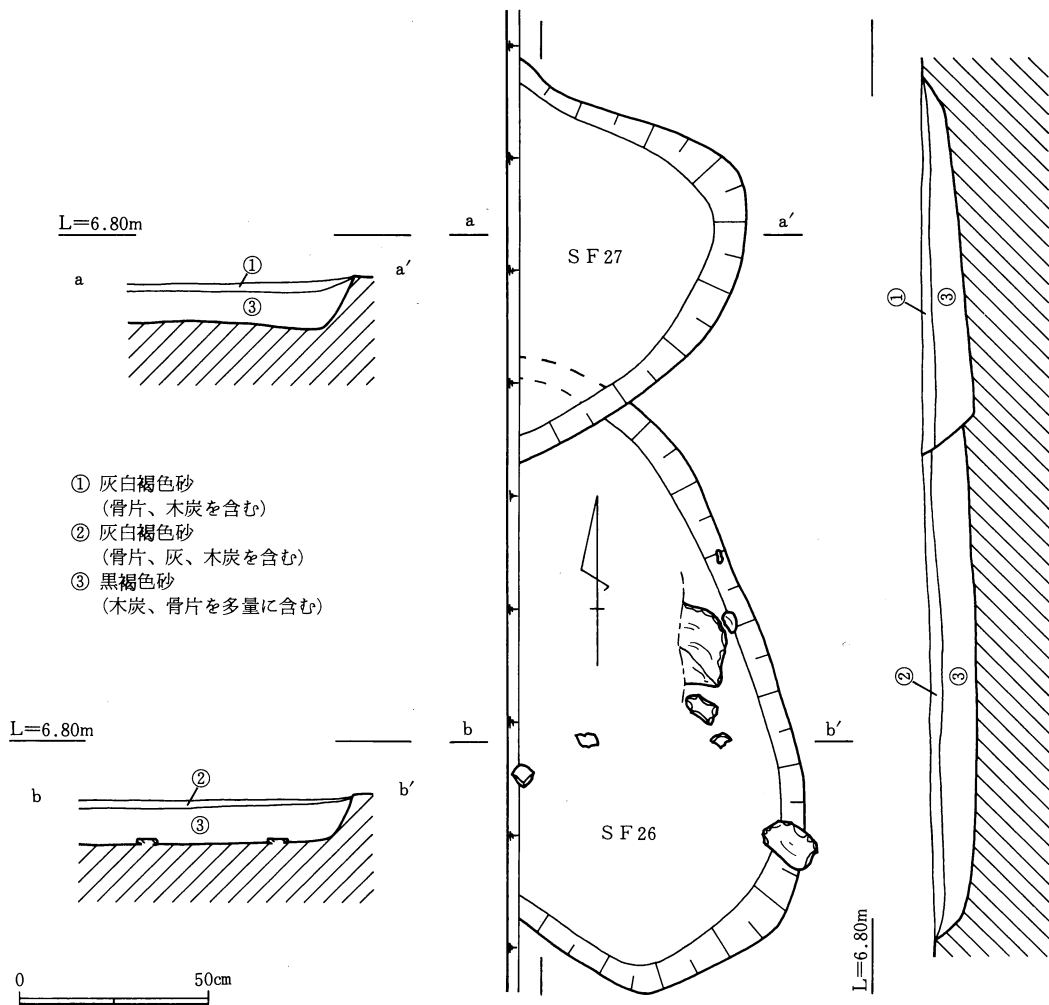


挿図29 SF 25遺構図 (S = 1/20)

主軸はN-15°-Wである。土壌内には少量の炭化物・骨片がみられた。これらは特に集中している箇所もなく、大きな破片もない。遺構内外では焼砂等はなく他の遺物も出土しなかった。Bタイプの火葬墓である。

S F 25 (挿図29)

S F 25は19E地区の南西にあり、S F 29の北に位置する。長辺90cm、短辺70cmを測り、



挿図30 S F 26・27遺構図 (S = 1/20)

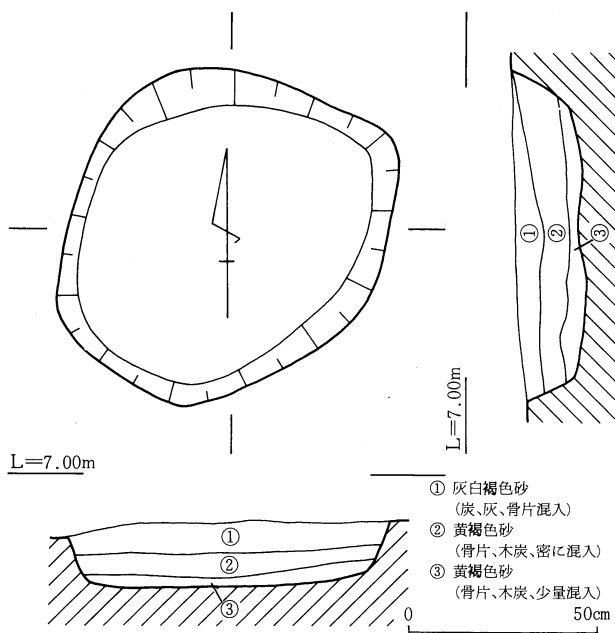
主軸を南北にとる浅い方形の土壌内に20~30cmの角礫を中央に囲むように配する。角礫は一部赤変しており、火を受けたと考えられる。わずかに炭化物・骨片が出土した。炭化物・骨片の他に遺物はなく、Cタイプの火葬墓である。

S F 26 (挿図30, 図版5)

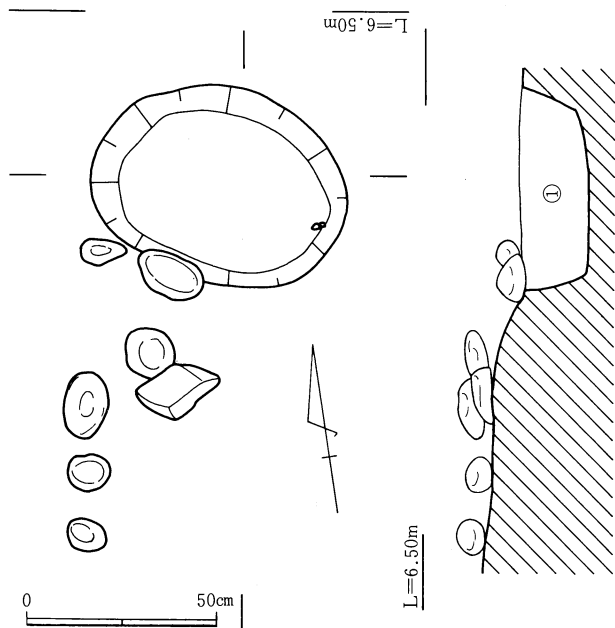
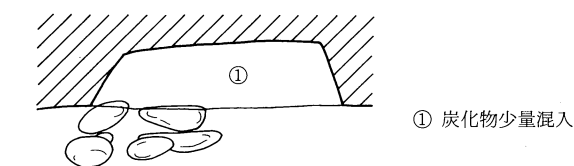
S F 26は19D地区の北にあり、S F 45の東に位置し、S F 27に切られる。遺構は楕円形を呈し、板石が数枚散乱していた。土壌内には炭化物・骨片が細片でみられた。遺構内に焼砂はなく、他の遺物も検出されなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 27 (挿図30, 図版5)

S F 27は19D地区の北に位置し、S F 26を切る。遺構は楕円形(推定)の浅い土壌で、埋砂内には骨片・炭化物の細片が混入していた。他に遺物はない。Bタイプの火葬墓である。



挿図31 S F 28遺構図 (S = 1/20)



挿図32 S F 29遺構図 (S = 1/20)

S F 28 (挿図31, 図版5)

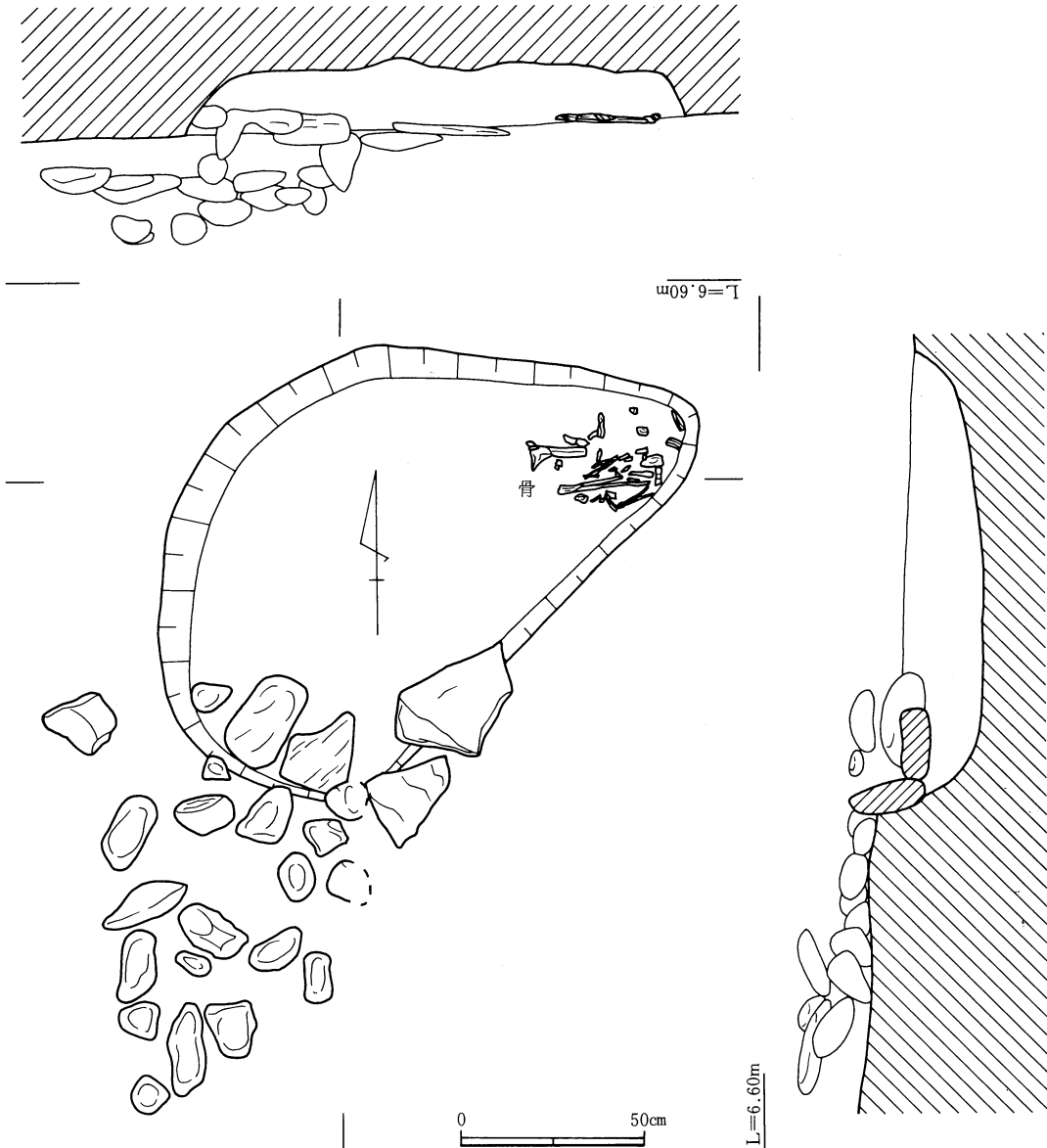
S F 28は19D地区の北, S F 27の東に位置する。遺構は径約80cmの歪な円形の土壇で, 埋砂内に炭化物・骨の細片が多量に混入していた。特に②層に集中してみられ, 灰・焼砂・石などはみられない。他に遺物は出土しなかった。Bタイプの火葬墓である。

S F 29 (挿図32)

S F 29は19D地区の北西, S F 24の西に位置する。遺構は楕円形の土壇で, 長軸67cm, 短軸52cm, 深さ18cmを測り, 主軸はN-60°-Wである。遺構の南側に円礫が散乱しており, 一部遺構の上面にある。土壇内は炭化物の細片が混入していた。骨・灰・焼砂などはみられなかった。Aタイプの火葬墓である。

S F 30 (挿図33)

S F 30は20D地区の北東隅にあり, S F 29の西に位置する。遺構は不整形の土壇で, 南側床面を意識させる円礫がある。また土壇南側にも円礫が散乱している。円礫は1号墳の葺石が脱落したものであろう。土壇の北東隅から骨が集中して出土した。この骨は全部焼けており, ひび割れ, 反りが見られる。土壇内は他にも骨の細片が多数出土しており, 炭化物の細片が多量に混入していた。灰・焼砂はなく, Cタイプの火葬墓である。



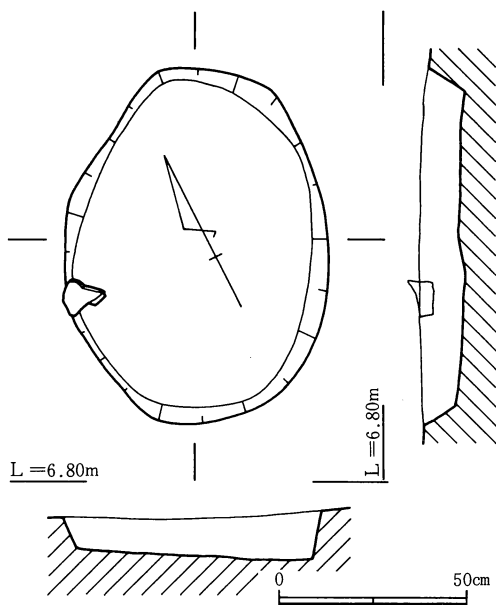
挿図33 S F 30遺構図 (S = 1/20)

S F 31 (挿図34)

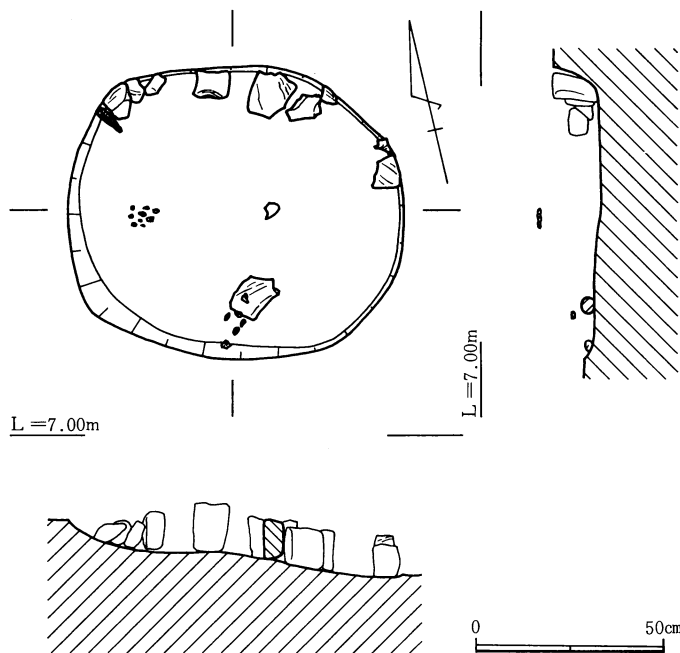
S F 31は19D地区の南東隅にあり、S F 19の南に位置する。遺構は楕円形の土壇で、長軸95cm、短軸70cm、深さ10cmを測り、主軸はN-30°-Eである。土壇内で板石が1枚出土したが意識的に置かれたものではないと考える。埋砂内で炭化物・灰が少量検出された。骨・その他の遺物は検出されなかった。Aタイプの火葬墓である。

S F 32 (挿図35)

S F 32は19D地区の南東隅に位置し、S F 48の上層にあり、S F 33の北を切る。遺構は楕円形の土壇で、長軸90cm、短軸78cm、深さ10cmを測り、主軸はN-77°-Wである。遺



挿図34 S F 31遺構図 (S = 1/20)

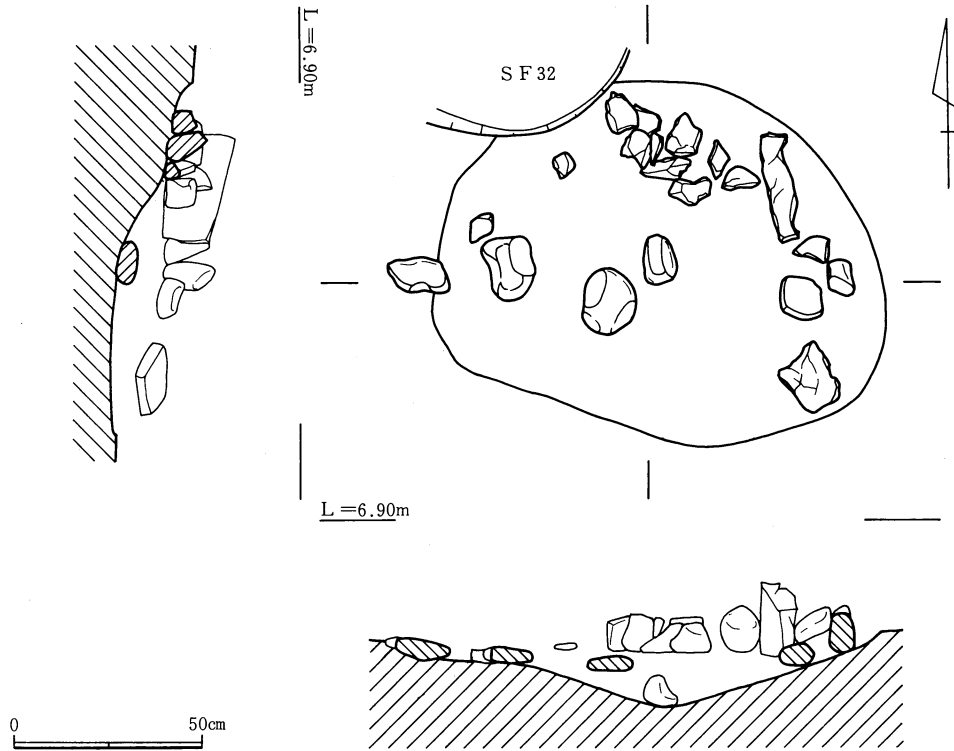


挿図35 S F 32遺構図 (S = 1/20)

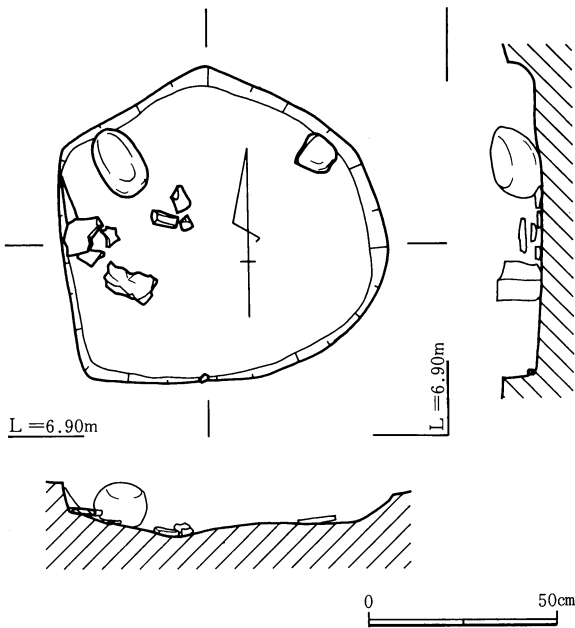
構内に板石、角礫が北側の壁の部分に集中してみられる。骨はほぼ遺構全体から、炭は2箇所から集中して出土した。他に遺物はなく、Cタイプの火葬墓であろう。

S F 33 (挿図36)

S F 33は19D地区の南東にあり、S F 34の南西に位置し、S F 32に切られる。遺構は歪



挿図36 S F 33遺構図 (S = 1/20)



挿図37 S F 34遺構図 (S = 1/20)

な楕円形の土壌で、長軸121cm、短軸93cm、深さ22cmを測り、主軸はN-70°-Wである。土壌内には円・角礫・板石が散在している。埋砂内には骨・炭化物の細片が混入していた。灰・焼砂もわずかにみられる。Cタイプの火葬墓である。

S F 34 (挿図37)

S F 34は19D地区の南東にあり、S F 31の西に位置する。遺構は不整形の土壌を呈し、北側に円礫・板石が散在して検出された。これらの石のうち一部は火を受けた痕跡が認められる。土壌内の埋砂には骨・炭化物の細片が混入している。上層で灰なども多少確認できた。Cタイプの火葬墓である。

S F 35 (挿図43, 図版 6)

S F 35は19D地区の南東, S F 12の南西にあり, S F 44の上層に位置する。遺構は楕円形の土壌に板石で櫃状に組んだもので, 側板はやや傾かせ, 床石を貼り, 内には多数の円礫が投げ入れたような状態で検出された。石と石の間には多量の焼骨, 炭が検出された。石組に用いられている石のほとんどは赤く焼けており, その石に接している砂の多くは焼けて淡赤褐色を呈していた。また石(円礫, 板石共)の多くも熱の為割れたり亀裂が入っている。Dタイプの火葬墓である。

S F 36 (挿図38, 図版 6)

S F 36は19D地区の南東, S F 16の西にあり, S F 15の下層でS F 37を切る。遺構は隅丸形状の土壌で, 長辺106cm, 短辺63cm, 深さ30cmを測る。主軸は南北方向をとる。土壌内に板石と円礫で櫃状に組み, 中央部には投げ入れたような状態で石が検出された。石組部分の大きさは長軸104cm, 短軸57cmを測る。石組の四方は板石・円礫を用いて土壌の壁に貼りつけるように配する。床石は特に設けられていない。石組の内には円礫が十数個検出され, これらの石と石の間に多量の焼骨片・炭片が検出された。囲いの石の一部や中の円礫は赤変したり, 炭の為黒くなったり, 割れている。火を受けたと考えられる。焼砂はわずかに見られたが, 灰は検出されなかった。Dタイプの火葬墓である。

S F 37 (挿図38・39, 図版 6・20)

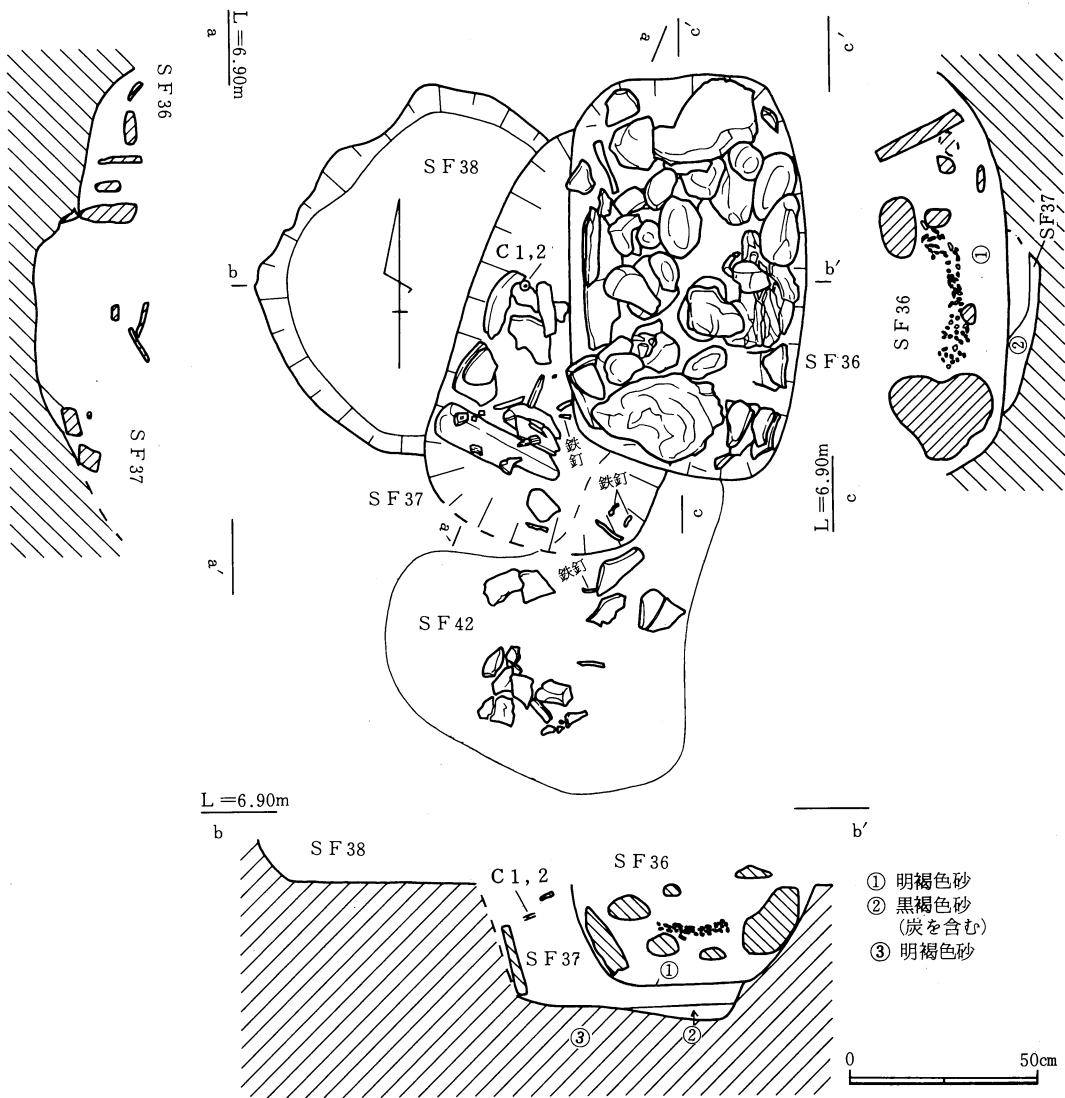
S F 37は19D地区の南東にあり, S F 36に北東側を切られ, S F 38・42を切る。遺構は隅丸形状の土壌で, 長辺115cm(推定), 短辺65cm, 深さ33cmを測る。主軸はN-20°-Eである。土壌内に板石を櫃状に組む。石組の大半は壊れており, 石組の四方のうち西側の一部と南側の一部が残存しただけであるが, 土壌の壁に板石をたてて囲むという形態はS F 36と同様である。板石・円礫ともS F 36を作るときに抜き取り, 使用したものであろうか。土壌内では南側から鉄釘が, 北西には古銭2枚(C 1 開元通宝, C 2 景德元宝)が重なった状態で検出された。遺構内には炭片, 焼骨が検出された。焼砂はなく, 灰も検出されなかった。Dタイプの火葬墓である。

S F 38 (挿図38)

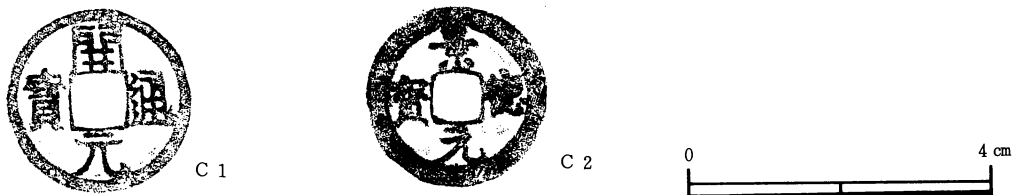
S F 38は19D地区の南東, S F 14の南にあり, S F 37に東側を切られる。遺構は歪な楕円形の土壌で, 長軸95cm, 短軸不明, 深さ12cmを測り, 主軸はN-44°-Eである。埋砂内には骨片・炭化物の細片が混入していた。他に遺物はなく, 焼砂も検出されなかった。Bタイプの火葬墓である。

S F 39 (挿図43, 図版 6)

S F 39は19D地区の南東, S F 35の西にあり, S F 43の東を一部切る。遺構は楕円形の土壌に板石・円礫・角礫を用いて石櫃状に組んだもので, 石組の大きさは長軸100cm, 短

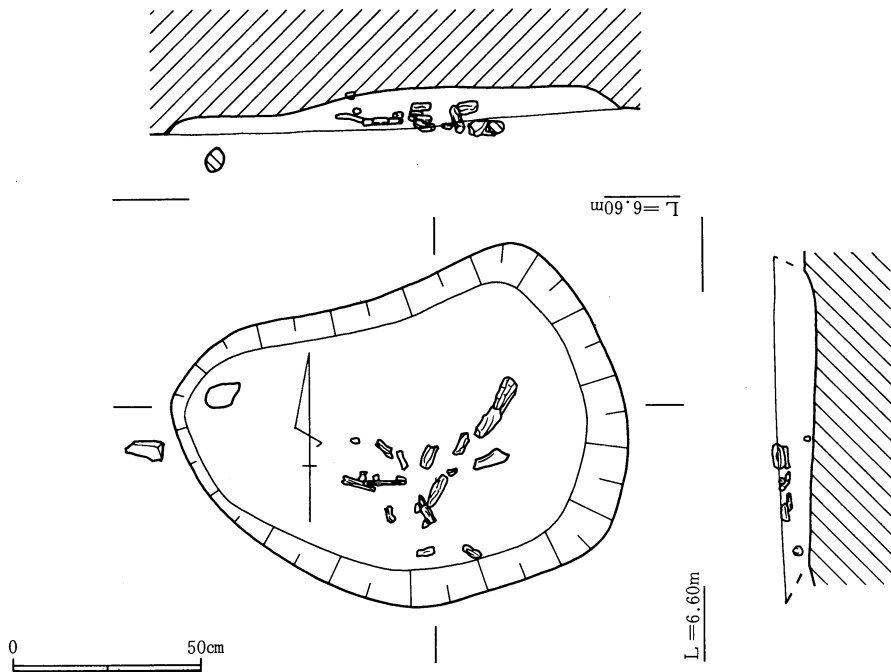


挿図38 S F 36・37・38遺構図 (S = 1/20)



挿図39 S F 37古銭拓影 (S = 1/1)

軸72cm, 深さ20cmを測り, 主軸はN-6°-Wである。床石を用い, 側板は主に板石を, 一部に円・角礫を板石のうらごめに用いて組む。石組の中には円礫が十数個あった。これらの石の間に焼骨・炭化物の破片が多量に検出された。石組の石は赤変したり, ひび割れて



挿図40 S F 40遺構図 (S = 1/20)

おり、火を受けたと思われる、また石組の周りに焼砂を検出した。Dタイプの火葬墓である。

S F 40 (挿図40)

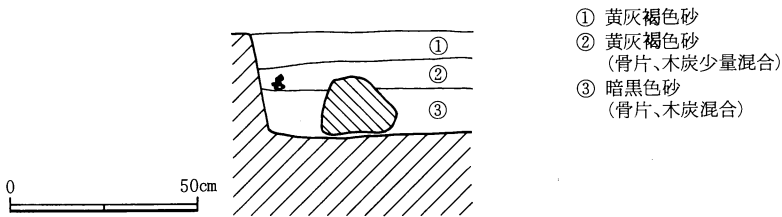
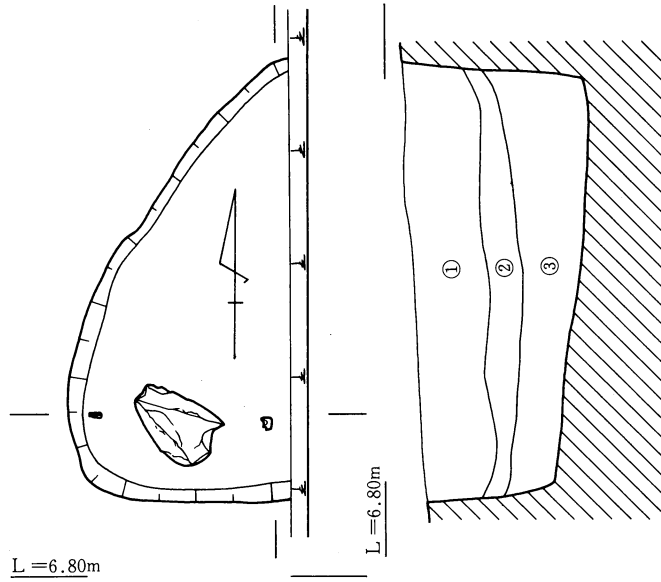
S F 40は19D地区の北にあり、S F 27の西に位置し、S F 45の下層にある。遺構は不整形な楕円形の土壇で、長軸110cm、短軸60cm、深さ約10cmを測り、主軸を東西方向にとる。埋砂内には多量の焼骨が検出された他、炭化物の細片・板石も混入していた。他に遺物はなく、灰・焼砂も検出されなかった。Bタイプの火葬墓である。

S F 41 (挿図41, 図版7)

S F 41は19D地区の中央北にあり、19E地区にまたがる。遺構の北側は不明だが楕円形を呈すると思われる。埋砂内には骨・炭化物の細片が混入しており、床石には石が1個検出された。他に遺物はなく、焼砂・灰なども検出されなかった。Bタイプの火葬墓である。

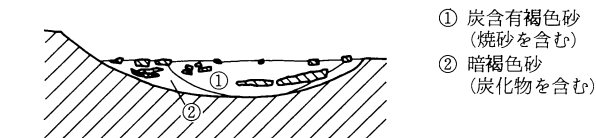
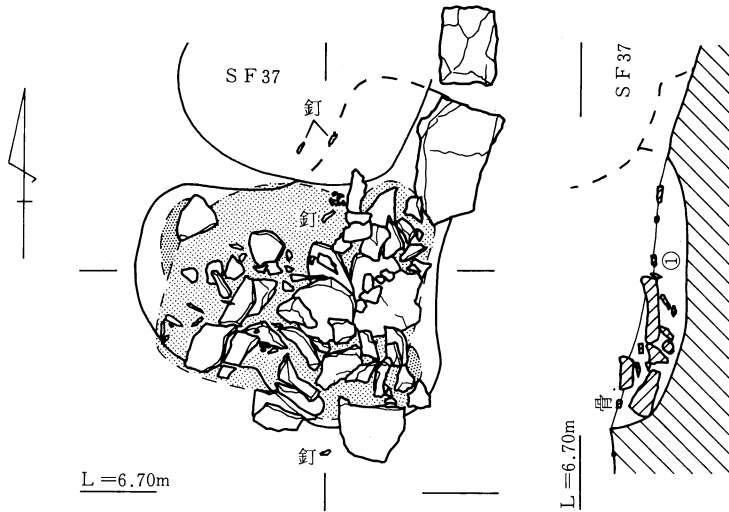
S F 42 (挿図42, 図版7)

S F 42は19D地区の南東・S F 16の南にあり、S F 37に一部切られる。遺構は浅い歪な土壇で南北95cm、東西80cm、深さ15cmを測る。その中に火を受けたと思われる板石・角礫が多数散乱した状態で検出された。埋砂のほとんどは赤変した砂を含んでおりまた両側には炭化物が集中している箇所があることから火を受けたことがわかる。埋砂内に骨片はほとんどみられず、1~2cmくらいの骨片が北側に集中してみられた。石は配したという状態では検出されなかったが、他の状況からCタイプの火葬墓であろうか。周辺より鉄釘



- ① 黄灰褐色砂
- ② 黄灰褐色砂
(骨片、木炭少量混合)
- ③ 暗黑色砂
(骨片、木炭混合)

挿図41 S F 41遺構図 (S = 1/20)



- ① 炭含有褐色砂
(焼砂を含む)
- ② 暗褐色砂
(炭化物を含む)

挿図42 S F 42遺構図 (S = 1/20)

が出土している。

S F 43 (挿図43, 図版 6)

S F 43は19D地区の南東にあり, S F 39に東側の一部を切られている。遺構の大きさは長軸104cm, 短軸60cm (推定), 深さ15cmの楕円形の土壌に板石・角礫を用いて石櫃状に組んだもので, 石組の大きさは長軸95cm, 短軸65cm, 主軸は南北方向をとる。床石は板石・平らな角礫を用い, 側板は主に角礫を用いて組まれている。埋砂内には角礫が数個入っていた。これらの石の間や, 床石の上に焼骨・炭化物が多量に検出された。掘方の大きさに比べて石組の石が少なく, 特に北側は側板もない。これらはS F 39を作るときに抜き取られたものであろうか。石はほとんどが焼けており, 石組のまわりには部分的に焼砂もみられる。他に遺物はなくDタイプの火葬墓である。

S F 44 (挿図43, 図版 6・7)

S F 44は19D地区の南東, S F 39の東にあり, S F 35の下層に位置する。遺構は楕円形の土壌に角礫を用いて石櫃状に組んだもので, 石組の大きさは長軸90cm, 短軸70cm, 深さ25cmを測り, 主軸は南北方向である。床石は大きな角礫を, 側板は比較的平らな角礫を用いる。側板は土壌側面に貼り付けるような状況で組む。埋砂内には円礫が数個入っていた。これらの石の間から焼骨, 炭化物が多量に検出された。石組の石, 埋砂内の石は赤変したりひび割れており, 火を受けたと思われる。石組のまわりには所々焼砂が検出された。他に遺物はなく, Dタイプの火葬墓である。

S F 45 (挿図44, 図版 7)

S F 45は19D地区の北, S F 26の西に位置する。遺構は径約60cm, 深さ5cmを測る円形の土壌で, その中に火を受けた板石・角礫が散乱している。埋砂内には骨・炭化物の細片が混入しており, 上部には一部灰もみられた。他に遺物はなく, Cタイプの火葬墓である。

S F 46 (挿図45)

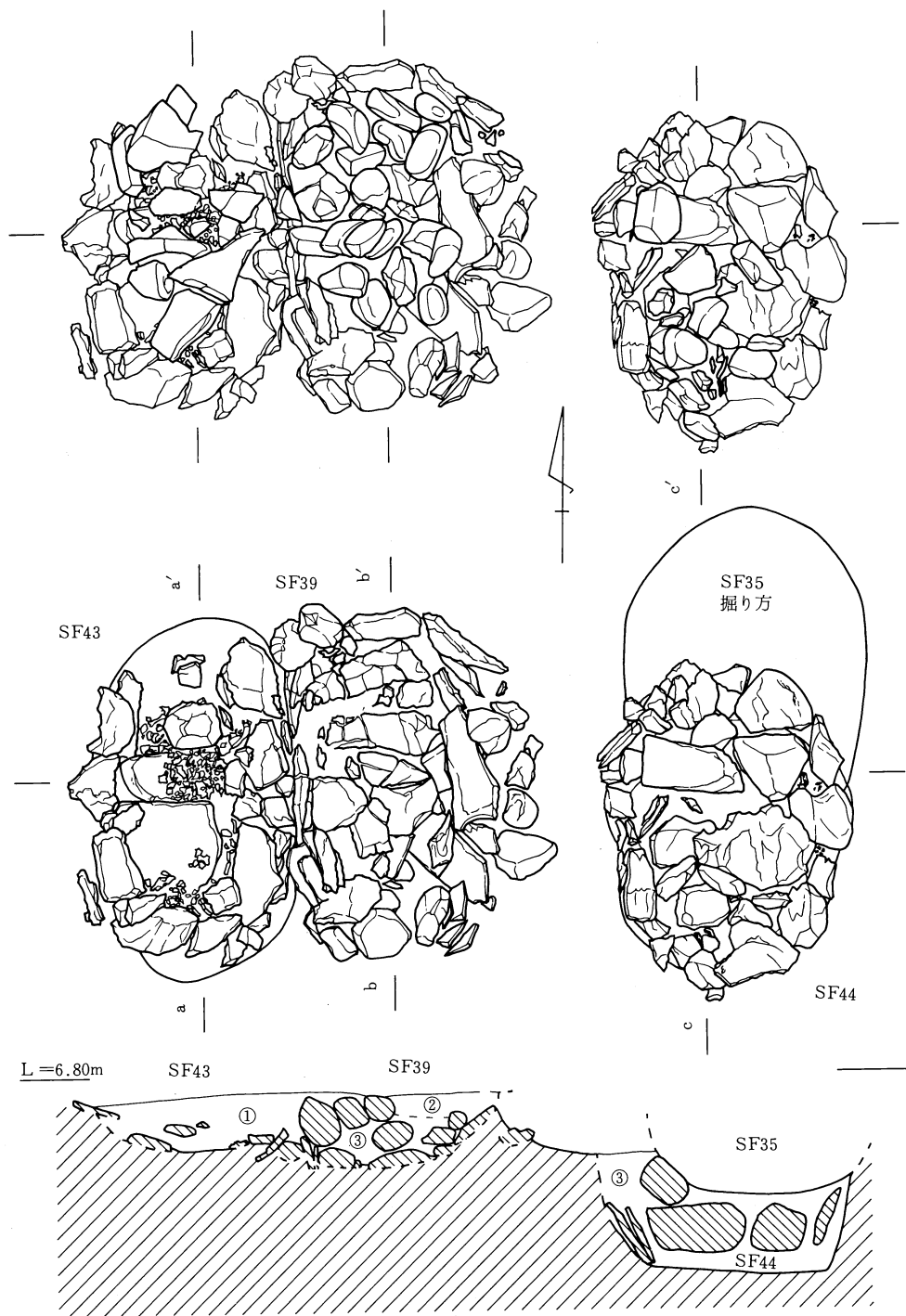
S F 46は19D地区の北, S F 41の東に位置する。遺構はやや歪な楕円形の土壌で, 長軸150cm, 短軸117cm, 深さ33cmを測り, 主軸はN-29°-Eである。埋砂内には炭化物の細片がわずかにみられた。灰・焼砂, その他の遺物はみられなかった。Aタイプの火葬墓である。

S F 47

S F 47は, 19D地区の北東, S F 26の南, S F 01の西に位置する。埋砂内に骨片を含む土壌である。詳細は不明である。

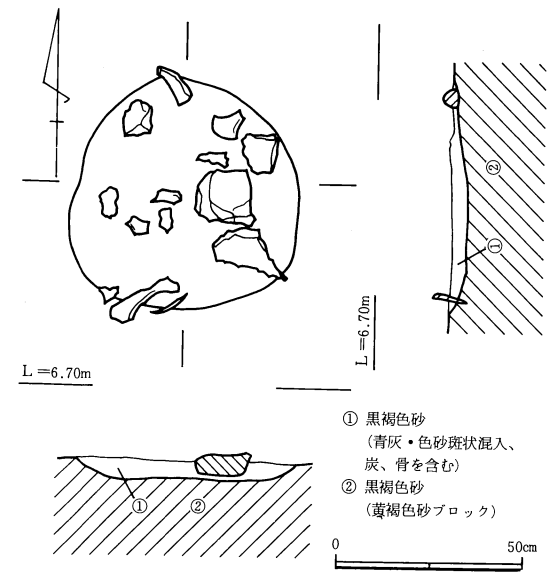
S F 48 (挿図46, 図版 8)

S F 48は19D地区の南東にあり, S F 32の下層に位置する。遺構は楕円形の土壌で, 長軸95cm, 短軸81cm, 深さ38cmを測り, 主軸は南北方向である。埋砂内で一部が赤変した円



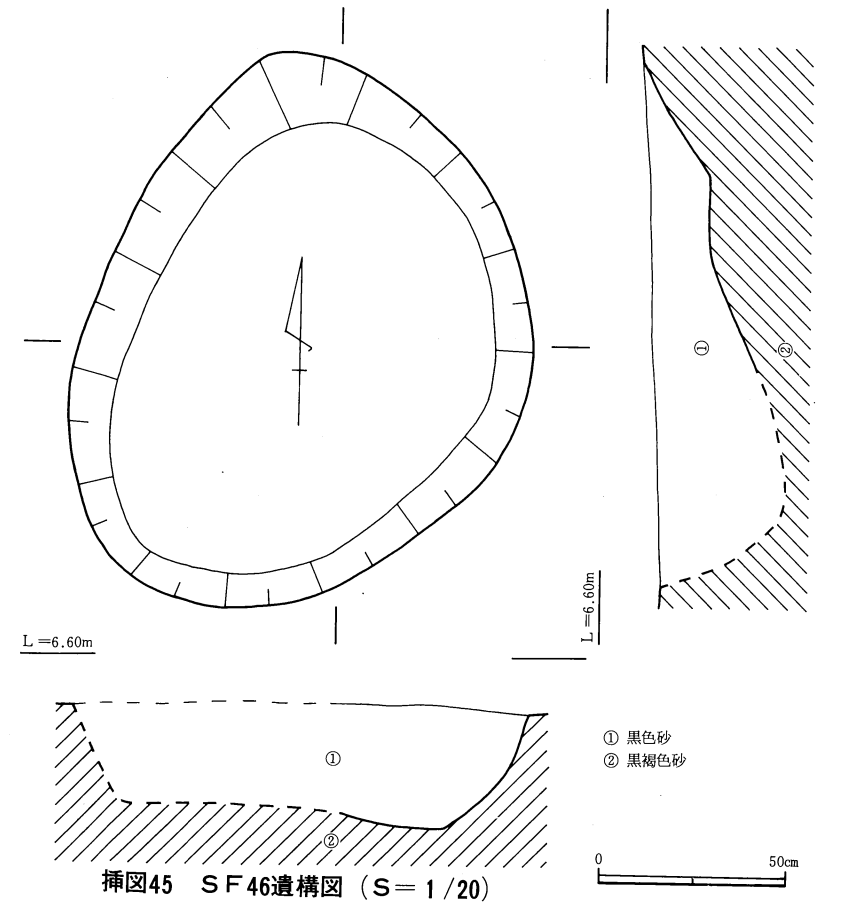
挿図43 SF35・39・43・44遺構図 (S=1/20)

- ① 青灰褐色砂 (骨・炭片混入)
- ② 黒褐色砂に黄褐色斑状混入
- ③ 暗褐色砂 (骨・炭片混入)



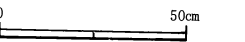
挿図44 SF45遺構図 (S=1/20)

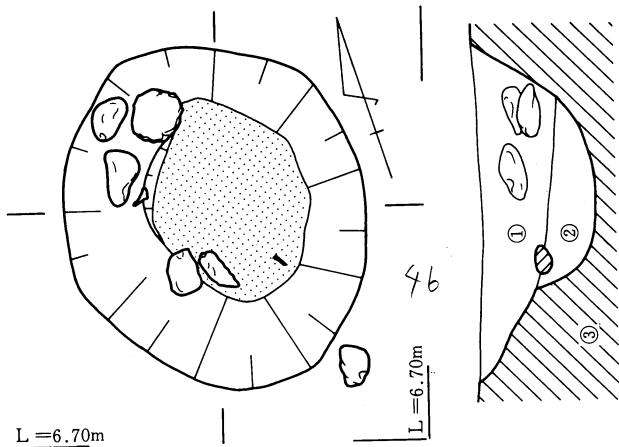
- ① 黒褐色砂
(青灰・色砂斑状混入、
炭、骨を含む)
- ② 黒褐色砂
(黄褐色砂ブロック)



挿図45 SF46遺構図 (S=1/20)

- ① 黒色砂
- ② 黒褐色砂



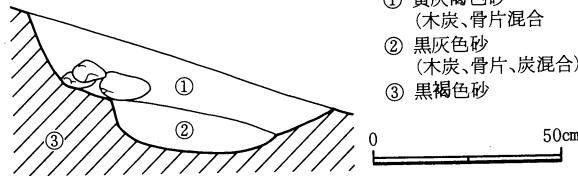


L=6.70m

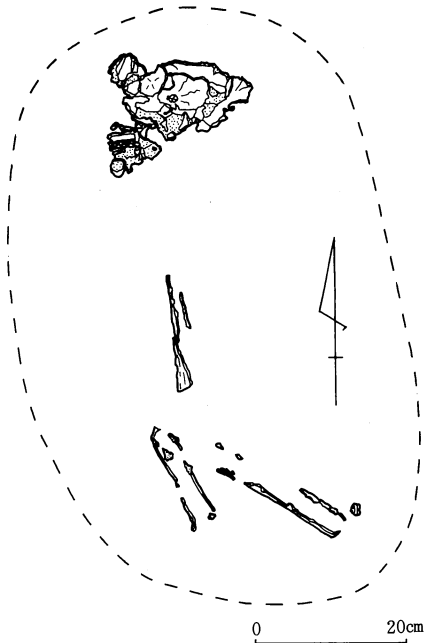
46

L=6.70m

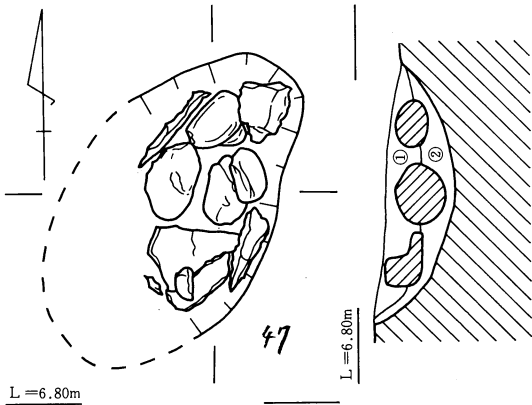
- ① 黄灰褐色砂
(木炭、骨片混合)
- ② 黒灰色砂
(木炭、骨片、炭混合)
- ③ 黒褐色砂



挿図46 S F 48遺構図 (S = 1/20)



挿図48 S X'16遺構図 (S = 1/10)

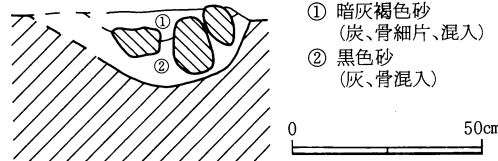


L=6.80m

47

L=6.80m

- ① 暗灰褐色砂
(炭、骨細片、混入)
- ② 黒色砂
(灰、骨混入)



挿図47 S F 49遺構図 (S = 1/20)

礫が数個検出された。火を受けたと思われる。また骨・木炭が混入しており、特に②層では炭化物が大量に混入していた。他に遺物はなく、灰も検出できなかった。Cタイプの火葬墓である。

S F 49 (挿図47)

S F 49は、19D地区の中央やや南に位置し、S F 10・11の西にあり、S F 13に切られる。遺構は長軸93cm(推定)、短軸54cm(推定)、深さ20cmを測り、主軸はN-35°-Eである。楕円形の掘り方内に円礫と板石を平面的に配石したものである。石の部分

は長軸65cm、短軸38cmの大きさで、東西2枚の板石が立っているので、石櫃状の石組とも考えられる。遺構内は炭片と骨片が混入しており、①層は灰も多量に入っているが、遺構の円外に焼砂は見られなかった。炭と骨以外に遺物はなく、石が平面的に配石してあることからCタイプの火葬墓である。

S X'16 (挿図48)

S X'16は19D地区の中央やや南東にあり、S F 07の西に位置する。体の右を下にした

いわゆる横臥屈葬の状態で検出した。頭骨は左右の頭頂骨、上顎、下顎骨、歯が遺存する。上肢の一部の骨や大腿骨、脛骨の一部がわずかに遺存していた。椎骨などは検出されなかった。遺体の埋納されていた土壌は不明瞭であったが、楕円形で主軸は南北方向である。埋砂は褐色砂で層位的に火葬墓の作られる層と同じ層から掘り込まれていた。この横臥屈葬には伴出遺物、副葬品がみられないが、層位などから中世期のものと考えられる。

小結（第1表）

以上49基の火葬墓について述べた。これらの火葬墓のほとんどは1号墳周溝上層で検出された。1号墳は築造後周溝の部分から埋まりはじめ、最後には墳丘も黒砂の下に埋没したと考えられる。火葬墓のほとんどがこの黒砂の上層から掘り込んで作られている。

49基ある火葬墓はその形状から、土壌の内に石を組んだり置いたりして、何らかの施設を設けていると考えられるもの（施設とは断定できないが少なくとも石を検出したものをも含む）と、全く石材を用いていないものに大別できる。前者は土壌内で炭、骨の両方もしくはいずれかが確認されたもので、骨、炭化物が検出されているが骨片そのものは検出されていないもの（Aタイプ）、炭化物など全く検出されず骨のみが検出されているもの（Eタイプ）、骨と炭化物が検出されているが他には検出されていないもの（Bタイプ）に分かれる。後者は石材を平面的に配石したもの（Cタイプ）と、底に板石をひき側壁状に板石をおいて石櫃状に石を組んだ上で中に円礫が入っているもの（Dタイプ）に分かれる。Dタイプの石組は板石、角礫をうまく利用し、明らかに櫃状にすることを意識していると判断できる。これに対し、Cタイプは形状的にはきわめて多様で、①土壌内に石が散在しているもの、②特に石をならべようとした意識がうかがえないものの集中的に底面付近に集まっているもの、③Dタイプに見られる側壁状の石組をもたないものの石を平面的にならべようとした意識がうかがえるものに大きく分けられる。これらC・Dタイプにはすべて骨・炭化物が確認されており、一部焼石も検出された。これらの遺構の大きさはほとんどが1 m以下である。

以上の大まかな分類に基づいて、火葬墓であるかどうかの認定とその性格について考えたい。単に火葬した骨を土壌等の遺構内に埋めたものか、その遺構内で火葬行為を行なってその場に埋めたものかが問題になる。

ほとんどの遺構内に骨・炭化物がみられる。遺構内から出土する骨の絶対量は少ない。骨はほとんど細片で変形しており、原状を留めている骨は極めて少ない。骨が火を受けてこることは明らかである。従って、これらの遺構は火葬骨をもつ遺構であり、その意味では、骨が検出されていないAタイプ以外のすべての遺構は火葬墓といえる。（ただし、Aタイプも炭の混入、土壌の形状が他のE・Bタイプと同じなので一応火葬墓であると推定し得る。）ただ、その遺構内で火葬を行なったものかどうかは判然としない。それを判断する

ために、特にC・Dタイプにみられる石の焼けた跡、その他のタイプにもみられる遺構内の砂の焼けた跡について検討しなければならない。焼石は、以前に焼けていた石を石組に利用したとも考えられるので、石の焼け方の状況を考えたり、さらに厳密に考えるなら、焼砂の存在を考慮した上で、はじめて火を使用した埋葬施設といえよう。この焼砂に注目するなら、Cタイプのなかでも平面的配石をもつタイプの一部(③)とDタイプに焼砂を見ることができる。従ってこれらは、その石を組んだ遺構の中で火葬を行なったと考えられよう。焼砂が認められなかった平面的配石をもつCタイプのうちの③でも、石の焼け方は相対する位置が焼けており、その遺構を作った上で火葬が行なわれた可能性がある。以上の配石・石組が認められる火葬墓はその遺構内で火葬が行なわれたものと考えられる。これに対し、Cタイプでも平面的配石を意識させないタイプ(①・②)のものとA・E・Bタイプには焼砂は検出されておらず、その遺構内で火葬されたとも積極的にはいえない。むしろ他所で火葬した骨を埋納した土壌墓であるとも考えられる。(ただし散乱する石をもつCタイプ①の中にも焼砂をもつものがあり、また前記したように平面的配石をもつCタイプでも焼砂をもたないものがあるので、このかぎりではない。)しかしながら遺構が作られたときの骨の量が推定できないので出土する骨の多いDタイプとB、Cタイプの一部の遺構以外は火葬墓と断定できない。遺構内で火葬したと考えるDタイプの石櫃状配石をもつ火葬墓は、石櫃状に配石した石組とその内側に入っている円礫ともに相対する面が焼けている。さらに中の円礫間、あるいは床石と円礫間に多量の骨片、炭化物片が存在する。このことから、遅くともまだ火のあるうちに円礫が骨の上におかれたとも推測される。単にその遺構内で火葬が行なわれたと言うだけでは(実際の葬法がどのようなものであったかを推測すると)不十分だと思われる。

当遺跡ではこれら火葬墓の他に、中世の屈葬墓(土葬をした土壌墓・木棺墓で屈葬した人骨体が検出されたもの)も約30基検出されていることから、これらの中世墓を群的にとらえる作業を行なう必要がある。今後の研究課題としたい。

タイプ	石材使用の有無	石材の形状	骨・炭・灰の有無	焼石	焼砂
A	石材不使用		炭片・焼灰混入	無	無
E			骨片のみ混入	無	無
B			骨片・炭片・焼灰混入	無	無
C	石材使用	①散在	骨片・炭片・焼灰混入	一部	一部
		②底面付近に集石		一部	無
		③平面的配石		有	有
D	石材使用	石櫃状配石	骨片・炭片・焼灰混入	有	有

第1表 火葬墓の分類

第2節 1号墳及び周辺墳墓（挿図49）

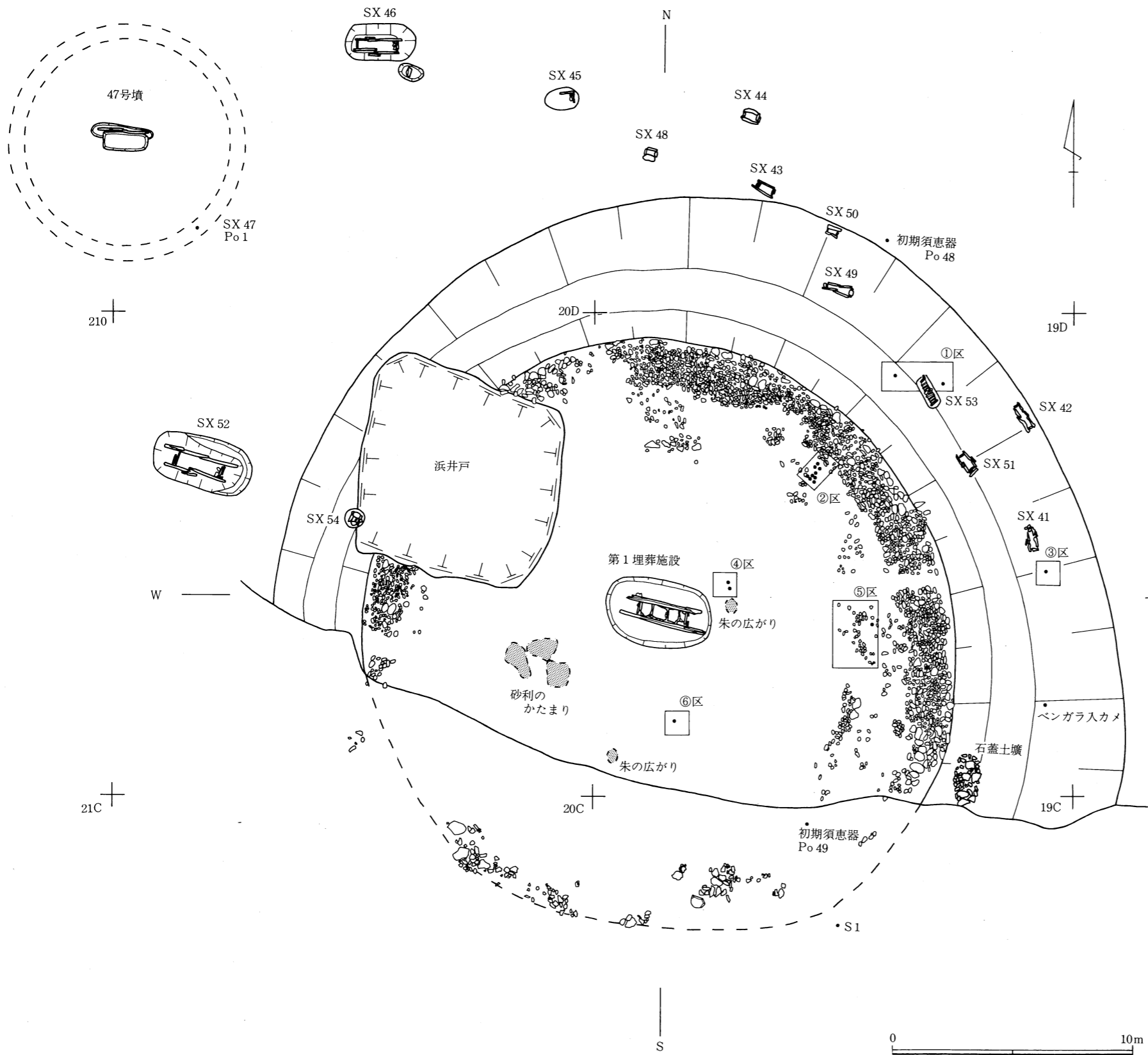
1号墳（挿図49～53，付図2，図版8～10・20・21）

昭和52年の夏から行なわれた確認調査は19D地区でSX41を検出し、さらに19D・20D地区に葺石を持つ大型の円墳（1号墳）を検出した。1号墳の調査は53年度に行なわれ、その下層からは当地区で初めての竪穴住居跡、掘立柱建物跡などを検出した。

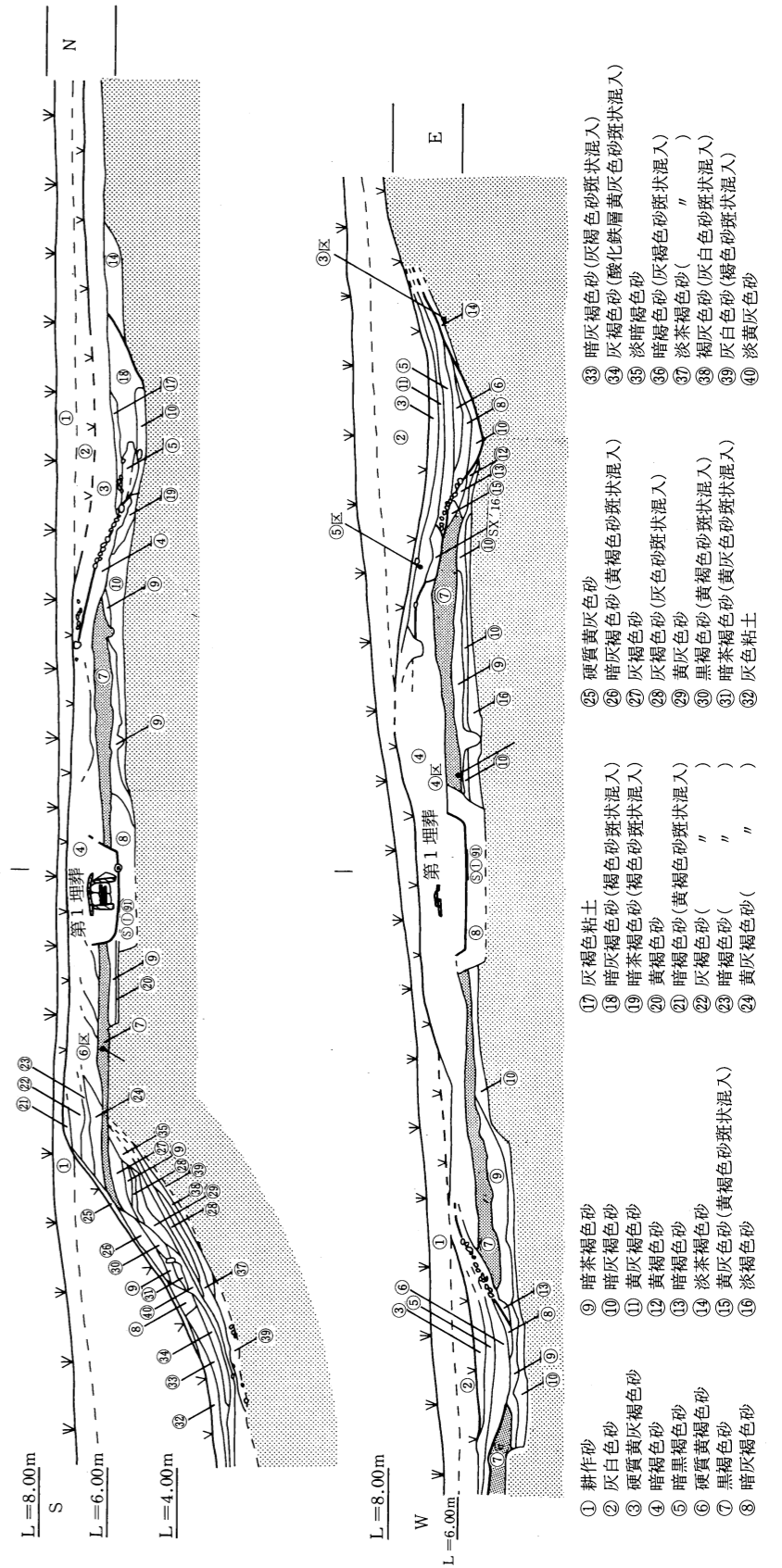
当遺跡の遺物包含層（黒砂層）は18ラインを境に西（1号墳周辺地区-f1地区）側と南側に分かれる。1号墳は西側の黒砂層の分布する中でも南東に位置する。北東から東側は黒砂が高くなりながら消滅している。これほこの地区が非常に高かったため風で飛ばされたものであろう。1号墳は北東から東側の標高11m程度の丘の西側の斜面とそれに続く平坦地を利用して作られたものである。1号墳は径24m，周溝総径33m，高さ2m，2段の葺石を持つ円墳で、周溝は幅約4m，深さ1.5mの大きさでほぼ一周を検出した。古墳の北西側には浜井戸が設けられ、南側には古墳の $\frac{1}{3}$ がなく急激に落ち込んでいる。

葺石の1段目は径約25m，幅約2.2mにわたって葺かれ、石の積み方などで5m前後の幅で区画することができる。2段目の葺石は北側の一部と南西側の一部にわずかに残っている。1段目の葺石はほとんどが径15～30cm位の楕円形の河原石を用いている。特に下段の基部に当たる部分は径50～80cm位の石を意識的に配置していた。1段目の上側，2段目のほとんどは欠落しているが、これは後世掘り出されて火葬墓などに用いられたものであろう。南側の斜面の最下層中に葺石と思われるものがまとまって弧を描くような形で検出した。これらの石は他の葺石と比べてレベル差が3mもあり、円礫が少なく北側の葺石に見られるような規則性がみられない。また古墳が作られる以前の住居跡SI92の南側が一部削られている事からみて1号墳の南側の上部は少なくとも築成後一部削られていることは明らかだが、層位的に見て南側の葺石は39層中（挿図49）の出土で、これは22～24層に比べて下層にあたる。（急激に落ち込む南側の斜面の砂層は同一層中でも色の変化が著しく、分層が困難であったため、どの層位まで削られていたか不明である）以上の状況から南側の低いレベルから出土した石は葺石ではないと考える。2段目の葺石は北側と東側に僅かに残存している。北側は大きな石が東西に直線的に立てられており、東側では基部の方に大きな石を置き、上側に円礫を葺く。1号墳に用いられた葺石は河原石が大半で、天神川の中流付近から搬出したものと推測する。

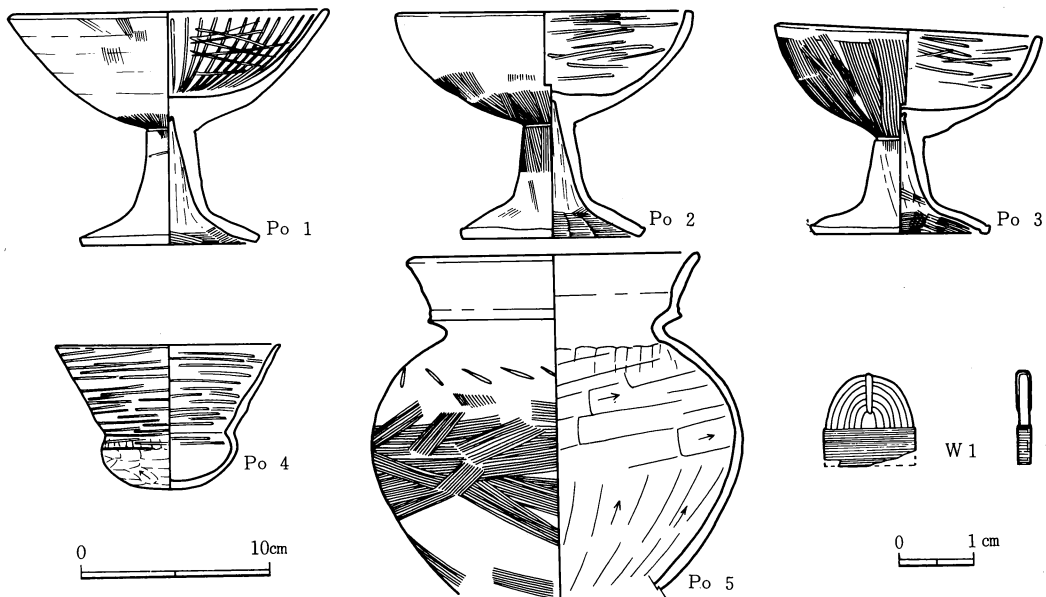
第1埋葬施設は古墳のほぼ中央に位置し、厚い堅固な板状安山岩を用いた組み合わせ式の箱式石棺である。棺の内法は長辺1.85m，短辺0.61m，深さ0.3mを測り、主軸はN-107°-Eである。墓壇の掘り方は旧地表面の上から掘り込み、その大きさは長軸4.5m，短軸3.0m，深さ0.4mで楕円形を呈している。蓋石は2枚の板石からなり、東側の大きな板石で棺のほとんどを塞ぎ、西側のすきまを2枚目の小さな板石で塞いであった。両側板



挿図49 1号墳並びに周辺石棺群位置図 (S = 1/200)



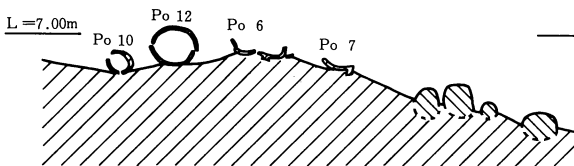
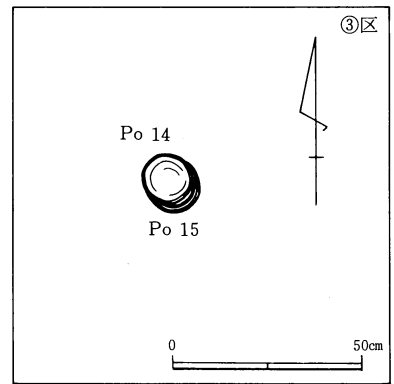
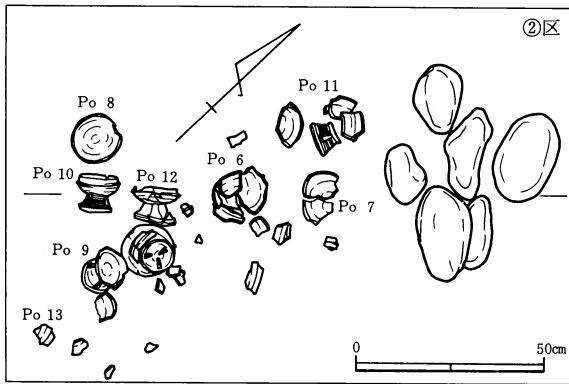
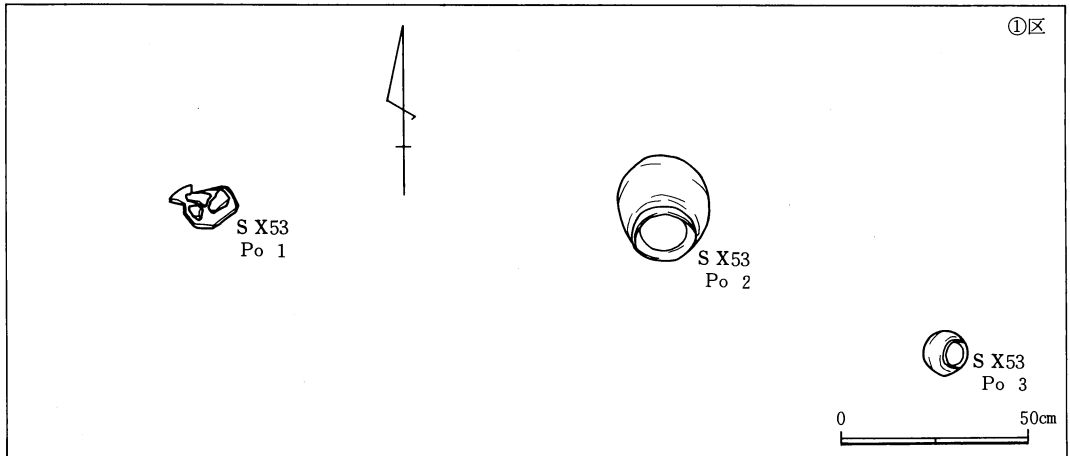
- ① 耕作砂
- ② 灰白色砂
- ③ 硬質黄灰褐色砂
- ④ 暗褐色砂
- ⑤ 暗黒褐色砂
- ⑥ 硬質黄褐色砂
- ⑦ 黒褐色砂
- ⑧ 暗灰褐色砂
- ⑨ 暗茶褐色砂
- ⑩ 暗灰褐色砂
- ⑪ 黄灰褐色砂
- ⑫ 黄褐色砂
- ⑬ 暗褐色砂
- ⑭ 淡茶褐色砂
- ⑮ 黄灰色砂(黄褐色砂状混入)
- ⑯ 淡褐色砂
- ⑰ 灰褐色粘土
- ⑱ 暗灰褐色砂(褐色砂状混入)
- ⑲ 暗茶褐色砂(褐色砂状混入)
- ⑳ 黄褐色砂
- ㉑ 暗褐色砂(黄褐色砂状混入)
- ㉒ 暗褐色砂
- ㉓ 暗褐色砂
- ㉔ 黄灰褐色砂
- ㉕ 灰褐色粘土
- ㉖ 硬質黄灰色砂
- ㉗ 暗灰褐色砂(黄褐色砂状混入)
- ㉘ 灰褐色砂
- ㉙ 灰褐色砂(灰色砂状混入)
- ㉚ 灰褐色砂
- ㉛ 黄褐色砂(黄褐色砂状混入)
- ㉜ 黒褐色砂(黄褐色砂状混入)
- ㉝ 暗茶褐色砂(黄灰色砂状混入)
- ㉞ 灰色粘土
- ㉟ 暗灰褐色砂(灰褐色砂状混入)
- ㊱ 灰褐色砂(酸化鉄層黄灰色砂状混入)
- ㊲ 淡暗褐色砂
- ㊳ 暗褐色砂(灰褐色砂状混入)
- ㊴ 淡茶褐色砂
- ㊵ 暗褐色砂(灰褐色砂状混入)
- ㊶ 灰白色砂(灰褐色砂状混入)
- ㊷ 暗灰褐色砂



挿図50 1号墳第1埋葬施設遺物図（土器S=1/4，櫛S=1/1）

は共に1枚の板石で後にこの2枚の側石は接合することが判った。小口はそれぞれ1枚ずつ置き、さらに数枚の板石で補充している。棺の上面と蓋石の間に置かれた粘土の厚い目張りの為、棺の内に砂がほとんど入っていなかった。棺内には東側を頭にした仰臥伸展の人骨（25～40才の女性）が良好の保存状態で礫床の上に置かれていた。頭蓋骨は土師器高坏3個（Po 1～3）を組み合わせた土器枕に乗せられ、さらに朱で赤く染まっていた。副葬品は遺骨の右側—北側の側板のすぐ南に鉄刀（F 1）一振りか切っ先を西に向けて置かれていた。また漆塗豎櫛（W 1）が前頭骨の上側に置かれていた。鉄刀は木製の鞘の上に布を二重以上巻き、（この布は一部しか残存していない）さらにその上に幅9mmの組紐がすきまなく一重^{ひとえ}に巻かれていた。鞘は2枚の厚さ83cmの板を合わせ、先端部を凹型の木わくで止めている。柄部は木を合わせ、その上に紐あるいは布（識別困難）が巻かれていた（図版21参照）。石棺の床は5枚の板石とすき間を塞ぐ数枚の小さな板石を敷いた上に粘土を張り、その上に直径3～6cmの小礫が平均5cmの厚さで敷かれていた。棺内は側壁・小口・板石ともにベンガラで塗彩され、礫床・床の粘土も赤くなっていた。

墳丘の築造は次のようである。旧地表である7層—黒褐色砂層（挿図49）から周溝を掘り込み、墳丘に砂を盛り墳形を整えた後に墳丘の斜面部に2段にわたって石が貼られた。第1埋葬施設は盛土（4層）から7層に掘り込まれて作られている。棺はこの墓壇に小口板・側板を立てて内外に黒褐色砂を埋め込んだ後床石を敷き、遺骸を埋葬後棺外に白砂を盛り、その上に小礫を敷き、棺のまわりに粘土を厚く敷いた後蓋石で覆ったものである。第1埋葬施設の西3mのところでは小礫の広がりを確認したが、礫以外何も検出されなかつ



挿図51 1号墳遺物出土状況図その1

①区、②区、③区

(S = 1/20)

たので埋葬施設でなく第1埋葬施設に用いた礫が何らかの理由で散布したものとする。

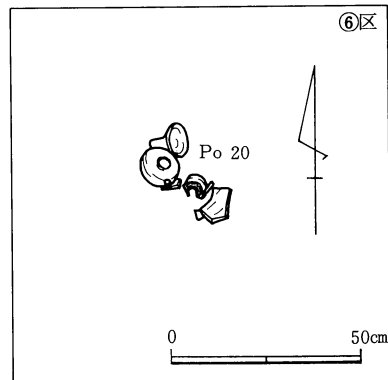
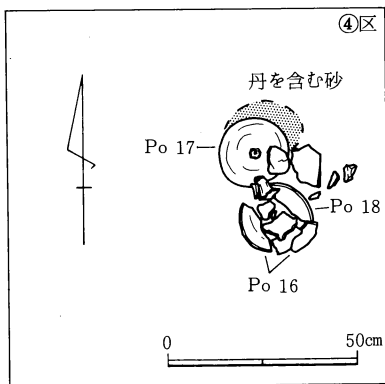
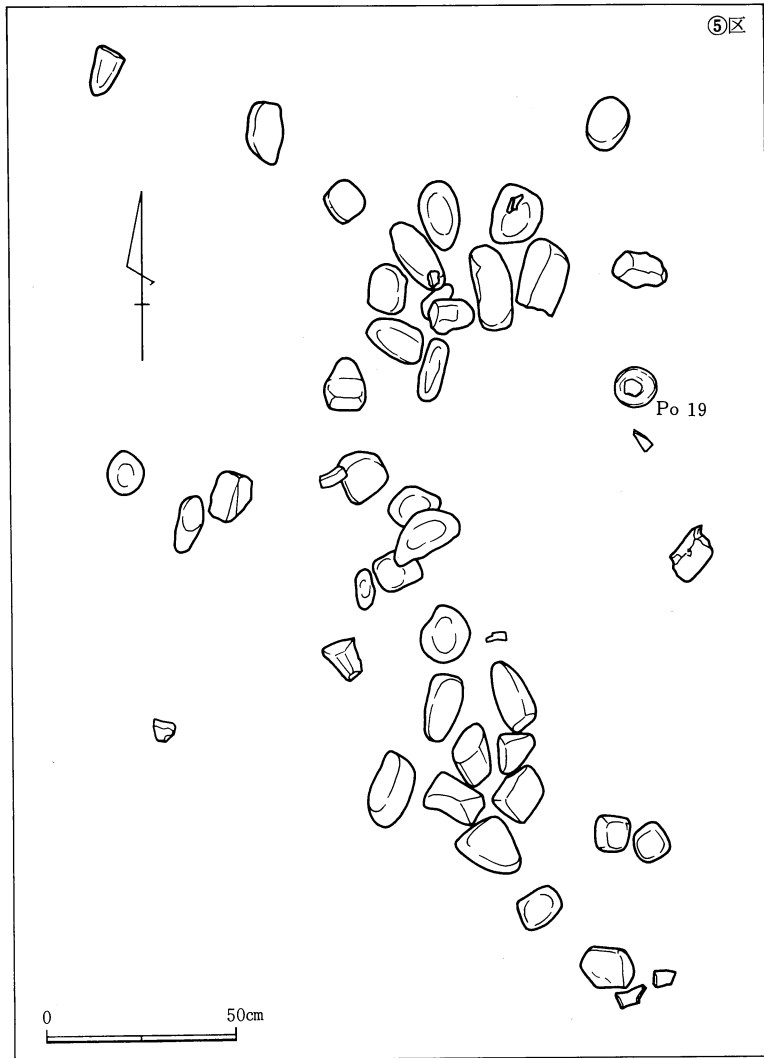
次に墳丘内外の遺物出土状況について述べる。(挿図51・52参照)

1区：1号墳の北東の周溝の中層から壺と甕を検出した(S X53 Po 1～3)。S X53の上面に位置することからS X53の供献土器の可能性もあるが判断し兼ねる。

2区：1号墳の北東、1段目と2段目の葺石の間に須恵器高坏を検出した(Po 6～13)。須恵器は短脚1段透しの有蓋高坏で、高坏5個、蓋3個が横転、あるいは倒立の状態で出土した。

3区：1号墳東側周溝肩部の斜面から蓋坏(Po 14・15)のセットが検出された。蓋・身とも漆による「十」字状の記号(?)が書かれていた。

4区：19D地区中央やや西の1号墳下層(第7層下)から多量のベンガラと共に高坏の



挿図52 1号墳遺物出土状況図その2 ④区、⑤区、⑥区 (S = 1/20)

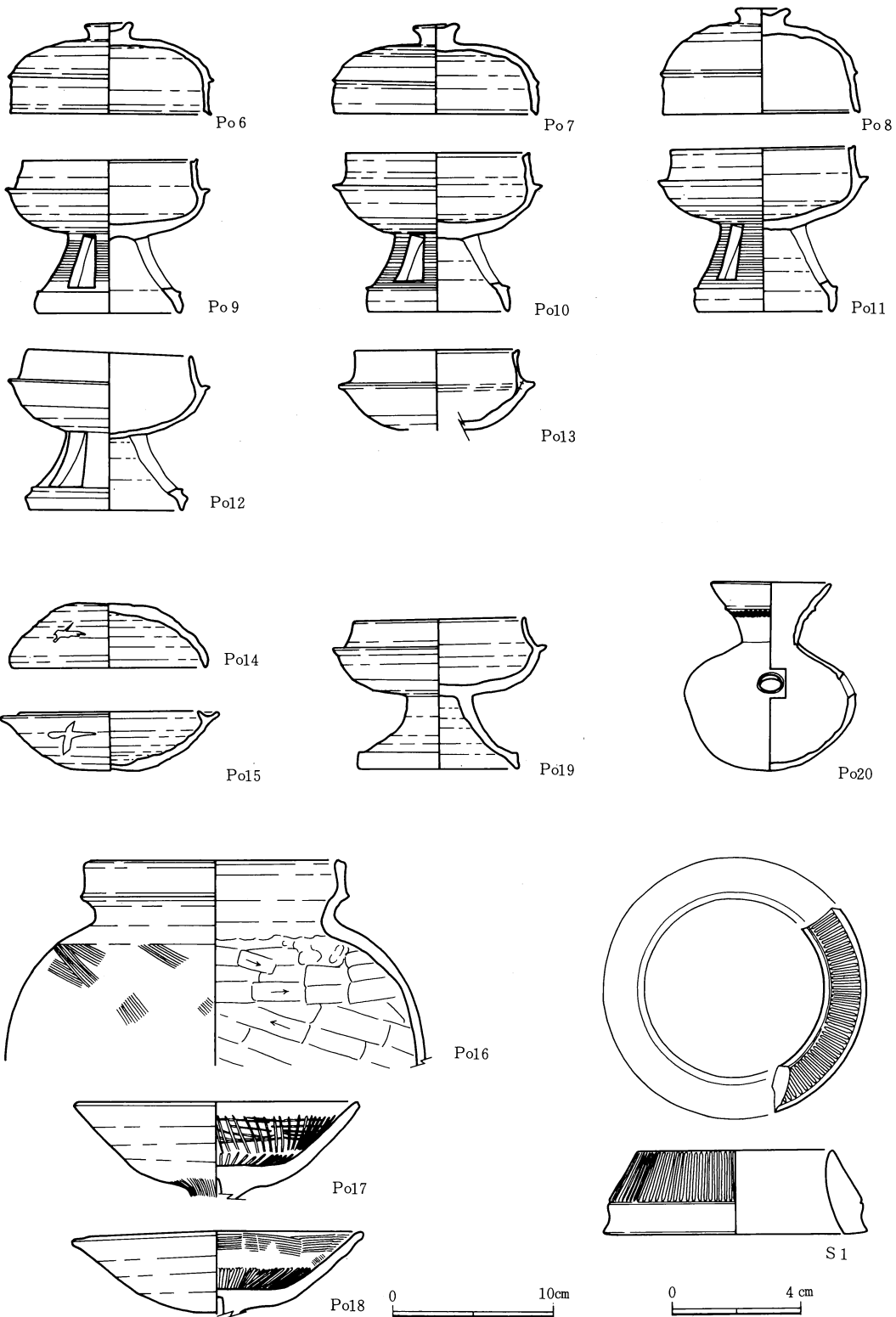


插图53 1号墳出土遺物図 (土器S=1/4、石釧S=1/2)

坏部が2個出土した（Po16～18）。

5区：墳丘西側封土内で半円形に石をめぐらした中から須恵器（Po19）が破片で出土した。この遺構は墳丘の西側を少々削り葺石を用いて作ったものである。

6区：1号墳中央やや南の盛砂の下，1号墳築造前の第7層中から甕と土師器高坏脚部がかたまった状態で出土した。甕は口縁部が西に欠け落ちていた（Po20）。

この他に1号墳北側周溝肩部で須恵器・器台（Po48）が，1号墳の東南東周溝肩部で小土壇内に入った甕を検出した。この甕は正立した状態であり，その中にはベンガラが大量に入っていた。

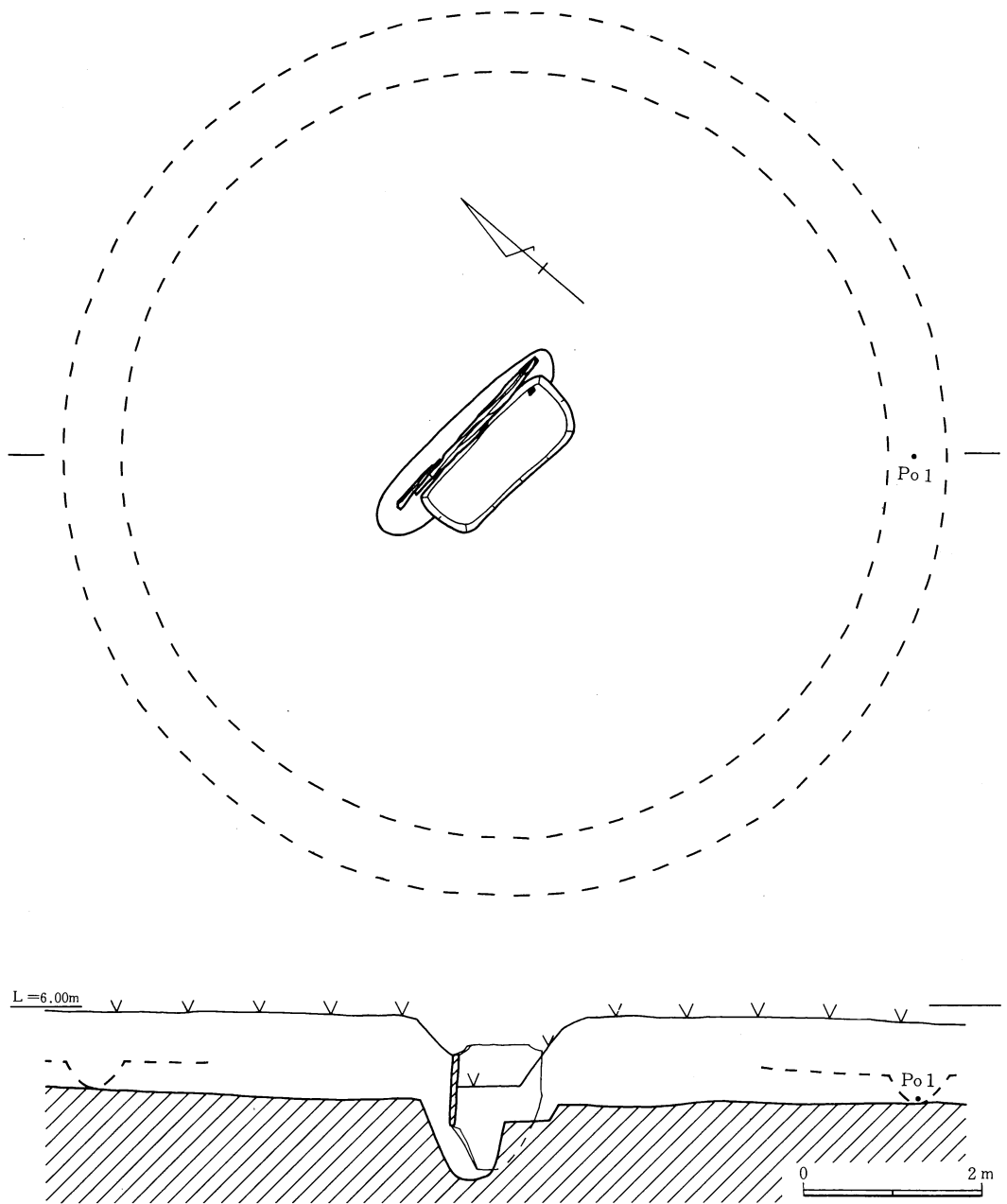
これらの遺物のうち4区と6区の遺物は，層位的にみて1号墳が作られる以前のものである。しかし6区の甕は出土した層も盛土のすぐ下である事，埋葬施設のすぐ南という位置から1号墳築造時の可能性もある。2区の高坏群は出土状況から1号墳の築造後それほどたっていない時期の供献土器と考える。この高坏と前後して前述のベンガラの入った甕がおさめられたであろう。また1号墳東側周溝肩部と19C地区から石釧（S1）が検出された。

長瀬高浜遺跡で最大級の1号墳は墳丘内には1つの埋葬施設しか検出されなかったが，周溝内外から多くの埋葬施設が検出された。この中でSX40～46，48～51，53～57は1号墳の墓域内，或はそれを意識して作られており，1号墳に何らかの関係ある墓と考える。これらの墓の人骨鑑定の結果はSX41・42・45・53が幼児，SX46・52は成人，SX49は成人と幼児が埋葬されていたことがわかった。これらの結果，小型の石棺からは必ずしも幼児の人骨が出ていない事から再葬墓を考える必要がある。古墳の大きさ，作り，丁寧な埋葬施設，周溝内外の墓，円筒埴輪の棺への利用など1号墳は長瀬高浜の代表的な古墳としてあげられる。

1号墳の築造時期は第1埋葬施設の高坏枕，2区の有蓋高坏，SX53上面出土の土師器，墳丘下層出土の甕，SI91の甕などから古墳時代中期の中頃と考える。

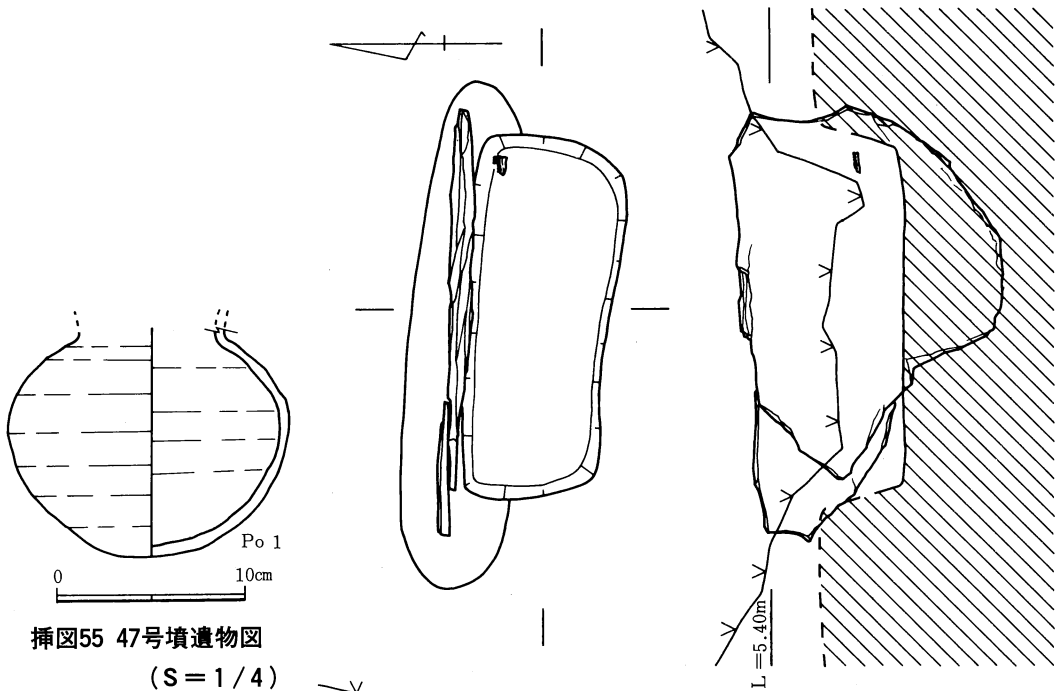
47号墳（挿図54～56，図版10）

47号墳は20E・21E地区にまたがる。長さ1mと2m，最大幅1.46mのかなり大きな板石2枚を1辺にたてた木棺墓であろう。検出時点で木棺部と思われる所は窪んでおり，その上には白砂が推積していた。47号墳は築造後埋められたかもしれないが，後に板石は黒褐色砂上に露出し，その後の白砂の推積によって埋没したのである。木棺部の掘り方は板石をたてるための掘り方を掘り，板石を立てた後再びそれを埋め，さらに改めて木棺部を掘ったものと考えられる。木棺部の南北の面ははっきり確認できたが東西面は明らかでなかった。棺内掘り下げ中にかなりの土器片が出土しているが，下層の竪穴住居跡SI117の埋砂中のものと思われる。東西に木棺部を拡大したところ東側から頭蓋骨を検出し，こ

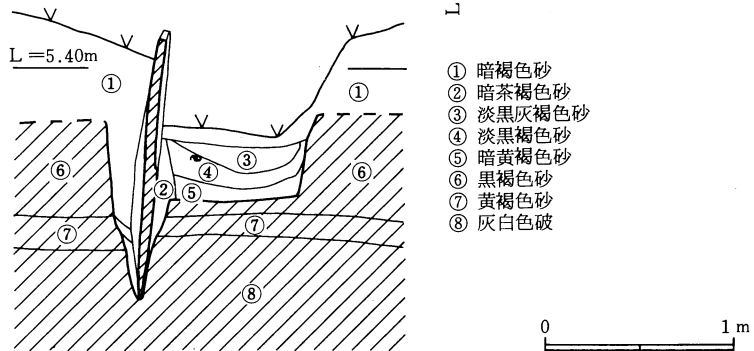


挿図54 47号墳遺構図 (S = 1/80)

こまを木棺部と考えた。頭蓋骨はかなり北にずれて板石のすぐそばにあった。周辺からかなり多数 (15, 6 個体以上) の失塗りをした高坏 (挿図160) が散在して出土しており47号墳に伴うものかとも考えたが、検出レベルが他の土器と殆どかわらず、47号墳に伴うとするとかなり墳丘内の低い位置にあたると考えられる事から下層で検出したS I 117の埋砂中にあったものと考えた。



挿図55 47号墳遺物図
(S = 1/4)



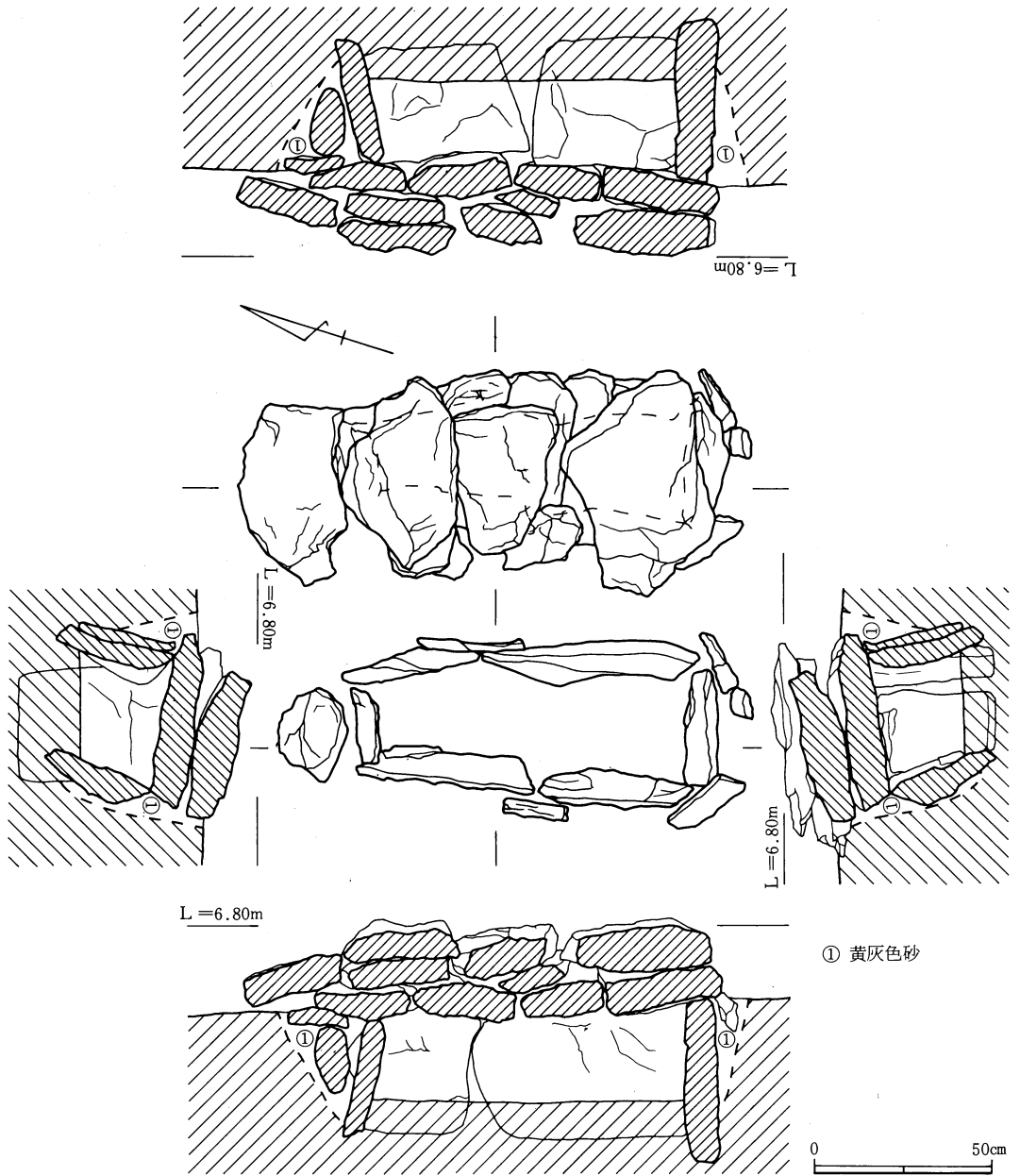
- ① 暗褐色砂
- ② 暗茶褐色砂
- ③ 淡黒灰褐色砂
- ④ 淡黒褐色砂
- ⑤ 暗黄褐色砂
- ⑥ 黒褐色砂
- ⑦ 黄褐色砂
- ⑧ 灰白色破

挿図56 47号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/40)

木棺部は長軸200cm, 短軸80cmで軸方向はN-92°-Eでほぼ東西方向をむく。周溝ははっきり確認できなかったが総径10m規模の古墳になるものと推定する。周溝内にあたる位置で須恵器壺Po1を検出した。47号墳は古墳時代後期前半の築造によるものだと考える。

SX41 (挿図57, 図版11)

SX41は19D地区の東, 1号墳の東側の周溝肩部に位置する石棺墓である。掘り方は明確に検出できなかった。棺は組み合わせの箱式石棺で, 主軸はN-162°-Eを振る。棺の内法は長辺85cm, 南側の小口23cm, 北側の小口18cm, 深さ25cmを測る。東西の側壁はそれぞれ3枚ずつ, 南の小口は3枚, 西は1枚の板石で石棺を作っている。棺材は全て板状安山岩である。北の小口の北側には円礫を立てて小口に添え, その上に平らに板石が置かれていた。蓋石は10枚の板石を二重に, 一部三重に置く。棺内南東部の床面で子供の歯牙が4本検出された。棺内は赤色顔料の塗彩, 粘土による目張りなどはみられなかった。出土



挿図57 SX 41遺構図 (S = 1/20)

した歯の位置から被葬者は頭を南にして埋葬されたであろう。

SX 41は1号墳周溝肩部に周溝に沿うように立地する点、層位的に周溝より新しい点などから1号墳の築造後に、1号墳を意識して作られたと考えられよう。

SX 42 (挿図58, 図版11・22)

SX 42は19D地区の北東に位置し、1号墳周溝の北東肩部に位置する石棺墓である。この地区は北東に高く、南に低い地形で、東はかなり急激に高くなり、消滅している。掘り

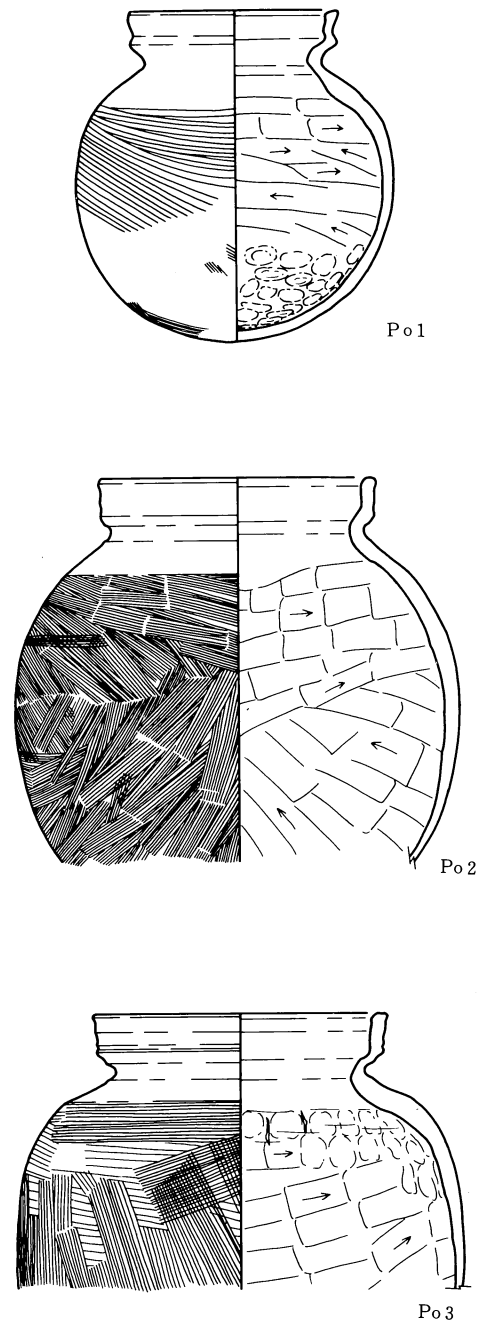
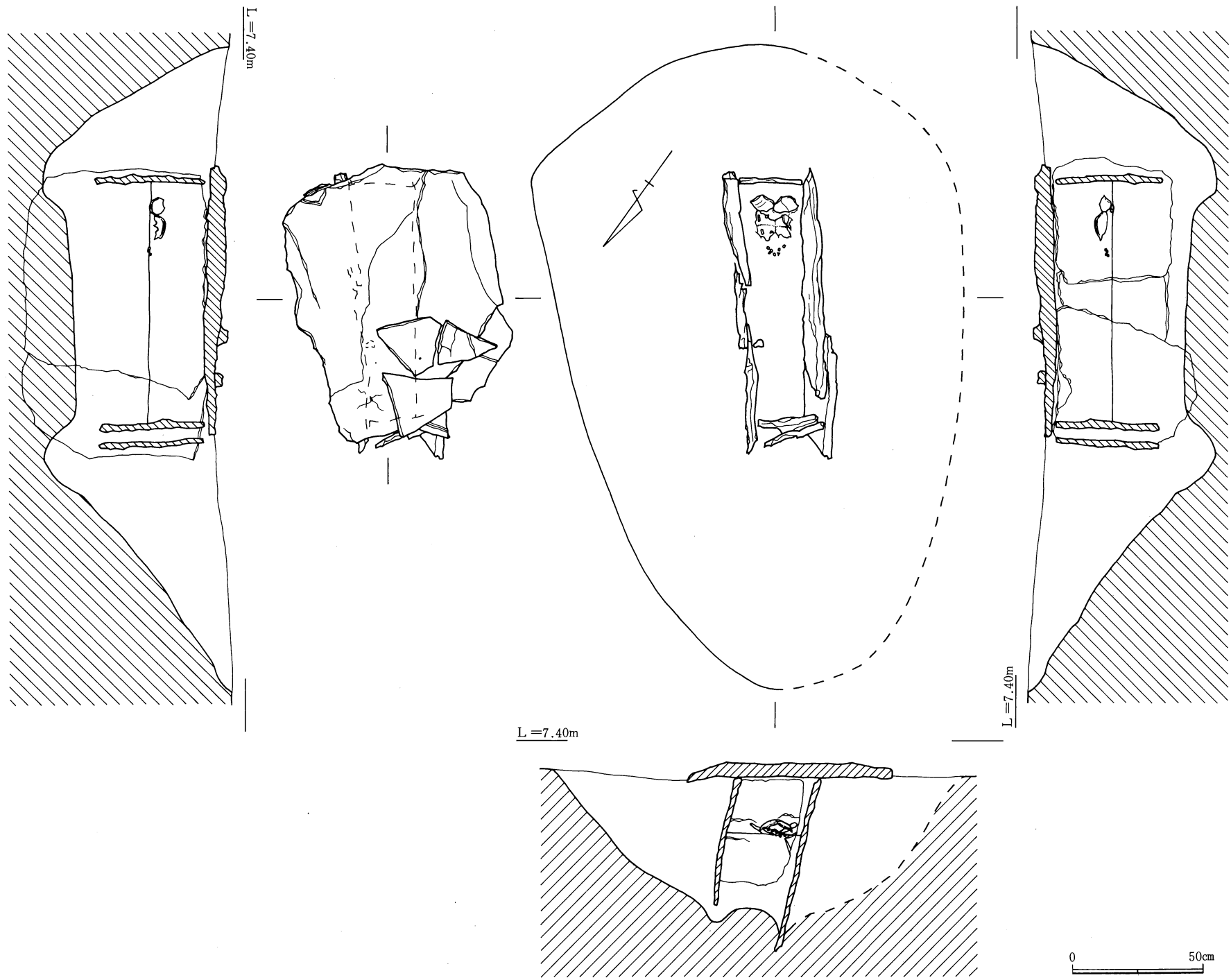


插图58 SX42遺構図 (S=1/20), 周辺出土遺物図 (S=1/4)

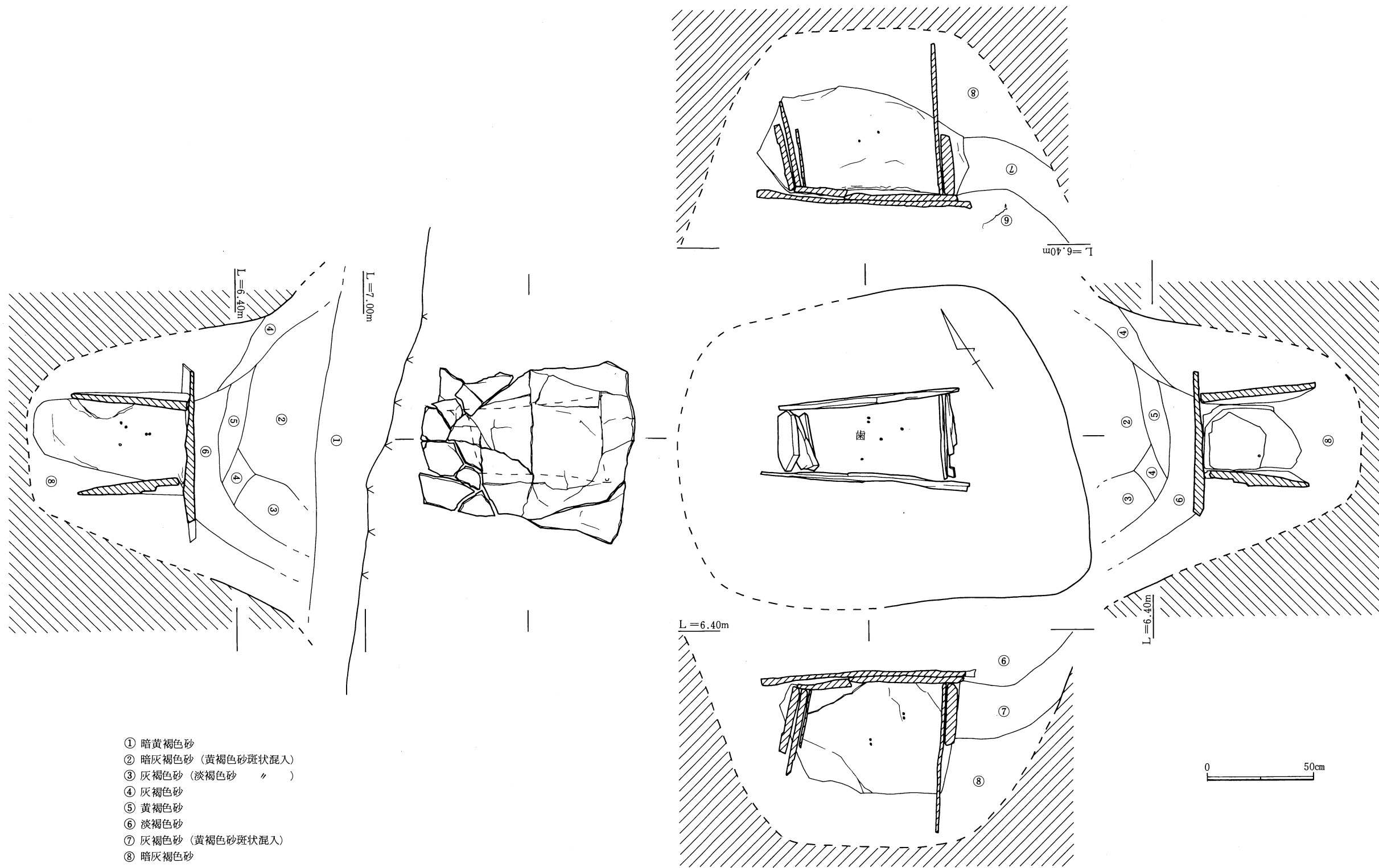


插图59 SX43遺構図 (S=1/20)

方は1号墳の周溝検出の際半分ほど失ったが南側の方がひろい楕円形を呈する。長軸2.45m、深さ0.6mを測る。掘り方の床から側壁、小口の立つ場は10~20cm掘り込まれている。棺は組み合わせの箱式石棺で南側小口に1枚、北側小口で2枚、東側側壁は3枚、西側側壁は2枚の板石を組み合わせ、大きな板石1枚と小さな板石5~6枚の蓋石で覆ったものである。棺の内法は長辺90cm、南側の小口24cm、北側の小口25cm、深さ22cmを測り、主軸はN-140°-Wを振る。棺内は南小口に板石で作られたV字枕をもち、そのすぐ北に頭蓋骨片と歯牙を検出した。赤色顔料の塗彩もなく、粘土の目張りもみられなかった。また副葬品もなく、供献土器も検出されなかった。SX46は1号墳周溝の肩部にあり、周溝が多少埋った時に作られたもので、側板が1号墳側に多少傾いて検出された。SX46が作られた時期は以上の事実より古墳時代中期中葉以後となり、立地場所からこの石棺墓は1号墳を意識して作られたものと考えられよう。付近よりPo1~3が出土している。

SX43 (挿図59, 図版12)

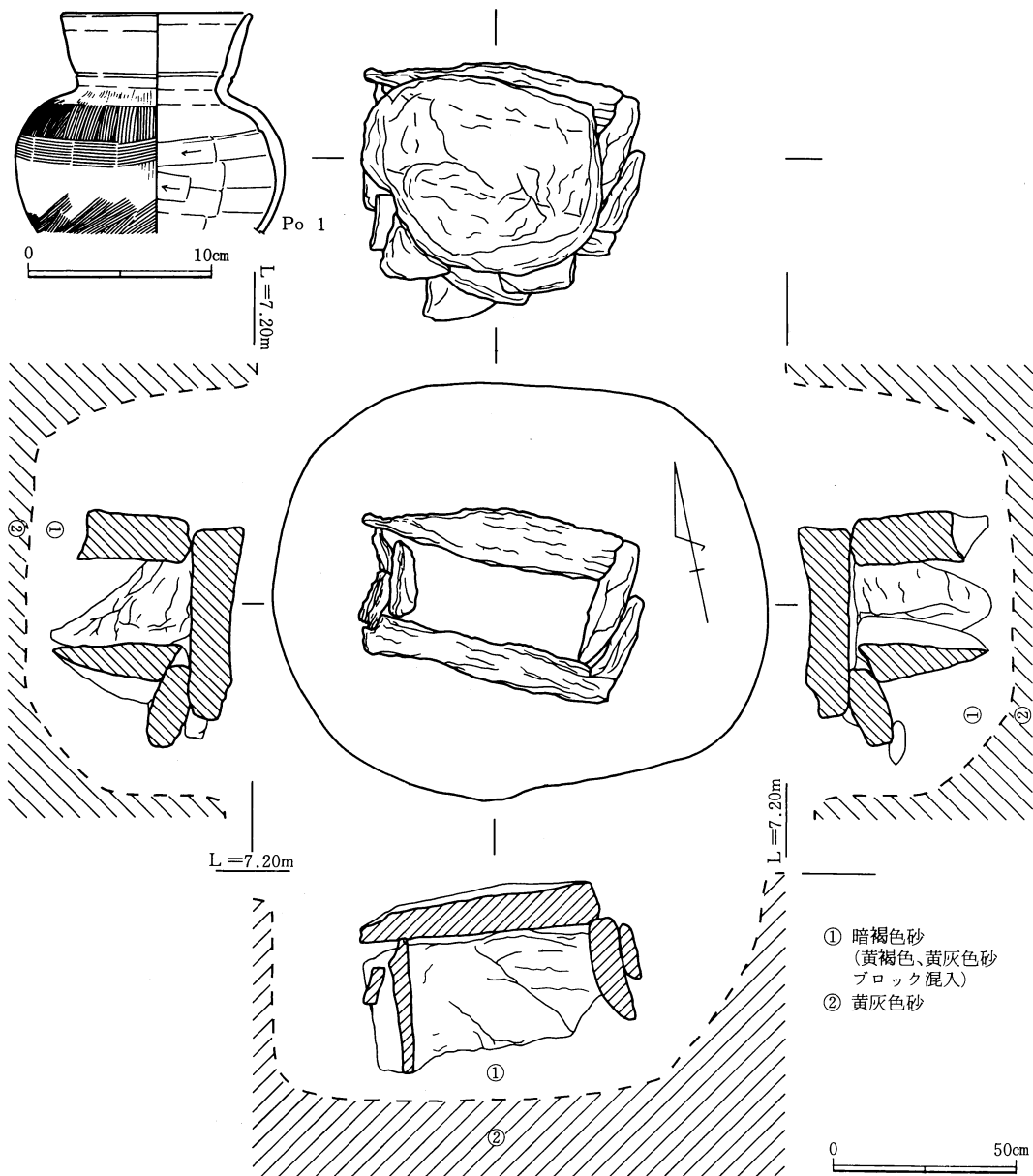
SX43は19E地区の南西にあり、1号墳周溝の北側肩部近くに位置する石棺墓である。長辺1.80m、短辺1.40mの方形の掘り方内に組み合わせの箱式石棺が作られている。蓋石は割れてはいるが1枚の板石を用い、東側の小口は2枚、西側の小口は3枚、西側壁は1枚ずつ板石を用いている。棺の内法は長辺62cm、東側の小口40cm、西側の小口30cm、床面までの深さは30cmを測り、主軸はN-120°-Eを振る。棺内からは歯牙が数点ちらばった状態で検出された。これらの歯は2~3歳の幼児のものである。石棺内側には赤色顔料の塗彩はみられず、粘土による目張りも施されていない。また副葬品・供献土器なども検出されなかった。

歯牙片の散乱は人為的なものと推定され、追葬の可能性もあろう。

SX43はその立地、規模などから1号墳と関係するものと考え、1号墳築造以後に作られたものと推定する。

SX44 (挿図60, 図版12)

SX44は19E地区のほぼ中央にあり、1号墳の北に位置する石棺墓である。長軸1.35m、短軸1.15m、深さ0.6mの楕円形の掘り方内に組み合わせの箱式石棺が設けられている。東側の小口は2枚、西側の小口は3枚、北と南の側壁は1枚ずつ、やや厚い板石を用いて構成されている。南側の側壁の上面には小さな石材を5枚積み、蓋石(1枚)を安定させている。棺の内法は長辺50cm、東側の小口22cm、西側の小口21cmを測り、主軸はN-117°-Eを振る。深さ不明。副葬品はない。赤色顔料などの塗彩はみられなかったが、石材間に粘土粒がみられたことから粘土による目張りが施されていたと思われる。周辺より長頸壺(Po1)が出土しているが、詳細は不明である。棺の東側の小口の作りが丁寧なため埋葬時に頭位を東に向けたと思われる。

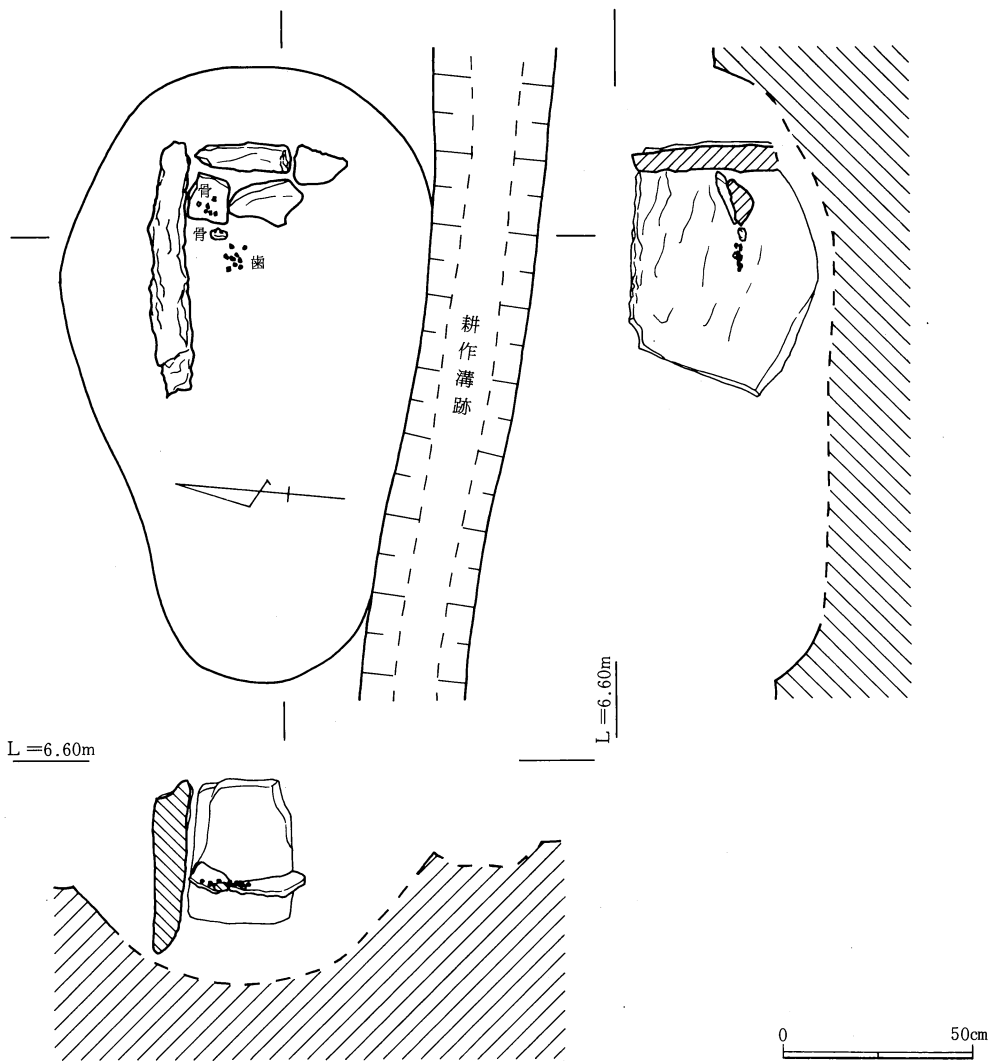


挿図60 SX 44遺構図 (S = 1/20), 周辺出土遺物図 (S = 1/4)

1号墳の周構から3.2m離れてはいるものの後に述べるSX45と同様、棺の東側に頭がくる事、周溝に沿って作られている事、小型である事などから1号墳にともなう小型の石棺と考え、築造時期は1号墳が作られた後、5世紀後半代以後のものとする。

SX 45 (挿図61, 図版13)

SX 45は20E地区の東側にあり、1号墳の北に位置する石棺墓である。長軸1.63m、短軸1m (推定)、深さ0.5m (推定) の東側がややふくらんだ楕円形の掘り方内に棺と思われる板石を検出した。北側に1枚、東側に2枚板石が立っており、それぞれ北側の北壁、



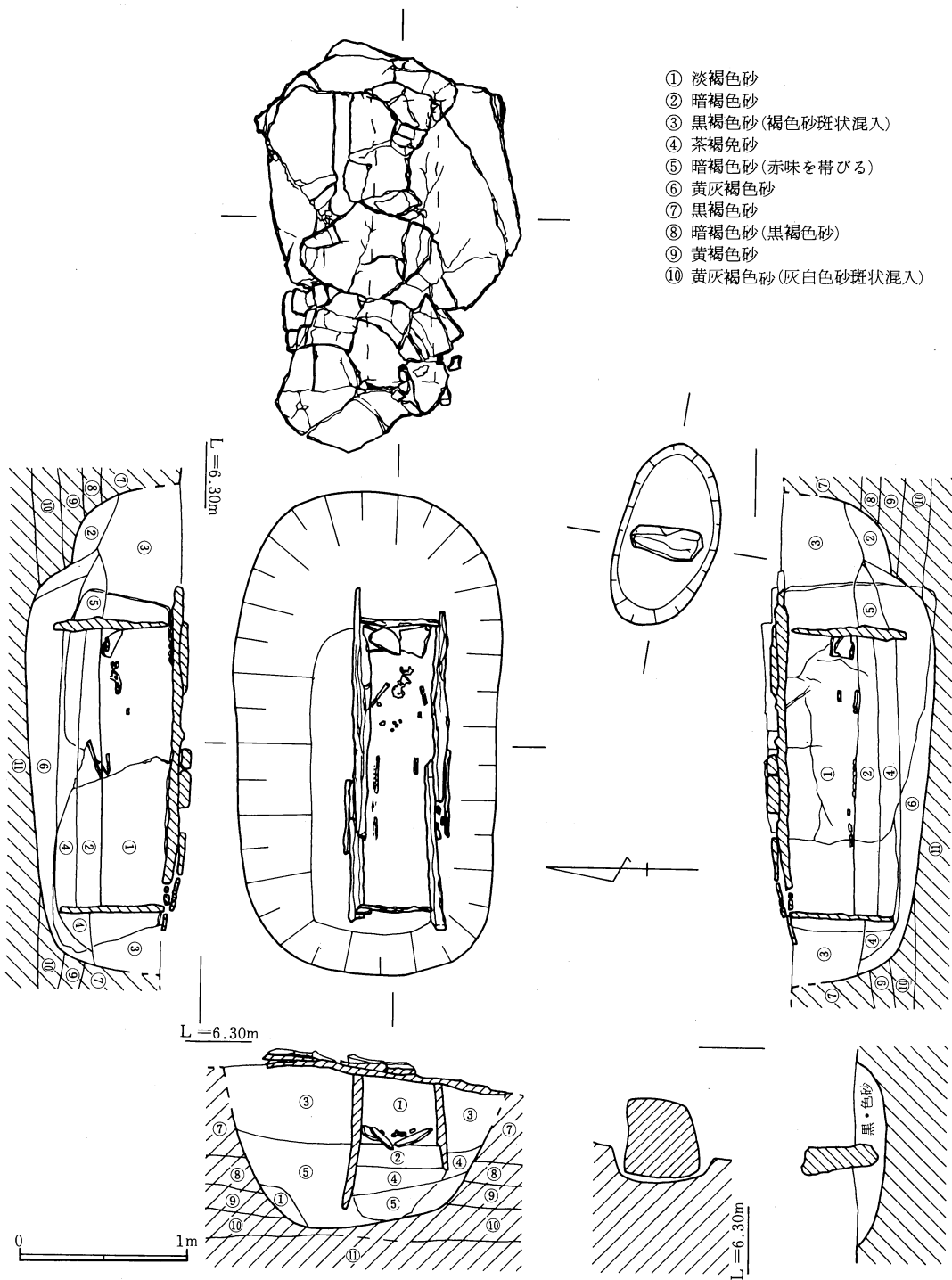
挿図61 SX 45遺構図 (S = 1/20)

東側の小口にあたると思われる。主軸はN-85°-Eを振る。南側の側壁、西側の小口、蓋石の石材は検出できなかった。棺内には東の小口側にV字状石枕が検出された。石枕をつくる北側の石上と石枕の西からそれぞれ骨片と歯牙が出土した。棺内には副葬品はなく、赤色顔料などの塗彩はみられなかったが、北側の北壁は赤い石を用いていた。SX 45は黒砂が消失するラインより2 m西側にあり、墓が作られたときには黒砂層内にあったものが中世以降の風雨で削られ、棺が現れ、後に白砂が覆ったものと推定する。その後耕作でも上層は荒されているが、棺の大部分が失なわれたのは近世以前と考える。

SX 45は1号墳の周溝から4.4 m離れているが、SX 44と同様1号墳にともなう小型の石棺と考え、築造時期は1号墳が作られた後と考える。

S X 46 (挿図62・63, 図版13)

S X 46は20E地区にあり, 1号墳の北西に位置する石棺墓である。この地区は東に高く, 南西に低い地形で, 黒砂層はやや浅い。掘り方は長軸3.9m, 短軸1.5m, 深さ0.9mの楕



挿図62 SX 46遺構図 (S=1/40)

円形で、東側の小口の部分だけに一部2段掘りが見られる。棺は組み合わせの箱式石棺で、両小口に1枚、両側壁に3枚ずつの石を用いて作られており、両小口と蓋石の間には粘土の目張りが残存していた。検出時蓋石は何枚もの板石に分かれていたが、剝離したものがほとんどなので埋葬時は1枚と考えられよう。棺は長辺164cm、短辺42cm、深さ（蓋石から床まで）40cmを測り、主軸はN-90°-Eを振る。棺内の東小口側にV字状の石枕が置かれている。材質は棺材・枕とも板状安山岩であろう。棺内は赤色顔料が全体に塗られていた。赤色顔料は遺存状態が良く、塗る時に用いられていたハケの跡も明瞭に見ることができた。床は⑥・④・②層を盛り作られている。床面直上に頭蓋骨と四肢骨の一部を検出した。頭蓋骨は一部西の方に散乱していた。棺内に副葬品はなく、埋砂内に土器片が多少見られた。また周辺からも甕（Po1）等土器片が出土した。

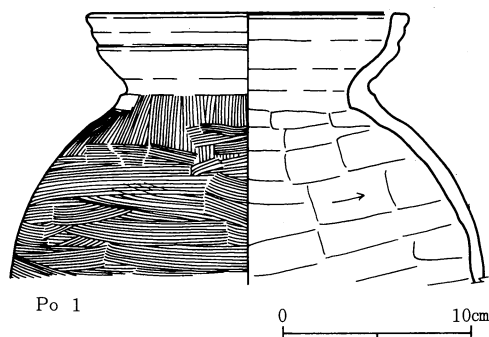
S X 46の南東に立石を検出した。この立石は46×40×16cmの大ききで、110×60-20cmの土壌の中央に立てられていた。この石の他に石はなく、石は2面に赤色顔料がみられ、掘り方内にも赤色顔料が混っていた。掘り方内の中央に石が立てられている事、他に石の抜きとり跡が見られない事から石棺ではないと考える。S X 46に関係する可能性もあるが、軸がわずかにずれる事などからS X 46との関係は不明である。

S X 46と南東の立石遺構は出土遺物がなく時期を決めかねるが、長瀬Ⅱ期の住居跡S I 114を切っている事、黒砂層中の石棺墓である事などから古墳時代中期後半～後期に作られたものと思われる。1号墳とは独立した単独の箱式石棺墓であろう。

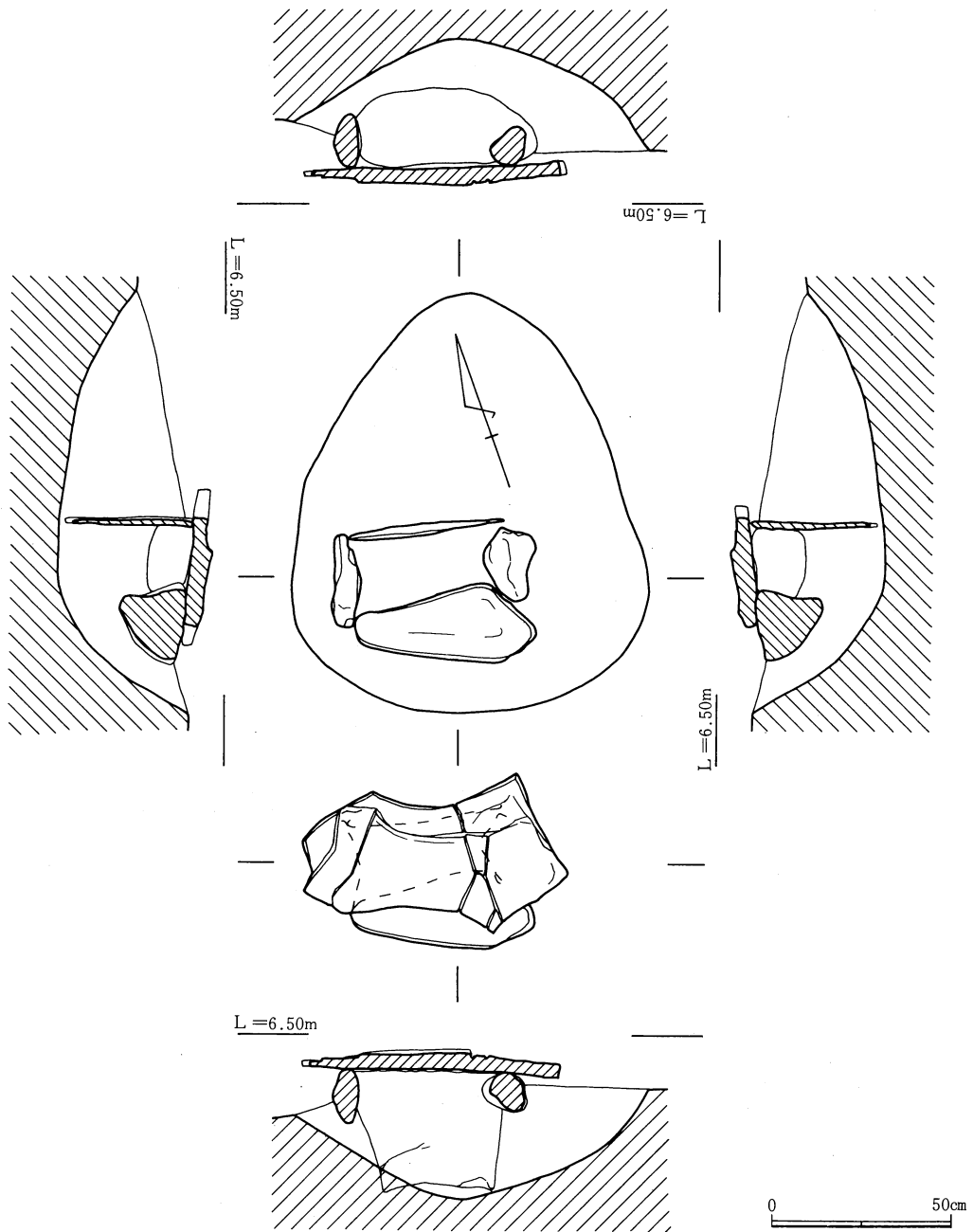
S X 48（挿図64、図版13・14）

S X 48は19E地区の南西隅にあり、1号墳の北方に位置する石棺墓である。長軸1.16m、短軸1.0m、深さ0.4mのやや歪んだ楕円形の掘り方内に箱式石棺が設けられていた。東西の小口と南側の側壁の石材は河原石で、北側の側壁と蓋石には板石が用いられている。棺の内法は長辺35cm、西側の小口は20cm、東側の小口は15cmを測る。非常に小形の石棺である。主軸方向はN-106°-Eを振る。棺内に遺物はなく、赤色顔料の塗彩もみられない。供献土器なども検出されなかった。

非常に小形であり、骨片も検出されなかったため実際に埋葬されたかどうか不明である。1号墳の周溝外肩から1.6m外に位置するが、周溝に沿っている事から1号墳に伴う小形石棺と考え、1号墳築造期以降のものであろう。



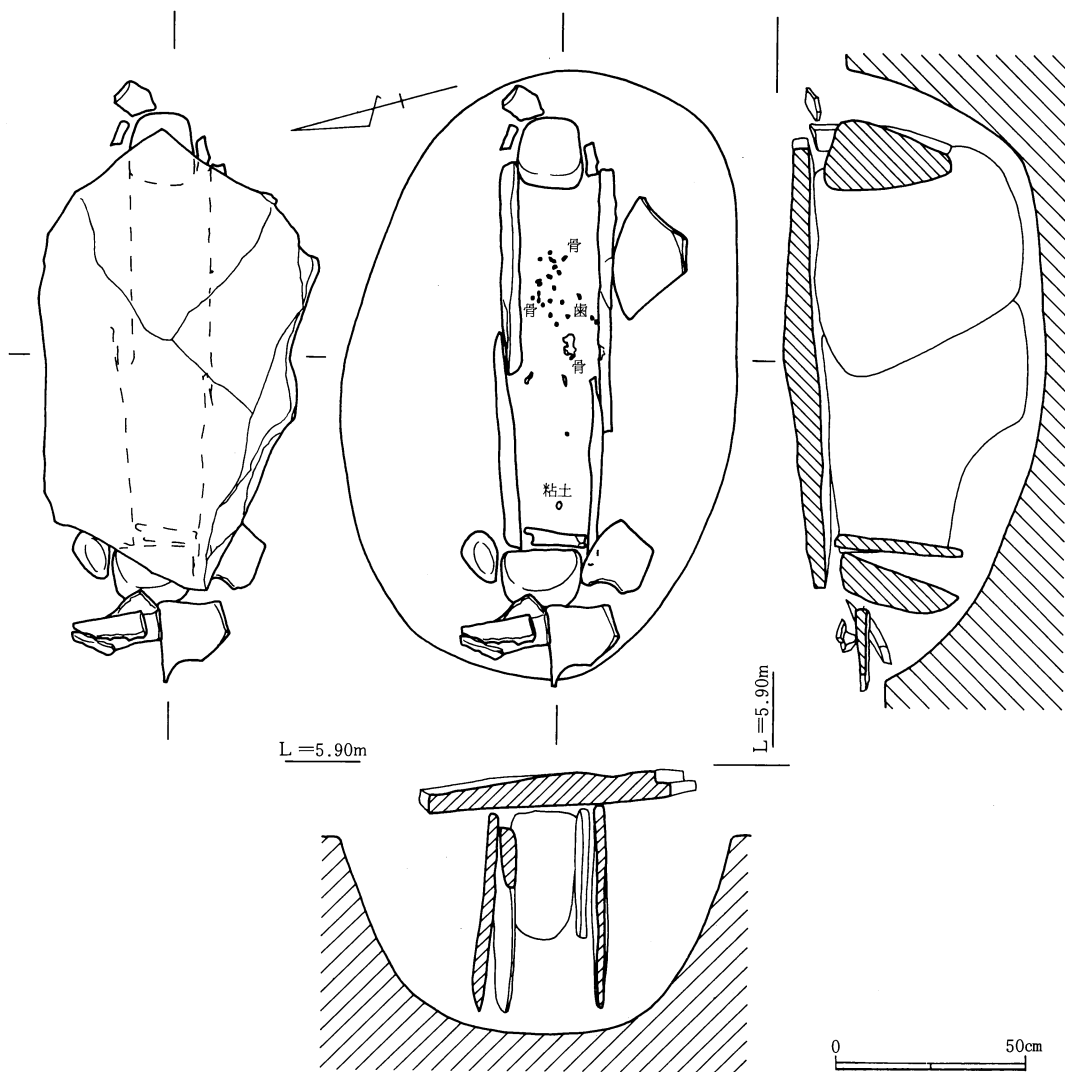
挿図63 S X 46周辺出土遺物図（S = 1/4）



挿図64 SX 48遺構図 (S = 1/20)

S X 49 (挿図65, 図版14)

S X 49は19E地区の南にあり、1号墳北東側の周溝内に位置する石棺墓である。周溝内の第18層上面から掘り込まれて作られていた。長軸1.6m、短軸1.0m、深さ0.6mを測る楕円形の掘り方の中に河原石と板石を組み合わせた細長い石棺墓がある。東側小口は細長い河原石をたてておき、その両側に細長い小さな板石を添える。西側の小口は内側に板石、



挿図65 S X 49遺構図 (S = 1/20)

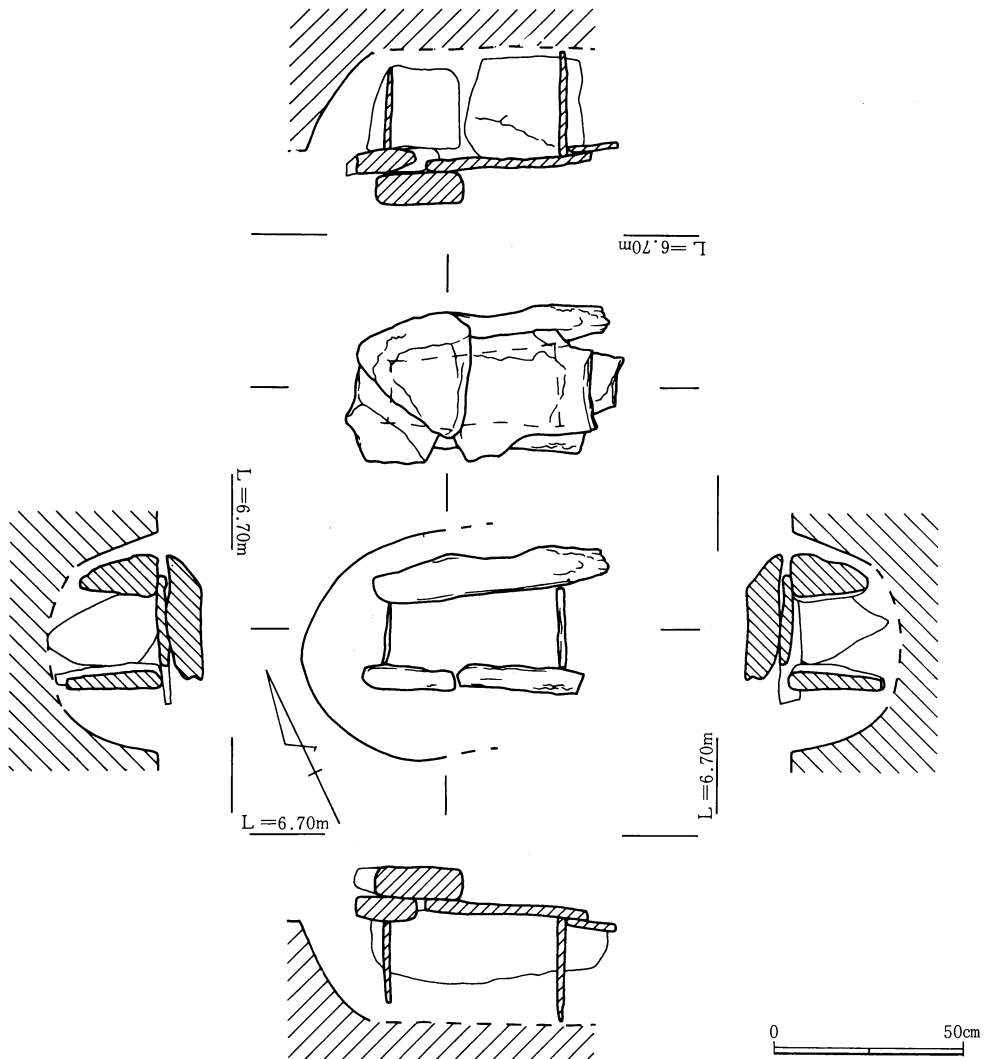
その外に割った河原石を添えている。側壁はそれぞれ2枚ずつで構成される。両小口と南側には側板の高さを揃えるための板石、河原石を置く。蓋石は1枚で、他の石棺の蓋石のように割れていなかった。石棺の内法は長辺91cm、東側小口21cm、西側小口18cm、深さ24cmを測る。主軸はN-104°-Eを振る。棺内床面西側には粘土が、中央部には骨片、中央やや東には歯牙片が検出された。床面で検出された粘土は、側壁の上部でも多少検出されたことなどから粘土床ではなく粘土の目張りが落ちたものであろう。棺内は赤色顔料の塗彩もなく、副葬品もみられなかった。棺内には6歳未満の幼児と成人の男性の2体分の人骨が確認されている。石棺の幅は狭く、また歯牙、頭蓋骨片の位置が自然ではないので追葬だと推定される。しかし、追葬時に骨を片付けたのか、骨を直接埋納したのか不明である。

S X 49の作られた時期は周溝内の第18層上面から掘り込まれていることから、1号墳より

新しく、古墳時代中期末から後期頃のものとする。

S X 50 (挿図66, 図版14・15)

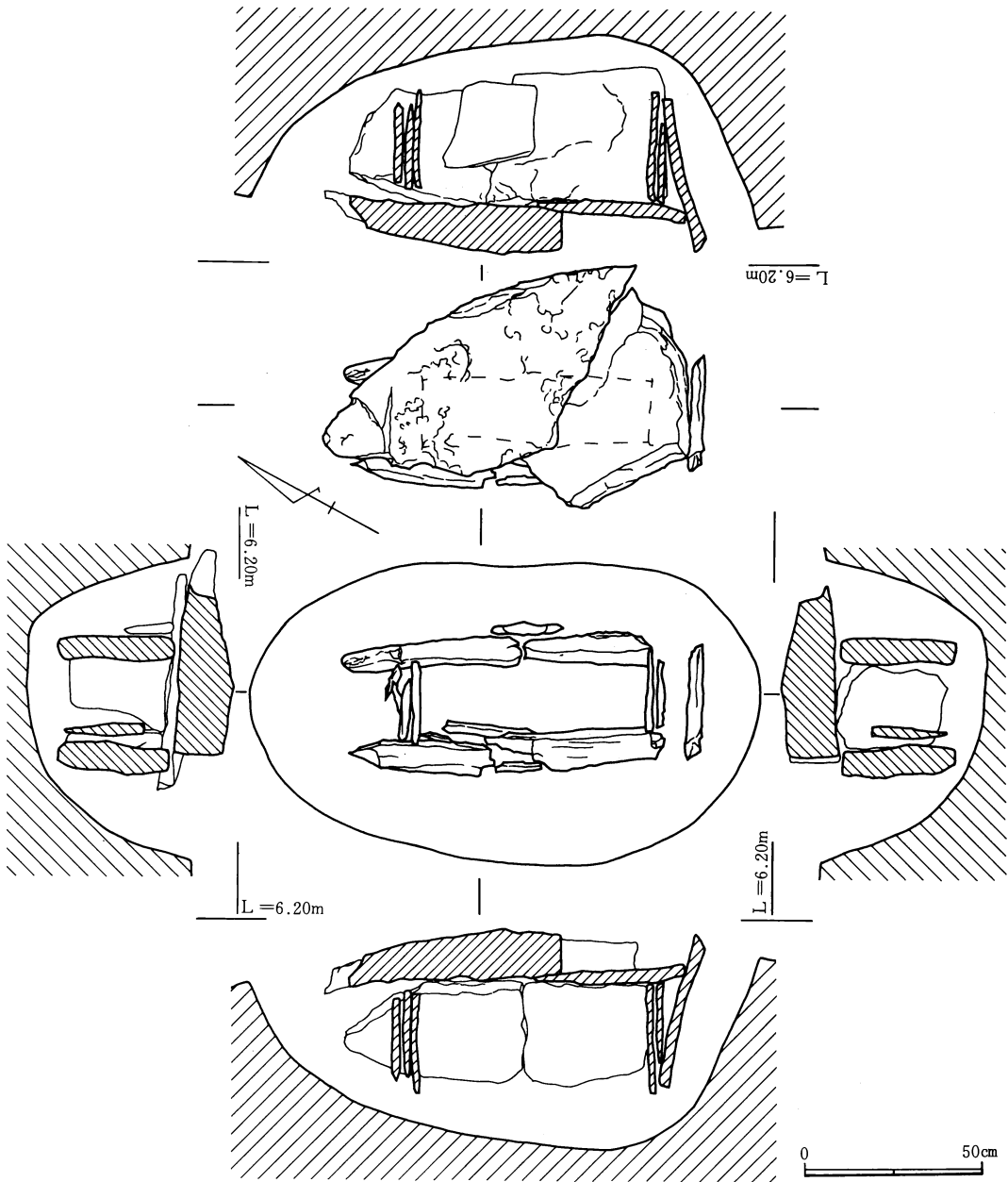
S X 50は19E地区の南にあり、1号墳周溝の北側肩部に位置する石棺墓である。掘り方は半分失われたが、短軸0.70m、深さ約0.25mを測る墓壇内に組み合わせの箱式石棺が設けられていた。両小口は1枚ずつ、北側の側壁は1枚、南側の側壁は2枚、蓋石は3枚の板石を用いて構築されている。東側の小口には小口石の外に平らに板石を置き、蓋石を安定させている。棺の内法は長辺46cm、東の小口21cm、西の小口16cm、(深さは不明)を測り、主軸はN-115°-Eを振る。棺内からは歯、骨、副葬品とも検出されなかった。また棺内に赤色顔料などの塗彩もみられなかった。東側の小口が広いことから東側を頭位としたと推定される。1号墳周溝肩部に位置し、層的に1号墳より新しいものである。



挿図66 S X 50遺構図 (S = 1/20)

S X51 (挿図67, 図版15)

S X51は19D地区の北東にあり, 1号墳北東, 周溝の底に位置する石棺墓である。長軸1.43m, 短軸8.3m, 深さ0.54mの楕円形の掘り方内に組み合わせの箱式石棺が設けられていた。棺は北側小口4枚, 南側小口3枚, 西側側壁3枚, 東側側壁2枚の板状の石材で作



挿図67 SX 51遺構図 (S = 1/20)

られている。南側の小口石3枚のうち1枚は斜めに立っており、蓋石よりも外に出ている。棺の内法は長辺63cm、南側の小口18cm、北側の小口16cm（深さは不明）を測り、主軸はN-155°-Eに振る。棺内に遺物はなく、赤色顔料などの塗彩、粘土なども見られなかった。南側の小口の方が広く丁寧な作り方なので被葬者の頭位は南に向けたと推定される。

1号墳の周溝の底に位置すること等より1号墳に伴う小型の石棺と考え、1号墳が造られた後、5世紀後半以後のものと推定する。

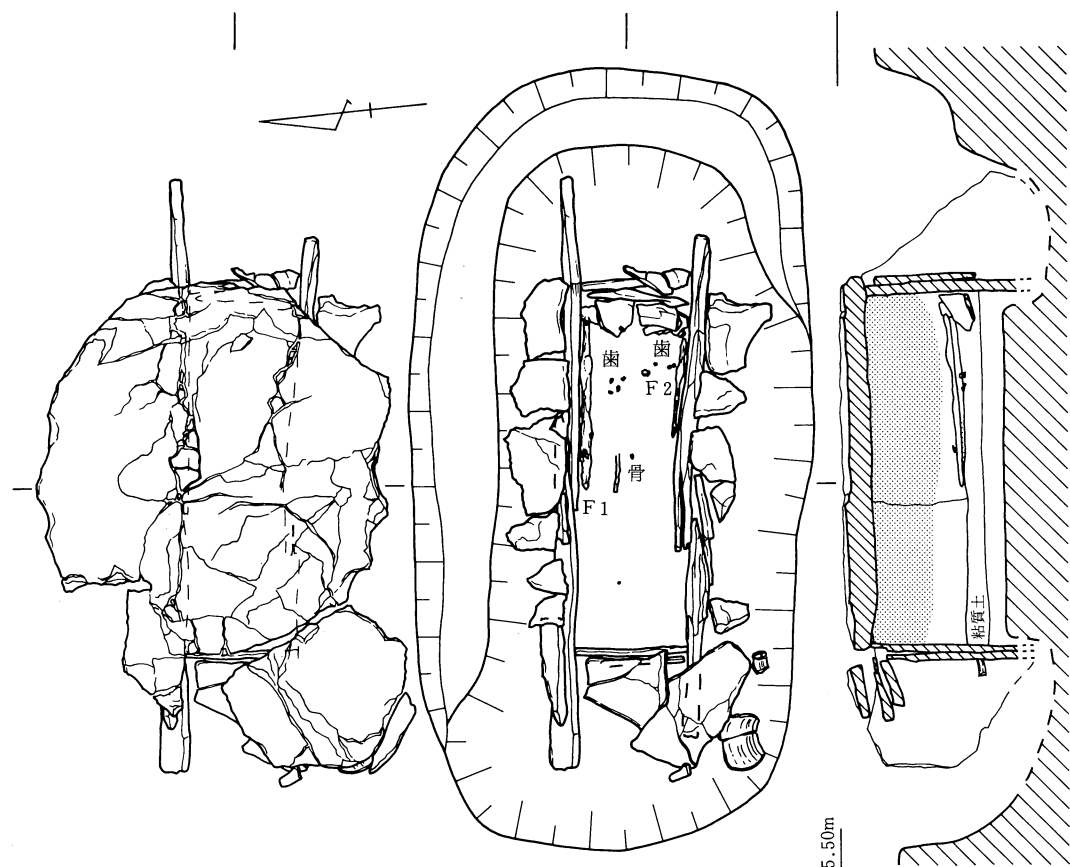
S X52（挿図68，図版15・16・21・22）

1号墳の西，S X47の南東に位置する石棺墓である。この地区の黒砂層は深く、石棺そのものが黒砂層内にある。棺の掘り方は黒砂の硬さとわずかな色調の変化で認められ、小判状で一部2段掘りの掘り方が検出された。長軸4.1m，短軸2.2mを測る。棺の蓋石は大小2枚の板状の石で、側壁は北側，南側とも2枚ずつ用いて中央部で重ね，東西の小口はそれぞれ2枚の板石を重ね合わせて作る。石棺の内法は長辺186cm，短辺は東側の小口で59cm，中央部で50cm，西側の小口で51cmを測り，主軸はN-95°-Wを振る。両側壁と西小口の外側に20×30cm程度の板状の石が敷きつめられたように検出された。これらは棺の側壁の保護や側壁の高さを合わせる為のものであろう。棺内は東小口の内側にV字状石枕が置かれており，1枚の板石を割って作られていた。東西の両小口，北壁，南壁（東部のもの）の内面にはベンガラが塗彩されていた。V字状石枕と同じ高さで5cmの厚さの粘土質の砂が敷かれ，固くしまった層が検出された。この層の直上面で大腿骨・肋骨・上腕骨・歯牙を，また北側壁の下に長さ92cmの鉄刀（F1）1振り，南側壁の下に長さ54cmの鉄剣（F2）1振り，鉄刀直上に鉄鏃（F3～7）5本を検出した。この粘土層はV字状石枕を伴う時期の床面と考えられる。赤色顔料が塗彩された時期も同じと考えた。

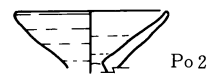
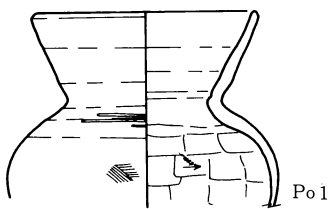
V字状石枕の13.5cm下に1点ではあるが歯が検出された。また棺内からは多量の土器小片（3～6cm程度）が，副葬品の上層からは鉄鏃（F8）が検出された。棺内からみつかった多量の土器片は通常の状態では入ることは不可能なため，何らかの人為的な行為が加えられたと思われる。少なくとも1回以上の追葬が行なわれている。S X52は出土遺物などから古墳時代中期後半から後期前半代の遺構と考える。

S X53（挿図69～71，図版16・17・22）

S X53は19D地区の北東にあり，1号墳北東の周溝内に位置する。普通円筒埴輪2本の口縁部を合わせた合口式円筒埴輪棺墓である。長軸1.36m，幅0.5mの隅丸長方形の掘り方に棺がおかれ，棺としての全長は103cm，棺の内幅は最大部（H2の口縁部内径）で23cmである。主軸方向はN-149°-Eで周溝の弧の線に沿っている。棺の小口は各々1枚の板石でふさがれている。その他に合口部分を朝顔形円筒埴輪（H3）の口縁部（全体を4つに割った内の2つ）で，透し穴をH3の残り2点及び普通円筒埴輪2個体（H4・5）の

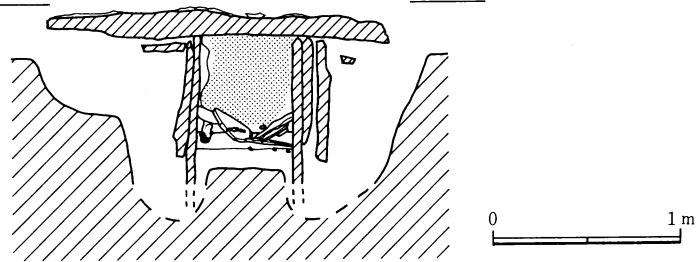


赤色顔料塗彩

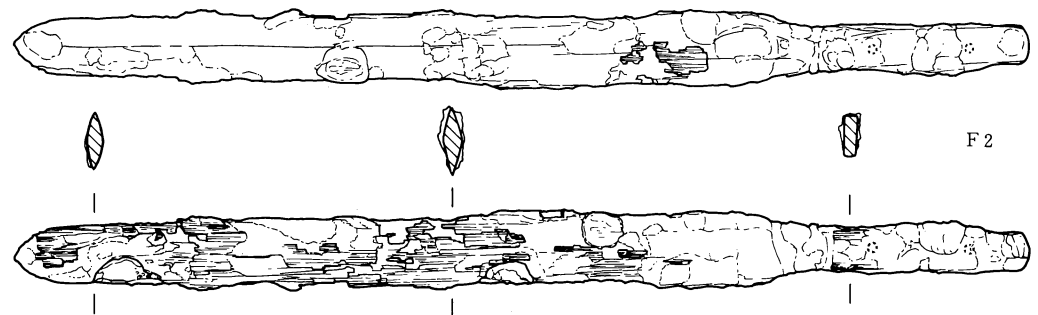
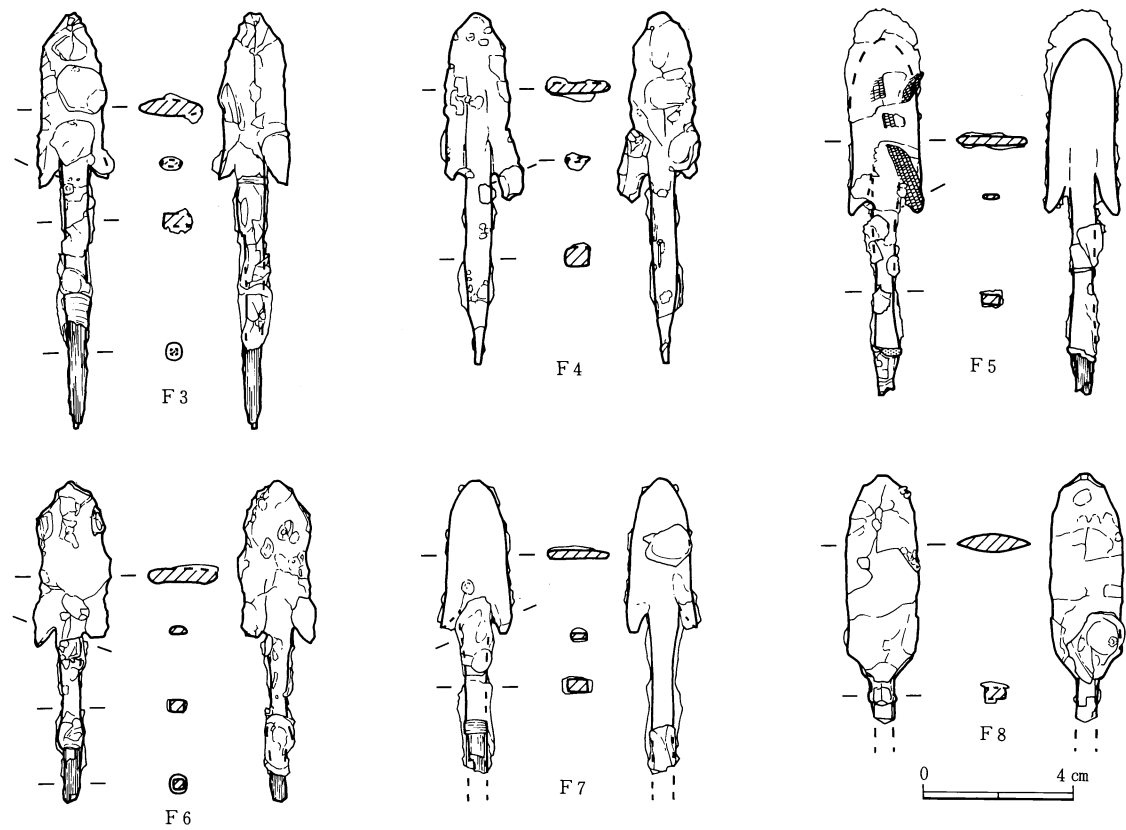


0 10cm

L=5.50m



0 1m

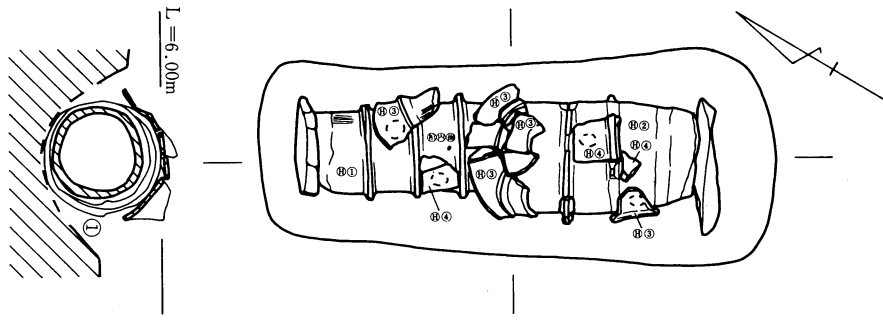


F1

F2

0 10cm

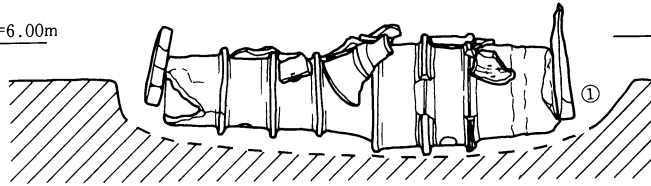
挿図68 SX52遺構図 (S=1/40), 遺物図 (土器S=1/4, 鉄刀・鉄剣S=1/4, 鉄鏃S=1/2)



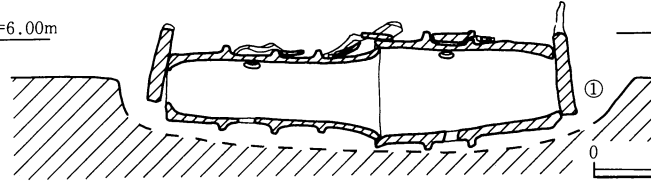
L = 6.50m



L = 6.00m



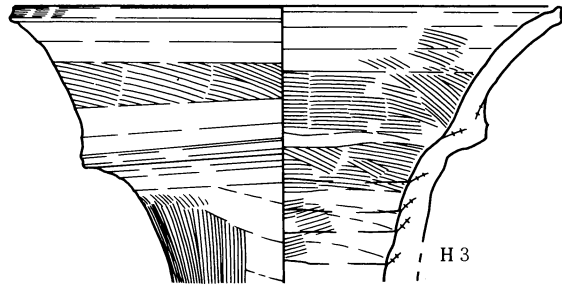
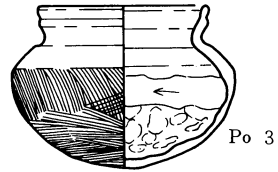
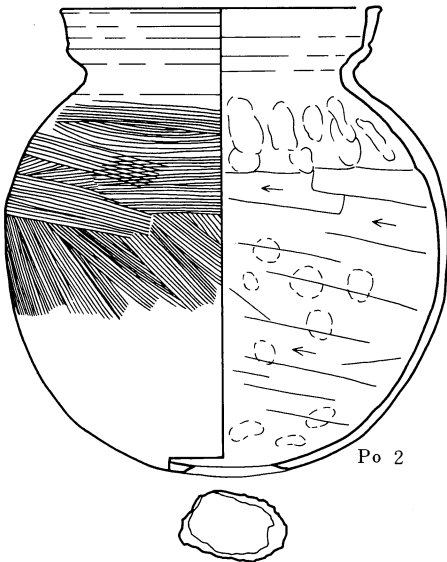
L = 6.00m



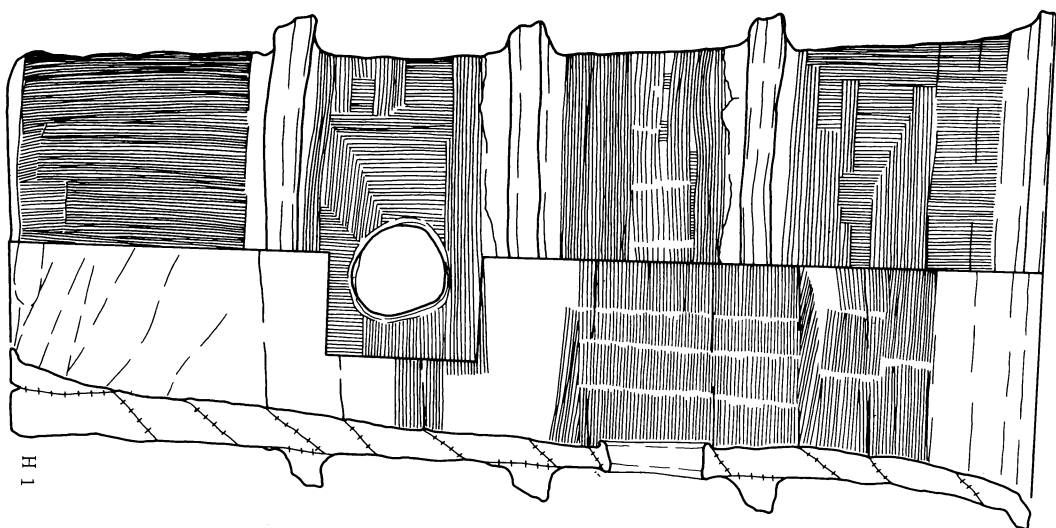
① 茶褐色砂



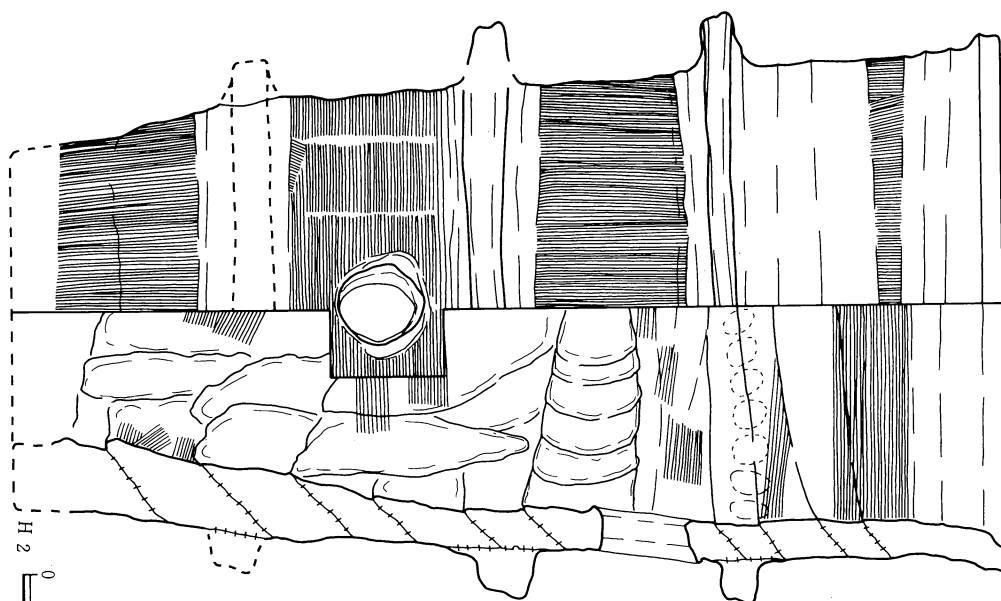
挿図69 SX 53遺構図 (S = 1/20)



挿図70 SX 53遺物図その1 (S = 1/4)



H 1



H 2



挿図71 S X 53遺物図その2 (S = 1/4)

破片で塞いでいた。棺を構成する2本の円筒埴輪は口径に差があり、H1はH2の中に口縁端部が入りこんでいる。当遺跡の他の例でもこのように口径差があるものを用いている例があるが、意識的に行なわれたものかどうか判断できない。H1は底部が斜めに欠け、H2は底部が全体に欠損していた。故意に欠いたものではなく、欠けたものを利用したものと考える。両方とも透し孔の1つはほぼ真下にあり、それには蓋がされていなかった。掘り方底部には何も施設はなかった。

棺中央部やや北よりのH1第3段にあたる部位から、7～8才の幼児の下顎・歯片が検出された。副葬品は検出できなかった。

上面10cmの位置で土師器3点P01～3（挿図51参照）を検出した。このSX53に供献されたものとする可能性もあるが判断できない。

SX53は1号墳の周溝内のやや外よりに周溝に沿って位置する事などから、1号墳に伴う埋葬施設であると判断する。利用された埴輪は5世紀中葉のものと考えられる。SX53が設けられた時期は5世紀後半代と推定する。

SX54（挿図72・73、図版17・23）

SX54は20D地区のほぼ中央にあり、1号墳東側周溝内の底面に近い所で検出した。やや小さい普通円筒埴輪（H1）を単独で棺に利用した円筒埴輪棺墓である。棺の覆いは基本的には⑦～⑫の6枚の板石及び河原石を棺の四方に側壁状に立てならべる事で構成されている。即ち単に小口にあたる円筒埴輪の両端を板石で塞ぐのではなく、石をこの棺の周囲に立てて一空間を作っているのである。逆に言えば石で構成された一空間中に埴輪の棺を埋置していると言える。埴輪が棺であるのだから、この石の空間は棺を入れるための施設であり、石槨（もしくは石室）と考えねばならないだろう。この箱形の石槨の上に③～⑥の4枚の板石及び河原石をのせ蓋としている。中心となるのは⑤であって、③・④・⑥は余地を埋める感じでつまれている。さらにその上に両端の対角線的位置に丸い河原石2個①・②を置いている。①・②は蓋としての機能は殆どない。このような石による囲いの形状は外見的には箱式石棺と殆ど差がないが、この場合明らかに棺としての埴輪を覆う施設であるから、棺の外護施設として箱式石槨とでも仮称すべきものをもつと言うべきであろう。棺の下には何らの施設も確認できなかった。

棺に利用された普通円筒埴輪（H1）は口縁部及びもう一段のみで下は全く欠けが、他の例と同じように3条の突帯をもつ円筒埴輪であろう。H1の棺としての規模は長軸30cm内径15cmで成人の直接埋葬は全く不可能である。棺内外からの遺物は確認できなかった。

SX54は長軸87cm、短軸80cmのほぼ円形の土壌内に作られている。そのすぐ北にやや大きい板石⑬があったが、層的にはこのSX54の掘り方の上やや重なる。SX54の上のせられていたものが転落移動した可能性もあるが判断できない。

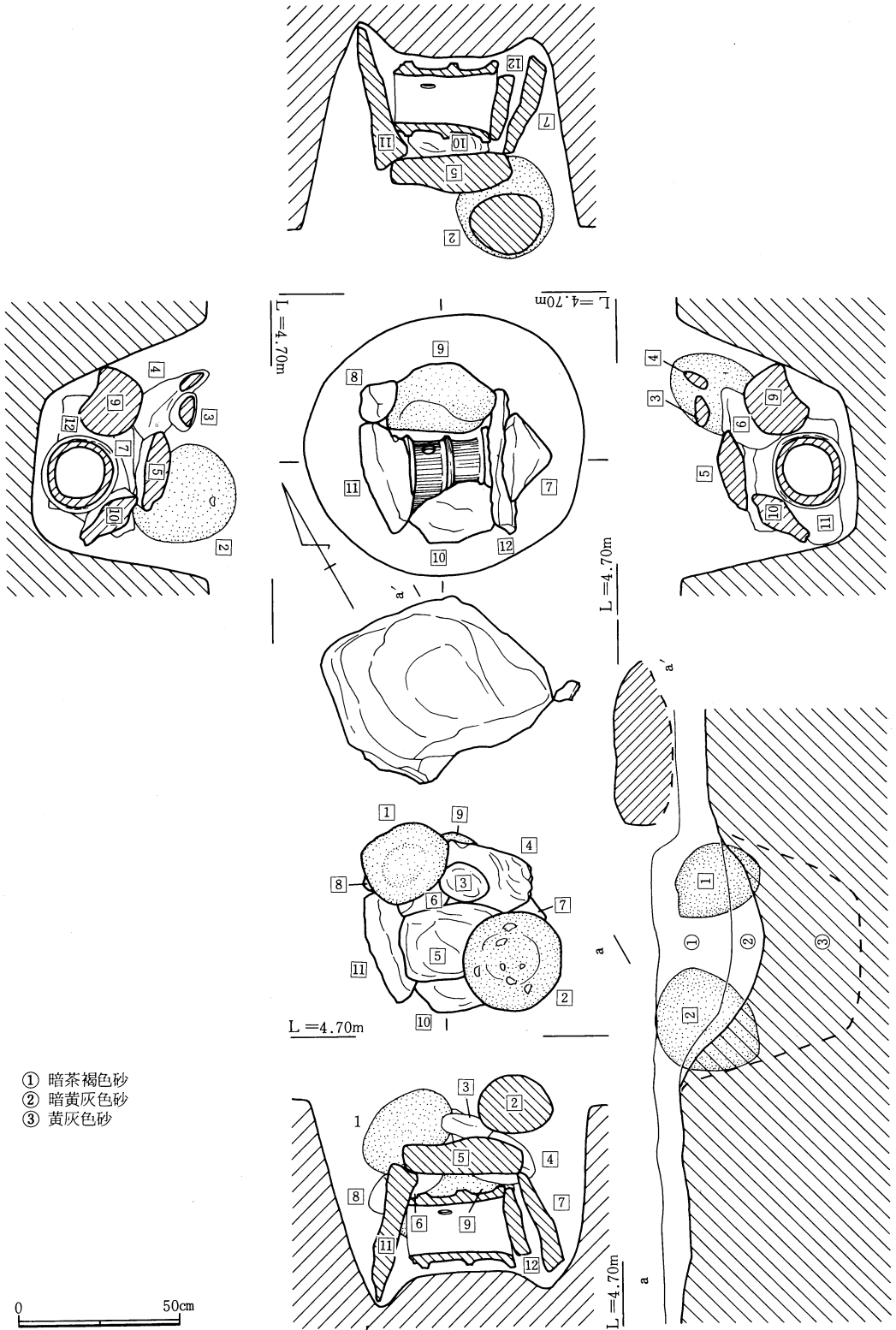
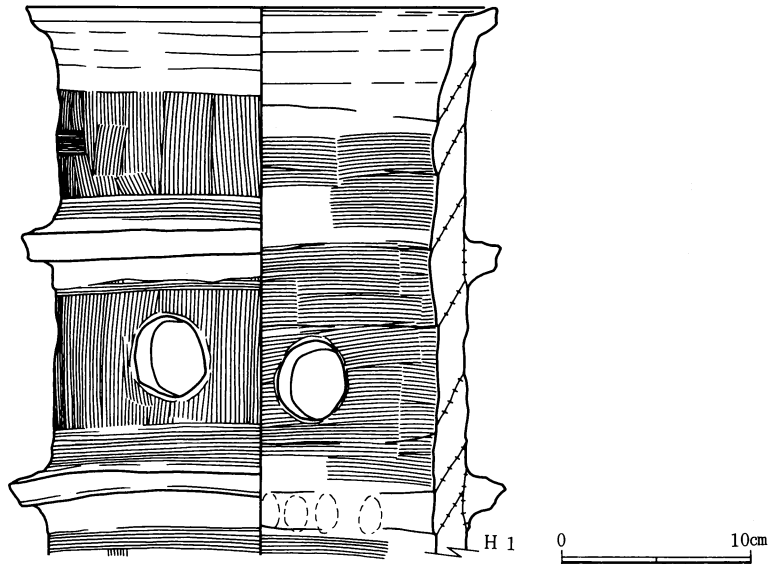


插图72 SX 54遺構図 (S = 1/20)



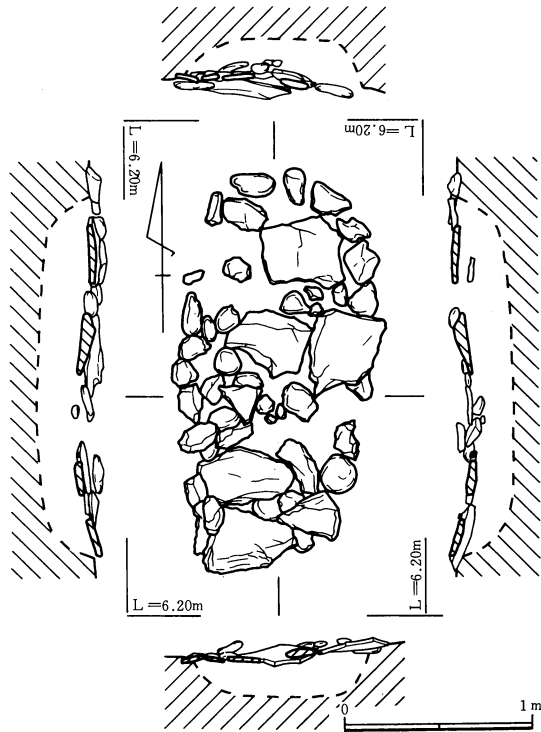
挿図73 SX 54遺物図 (S = 1/4)

SX 54は主軸方向がN-120°-Eで、1号墳の中心主体である第1埋葬施設のほぼ延長上に軸を同じくして位置する。この同じ軸上にSX 52も位置するが、周溝内に位置し埴輪棺墓は単独墓としては殆ど認められない事も考え、1号墳に伴う埋葬施設として1号墳築造以後に作られたものと判断する。H 1の時期は5世紀中葉と考えられ、SX 54はそれ以降(5世紀後半代)に作られたものだろう。

石蓋土壙 (挿図74, 図版17)

19Dの南にあり、1号墳の南東の周溝に位置する石蓋土壙である。長軸1.9m、短軸0.9m、深さ20cm(推定)の土壙に河原石や板石を用いて蓋をしている。全体の大きさは長軸2.2m、短軸1mの楕円形を呈し、主軸はN-8°-Eを振る。土壙内北側から歯牙片を数点検出した。他に供献土器、副葬品などはみられなかった。

この石蓋土壙は周溝内に作られている事(周溝が50cm位埋った高さから検出された)から1号墳に伴うものと考え、古墳時代中期以後のものとして推定する。



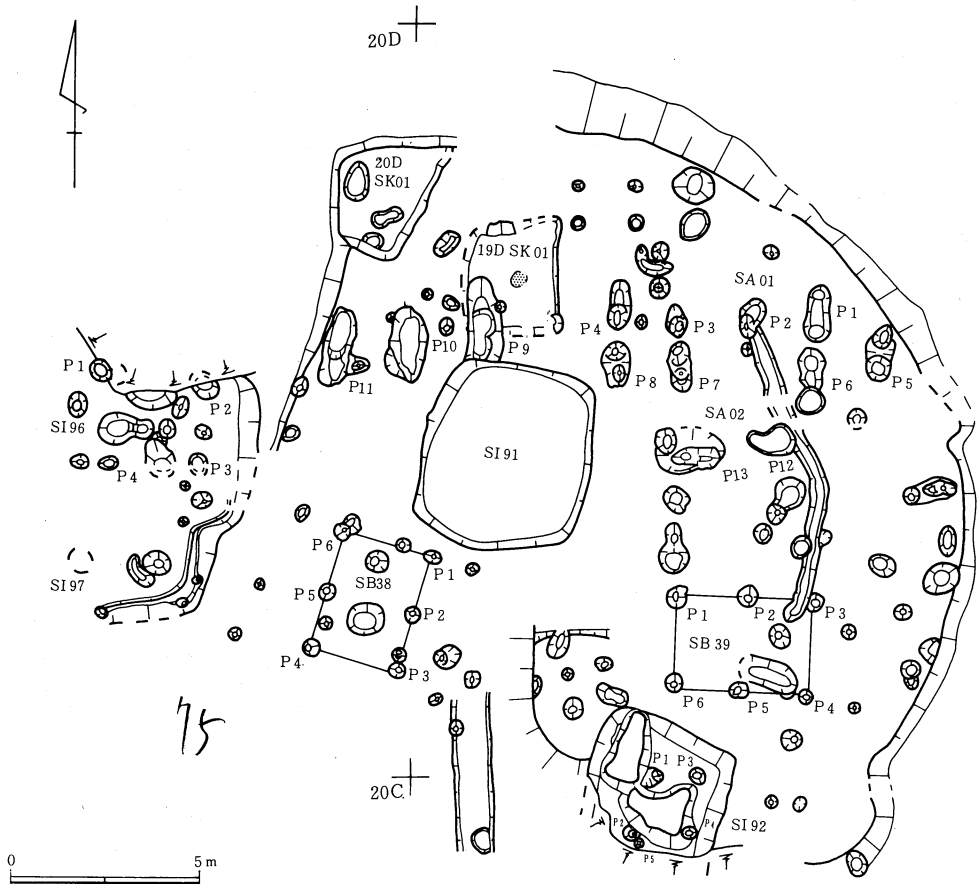
挿図74 石蓋土・遺構図 (S = 1/40)

第3節 竪穴住居跡 (S I) (挿図75)

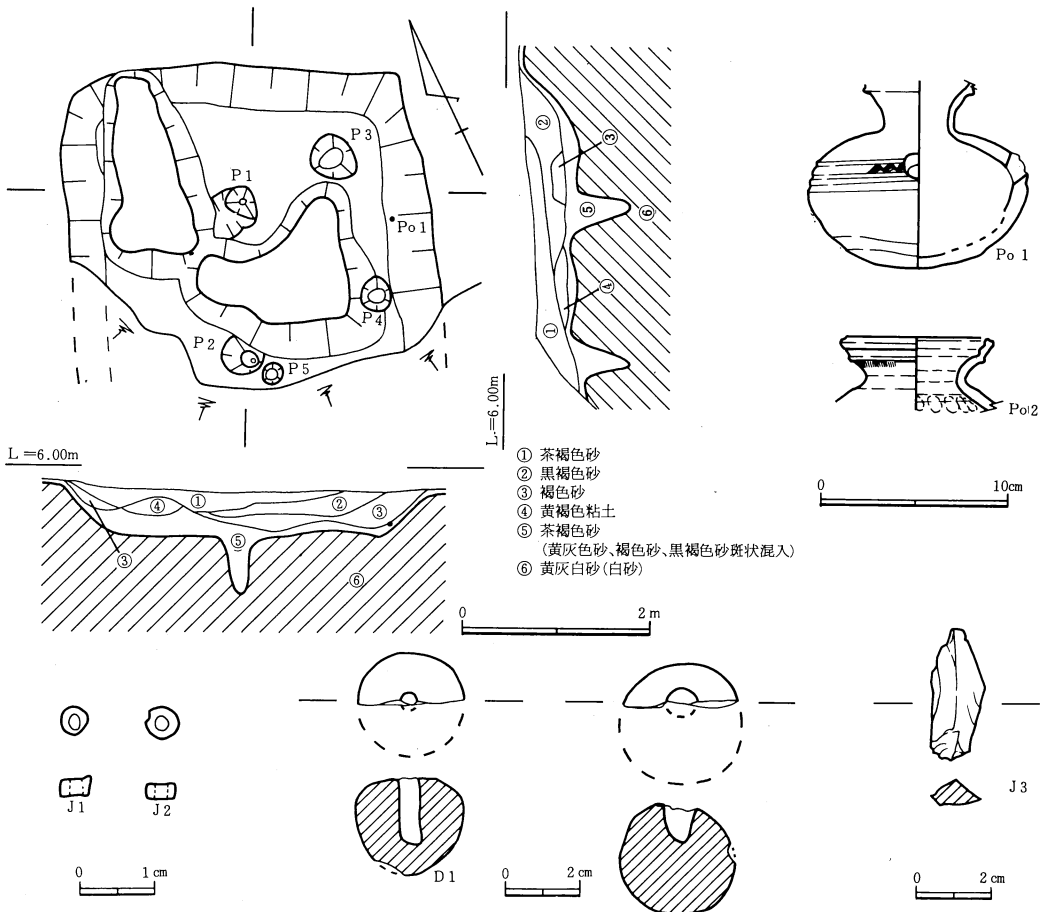
1号墳墳丘下からは、4基の竪穴住居跡が検出されている。以下、53年度に検出された3基の竪穴住居跡について述べる。

S I 92 (挿図76, 図版18・23)

19Dと19C地区にまたがり、S I 91の東南、S B 39の南に接する。この地区は北東に高く南西に低い地形がCライン付近で急激に落ち込み、南は粘土層の出るいわゆる低湿地である。S I 92はちょうどその落ち込む線上に立地し、その落ち込みに南側を切られている。床面は東西長3.0m, 南北長3.0m以上, 床面積9㎡以上の方形の竪穴住居跡である。床面上に黄褐色粘土を盛った2つのベッド状遺構を検出した。これは⑤層上面に設けられたもので1つは北西隅にあり南北に細長く、もう1つは中央やや東にあり不定形をなす。粘土の厚さは約20cm。床面からP 1～P 5を検出した。P 1 (44×40-56), P 2 (60×44-58)を構造柱跡とする2本柱の住居跡であろう。柱穴間距離は1.7mで軸はN-26°-Eを振る。封土にほとんど遺物はなかったが、東側の壁面の⑤層に甕 (P o 1) を検出した。こ



挿図75 1号墳下層遺構図 (S = 1/200)

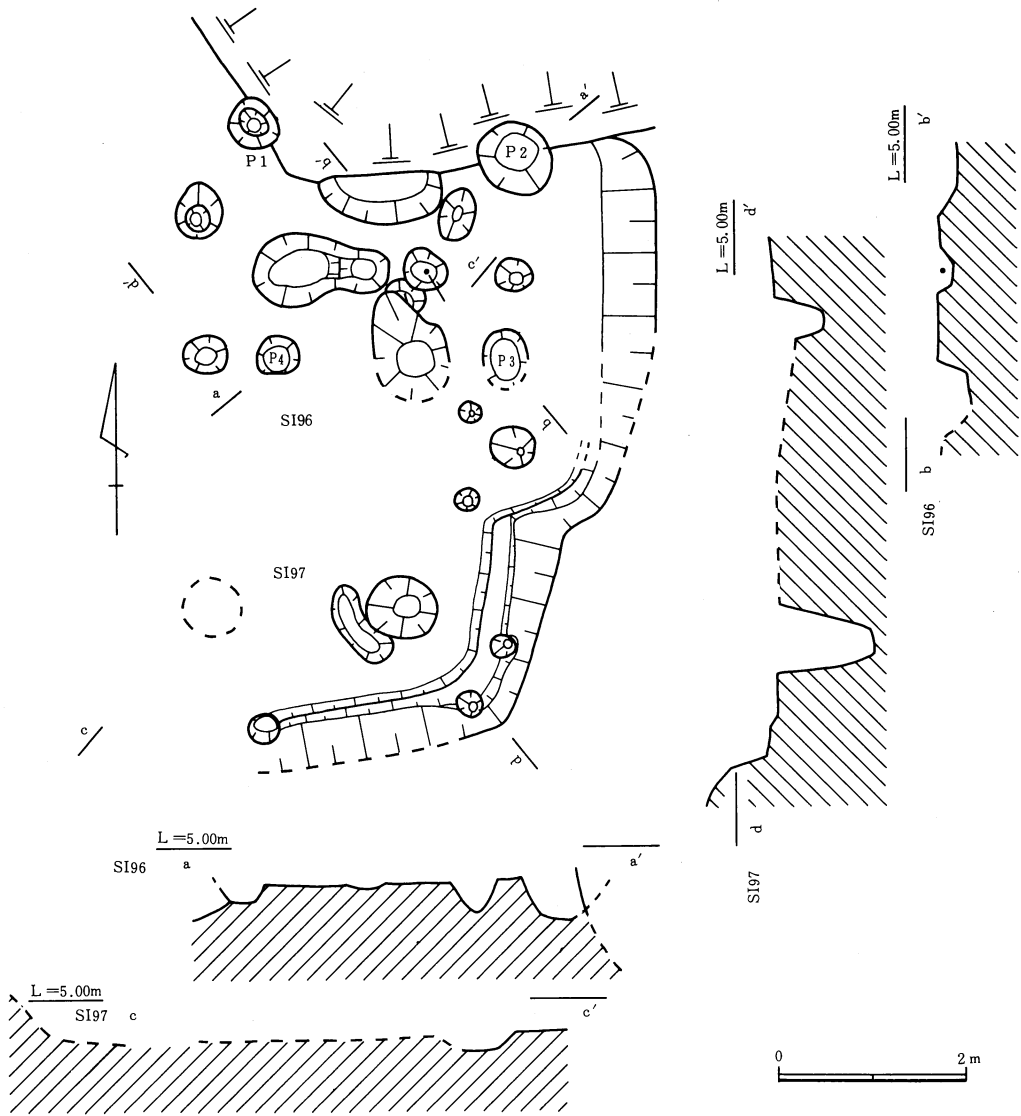


挿図76 S I 92遺構図 (S = 1/80)、遺物図 (土器 S = 1/4、玉 S = 1/1、
玉未製品・土玉 S = 1/2)

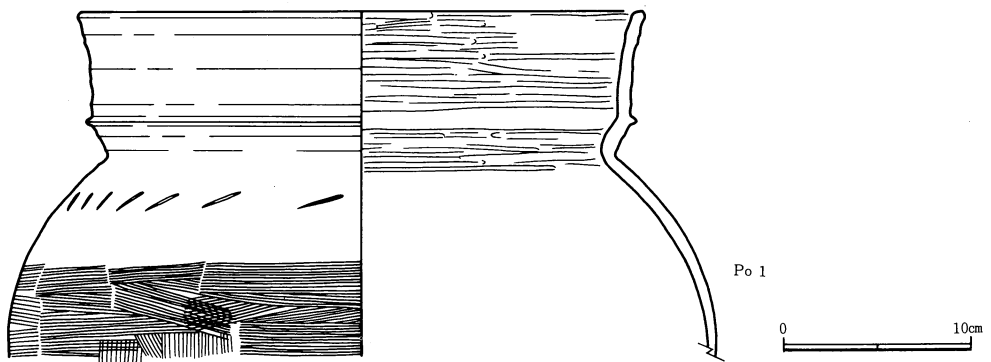
の甕は壁に対して斜めに、欠けている口縁部を上にして出土した。他に小玉 (J 1・2)、土玉 (D 1・2) が出土した。埋砂内から管玉未製品と考えられる碧玉 (J 3) も出土している。出土遺物から陶邑編年による I の II 期と考える。

S I 96・97 (挿図77~80, 図版18・23)

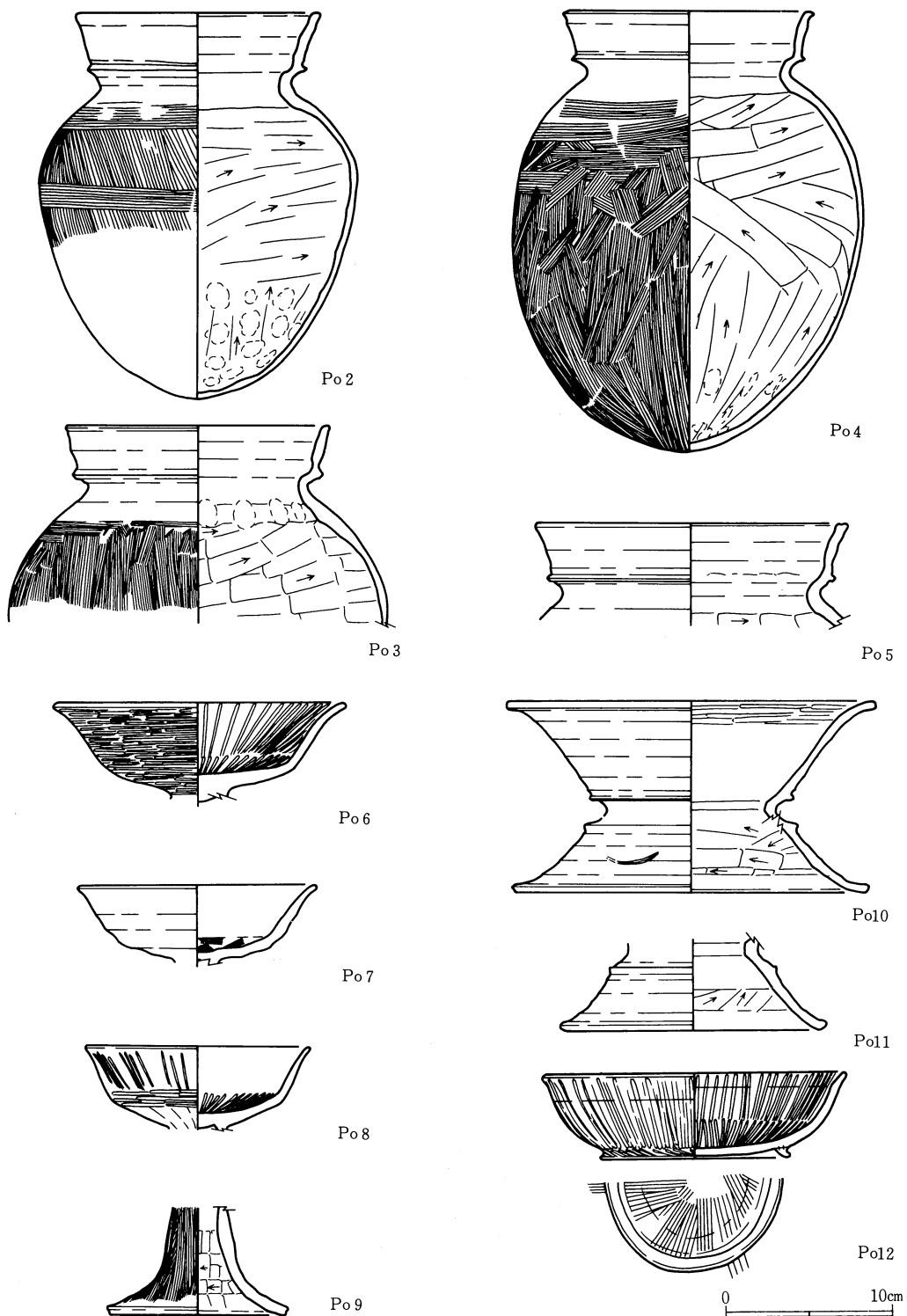
S I 96・97は20D地区の中央やや南東にあり、S I 91の西に位置する。共に西側は1号墳の周溝で切られ、S I 96は東側を浜井戸で切られている。S I 96・97は切り合うが、切り合い関係は不明である。S I 96・97はそれぞれ2辺の一部を確認したにすぎない。床面上でピットを22個検出し、P 1~4はS I 96の構造柱と推定できるが、S I 97の柱穴は不明である。またS I 97は確認できた2辺 (南と東) の壁に段が認められた。遺物はS I 96の封土内から多量に検出されたが、整理中多くが他の遺物に混入してしまった為報告できるのはわずかとなった。床面の大きさ、ピットの計数、主軸などは遺構が他の遺構に切られている為不明である。出土遺物からS I 96・97は共に長瀬II期頃の住居跡である。



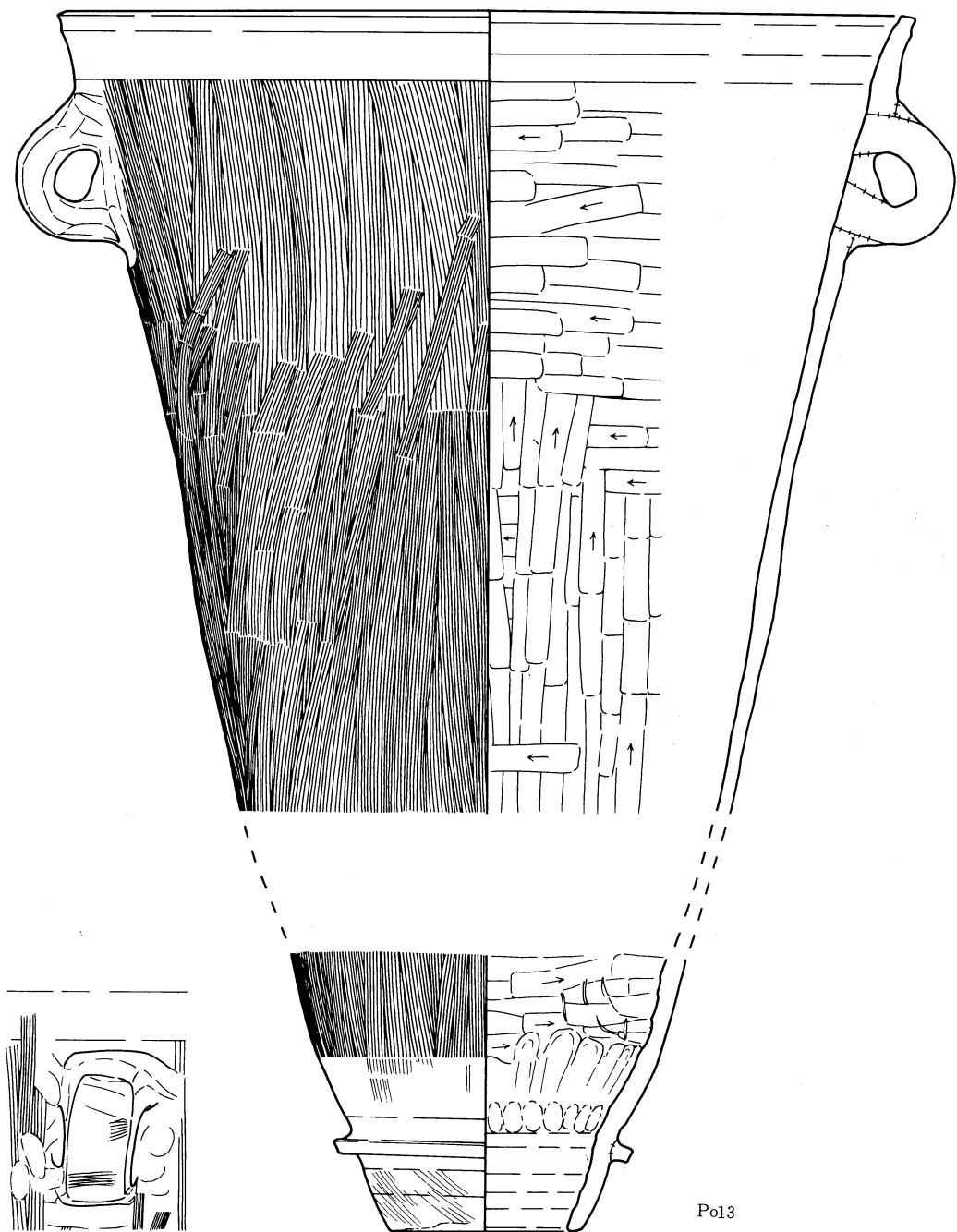
挿図77 S196・97遺構図 (S=1/80)



挿図78 S196・97遺構図その1 (S=1/4)



挿図79 S196・97遺物図その2 (S=1/4)



把手部

Po13

0 10cm

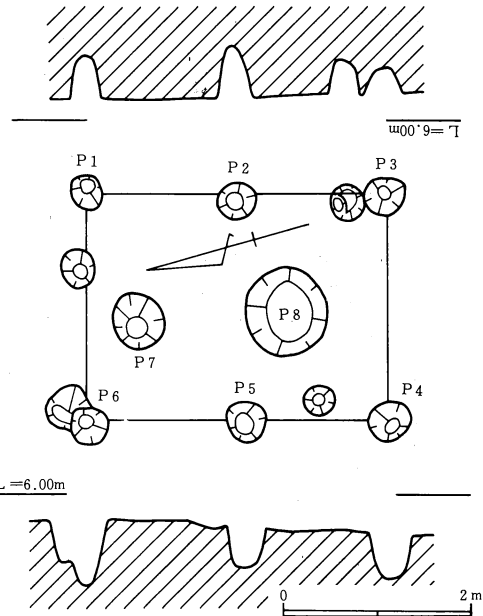
挿図80 S196・97遺物図その3 (S=1/4)

第4節 掘立柱建物跡 (S B) (挿図75)

1号墳丘下では2棟の掘立柱建物跡が検出された。

S B 38 (挿図81, 図版18)

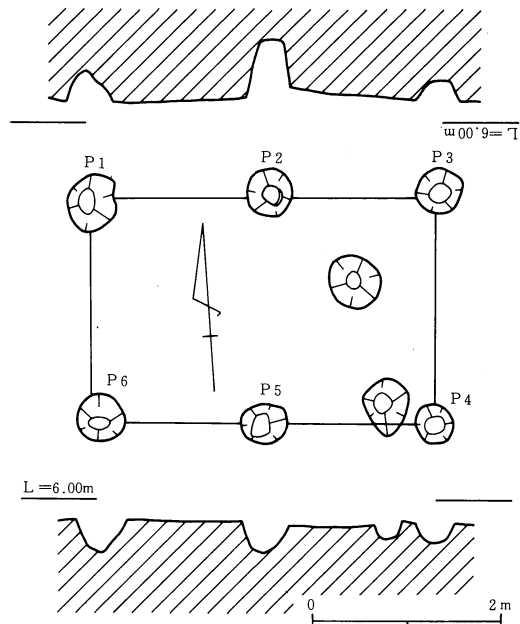
S B 38は20D地区の南西, 1号墳下層にあり, S I 91の南西に位置する。周囲にはS I 91・92・96・97などの住居跡がある。1×2間の建物で, 桁行長3.2m, 妻通長2.5mを測り, 主軸はN-16°-Eを振る。各柱穴の大きさはP 1 (39×32-46), P 2 (41×40-52), P 3 (46×41-28), P 4 (41×43-46), P 5 (44×43-44), P 6 (41×39-67) cmで, 柱穴間距離はP 1-P 2間から順に1.60, 1.56, 2.44, 1.56, 1.72, 2.50mを測る。各柱底の絶対高はP 1より順に5.32, 5.21, 5.44, 5.11, 5.23, 5.04mで差は40cmである。P 7・8はS B 38内にあり, 平面的位置・埋砂などからS B 38に伴う可能性もある。各柱穴から土師器片が出土した。これらの遺物, 立地より古墳時代前~中期の建物であろう。



挿図81 S B 38遺構図 (S = 1/80)

S B 39 (挿図82, 図版18)

S B 39は19D地区の南, 1号墳下層にあり, S I 92の北西に位置する。1×2間の建物で, 桁行長3.7m, 妻通長2.4mを測り, 主軸はN-86°-Wを振る。各柱穴の大きさはP 1 (60×51-34), P 2 (50×49-51), P 3 (52×47-22), P 4 (45×37-18), P 5 (49×41-31), P 6 (53×50-35) cmを測る。各柱穴底の絶対高はP 1より順に5.45, 5.12, 5.55, 5.85, 5.43, 5.44mで差は46cmである。柱穴間距離はP 1-P 2間から順に4.9, 4.4, 6.1, 4.6, 4.3, 5.9mを測る。各柱穴から弥生土器片, 土師器片を検出した。出土遺物, 立地からS B 39の時期は古墳時代前~中期のものであろう。



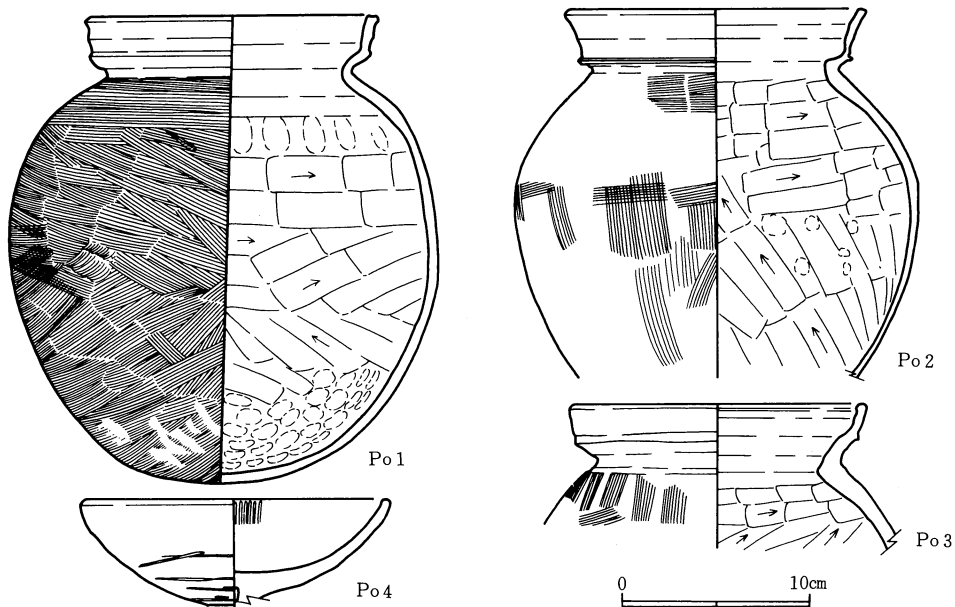
挿図82 S B 39遺構図 (S = 1/80)

第5節 その他の遺構・遺物 (SK・SA他) (挿図75)

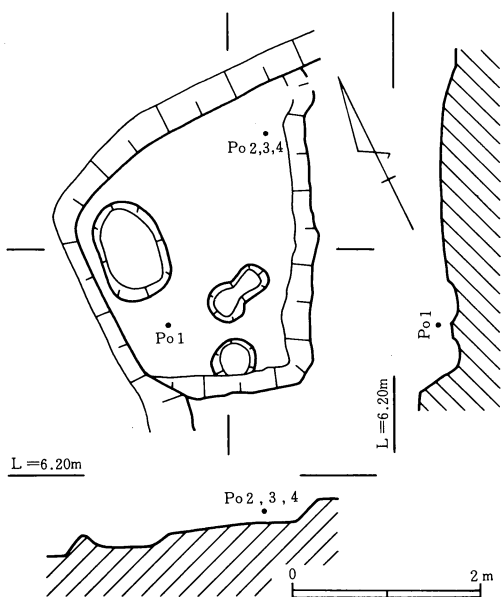
1号墳丘下では多数の土壇・ピットが検出された。以下その主なものについて述べる。

20D SK01 (挿図83・84, 図版19)

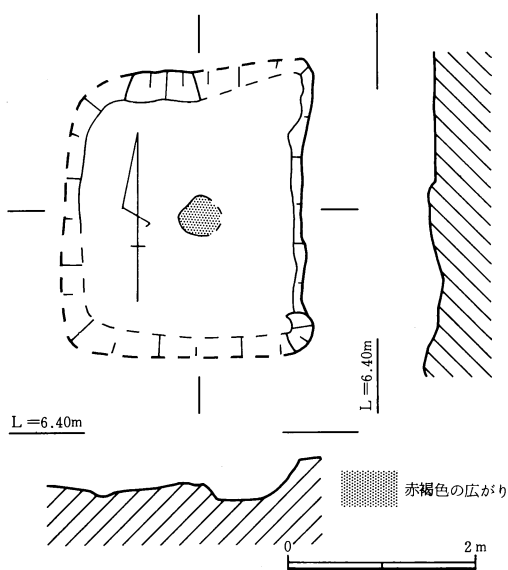
20D SK01は20Dの東側, 1号墳下層にあり, SB38の北に位置する。遺構の西と北は1号墳周溝と浜井戸で壊されているため全体の大きさは不明である。遺構は方形の竪穴状



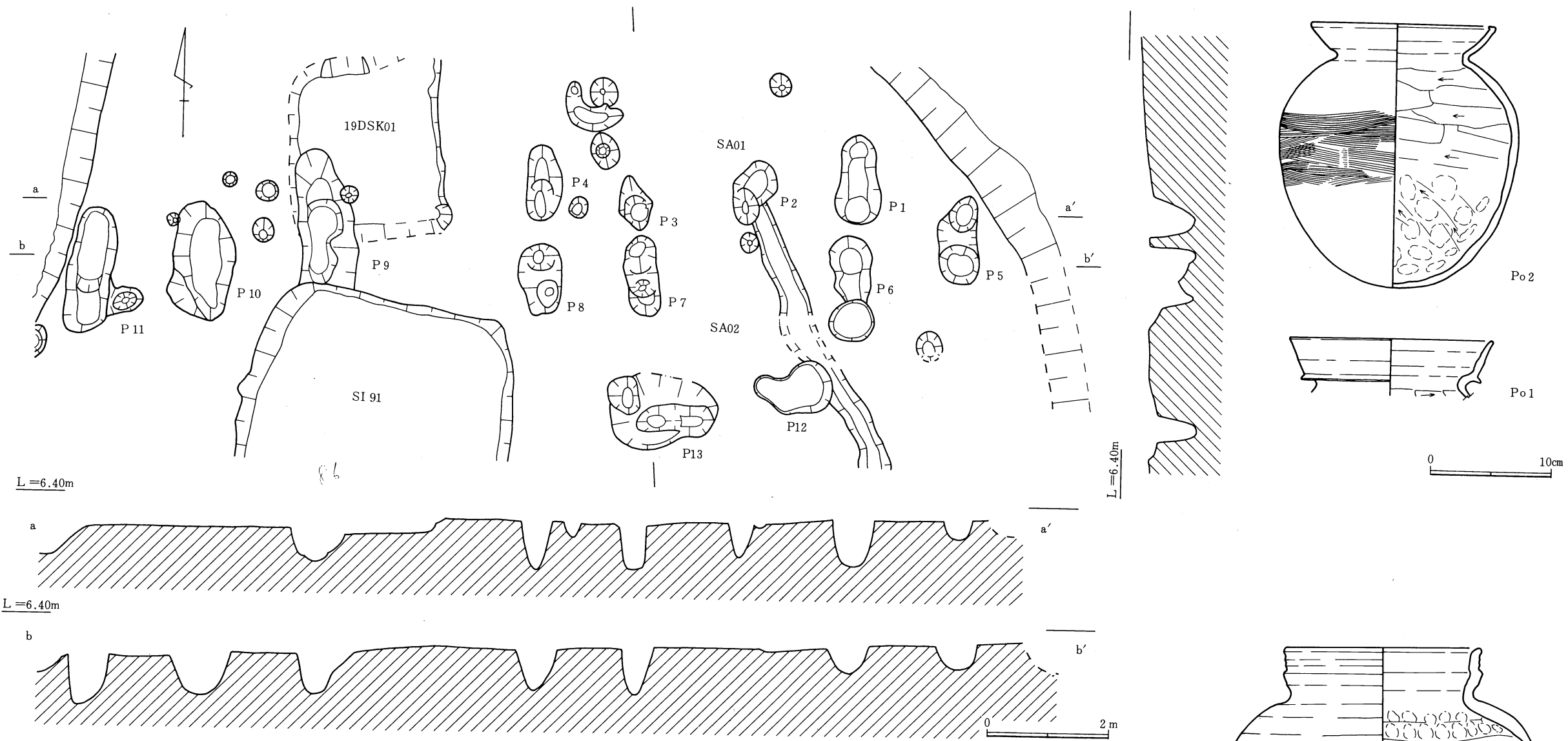
挿図83 20D SK01遺物図 (S=1/4)



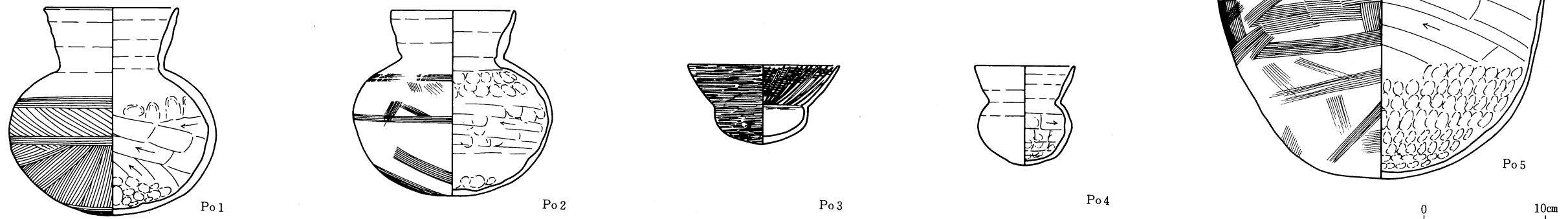
挿図84 20D SK01遺構図 (S=1/80)



挿図85 19D SK01遺構図 (S=1/80)



挿図86 SA01・02遺構図 (S=1/80), 遺物図 (S=1/4)



挿図87 遺構外出土遺物その1 (S=1/4)

を呈すると思われ深さは約25cmを測る。床面にピットを3個検出したが、それぞれ形態が異なり、柱穴と考えられるものはなかった。床面に近いレベルで遺物を検出した（P_o1～4）。これらの遺物から古墳時代中期後半頃の土壌と考える。S I 92と同じ頃に営まれた遺構と推測される。

19D S K 01（挿図85，図版19）

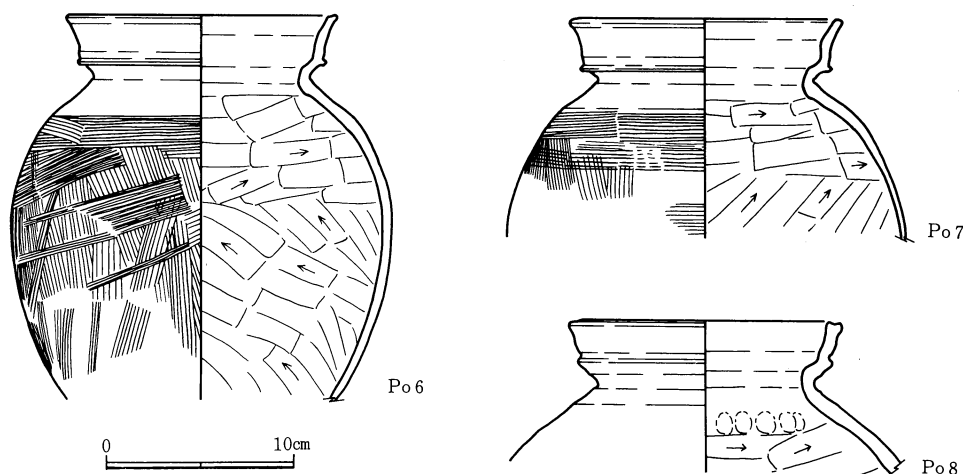
19D S K 01は19D地区の西側，1号墳下層にあり，20D S K 01の南東に位置する。19D S K 01はトレンチとP 9で一部失ったがほぼ全貌をつかめた。遺構は方形の竪穴状を呈し，床面は長辺2.5m（推定），短辺2.2m（推定）を測り床面積は約5.5㎡と推定する。床面中央から赤褐色砂の広がりを検出した。焼砂であろう。床面内にピットはなく，遺物も出土しなかった。遺構の形態から住居跡もしくはそれに付随する遺構と考える。20D S K 01などと同様な時期のものであろう。

S A 01・02（挿図86，図版19・23）

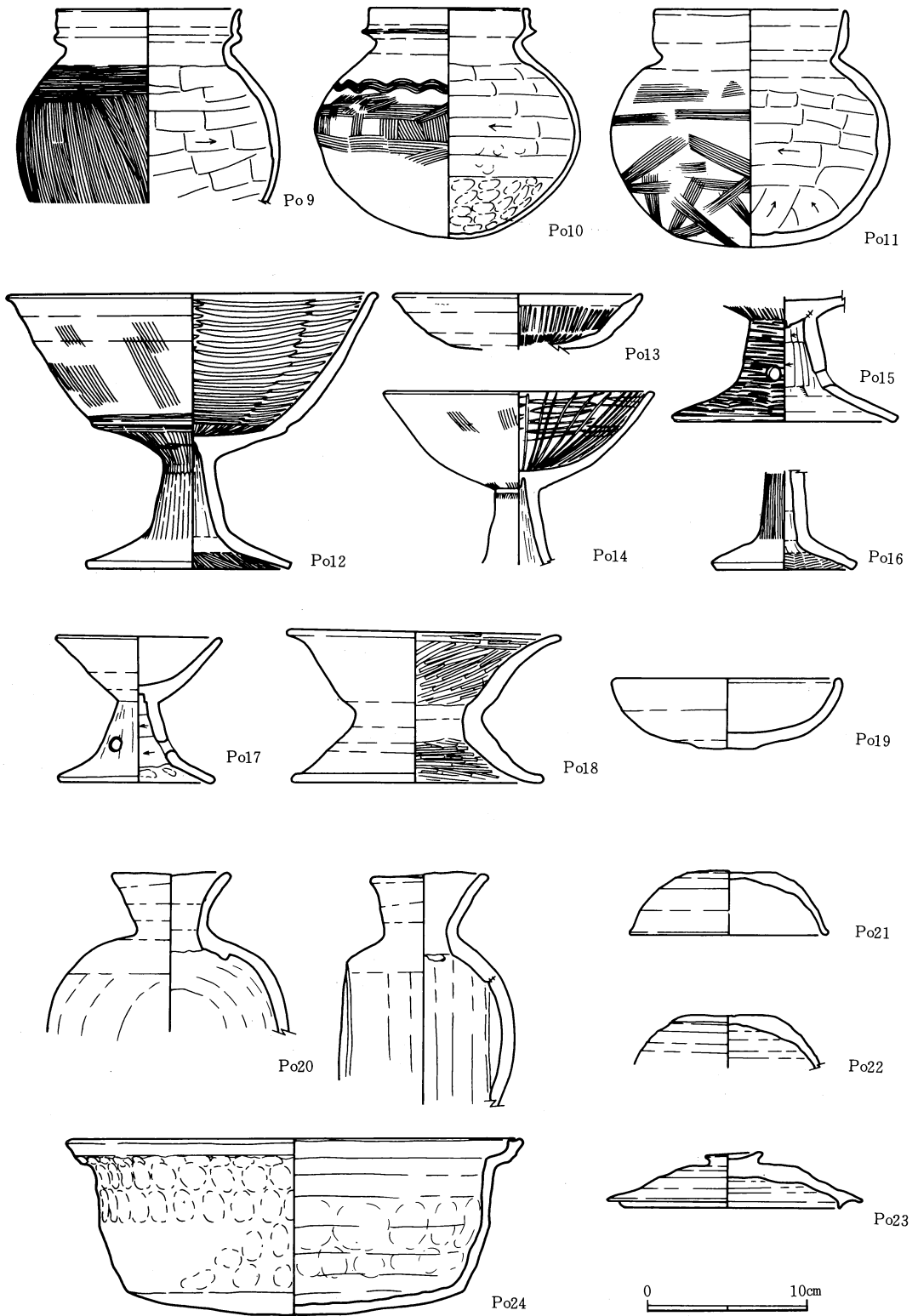
19D地区の中央に東西に並ぶピット群が検出された。ピットは不規則ではあるが2列に並び，大半のピットは床面が平らでなく，特にP 1～9はピットの北と南に深い部分がある。P 1からはP_o1，P 11からはP_o2が出土している。外のピットからはわずかの弥生土器，土師器片が出土した。P 9とS I 92，S K 02の切り合いは不明である。これらのピット群は単独のものではないが，直線的に並ばない事，周囲に関係すると思われるような遺構が検出されなかった事など性格を考える上で不明な点が多い。しかしながらピットの形態，不規則ながら東西方向に2列並ぶことをもって柵列跡（S A）と考えた。今後の類例を待ちたい。出土遺物等から，古墳時代前期～中期の遺構である。

遺構外出土遺物（53年度f1地区）（挿図87～89，図版23）

1号墳調査中に遺構に伴わない遺物が多数検出された。一部だけが紹介する。



挿図88 遺構外出土遺物その2（S = 1/4）



挿図89 遺構外出土遺物その3 (S = 1/4)

第三章 56年度調査地区 (f1・f2地区)

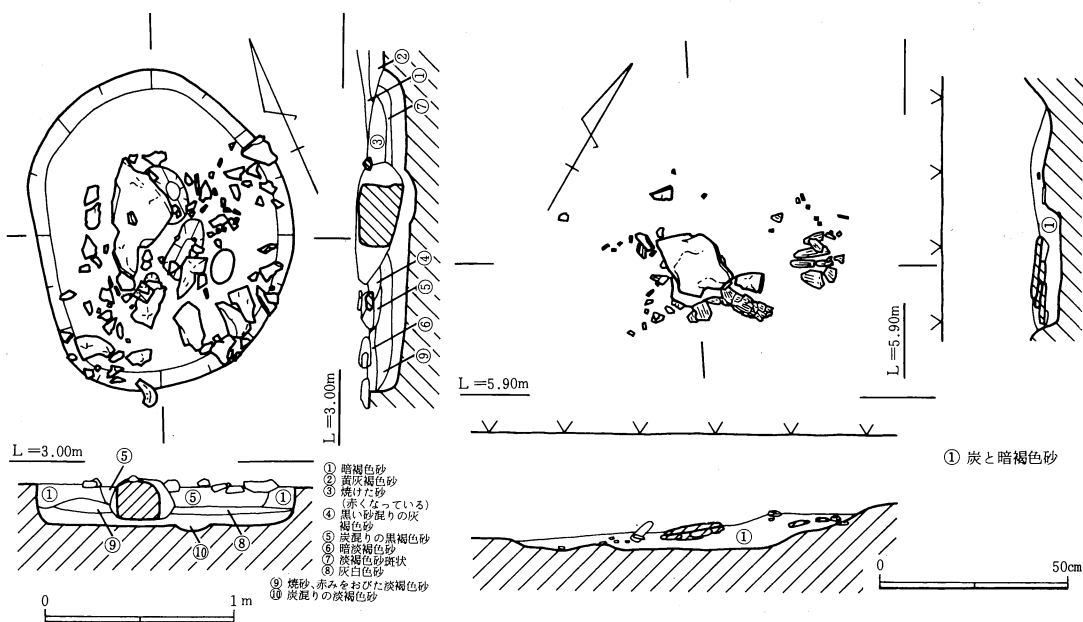
第1節 中世墓

S F 71 (挿図90, 図版24)

20C地区。1号墳南の灰白色砂の地山が急激におちこんでいる斜面の途中で検出した。周辺には石が多数散乱しており、それらは1号墳の葺石が転落したものと思われる。長軸1.7m、短軸1.3mの浅い土壌内に、一部に焼けた感じになっていた。埋砂はやや黒く、一部で炭と骨の小片が認められた。火葬墓であろう。遺物は認められなかった。このS F 71の上面は東側から続く粘土層があり、粘土層の形成はこのS F 71以後と判断できる。また1号墳の東から北側にかけて多数検出された火葬墓群とこのS F 71とは、ほぼ同時期のものと考えられるから、これらの火葬墓群が作られる時期には既に1号墳周辺の地形は現在のような状況になっていたものと思われる。S F 71の正確な時期は不明だが中世のものであろう。

S F 72 (挿図91, 図版24)

S I 117の上面約57m、黒褐色砂の上面付近で検出した。16cm幅の板石2枚を重ねた下に細かい石の破片と大きな炭を含む炭片が約80×50cmの範囲で多数出土していた。それに混じって非常に小さな骨が多数確認された。火葬墓と考えてよいだろう。土壌はかなり浅かったものと思われる。石には直接火をうけた痕跡はみとめられず、炭の上にかさなる状態で出土している。中世のものと考えてよいだろう。



挿図90 S F 71遺構図 (S = 1/40)

挿図91 S F 72遺構図 (S = 1/20)

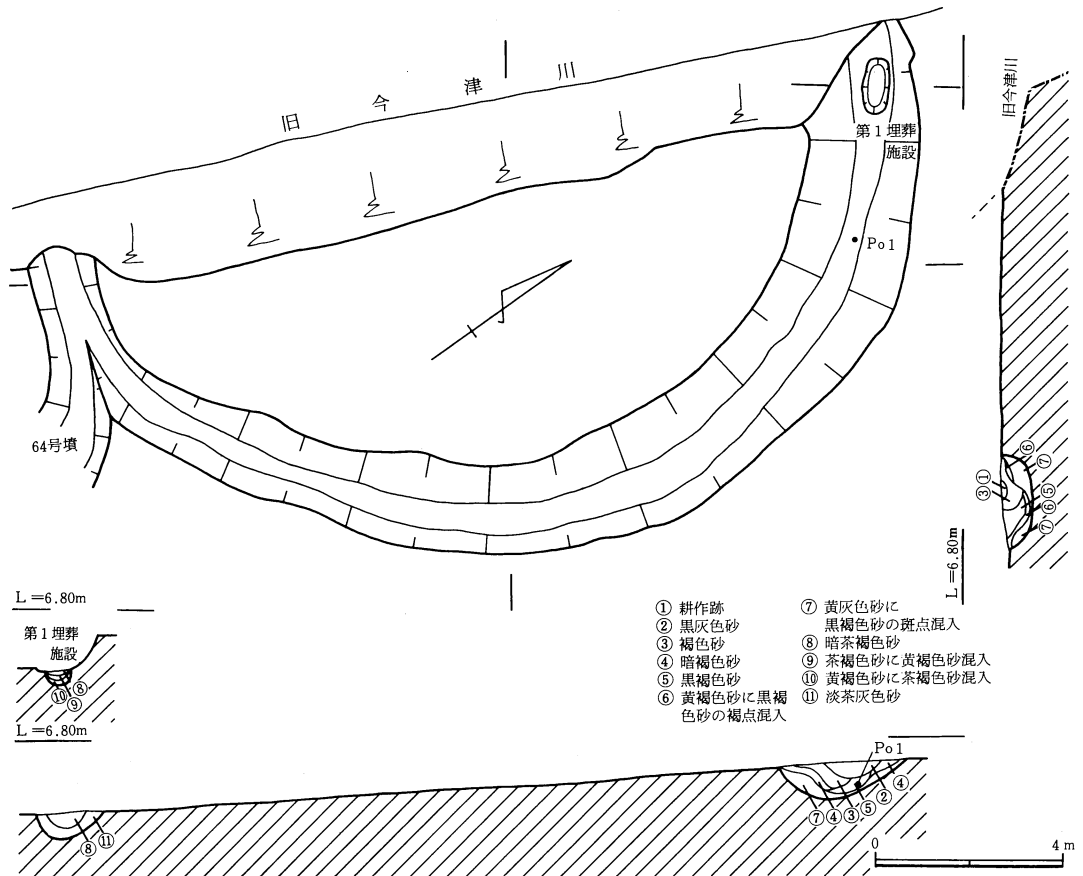
第2節 墳墓

56年度前期調査地区では10基の墳墓を検出している。内訳は周溝をもつもの3基、箱式石棺2基、埴輪棺3基、土壙墓1基、木棺墓1基である。

62号墳 (挿図92~94, 図版24・37)

20F, 21E・F地区にまたがり、南側周溝で64号墳と切り合う。西側は今津川旧河道のため削平をうけている。正確な規模は不明だが、総径11.0m(推定)、幅2.4m、深さ70cmのU字状の周溝をもつ円墳と考えられる。上面を耕作によって失っていたため、埋葬施設と考えられるものは周溝内北側の一基のみである。長さ1.14m、幅58cm、深さ21cmの楕円形を呈す土壙墓と思われるが遺物は検出できず、埋葬施設ではなかった可能性も強い。

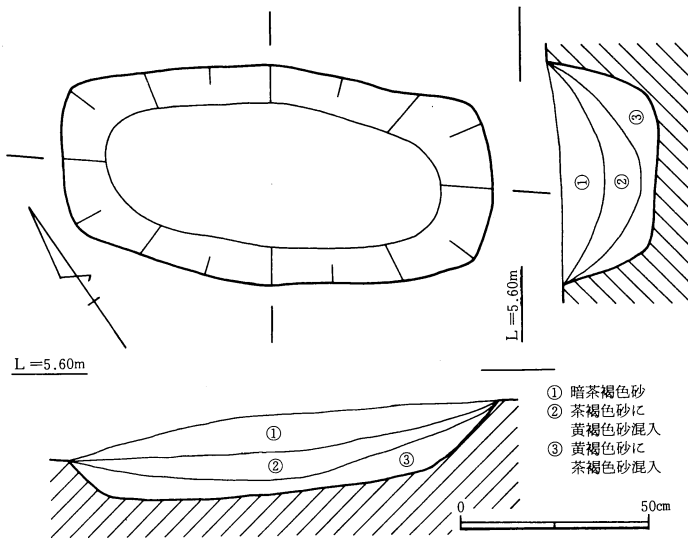
時期は切りあうS I 115などから古墳時代中期後半から後期初頭と考えられる。



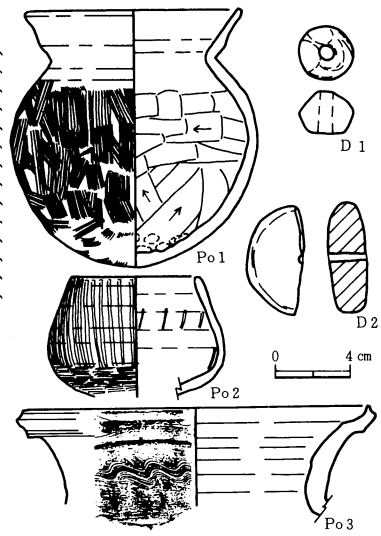
挿図92 62号墳遺構図 (S = 1/160)

64号墳 (挿図95~97, 図版24・25)

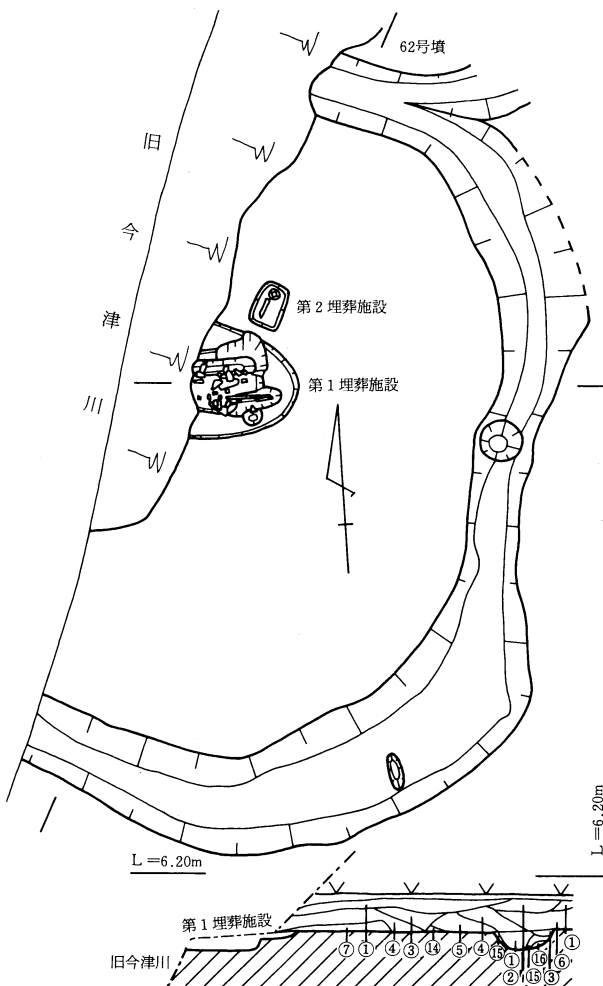
21E地区にあり、S I 117の西に位置し、北で62号墳の周溝と切りあう。また東側では21E S K03を壊して作られ、その他の溝状遺構、土壙なども64号墳で壊されている。西側は約半分ほど今津川旧河道によって破壊されている。墳形は円形と思われ、径12.8m(推



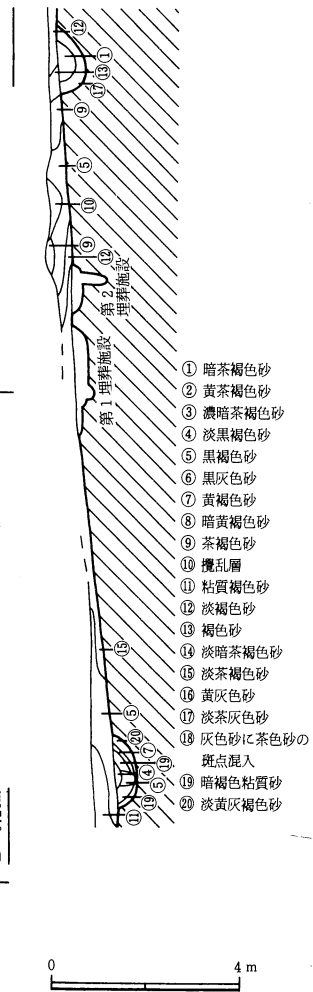
挿図93 62号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/20)



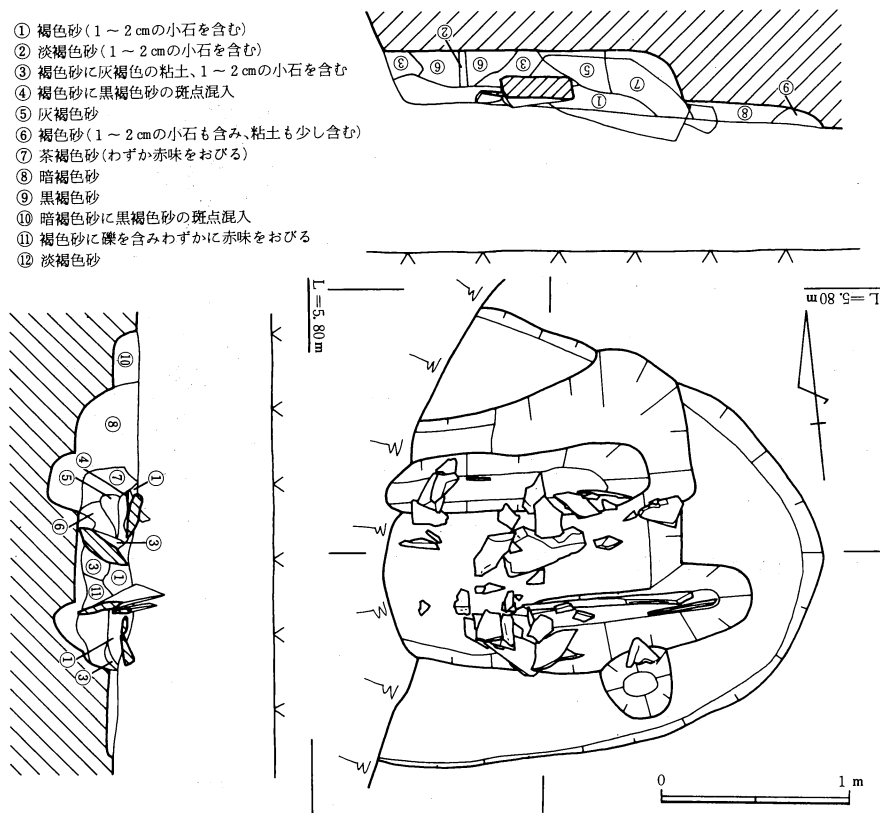
挿図94 62号墳遺物図 (S = 1/4)



挿図95 64号墳遺構図 (S = 1/160)



- ① 褐色砂(1~2cmの小石を含む)
- ② 淡褐色砂(1~2cmの小石を含む)
- ③ 褐色砂に灰褐色の粘土、1~2cmの小石を含む
- ④ 褐色砂に黒褐色砂の斑点混入
- ⑤ 灰褐色砂
- ⑥ 褐色砂(1~2cmの小石も含み、粘土も少し含む)
- ⑦ 茶褐色砂(わずかに赤味をおびる)
- ⑧ 暗褐色砂
- ⑨ 黒褐色砂
- ⑩ 暗褐色砂に黒褐色砂の斑点混入
- ⑪ 褐色砂に礫を含みわずかに赤味をおびる
- ⑫ 淡褐色砂



挿図96 64号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/40)

定), 周溝総径16m (推定) の円墳と思われる。周溝は幅約2m, 深さ50cmのU字形である。埋葬施設は墳丘内に2基検出され, 周溝内から検出できなかった。

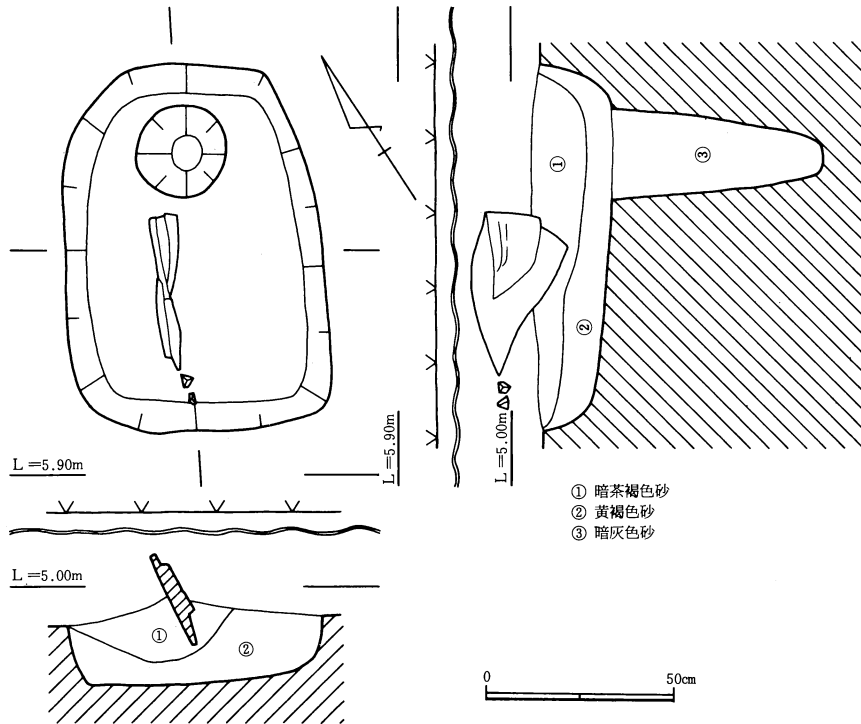
(1)第1埋葬施設 (挿図96, 図版25)

墳丘のほぼ中央に位置する。西側が半分近く破壊されているうえ, 残った東側もかなり激しい攪乱をうけている。N-93°-Eの主軸を持つ箱式石棺と思われる。埋葬施設に関して詳しいことは不明であるが, 赤色顔料が付着した板石を検出している。棺内からは骨やその他の遺物は一切検出できなかった。

(2)第2埋葬施設 (挿図97, 図版25)

第1埋葬施設のすぐ北にある。石が土壌の中央に立った姿で検出され, 標石墓と思われる。主軸はN-28°-Eにとり, 長軸98cm, 短軸70cm, 深さ約22cmを測る。土壌内になんかなり深いピット(25×25-56)cmがあるが, 第2埋葬施設に付随するものと考えられるがその性格は不明である。なお, 骨その他の遺物は検出できなかった。

周溝内に2個のピットが見られるが, 64号墳との関係は不明であり遺物もなかった。64号墳の時期は, 62号墳・21E S K 03などの切り合い関係から古墳時代中期後半から後期初頭にかけてと考えられる。



挿図97 64号墳第2埋葬施設遺構図 (S = 1/20)

67号墳 (挿図98・99, 図版25)

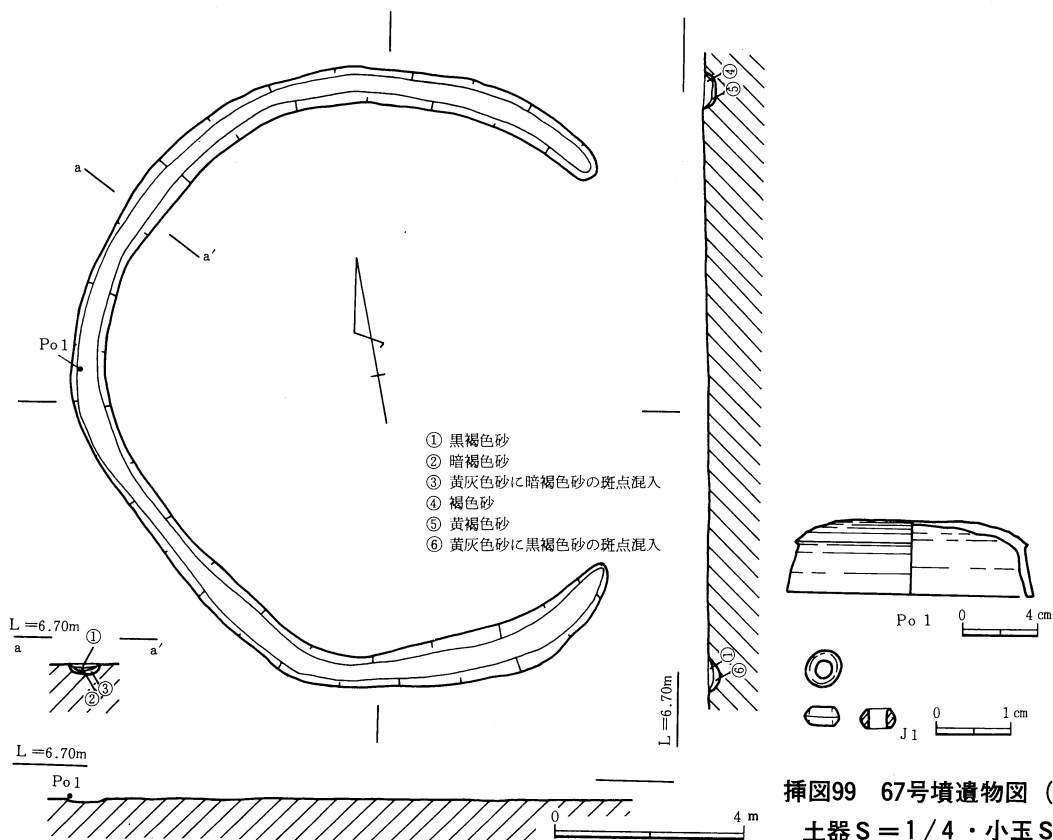
20F地区の北に位置し、62号墳の北東にある。径約12.5m、深さ30cmの周溝を持つ円墳である。上面は耕作のため墳丘は飛ばされたと思われる、埋葬施設の検出もなかった。また周溝がめぐっていたと思われるが、東側の周溝部分も飛ばされたと考える。67号墳の時期は古墳時代中期から後期と考える。

S X 40 (挿図 100, 図版25・26)

S X 40は、1号墳調査後掘り下げて周辺の竪穴住居跡を調査中に検出された。具体的にはS I 113の東で、浜井戸の西肩部に位置する。レベル的には1号墳の西側周溝底にあたり、南3mに位置するS X 54と同様周溝底に掘られた小型箱式石棺の埋葬施設である。

箱式石棺の東側は浜井戸で削られているものの、東西長軸約1.4m、短軸1.1mの楕円形の掘り方を持つ。中央部に長軸に平行して箱式石棺が作られている。主軸はN-70°-Wである。箱式石棺内部の規模は、長軸50cm、短軸25cm、床面までの深さ25cmである。天井には厚さ約10cmの一枚石が棺全体をおおって蓋をしてあった。石棺側石は、基本的には四壁とも1枚ずつの板石からなっているが、西・南側の石材は補助材が使われている。西小口板が一番しっかりしており、海拔高4m15cmの所まで掘って立てられていた。

棺内部は、東側に10cm四方の平石を2枚、V字状においた石枕が作られていた。埋砂は黒砂の混じった暗褐色砂で、棺内からは何も検出できなかった。



挿図98 67号墳遺構図 (S = 1/160)

挿図99 67号墳遺物図 (土器 S = 1/4 · 小玉 S = 1/1)

このSX40は、1号墳の数多い副次葬の1つとみられ、棺内部が狭いのは再葬の可能性をうかがわせる。時期的にも1号墳の築造・埋葬とそう大きな時期差のみられない頃と考えられるであろう。

S X 55 (挿図101・102, 図版26・37)

20E地区, 1号墳の北で検出した。1号墳の周溝外肩にあたる。普通円筒埴輪2本の口縁部を合わせた合口式円筒埴輪棺墓である。棺としての全長は1.05m, 円筒埴輪の最大内径は口縁部で21cm, 掘り方は長軸1.3m, 短軸47cmを測り, 軸方向はN-80°-Eで1号墳を巡る円上に軸をもつので, 1号墳に伴うものと判断する。両小口は板石で塞がれているが西側は1枚, 東側は2枚である。どちらの円筒埴輪も底部が斜めに欠けており, 東側の小口には欠けた部分に斜めに板石が置かれている。この欠損は人為的なものでなく自然のものであると思われるから, 故意に欠いた上で蓋をしたのではなく, 欠けた円筒埴輪を棺に用いてその欠損部分を板石で覆ったものと思われる。透し孔の覆いは全く検出されなかった。土壌内の埋砂は灰白色の地山とほとんど判別できなかった。遺物, 遺骨は確認できなかった。

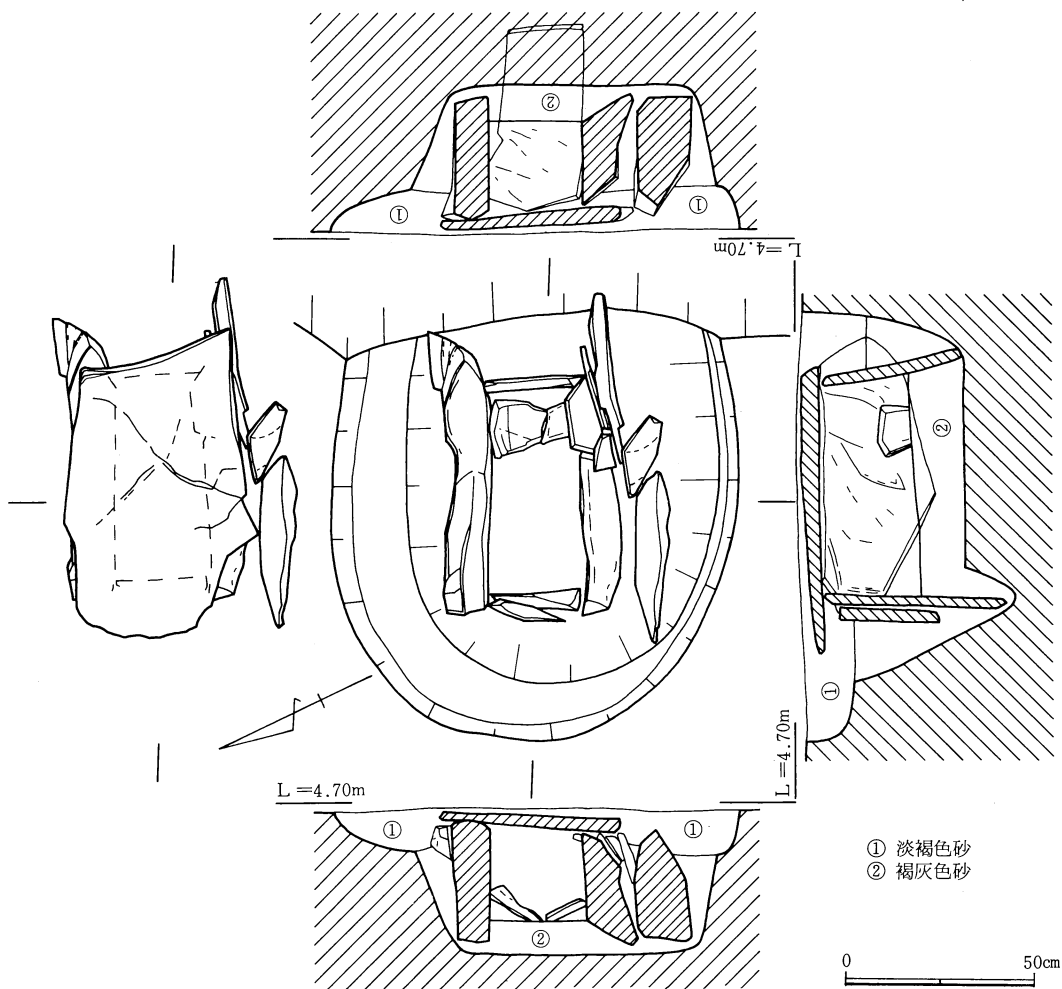


插图100 S X 40遺構図 (S = 1/20)

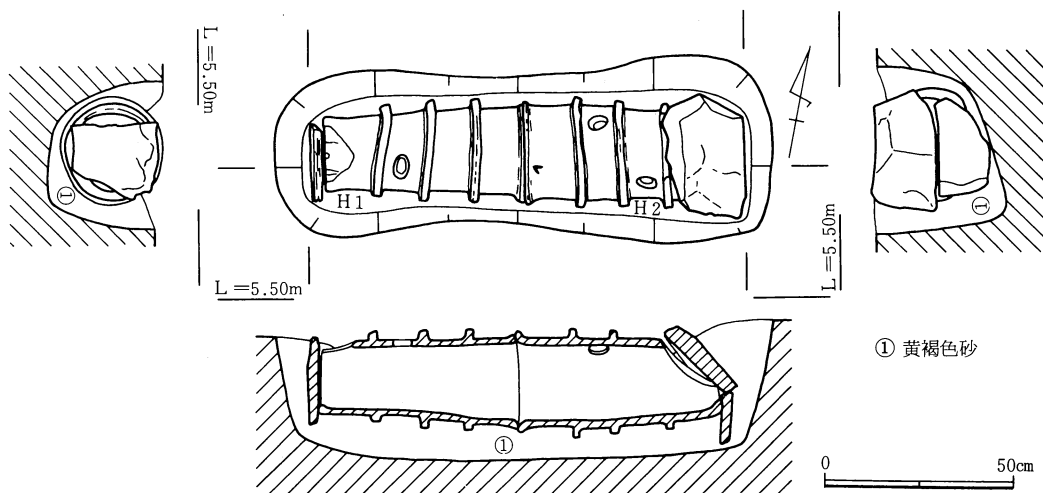
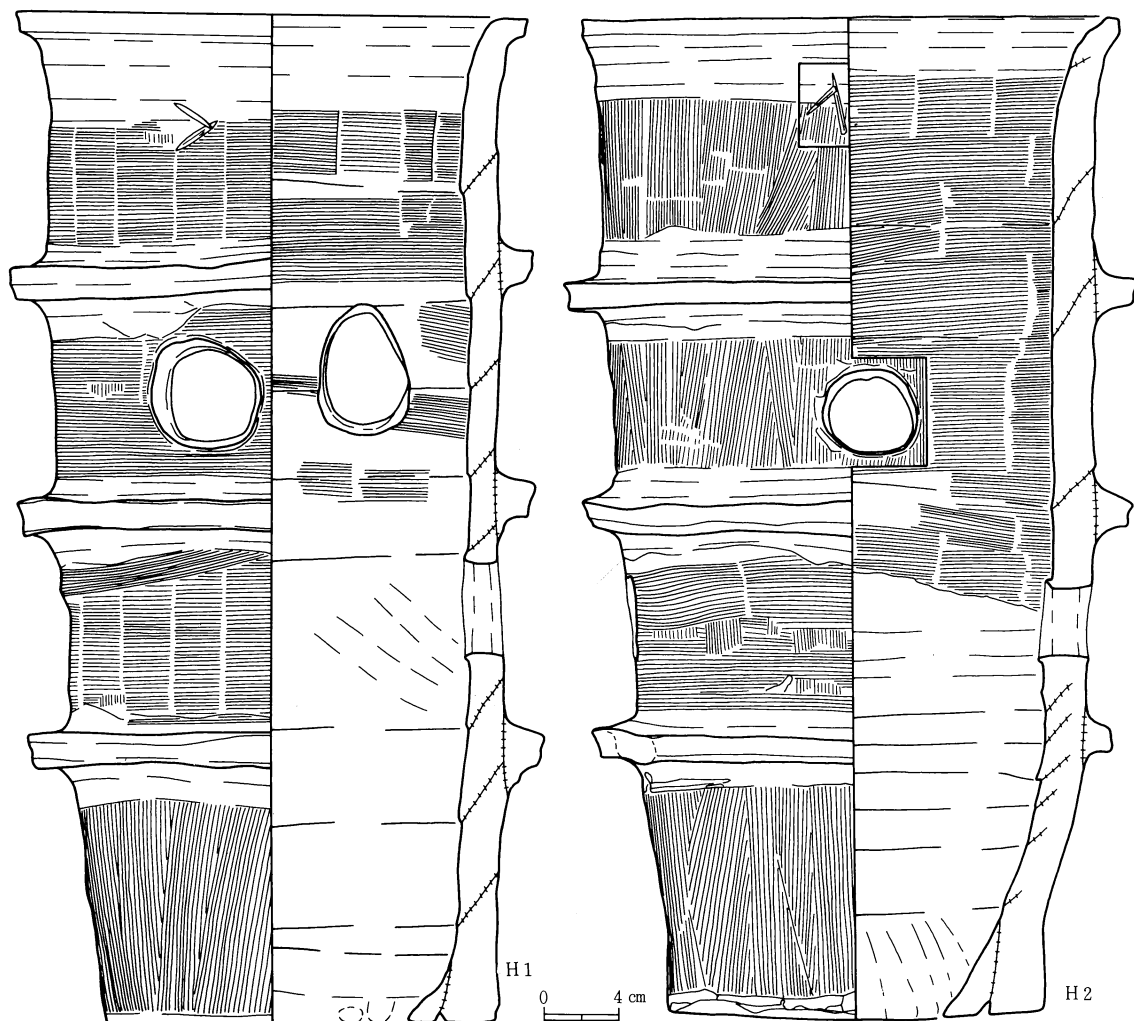


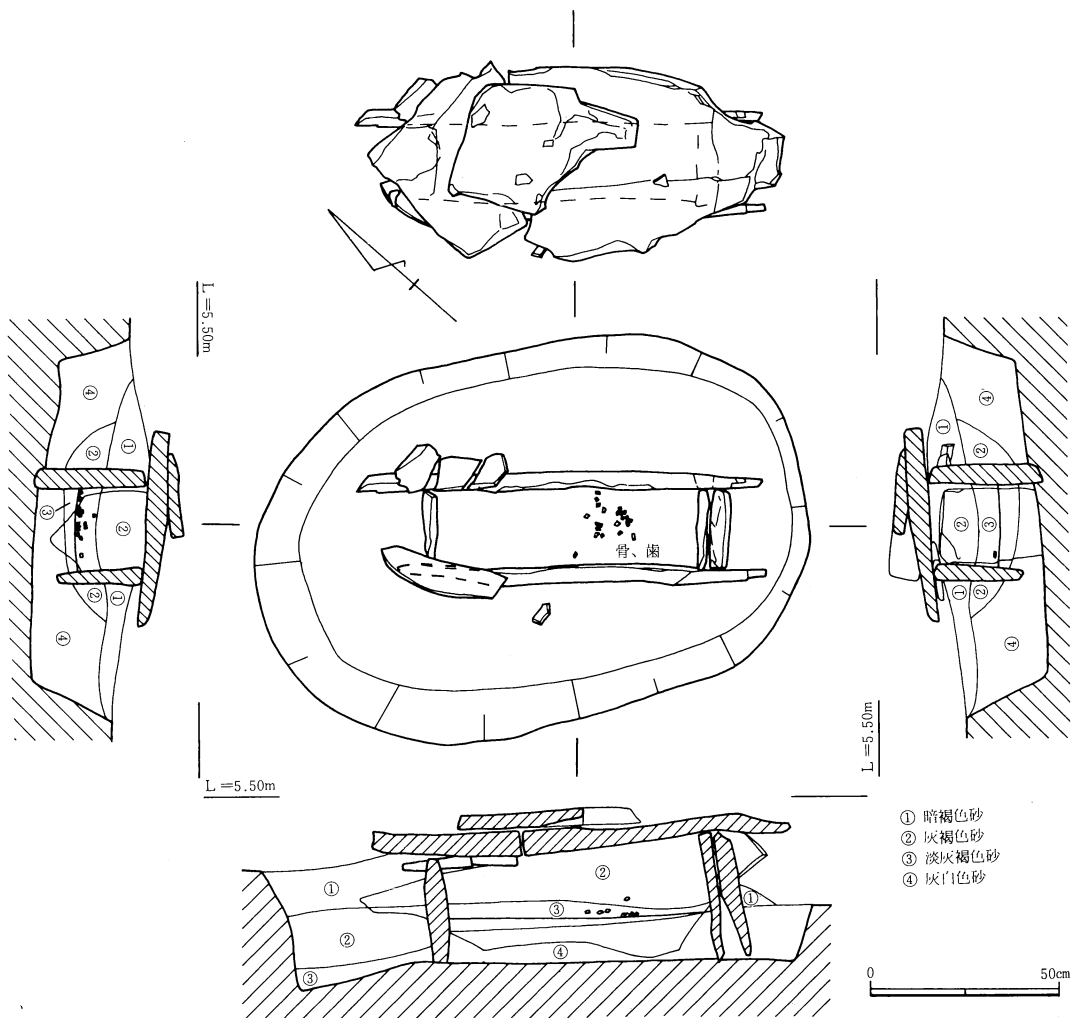
插图101 S X 55遺構図 (S = 1/20)



挿図102 SX 55遺物図 (S = 1/4)

S X 56 (挿図103, 図版26)

20E地区, 1号墳の北西で検出した。小型の箱式石棺墓で, S I 95を切っている。軸方向はN-138°-Eで, この軸方向から考えて他の1号墳周辺の小型箱式石棺墓とは異なり, 単独のものと思われる。石棺の内法は長軸70cm, 短軸20cm, 掘り方の大きさは長軸1.45m, 短軸1.02m, 床面から蓋石までの深さは20cm。棺中央部のやや東南よりで小骨片, 歯数点を検出した。頭位方向は確認できなかったが, 他の例でみられるように東南を頭にしていたものと推定する。頭側の小口石は2枚, 足側の小口石は1枚, 側壁は両辺1枚ずつで構成されている。足側の側壁上には板石片が数枚裏込めとしておかれていた。蓋石は2枚とさらに中央に1枚おかれていた。側壁には全体に赤色顔料が塗られていた。遺物は骨片以外は全く検出できなかった。枕もっていないなかった。埋葬遺体は1体と考えてよいだろう。遺存した歯から若年者(性別不明)と推定される。時期はS I 95を切っていることなどから,



挿図103 SX 56遺構図 (S = 1/20)

古墳時代中期から後半代と考える。

S X 57 (挿図104・107, 図版27・37)

1号墳北東側周溝内にあり, SX 53の北西に位置する。円筒埴輪 2本を用いた合口式円筒埴輪棺である。主軸はN-61°-Wをとる。長軸1.45m, 短軸53cm, 深さ38cmの掘り方を周溝の外側斜面にもうけ, 円筒埴輪 2本を置き棺としている。棺の両側には板石を1枚ずつ立て小口とし, 棺を塞いでいる。北西端にはさらに1枚の板石が棺の上に置かれている。棺内からは骨, 歯や副葬品などは出土していない。SX 57は1号墳周溝内に位置することから1号墳に伴うものと考えられる。

S X 63 (挿図105・106, 図版27・37・38)

21D地区の北西にあり, 64号墳の南に位置し, 南東部をP 1によって切られている。平面形は楕円形を呈すると思われ, 床面はほぼ平坦である。主軸はN-78°-Wを振り, 長

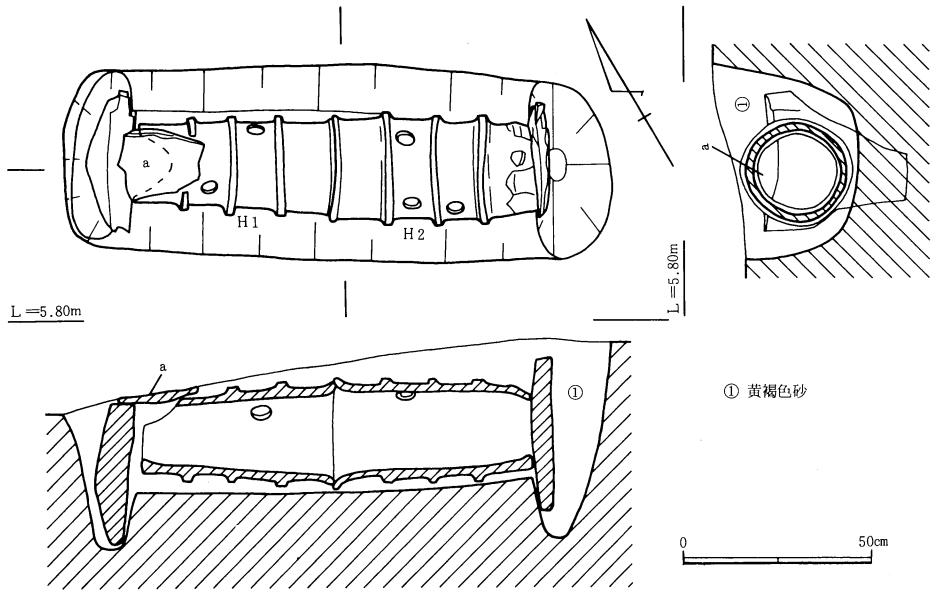


插图104 SX 57遺構図 (S = 1/20)

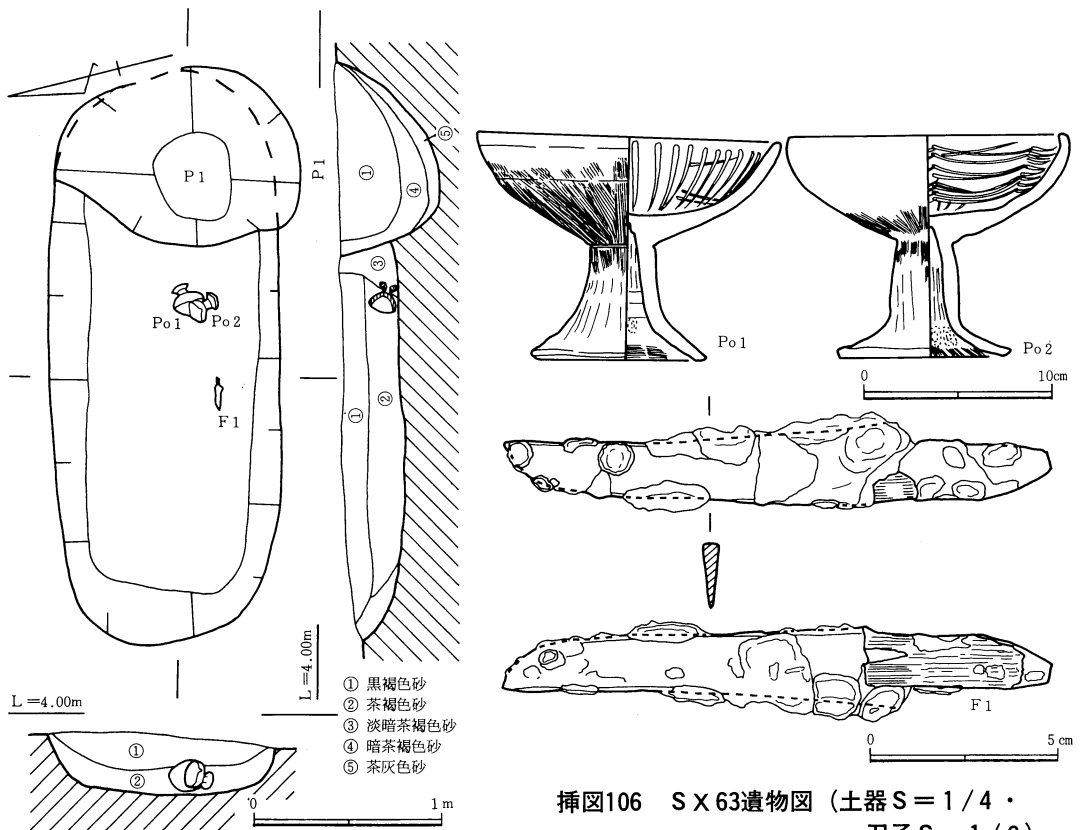
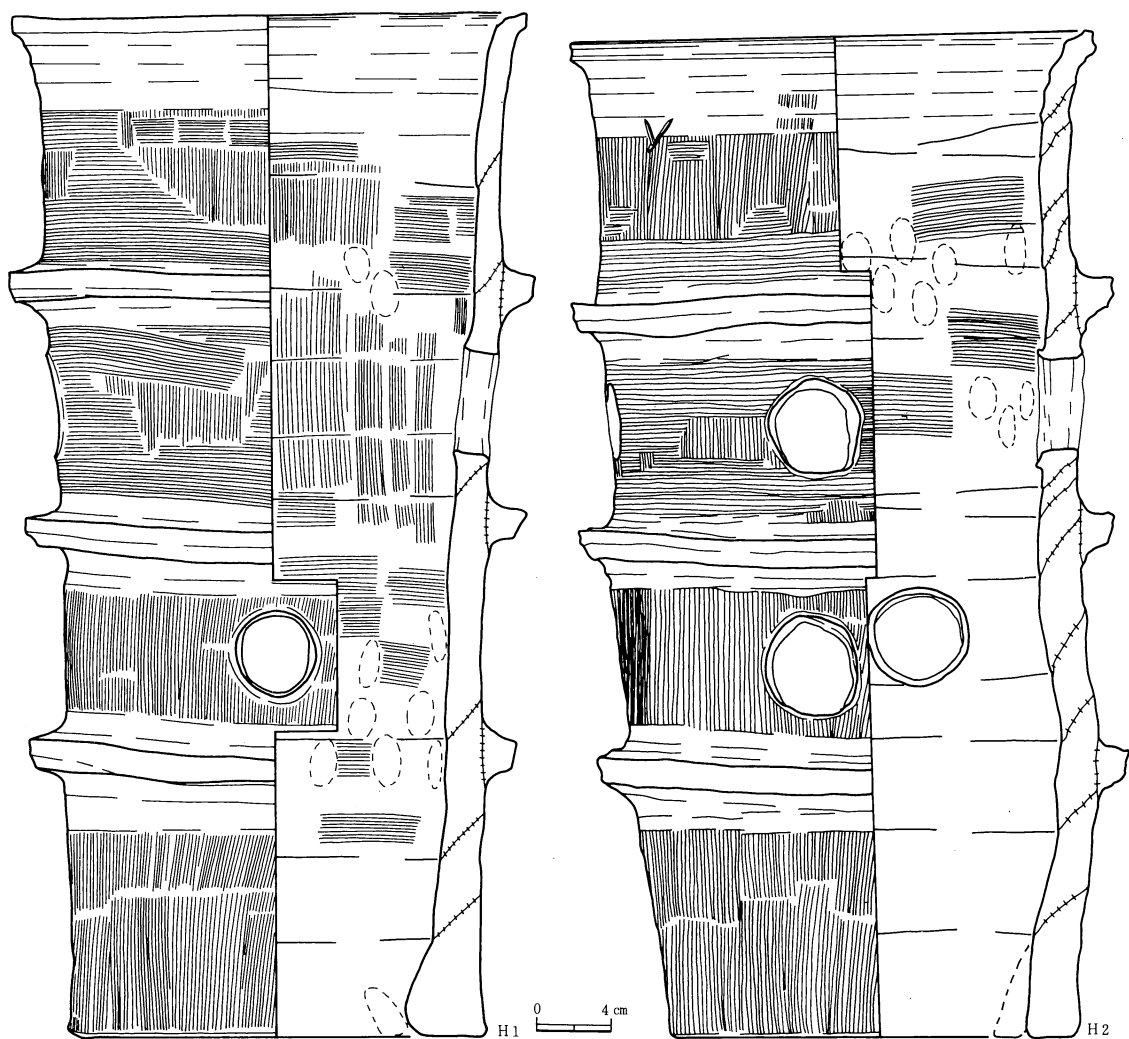


插图105 SX 63遺構図 (S = 1/40)

插图106 SX 63遺物図 (土器 S = 1/4 · 刀子 S = 1/2)

軸 3 m (推定), 短軸 1.2 m, 深さ 30 cm の土墳墓である。墓墳内の東側には高坏 (Po 1・2)

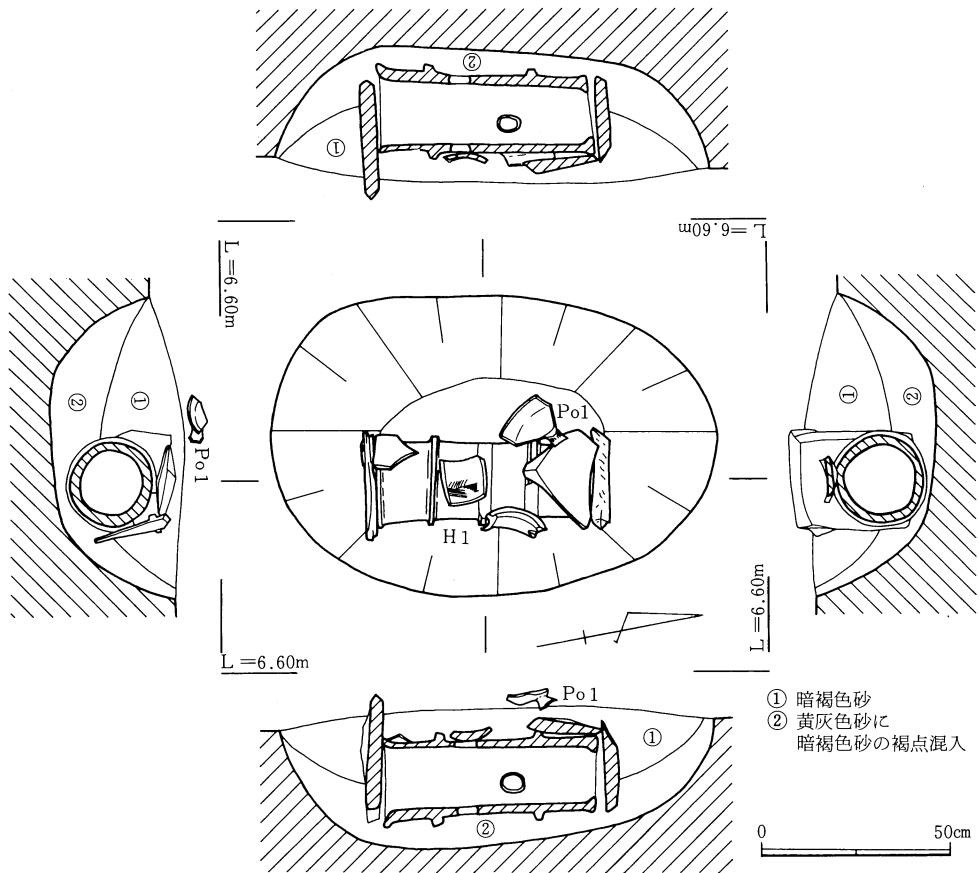


挿図107 SX 57遺物図 (S = 1/4)

を2個利用して土器枕が設けられ、副葬品として中央南側より刀子を1本検出した。また炭化米も数十粒検出したが、副葬品であるかどうかは不明である。これらの出土遺物よりSX63の時期は古墳時代中期中葉(5世紀後半)と考える。

S X 65 (挿図108・109, 図版27・38)

20F地区の南東側にありSX66の東, S I 114の北に位置する。長軸1.15m, 短軸80cm, 深さ32cmの土壌の中央より東寄りに, 完形の普通円筒埴輪1本を利用して置いた円筒埴輪棺墓である。主軸はN-11°-E。埴輪の両小口はともに板石で塞がれていた。また透し孔は埴輪片で塞がれていたが, 掘り方の下にあたる透し孔は塞がれていなかった。棺内からは遺物の検出はみられなかったが, 棺上面で高坏(Po1)を検出した。供献土器としての可能性も考えられる。SX65の時期は古墳時代中期中葉と考えられる。



挿図108 SX 65遺構図 (S = 1/20)

S X 66 (挿図110, 図版28)

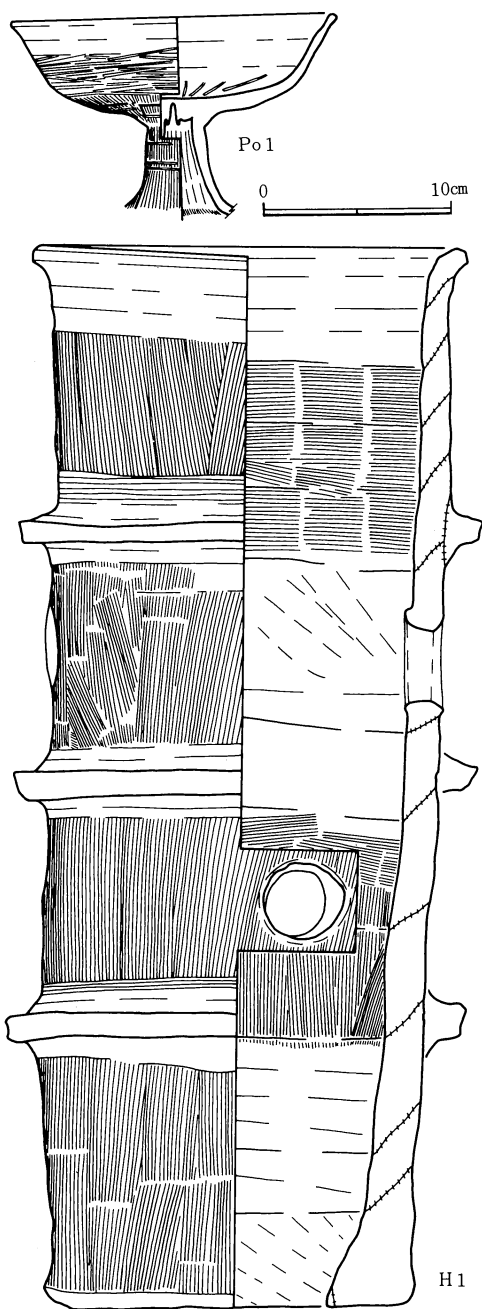
20F南東区にあり、S K 03と切り合った状態で検出された。長さ4.94m、幅1.38mの細長い楕円形で深さは東側30cm、西側20cmを測る。主軸はほぼ東西方向を振る。木棺墓と考えられ内部より歯を数本検出した。歯の検出位置からみて、東側に頭を向けて埋葬されたと考える。P 1・2との関係は不明である。S X 66は周辺の遺溝より古墳時代中期から後期と考えられる。

第3節 竪穴住居跡

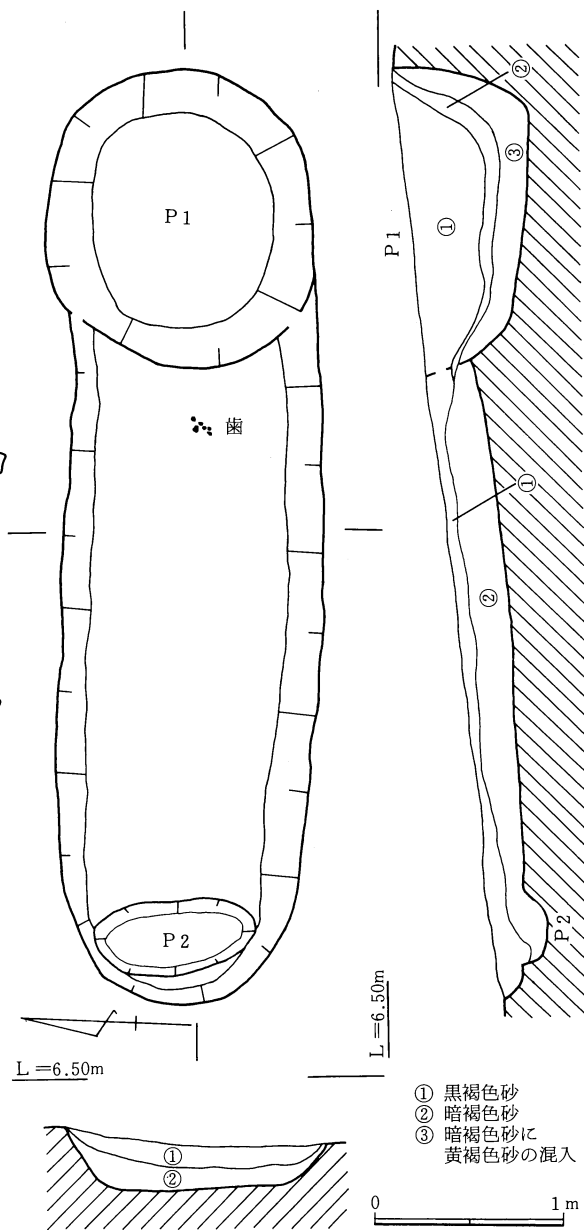
56年度前期調査地区では竪穴住居跡を16棟検出している。その中で特筆すべきものとして、弥生時代前期の玉作工房跡をあげることができよう。

S I 91 (挿図111~113, 図版28・38)

19D地区の東、S I 92の北西にあり、1号墳第1埋葬施設の直下に位置する。平面形は隅がわずかに丸い方形で南辺と東辺は丸味を帯びる。床面の大きさは長辺約3.8m、短辺約3.5m、中央部では4.40×4.05mを測り床面積は16.2㎡を測る。主軸はN-13°-Eを振る。壁高は南側で最大値50cm、北側で最小値20cmを測る。床面には大小20数個のピットが

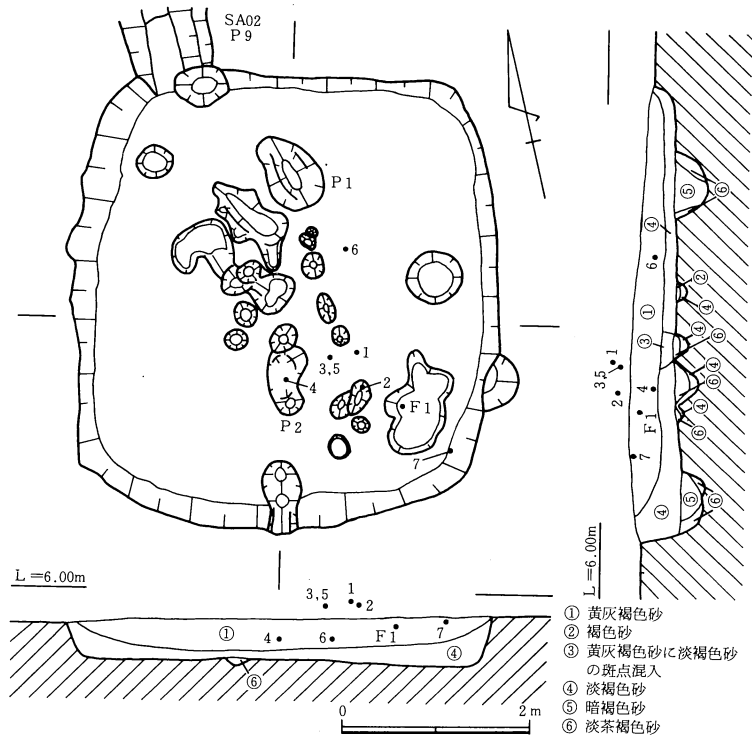


挿図109 SX 65遺物図 (S = 1/4)

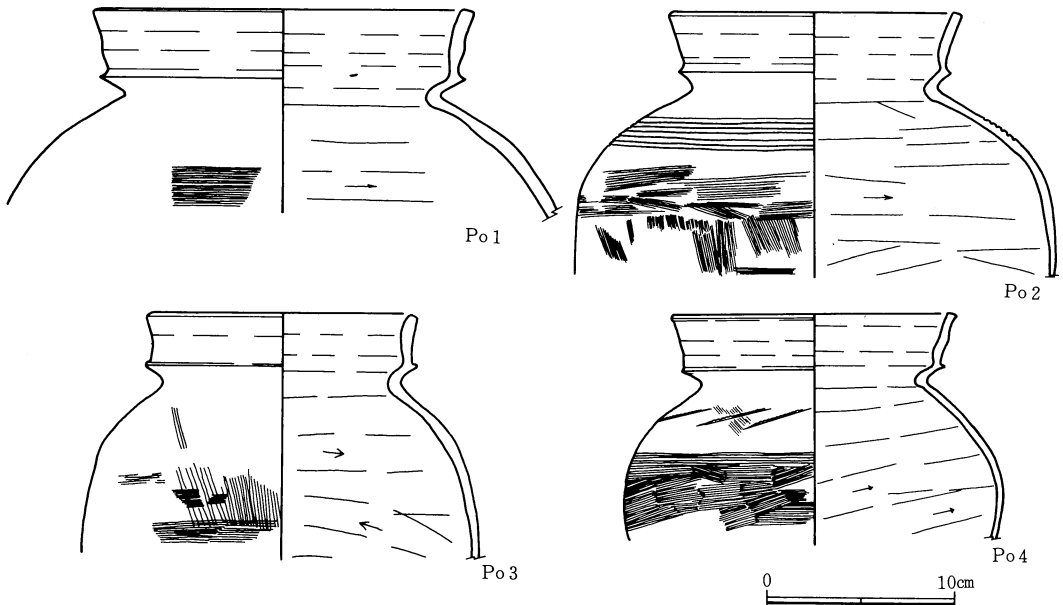


挿図110 SX 66遺構図 (S = 1/40)

みられた。2本柱の建物とみられ柱穴はP 1 (85×60-37), P 2 (45×30-21)cmで、柱穴間距離は3 mを測る。床面に焼砂はみられず特殊ピット、側溝なども検出されなかつた。遺物は多少の土器片が、1号墳の埋葬施設で壊されていない部分から出土した。また、P 2の上面にはPo 4の甕が出土、鉄製品ではF 1の釣針が土器群中から出土した。1号墳第1埋葬施設の掘り方内からは小型丸底壺(1号墳Po 4)が出土しているが、これはS I

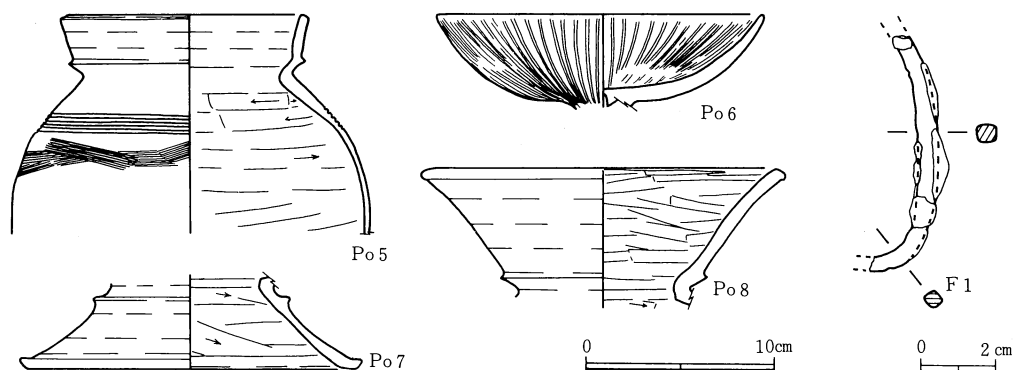


挿図111 S I 91遺構図 (S = 1/80)



挿図112 S I 91遺物図その1 (S = 1/4)

91内にあったものが掘りかえされて埋まったものと考えたい。時期は遺物から長瀬Ⅰ～Ⅱと考えられる。

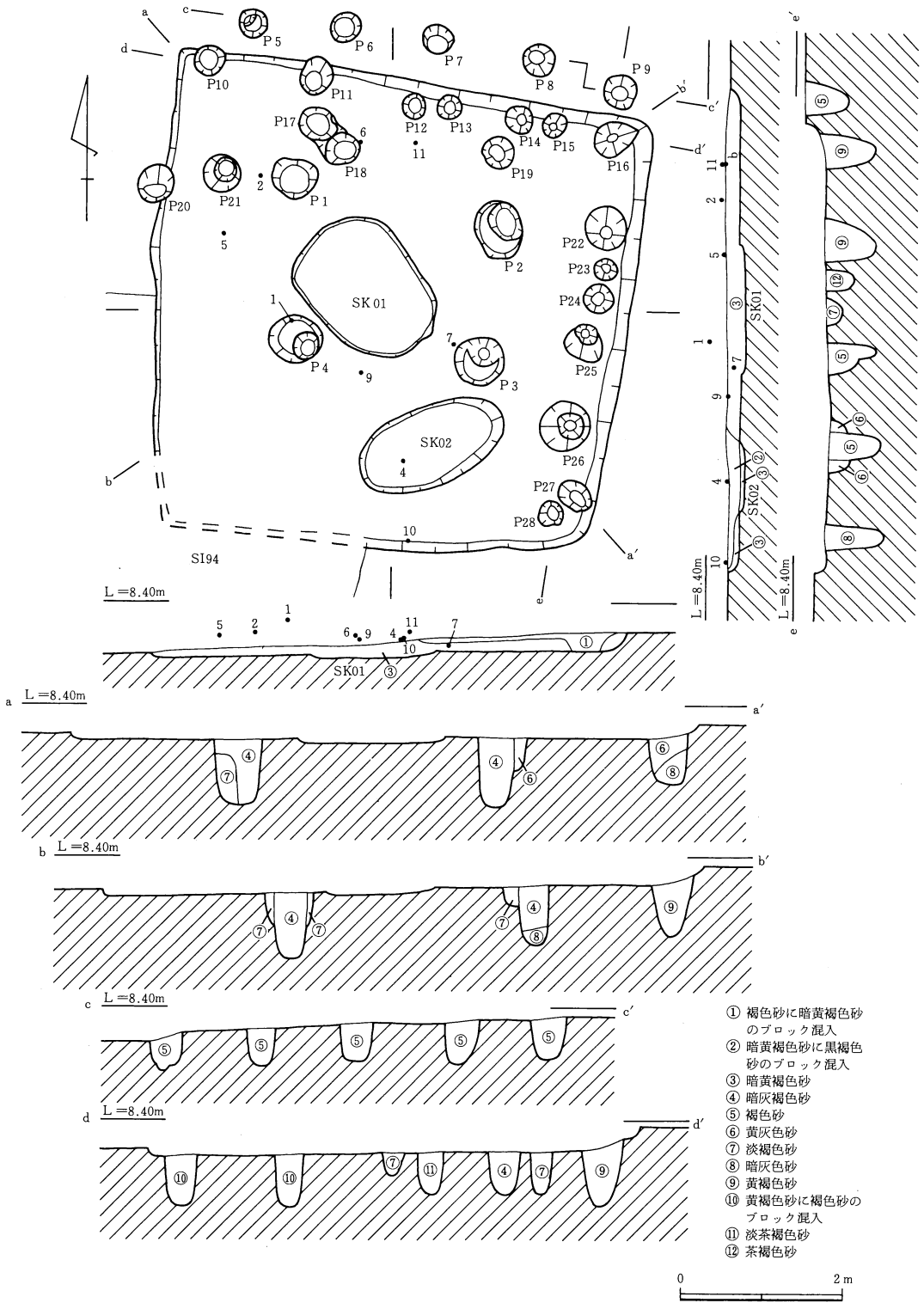


挿図113 S I 91遺物図その2 (土器S = 1/4・釣針S = 1/2)

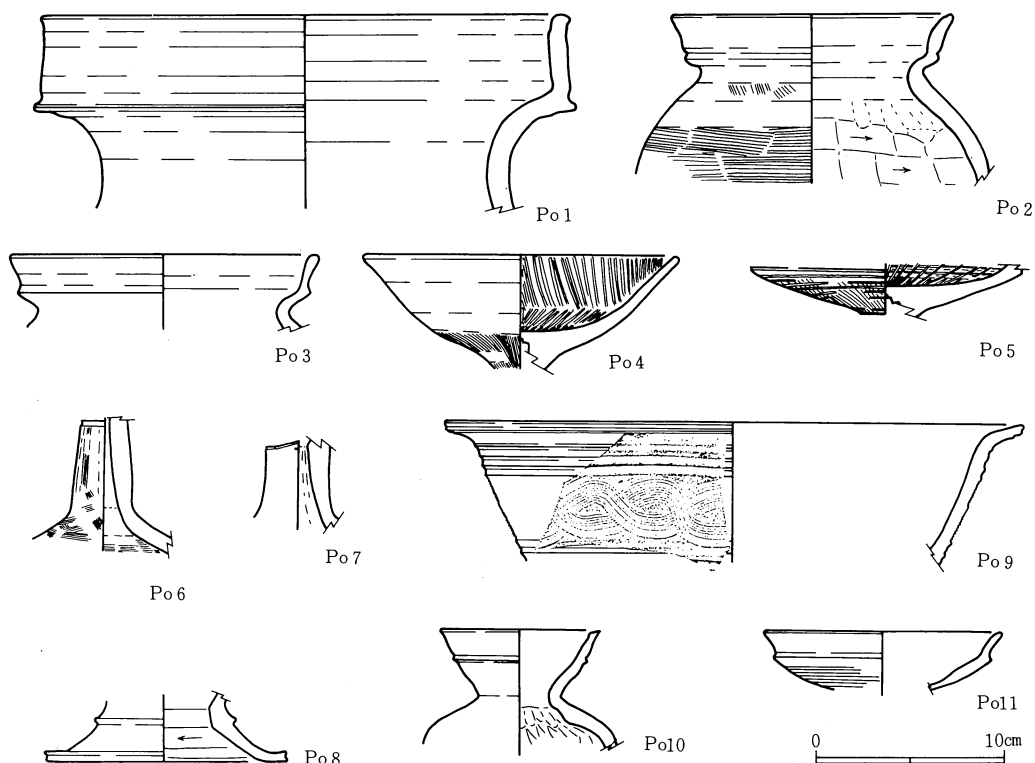
S I 93 (挿図114・115, 図版28・38)

19Eと18E地区の境で、S I 98の南西に位置し、S I 94を切って作られている。平面形は方形で主軸はN - 3° - Eを振る。西側の辺で5.7m, 北側の辺で5.6mを測り床面積は約32.5㎡である。壁高は東側で24cm, 北側で16cmを測る。床面からは多数のピットを検出している。構造柱の柱穴と考えられるものはP 1 (48×56-79), P 2 (70×58-72), P 3 (56×58-83), P 4 (58×66×79) cmの4本であろう。その他北側と東側をめぐるようにP10~P16・P22~P28の計14本の柱穴を検出した。これらは構造柱のP 1~P 4を支える補助柱だったと考えられよう。また、南西側でS I 94を切って作られているものの主に北側と東側に補助柱と考えられるピットがみられることから、S I 93の出入口が南西側に作られていたとも考えられないであろうか。S I 93の床面で検出したピットのほか、S I 93の北側遺構外でP 5 (36×34-44), P 6 (36×36-42), P 7 (36×38-44), P 8 (42×40-50), P 9 (44×40-49) cmの5本の柱穴を検出している。この5本の柱穴と平行するような形で床面にも柱穴がみられるから遺構外の柱穴も補助柱の柱穴の可能性もあるが、風よけかなにかの柵の柱穴とも考えられる。柱穴以外に床面では土壌がみられるが、その性格は不明である。

S I 93は黒砂層などが風蝕によってかなり吹き飛ばされているため、住居と考えられる部分は浅くわずかしかなかった。この床面上25cmの位置で土師器と須恵器を検出した。土師器は長瀬高浜のⅡ期の新しい段階からⅢ期にかけての時期と考えられる。これに対して須恵器は組紐文様をもつ高环形器台 (Po9), 小形甕 (Po10), 無蓋高坏 (Po11) の出土がみられる。Po9・10はS I 93外の黒砂層から出土した破片と接合した。これらは1号墳周辺初期須恵器 (挿図201・203) の古い部類に属し、陶邑編年でTK73の時期と考えられる。TK73の時期を5世紀中頃と考える説をとれば、S I 93出土の須恵器も同じような時期のものといえ、S I 93の時期は出土遺物から古墳時代中期中葉と考えられるが、TK73の時期がより古く考えられるなら、長瀬高浜Ⅲ期ということになる。



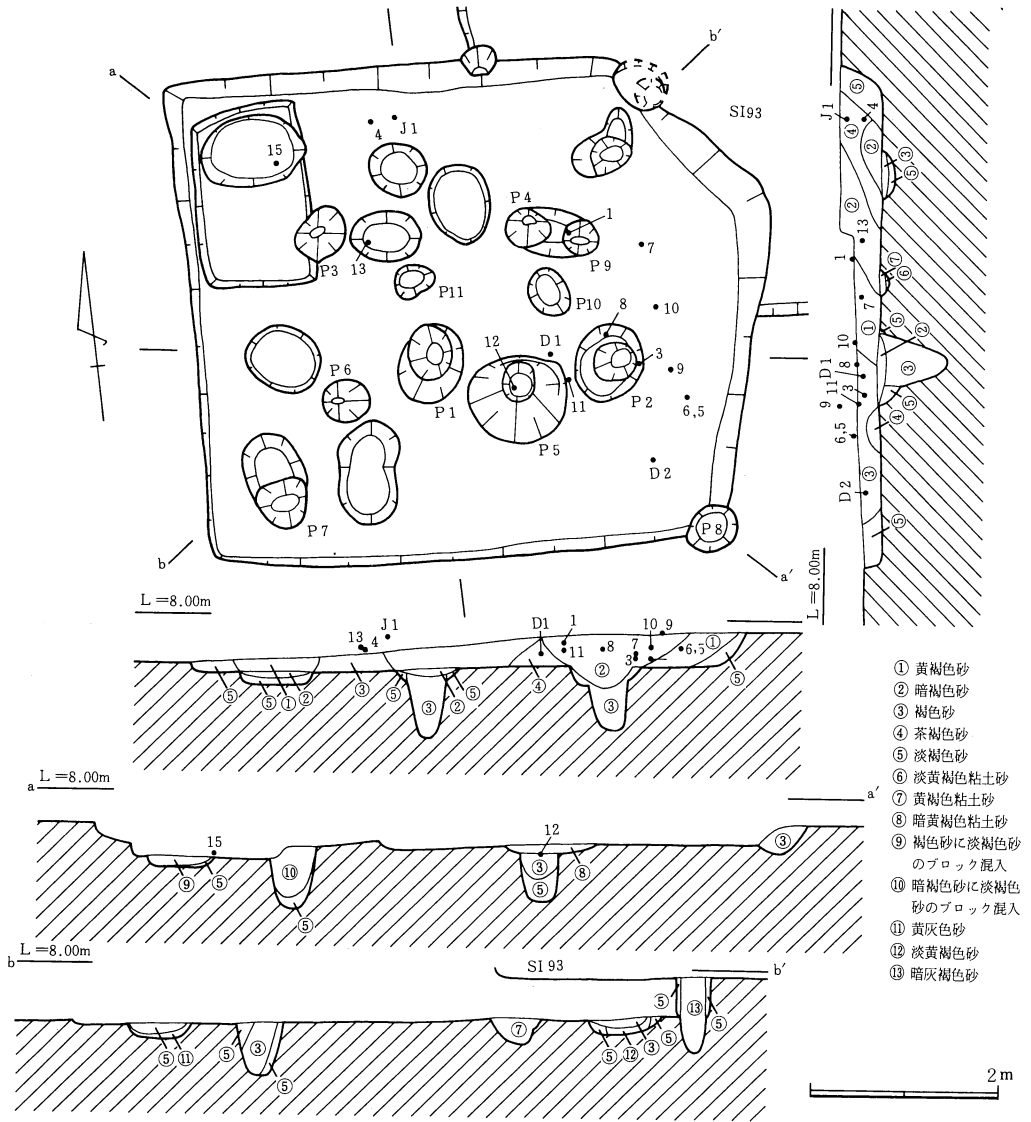
挿図114 S I 93遺構図 (S = 1 / 80)



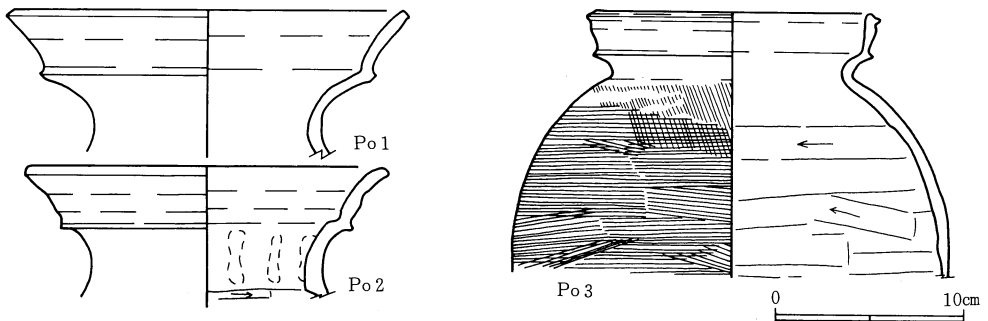
挿図115 S I 93遺物図 (S = 1/4)

S I 94 (挿図116~118, 図版28・38)

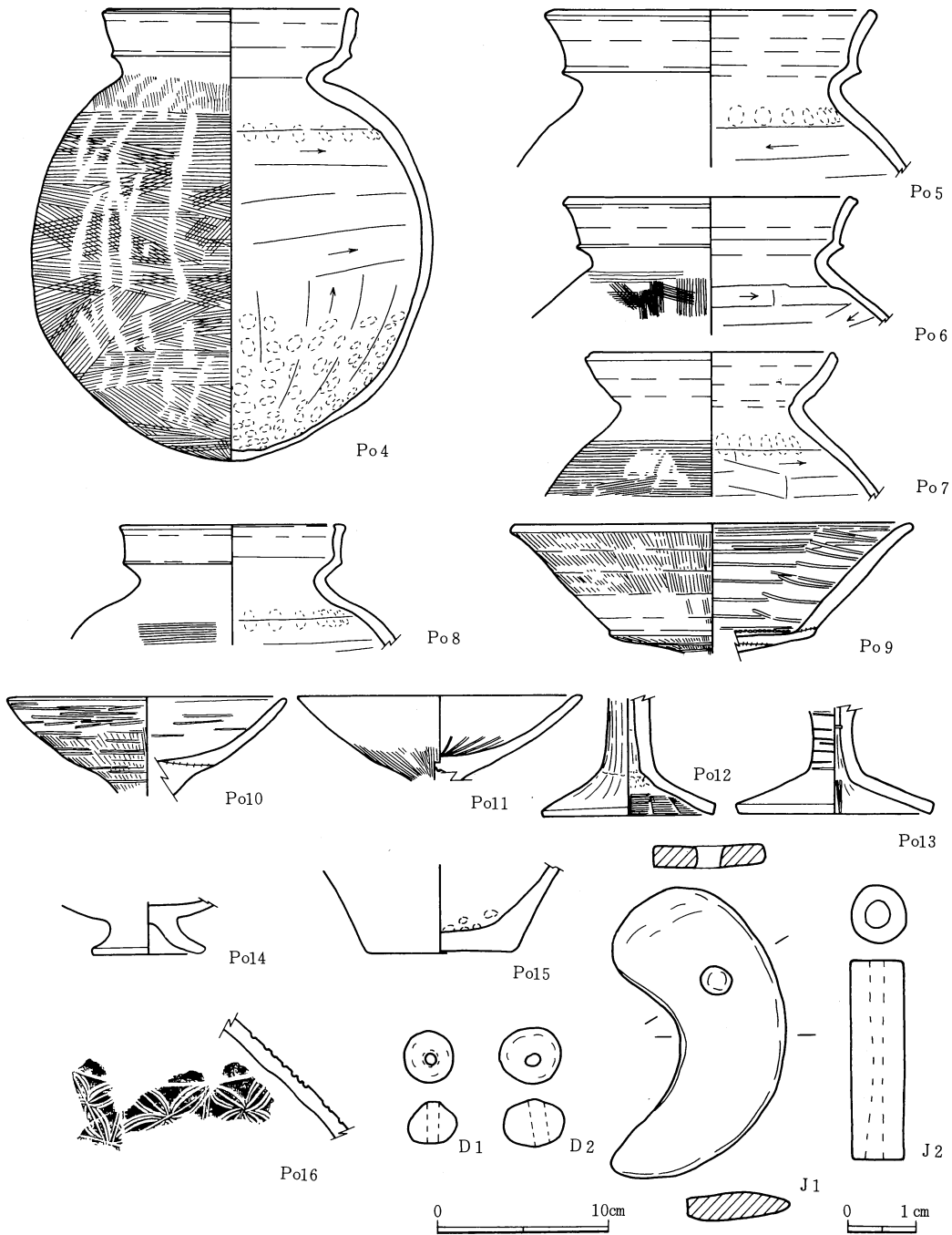
S I 94は1号墳の北東にあり黒砂境界線のすぐ近くにある。北東側をS I 93に切られている。平面形は変形の五角形を呈し、隅は角ばる。床面の大きさは西側の辺で4.8m, 南側の辺で5.3m, 床面積は約26m², 主軸はN-82°-Wを振る。壁高は北側で最大値40cm, 西側で最小値12cmを測る。壁高が低いのは(S I 93も同様)この住居跡が比較的高い場所に作られているため、黒砂層の検出から調査時までの間に風蝕により約80cm程吹き飛ばされたものである。床面から大小20個のピットを検出した。構造柱の柱穴と考えられるものはP 1 (84×64-73) cmとP 2 (76×70-66) cmであろう。しかしこの2つのピットはいずれも深い、床面の中心線にない。平面上ではP 3 (60×52-60), P 4 (42×44-21), P 5 (92×104-58), P 6 (44×50-55) cmの4つが柱穴と考えられるが、P 6が浅い事、P 4・P 5はP 9 (38×40-15), P 10 (48×44-9), P 11 (36×44-12) cmと同様に黄褐色粘土を埋土としている事などの点から柱穴として使用していないと考える。P 3・P 7 (52×52-34) cmはその位置、深さから補助柱であろう。P 4・P 5・P 9~P 11の埋土は黒砂層中にないため客土したものであろう。遺物は東側に集中してみられた。P 5内から高坏(Po12), P 8 (48×52-23) cmからは管玉(J 2)を検出した。出土遺物とS I 93との切り合いから長瀬II~III期と考える。



挿図116 S I 94遺構図 (S = 1/80)



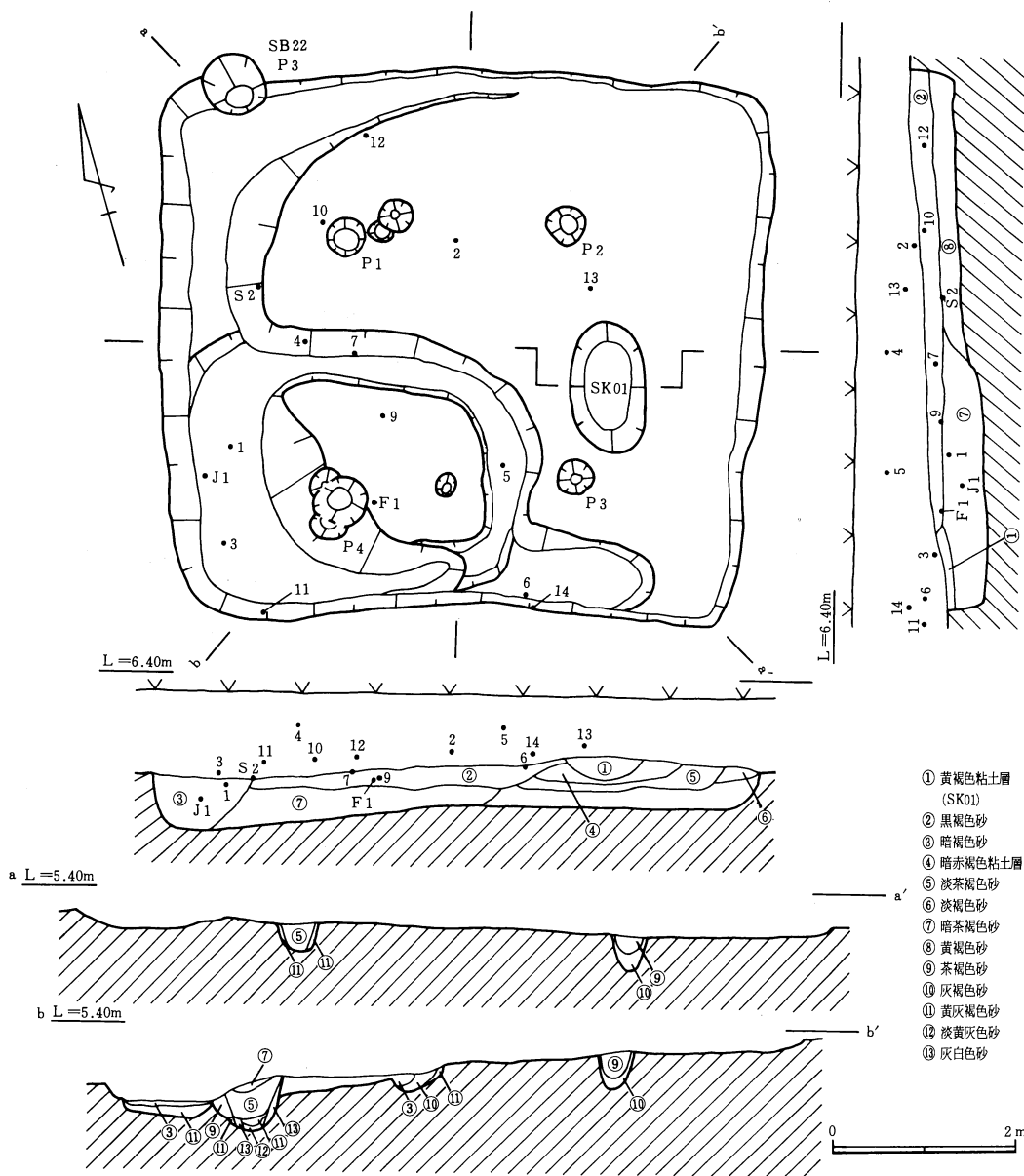
挿図117 S I 94遺物図その1 (S = 1/4)



挿図118 S194遺物図その2 (土器・土玉S=1/4、勾玉S=1/1、管玉S=1/1)

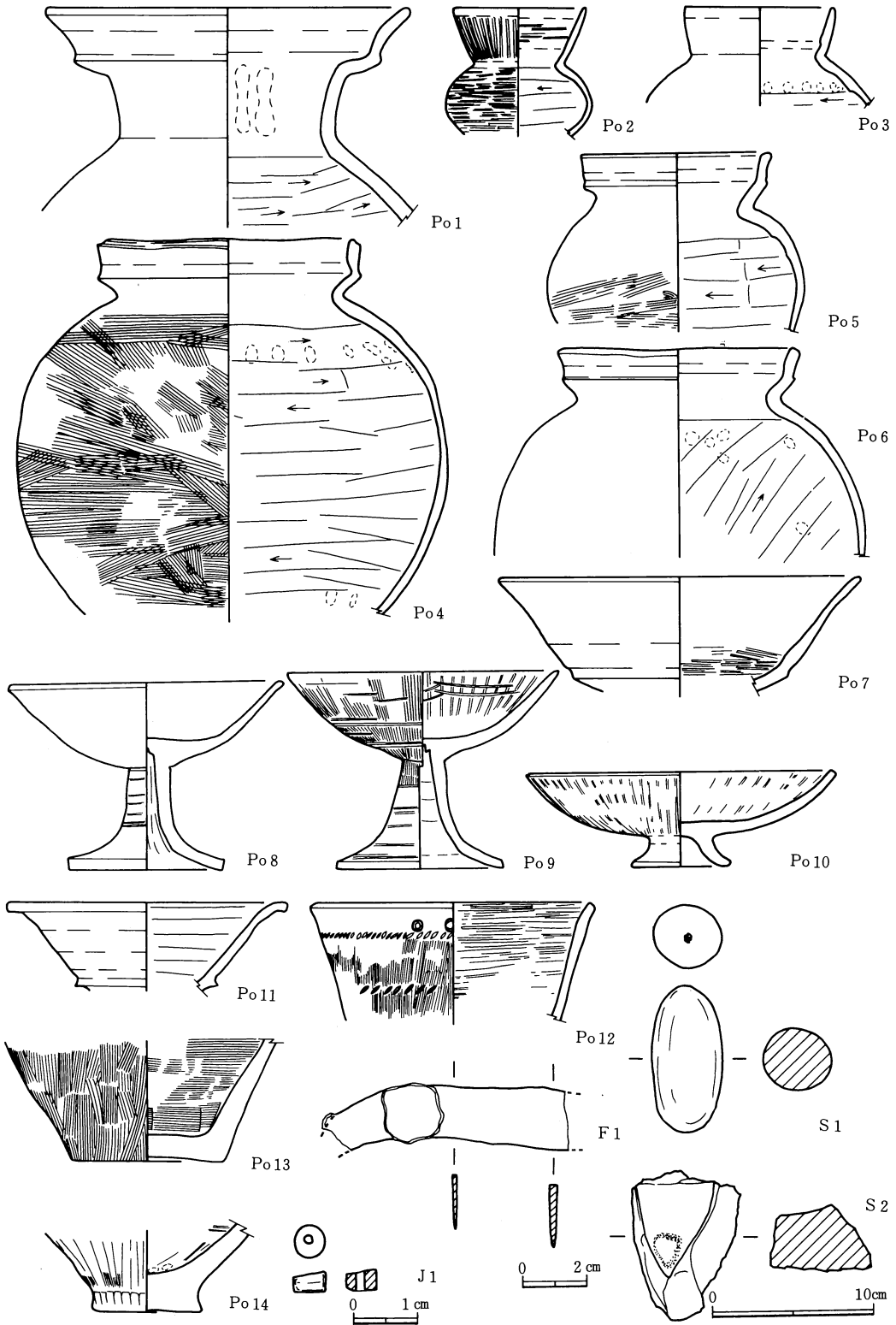
S195 (挿図119・120, 図版29・39)

20E地区で検出した。東側はS X56に、北側はS B22のP 4に切られている。5.8m×6.6mのほぼ角ばったコーナーをもつ正方形に近い長方形をなす。柱穴はP 1 (40×40-40), P 2 (42×42-27), P 3 (36×40-38), P 4 (52×56-49) cmで、4本柱の竪穴



挿図119 S I 95遺構図 (S = 1/80)

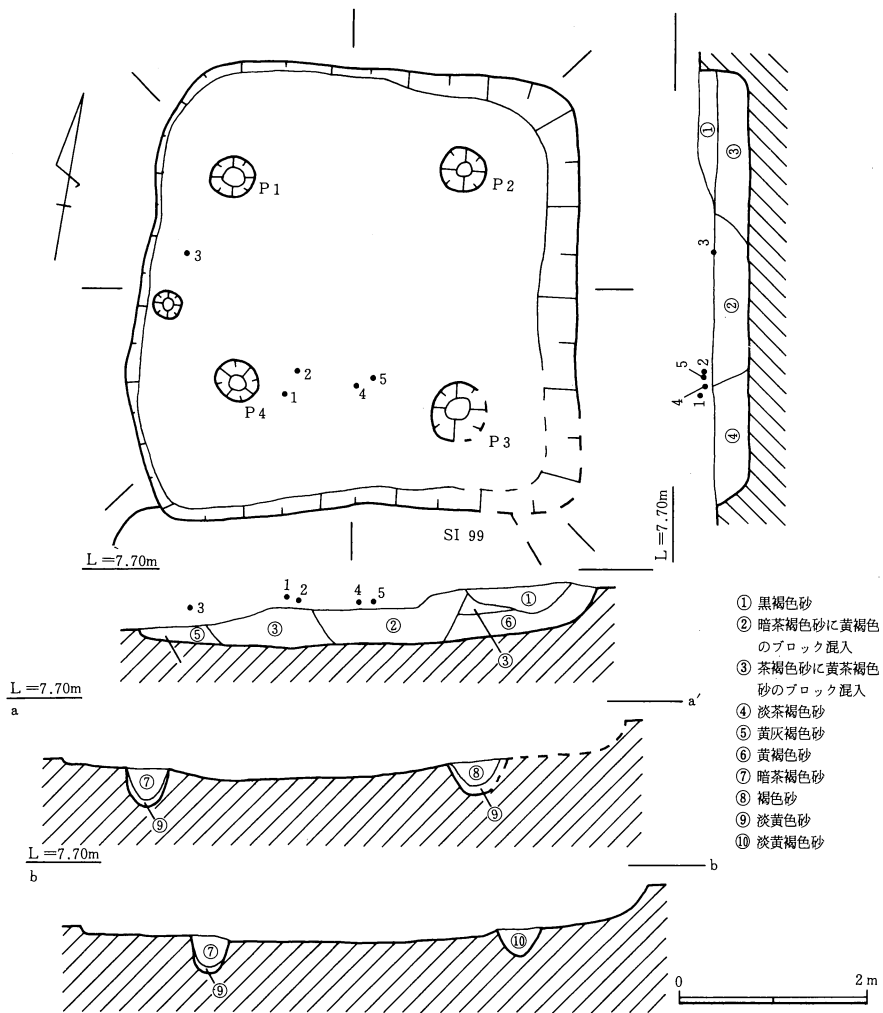
住居跡であると考え。柱穴間距離はP1-P2間から順に2.40, 2.76, 2.56, 2.84mである。上面で粘土の土塊状の堆積SK01を検出したが、遺物は含んでいなかった。このS I 95埋没後の埋砂上にできたものであろう。S I 95の軸方向はN-13°-Eで床面積は約3m²である。S I 95の下層でP4をとりまくような方形の溝を検出した。溝内からは土師器(Po1・3~5・7・9)を検出したがS I 95との関連は不明である。平面プランから時期は古墳時代中期の前半代と考えられよう。



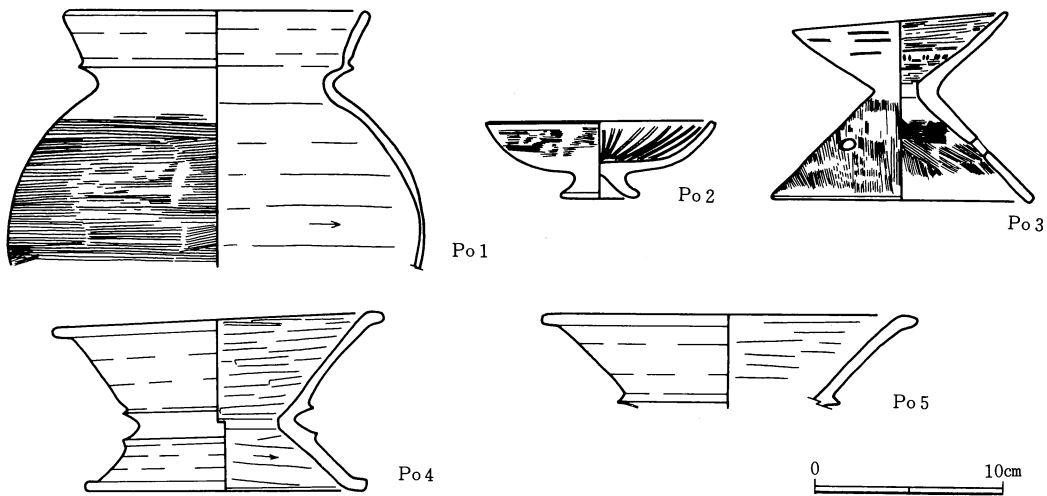
挿図120 S195遺物図 (土器・石S=1/4、鉄製品S=1/2、小玉S=1/1)

S I 98 (挿図121・122, 図版29・39)

19E北西区にあり1号墳の北, S I 93・94の北西に位置し, S I 99と土壙(19E S K 01)と切り合っている。新旧関係はS I 98がS I 99, 土壙より新しい。平面形は方形を呈する。床面の大きさは, 長辺4.52m, 短辺4.38cmを測り, 主軸N-13°-Wである。床面積は19.8㎡である。壁高は南東側で最大値43.2cm, 北西側で最小値4.3cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で5個検出したが構造柱と考えられるものはP1~P4である。プランはP1から順に(44×44-41), (48×44-29), (60×56-31), (46×44-40)cmを測り, 柱穴間距離はP1-P2間から2.52, 2.52, 2.40, 2.24mを測る。特殊ピットと思われるものは検出できなかった。他のピットの用途は不明である。時期は遺物から長瀬Ⅱ期と考える。



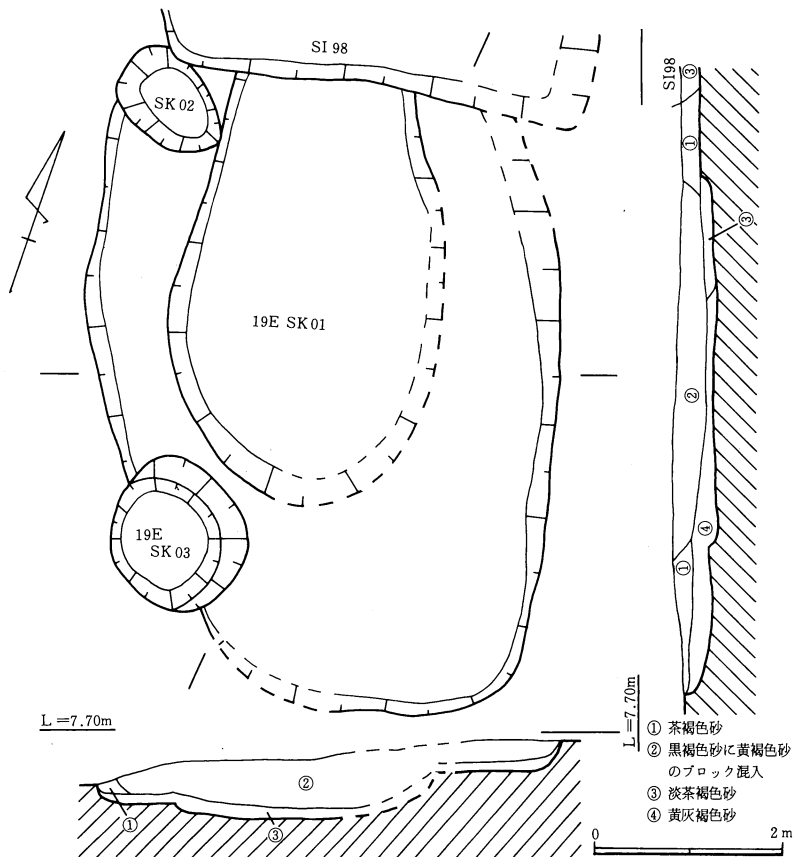
挿図121 S I 98遺構図 (S = 1/80)



挿図122 S I 98遺物図 (S = 1/4)

S I 99 (挿図123, 図版29)

19E地区中央部にあり S I 93・94の西, 1号墳の北に位置し, S I 98と切り合っている。

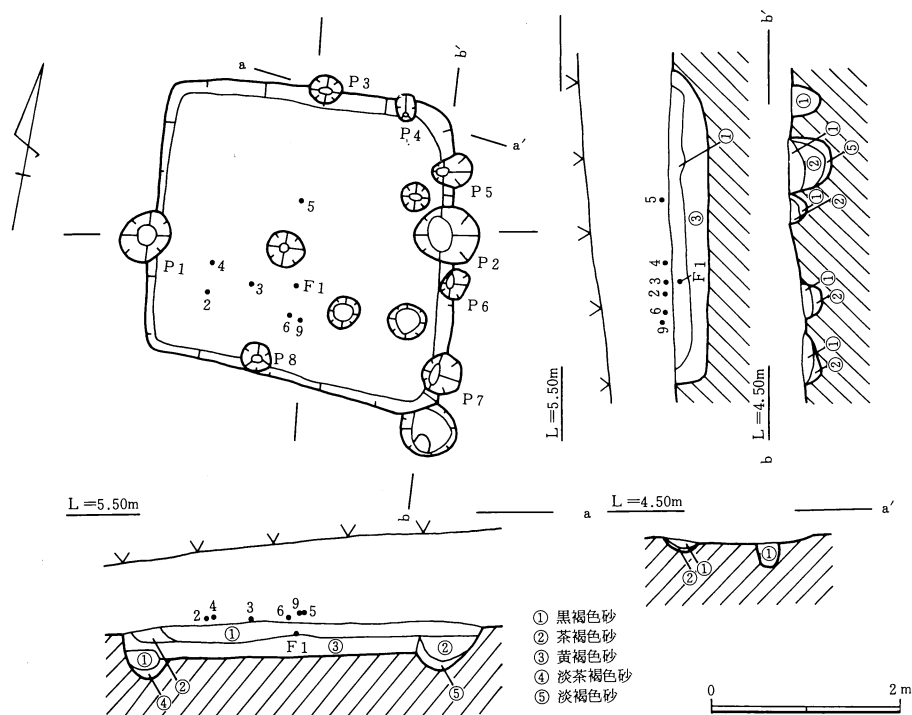


挿図123 S I 99遺構図 (S = 1/80)

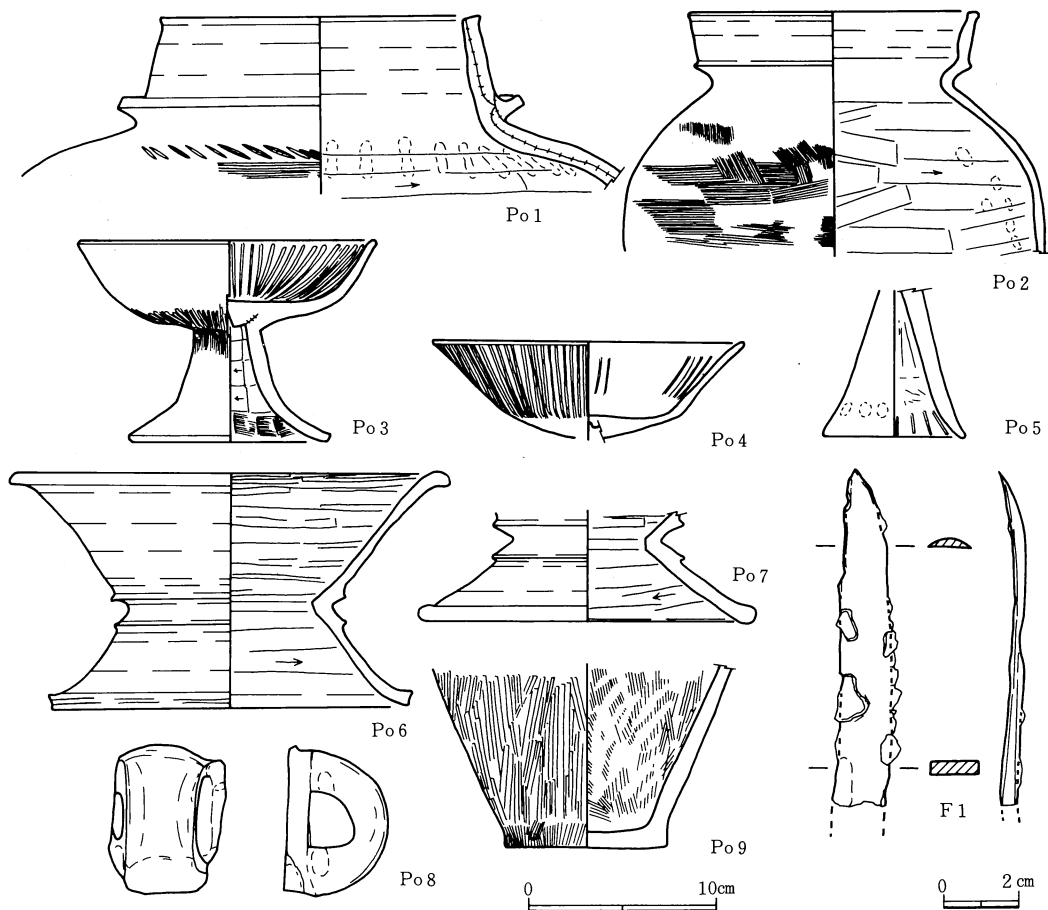
切り合い関係はS I 98より古い。平面形は長方形であるが、南西側のコーナーがややいびつである。床面の大きさは長辺6.80m（推定）、短辺5.04mを測り、床面積は約34㎡である。主軸はN-20°-Wを振る。壁高は北東側で最大値29cm、東側で最小値1cmを測る。床面に土壌（19E S K01）がみられるがS I 99より新しい。柱穴は検出できなかった。南西側肩部に土壌（19E S K03）がありプランは（164×140-33）cmを測るが、土壌内からは弥生土器片が出土しておりS I 99より古い。破線の部分は1号墳墳丘トレンチによって破壊されている。S I 99は柱穴がみられず、他の住居跡と比べ形状が異なるなどのことから、土壌の可能性もある。時期はS I 98（長瀬Ⅱ期）より古い建物であろう。

S I 111（挿図124・125，図版29・39）

21D地区にあり，S B24の南西，S B25の東に位置する。平面形は，東・南辺が西・北辺に比較して多少長いため，歪な正方形といった感じである。床面の大きさは一辺約3mで主軸はN-79°-Eである。床面積は約9㎡になる。黒砂層が厚く堆積していたため，S I 111を検出できた時点でかなり掘り下げていたと思われる。したがって正確な壁高はわからない。ピットは13個検出したが，竪穴住居の構造柱の柱穴とみられるものはP1（52×52-26），P2（56×72-30）cmで，柱穴間距離は3.12mである。P3～P8は補助柱の柱穴と思われる。時期は出土遺物から長瀬Ⅱ期と考える。



挿図124 S I 111遺構図 (S = 1/80)



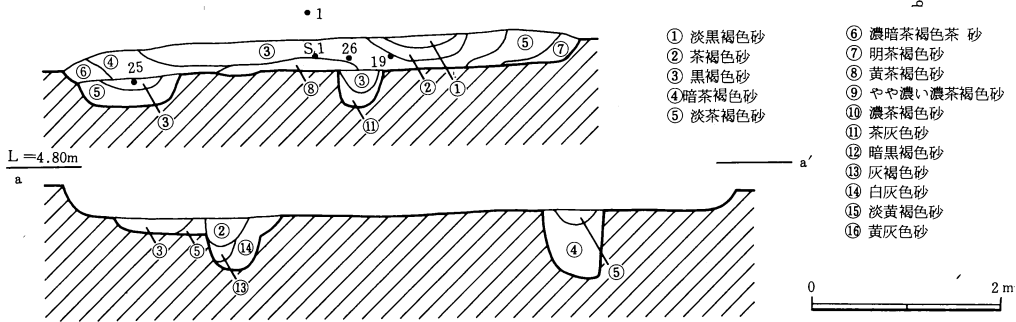
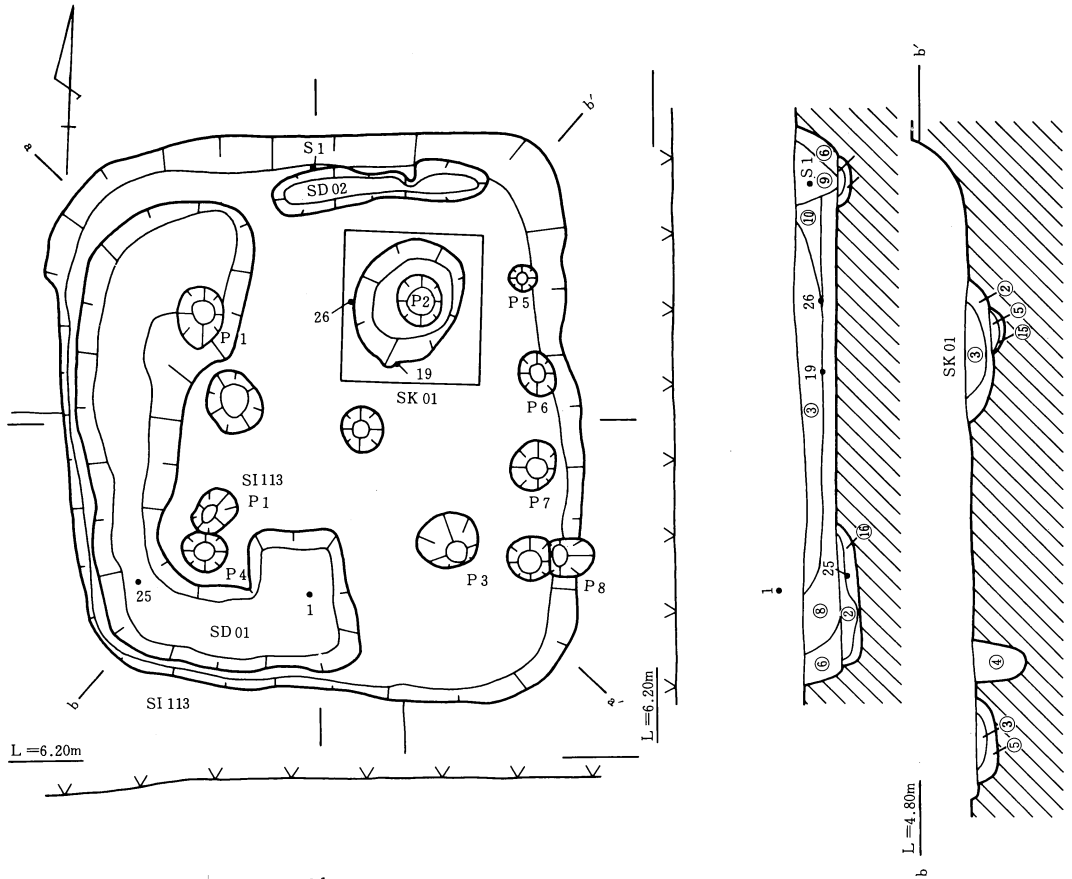
挿図125 S I 111遺物図 (土器S = 1/4・鉄器S = 1/2)

S I 112 (挿図126~131, 図版30・39~41)

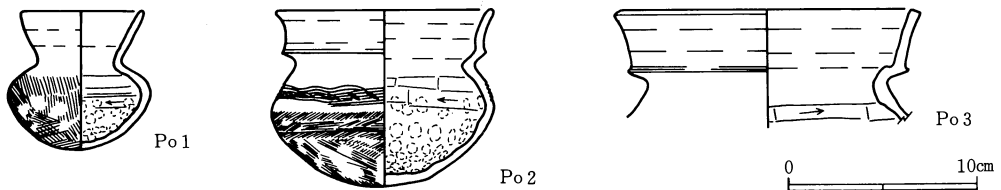
20D地区にあり、S I 95の南に位置し、S I 113を切っている。平面形は隅丸長方形である。床面の大きさは長辺約5.2m, 短辺約4.6mで主軸はN-7°-Wを振る。床面積は約24㎡になる。壁高は約55cmである。ピットは12個検出したが、竪穴住居の構造柱の柱穴とみられるものはP 1~P 4の4個である。プランはP 1 (64×48-37), P 2 (52×48-14), P 3 (56×52-70), P 4 (42×46-55) cmとなる。柱穴間距離はP 1-P 2間から順に2.32, 2.72, 2.72, 2.52mである。P 5~P 8は補助柱の柱穴と思われる。この住居跡で注目されるのがSK 01である。長軸1.40m, 短軸1.08m, 深さ27cmの小さな土壇ではあるが、この中に完形の土師器(Po 2・4・7・12~15・17~22)が多数埋没していた。S I 112を放棄する際に柱穴P 2を広げて、その中に置きさったものと考えられよう。

S I 112内にみられるSD 01・02は、S I 112と関係のある遺構と推測するが、その性格は不明である。

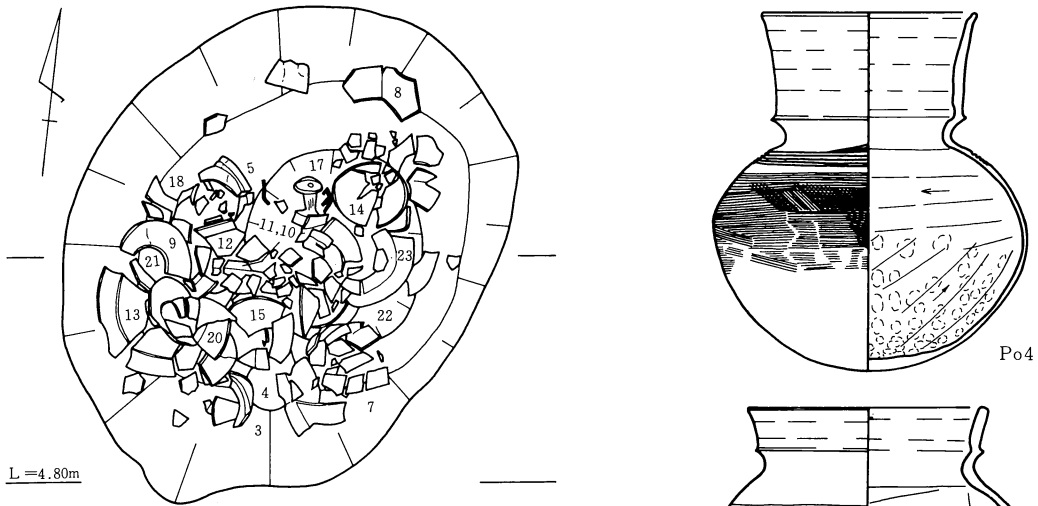
S I 112の時期は、SK 01内の遺物などから長瀬I期の新しいところと考えられる。



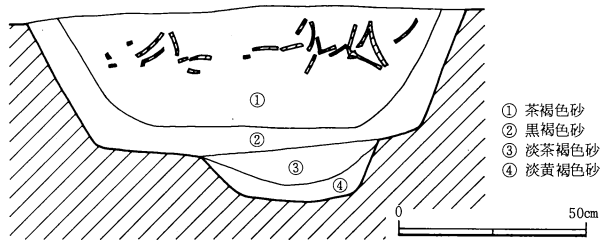
挿図126 S I 112遺構図 (S = 1/80)



挿図127 S I 112遺物図その1 (S = 1/4)

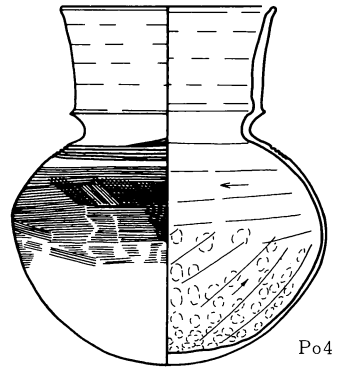


L=4.80m

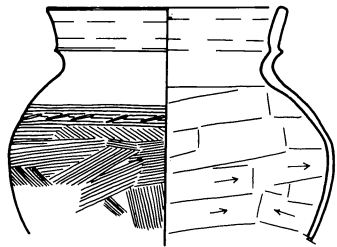


- ① 茶褐色砂
- ② 黒褐色砂
- ③ 淡茶褐色砂
- ④ 淡黄褐色砂

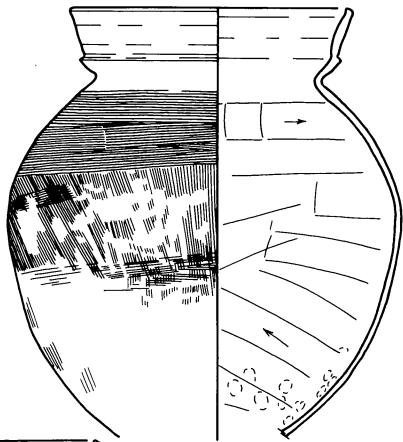
挿図128 S I 112内S K 01土器出土状況図 (S = 1 / 20)



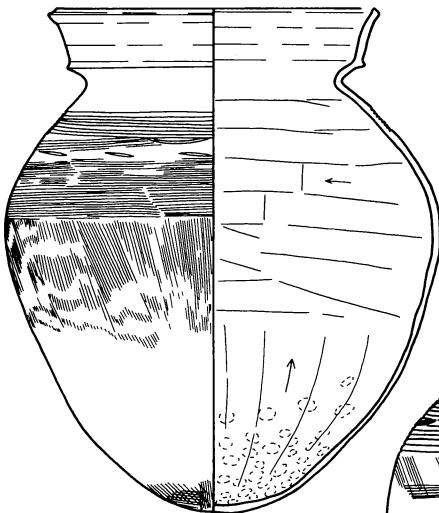
Po4



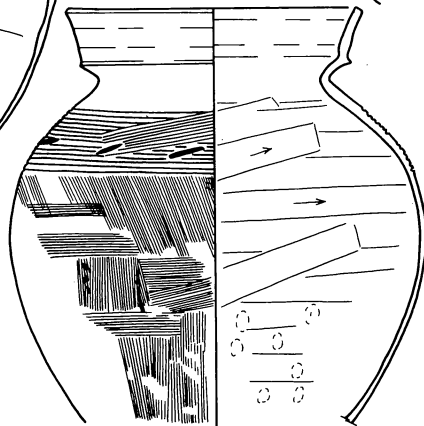
Po5



Po6



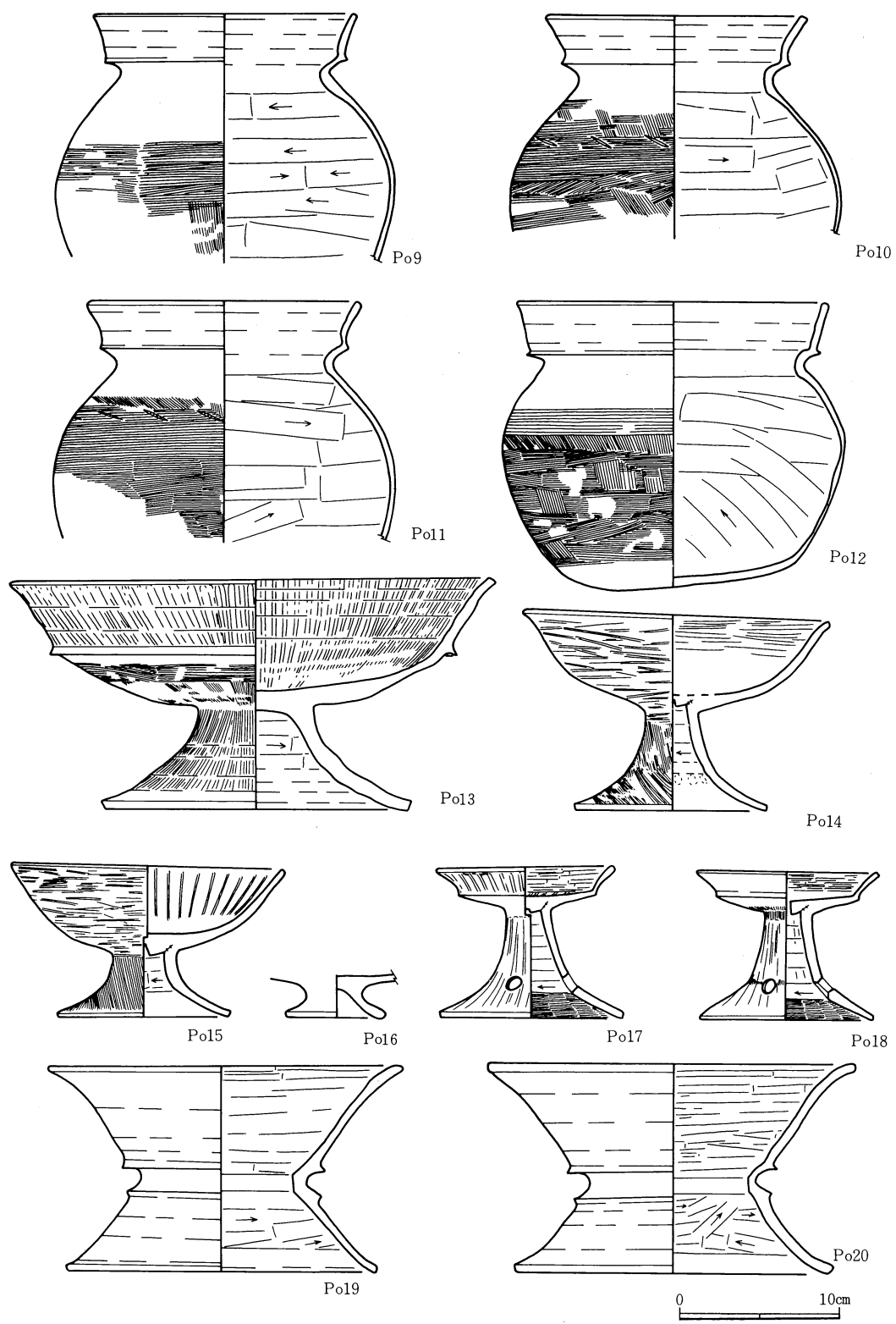
Po7



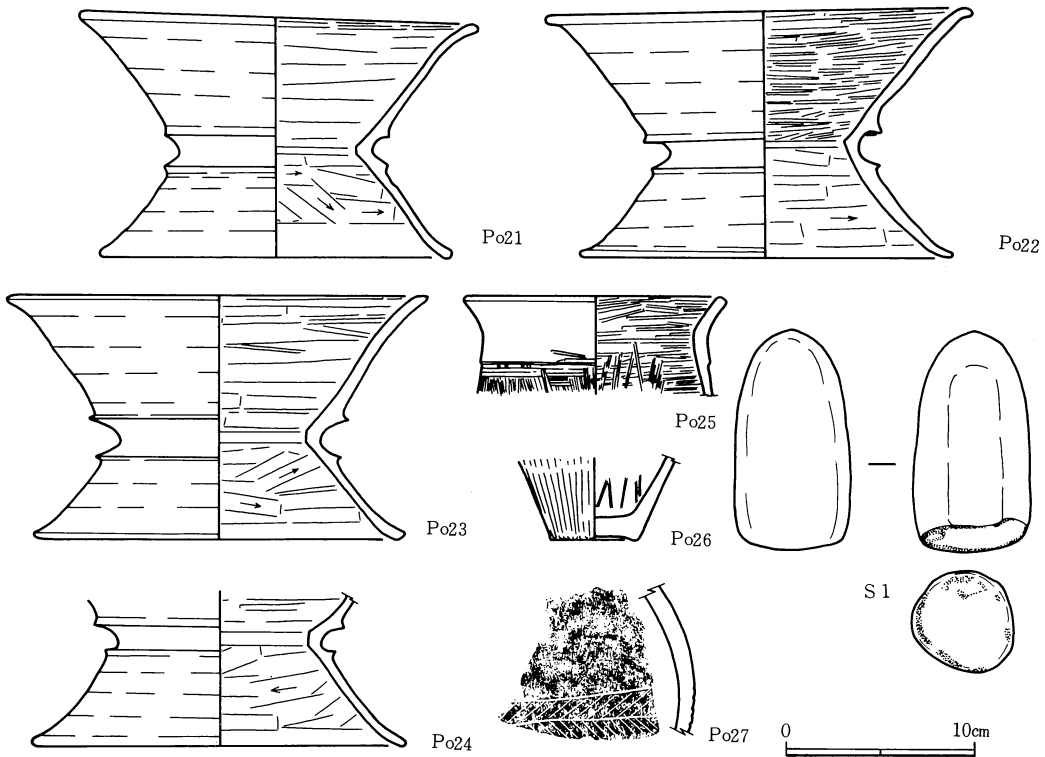
Po8



挿図129 S I 112遺物図その2 (S = 1 / 4)



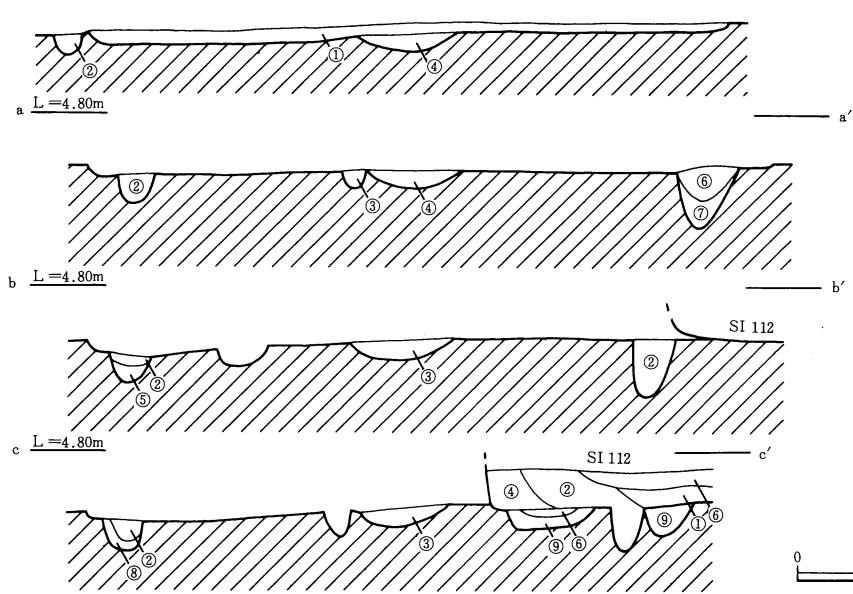
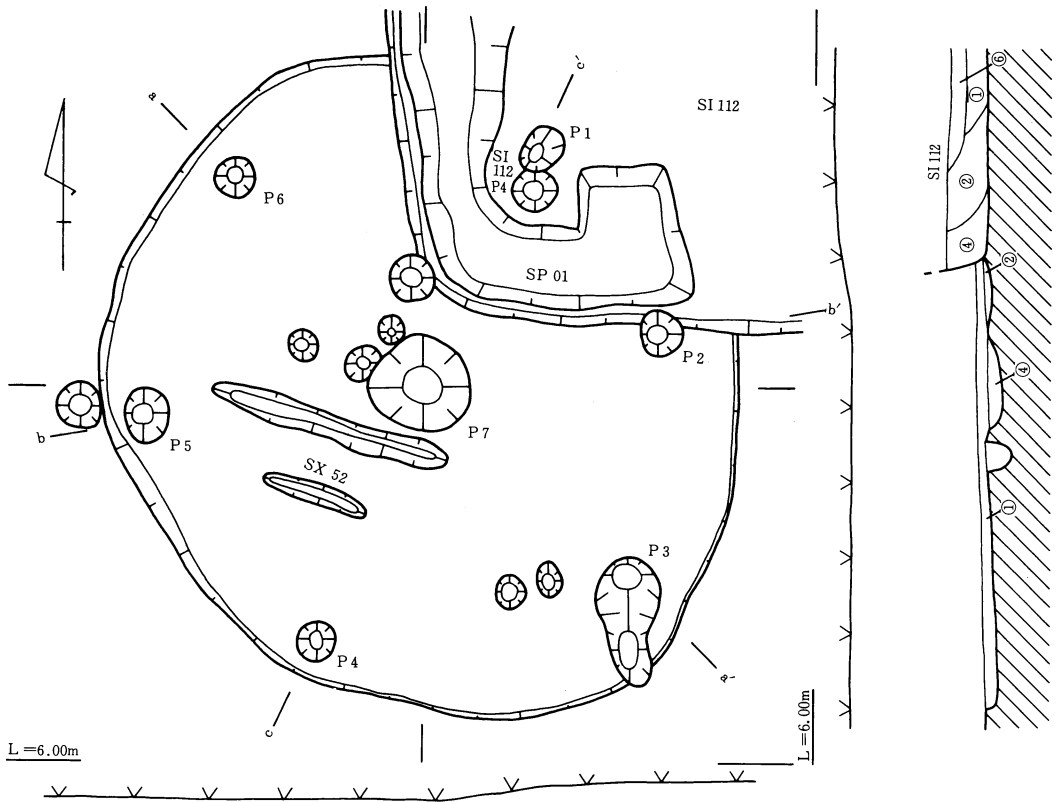
挿図130 S I 112遺物図その3 (S = 1/4)



挿図131 S I 112遺物図その4 (土器・擦石 S = 1/4)

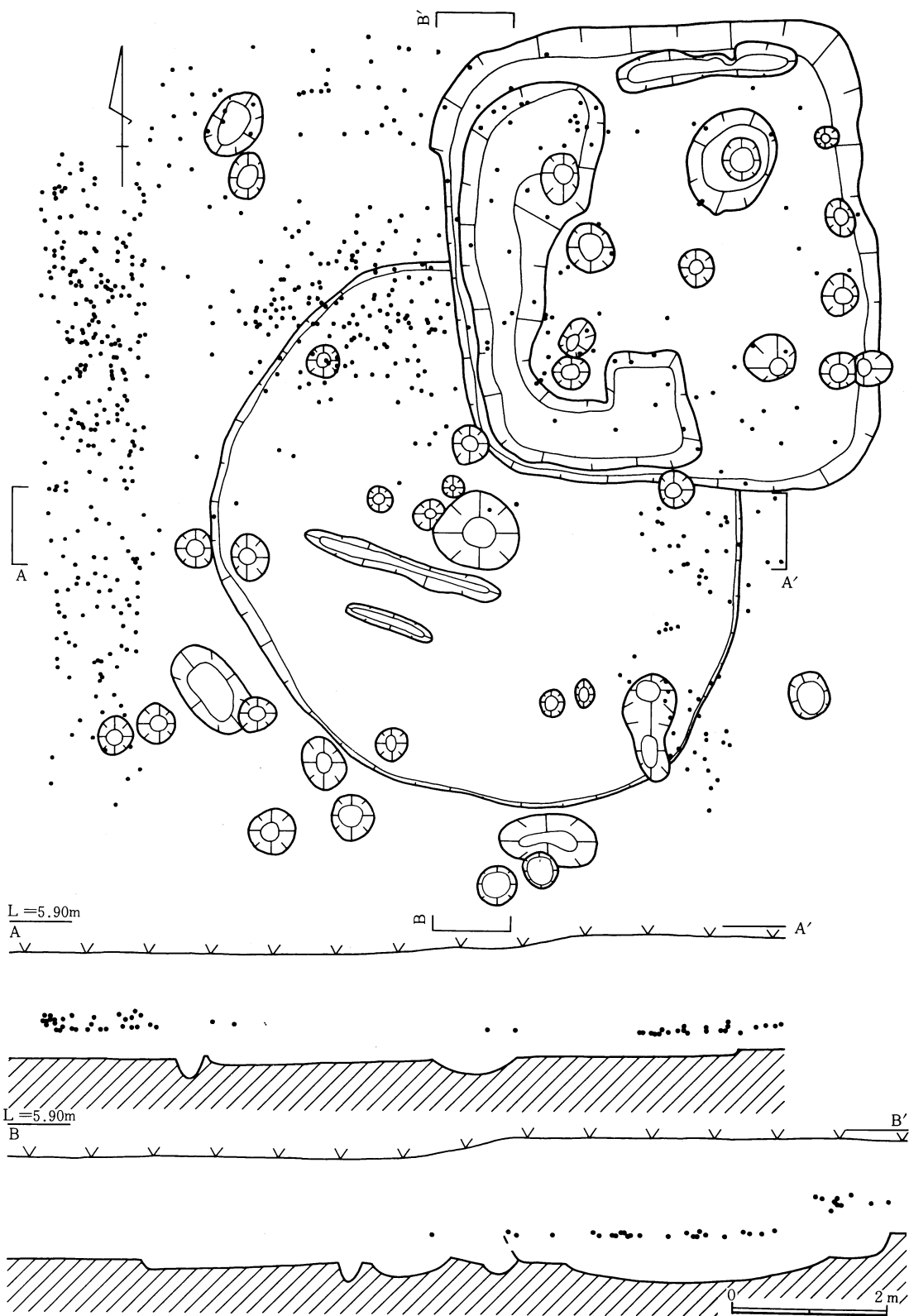
S I 113 (挿図132~144, 図版30・41・42)

20D地区にあり、S I 117の南東に位置する。主軸はN-12°-Wを振る。この住居跡は弥生時代前期の玉作工房跡と考えられる。北東側を古墳時代前期のS I 112によって切られ、また真上にはS X52が築造され、その掘り方は、S I 113の床面より深く掘られている。またS I 113の南側や西側には、多数のピットも検出されている。これらによって激しい攪乱を受けていたため、平面形が円形の住居跡とはっきり確認できるまでには、かなり掘り下げなければならなかった。したがって壁高はわずかに16cmを測るにすぎない。床面積は約36㎡になる。床面からは十数個のピットを検出したが、S I 113の柱穴と考えられるものはP 1~P 6の6個である。プランはP 1から順に(48×38-32), (48×44-59) (推定), (72×60-61), (40×40-31), (58×48-29), (42×42-30) cmで、柱穴間距離はP 1-P 2間から2.32, 2.60, 3.36, 3.04, 2.72, 3.20mである。P 7 (102×108-20) cmは中央に位置するピットで、長瀬高浜遺跡では中央特殊ピットと呼び祭祀関係のピットと考えているが、その中から多数のチップと管玉未製品が出土した。玉作工房内でよくみられる工作用ピットと、竪穴住居内の中央特殊ピットが1つとなったものではなかろうか。鳥取市・布勢遺跡の玉作工房でもこのピットが存在した。^{注1}ここでは仮りに工作用ピットと考えよう。S I 113の時期はPo 1・Po 2より弥生時代前期中葉~後葉と考える。

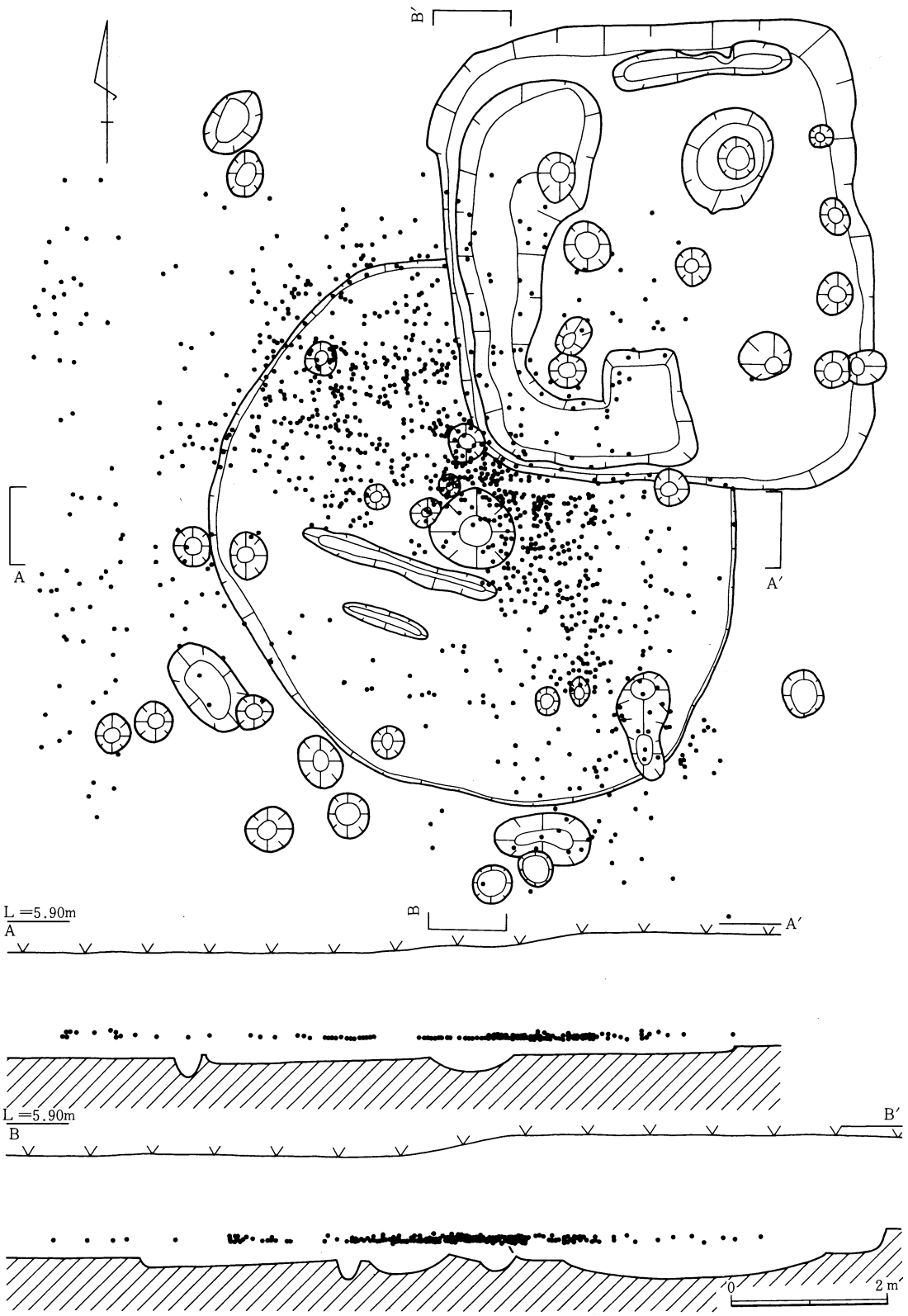


- ① 黄茶褐色砂
- ② 暗茶褐色砂
- ③ 淡黑褐色砂
- ④ 浓暗茶褐色砂
- ⑤ 黄褐色砂
- ⑥ 黑褐色砂
- ⑦ 茶褐色砂
- ⑧ 淡黄褐色砂
- ⑨ 淡茶褐色砂

插图132 S I 113遺構図 (S = 1 / 80)



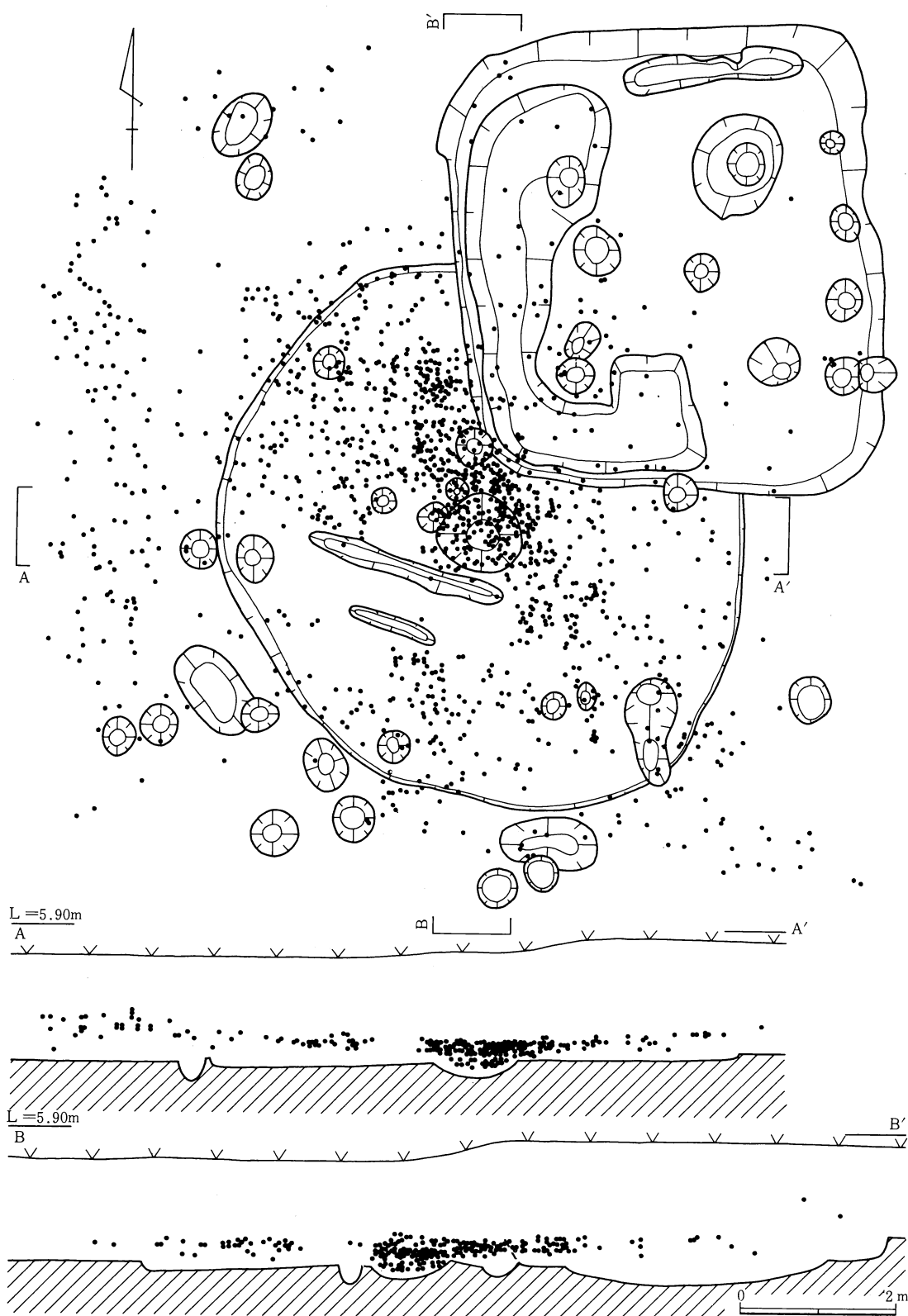
挿図133 S I 113遺物出土状況図その1 (軟質碧玉チップ上層 S = 1/80)



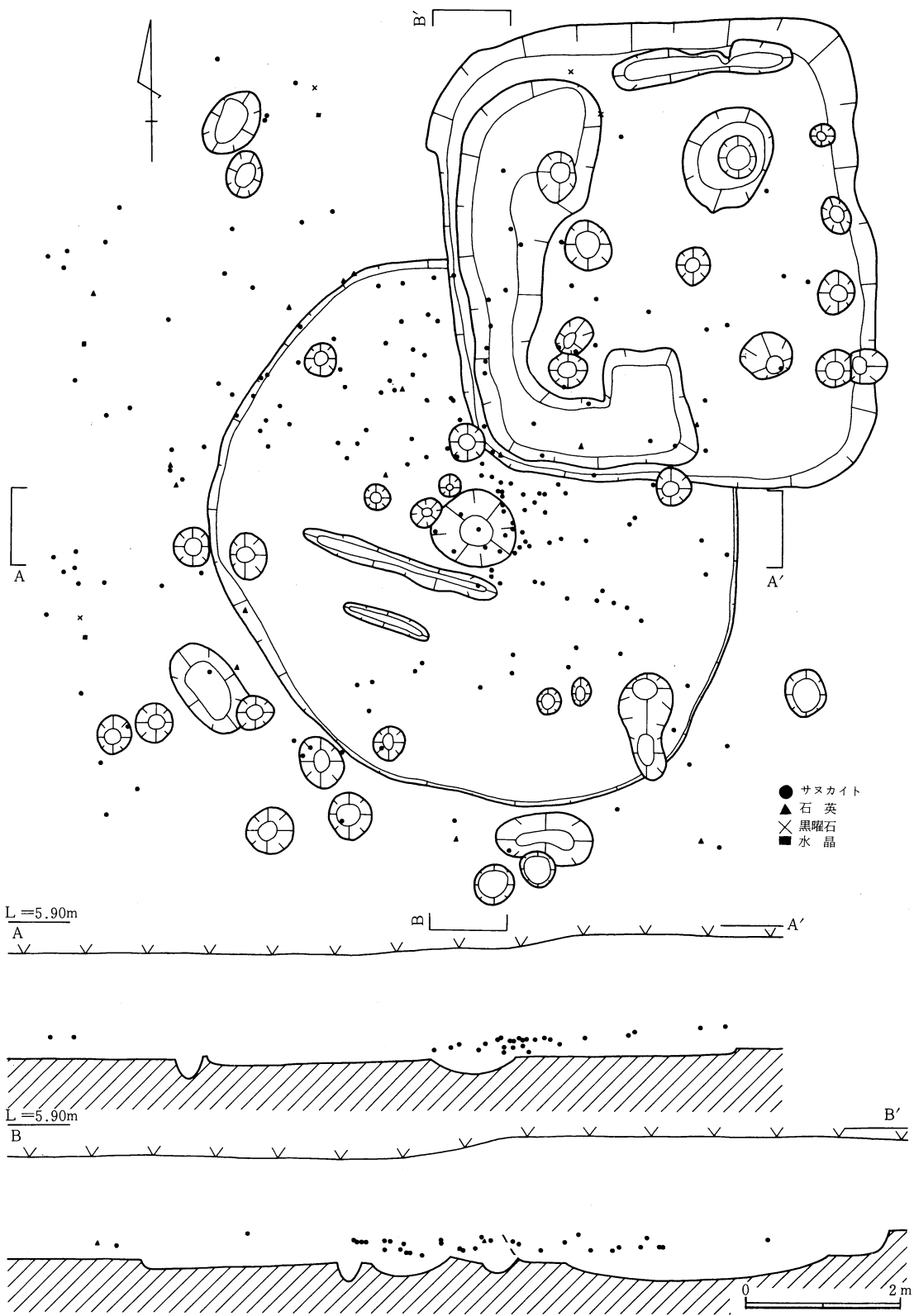
挿図134 S I 113遺物出土状況図その2 (軟質碧玉チップ中層 S = 1/80)



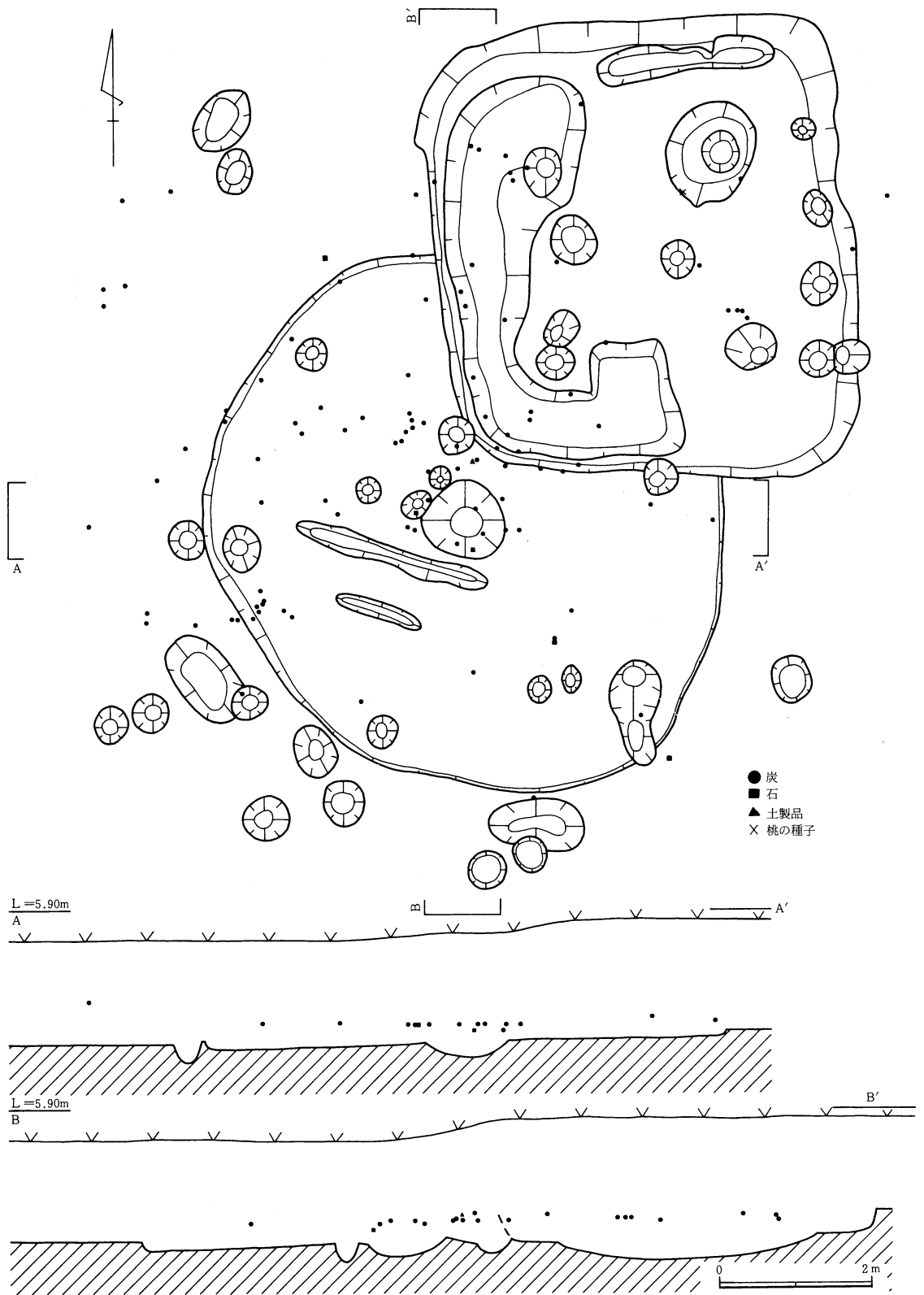
挿図135 S I 113遺物出土状況図その3 (軟質碧玉チップ下層S = 1/80)



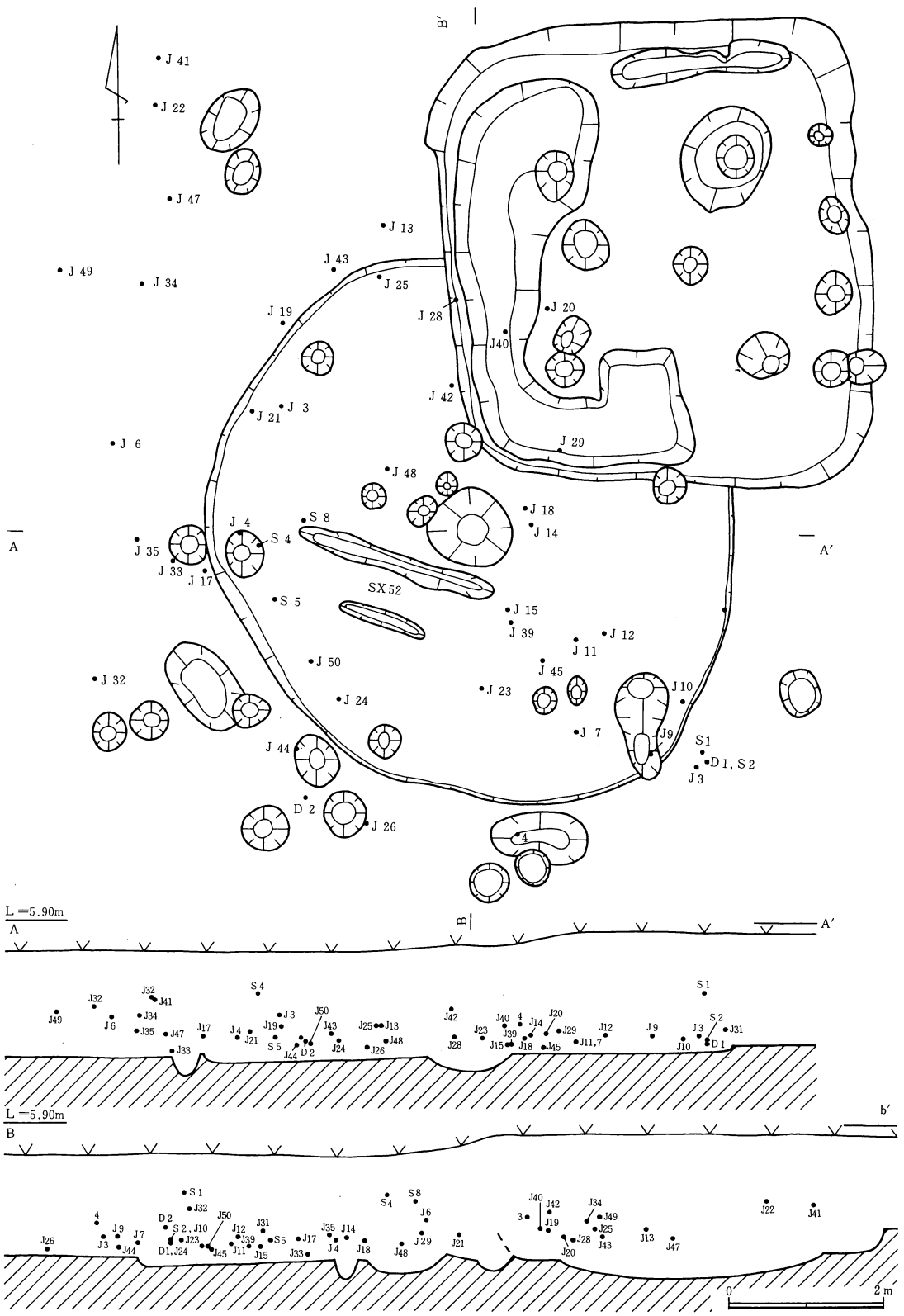
挿図136 S I 113遺物出土状況図その4 (玉髓チップ S = 1/80)



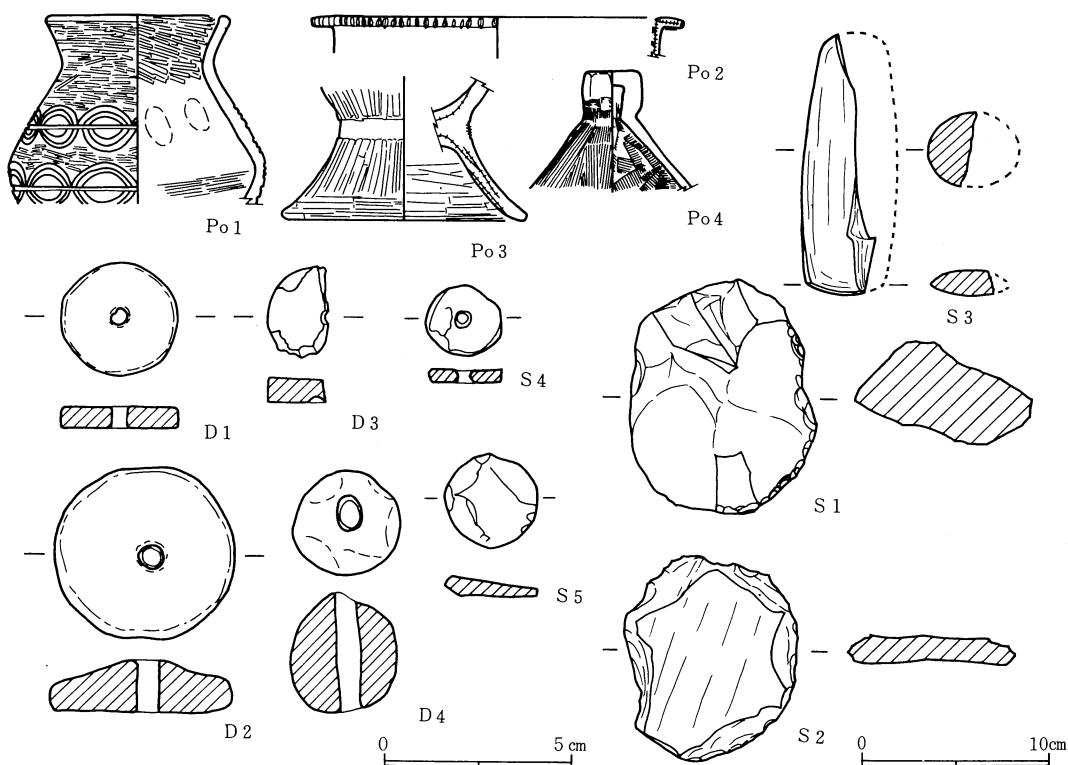
挿図137 S I 113遺物出土状況図その5 (S = 1/80)



挿図138 S I 113遺物出土状況図その6 (S = 1/80)



挿図139 S 1113遺物出土状況図その7 (S = 1/80)

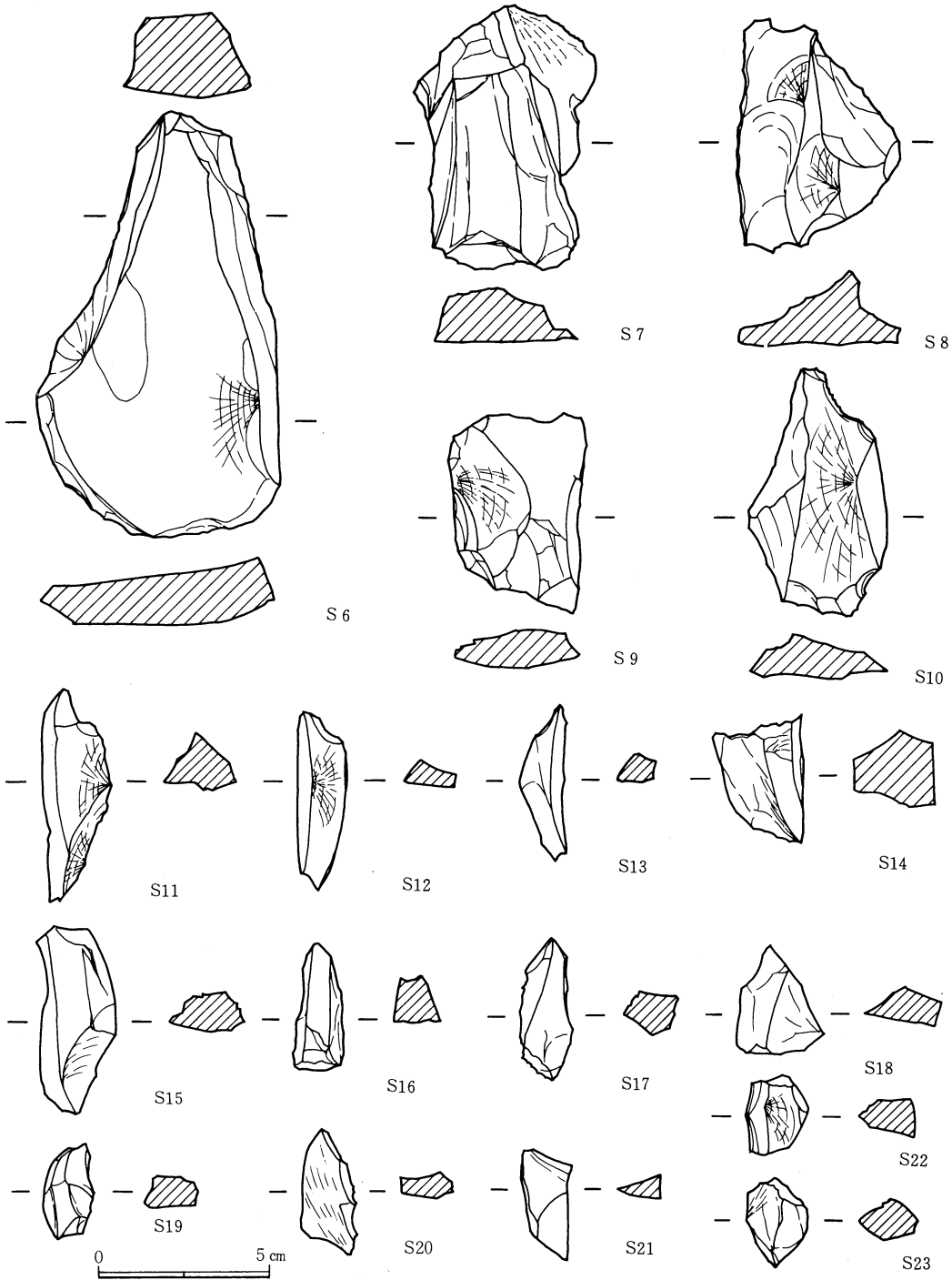


挿図140 S I 113 遺物図その1 (土器・石製品 S = 1/4 土製品・石製品 S 1/2)

この S I 113より検出したものは、碧玉のチップ約3150個、玉髓のチップ約1390個、サヌカイト・石英・黒曜石・水晶のチップ、炭・土製品、そして管玉未製品と重弧文の描かれた弥生土器 (Po1) とその他の弥生土器片 (Po2~4) である。(挿図140) 碧玉のチップをレベル的に3層に分けたものが挿図133~135である。これを見ると上層 (挿図133) では、SX52の築造による攪乱によっておきた空白部分がはっきり読みとれる。中層 (挿図134) になると S I 113の中央部分にチップ集中する。下層 (挿図135) になると P 7を中心にチップ群が集中しているのが読みとれる。挿図136は玉髓の位置を示しているが、やはり P 7を中心に集中していることが分る。挿図137はサヌカイト・石英・黒曜石・水晶の位置を示し、挿図138は炭・石・土製品の位置を示す。

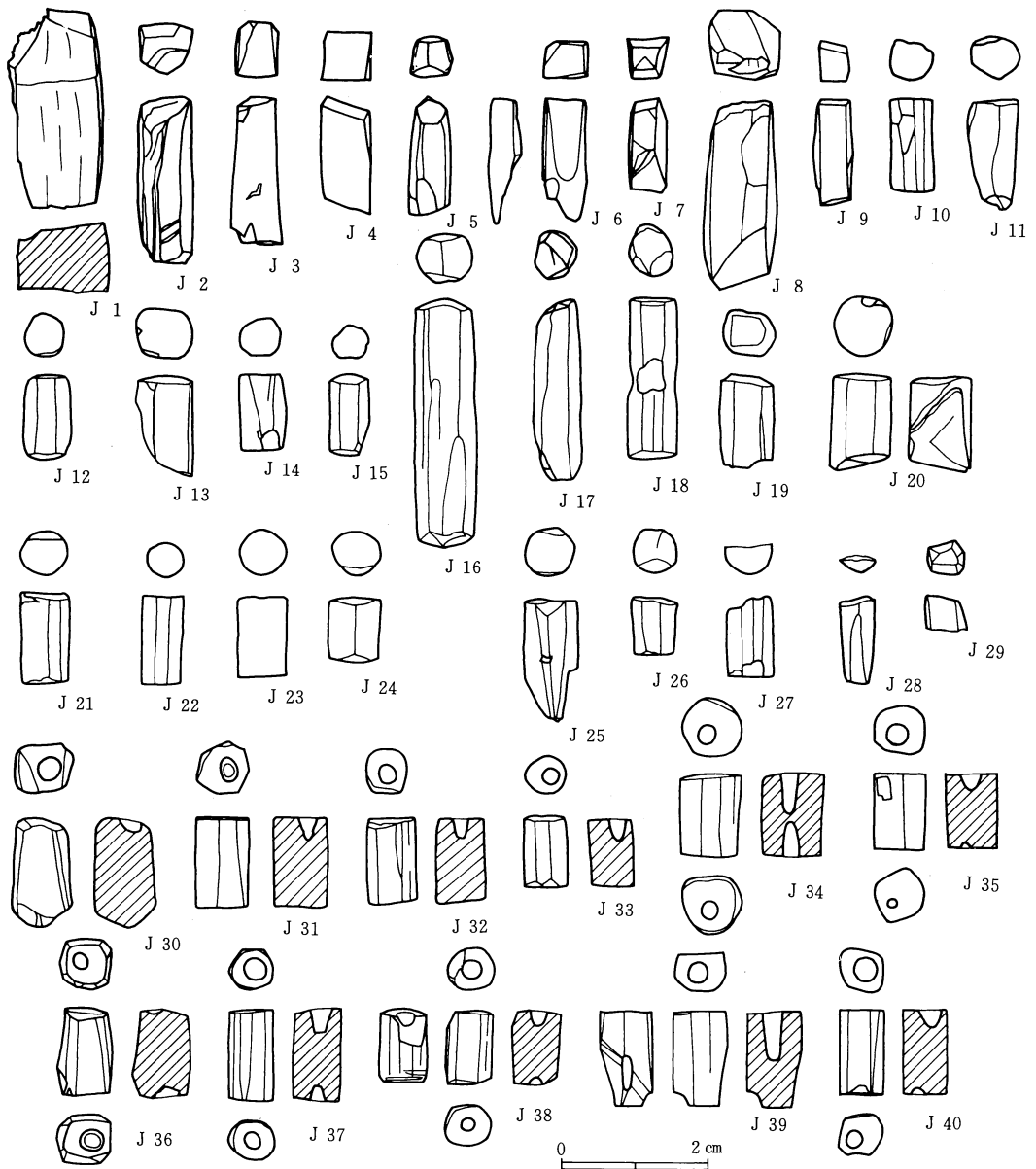
工作用ピット (P 7) からは管玉未製品、碧玉のチップ、玉髓のチップ、土製品そして Po1 を検出している。床面からは弥生土器片しか検出されず、また鉄器もなく平面形もいびつな円形であることなどから S I 113は弥生時代前期の竪穴住居跡と考えられる。

S I 113出土の未製品を検討してみた。まず、数多くの原石 (S 6) を割ったフレイクがある (S 7~10)。形割り (S 11~23) されて扁平な部分が多く、切りはなし面では貝殻状リングが多くみられる。この形割り工程に使われたとみられる研磨面をもつハンマー (S 1) が S I 113から出土している。刃部は打痕により小リングが多くみられる。形割



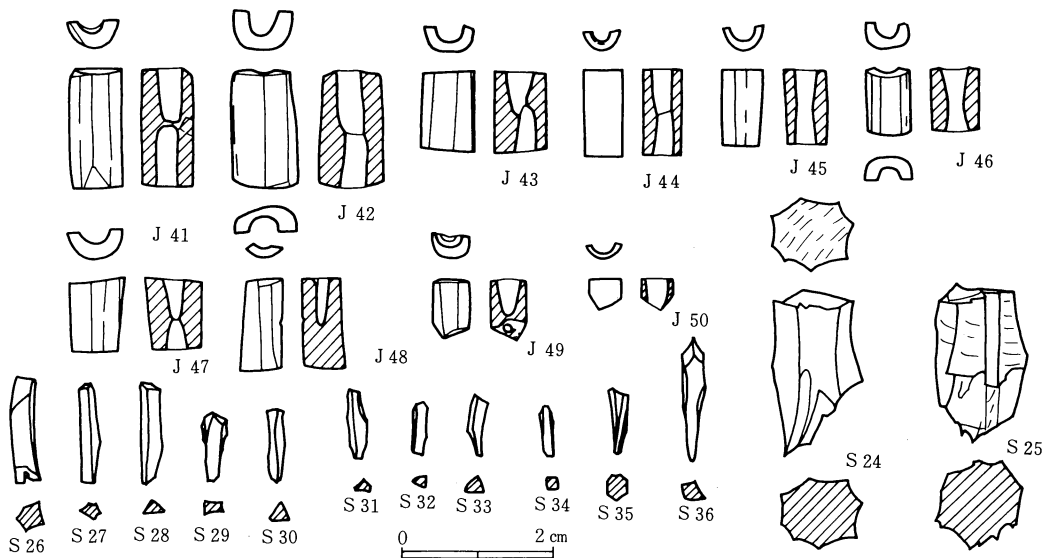
挿図141 S I 113遺物図その2 (原石・荒割・形割S = 1/2)

り工程は次に縦長のフレイクを作る。さらに不整形な方形体を作り、次第に小さく整形された方形体に変えてゆく。両端をカットした長さ2～3 cm、一辺が1 cm四方の四角柱（J 1～9）が標準型である。この段階ですでに研磨が開始される。長軸に直交する方向で研



挿図142 S I 113遺物図その3 (研磨・穿孔S = 1/1)

磨され、次に縦方向の研磨がなされ、四角—六角—八角柱と稜を研磨していく (J 10~29)。それにともない直径6~8mmに小さくなる。長さはいずれも1~1.5cmになるが、長いものについては切断して二つに折る (J 16~18)。この際、まず切れ目を入れて刃物で1~2mm輪切りに切り込む。石刀状のものはなかったが黒曜石片が出土しており、石刀の代用をしたものと考えられる。あとは手で二つ折りしたと考えられる。折面は研磨されるが、わずかに輪切痕が残るものもみられる (J 19~21)。次に穿孔だが、従来の管玉攻玉技法での特色である円形化してからの穿孔でなく、6面体くらいのものからすでに穿孔を開始してい

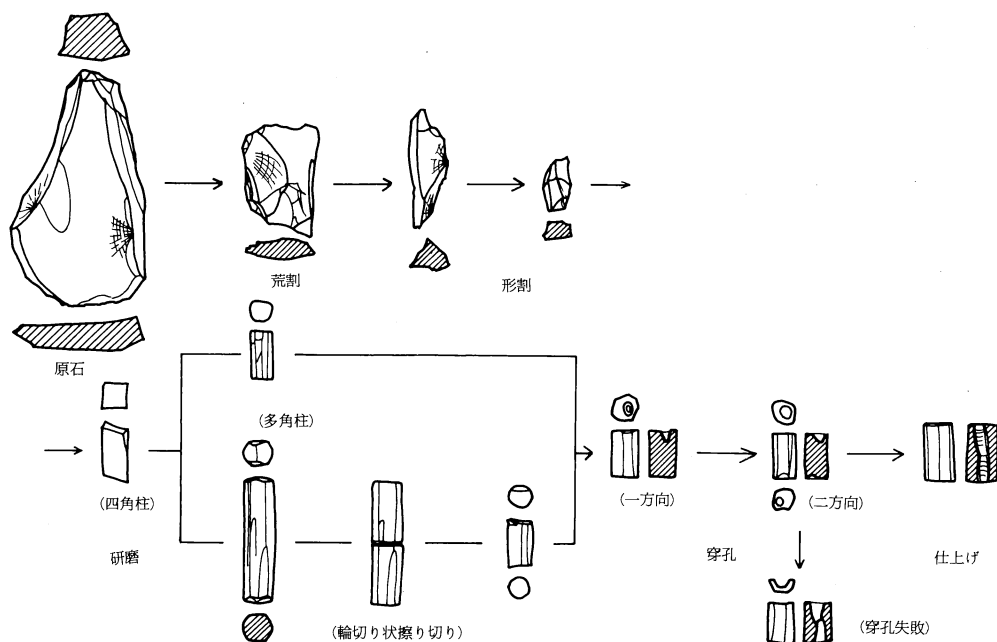


挿図143 S I 113遺物図その4 (穿孔失敗・玉髓・玉髓錐 S = 1/1)

る (J 30~40)。方向は両端から開始しており、途中の孔は冪状に二段になっているものが多い。これは、鉄錐等の先端のシャープな工具でなく、S I 113で多く出土した玉髓片を利用した玉髓錐 (S 26~36) であったことがわかる。この弥生時代前期の竪穴住居跡からまったく鉄製品は出土しておらず、鉄錐の存在はないと考えてよかろう。玉髓錐だと細く長い孔をあけることが不可能であり、せつかく長く作った四角柱を二つ折りした理由もそのへんにあると考えられる。穿孔後仕上げの研磨を行う。破損品 (J 41~50) で最小のものは長さ1.1cm、直径0.45cmであり、おそらくこの程度の管玉を作ったとみられるが、1点ではあるが直径0.33cm、長さ1.33cm以上のものがあり、太さにおいて最小であった。このような工程を経て管玉が作られたとみられる。^{注1}

さて、原材料は軟質の碧玉と考えられる。横方向にうすく剝離する性格をもつもので、内部には緑色凝灰岩の持つ細かい異質物を含んでおらず、碧玉と考えた。次に、管玉未製品以外の遺物だが、同質の材料で作った扁平の円盤 (S 4・5) が2枚出土している。S 4は開孔しており有孔円盤といえる。用途は重量がS 4.19g、S 5.32gであり、工具としての錐のはずみ車としては重量が不足している。また研磨がきれいに施されており、それ自体としても製品として利用できるため、祭祀用の祭具の可能性もある。同時に土製円盤 (D 2) も1個出土している。重量76.5gで、こちらの方は玉髓錐のはずみ車の可能性が強い。

この攻玉技法は、従来日本でみられた施溝技法・押圧剝離技法を使用しない技法で、輪切り技法は施溝技法のより古い形式と考えられる。またほとんどの玉作遺跡でみられる鉄製品がなく、穿孔に玉髓錐を使用している点も大きな特徴である。次にこれだけの研磨さ



挿図144 軟質碧玉製玉類製作工程模式図

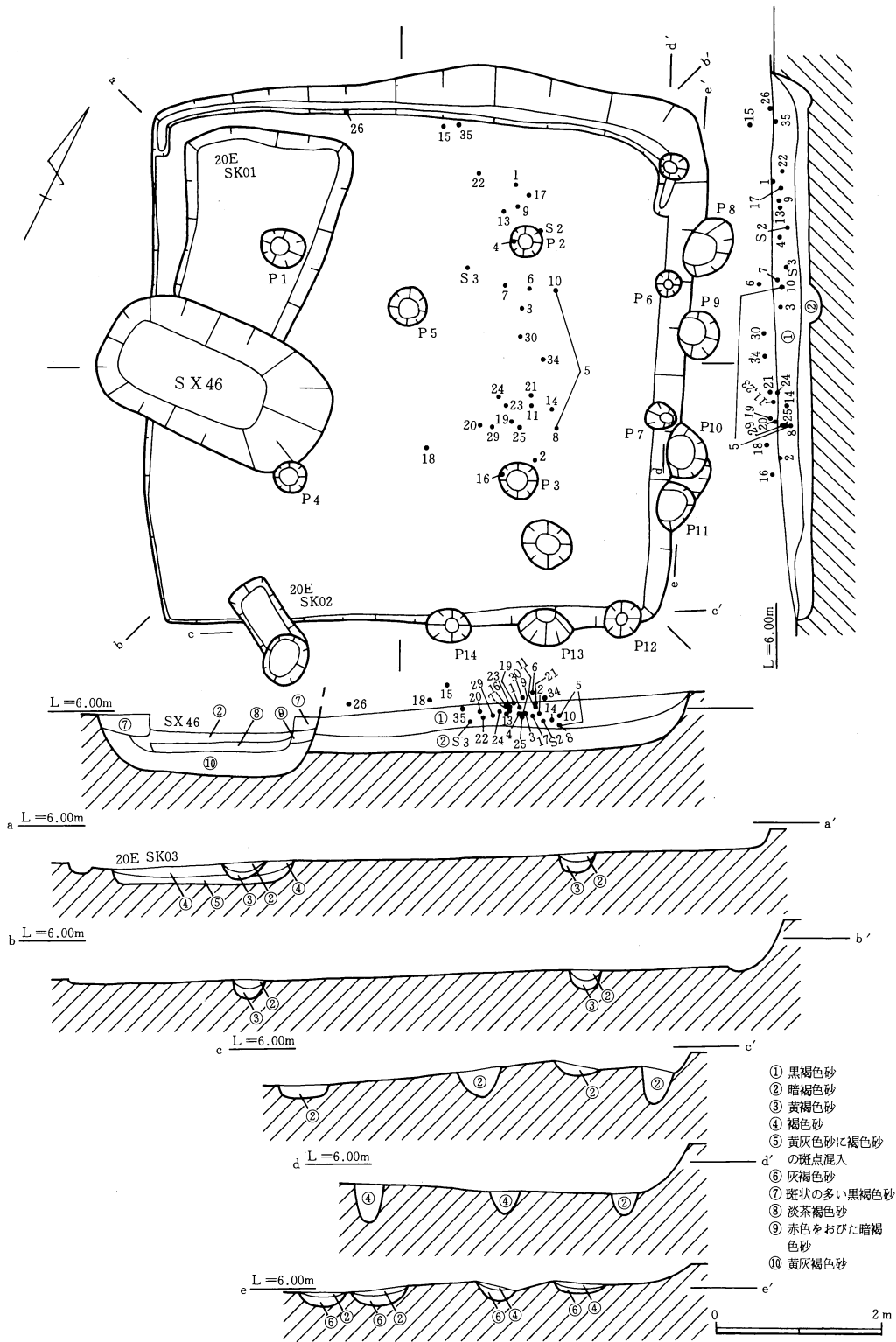
れた未製品が出土しているにもかかわらず、砥石が出土していない点、石製砥石でなく木製砥石もしくは他の研磨用材を使用したと考えられよう。これらの特徴は、この玉作工房が弥生時代前期のものと考えることによって理解でき、長瀬高浜遺跡S I 113が日本最古の玉作工房と考える根拠になるであろう。

注1 布勢遺跡発掘調査報告書1982 注2 和洋女子大学，寺村光晴氏の御教授を得た。

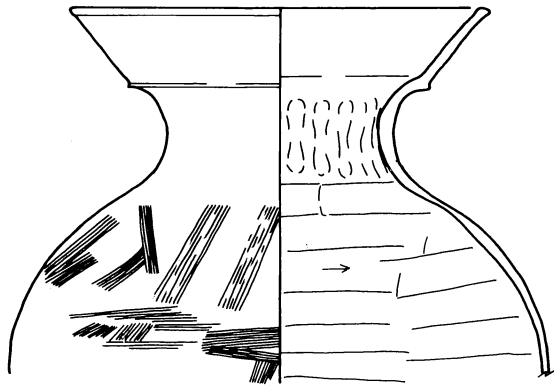
S I 114 (挿図145～148, 図版30・42・43)

20E北東区，S I 95の北側に位置する。平面形はほぼ正方形で，一辺約6 mを測る竪穴住居跡である。床面積は約36㎡で，主軸N-27°-Wになる。壁高は北側で約40，南側で約20cmを測る。北側壁下面にそって幅20cm，深さ5 cm（推定）の側溝をもつ。ピットは床面で6個，壁際で2個を検出した。構造柱と考えられるものはP 1（44×52-18），P 2（38×38-24），P 3（42×44-22），P 4（38×40-21）cmの4本で，柱穴間距離は，P 1-P 2間から2.96，2.92，2.76，2.80mを測る。P 5（48×46-13）cmは位置的にみて特殊ピットと考える。東側壁際下面のP 6（32×28-30），P 7（30×38-45）cmは支持柱の可能性はある。また，壁上面のP 8（68×56-15），P 9（56×50-15），P 10（66×48-14），P 11（60×44-13），P 12（42×42-45），P 13（44×50-16），P 14（40×52-30）cmはこの住居の補助柱あるいは保護施設の為のピットと考えられる。多量の土器を検出したが，これらによりS I 114は長瀬Ⅱ期と考えられる。

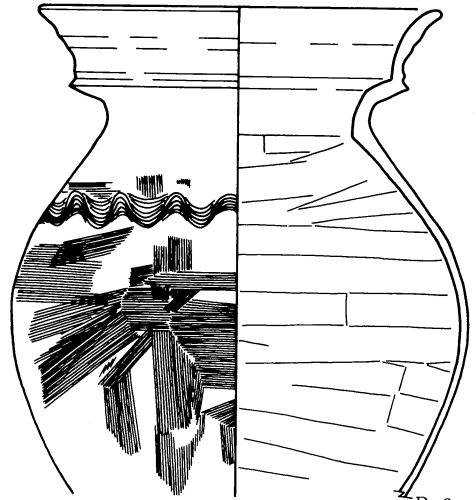
また住居跡の南の隅にS K 02を検出した。この土壌内から弥生土器（Po31）を検出した。



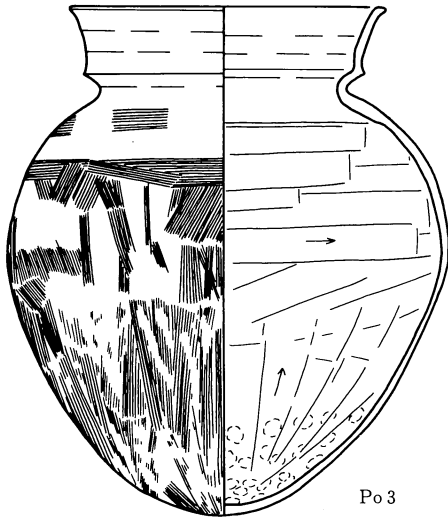
挿図145 S I 114遺構図 (S = 1/80)



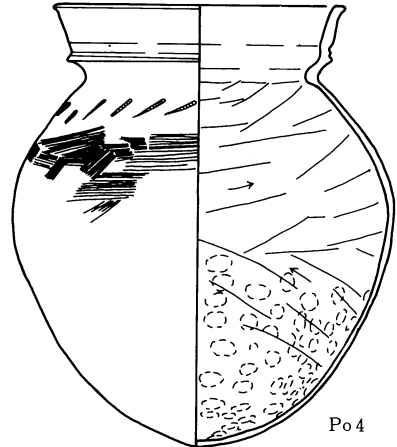
Po1



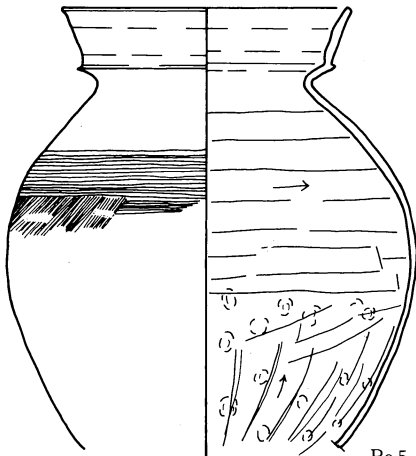
Po2



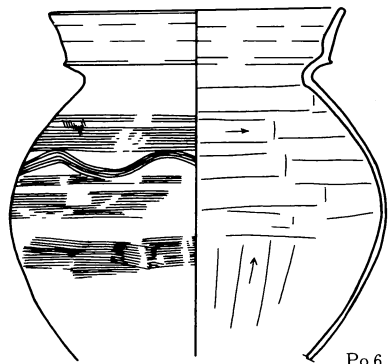
Po3



Po4



Po5



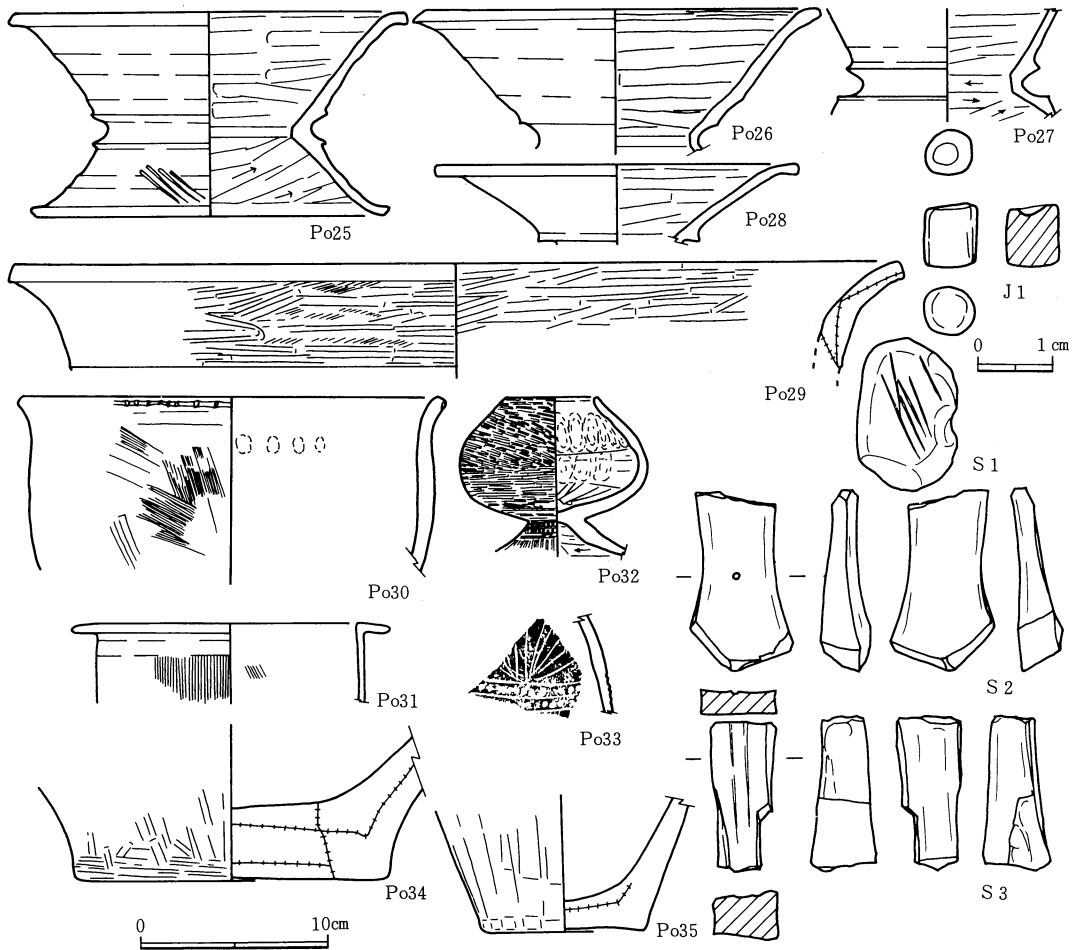
Po6



Po7



挿図146 S I 114遺物図その1 (S=1/4)

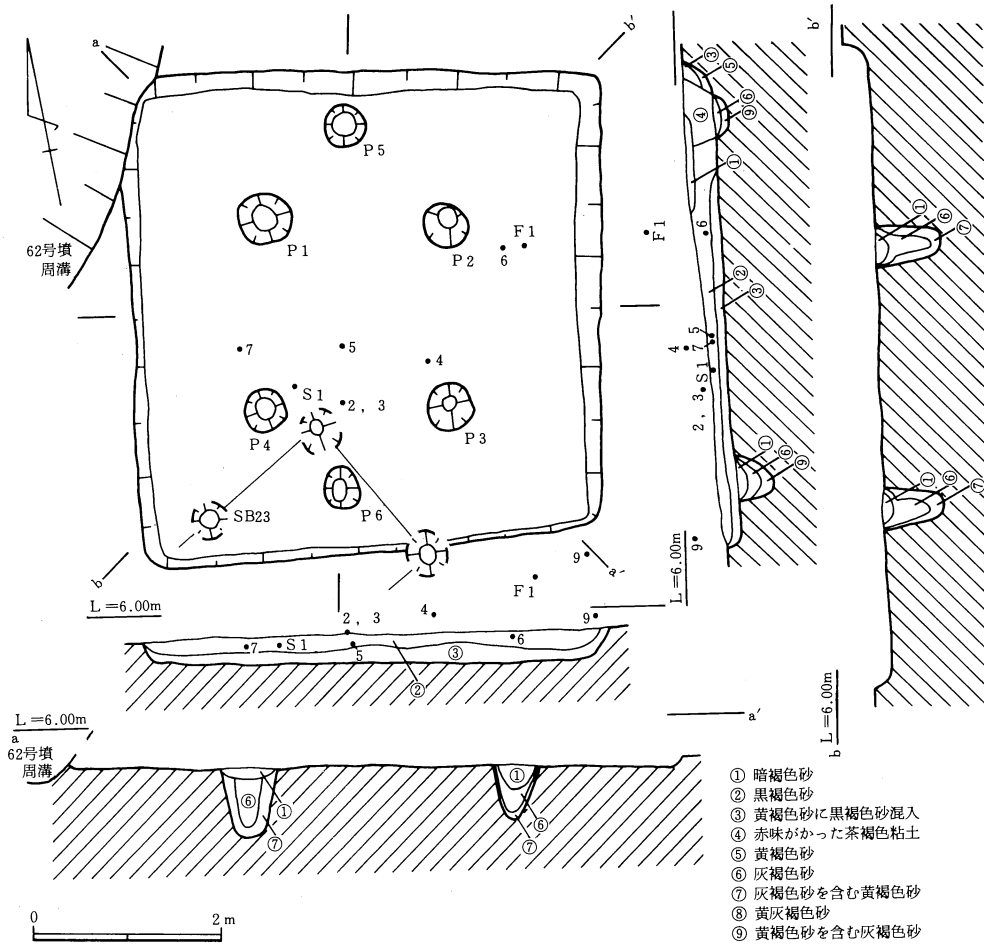


挿図148 S I 114遺物図その3 (土器・石製品S = 1/4、玉末製品S = 1/1)

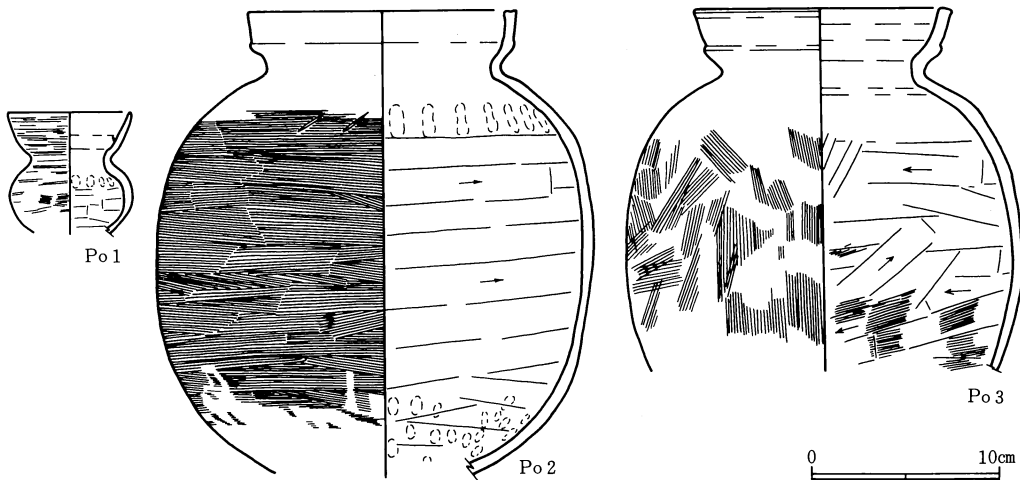
遺構の切り合いからS K 02が古いこともあり弥生時代の土壌の可能性もある。

S I 115 (挿図149～151, 図版31・43・44)

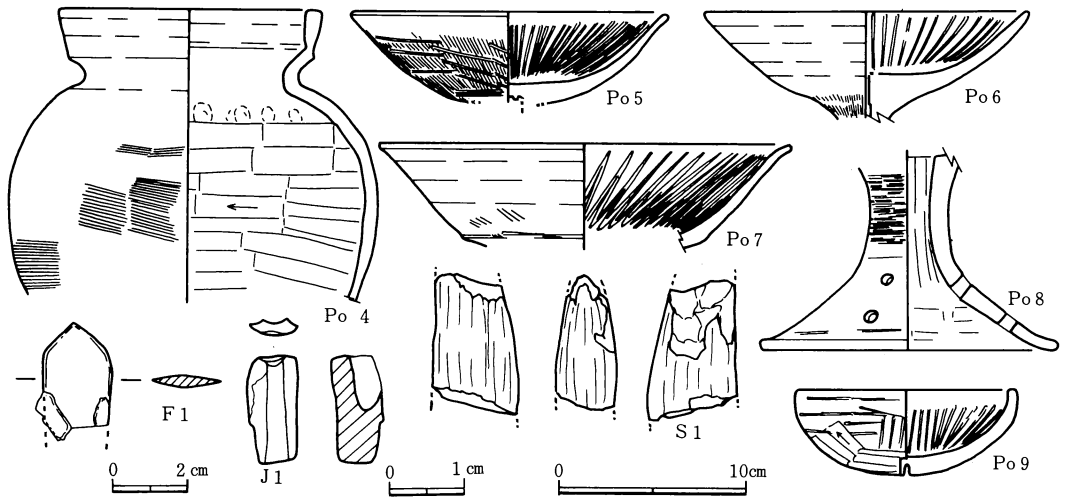
20E・20F地区にまたがり, S I 118の東, S I 114の北西に位置し, 北西隅の肩を62号墳の周溝が, 南でS B 23が切り合っている。新旧関係は, S I 115より62号墳が新しく, S B 23の方が古い。平面形は正方形にちかい方形である。床面の大きさは長辺4.8m, 短辺4.6m, 床面積約22.1㎡で, 壁高は北側で最大値44cm, 南側で最小値14cmである。主軸はN-14°-Eである。ピットは9個検出されたが, P 1～P 4の構造柱とP 5・P 6の補助柱をもつ建物と考えられる。柱穴プランはP 1 (56×56-72), P 2 (46×48-68), P 3 (54×48-52), P 4 (46×44-60), P 5 (44×45-14), P 6 (45×38-35) cmで柱穴間距離はP 1-P 2間から1.96, 2.00, 1.96, 2.03mで補助柱は北側と南側の中程に位置する。特殊ピットと思われるものは検出されず, 他のピットはS B 23の柱穴である。時期は遺物より古墳時代中期の前半の後葉と考える。



挿図149 S I 115遺構図 (S = 1/80)

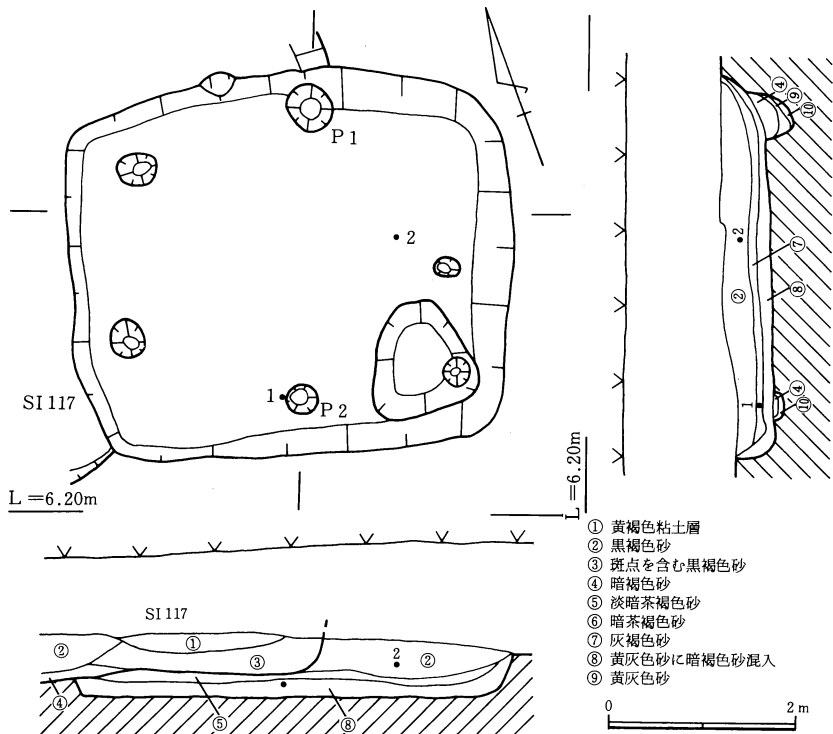


挿図150 S I 115遺物図その1 (S = 1/4)



挿図151 S I 115遺物図その2 (土器・磨製石斧S = 1/4、鉄製品S = 1/2、玉S = 1/1)
S I 116 (挿図152・153, 図版31)

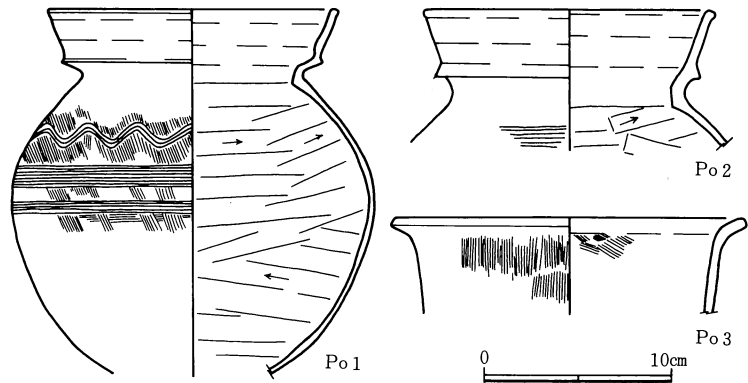
20E地区で検出した。西で切り合うS I 117との新旧関係は明確ではなかったが、S I 116がS I 117に切られ、S I 117より古いものとする。やや長方形をなす。2.10×1.80mで床面積は3.78㎡、柱穴はP 1 (48×52-34), P 2 (32×32-11) cmの2本であろうがどのような構造になるか判らない。軸方向はN-22°-E。埋砂内の土器等の遺物は他と



挿図152 S I 116遺構図 (S = 1/80)

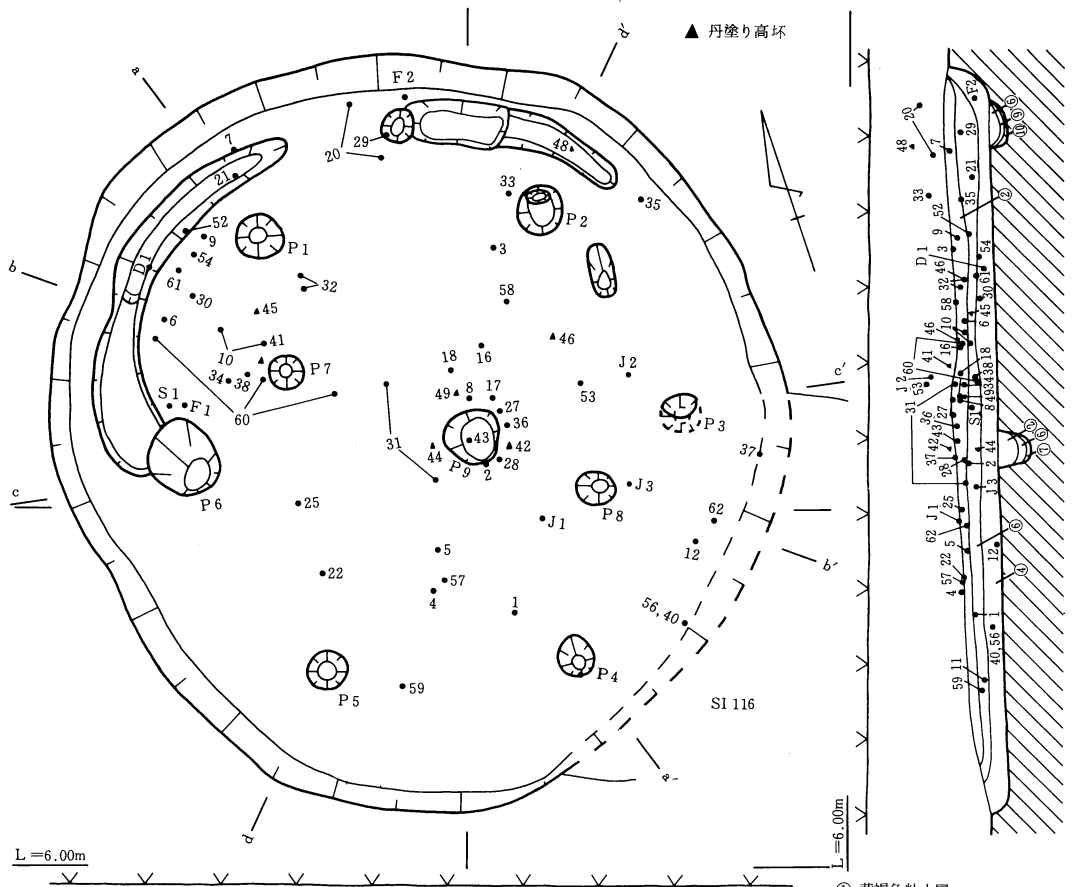
比べて多くなく、明らかにS I 116内の埋砂中のものと考えられるものは少ない。S I 116は古墳時代前期後半(長瀬Ⅰ期)に埋没したものと考えたい。

S I 117 (挿図154～161, 図版31・44・45)

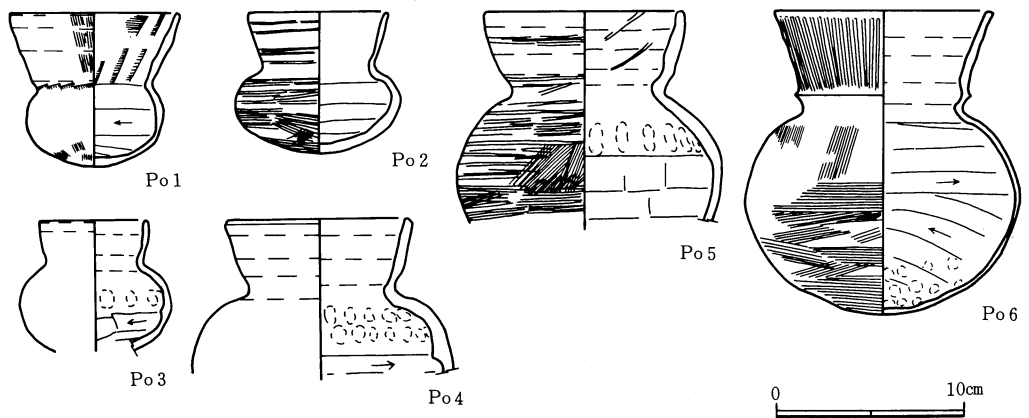


挿図153 S I 116遺物図 (S = 1/4)

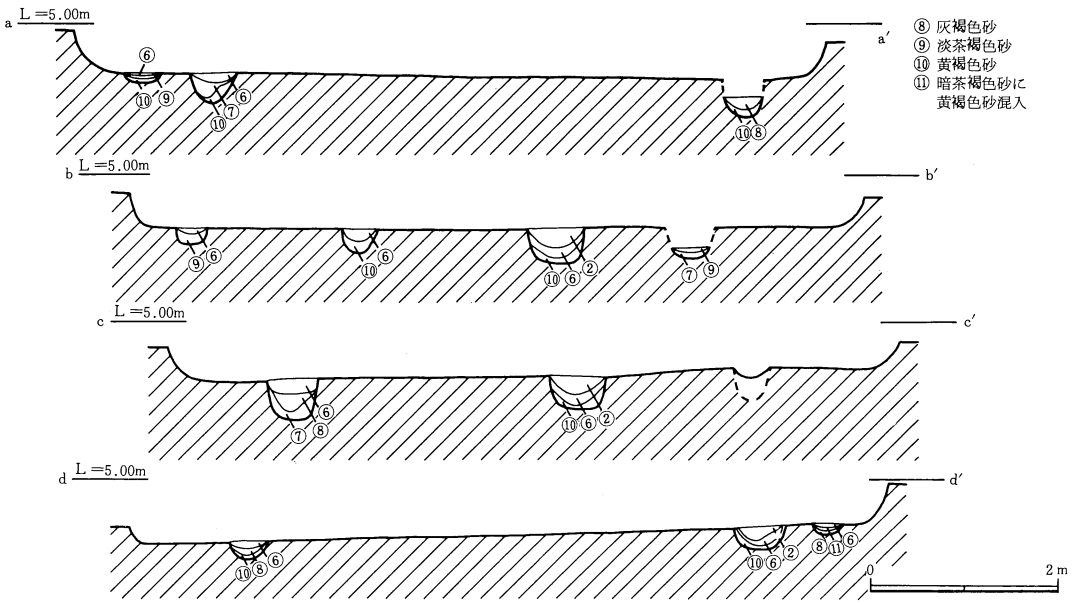
20・21E地区で検出された。円形に近い六角形の平面プランをもつ。東側でS I 116を切っている。柱穴はP 1 (46×50-34), P 2 (52×48-32), P 3 (40×40-33) (推定), P 4 (42×38-20), P 5 (40×44-19), P 6 (78×62-39) cmの6本とP 7 (36×36-26), P 8 (36×40-11) cmであろう。P 1～P 8を構造柱とする竪穴住居跡と考える。中央付近でP 9 (58×56-37) cmを検出した。また北側ではほぼ全体の半分をめぐる側溝状の溝を検出した。床面積は約30.0㎡でかなり大型の住居と言えよう。埋砂上面からかなり多数の土師器、弥生土器片(床面付近で検出した1点は木葉文をもつが、S I 120出土のPo17と接合した。)を検出した。土師器には完形品も多かった。これらの遺物の埋没後、この住居跡のP 2, P 7付近の上層に47号墳第1埋葬施設が築かれていた。47号墳周辺には丹塗高坏が多数散在し、47号墳に伴うものかと最初考えたが、他の多数の土器とほぼ同じレベルで検出されており、47号墳に伴うと考えるよりも、このS I 117内に埋没した土器と考えるべきだろうと判断した。丹塗高坏(Po41～51)は個体数として8個体以上になり、S I 117の中央北よりに集中しているが、この範囲では同時に7個体以上の完形の壺・甕が密集していた。S I 117の土器を全体に考えると、この範囲の土器は床面で検出された土器とは時期差があると考えられ、層的にも異なると判断しS I 117の時期はより古い段階の土器の時期(長瀬Ⅲ期, 古墳時代中期初頭)と判断した。丹塗の高坏等の土器は長瀬Ⅲ期より若干新しい段階のものとする。これらの土器を47号墳に伴うと考えるのは、検出レベルが47号墳に対してかなり低い点から困難であろうし、S I 117の埋没の窪みの中に何らかの理由でおかれた(堆積した)ものと推定し、その上に47号墳がさらに後に作られたものと判断する。さらに埋砂内には床面から土錘(D 1), こしき(Po60), 弥生木葉文入壺(S I 120Po17)の破片が検出されている。このような六角形に近い大型の竪穴住居跡と他の同時期の隅丸方形の住居跡との関連は不明である。



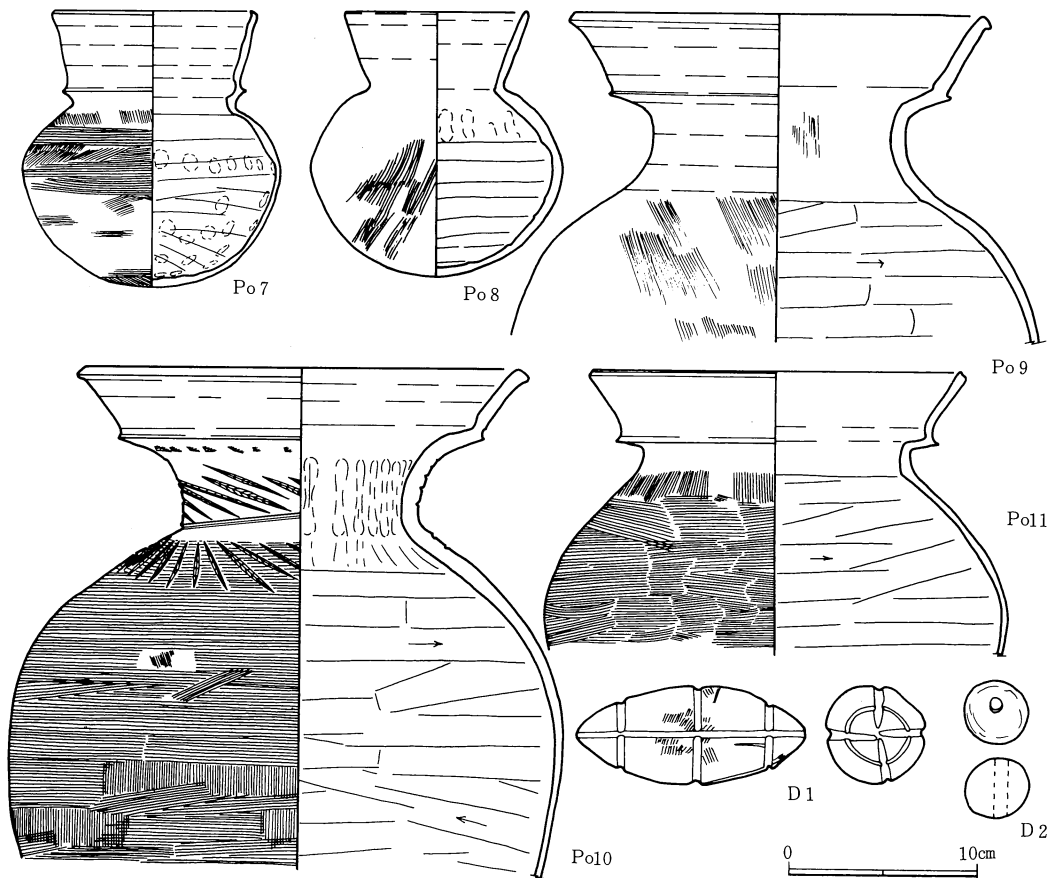
挿図154 S I 117遺構図その1 (S = 1/80)



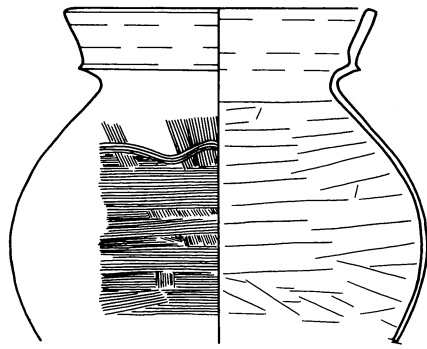
挿図155 S I 117遺物図その1 (S = 1/4)



挿図156 S I 117遺構図その2 (S = 1/80)



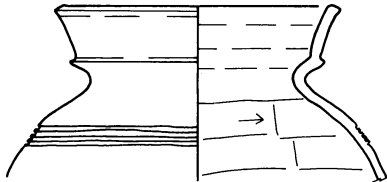
挿図157 S I 117遺物図その2 (土器・土製品 S = 1/4)



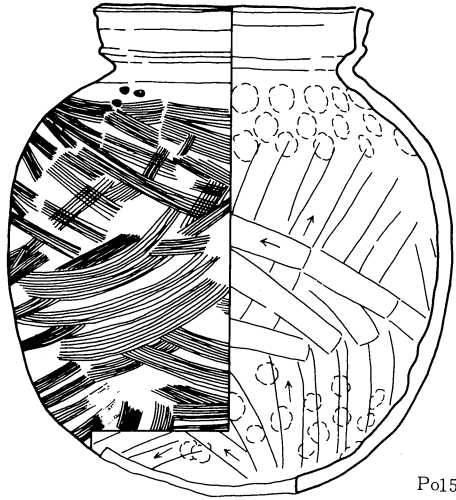
Po12



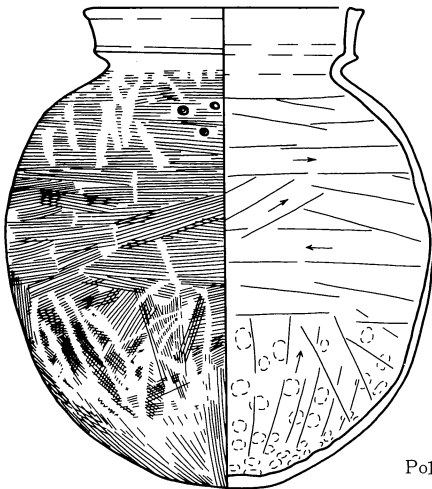
Po14



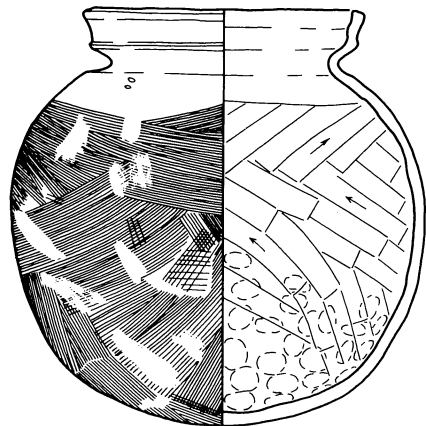
Po13



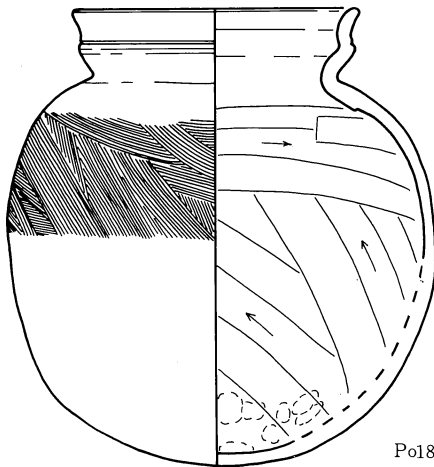
Po15



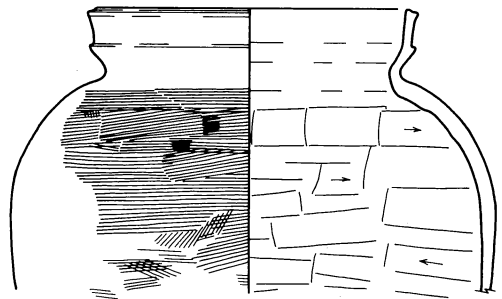
Po16



Po17



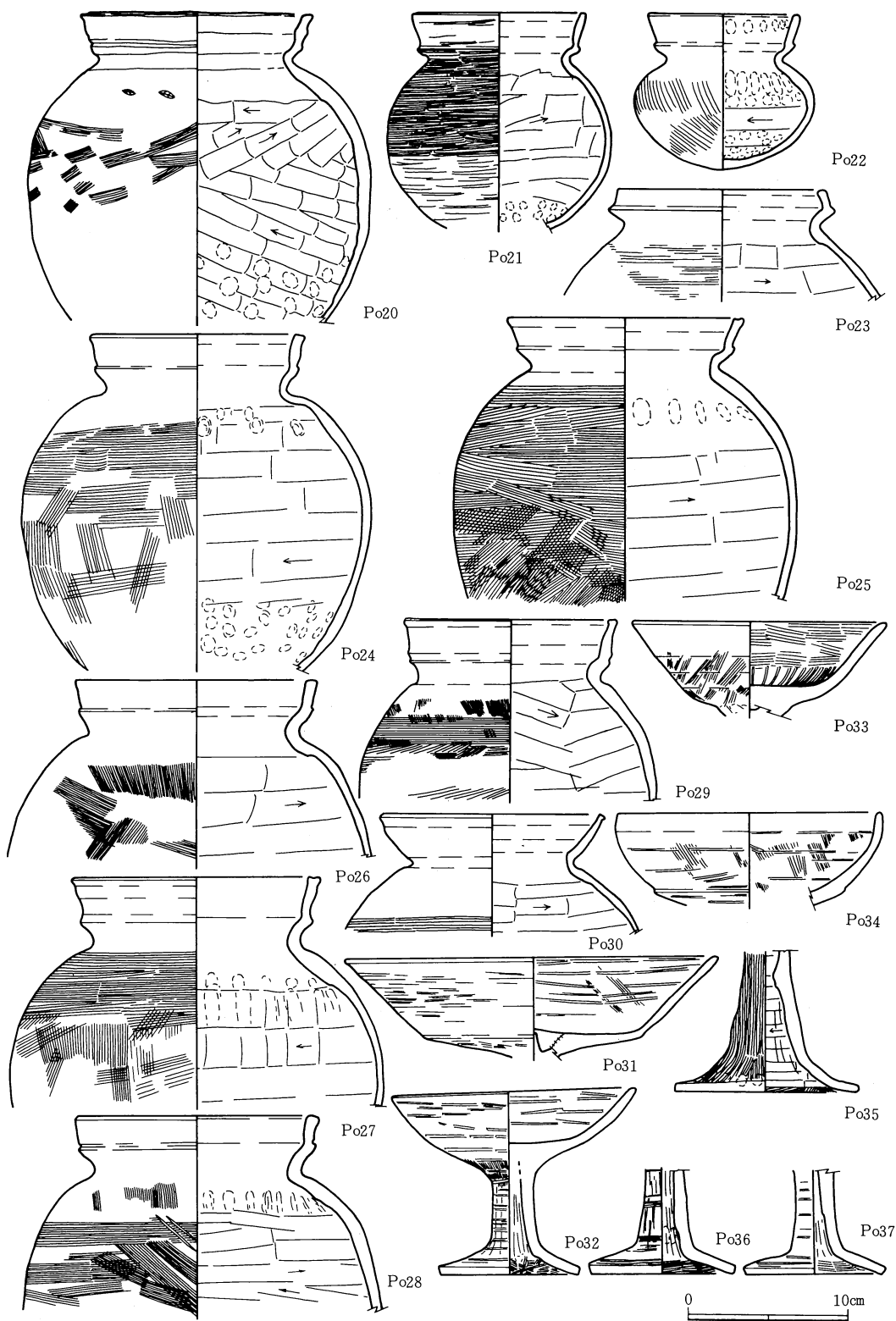
Po18



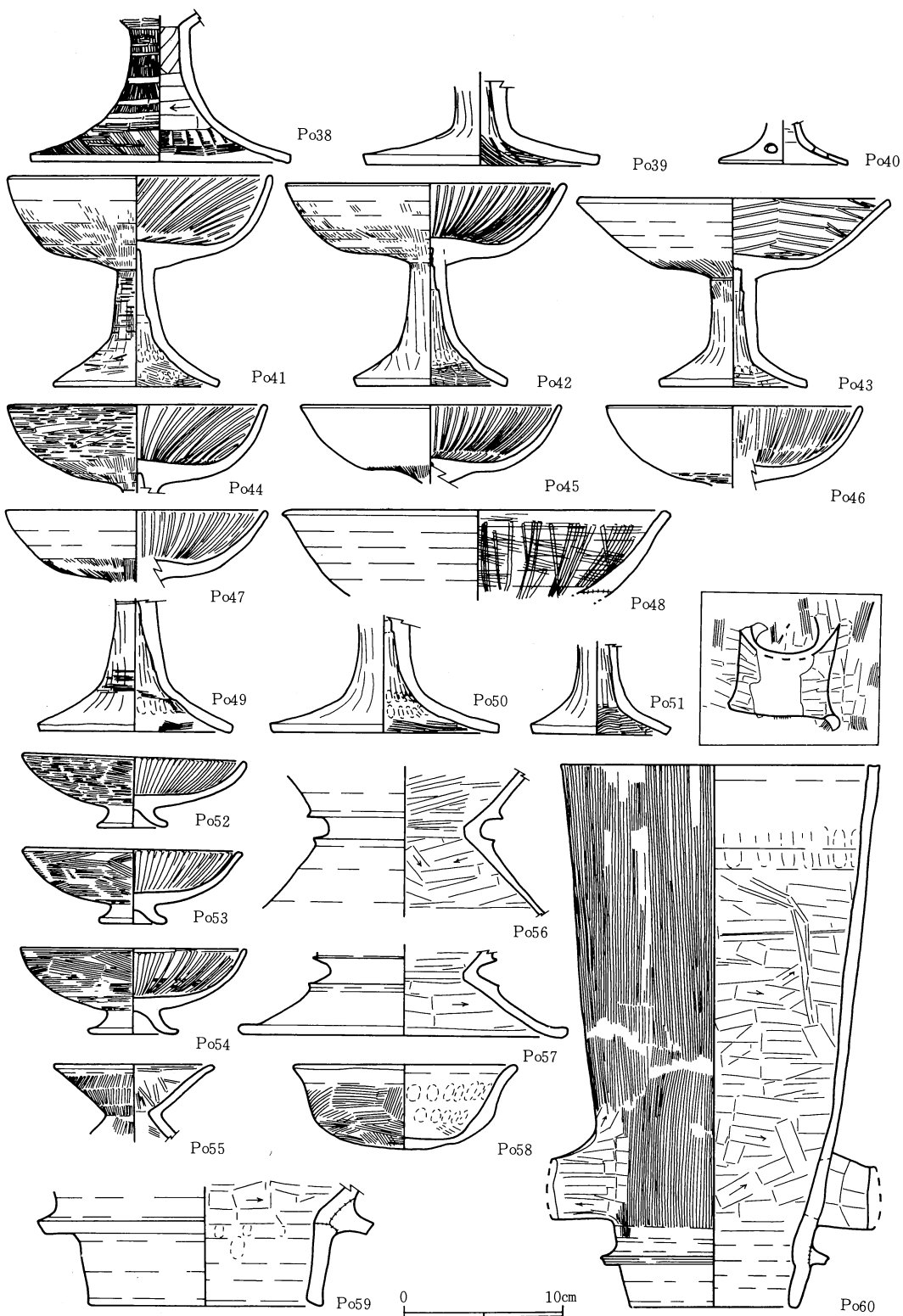
Po19



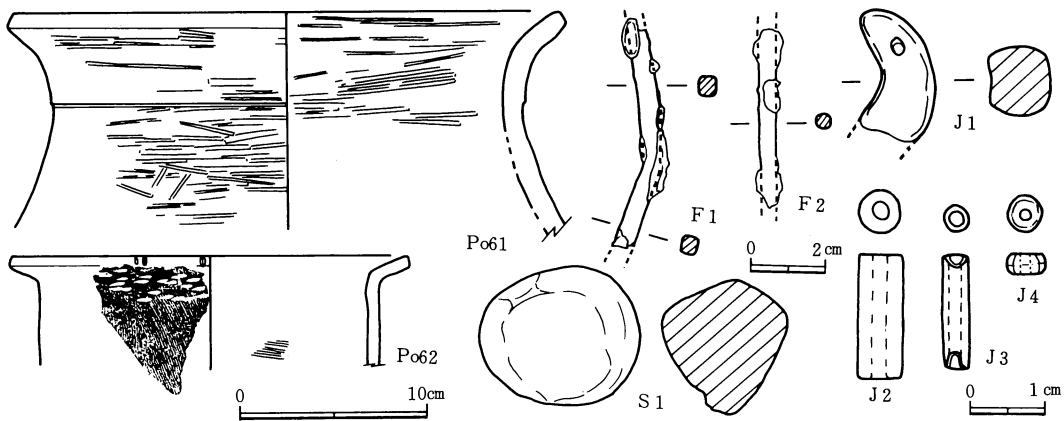
挿図158 S I 117遺物図その3 (S=1/4)



挿図159 S I 117遺物図その4 (S = 1/4)



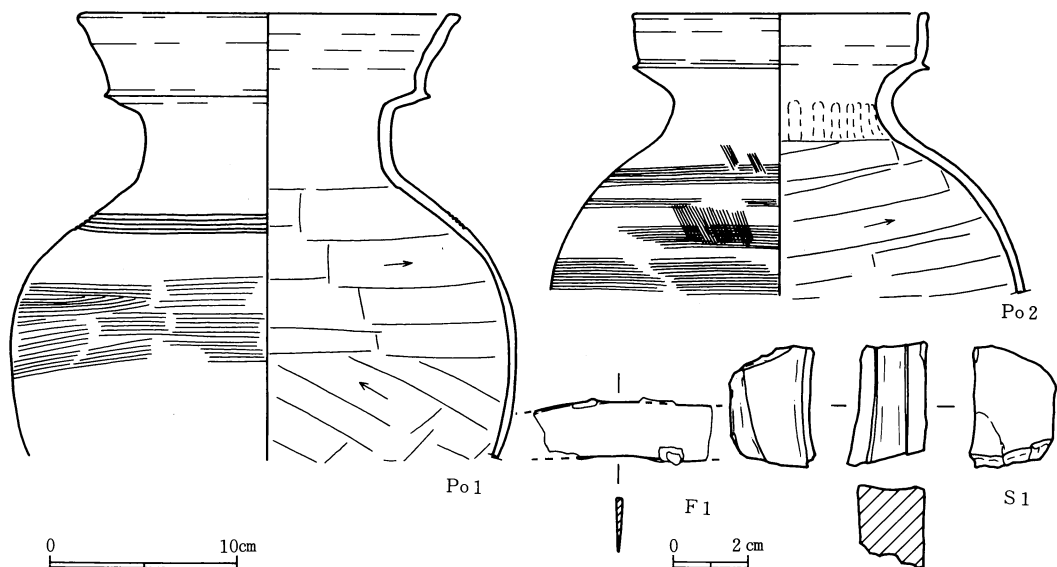
挿図160 S I 117遺物図その5 (S = 1/4)



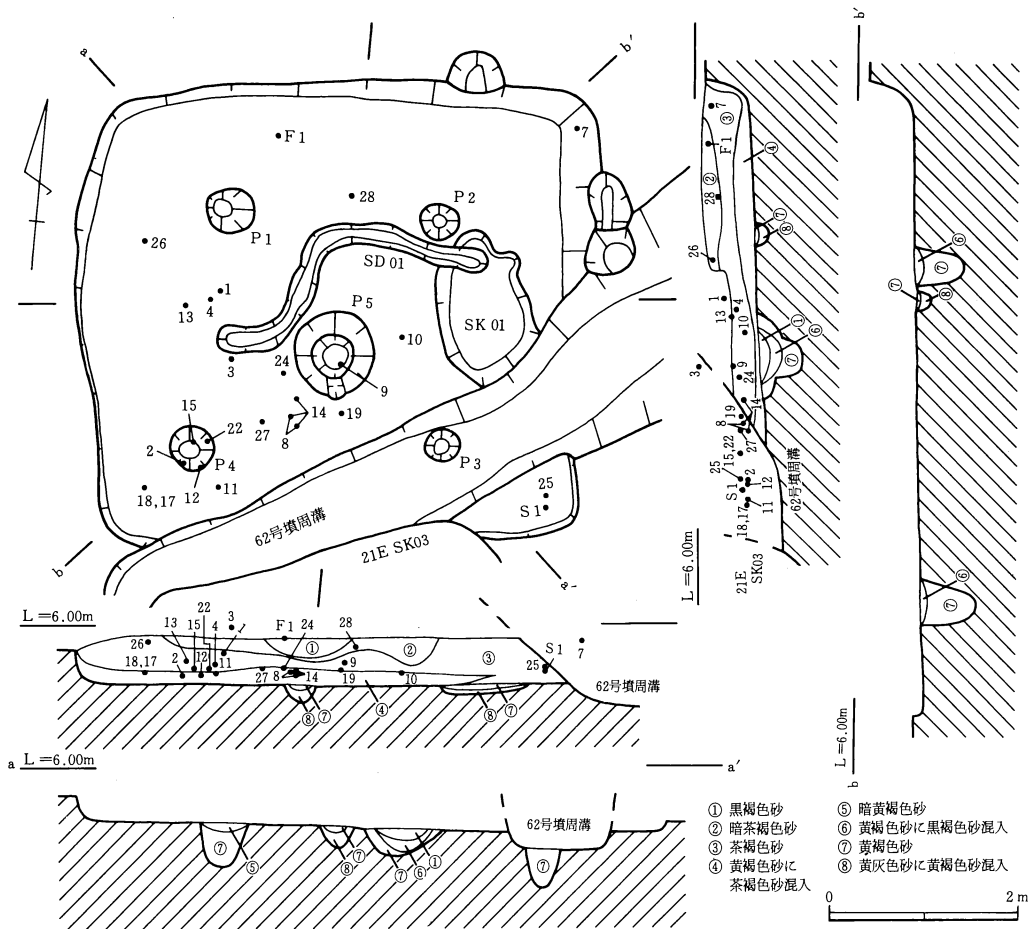
挿図161 S I 117遺物図その6 (土器・石 S = 1/4、鉄製品 S = 1/2、玉製品 S = 1/1)

S I 118 (挿図162~166, 図版31・45・46)

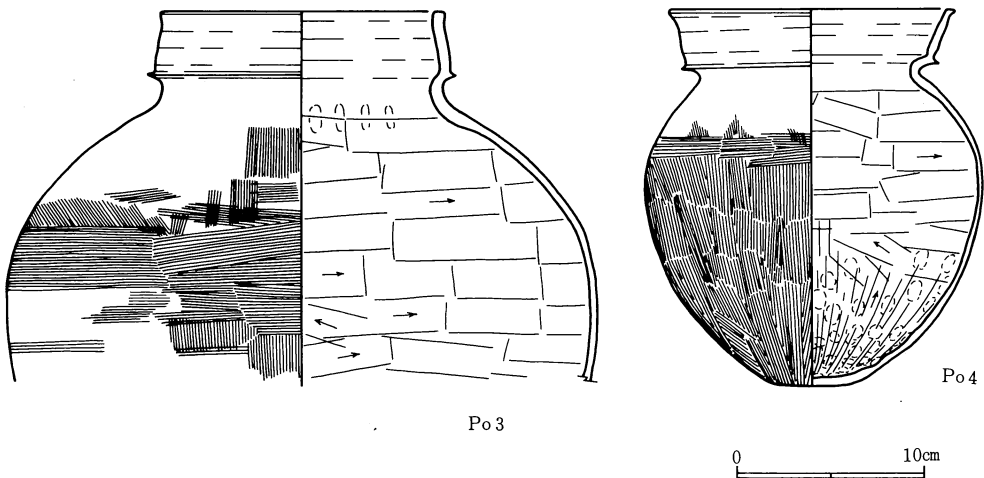
21E・21F地区にまたがり、S I 115の西に位置し、南側を21E S K03と62号墳の周溝に切られている。新旧関係はS I 118より、21E S K03・62号墳の方が新しい。平面形は方形である。床面の大きさは長辺5.00m、短辺4.52mで、床面積22.6m²である。主軸はN-2-Wで、壁高は北側で最大値48cm、西側で最小値30cmを測る。ピットは5個検出され、4本柱の建物と考えられる。柱穴プランはP 1 (52×50-48), P 2 (40×40-48), P 3 (45×45-42), P 4 (48×46-56) cmである。P 3は62号墳の周溝の底より検出された。柱穴間距離はP 1-P 2間から順に2.28, 2.44, 2.68, 2.60mである。床面中央のP 5 (92×84-32) cmは特殊ピットと考えられる。床面より溝状遺構S D01・土塊状遺構S K01を検出したが用途不明である。S I 118の時期は出土遺物から長瀬I期と考える。



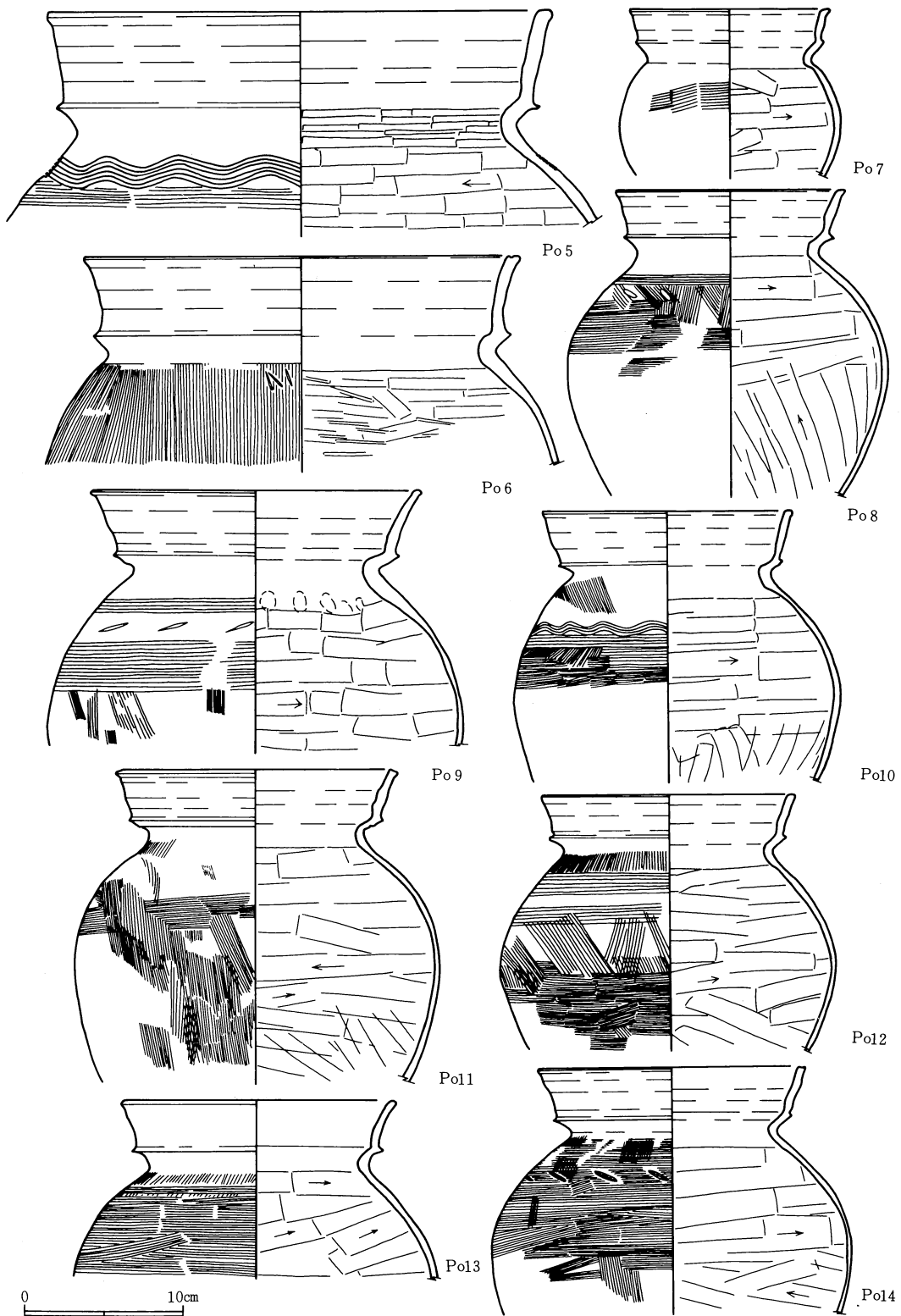
挿図162 S I 118遺物図その1 (土器・砥石 S = 1/4、鉄製品 S = 1/2)



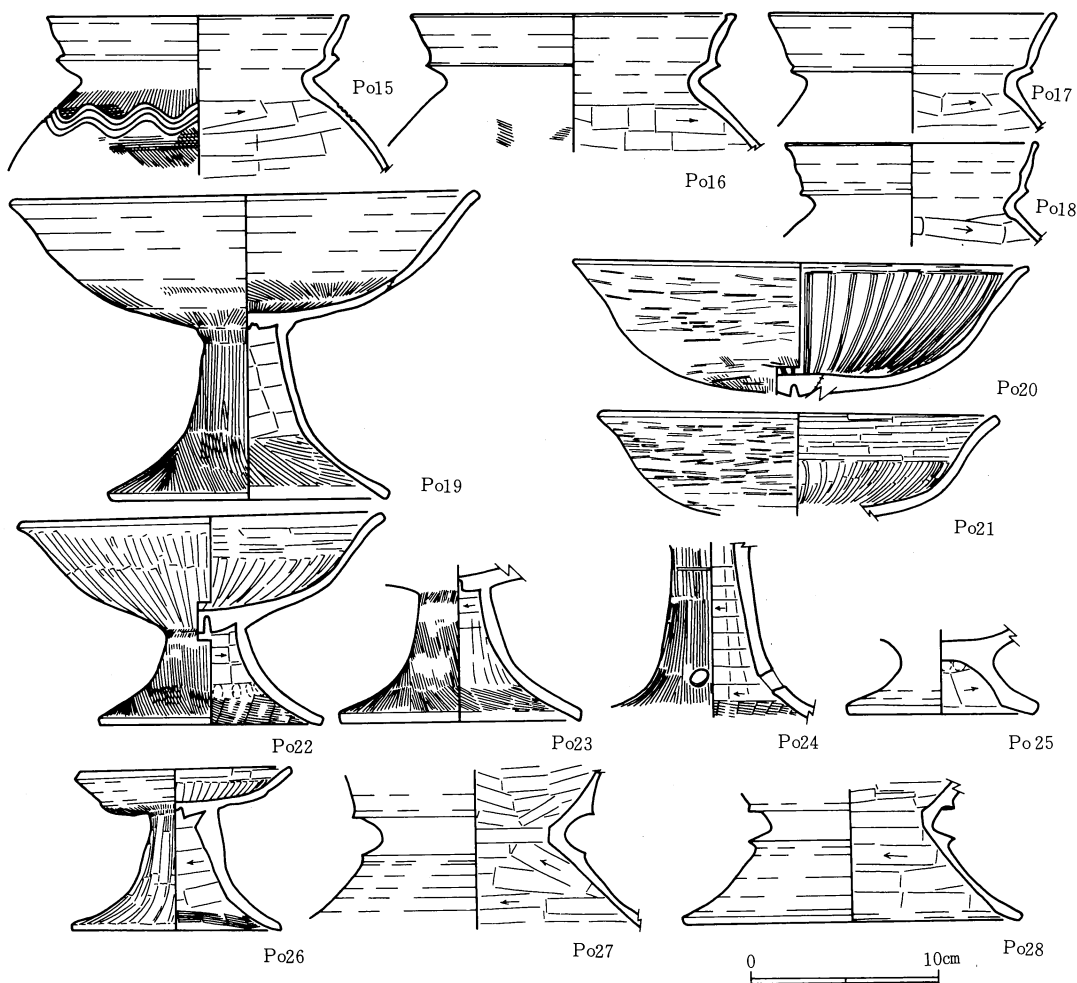
挿図163 S I 118遺構図 (S = 1/80)



挿図164 S I 118遺物図その2 (S = 1/4)



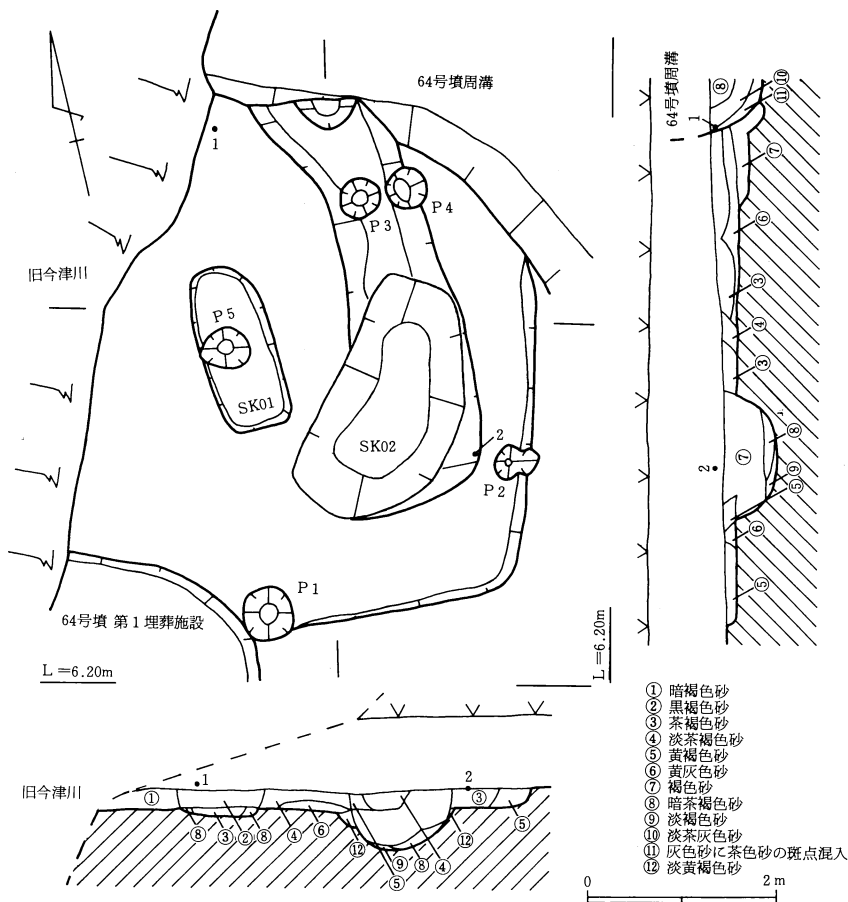
挿図165 S I 118遺物図その3 (S = 1/4)



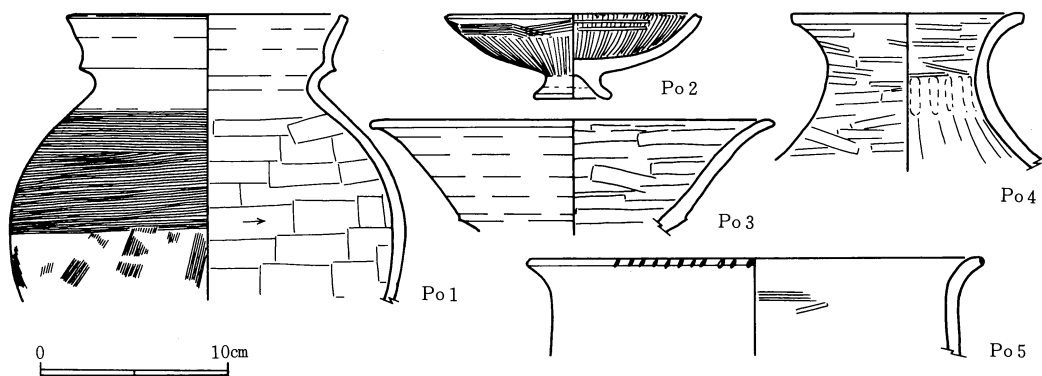
挿図166 S I 118遺物図その4 (S = 1/4)

S I 119 (挿図167・168, 図版32・46)

21E地区にあり、64号墳の内側に位置する。北を64号墳周溝で、西側を今津川旧河道によって壊されているため平面形は不明である。壁高は東側で約20cm、南側で約12cmを測る検出したピットは5個あるが、いずれも柱穴と考えられるものはない。P 1 (56×52-37), P 2 (36×44-24) cmがレベル的に高く、S I 119に関係するものかとも考えられるが明確ではない。P 3・4は溝の下より検出された。これらのことから、S I 119は住居跡でない可能性も考えられる。S K 01は長軸1.76m、短軸78cm、深さ28cmで、その中にP 5 (42×52-24) cmをもつ土壌である。土壌内より遺物の検出はなかった。S I 119との切り合いから、S I 119より新しい時期の土壌と考える。64号墳と関係があるのかもしれない。S K 02は長軸2.68m、短軸1.4m、深さ64cmの土壌で、わずかに土師器を伴うがその性格は不明である。時期はS I 119より新しい。S I 119の時期は遺物から長瀬Ⅱ期と考える。



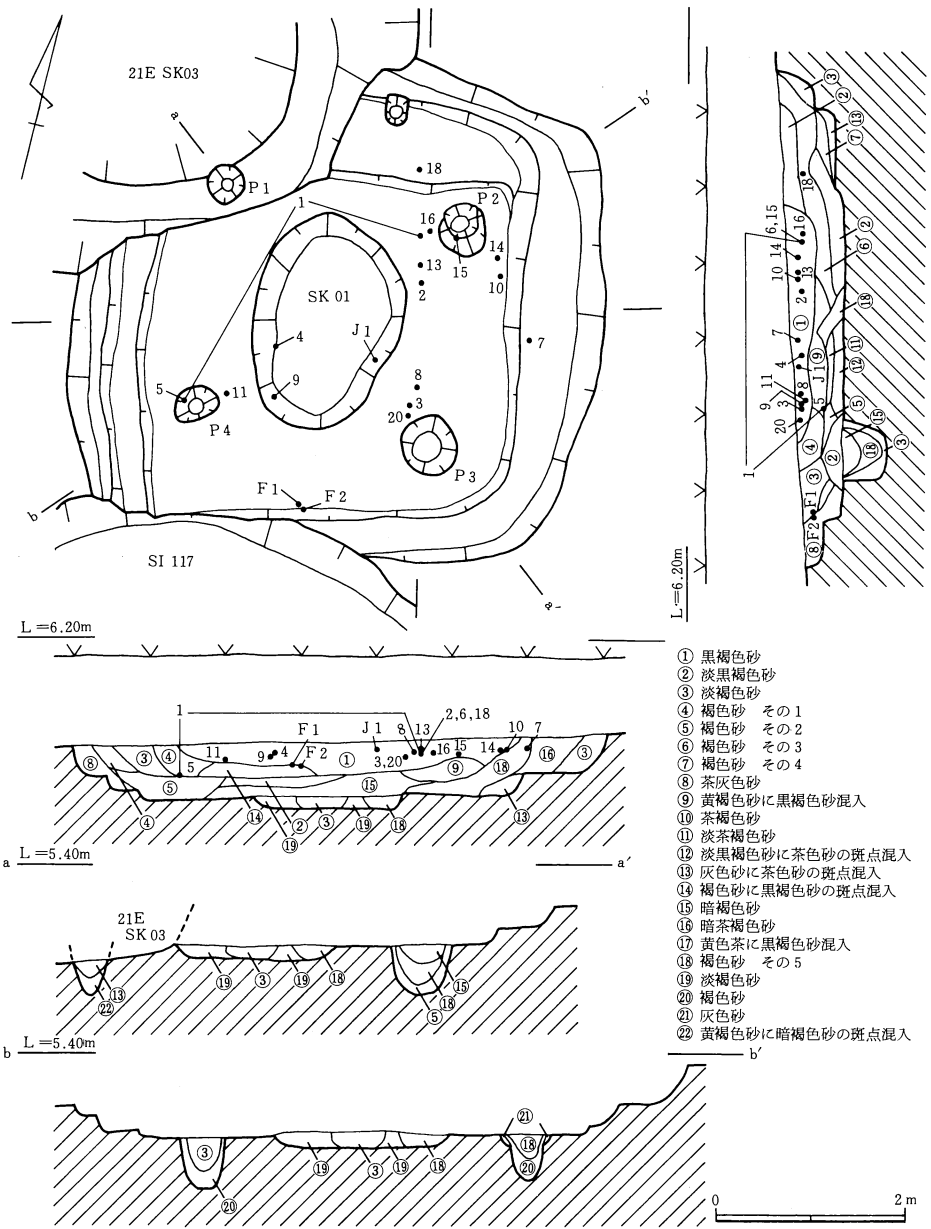
挿図167 S I 119遺構図 (S = 1/80)



挿図168 S I 119遺物図 (S = 1/4)

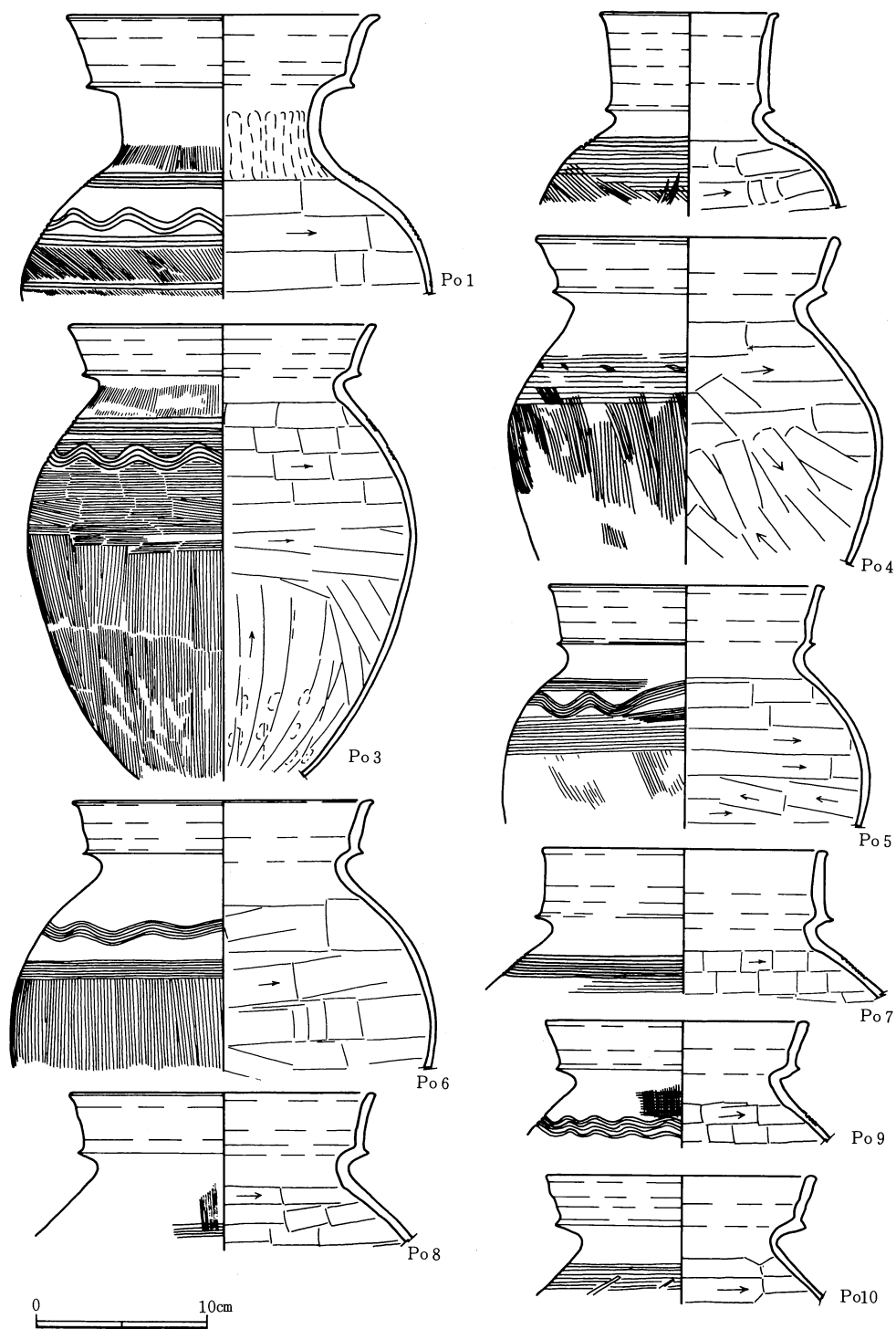
S I 120 (挿図169~171, 図版32・46・47)

21E地区の東に位置し、S I 117, 21E SK03と切り合っている。新旧関係はS I 120よりもS I 117, 21E SK03の方が新しい。平面形は長方形で、2段の掘り方をもち北側と西側にテラス状遺構がある。床面の大きさは長辺3.6m, 短辺3.4mで床面積は約12.2m²で



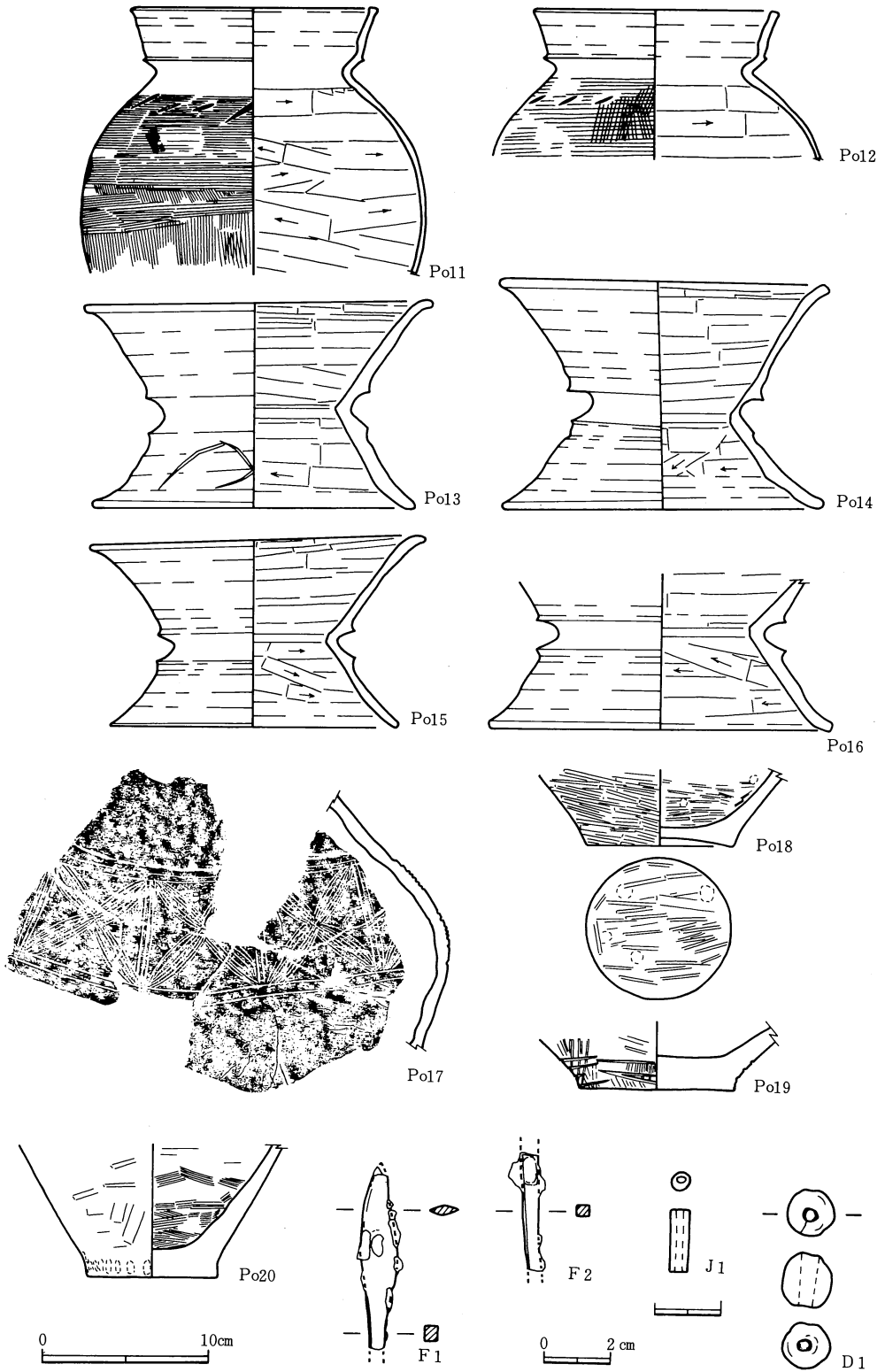
挿図169 S I 120遺構図 (S = 1/80)

あり、テラスを含めると長辺約5.6m、短辺5.4m、面積は約30.2m²である。主軸はN-7°-Wである。壁高はテラスを含め東側で76cm、西側で64cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で3個、北側の壁で1個、21E SK 03内で1個検出した。構造柱はP 1～P 4の4つであり、プランはP 1 (42×40-36)、P 2 (56×48-48)、P 3 (62×60-49)、P 4 (38×44-54) cmで、柱穴間距離はP 1-P 2間より順に2.50、2.40、2.48、2.36mである。P 5 (32×24-21) cmは補助柱と思われる。床面中央のSK 01 (228×152-16) cm



挿図170 S I 120遺物図その1 (S=1/4)

は特殊な意味をもつ土壇と思われる。長瀬高浜遺跡では2段の掘り方をもつ住居跡はS I 84などがある。時期は遺物から長瀬I期と考える。



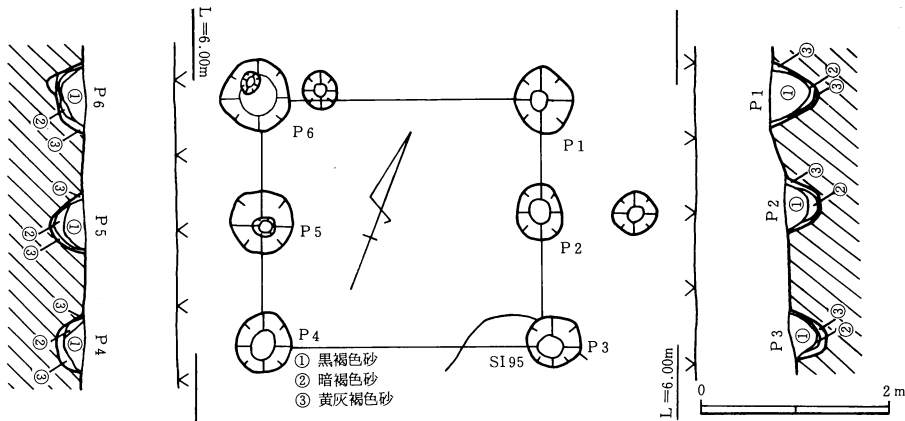
挿図171 S I 120遺物図その2 (土器・土玉S = 1/4、鉄製品S = 1/2、管玉S = 1/1)

第4節 掘立柱建物跡

昭和56年度前期調査地区（f1地区）での掘立柱建物跡は、Eラインより西側で7棟検出された。その内訳は1×1間1棟，1×2間3棟，2×1間3棟である。

SB22（挿図172，図版32）

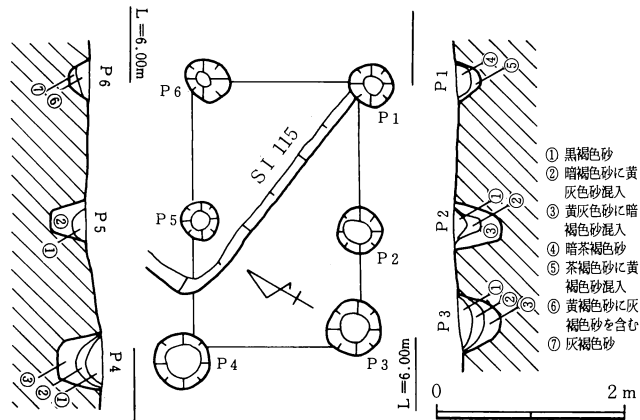
20E地区で検出した。1×2間の掘立柱建物跡であろう。柱穴の規模はP1（68×60-50），P2（60×48-36），P3（54×56-36），P4（62×58-26），P5（66×64-34），P6（76×72-28）cmで，柱穴間距離はP1-P2間より順に1.20，1.44，3.08，1.28，1.36，2.96mとほぼ均一である。P6で柱穴痕跡らしいものを検出した。他の掘立柱跡と比べて1間の側がきわめて長く，2間の側の柱穴間距離の倍以上である。逆に2間の側を妻とするような構造の建物かもしれないとも考える。軸方向はN-21°-W。柱穴内からは弥生土器片しか検出されていないが，P3がSI95（古墳時代中期前半）を切って作られているので，SI95よりも新しい時期の建物と考えられる。



挿図172 SB22遺構図（S=1/80）

SB23（挿図173，図版32）

20E地区の北西にあり，SI114の北西に，SI120の北にある。SI115とはP1・5・6が切り合い，SB23よりSI115の方が新しい。主軸はN-33°-Wで桁行2間，梁間1間の建物である。桁行長2.80m，妻通長1.80mである。各柱穴の規模はP1（46×44-

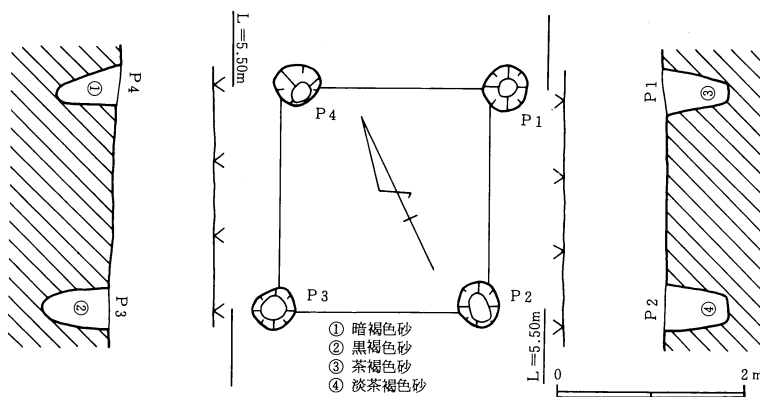


挿図173 SB23遺構図（S=1/80）

21), P 2 (48×48-39), P 3 (58×58-31), P 4 (58×58-38), P 5 (40×40-28), P 6 (46×44-21)cmで柱穴間距離はP 1 - P 2 間より1.56, 1.00, 1.84, 1.48, 1.48, 1.80mである。各柱穴底の絶対高はP 1 より順に5.26, 5.06, 5.06, 5.14, 5.10, 5.28mである。P 2 - P 3 柱穴間がやや短い、他の柱穴間は揃っている。出土遺物はない。S I 115との切り合い関係からそれより新しい時期の建物と考えられる。

S B 24 (挿図174, 図版33)

21D地区にありS I 113の西, S I 117の南に位置する。主軸はN-26°-Eで梁間1間、桁行1間の建物である。桁行長2.4m, 妻通長2.24mを測る。柱穴は4個で、各柱穴間距離はP 1 - P 2 間より順に2.32, 2.16,



挿図174 S B 24遺構図 (S = 1/80)

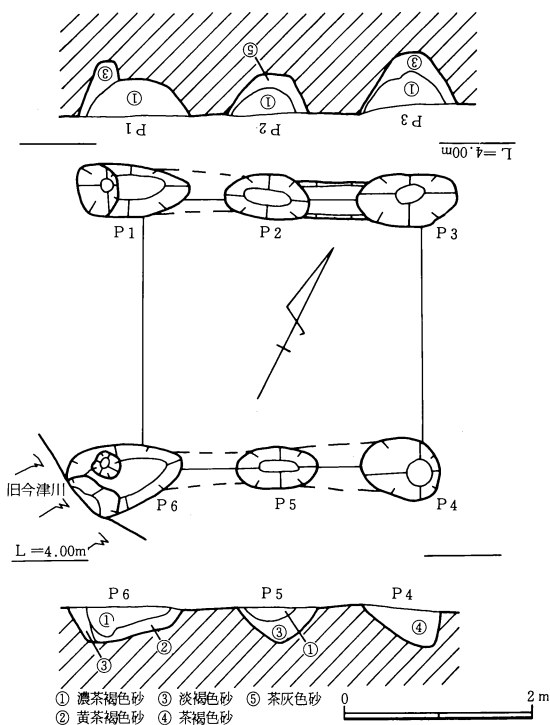
2.28, 2.16を測る。各柱穴の規模はP 1 より順に (48×48-68), (48×42-67), (44×44-71), (42×42-64) cmを測る。遺物はP 3 より土師器片を検出したが、図化できなかった。時期は他の遺構や出土遺物などから古墳時代前期~中期にかけての遺物と考えられる。

S B 25 (挿図175, 図版33)

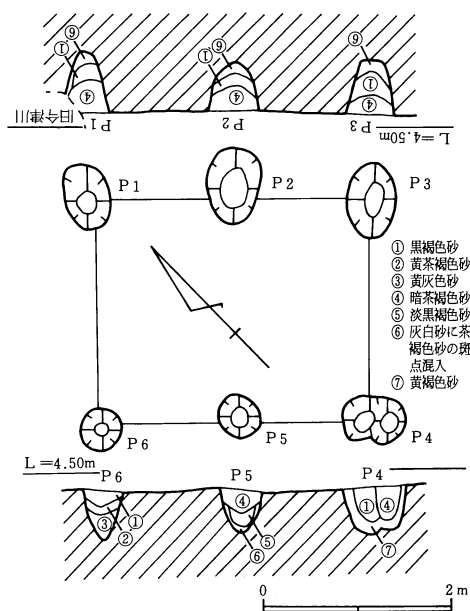
21D地区の北西にあり, S I 111の西, 64号墳, S B 26の南に位置し, S X 63の埋葬施設にP 3 が, 旧今津川にP 6 が切られている。新旧関係はS B 25がS X 63よりも古い。1×2間の建物で、桁行長3m, 妻通長2.88mを測り、主軸はN-27°-Wを振る。各柱穴の規模は、P 1 (118×54-59), P 2 (88×44-43), P 3 (104×54-58), P 4 (84×64-40), P 5 (88×44-29), P 6 (120×72-53) cmで、柱穴間距離はP 1 - P 2 間から順に1.68, 1.52, 2.92, 1.48, 1.68, 3.04mを測る。この掘立柱住居の大きな特徴として、並行する2本の溝を浅く掘り込んでから、その溝中に各柱穴を掘り込んでいることである。桁行長と妻通長はほぼ等しい。柱穴内外からの出土遺物はみられなかったが、S X 63との切り合い関係から、S X 63より古い時期の建物と考えられる。

S B 26 (挿図176, 図版33)

21E地区の南西に位置し, 64号墳の第一埋葬施設のすぐ南で検出した。新旧関係は64号墳の方が新しい。1×2間の建物で、桁行長2.92m, 妻通長2.4mを測り、主軸はN-44°-Eを振る。各柱穴の規模は、P 1 (46×68-59), P 2 (52×80-51), P 3 (52×80-58),



挿図175 S B25遺構図 (S = 1/80)



挿図176 S B26遺構図 (S = 1/80)

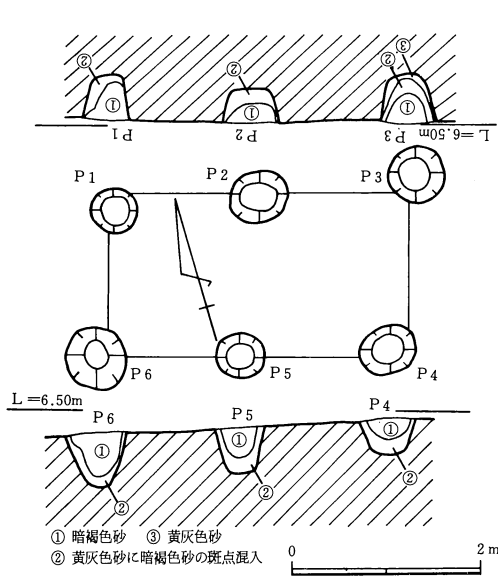
P 4 (66×46-48), P 5 (44×46-46), P 6 (44×46-52) cmで、柱穴間距離はP 1～P 2間より順に1.56, 1.48, 2.36, 1.32, 1.48, 2.44mを測る。桁行長が妻通長よりもやや長い掘立柱建物である。遺物の出土はみられなかったが、64号墳との切り合い関係から古墳時代前期から中期の建物と考えられる。

S B27 (挿図177, 図版33)

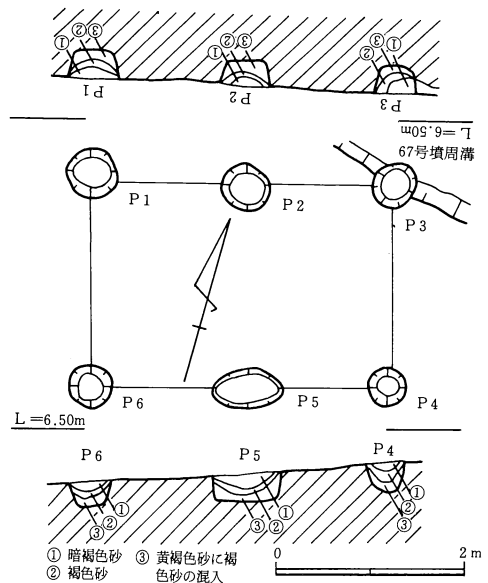
20Fの南東区に位置し、67号墳の南、S X 66の北にある桁行2間、梁間1間の建物である。桁行長3.2m、妻通長1.7mで主軸はN-16°-Eを振る。各柱穴の規模はP 1 (48×47-47), P 2 (60×56-38), P 3 (58×58-51), P 4 (61×50-38), P 5 (52×46-49), P 6 (65×62-56) cmで柱穴間距離はP 1-P 2間より1.52, 1.63, 1.77, 1.49, 1.52, 1.51mを測る。遺物はP 1, P 4～P 6から土師器片が出土しているが図化できなかった。時期は周囲の遺構・出土遺物より古墳時代前期から中期と考えられる。

S B28 (挿図178, 図版34)

20Fの南西区に位置し、67号墳と切り合い桁行2間、梁間1間の建物である。桁行長3.2m、妻通長2.16mで主軸はN-16°-Wを振る。各柱穴の規模はP 1 (54×53-29), P 2 (51×49-26), P 3 (50×44-30), P 4 (41×40-30), P 5 (74×41-29), P 6 (45×45-26) cmで柱穴間距離はP 1-P 2間より1.6, 1.6, 2.1, 1.5, 1.6, 2.2mを測る。



挿図177 S B 27遺構図 (S = 1/80)



挿図178 S B 28遺構図 (S = 1/80)

遺物はP 1より玉髓，P 2・5より土師器片が出土しているが図化できなかった。時期は67号墳との切り合い，出土遺物から古墳時代前期から中期と考えられる。

第5節 その他の遺構

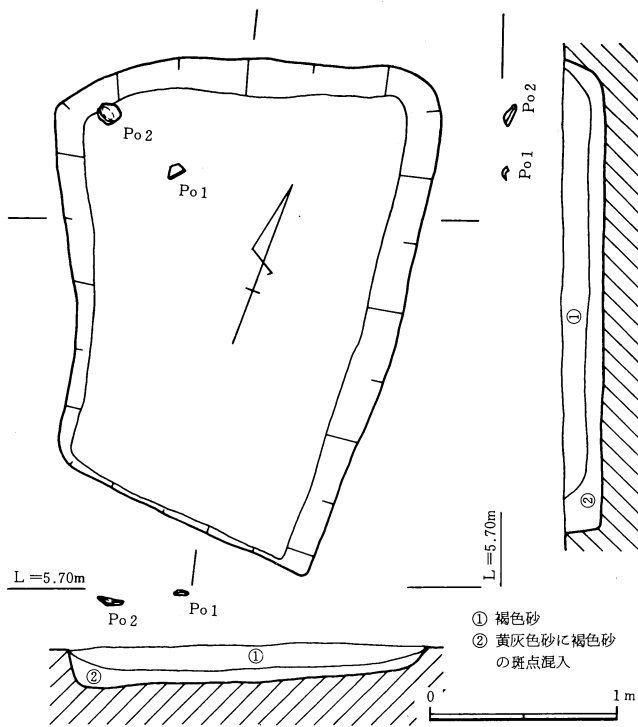
昭和56年度前期調査地区（f地区）で検出したその他の遺構には，土壌（弥生時代2，古墳時代1），南側斜面（水田跡・馬の骨など），浜井戸がみられる。特に浜井戸は昭和初期の頃まで砂丘地の灌漑に利用されていた。

20E S K 01（挿図179・180，図版34）

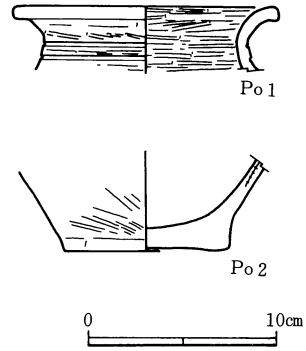
20E北東区，S I 114内に位置する。平面形はいびつな長方形で，長辺2.52m，短辺1.92m，深さ22cmを測る。内部より数点の弥生土器片を検出した。土壌の性格等は不明である。出土遺物より，弥生時代前期の遺構の可能性はある。

20F S K 03（挿図181～184，図版34・47）

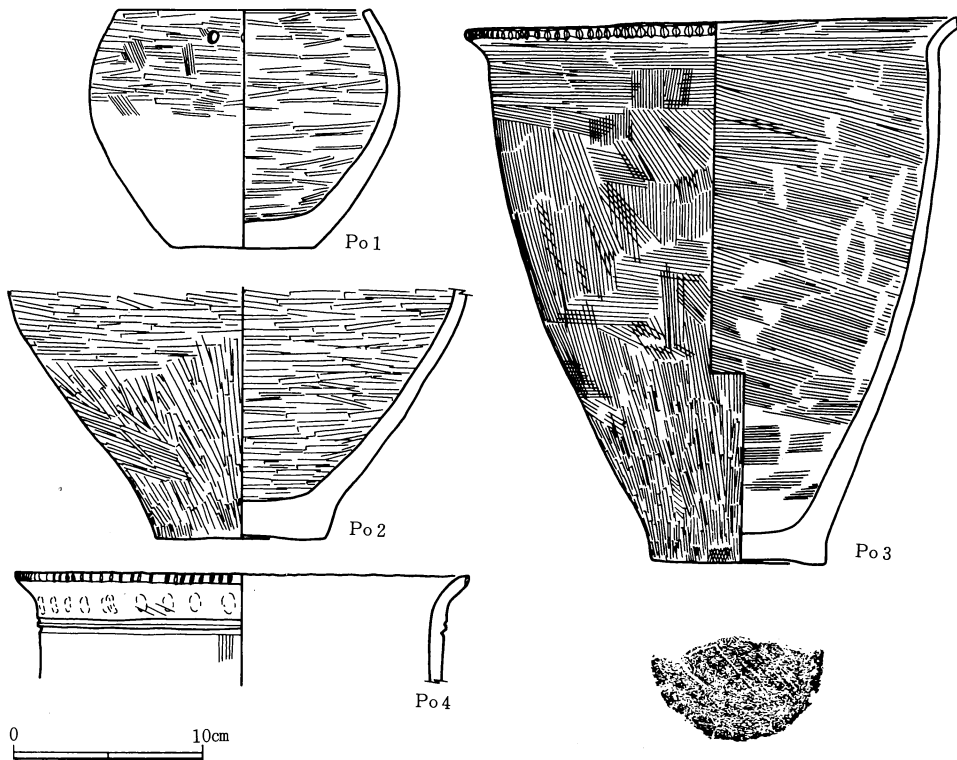
20F南東区，S I 114の北側に位置する。平面形は南北5.84m，東西5.24m（推定）の長方形を呈すが，西側の掘り込みが浅くテラス状の土壌となっている。東側の北端と南端で柱穴らしいピット（北端68×132-49，南端64×146-69cm）を持ち，P 1から磨製石斧（S 1），弥生土器（P o 8），黒曜石（S 2～5）などを検出した。土壌は東に高く西に低いなだらかな斜面を方形にカットしている事，その方形のカットに対応してP 1・P 2があり，それらのピットが方形のカット面の中にある事などから建物跡を想定する。しかし形態から住居・倉庫のようなものは考えられにくく，住居に付随する何らかの仮小屋的なものであろう。出土遺物よりこの遺構は弥生時代前期頃のものであろう。



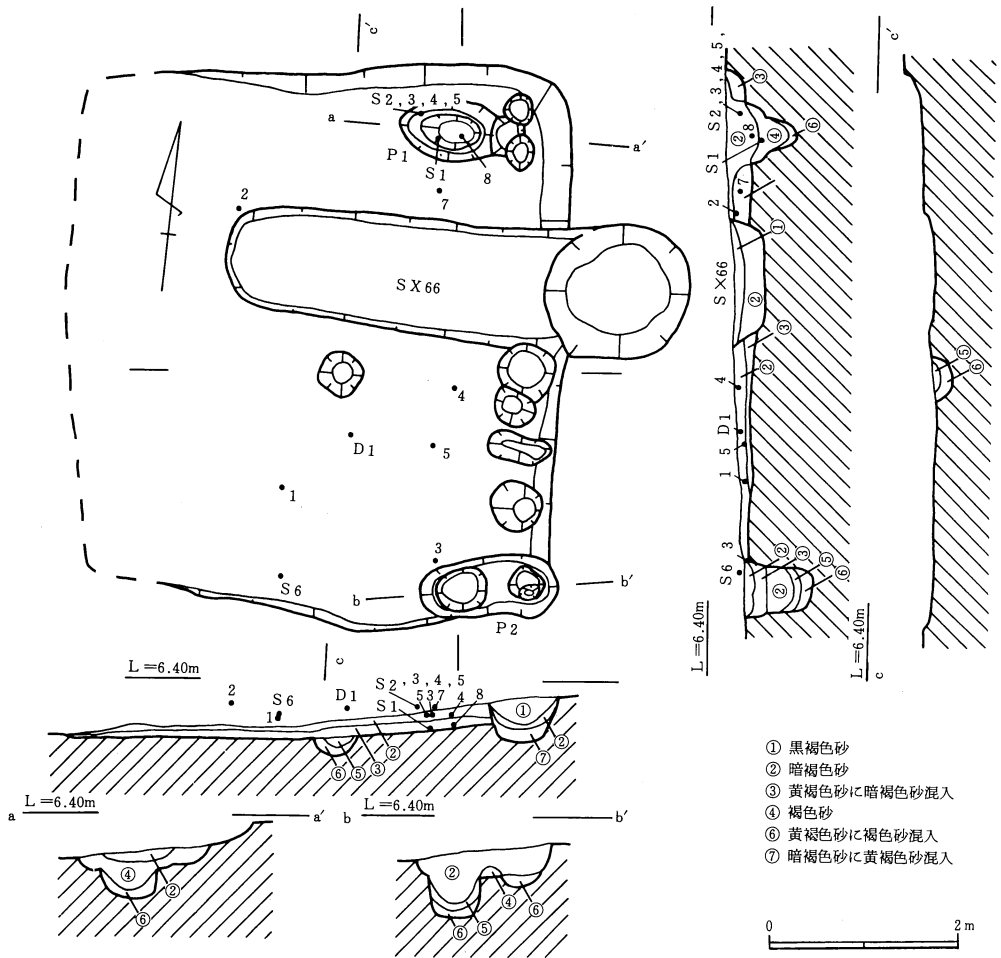
挿図179 20E S K 01遺構図 (S = 1/40)



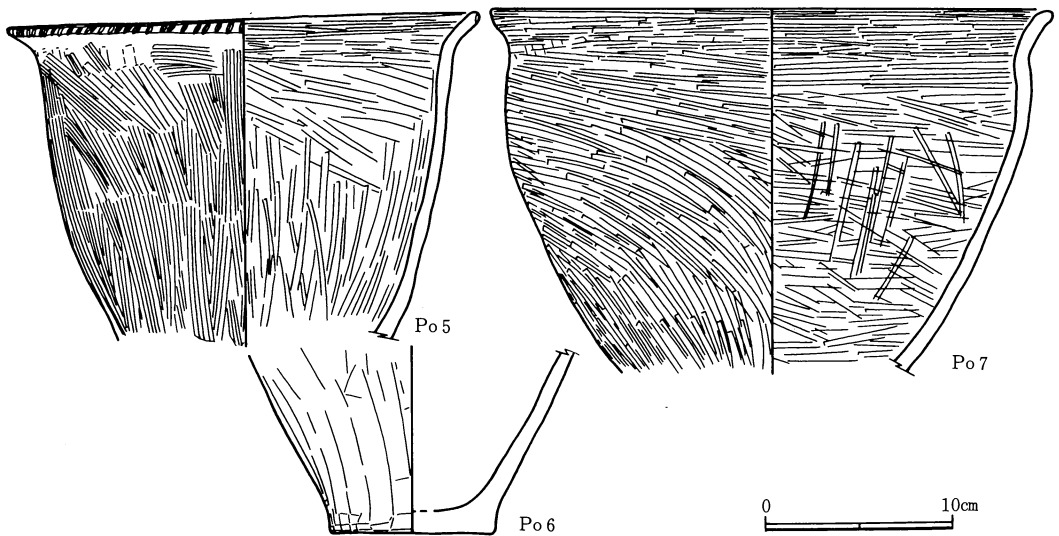
挿図180 20E S K 01
遺構図 (S = 1/4)



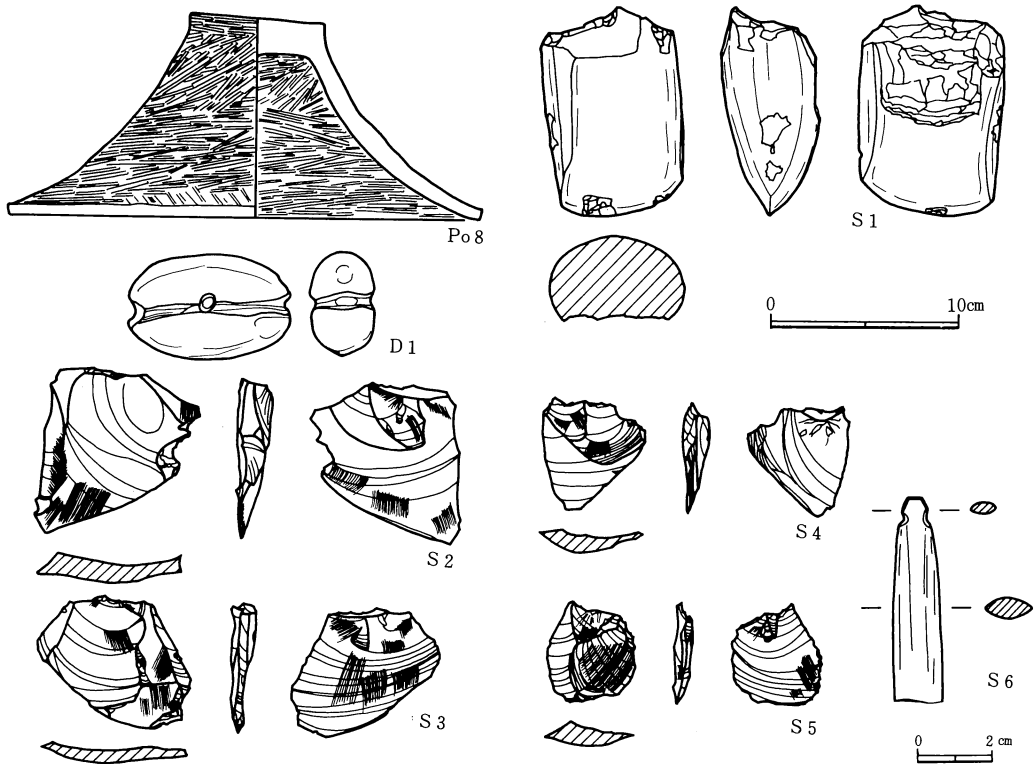
挿図181 20F S K 03遺作図その1 (S = 1/4)



挿図182 20F SK03遺構図 (S = 1/80)



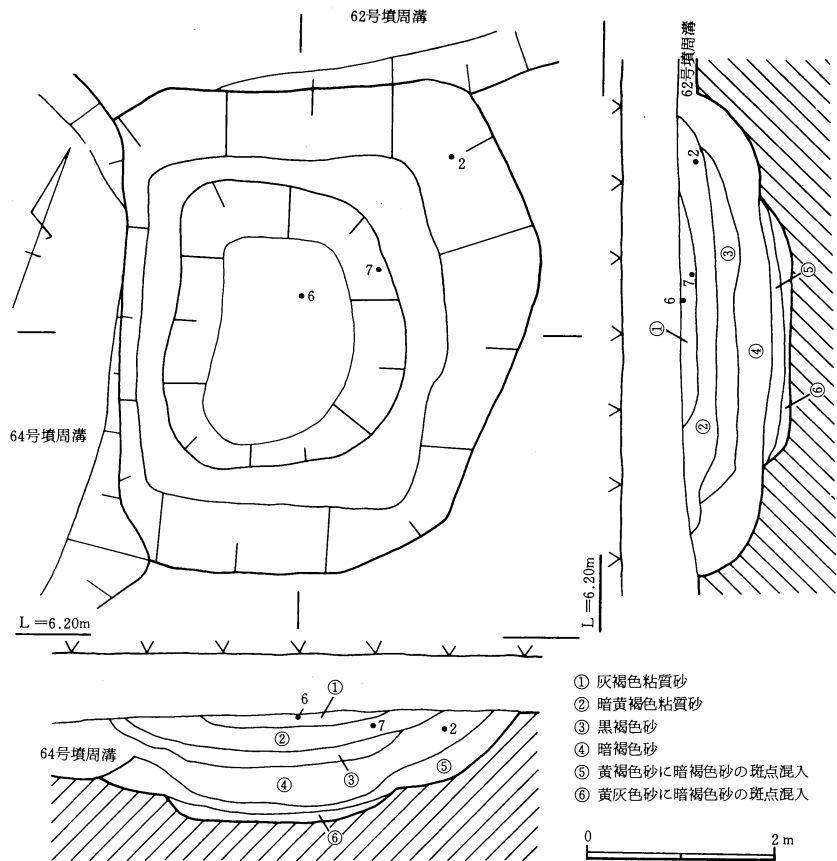
挿図183 20F SK03遺物図その2 (S = 1/4)



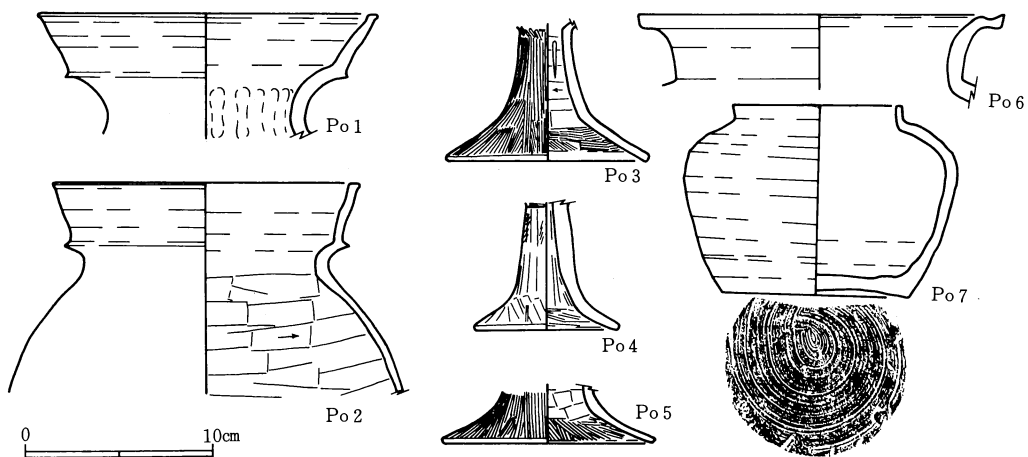
挿図184 20F SK03遺物図その3 (土器・土錘・石斧S=1/4、黒曜石・舌S=1/2)

21E SK03 (挿図185・186, 図版35・47)

21E地区にあり、西で64号墳、北で62号墳の各々の周溝と切り合う。また南でS I 120、北でS I 118を切っている。2段の隅丸方形をもつ大型の土壇である。上辺の肩は500×440(推定)cm, 下辺の肩は300×240cm。検出面から底面までの深さは約110cmあり、壁面は45°くらいであがる。軸方向はN-20°-E。底面からはピットは検出されなかった。第2層は粘土と言ってよい堆積層で、その下から黒褐色砂層(第3層)が検出された。この粘土層はSK03の中央部に円形に堆積していた層で、1号墳地区の他の箇所でも数か所このような粘土の土壇状のものが検出されている。このSK03の粘土層内では須恵器の短頸壺(Po7)が検出されており、この層自体の堆積した時期は少なくとも8世紀以降と考えられる。断面でみる限りでは、西の64号墳の方がSK03を切っており、より新しいと考えられる。また、第4層以下で出土した遺物も古墳時代前期(長瀬Ⅱ期)のものと考えられるものである。そのため次のように考える。SK03は古墳時代前期に作られ、その後62・64号墳がこれを切って作られ、SK03の上層にその後粘土が堆積した。従ってSK03の第3層と第2層の間にはかなり時間差があると考えられる。SK03の中からは柱穴と考えられるピットは全く検出されず、また周辺からもこれに伴うピットは検出されなかった。従ってこのSK03の性格は不明である。



挿図185 21E SK03遺構図 (S=1/80)



挿図186 21E SK03遺物図 (S=1/4)

1号墳周辺地区（f₁地区）南側斜面の粘土層（挿図187～192，図版35・36・47・48）

(1) 全体の地形の概要（挿図188，図版35）

f₁地区と呼称する南北でC～G，東西で18～21ラインの内に含まれる地区は，大まかに言って2つの地区に分かれる。1号墳より北に広がる海拔6mから7m程度の平坦な地域と，1号墳南側で海拔6～3mまで急激に落ち込む斜面以南に広がる地域とである。北側の平坦な地域では黒褐色砂（黒砂）の分布が確認され，そこからは弥生時代前期～中世に至る遺構が検出確認された。この地域については，発掘調査した地域以外では周辺では黒砂は検出されていない。東の方は地山と考えられる灰白色砂が海拔8mまで盛り上がり，さらに東にかけては傾斜して丘陵状になっている。この丘陵の頂部及び東面では，前方後方墳（26号墳）と弥生時代前期～中期の土壙墓群及び中世の鉄ナベを含む土壙等が検出されている。さらに東側には黒砂層がごくわずかに傾斜しつつ続き，昭和54～57年度調査により多数の遺構・遺物が検出されている。西と北側については地山自体は若干低く傾斜しているものと思われるが，黒砂は検出されていない。これらのことから，このf₁地区の周辺にも元来は黒砂が堆積していたものの，飛ばされて消失したものと推定する。これら遺跡全域に黒砂層が形成された時期は遅くとも弥生時代前期～中世で，その後，中世から近世のある時期以降から急に白砂が飛来し，その際に一部の黒砂も消失したと思われる。

南側ではこの状況は大きく異なる。1号墳地区（f₁地区）では18C～20C・21D地区でこの北側から続く黒褐色砂層は途絶し，海拔6mから3mまで地山の灰白色砂が急激に傾斜している。1号墳の南側はこの斜面の東西の線上にあるため，大きく削られたような状況である。この斜面以南の地区を東西70m，南北10mにかけて発掘調査した結果，上・下2層の粘土層の広がりを検出した。

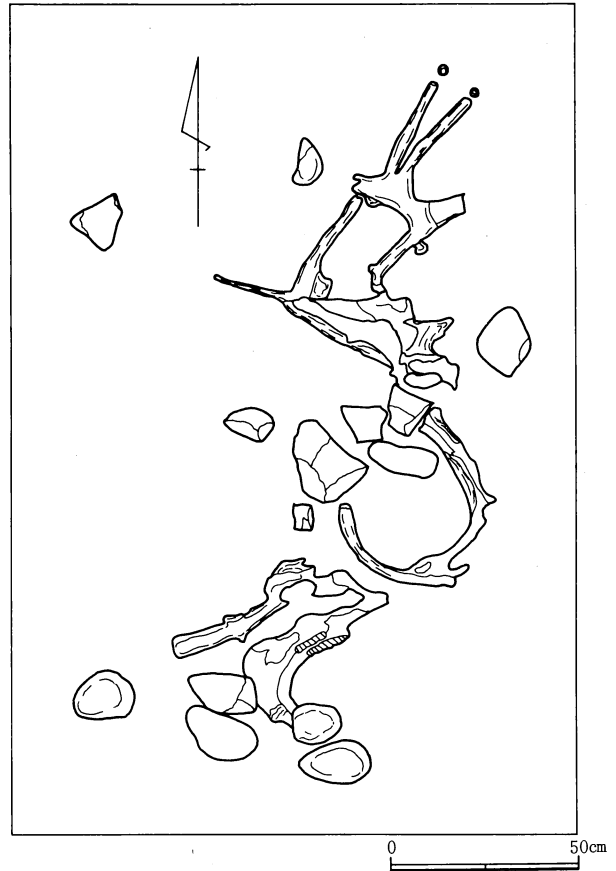
第1層（上層）は東側の主として18C・19C地区で海拔約3m内外で検出された。断面でみる限り20C地区にも広がっており，20C地区から東と南にかけてずっと粘土層の堆積があるものと思われる。第2層（下層）は西側の20C・20D・21D付近で海拔1.8m内外で検出された。即ち，この2層の粘土層は一部重なる部分をもって1～1.5mの高低差をもって広がっていることがわかった。

(2) 第1粘土層（挿図188，〔挿図188の①・⑩層〕図版35）

18・19C地区で海拔3m内外で厚み約20cmで広がる青灰色の粘土層を検出した。粘土層は北側の斜面の裾からほぼ水平に南に続いており，さらに南へずっと続くものと推定できる。また西側の20C地区でも，この粘土層は存在していたと思われる。北側で60cmから2.4mの不整形な帯状の高まりを確認した。高さは4cm程度である。粘土層の上層は灰白色砂と黒褐色砂が斑状にかなり乱れて堆積していた。粘土層に含まれる遺物はほとんどなく，わずかに帯状の高まりの上で灯明皿（P09）を1点検出した程度である。その他南側で馬

の骨を検出した。この粘土層の下は褐色砂が厚く堆積していた。湧水が著しく、海拔2 m以下については層の確認ができず、西側でみられた第2粘土層があるかどうか明確にできなかったが、トレンチ掘りの結果では無いものと判断する。

19Cの中央やや南東、南側斜面下の粘土層の中で検出した馬1頭分の骨は、頭を南にし体の右を下にした状態で出土した。(挿図187)これにともなう馬具などは検出されなかった。周囲には1号墳に用いられたと思われる円礫が散乱しており、墓墳のようなものはなかった。第1層は室町時代前後の粘土層と考えられていること、その時期に埋葬の形跡もないことなどから、何らかの原因で捨て置かれたものであろう。



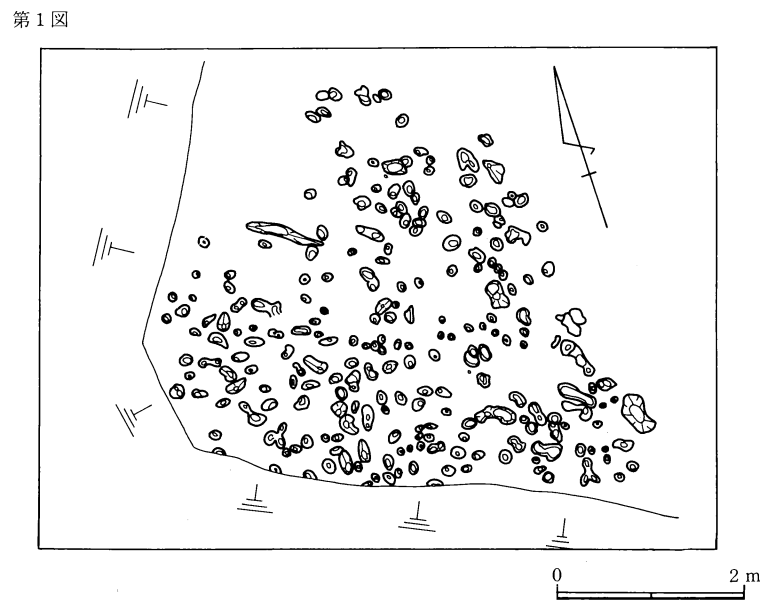
挿図187 馬の骨の出土状況図 (S = 1/20)

(3) 第2粘土層 (挿図189~192, 図版35・36・47・48) [挿図188の④・⑧層]

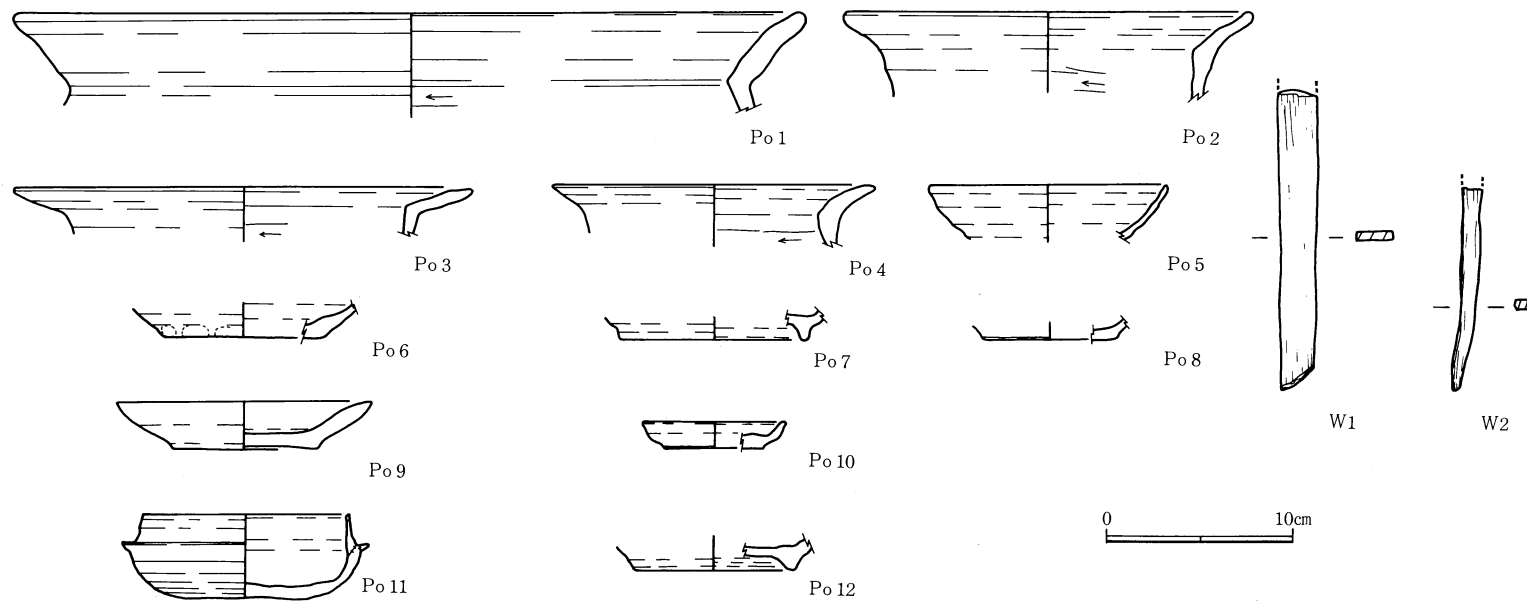
20C・21D地区で海拔1.8m内外で厚み20cmで広がる青灰色の粘土層を検出した。粘土層の上面は地下水の鉄分で赤くなっていた。上層は、海拔6 mから粘土層に至るまで灰白色砂が異なったり、あるいは同じ色合いでも間に砂鉄分が厚く層状に堆積していたり、また層内にごく細かく何重にもラミナ状に砂鉄の層が含まれていたりして続いていた。下の粘土層直上付近では砂鉄の方向はかなり乱れたり、渦巻状になったりして堆積していた。粘土層は西側の21D地区で径20cm・深さ6 cmの穴を極めて多数もつ面がまず検出された。その穴の中には多数の弥生土器、土師器、須恵器、土師質土器の細片が流入堆積していた。粘土層の上は灰白色砂で、粘土層そのものの上面と直上の灰白色砂は地下水の鉄分で赤くなっていた。発掘調査時点ではこの高さでは湧水はみられなかったが、湧水によるものである。遺物は北側の斜面の上の平坦な黒褐色砂の広がる面からの転落物と思われ、一部同一個体と確認できた破片もある。これらの遺物のうち実測できたものは挿図190に示した。



挿図188 南側斜面全体遺構図 (S = 1/200)

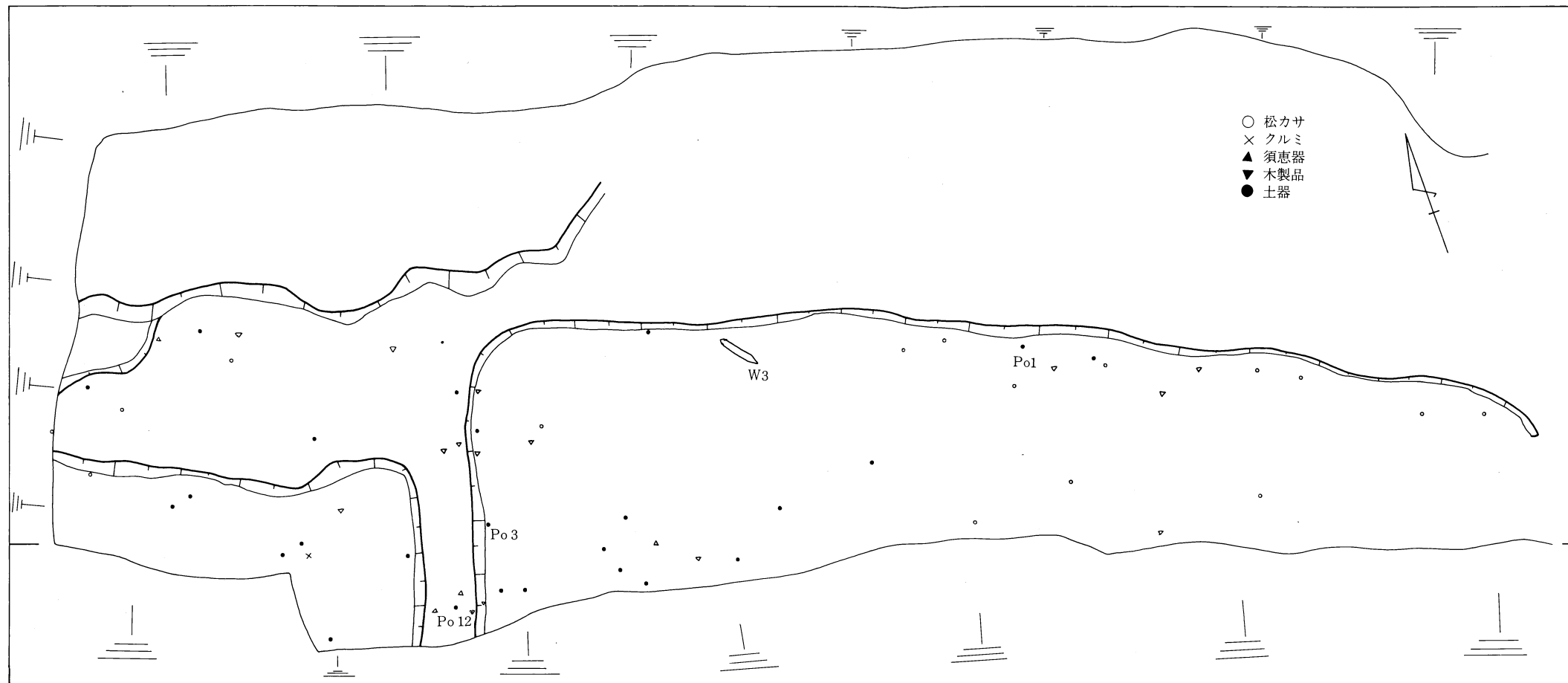


挿図189 第2粘土層粘土面遺構図 (S = 1/80)

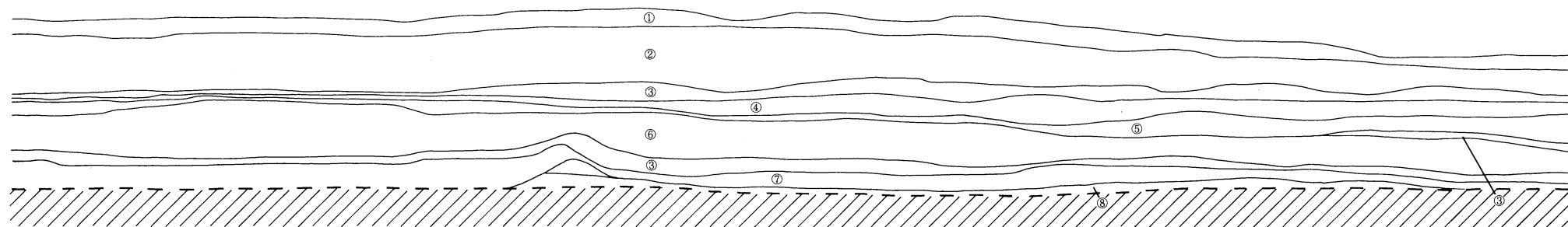


挿図190 南側斜面遺物図その1 (土器・木製品 S = 1/4)

第2図



L=4.00m



挿図191 第2粘土層遺構図 (S=1/80)

- | | |
|-------------|------------------|
| ① 褐色粘質砂 | ⑤ 黄褐色砂(砂鉄を多く含む) |
| ② 淡明褐色砂 | ⑥ 灰褐色砂(砂鉄を多く含む) |
| ③ 砂鉄の集中する砂質 | ⑦ 青灰色粘土(鉄分を含む) |
| ④ 暗黄褐色砂 | ⑧ 褐色砂(自然遺物を多く含む) |



挿図192
南側斜面遺物図
その2 (S=1/4)

粘土層はより東側にも広がり、北側では斜面に沿って若干もりあがっていたため、地山面の本来のレベルは検出面より北側にむけてやや高まっていたものと思われる。穴を多くもつ粘土面は東側では確認できなかった。この東側と西側との境は粘土層そのものが高まっており、明確に区別された。粘土層の下は約80cmの褐色のシルト層が堆積しており、その層内から多数の植物質の遺物が検出された。松・松かさ・胡桃、その他の樹木・木片などである。木製品と判断できるものも数点あったが、中でもW3は特異な形態をしている。この褐色シルト層を取り除いたところ、平面的に方形と推定しうる広がり確認できた。一辺が15mの隅丸の方形のものが2つ並んでいるものと推定する。東側の広がり東隅は粘土層が薄くなっている。下層は灰白色砂だが湧水が激しく、詳しい調査はできなかった。粘土層の花粉分析^{注1}から、多数のイネ科の花粉が確認されていることから、これらの遺構は水田跡と推定する。中央の稜状の高まりは畔と考えてよいだろう。西側の面の多数の穴は足跡状でなく、ほぼ正円に近いものが多数重複している状況で粘土面の全面にみられた。この穴は東側のものには全くみられず、粘土層そのものの厚みも西側では約40cmで東側は約12cmとかなり薄い。

この粘土層の時期は粘土層の中にある土師質土器などから室町時代以前と思われる。またこの南の21C地区でも海拔1.7mで青灰色の粘土層が確認された。この第2層がのびているものと思われる。

(4) 南側斜面と黒褐色砂分布地域との関係

以上の結果、南側斜面には海拔1.8mの第2粘土層、それに一部重なって海拔3mの第1粘土層の存在が認められた。両面ともに水田跡と考えてよいだろう。第1層は室町時代前後、第2層は室町時代以前のものとして推定する。これらの粘土面は灰白色砂の上に形成されており、この地域では黒褐色砂の堆積はみられなかった。

また、この南側斜面のすぐ西側のf₂地区でも試掘調査を行ない、海拔20mで青灰色の粘土層を確認した。この層は第2層検出地点とは30mしか離れていないのに約1.6mも深い。さらに東側でも南北でB～A A、東西で13～17ライン（緊急調査地区）や11B～12B地区（昭和54年度地区）でも青灰色の粘土層が検出されている。

この黒褐色砂と粘土層との境界部分、つまり斜面の始まる地点の断面を観察すると北から続く黒褐色砂は急にえぐりとられたような状況で消失している。また1号墳そのものも南側は急に傾斜しており、斜面の下粘土層の下層から1号墳を巡るような形で多数の石礫が検出されている。これらの点から次のように仮説してみたい。長瀬高浜遺跡における黒褐色砂は、少なくとも1号墳築造時期（5世紀後半代）には現在の斜面との境界付近よりずっと南に、海拔6mぐらいからなだらかに傾斜していた。その後ある時期に6から1mまで一挙に黒褐色砂層及び地山の灰白色砂が消滅した。その後海拔1.8mに第2粘土層が、

さらにその後海拔3mに第1粘土層が形成された。このように考えるとこの地形の急激な変化は一応理解できるのではないか。この黒褐色砂消滅の理由として旧天神川の氾濫を想定してみたい。この南側斜面の位置は、旧天神川の名残りと言われる通称「舟川」から直線距離で北方200mにあたり、ちょうど中国山地から北上する旧天神川がかって直角的に転流し東にむかっていたと推定される角の部分にあたる。この旧天神川の河川氾濫は著名であってまさにその事が現在の天神川への流路変更の原因であったのである。したがって南側斜面の成立は、旧天神川による黒褐色砂層侵食によってこの地域が氾濫原化し湿地化する事によって水田として利用された事、さらに今一度の氾濫による堆積によって第1層が形成された、と推測する。その時期は第2層の成立が室町以前、第1層が室町前後のころと考えられる。従って長瀬高浜遺跡におけるより古い時期の耕作地は、この南側斜面の位置よりかなり南に求めるべきだと考える。

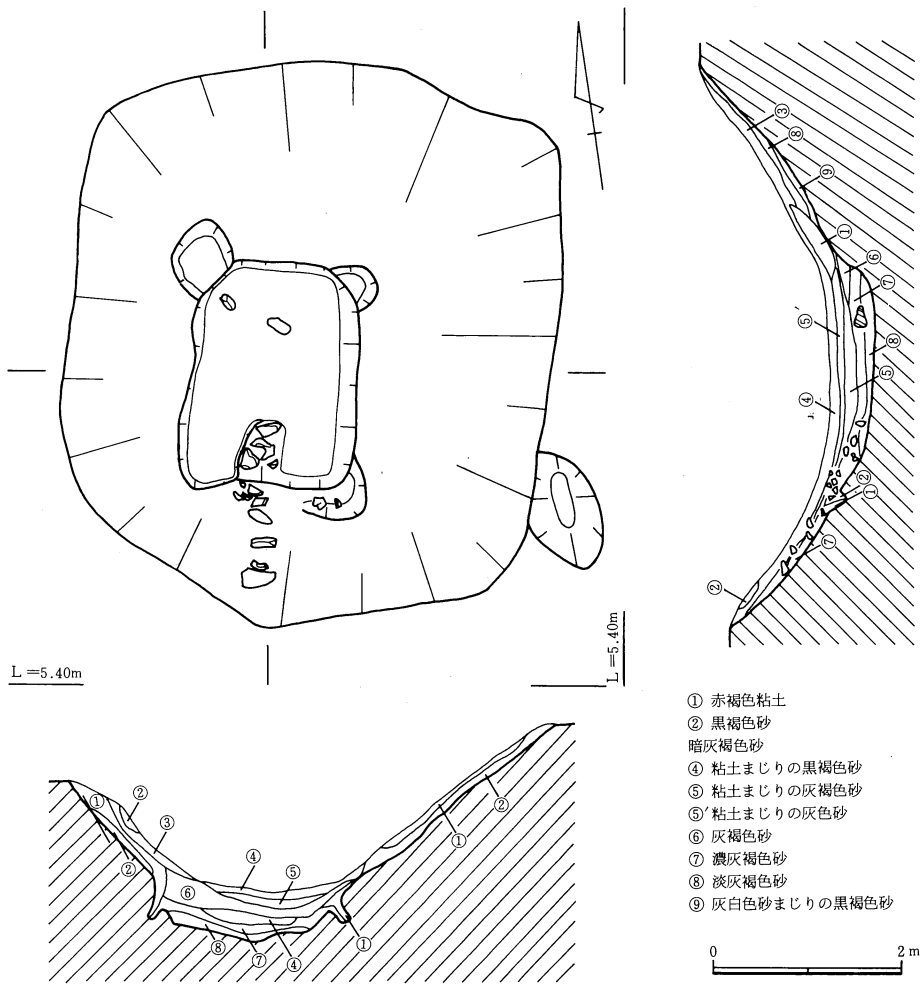
注1 岡山理科大学 三好教夫氏の御教授を得た。

浜井戸（挿図193，図版36）

20D地区で検出した。近世～現代にかけて砂丘地の耕作が開始された際に灌漑のために掘られた井戸である。羽合町・北条町・大栄町にかけて広がる北条砂丘一帯には非常に多数のこの種の浜井戸が掘られており、最近のスプリンクラー等による灌漑施設整備がなされる昭和初期まで実用されていたものである。中には現存し、なお水をたたえているものもあると言われる。各畑地に1～2基の浜井戸があった事が現存する資料によって判る。この浜井戸について詳しい位置をその資料から判定する事はできないが、当遺跡周辺にはさらにもう1基の浜井戸が現存する。この浜井戸は1号墳北西部の墳丘裾部に設けられており、1号墳墳丘とそれを巡る葺石がこれによって破壊されている。上辺は5.92×5.21mで最も高い地点から底までの高低差は2.32mである。底面のレベルは海拔290cmである。大きくいって2段の方形の構造をもち上辺はすりばち状に約55°の傾き、下辺は240×180cm上部よりやや急になっている。下部は丁寧につくられており、底部から126cmの高さのところから八の字形に16cmの厚みの粘土がつめこまれている。構造的には、粘土をつめた上に板を方形にたててならべ囲いとしたものかと思われる。角はやや袋状にひろがっている。南側には16cm大の河原石が20cm間隔でならべられており、遺存している部分は一部であるもののこの上部の斜面には全体に粘土が敷かれていたものと思われるから、かなりしっかりした階段をなしており下において水をくむのに都合よくあったものと推定する。下部は全体におよんで鉄さびの含まれた砂が堆積していた。

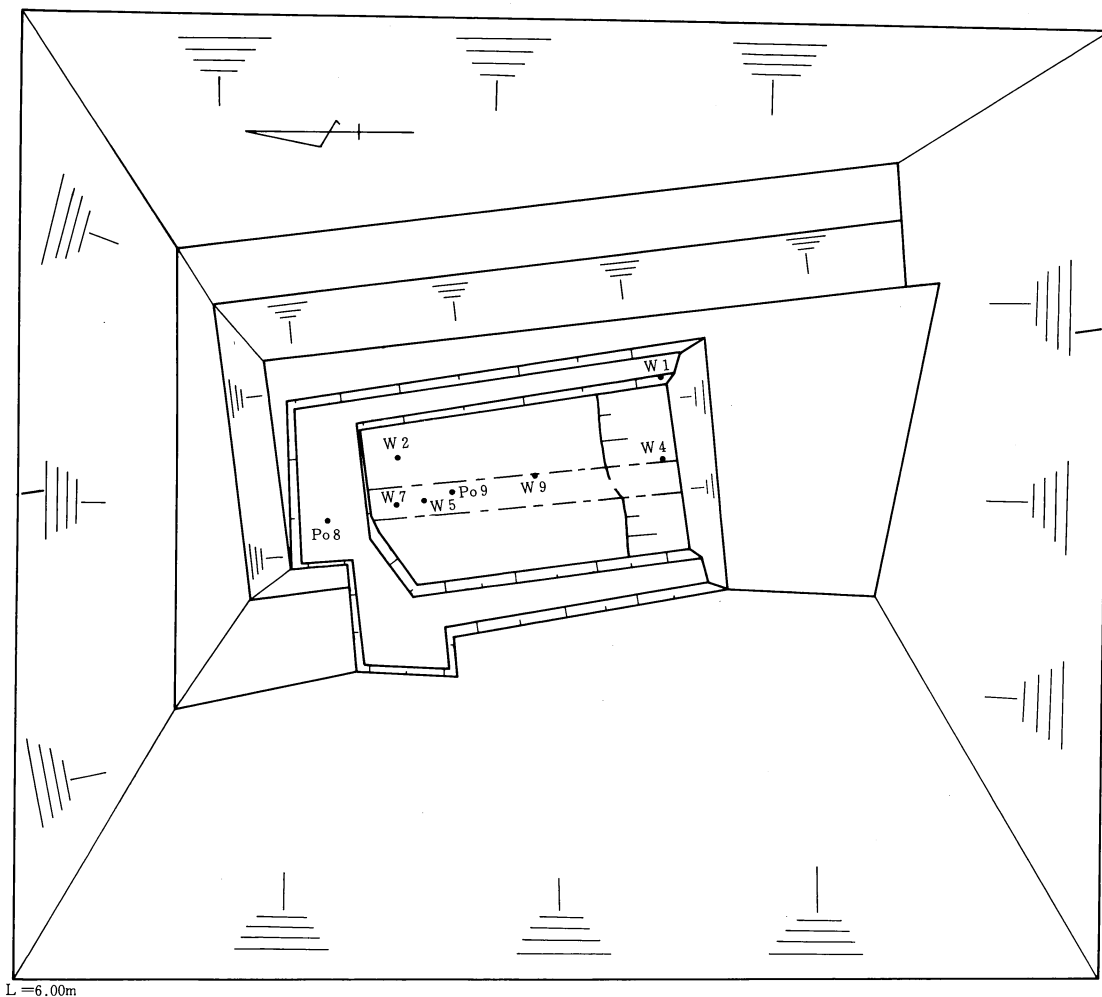
第6節 f₂地区試掘調査（挿図194・195，図版36・48）

1号墳周辺地区（f₁地区）の南側の海拔100cm程度の所で粘土層及びシルト層の広がりを確認し、それを調査したところ奈良期及び室町時代以降の水田跡ではないか、と判断し

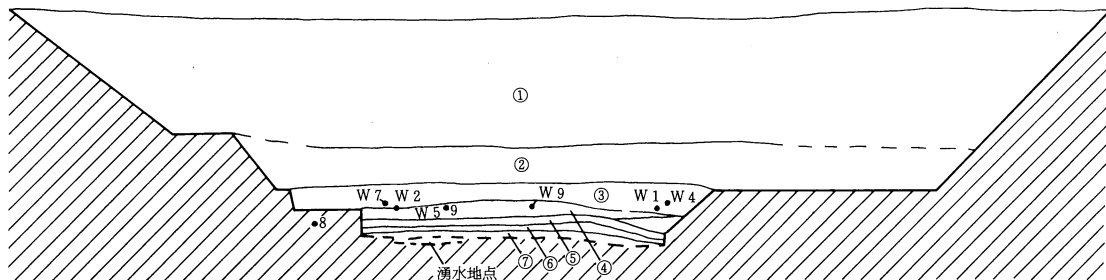


挿図193 浜井戸遺構図 (S = 1/80)

た。それに基づき、さらに粘土層の広がりを追究確認するために1号墳地区の西50mの地点で試掘調査を行った。グリッドとしてはほぼ23D地区にあたる。海拔5mの現地表面から2.5mまでの白砂の堆積層については重機で掘りさげを行った。1.8m以下でシルト的な粘質砂層の広がりを検出した。この層内で多量の須恵器・土師器などの土器、漆器(Po9)木製品、木片を検出した。このレベルで周辺から湧水が激しく調査は困難を極めた。さらに下層で2層の粘土層を確認した。遺物はこれらの粘土層からは確認できなかった。上層のシルト層は単子葉植物の茎を多数含んでいた。粘土層は水平に広がり南側にむかって傾斜している。1号墳地区南側の粘土層は海拔1.6~2mであり、このf₂地区の粘土層及びシルト層は海拔0~1mに位置しており、かなりの高低差がある。この粘土層の時期は中世であろう。



L=6.00m



- | | |
|-------------|----------|
| ① 灰白色砂 | ⑤ 黑褐色粘土層 |
| ② 灰褐色砂 | ⑥ 青灰色粘土層 |
| ③ 暗灰色粘質砂 | ⑦ 茶褐色粘土層 |
| ④ 茶褐色砂(酸化鉄) | |

0 4 m

插图194 f₂地区遺構図 (S = 1/160)

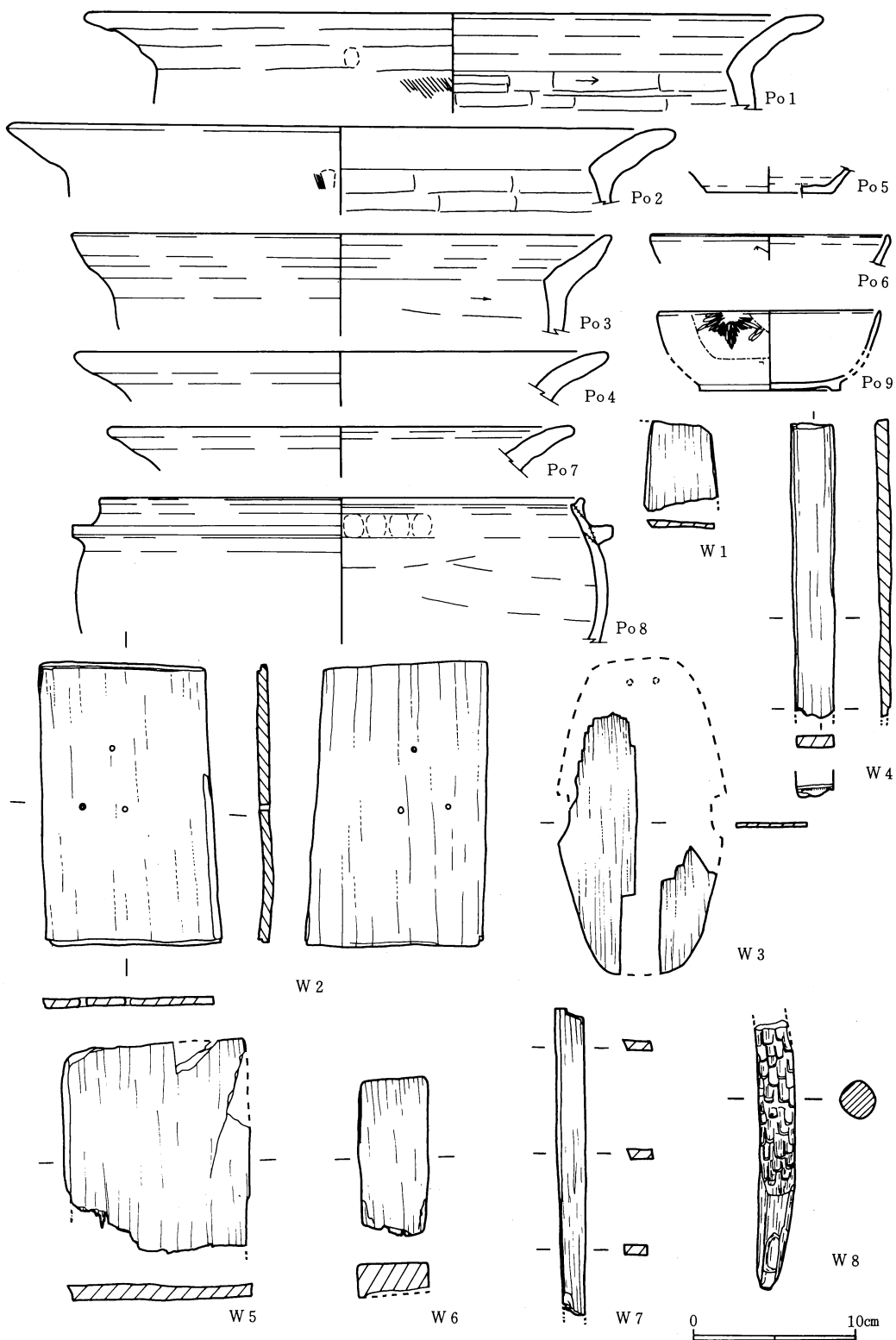


插图195 f₂地区遗物图 (S=1/4)

第7節 f1地区出土弥生土器(挿図196~200, 図版48)

53年度・56年度調査地区(f1地区)内,特に19D・20D・19E地区内より多量の弥生土器が出土した。遺構として認識したものは前述したが,ほとんどの弥生土器は遺物包含層内より遺構に伴わず出土している。古墳時代の住居跡を建てる時に弥生時代の住居跡等生活面が破壊されたためであろう。

壺(Po1~38) 口縁部はゆるく短く外反する。頸部はなだらかに開き,扁球状に大きく張り出し,安定した平底につづく。外面は丁寧なヘラ磨き,内面はハケ目を施した後ナデあるいはヘラ磨きを施す。頸部と肩部に段を有する(Po8)。また,肩部の段のかわりにヘラ描き沈線を施し,重弧文(Po1・2),刻み目(Po10),列点文(Po11),格子文(Po28)を施すものがある。頸部の段も同様にヘラ描き沈線にかわる。さらに沈線間に列点文(Po21),刻み目(Po22・23)を施す。また頸部に突帯がめぐり列点文を施したものがある(Po14~16)。他に大きく外反する口縁部を持ち,端部には1条のヘラ描き沈線を施した後刻み目を施した小型の壺(Po30),わずかに外反する口縁部をもつ器壁の厚い小型の壺(Po29),口縁端部に1条のヘラ描き沈線を施した後刻み目を施した非常に大きな口縁部をもつ壺(Po31)などがある。

平底の底部(Po32~36)のほかに,台付壺と思われる中高の底部(Po37・38)がある。

甕(Po39~Po60) 口縁部は短くゆるく外反する。わずかだが逆L字状に口縁端部が開くもの(Po52)もある。胴部はややふくらんだ後すばまって平底につづく。ほぼ直線的にすばまるもの(Po47・49・51・52)もある。底部は平底である。中央に小孔を穿ったもの(Po53~55),外面に媒が付着しているが,中高で台付壺に近いもの(Po56)などがある。調整はハケ目調整が主体でナデ仕上げもなされる。また,ヘラ磨きが施される個体もある。口縁端部は刻み目をもつものともたないものがある。頸部に段を有したり(Po39~41, 45・46),ヘラ描き沈線(Po42~44)を施す。

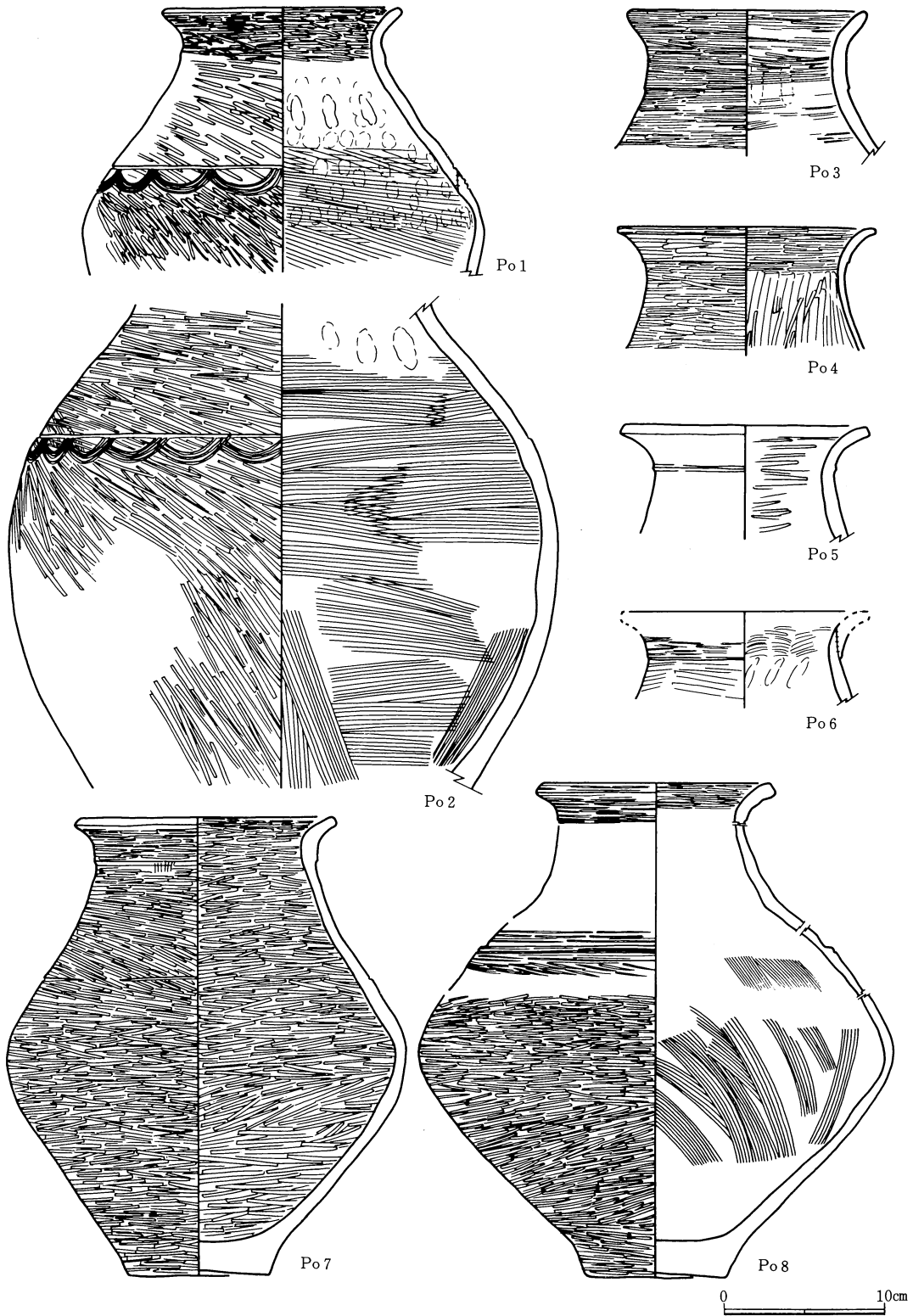
その他の器種(Po61~67) 鉢形土器(Po61),台付碗(Po62),ミニチュア土器(Po63~67)などがある。Po62は台付壺の可能性もあるが,底部が広く,薄手であることから一応碗と考えた。ミニチュア土器は鉢形のもの(Po63)と平底的なもの(Po64~67)とがある。

以上の弥生土器は弥生時代前期の遺物と考える。

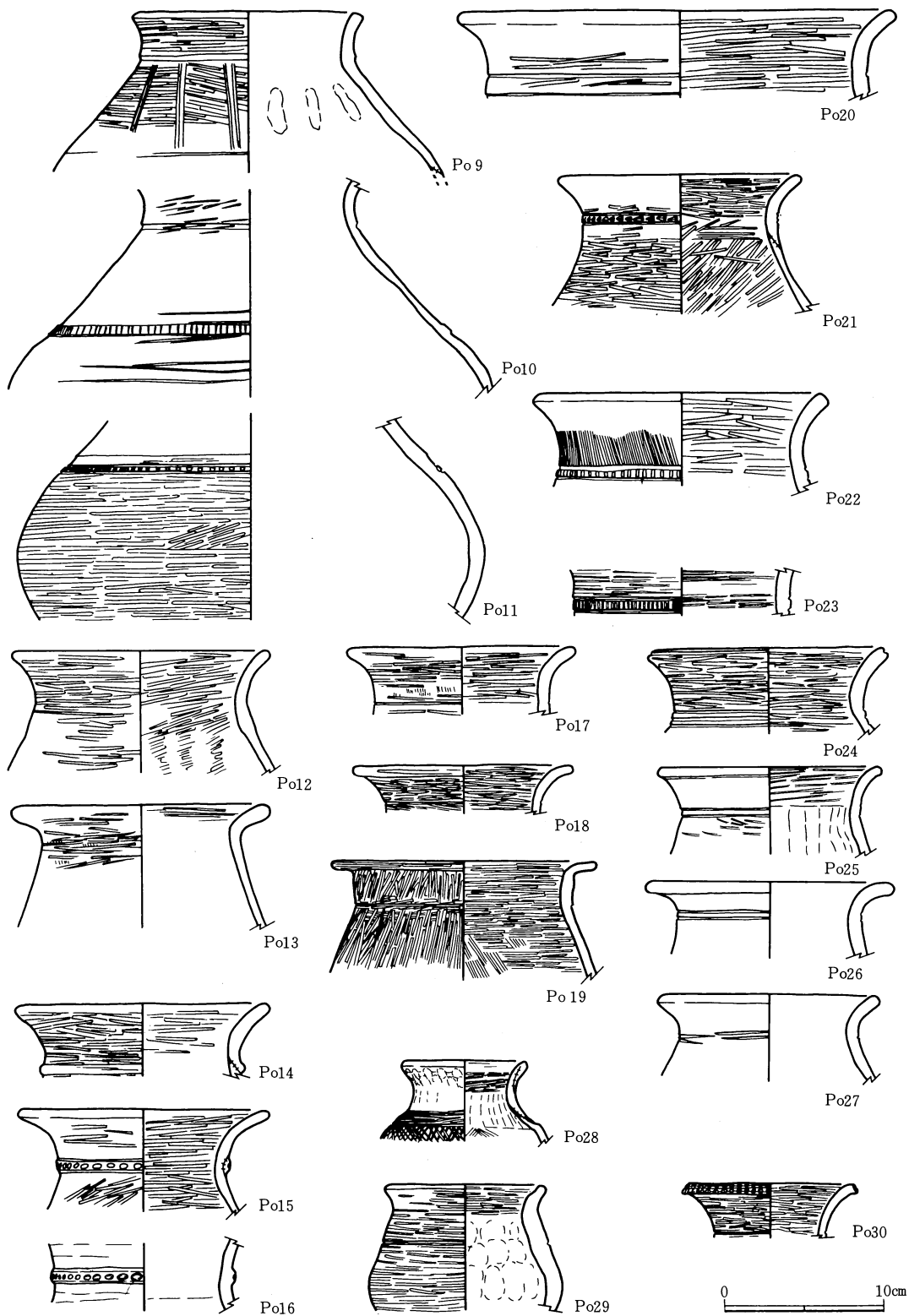
他に弥生時代中期の壺(Po68),後期の壺(Po69),器台(Po70)等弥生時代前期以降の遺物も少量ながら出土している。

無文土器(Po71・72)

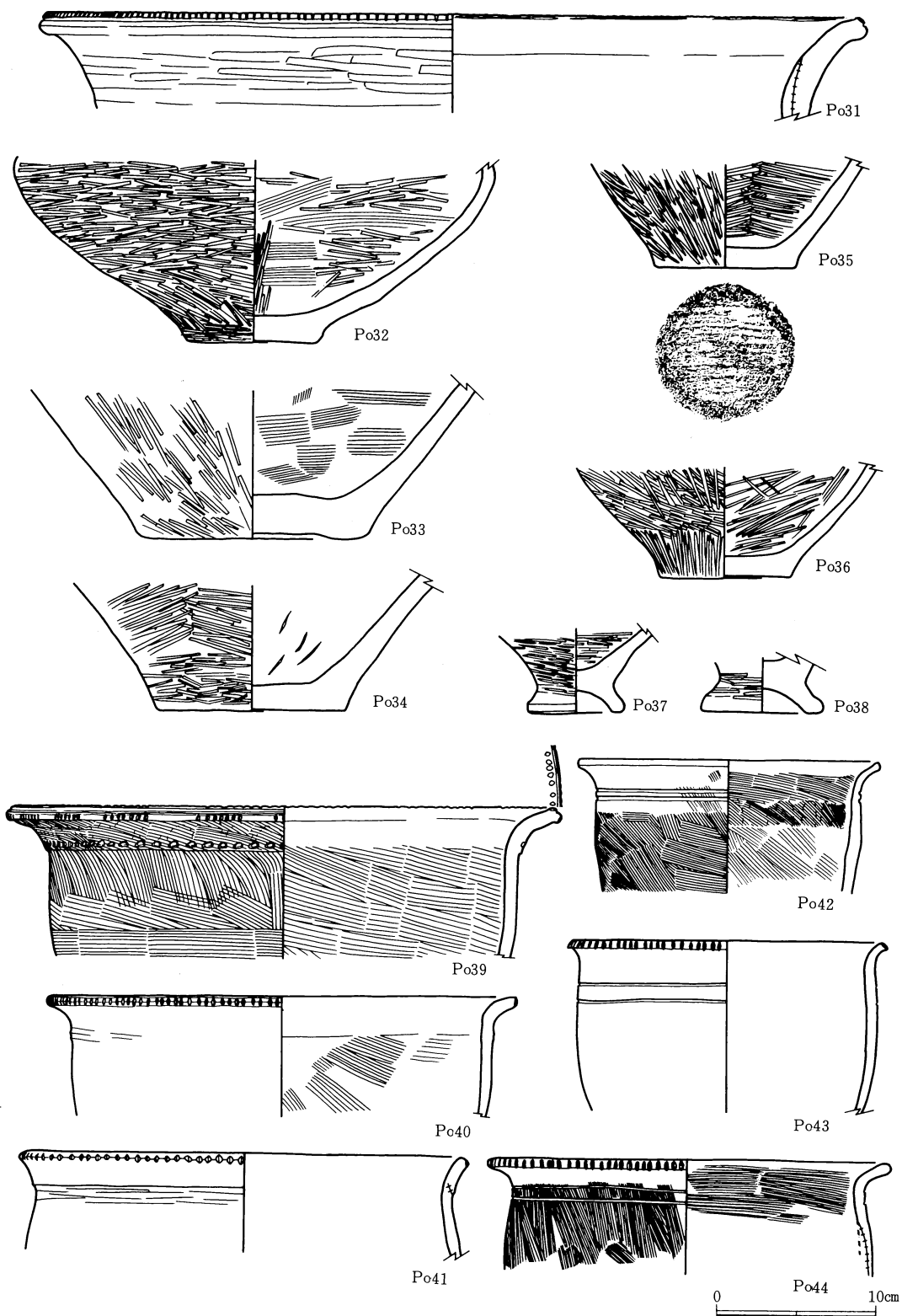
断面四角形状を呈する突帯。胴部ときれいに剝離している。無文土器であろう。これらと同じ形状を示す破片が20~21E・D地区から数点出土している。



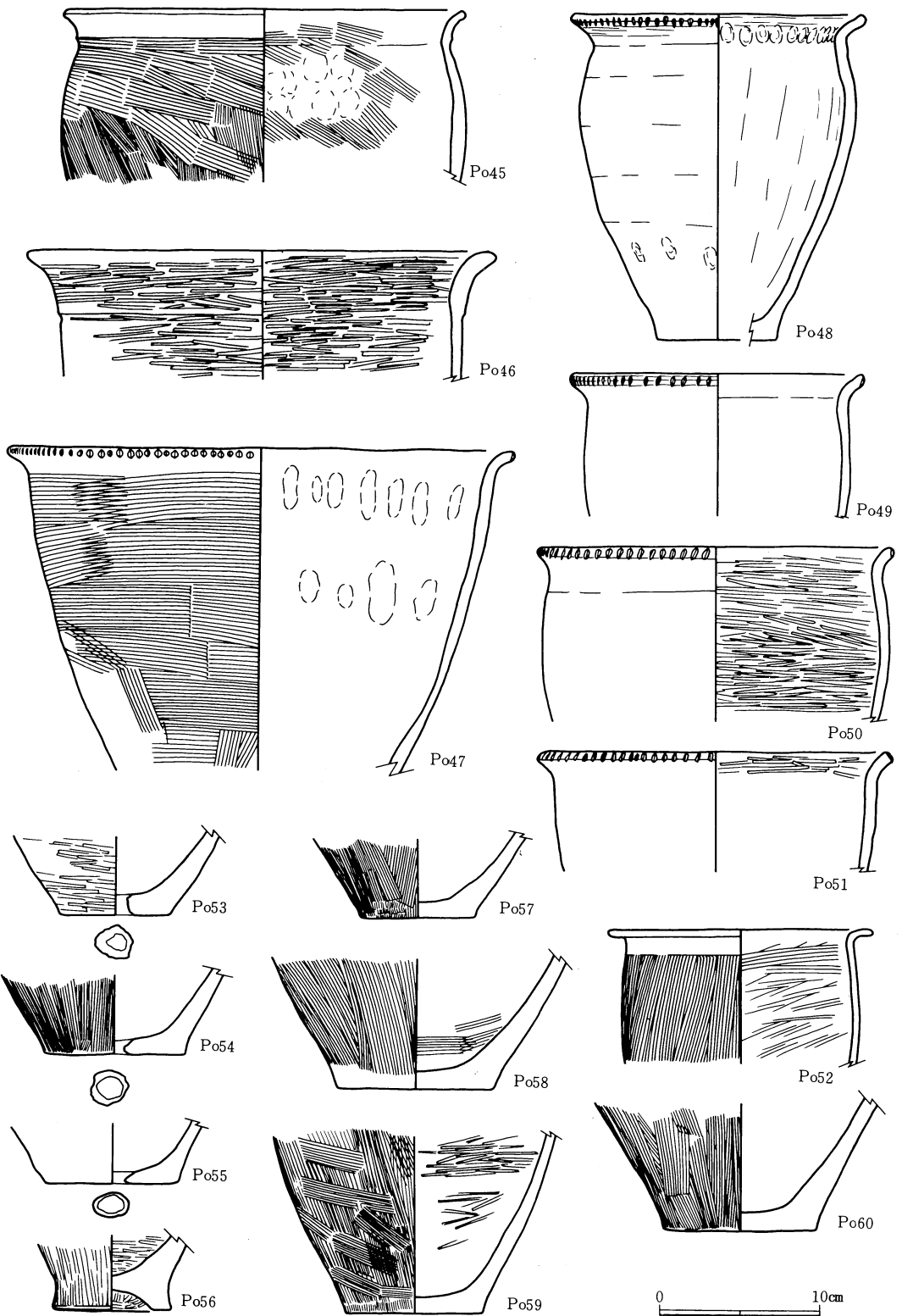
挿図196 f, 地区出土弥生土器その1 (S = 1/4)



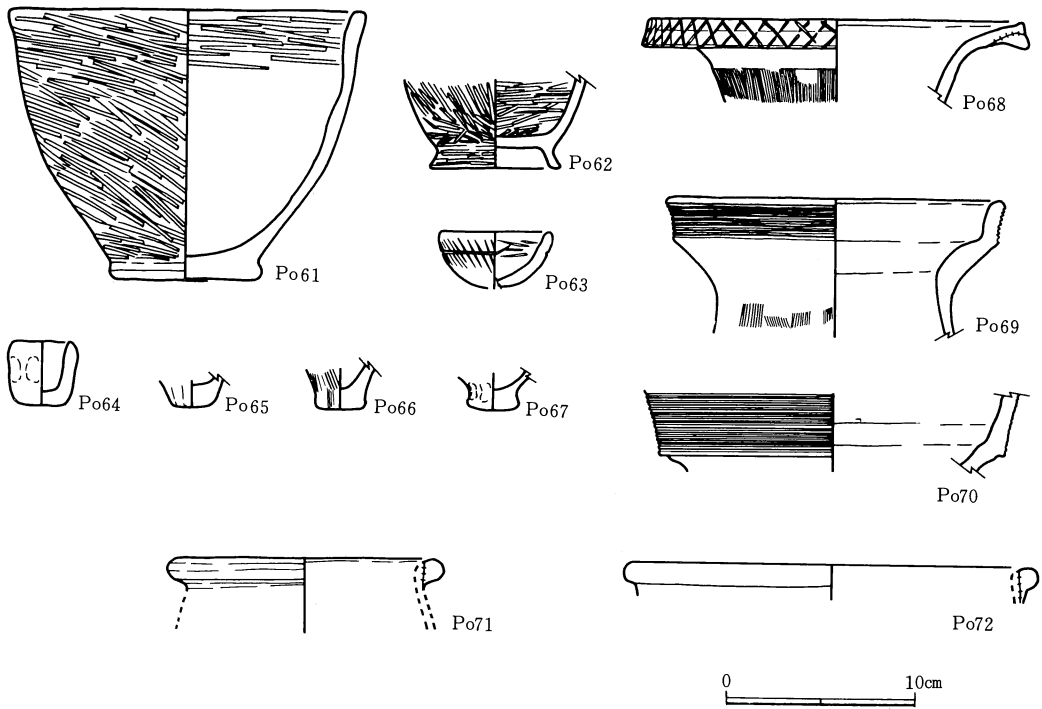
挿図197 f, 地区出土弥生土器その2 (S=1/4)



挿図198 f, 地区出土弥生土器その3 (S = 1/4)



挿図199 f₁地区出土弥生土器その4 (S = 1/4)



挿図200 f₁地区出土弥生土器その5 (S = 1/4)

第8節 f₁地区出土初期須恵器 (挿図201~204, 図版48~50)

53年度・56年度にわかれて調査を行った1号墳周辺地区(f₁地区)の、特に19E・D、20E・D地区の黒砂層の上層から古式の須恵器を検出した。これらの土器は遺構に伴うものは少なく、破片が散乱した状況で認められた。

以下、器種ごとに特徴を概観する。

壺 直口壺(Po1~4)、短頸壺(Po6)、広口壺(Po7)等各種の壺がある。

直口壺の口縁部は、内湾気味に外方にのび、口縁端部はすなおに丸く終わる。外面の凸帯及び櫛描き波状文は後述の小型甕と考えられる器形にもみられるが、口縁部の形状や口径の差異により便宜的に区別した。短頸壺は碗的な要素をもつが、外面カキ目調整、手持ちヘラ削りが施されていることなどから壺と考えた。Po5は凸帯の位置、外面の櫛描き波状文の入り方など直口壺と同じ特徴をもつが、口縁部は大きく外反する。Po7、8の口縁端部や外面の文様にやや新しい要素をみとめる。

甕 小型の甕(Po9~16)と大型の甕(Po17)がある。

小型の甕は、頸部と口縁部の境界にやや鈍い凸帯をもち、細い頸部から口縁部のなだらかに外反するもの(Po9・10)、細い頸部から口縁部が段をなして大きく外上方に開くもの(Po11・12)、凸帯をもたず口縁部が外上方に単純にひらくもの(Po13)がある。口縁端部は丸味をもって終わるものが多い。Po14・15は口縁端部内側に段を有す。Po

16は口縁端面に沈線状の凹みが入るが端部は丸く終わる。Po13は他の甗とは器形が異なる。薄手の「く」の字状口縁の壺も想定される。頸部あるいは口縁部に櫛描き波状文、列点文を施すものもあるが、横ナデ調整のみで無文のものも多い。

大型の甗（Po17）は、段をなして大きく開く口頸部に、内側に面をなしやや角ばる口縁端部、体部に入る沈線及び波状文の状況等他の小型甗よりやや新しい要素をみとめる。

甗 大型の甗（Po18～20）と中型の甗（Po21～23）がある。

大型の甗は、口縁端部がやや下方へたれ気味で横にはり出し外面に凸帯をもつもの（Po18, 19）と端面が上にのびるもの（Po20）がある。大型甗は無文が多いがPo20には沈線の本数が少ない単位の櫛描き波状文が施される。

中型の甗は朝顔形に外反する口縁部をもち外面に凸帯がめぐる。凸帯により画された文様帯には櫛描き波状文が施される。口縁端部でさらに外反するPo23はやや新しい要素をみとめる。

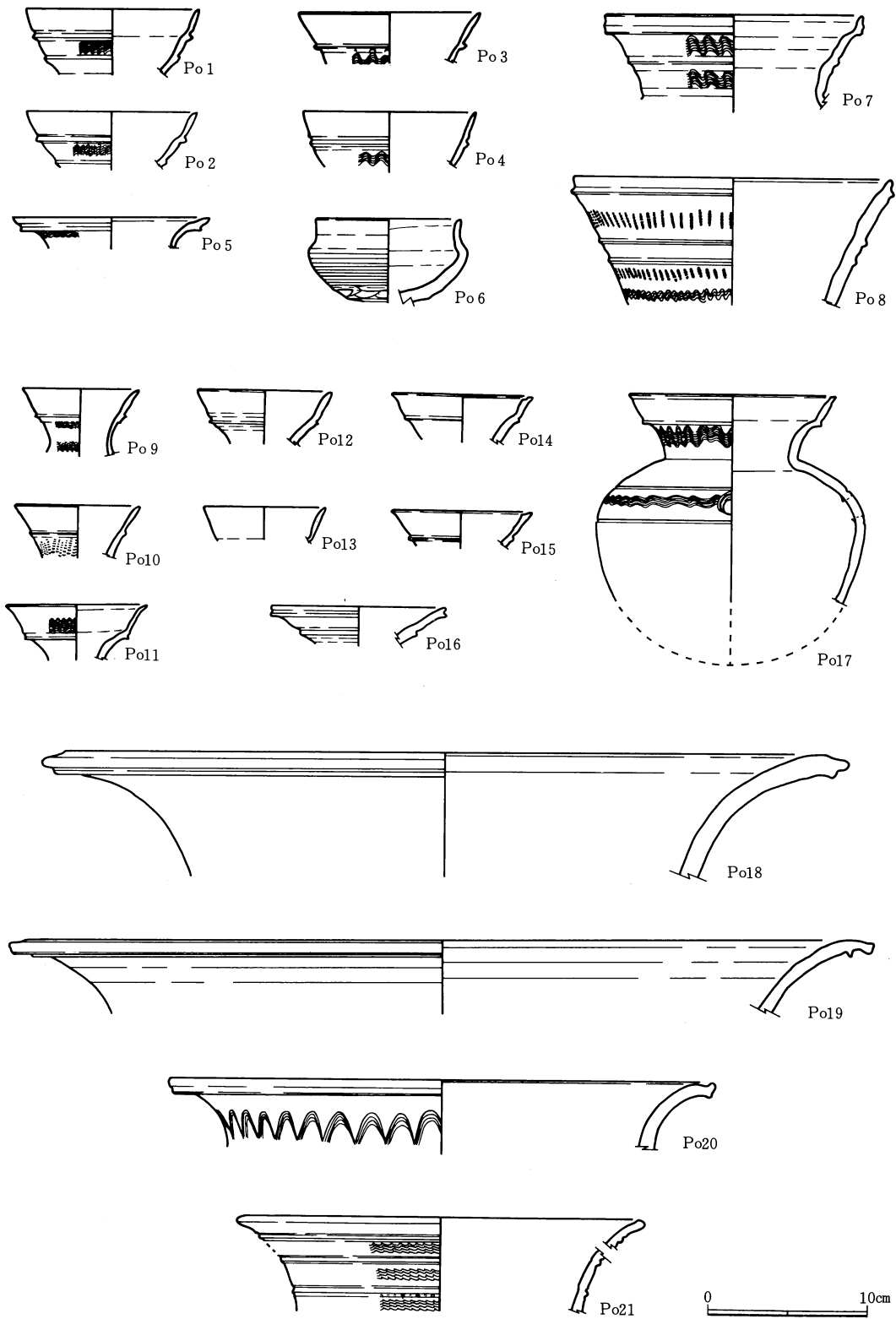
破片としては体部と考えられるものも存在するが個体として確認し得なかったので、口縁部破片のみ記載した。

高坏 種々の器形の高坏があるがほとんどが破片である。大きく、無蓋高坏（Po24～42）と有蓋高坏（Po43）にわかれる。無蓋高坏は完形品がないので、坏部と脚部にわけて述べる。

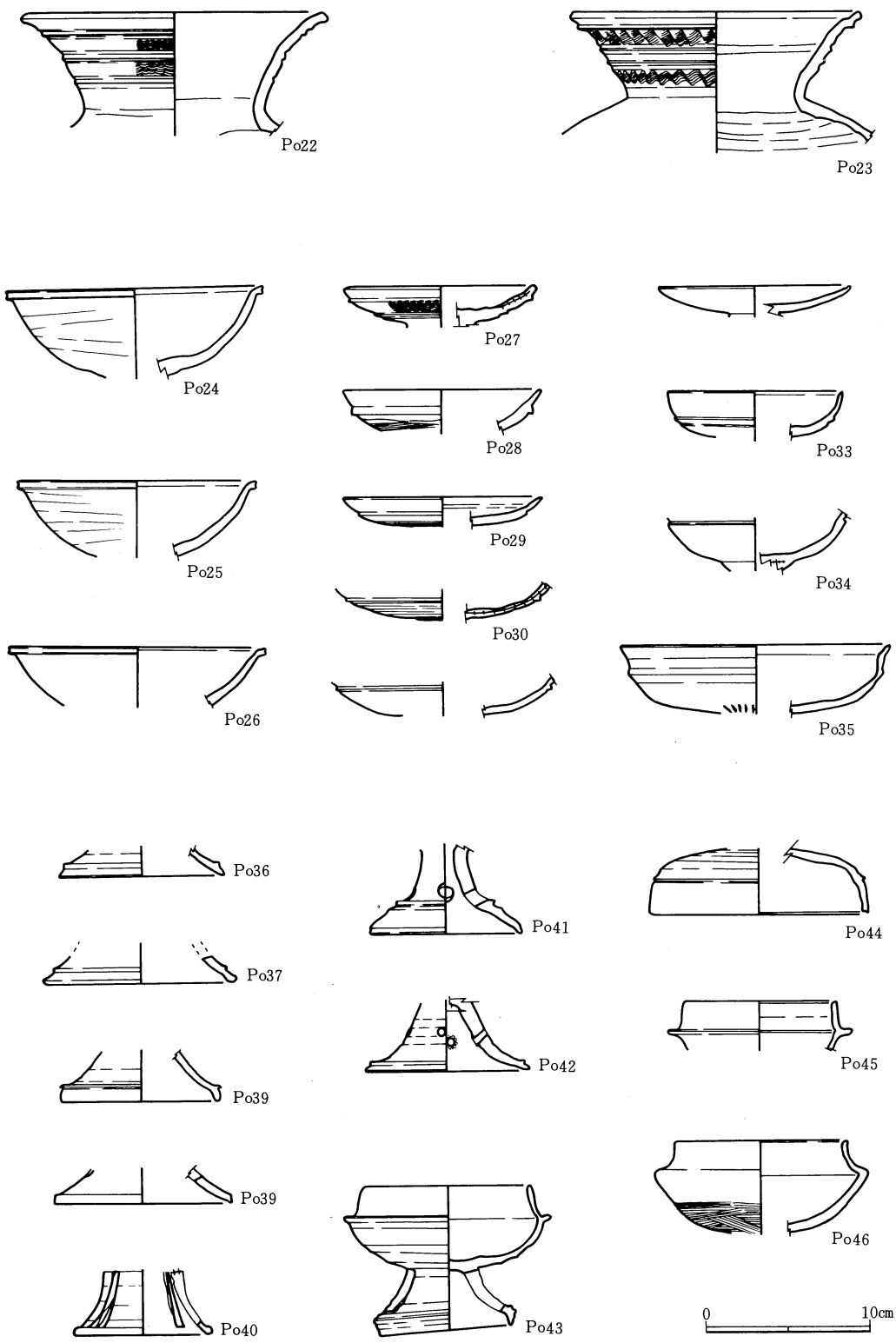
坏部は、碗状に深いものと皿状に浅いものに大別できる。深い坏部（Po24～26）は口縁端部で上外方向に短くのび、端面は外側を向きやや凹む。外面底部付近では丸味をもってわずかに突出する。Po34も突出するが口縁部外面に稜をもつ。Po25とPo26は同一個体の可能性もある。浅い坏部は種々の器形がある。浅いもの（Po27～31）、凸帯をもたない浅いもの（Po32）、やや深いもの（Po33）、大型で底部外面に列点文をもつもの（Po35）などがある。全体に無文が多い。口縁端部はともに丸くおさめるのに対し、Po27のみが角ばる。凸帯間に波状文を施すことなどから蓋の可能性もなくはないが、内側に自然釉が付着していることから坏部と考えた。Po28、Po33も蓋の可能性はあるが、Po28には外面にカキ目が施されること、Po33には内面に自然釉があることから一応高坏坏部とする。

脚部は小型でなだらかに大きくひらき、脚端部でわずかに変化する。文様はもたないが、円形と方形の透し孔がある。Po38は脚端部で下方に突出させて立ち上がる。やや新しい要素とも思われるが、器壁は薄い。Po39は端部が角ばり、下端をわずかに下方に突出させる。Po40は丸く肥厚して終わる。Po41はやや角ばり気味の浅い凹面を呈す。この様に、無蓋高坏はさまざまな形をとる。

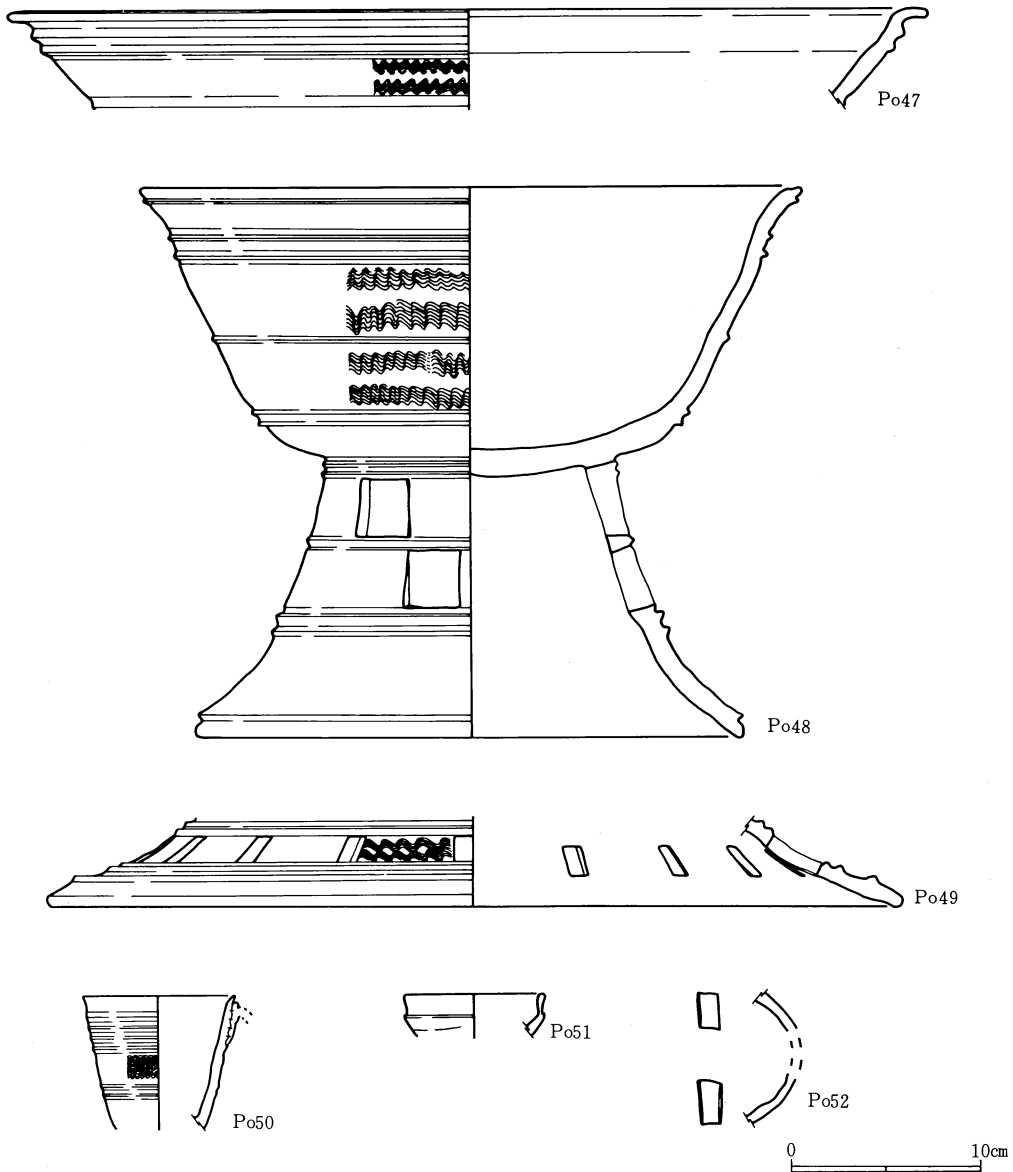
有蓋高坏（Po43）は無蓋高坏の一群より新しい要素を認める。



挿図201 f, 地区出土初期須恵器その1 (S = 1/4)



挿図202 f, 地区出土初期須恵器その2 (S=1/4)



挿図203 f, 地区出土初期須恵器その3 (S=1/4)

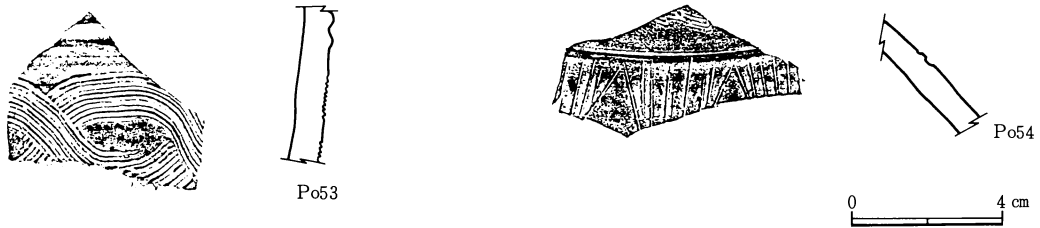
蓋 坏 蓋 坏 蓋 (Po44) と蓋 坏 身 (Po45・46) がわずかだがある。

Po44は鈍い稜, 凹状の口縁端部にやや新しい要素を認める。

Po45は初期須恵器にみられる土釜を連想させるような形状を呈する蓋 坏 身である。

Po46は口縁部の稜が認められず, 受部は口縁部の折り返しだけで作られた形状をとる。坏部外面にはカキ目が施されることから, 埴に近い器形とも考えられるが, 一応蓋 坏 身とする。

器 台 大型器台 (Po47~49, 53)。深い受部はゆるやかに外反しながら開き, 口縁



挿図204 f₁・f₂地区出土初期須恵器拓影 (S = 1/2)

端部でさらに外反する。脚部も基部が太く、なだらかに外反する。口縁・脚端部ともに丸くおさめ外面に断面三角形の凸帯がめぐる。文様は波状文が主だが、櫛目状の原体で施した組紐文 (Po53) もある。

その他の器種 鉢, 碗類がある。ともに1片である。

Po50は口縁端部付近に粘土塊を貼り付けた痕が残る。把手が付くと考えられる。いわゆる把手付小鉢が口縁部で内湾気味に直立させた口縁部をもち、把手部が大きく太いのと比べ、Po50の口縁部はなだらかに開き端部でわずかに外反する。把手を接合部粘土塊で推定するなら細く小さなものが付くように思われる。

Po51は口径が小さく、内湾気味の体部をもつことなどから平底に近い底部をもつ碗になるのではないかと推定される。

その他、内湾する長方形の破片が2点ある。外面方形の透し孔をあけた鈴形甕の破片とも考えられる (Po52)。

f₂ 地区出土初期須恵器片 f₂地区の粘土層上層よりヘラ描きによる鋸歯文が施された須恵器片が出土した。地区が異なるが、この地区の上層の出土遺物は1号墳周辺地区(f₁地区)から転落したものと考えられるため、f₁地区の須恵器と一しょに掲載した。(Po54)

以上のことから、f₁地区で出土した遺構外出土の初期須恵器は大きく2時期に分けることができる。ほとんどの個体は、初期須恵器でも古い段階のものと考えられる。しかし数個体ではあるが、初期須恵器でも新しい段階のものが認められるので、仮に古い時期の一群をⅠ群、新しい時期の一群をⅡ群とする。

Ⅰ群の初期須恵器は、大型器台、把手付鉢形土器に代表される、ほとんどの個体の一群である。これらは破片ではあるが、豊富なセットを確認することができる。個々の個体は形態、大きさ、細部の調整等に規格性を欠く。定形化される形式の前段階に位置するものである。陶邑編年^{注1}で考えるなら、TK73に近い形式、TK73でも最古の段階に属する大阪・一須賀二号窯^{注2}の製品を標式とする一群に近いものとする。

Ⅱ群の初期須恵器は、有蓋高坏 (Po43)、蓋坏蓋 (Po44) に代表される一群である。

古い要素を持ちながらも、TK 208にみられる定形化の方向が明確にあらわれている。P o 8, P o 17はTK 73に比べ新しい要素をもつ。Ⅱ群はTK 216に近い形式に属するものであると考える。

ここで初期須恵器の時期について考えるため、1号墳周辺の遺構から出土した須恵器について考えてみる。

1号墳墳丘上で有蓋高坏群(挿図53, P o 6~13)が検出されている。この有蓋高坏はTK 23に近い時期のものと考えられる。これらは1号墳の供献土器と考えられるので、少なくとも1号墳はそれ以前に築造されたといえる。1号墳墳丘下の旧表土面で検出されたS I 92からは、甕(挿図76, P o 1)が出土している。器形よりTK 208以前の形式であると考え、S I 92はTK 216に近い時期の住居跡とした。1号墳の北東にあるS I 93からは、甕、高坏、大型器台(挿図115, P o 9~11)が出土している。これらの遺物から、S I 93はTK 73の時期の住居跡と考えている。このことから、Ⅰ群の初期須恵器はS I 93と同時期の、Ⅱ群の初期須恵器はS I 92と同時期に存在したと考えられる。またⅡ群は、1号墳築造以前にすでに遺構面に存在していたことは明らかである。S I 93とS I 92の時期差は遺構、出土土師器からは明確には見いだせなかったが、遺構に伴う須恵器の形式差を時期差と考えるなら、初期須恵器は2段階にわけてもたらされたと考えても良からう。

須恵器の最古の段階であるⅠ群の初期須恵器は、S I 93と同じ時期、古墳時代中期中葉には存在していたと考えられる。さらに、その出土状況から、1号墳下層及び周辺のS I 92等の住居跡が形成された時期かそれ以前に散乱した後、Ⅱ群の初期須恵器がもたらされたと推定する。(現段階では、周辺の窯で焼かれたのか搬入されたかは不明である。)

注1 『須恵器大成』	田辺昭三	1981
『陶邑古窯址群Ⅰ』	平安学園考古学クラブ	1966
『陶邑』Ⅰ~Ⅳ	大阪府教育委員会	1976~1979
注2 『陶邑』Ⅲ	大阪府教育委員会	1978

第9節 f2地区出土の須恵器(挿図205~207, 図版50)

1号墳周辺地区(f1地区)では多数の須恵器片が出土した。その内でも初期の須恵器については前節で報告したが、ここではそれ以外の比較的新しい須恵器・須恵質土器を示す。初期須恵器も含めてこれはほとんど遺構に伴わない状況で検出された。ここでは遺構内から検出された須恵器にも言及しつつ、大まかに時期をおって紹介したい。

初期の須恵器は、細かい時期差をもちながらも5世紀中葉から後半代に、1号墳の供献土器と考えられる有蓋高坏群(P 48, 挿図53 P o 6~13)は5世紀後半代に位置すると考えられる。(前節参照)これに次ぐ時期のものは1号墳上層で検出された蓋坏(P 48, 挿図53 P o 14・15)で6世紀後半代のものと考えられる。

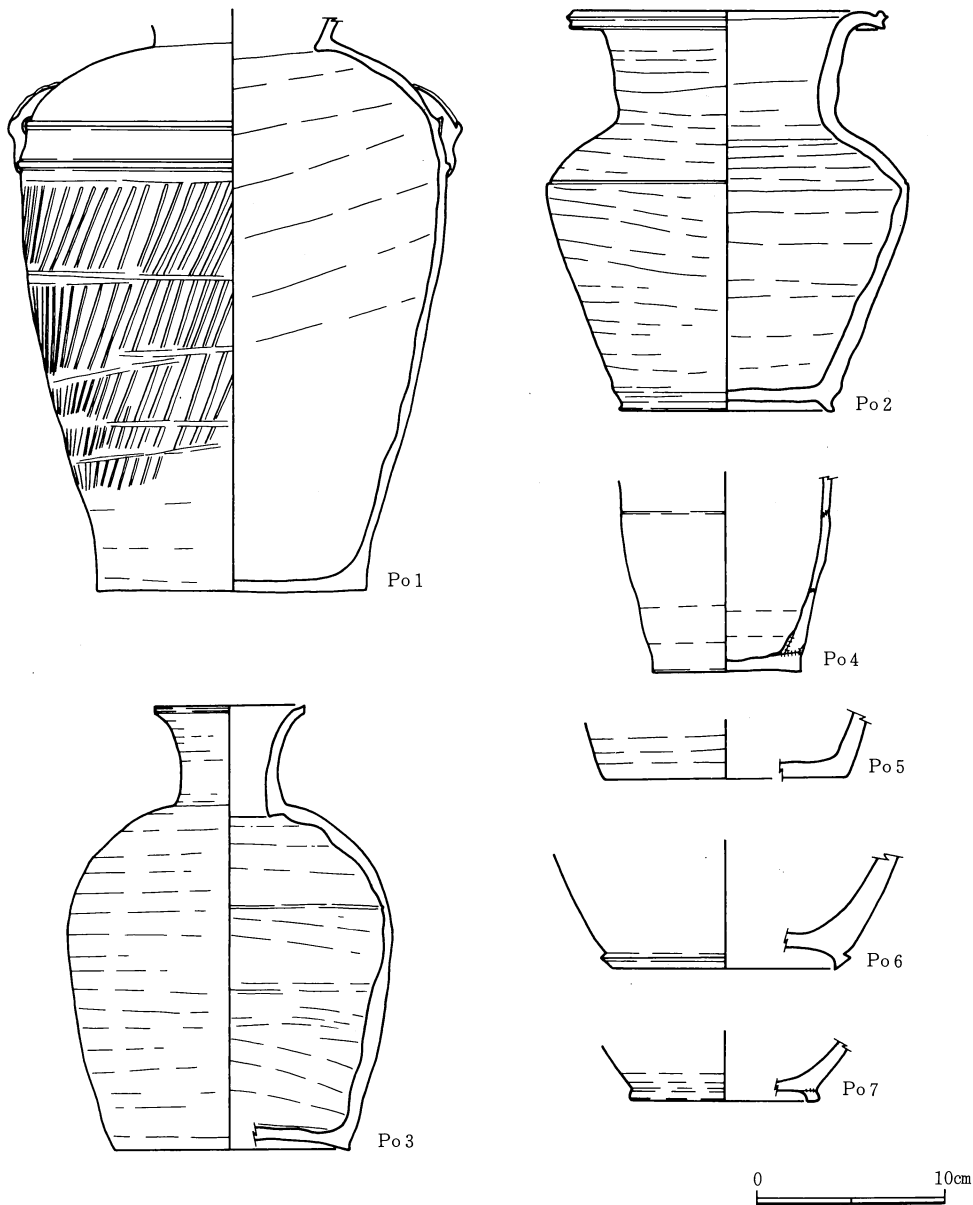


挿図205 f, 地区出土須恵器他分布図 (S = 1/400)

挿図206のP_o5～7・27～31はこれに次ぐ時期のもので7世紀中葉前後のものであろう。P_o5～7は壺の, P_o27～31は坏の底部であろう。P_o9～14は坏であろう。これに次いで底部に糸切り痕をもつ個体 (P_o15～26) がある。P_o25・26は糸切りの後高台を貼り付けたものである。P_o15～24のうちP_o22～24はやや高台的に角ばった底部をなし, 若干他より新しいものであろう。これらは8世紀以降のものと考えられるが, 特にP_o23は10世紀前後のものと思われる。これの他に21E S K 03の上層の粘土堆積層内で検出された短頸壺 (P154, 挿図186 P_o7) もほぼ同じ時期のものと思われる。

これに次ぐ時期のものとしてP_o1～4・8がある。このうちP_o1・2・4・8の4個体は20E北西地区で3×4 mの範囲内に密集して出土したものである。その地形は全体に平坦な所で, その黒砂層のごく上層から出土した。二耳壺P_o1は肩部に2条の突帯を貼り付けた後, 相対する2つの把手状のものを貼りつけている。外面は平行叩きの後全体にヨコナデする。これらのP_o1～4・8は11世紀前後のものと思われる。

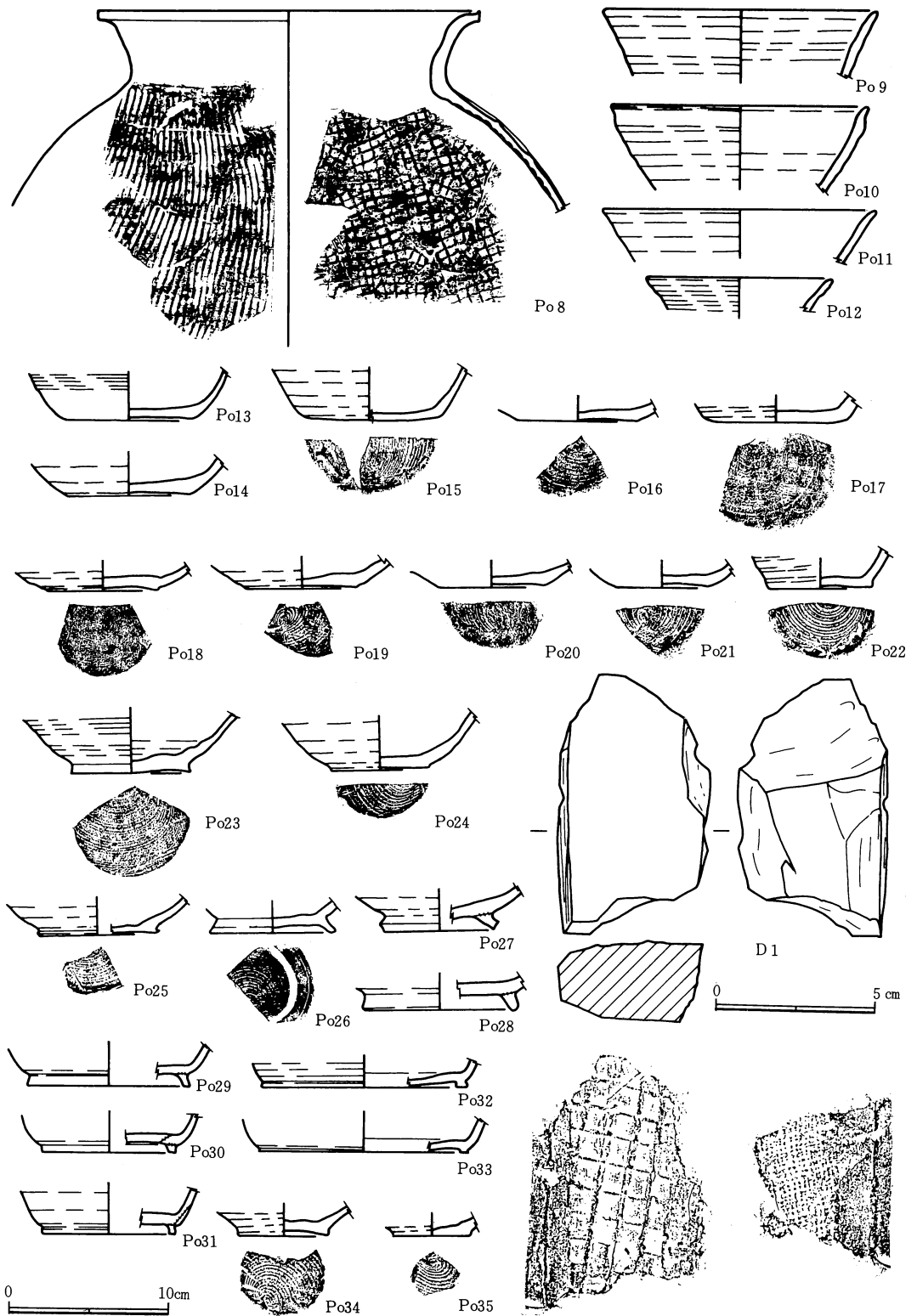
これらの須恵器の他, 土師質土器P_o34・35, 瓦D1がある。



挿図206 f, 地区遺物図その1 (S=1/4)

以上の須恵器は7世紀以降のものであろう。この時期の遺構はこのf1地区では全く確認されていない。6～8世紀代の遺構は当遺跡のより東側の地区^{注1}では、古墳・墳墓として多数検出されているので、この時期には広い意味で長瀬高浜の地が少なくとも墓域として利用されていた事は疑いない。より新しい時期にはf1地区でも多数の火葬墓が確認されている(第1節参照)。それらは伴出した宋銭からはPo1～4・8よりも若干新しいものの可能性もあると考えられる。古代末～中世期の遺構・遺物の検討が必要であろう。

注1 『長瀬高浜遺跡調査報告書Ⅲ・Ⅳ』1981・82 参照



挿図207 f₁地区遺物図その2 (土器S=1/4・互S=1/2)

第IV章 56年度後期調査地区 (g地区)

第1節 墳墓

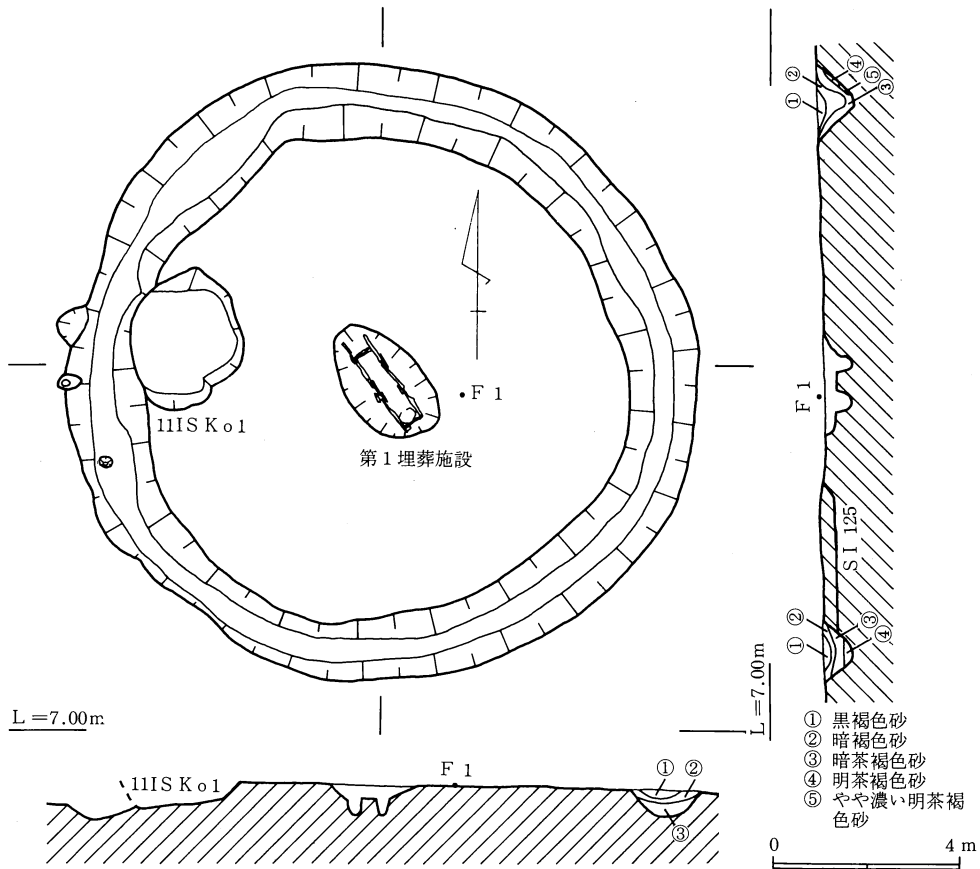
g地区で検出した墳墓は、周溝をもつもの6基、木棺墓1基、箱式石棺墓1基、土壇墓1基の計9基である。

5号墳 (挿図208~211, 図版51・68)

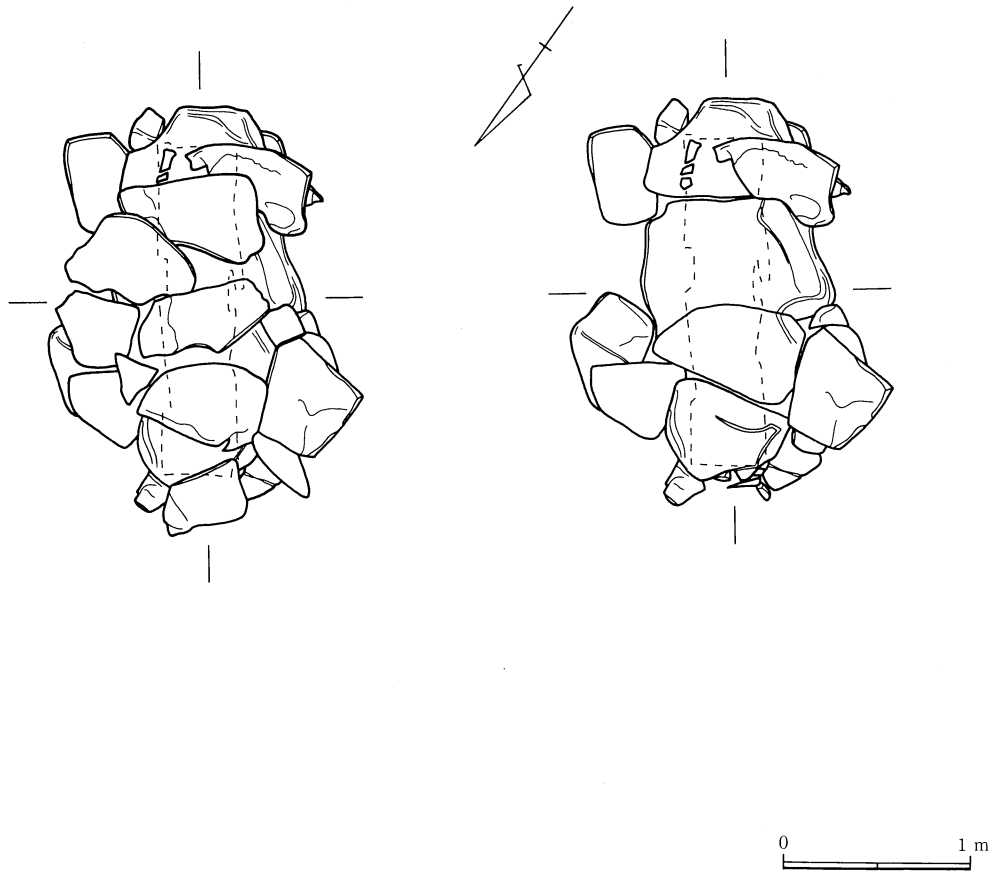
5号墳は、11H・11I地区にまたがり、3号墳の北東に位置し、S I 124, S B 40と切り合っている。墳丘(盛砂部)はあったと思われる。墳丘は円形で、径10.2m、周溝総径13.0mの円墳である。周溝は幅約1.5m、深さ0.45~0.65mを測る断面U字状の溝がめぐる。埋葬施設は中央部に箱式石棺を検出した。

(1)第1埋葬施設 (挿図209~211, 図版51)

墳丘のほぼ中央にある箱式石棺で、主軸をN-144°-Eにとる。土壇は長軸3.6m、短軸1.6mを測る。蓋石は4枚で、隙間をふさぐように小さな石が16枚のせてあり、石棺の



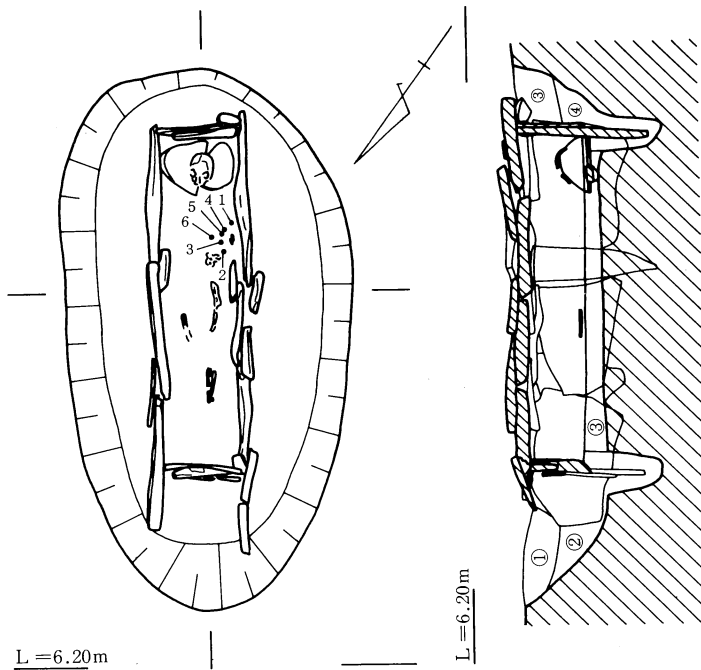
挿図208 5号墳遺構図 (S = 1/160)



挿図209 5号墳第1埋葬施設遺構図(蓋石) (S = 1/40)

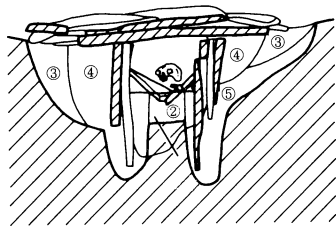
四隅には1枚ずつ扁平な平石が置かれ、蓋石の安定をよくしてある。石棺は長軸1.75m、短軸0.44m、側壁上端から床面までの深さ0.35mを測る。側壁は東・西側とも中央の石を内側にして3枚ずつであり、他の石は隙間をふさぐためのものと思われる。北側小口は3枚、南側小口は2枚の板石でできており、内面は蓋石、側石、小口とも赤色顔料が塗られていた。棺内では人骨、滑石製小玉、かなりの粘土塊を検出した。南東側には1枚の平石を2枚に割ってつくったV字状の石枕があり、石枕表面にも赤色顔料が塗られていた。人骨は頭蓋骨、骨盤左部分の一部、左右大腿骨各1本、左下腿骨1本、左手指の骨2本を検出した。副葬品としては滑石製小玉20点(J 1~20)を左手の指の骨の周囲から検出したが、おそらく左手につけていた腕飾と思われる。また、かなりの粘土塊を検出したが、これは石棺の目張りの粘土が落ちこんだものと思われる、側壁の上端にも一部残存していた。

築造年代は遺構の切り合い関係・立地などから、古墳時代中～後期と考えられる。



L=6.20m

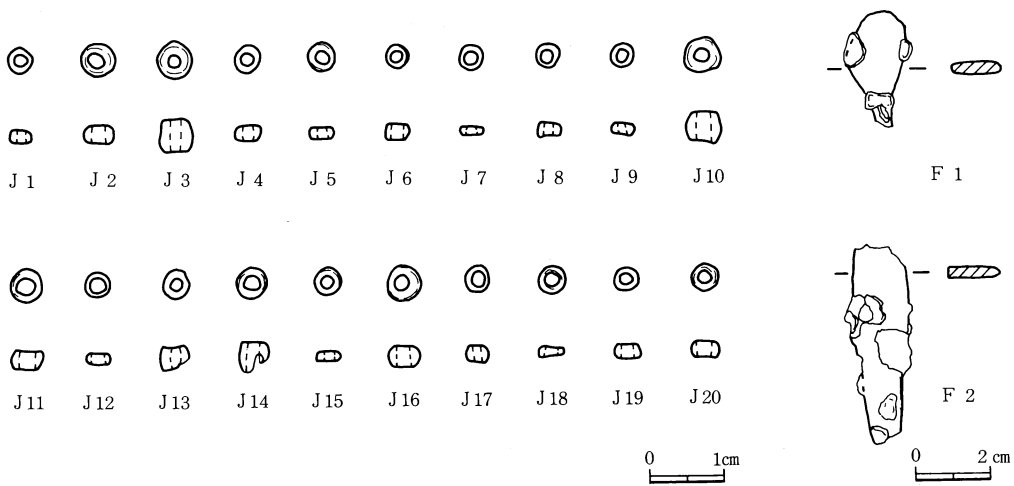
L=6.20m



- ① 黒褐色砂
 - ② 茶褐色砂
 - ③ 淡茶褐色砂
 - ④ 淡黄褐色砂
 - ⑤ 淡黄茶褐色砂
- 1~6はJ 1~6の略



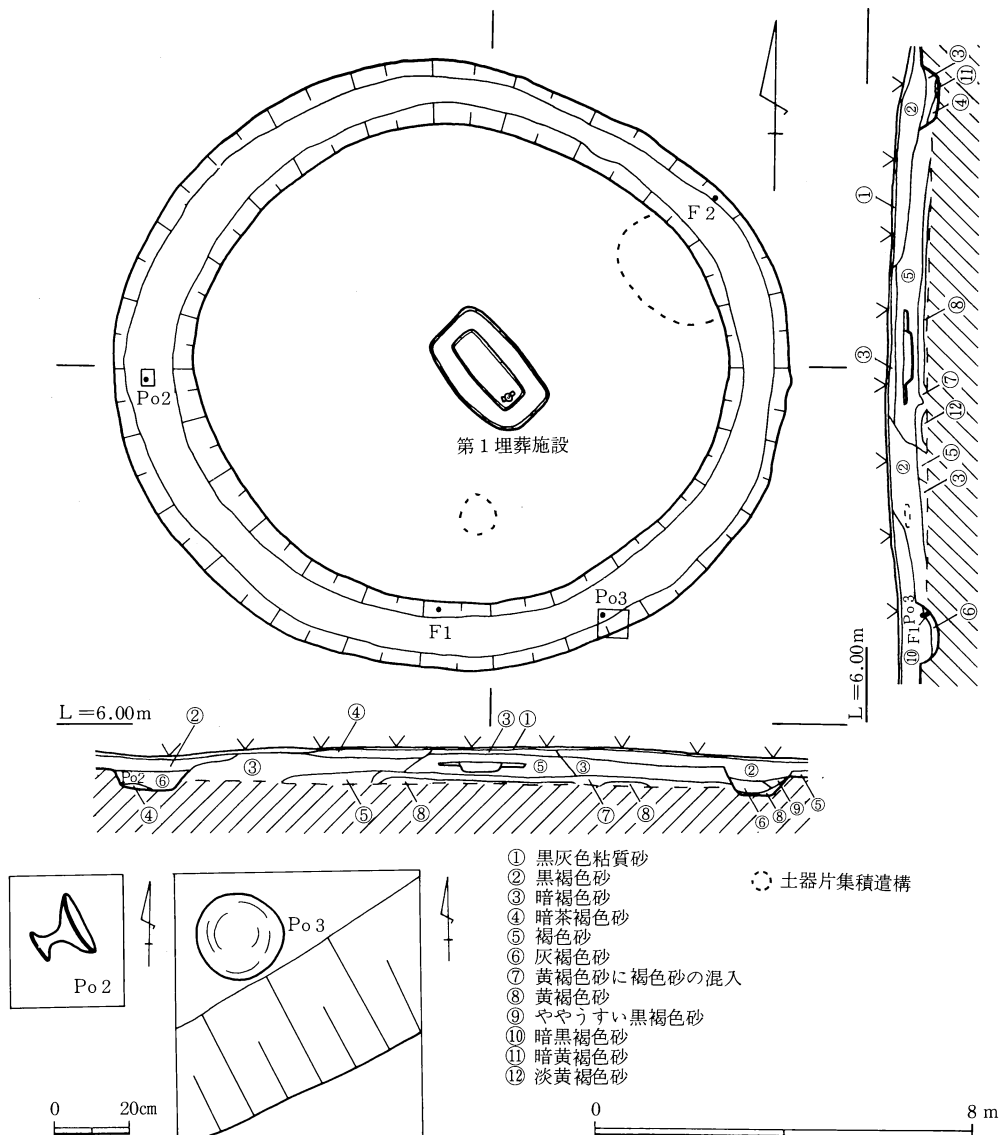
挿図210 5号墳第1埋葬施設遺構図 (S=1/40)



挿図211 5号墳遺物図 (鉄S=1/2、玉S=1/1)

71号墳 (挿図212~214, 図版52・68)

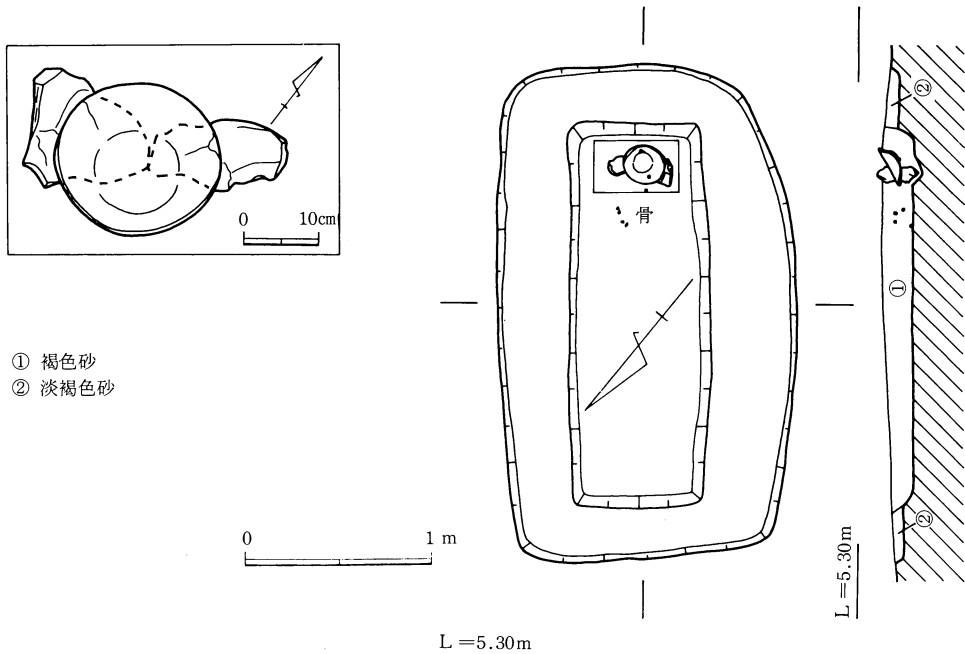
71号墳は10J地区の南東にあり, S I 127の北に位置し, S I 131, 132, 133, 10J S K 02を切る。墳形は円形で径10.4m, 周溝総径14.4mの円墳である。周溝は幅約1.6m, 深さ約45cmのU字形で全周している。墳丘は調査前よりゆるやかな盛り上がりがあり, 墳丘断面から観察されるとおり, 墳丘中央部には黒褐色の堆積砂はなく, 裾部から周溝, 周溝の外側にかけて黒褐色砂の堆積が厚く, 墳丘の盛り上りは盛り砂があったものと考えられる。また, 墳丘中央部と裾部の砂の色の違いは, 盛り砂が中央部から裾部に向かってなされたものと考えられる。埋葬施設は墳丘内中央部に1基検出された。



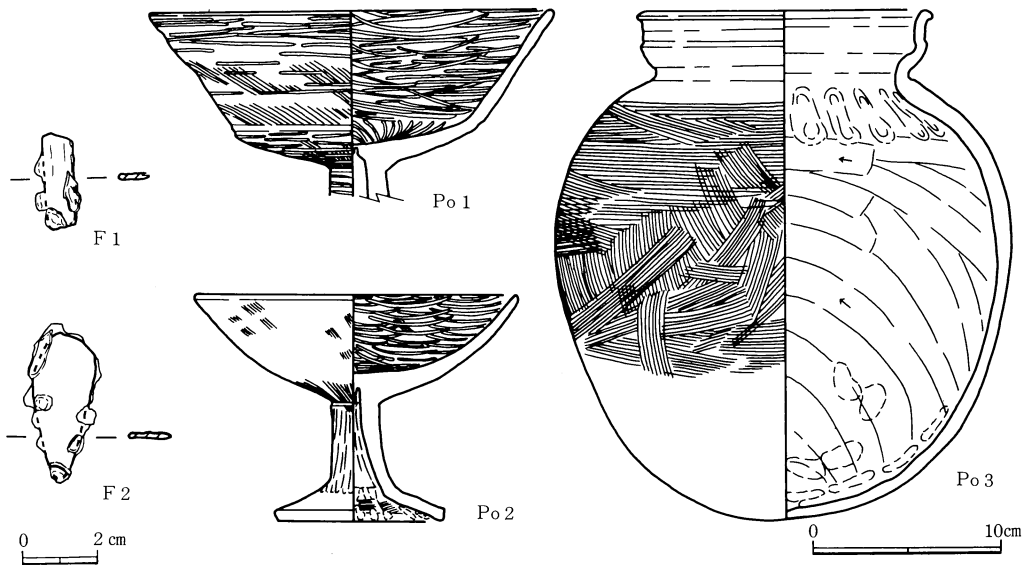
挿図212 71号墳遺構図 (S = 1/160)・遺物出土状況図 (S = 1/20)

(1)第1埋葬施設 (挿図213・214, 図版52)

墳丘中央部にあり木棺墓と考える。長辺2m, 短辺0.7mの木棺部をもち, 掘り方は長辺2.6m, 短辺1.5mであるが, 検出時において明確に確認できなかったものであり, 掘り方がない可能性もある。主軸はN-140°-Eである。棺内南東側にV字状に組まれた石の



挿図213 71号墳第1埋葬施設遺構図
(S=1/40)
枕出土状況図 (S=1/10)



挿図214 71号墳遺物図 (土器S=1/4、鉄S=1/2)

上に高坏の坏部（Po1）を置いた枕と骨片を検出した。当遺跡では石枕，土器枕，須恵器枕が出土しているが，石と土器を組み合わせた枕は初めてのものである。枕の周辺の砂にはベンガラが混じていた。西側周溝内底部より供献土器と考えられる高坏（Po2）が出土した。また，南側周溝内底部では，口縁を下にしたベンガラのつまった甕（Po3）が検出された。1号墳，58号墳ではベンガラがつまめた甕が正立して出土しており，葬送儀礼の一部と考えられる。

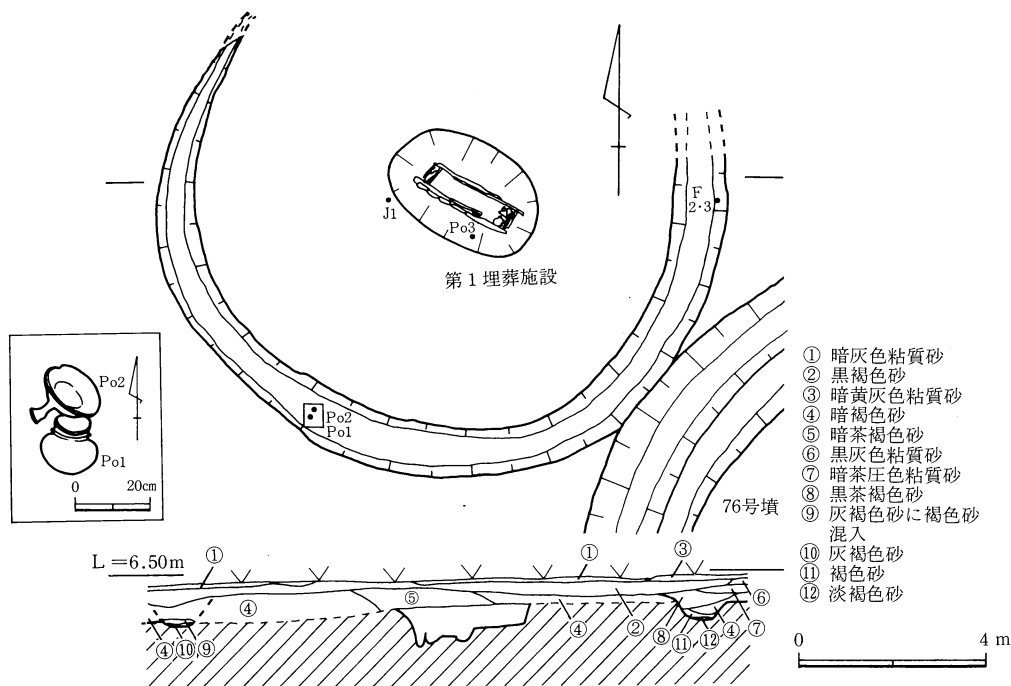
古墳築造時期は出土遺物により古墳時代中期中葉と考えられる。

75号墳（挿図215～218，図版53・54・68）

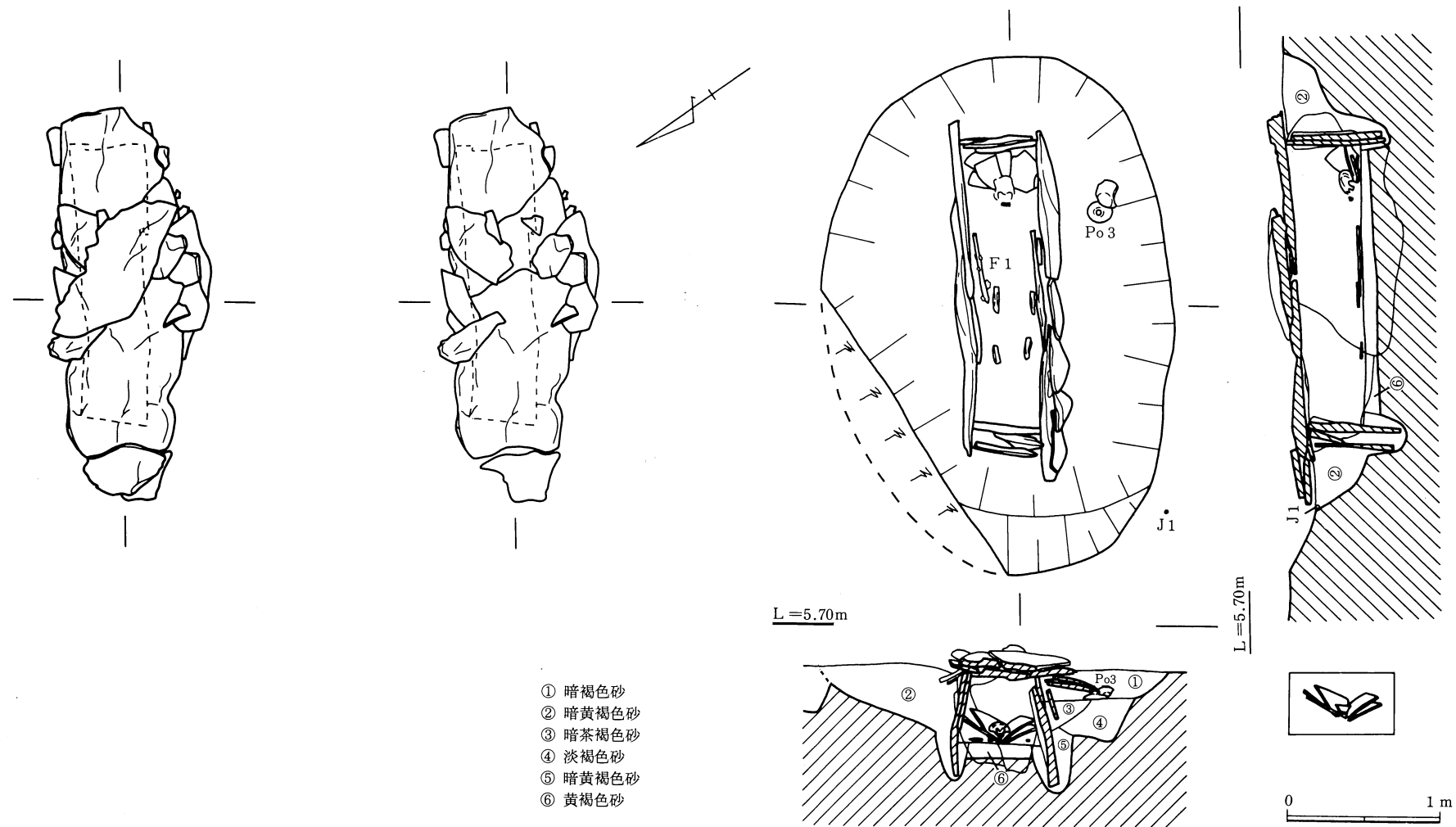
10H・10I地区にあり，S I 127の南，77号墳の北東，76号墳の北西に位置する。周溝総径は12.0m，径10.2m，周溝幅0.9～1.2m，深さ0.4mの円墳である。周溝は北側が住居跡と切り合うため検出できなかったが，全周していた可能性が強い。墳丘は暗褐色砂，暗茶褐色砂を0.35～0.5m盛って築造され，その上に黒褐色砂が堆積したと思われる。墳丘中央には埋葬施設が1基あり，南側の周溝内より供献土器と思われる甕（Po1）と高坏（Po2）が1個ずつ検出された。

(1)第1埋葬施設（挿図216～218，図版53）

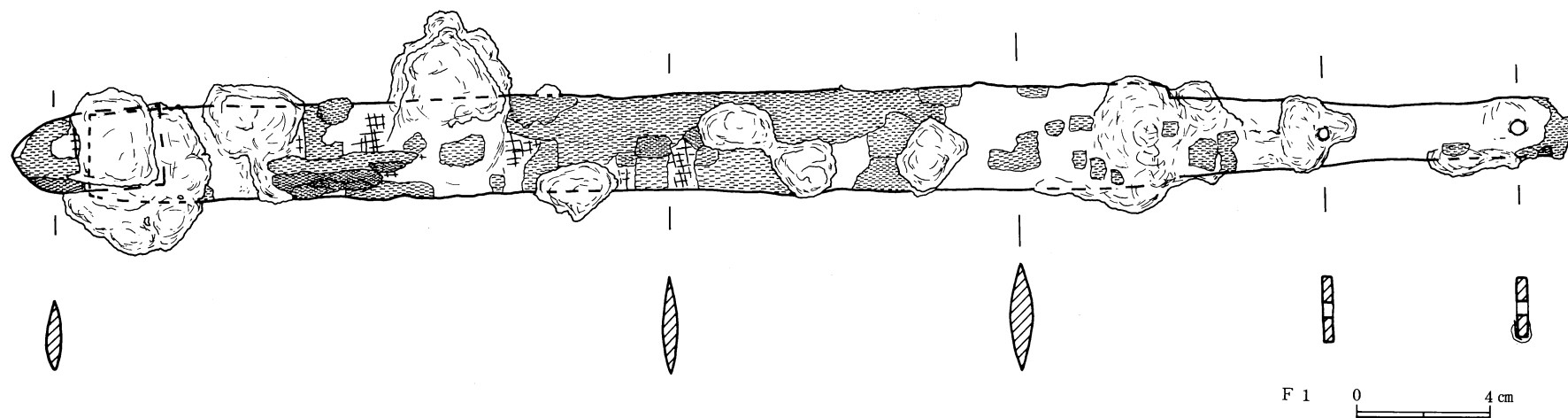
墳丘のほぼ中央にある比較的大型の箱式石棺で，主軸をN-122°-Eにとる。蓋石は荒い大きな板石2枚を主体とし，その間を多くの小さな板石で覆っている。棺はS I 139と



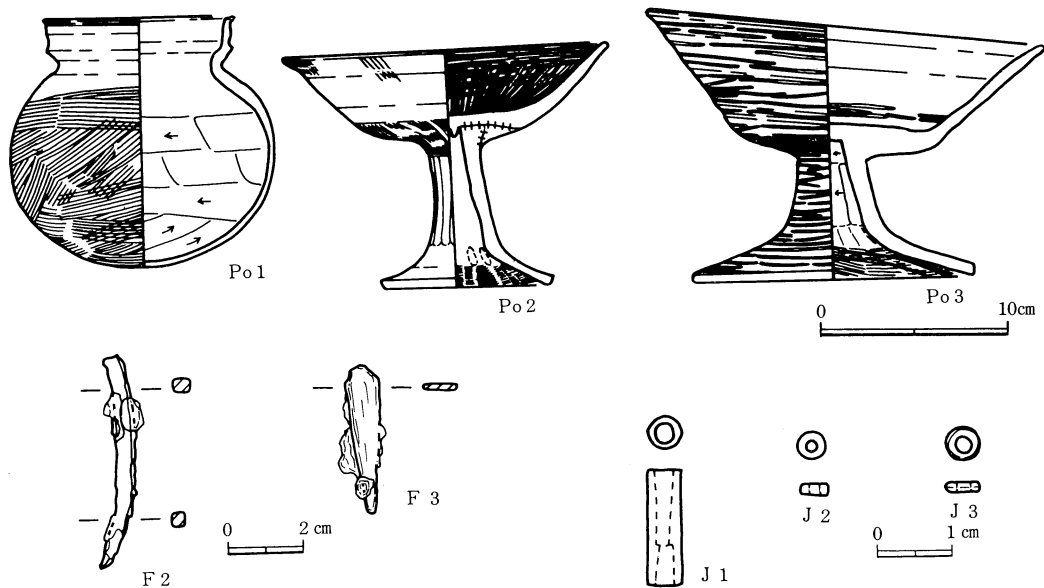
挿図215 75号墳遺構図（S = 1/160）・遺物出土状況図（S = 1/20）



挿図216 75号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/40)



挿図217 75号墳遺物図その1 (S = 1/2)



挿図218 75号墳遺物図その2 (土器S=1/4、鉄S=1/2、玉S=1/1)

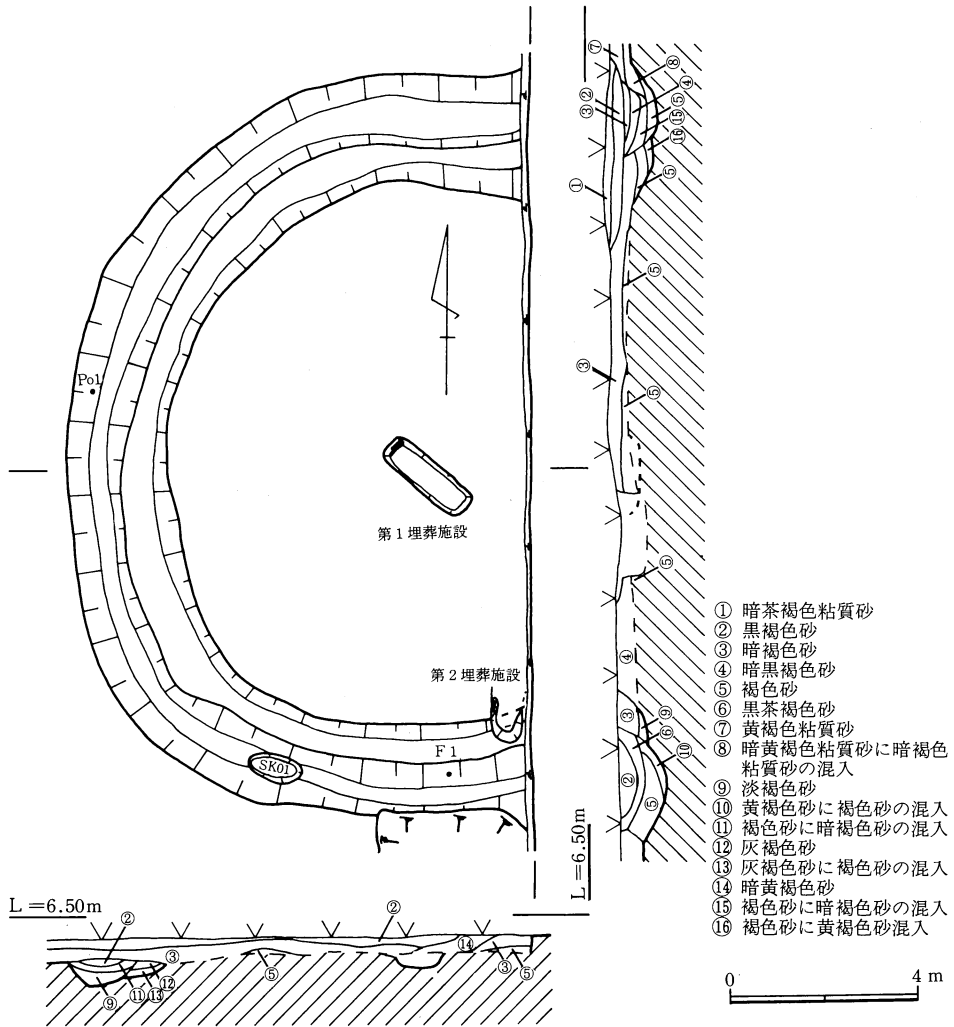
10H S K 05の一部を、長軸3.4、短軸2.3、深さ0.86m掘り込み、その内に長軸1.8、短軸0.4mに板石を組み合わせて築造されたものである。側壁は北東側が2枚、南西側が3枚で、小口は2枚づつだったと思われる。棺は南東小口側、南西側側壁が若干高い。側壁上端から床面までの深さは0.48mを測る。

棺は全面黄灰色粘土による目張りが施され、赤色顔料の塗られた棺内にも、その塊が落ち込んでいた。棺内からは南東小口側より、枕に転用されたと思われる逆Aの字状に組まれた板石6枚と、その上に載せられていた頭蓋骨、ならびに歯を検出した。又棺の中央付近から下肢骨4片と、鉄剣(F1)1振を検出した。鉄剣は丁度埋葬者の右手首付近より検出した。長さは約49cm、厚さ0.6cmを測る。鉄剣には柄に2個の目釘穴があり、柄の部分を含めて全体が布で幾重(下は麻状の粗い布1重、上は絹で3重)にも巻かれていた。その他の出土遺物には、棺内より滑石製小玉(J1・2)、掘り方内より供献土器と思われる高坏(Po3)、棺の周辺南西側より滑石製管玉(J3)がある。

築造時期は遺物より古墳時代中期中葉と思われる。

76号墳 (挿図219~223, 図版54・68)

9 I・10 I 地区にまたがり、77号墳の東、S I 126の南に位置する。北西で75号墳の周溝を、南でS I 140を切る。東側は調査区域外のため未調査であるが、墳形は円形で径11.6m、周溝総径16m、周溝幅2.4mの円墳と考えられる。周溝は重なり合った2重の周溝が巡っており、周溝断面から観察されるとおり、内側の周溝が埋った後、外側の周溝が造られたものとする。外側周溝の大きさは総径16m、幅1.8m、深さ0.5mのU字状の溝で、



挿図219 76号墳遺構図 (S = 1/160)

内側の周溝は総径、幅は不明であるが、深さ0.4mでやや浅い溝である。墳丘の盛砂はなかったものと考えられる。埋葬施設は墳丘中央部と周溝上面南側に検出された。周溝底部南側のSK01は埋葬施設となる可能性がある。

(1)第1埋葬施設 (挿図220・223, 図版54)

墳丘中央部にあり、主軸はN-130°-Wで、長辺2.1、短辺0.68mの土壌内に石を立てた石立て木棺墓と考えられる。棺内北西の石は造られた当時のものであるが、他の石は小さく壊されて、棺内より多数検出された。外側の石片は立った状態、中程の石片は横になったものが多い。北西側小口は石立てとなっているが、他の小口、側壁は木製と考えられ、その外側に石板が立て掛けられたものと考えられる。棺内の砂にはベンガラが混じり、石片の中にもベンガラの塗られたものもあり、北西側小口以外にも石板を棺として使った部

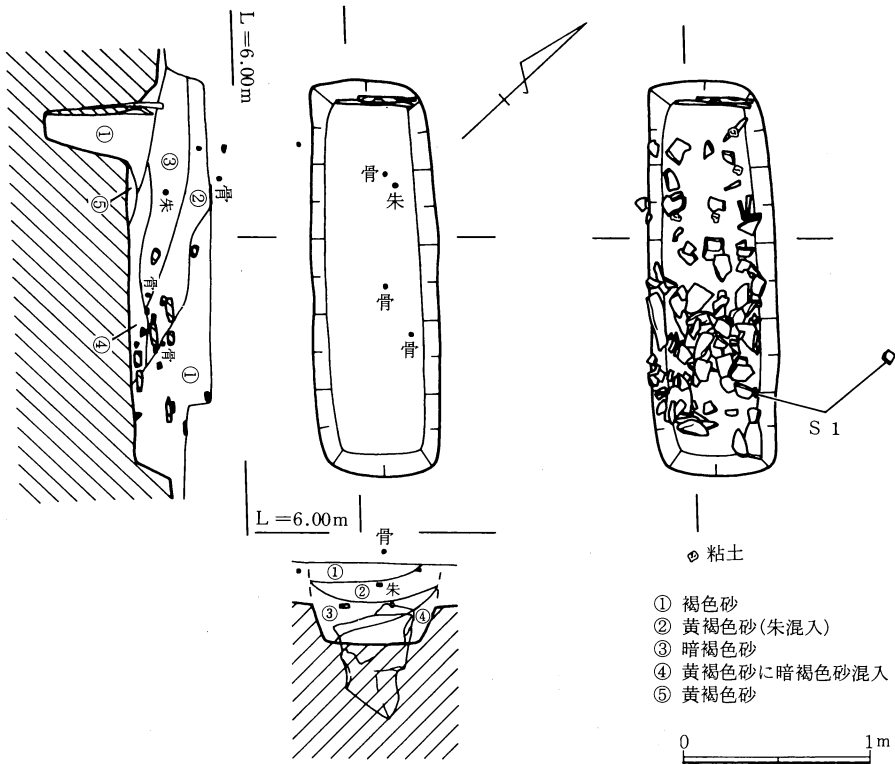


插图220 76号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/40)

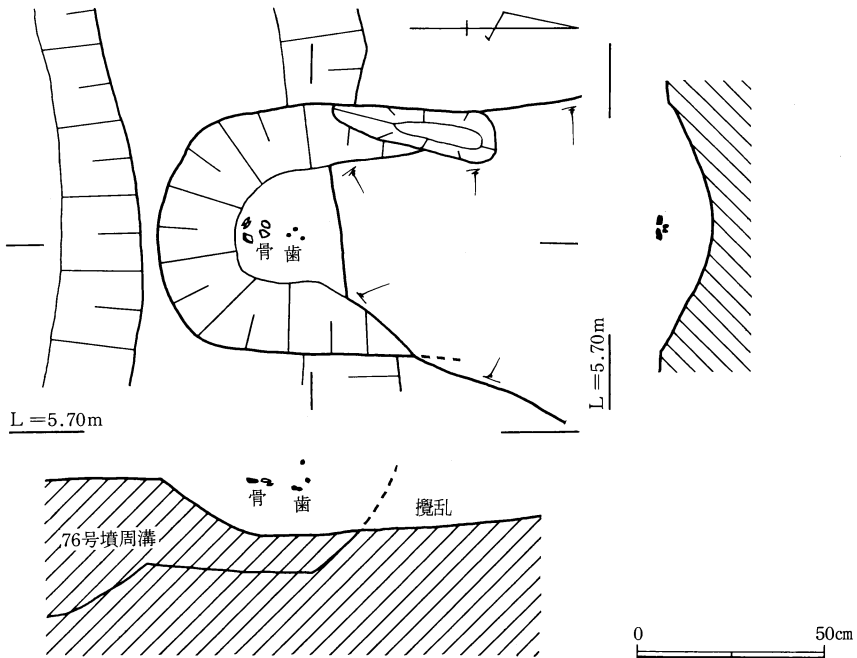
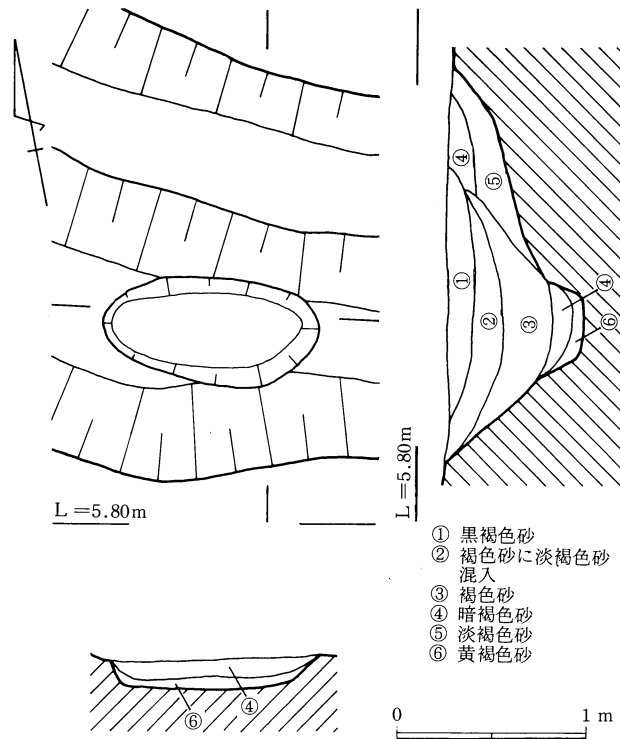
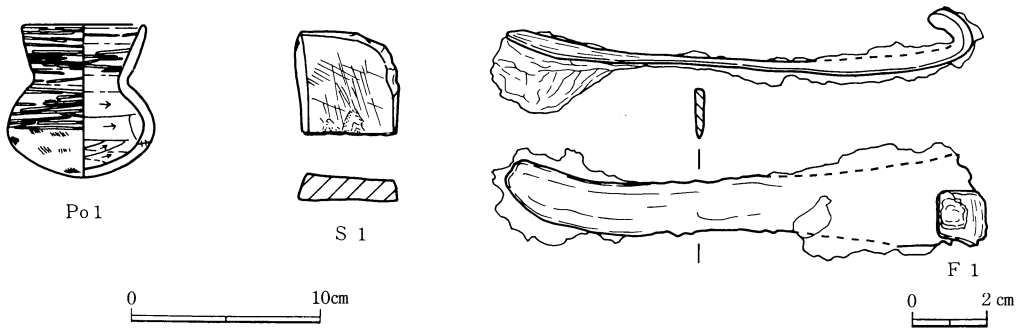


插图221 76号墳第2埋葬施設遺構図 (S = 1/20)



挿図222 76号墳周溝内 SK01遺構図 (S = 1/40)



挿図223 76号墳遺物図 (土器・石 S = 1/4、鉄 S = 1/2)

分もあると考えられる。遺物は棺中央部から骨片が2点、ベンガラ塊、粘土塊が検出された。棺内出土の砥石片と棺内外出土の砥石片は同一のもの (S 1) であり、何らかの時に棺内に混入したものと考えられる。この埋葬施設は外側、内側どちらの周溝に関連するものか不明である。

(2)第2埋葬施設 (挿図221)

内側の周溝南側底面より土壌を検出した。主軸は南北を指す。土壌北側は墳丘肩部分であるが重機により破壊されていた。周溝上面土壌内より少量の骨・歯が検出され、外側の

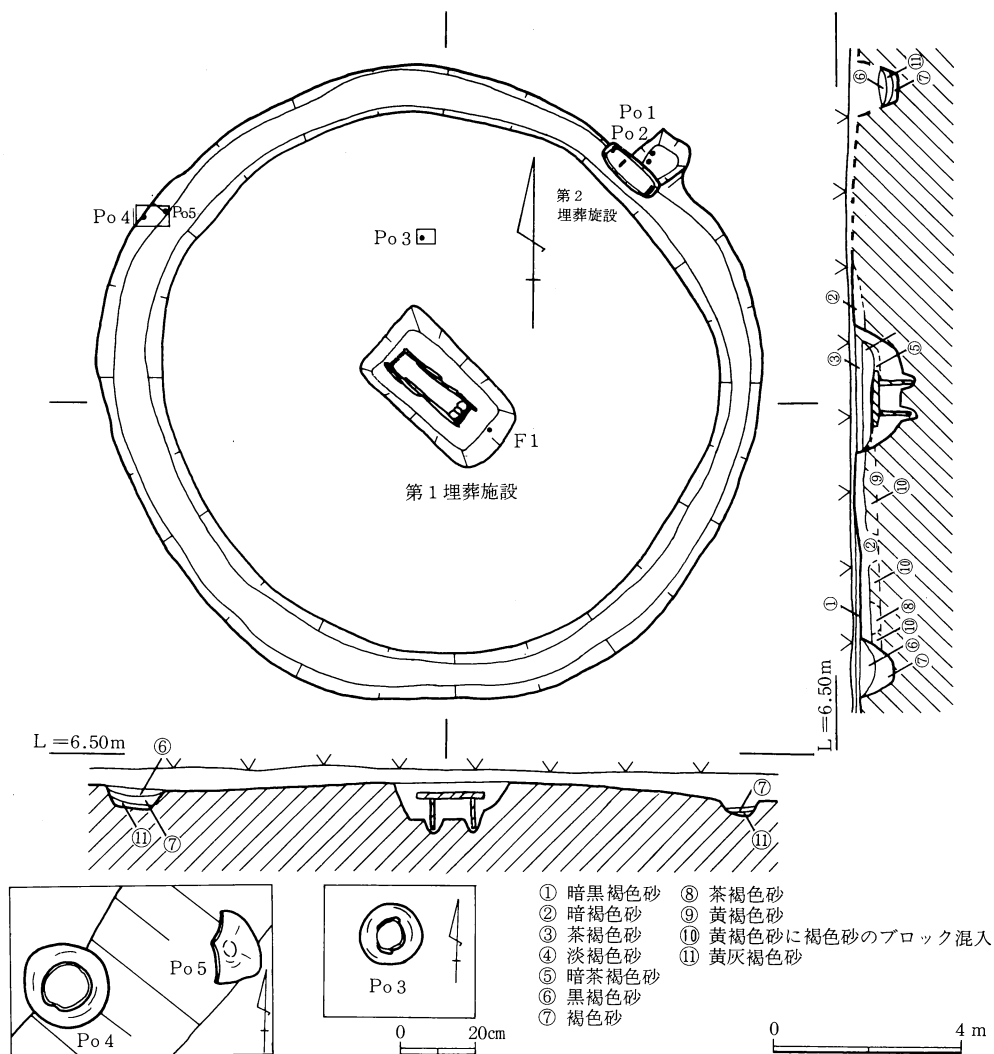
周溝に関連する埋葬施設と考える。

外側周溝内より鎌 (F 1), 小型丸底壺 (P o 1) が検出されたが, 76号墳との関連は不明である。

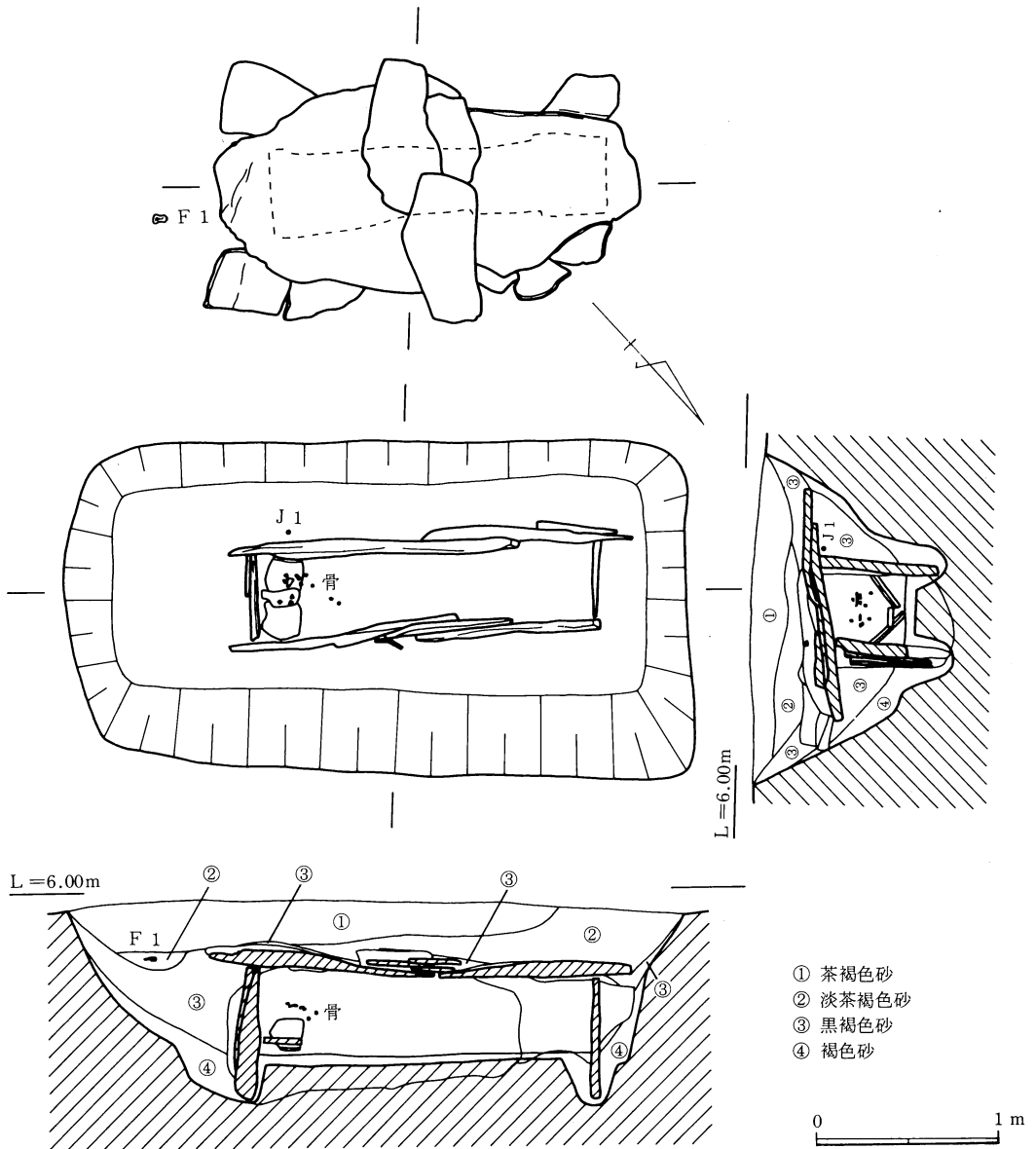
76号墳の築造時期は供献土器の検出はないが75号墳との関連により, 古墳時代中期中葉以降と考えられる。

77号墳 (挿図224~229, 図版54~56, 38・39)

10H南西区にあり5号墳の南東, 76号墳の西, SB30の真上に位置する。墳形は円形で径約11.9m, 周溝総径13.1mの円墳である。調査時には盛砂をした痕跡はみられなかった。周溝の幅は0.64~1.40m, 深さ0.29~0.47mのU字状の周溝で全周している。埋葬施設は墳丘中央に箱式石棺1基 (第1埋葬施設), 北東側周溝内から小口石を3枚立てた埋葬施設



挿図224 77号墳遺構図 (S = 1 / 10) ・遺物出土状況図 (S = 1 / 20)

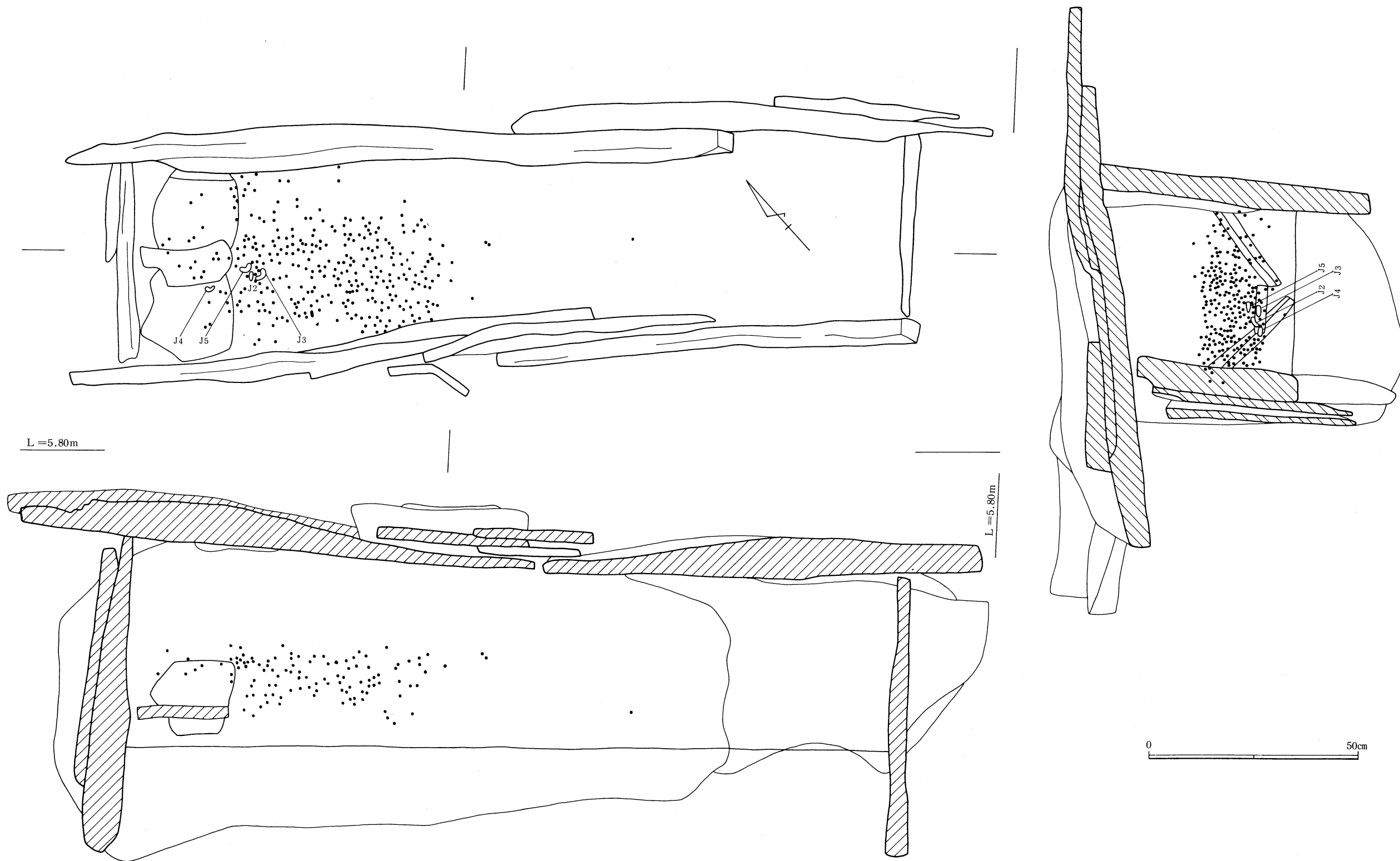


挿図225 77号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/40)

設 (第2埋葬施設) を検出した。北西側周溝肩 (P_o4・5), 第1埋葬施設と第2埋葬施設の北側にそれぞれ供献土器と思われるもの (P_o3, P_o1・2) が出土している。

(1)第1埋葬施設 (挿図225・226・228・229, 図版55)

墳丘の中央部にある箱式石棺で, 主軸はN-131°-Eにとる。墓壙の平面形は長方形を呈し, 墓壙の大きさは長軸3.36m, 短軸1.84mを測る。石棺の内法は, 長軸1.82m, 短軸0.35m, 床面までの深さ0.51mを測る。蓋石は2枚の大きな板石を置き, その隙間に中小の板石を11枚置いている。小口は, 東側で2枚, 西側で1枚, 側壁は北側で3枚, 南側で

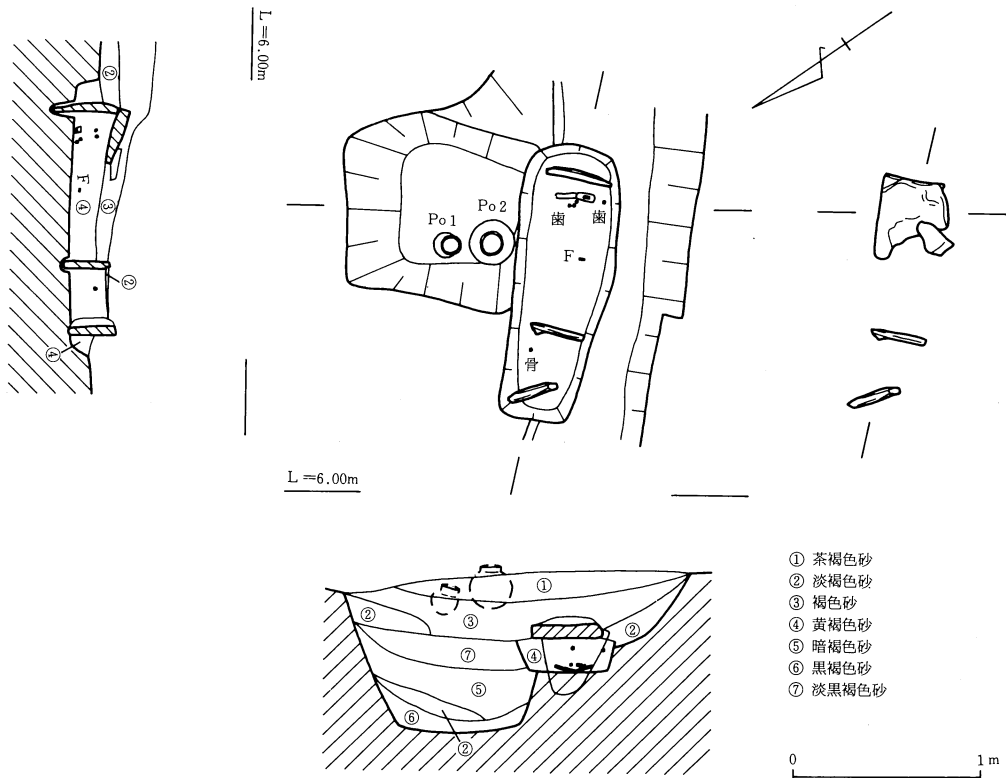


挿図 226 77号墳第1埋葬施設玉出土状況図 (S = 1/10)

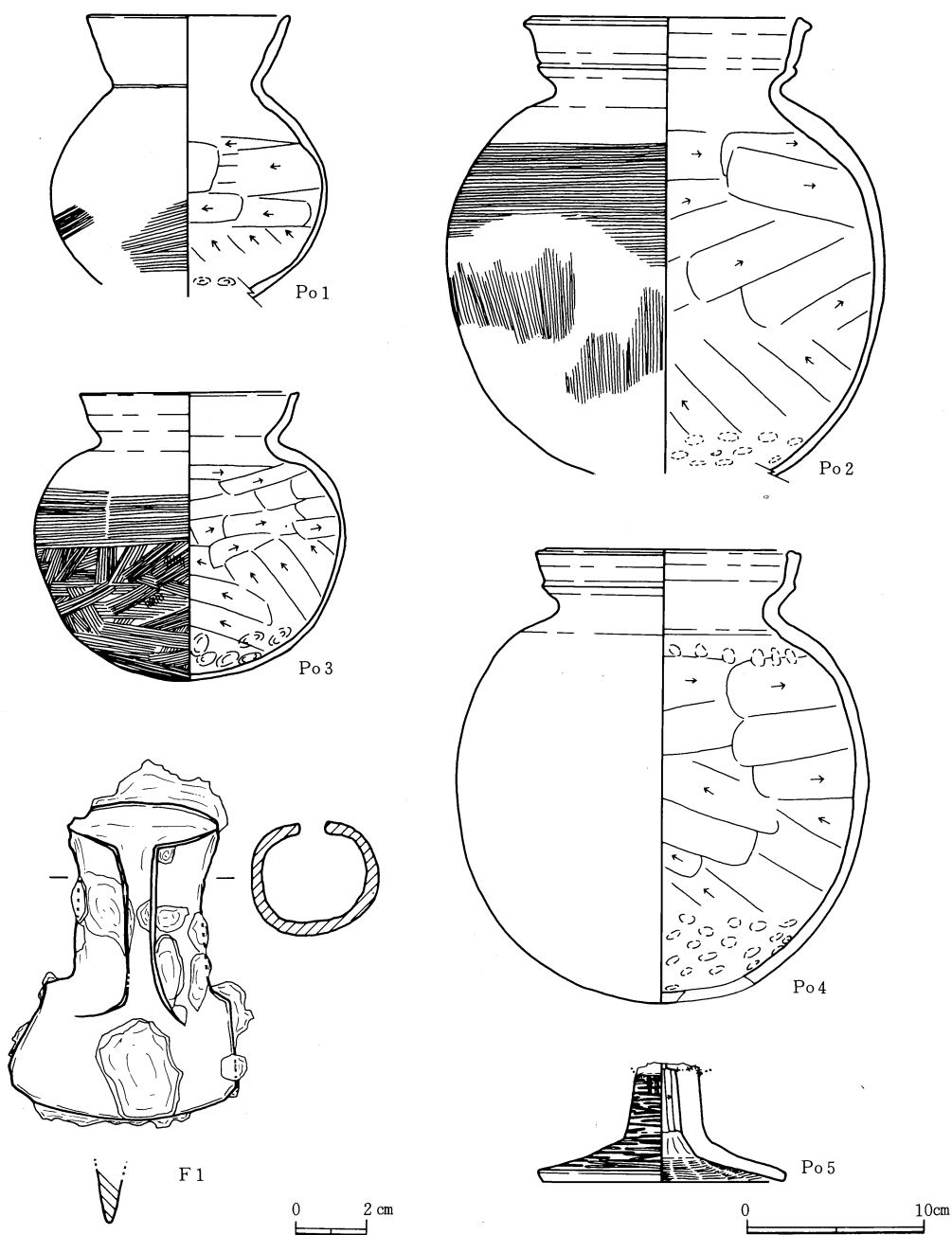
2枚の板石で造られ、棺内から粘土が出土していることから目張りをしてあったものと思われる。棺の内側の板石には赤色顔料が塗られている。棺内からは、東側に逆A字状に配された石枕があり、その上から頭蓋骨片・歯が出土している。棺内の副葬品としては、多量の玉が出土し、そのほとんどが首・胸部と思われる付近で長さ70cm、幅40cm、床面からの高さ17cmの範囲に集中して検出された。内訳は瑪瑙製勾玉（J3～5）3個、碧玉製勾玉（J2）1個、小玉835個（滑石製825、ガラス製13、瑪瑙製1）である。また墓壙内からも瑪瑙製勾玉（J1）1個、小玉148個が出土している。墓壙東側で鉄斧（F1）1点出土している。

(2)第2埋葬施設（挿図227・228、図版55・56）

北東側周溝内に造られ、主軸をN-135°-Eにとる。墓壙は隅丸の長方形で長軸1.48、短軸0.54mを測る。その中に南東側、北西側、その間に各1枚の板石を小口にして立てられている。南東側と中の小口は、ほぼ平行に立てられているが北西側の小口はややずれる。南東小口から中小口まで約0.81m、中小口から北西小口まで0.32mを測る。蓋石は、南東小口の上から板石を1枚検出したただけである。側壁も検出できなかった。東側小口側からV字状の石枕を検出し、その周辺から歯片が4点出土している。また、中-北西小口間か



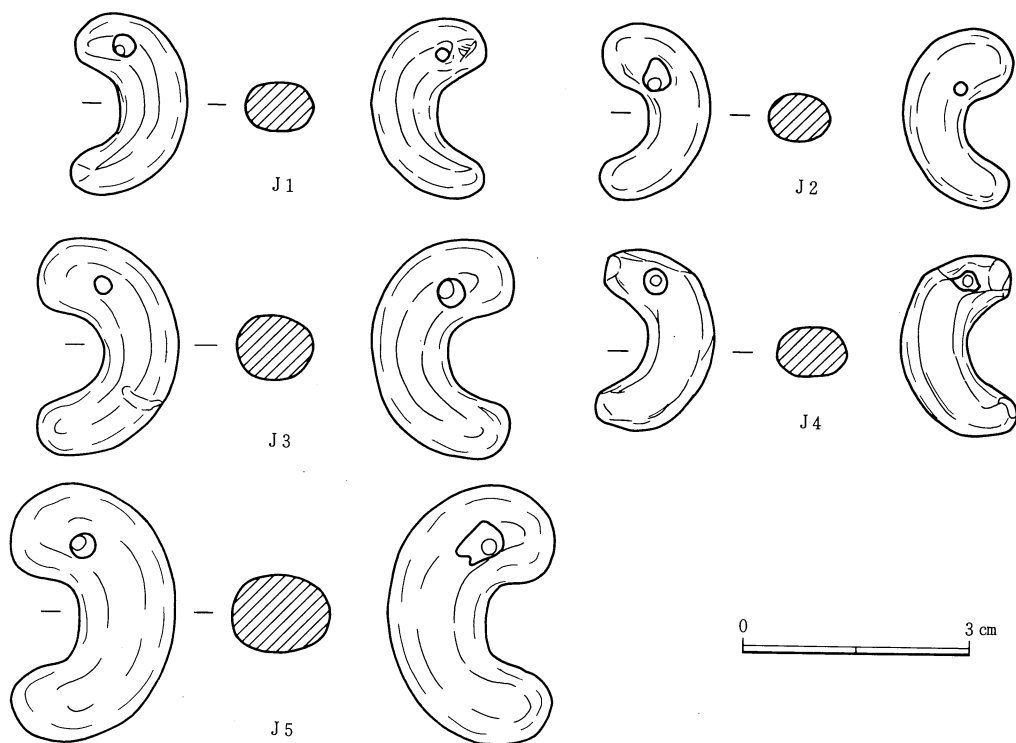
挿図227 77号墳第2埋葬施設遺構図（S = 1/40）



挿図228 77号墳遺物図その1 (土器S=1/4・鉄S=1/2)

らも骨片が1点出土している。第2埋葬施設は北東側の土壌を切ってつくられており、Po1・2出土地点もレベル的に高いことから、土壌は77号墳築造以前のものと考えられる。

77号墳の築造時期は、供献土器等から古墳時代中期中葉と考えられる。



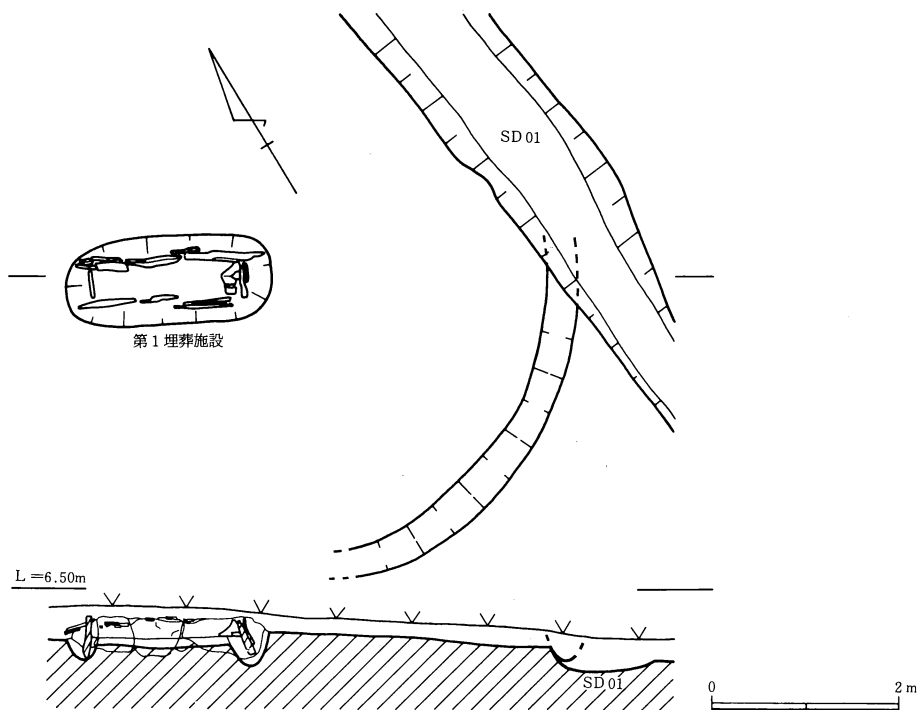
挿図229 77号墳遺物図その2 (S = 1/1)

78号墳 (挿図230・231, 図版56・57)

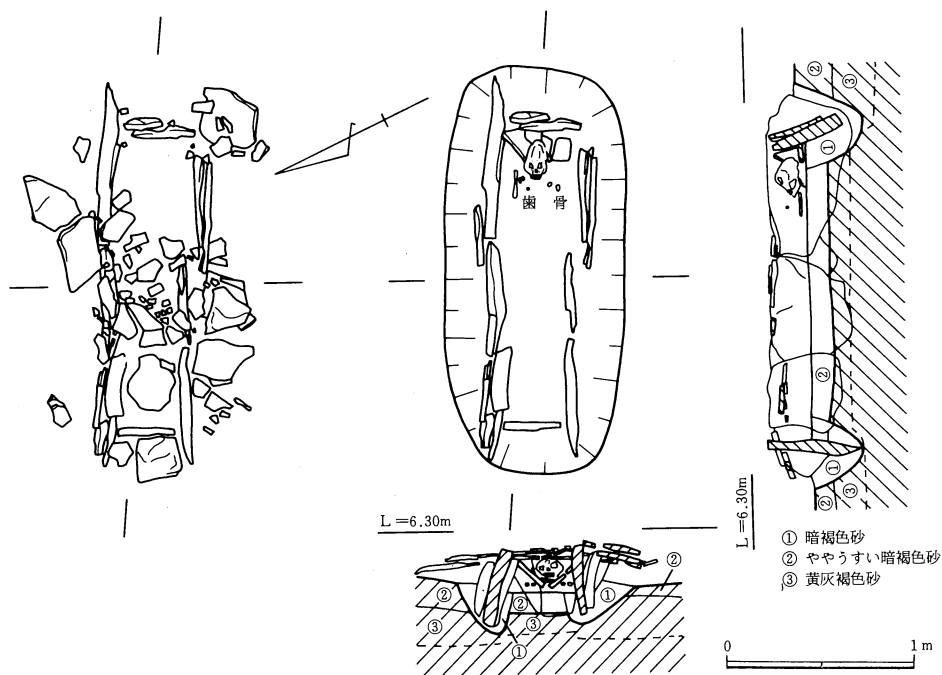
11H地区で箱式石棺を検出した。南側で検出した溝がこの石棺を中心に周っている事から、この石棺に伴う周溝であろうと判断し円墳と考える。他の場所では周溝は確認できなかった。主体である第1埋葬施設は内法長軸154cm, 短軸を頭部で40cm, 他の点で35cmとする箱式石棺で掘り方は216×96cm。軸方向はN-120°-E。蓋石はかなり消失していた。蓋石から床面までの深さは20cmだが、頭蓋骨の上端(額部分)はほとんど蓋石に接するような状況で検出された。遺骨は頭蓋骨が完全に遺存し、両方の上腕骨も遺存していた。また鎖骨・肋骨も痕跡があった。下半身は一部痕跡がうかがえたが図化できなかった。遺体の頭蓋骨は20cm広の板石を2枚V字状に組みあわせた、V字状石枕の上に、さらに後頭部があたる部位に10cm広の板石をおいた枕の上にのせられていた。咽喉の骨も一部残存しており、その下に接する形でごく小さい3cm位の石片があった。意図的におかれたものかどうか判断できなかった。埋葬人体は1体であろう。30~40才代の男性と推定される。遺物は全く検出できなかった。赤色顔料も全く塗られていなかったと考える。

周溝は幅40cm, 深さ20cm, 周溝外径8.8m。石棺蓋石検出レベルと周溝底面のレベル差は60cmであり、黒砂の堆積状況から墳丘はほとんどなかったものとする。

78号墳は古墳時代中期のものとする。



挿図230 78号墳遺構図 (S = 1/80)

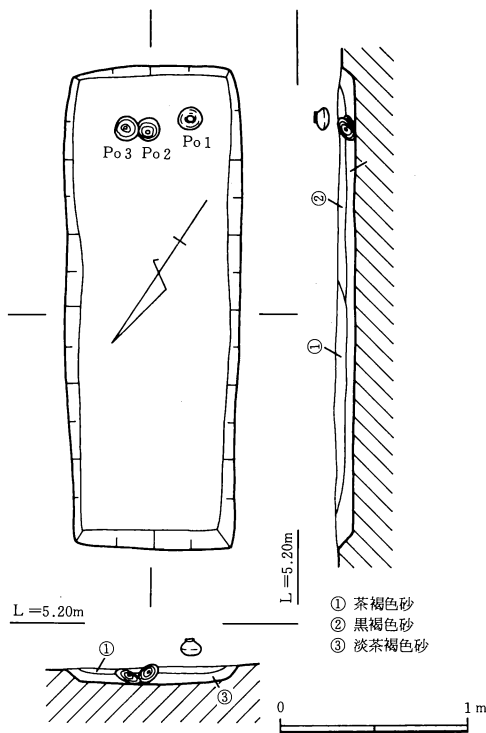


挿図231 78号墳第1埋葬施設遺構図 (S = 1/40)

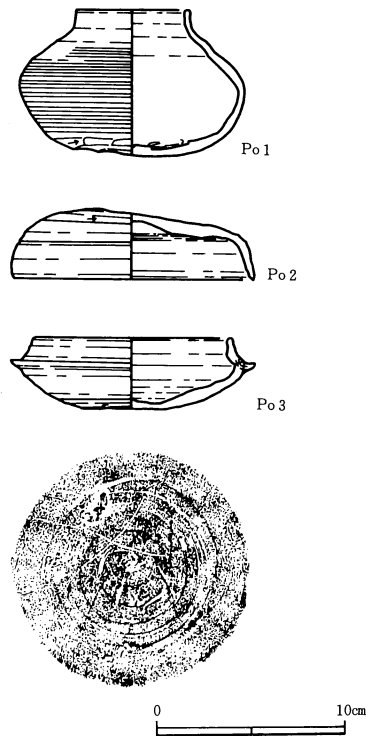
S X 68 (挿図232・233, 図版57・69)

9 I 地区の西側で検出し、北側はS I 123を掘り込んでつくられている。掘り方は検出できず、長軸2.58, 短軸0.94, 深さ0.07mの棺部と考えられる土壌を検出した。主軸をN-146°-Eに振る。木棺墓の可能性が強い。墓壙内より歯・骨片等は検出できず、南東側から須恵器短頸壺(Po1)1個, 蓋環(Po2・3)1対が出土している。蓋環はV字状に伏せた状態で検出され、枕に転用されたと思われる。このような例は当遺跡では2号墳第1埋葬施設に次いで2例目だが、木棺を埋葬施設としている点では初例と言える。短頸壺は棺の床面より14cm高く、本来木棺の蓋の上に供献土器として置かれていたものが、蓋が朽ちて棺内に落ち込んだ可能性が強い。副葬品はなかった。

時期は古墳時代後期中葉(陶邑Ⅱの3)と考えられる。



挿図232 S X 68遺構図 (S = 1/40)



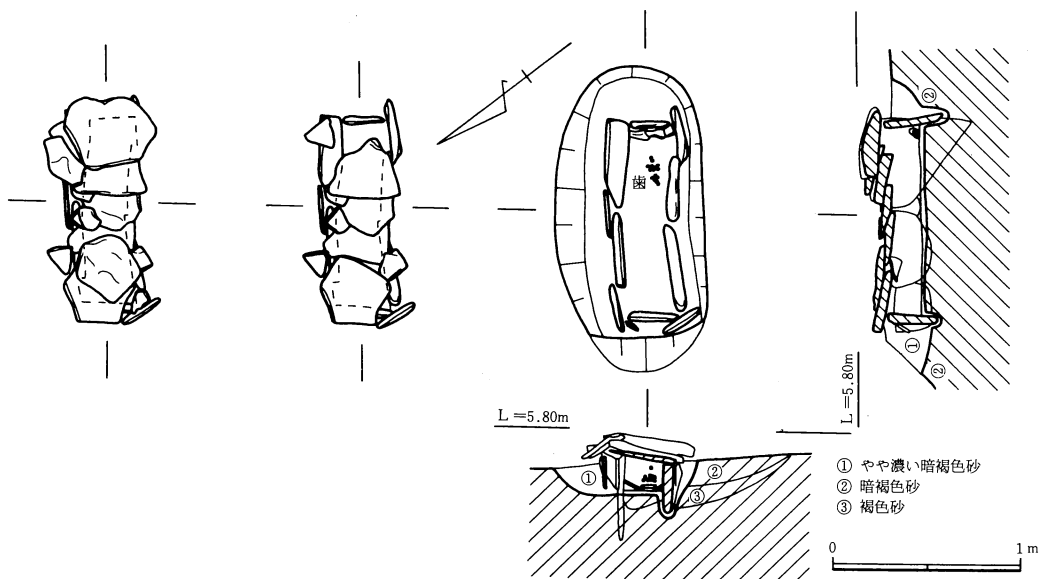
挿図233 S X 68遺物図 (拓影S = 1/2)
(土器S = 1/4)

S X 69 (挿図234, 図版58)

11H地区の北東にあり5号墳の南東側, S I 125の上面に位置す。北西側をS D 01によって切られている。主軸をN-126°-Eにとる箱式石棺で長辺1.51m, 短辺0.8mの掘り方を持つ。石棺は長辺1.08, 短辺0.38m, 深さ0.16mを測る。蓋石は4枚からなり, 側壁は北が4枚, 南が3枚の石で, 小口は東西ともに1枚ずつ計2枚の石で造られる。棺内南東側には, 板石をV字状に組みあわせ, その上に平石を1枚敷いた石枕がみられる。その石

棺のやや北西側付近で、上歯と下歯がかみ合った歯を6本、骨片を少量検出した。副葬品は検出できなかった。

時期は遺構の切り合い関係から古墳時代中期～後期と考えられる。

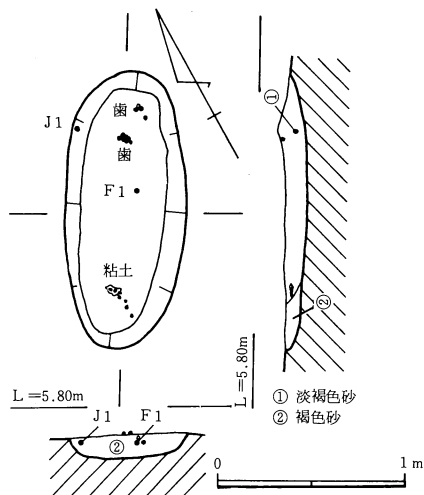


挿図234 S X 69遺構図 (S = 1/40)

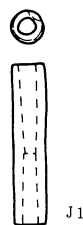
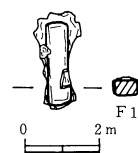
S X 70 (挿図235・236, 図版58)

10H地区の北西にあり、75号墳の南西、77号墳の北に位置する。平面形は楕円形を呈し、床面はほぼ平坦である。主軸はN-31°-Eを振り、長軸1.5m、短軸0.65m、検出面からの深さ0.10mを測る土墳墓である。墓壙北側で歯を数点検出した。副葬品としては、滑石製管玉(J1)1点、鉄(F1)1点を検出している。

時期は、周辺の遺構、切り合い関係から古墳時代中～後期と考えられる。



挿図235 S X 70遺構図 (S = 1/40)



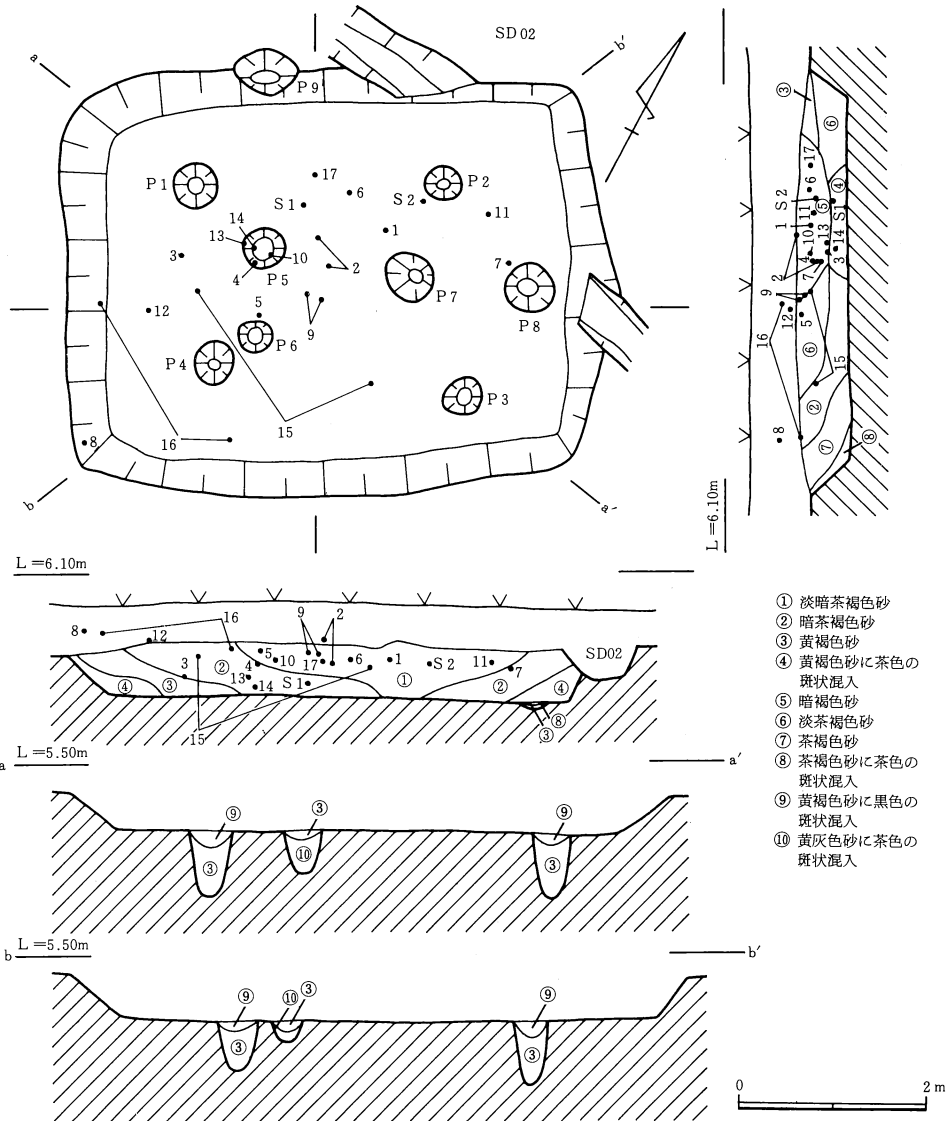
挿図236 S X 70遺物図 玉 S = 1/1) (鉄 S = 1/2、

第2節 竪穴住居跡

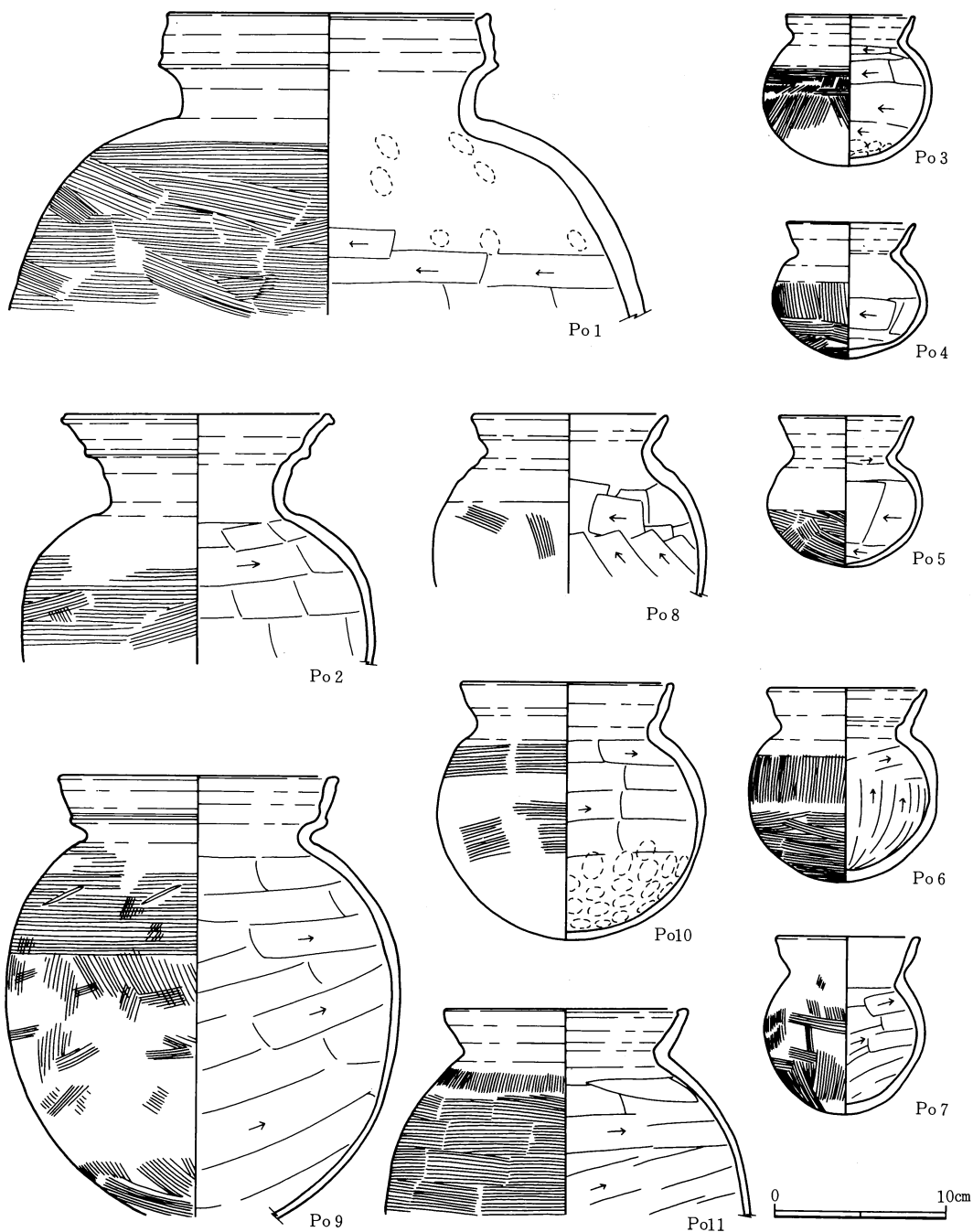
56年度後期調査地区（g地区）では19棟の竪穴住居跡を検出した。長方形プラン2棟、方形プラン8棟、隅丸方形プラン6棟、五角形プラン1棟、六角形プラン2棟である。

S I 121（挿図237～239，図版58・69・70）

10 I 地区にあり，S I 127の南西に位置し，S B 40，S D 02と切り合っている。新旧関係は，S B 40より新しく，S D 02よりも古い。平面形は長方形で，コーナーは直角気味である。床面の大きさは長辺4.84，短辺3.80mで，主軸はN-60°-Eである。床面積は約18.4m²になる。壁高は南側で最大値44cmを測る。側溝はみられない。ピットは9個あったが竪穴住居の構造柱の柱穴とみられるものはP 1～P 4の4つである。プランはP 1（48×

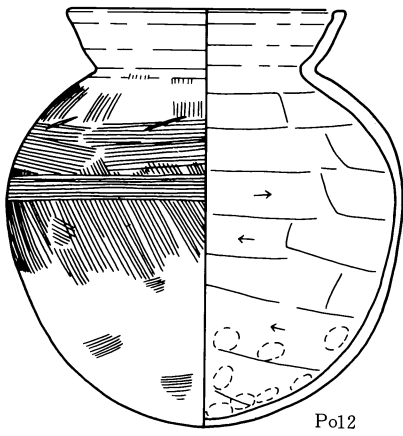


挿図237 S I 121遺構図（S = 1/80）

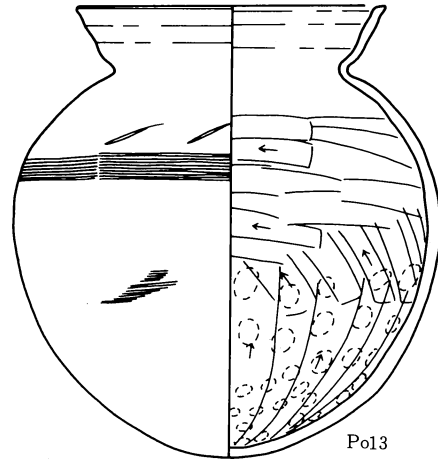


挿図238 S 1121遺物図その1 (S=1/4)

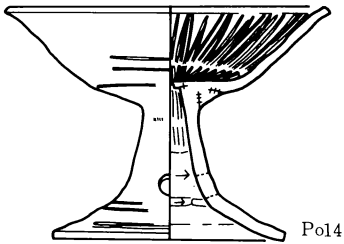
49-70), P 2 (38×42-69), P 3 (40×42-69), P 4 (49×41-54) cmで、柱穴間距離はP 1-P 2間より、2.64, 2.28, 2.68, 1.90mである。他の5個のピットは用途不明である。東辺中央部にあるP 8については(52×54-28) cmを測る。時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。



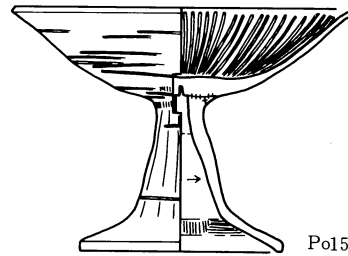
Po12



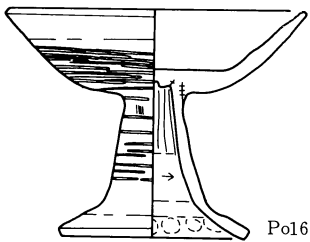
Po13



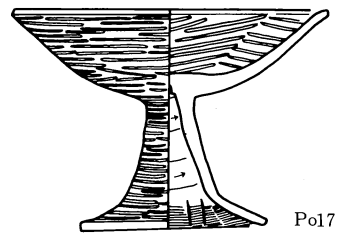
Po14



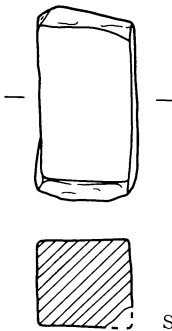
Po15



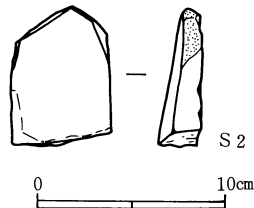
Po16



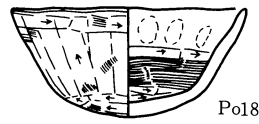
Po17



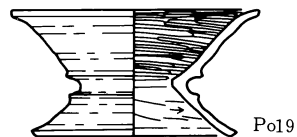
S 1



S 2



Po18

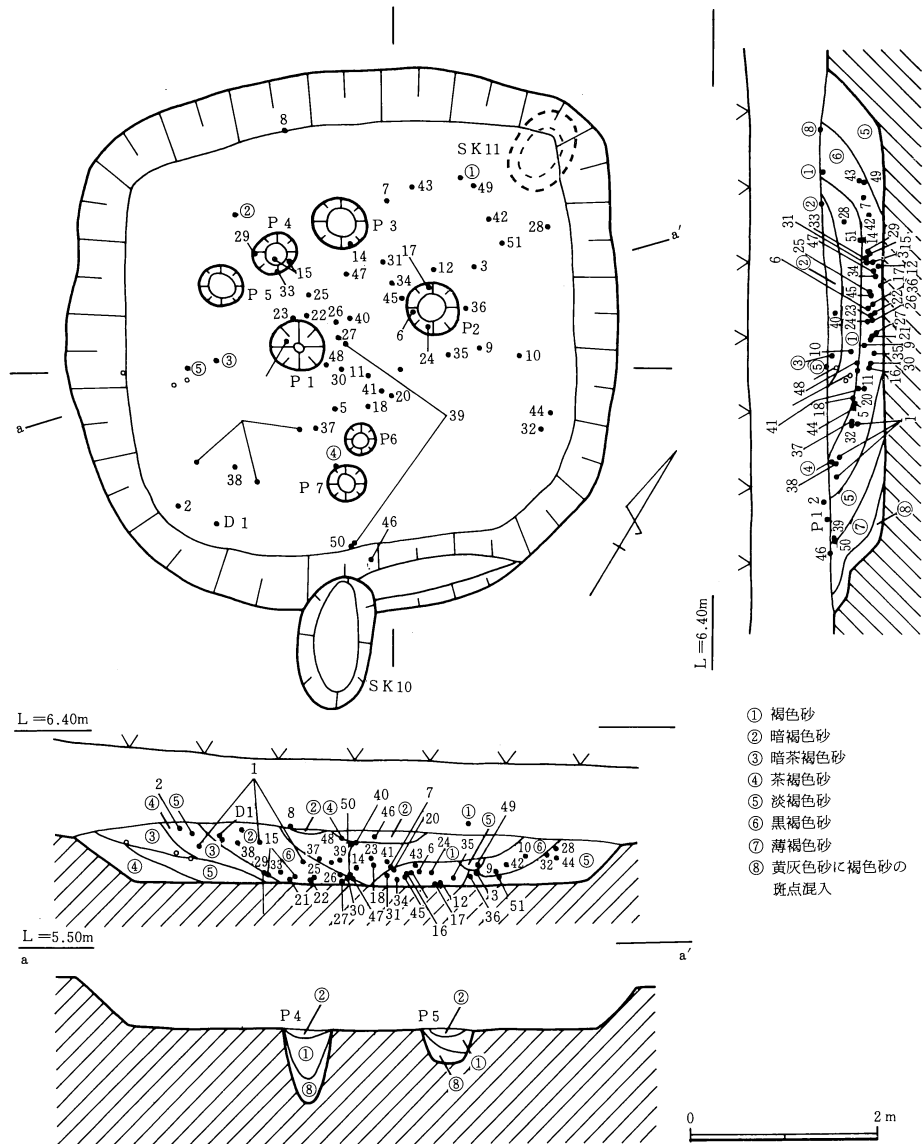


Po19

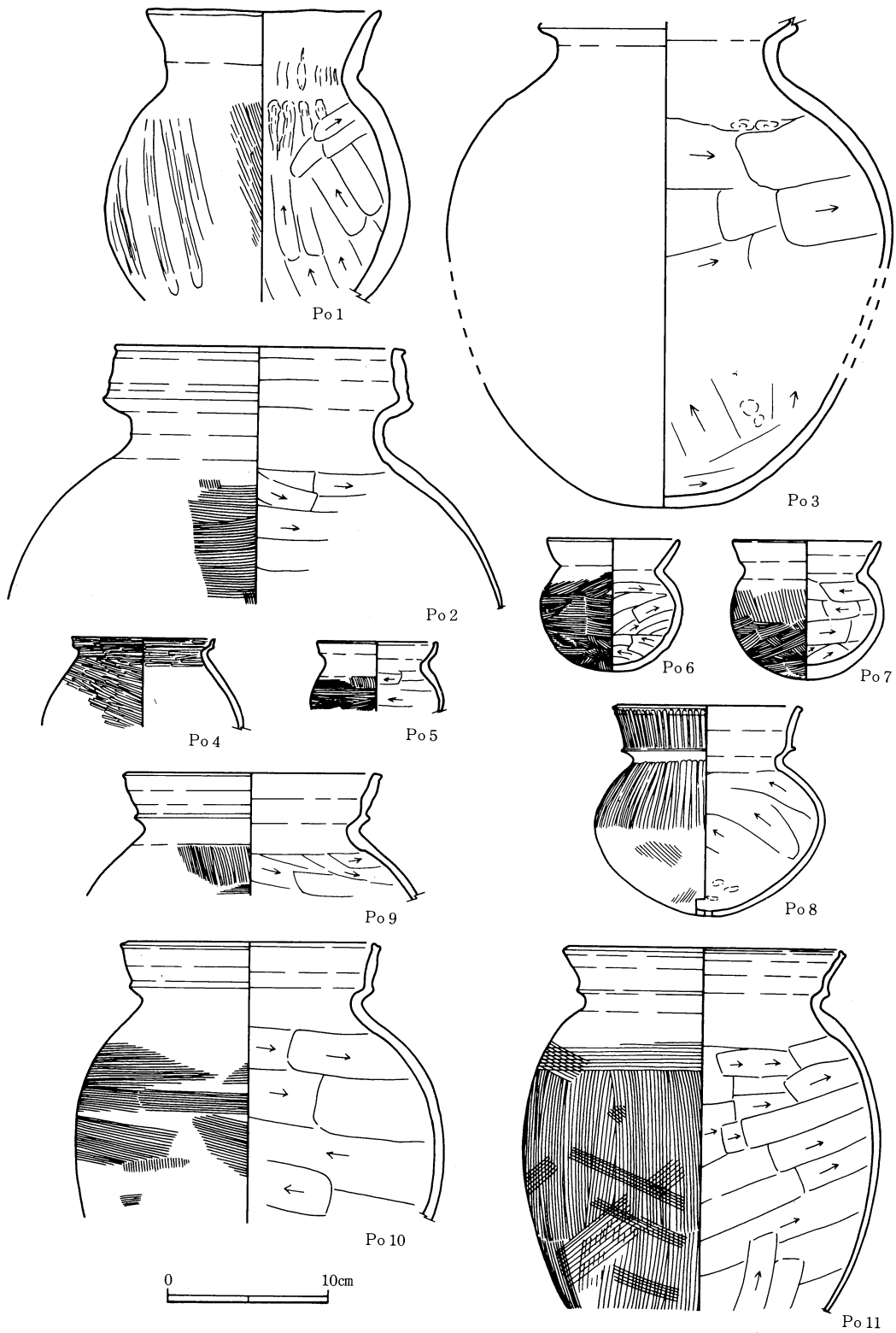
挿図239 S I 121遺物図その2 (S = 1/4)

S I 122, 11 I S K 10・11 (挿図240~247, 図版59・70~72)

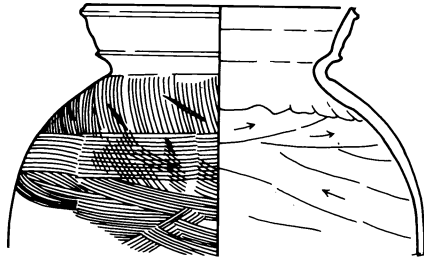
11 I 地区の東側にあり, 5号墳の北東側, S I 127の西側に位置する。平面形は隅丸方形を呈す。床面の大きさは長辺4.84, 短辺4.46mを測り, 主軸はN-43°-Eである。床面積は約21.6m²を測る。壁高は西側で最大値54, 東側で最小値40cmを測る。側溝はみられないが, 南側に幅34cmの小テラスを持つ。ピットは床面で7個検出したが, 柱穴はP 1・P 2である。プランはP 1から(56×54-80), (60×54-34) cmを測る。柱穴間距離は1.4 mである。肩部の南側にS K 10, 北側にS K 11を検出した。ともにS I 122より新しい。骨片を検出したが埋没時の流入とみられる。時期は遺物より長瀬Ⅱ~Ⅲ期と考えられる。



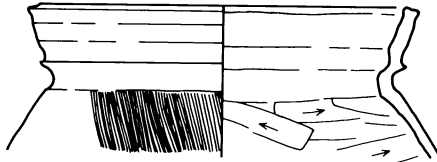
挿図240 S I 122遺構図 (S = 1/80)



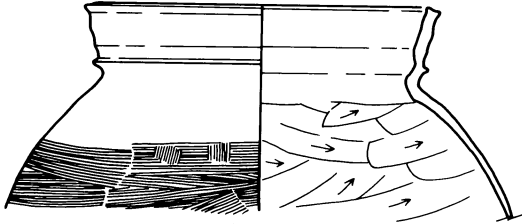
挿図241 S I 122遺物図その1 (S = 1/4)



Po 12

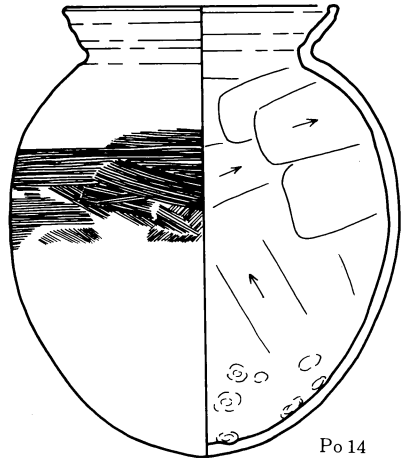


Po 13

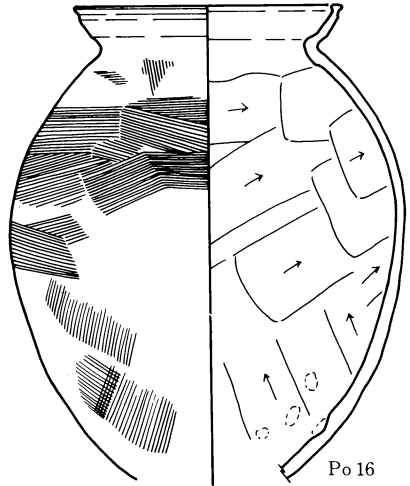


Po 15

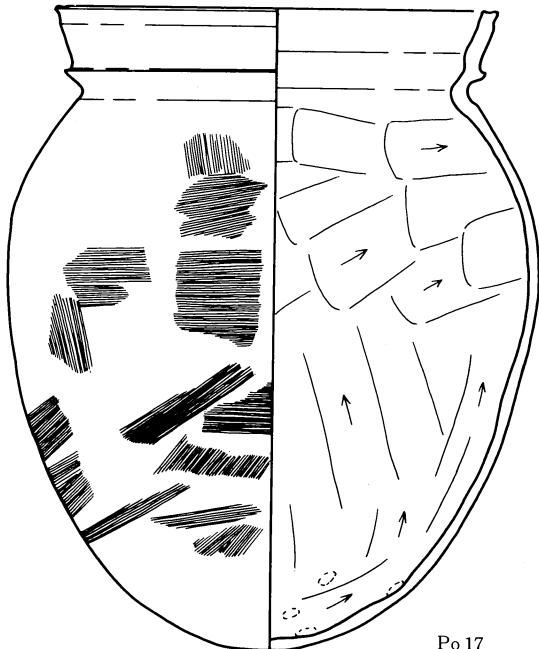
0 10cm



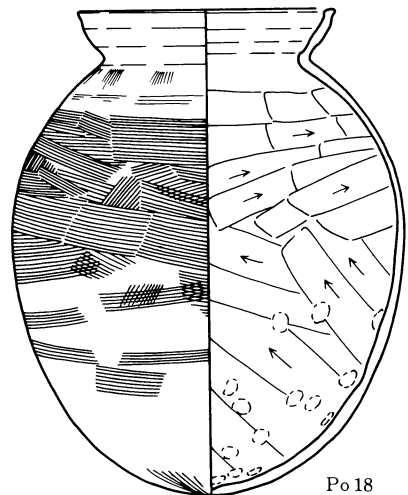
Po 14



Po 16

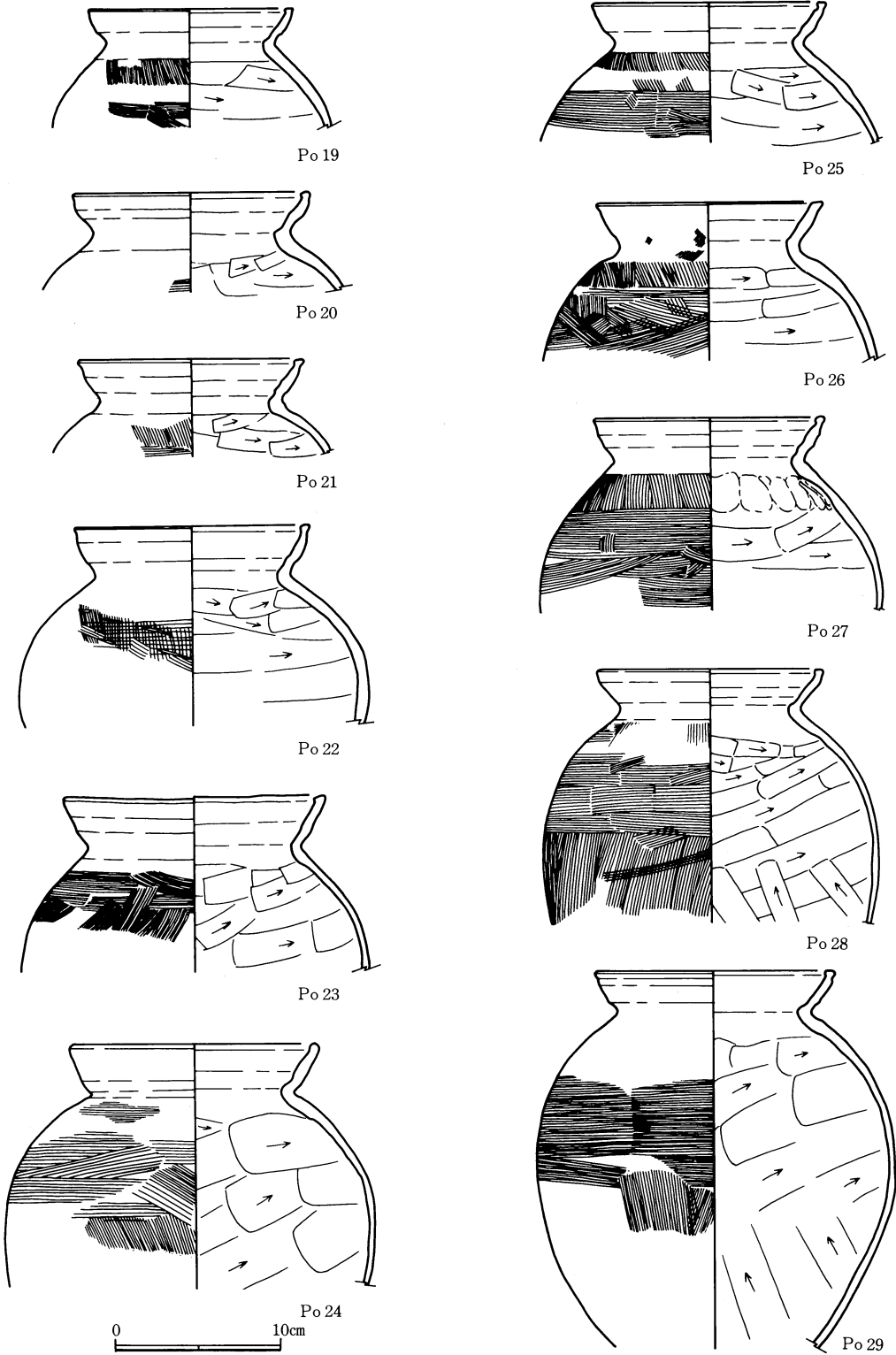


Po 17

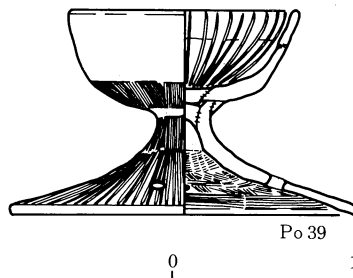
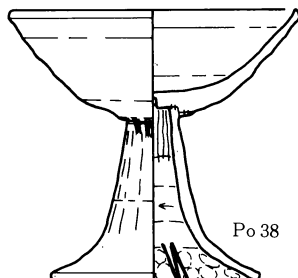
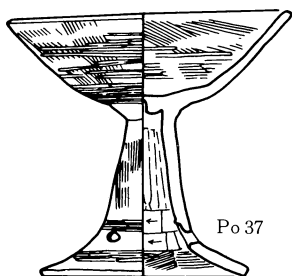
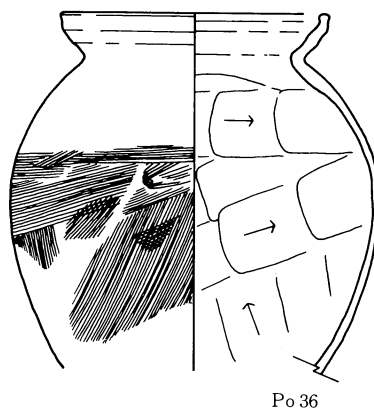
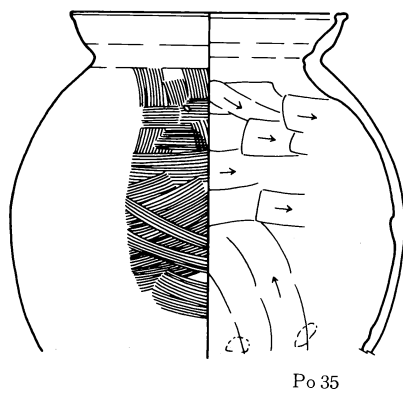
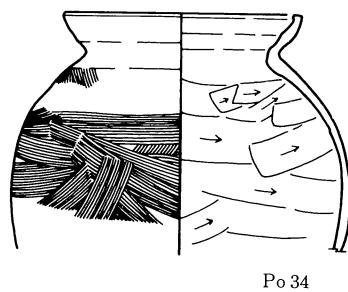
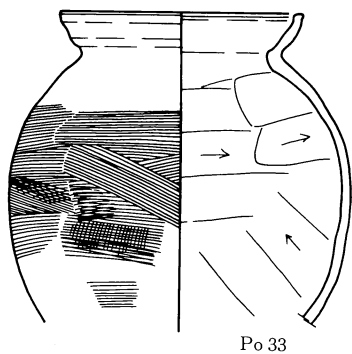
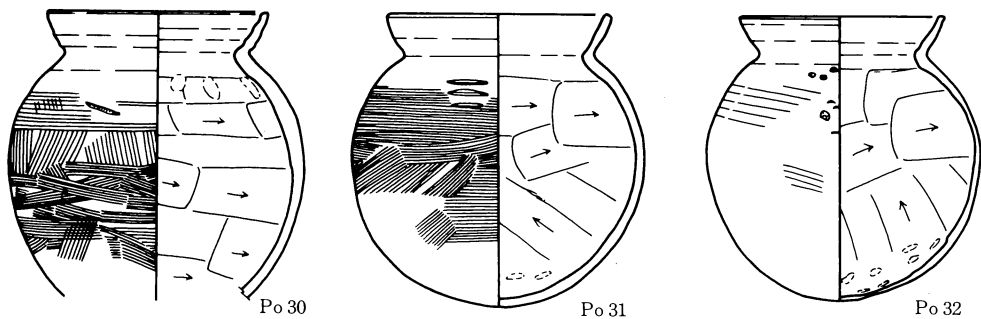


Po 18

挿図242 S I 122遺物図その2 (S=1/4)

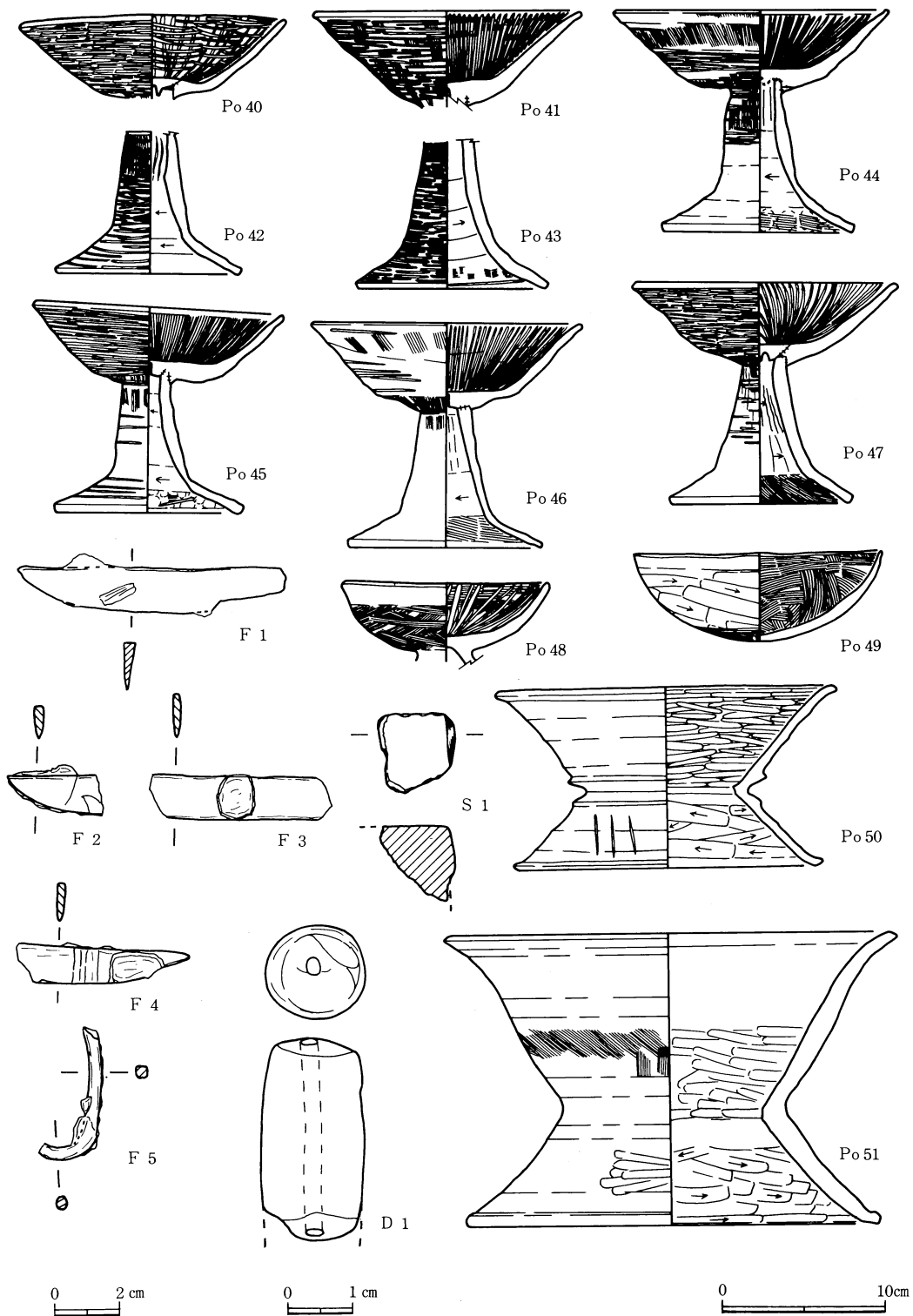


挿図243 S I 122遺物図その3 (S = 1/4)

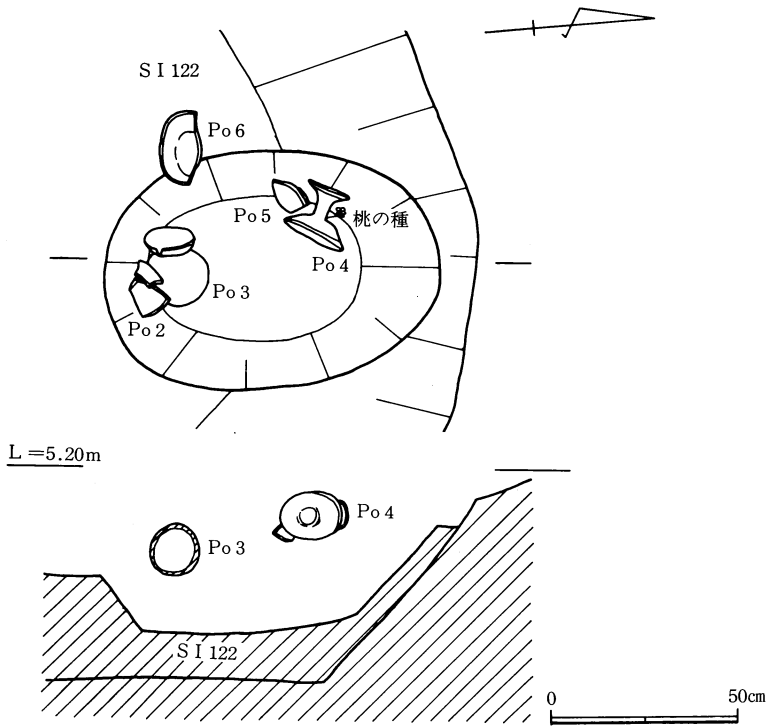


0 10cm

挿図244 S I 122遺物図その4 (S = 1/4)

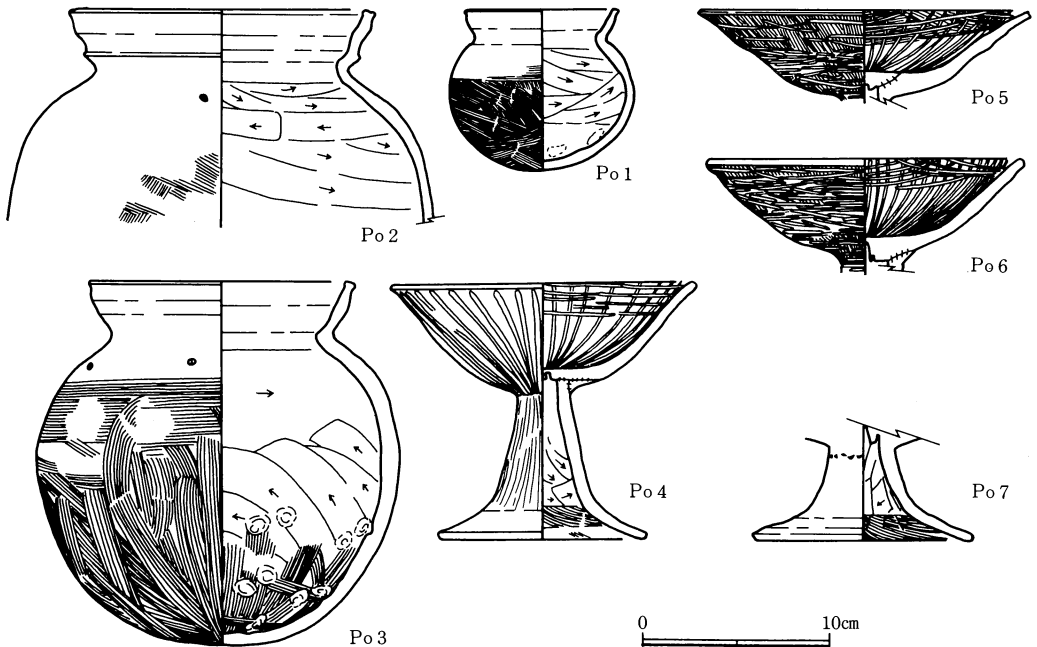


挿図245 S I 122遺物図その5 (土器・石S = 1/4、鉄S = 1/2、玉S = 1/1)



挿図246 11 I S K 11遺構図 (S = 1/20)

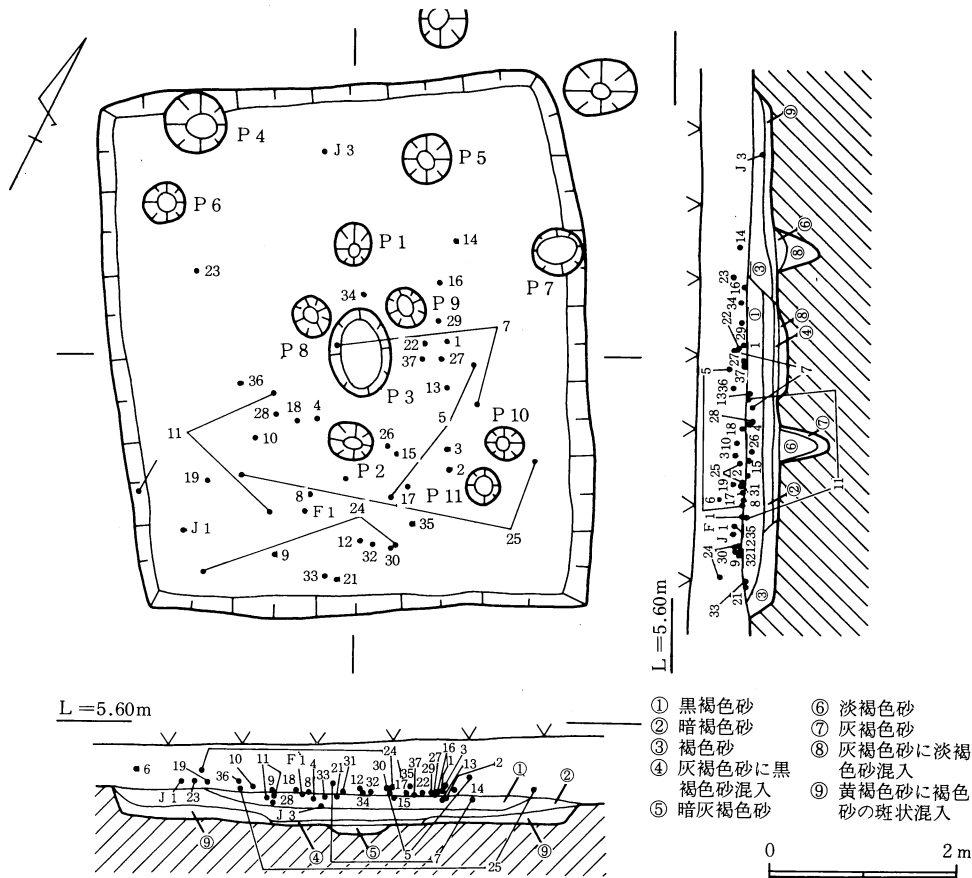
11 I S K 11は、11 I 地区の東側に位置し、S I 122の北肩上面にある。長軸0.86、短軸0.64、深さ0.15mを測る。完形の甕 (Po 3)、高坏 (Po 4)、その他土器片が多数検出された。S I 122との切り合い、出土遺物より、S I 122より新しいかもしくはS I 122とほぼ同時期の祭祀跡ではないかと思われる。尚、S K 10内より高坏脚部 (Po 7) が出土している。



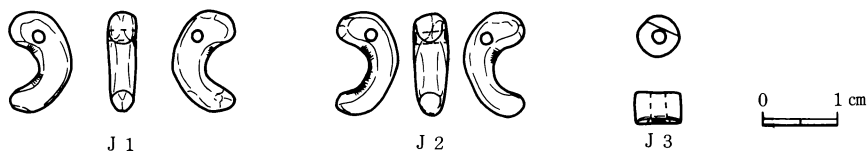
挿図247 11 I S K 10・11遺物図 (S = 1/4)

S I 123 (挿図248~253, 図版59・72・73)

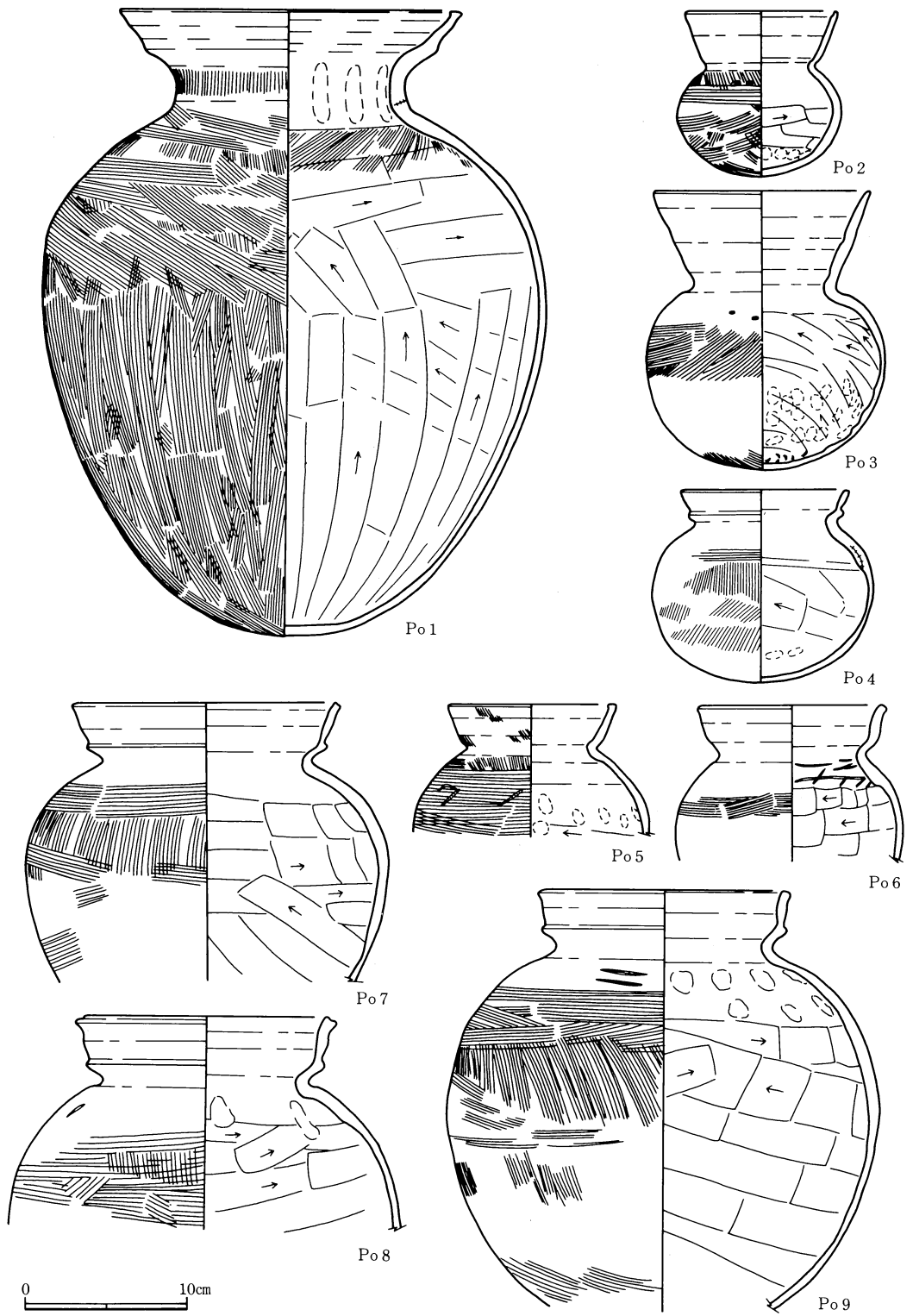
9 I・10 I 地区にまたがり, S I 131の東, S E 06の北に位置する。平面形は方形である。床面の大きさは長辺5.28, 短辺4.84m, 床面積 25.6 m²で, 壁高は, 西側で最大値32cm, 北側で最小値20cmである。主軸は N-32°-Wである。ピットは11個検出されたが, P 1, P 2の構造柱と, P 3の特殊ピットをもつ竪穴住居と考えられる。柱穴プランはP 1 (40×44-46), P 2 (46×40-52), P 3 (66×97-8) cm, 柱穴間距離は2.08mである。他のピットは用途不明である。北側の床面はやや浅く, 遺物の出土も南側に比べて少なく, テラスがあったとも考えられる。出土遺物は南側で多量の土師器のほか鉄製品 (F 1), 勾玉 (J 1・2), 小玉 (J 3) が出土している。時期は長瀬Ⅲ期と考える。



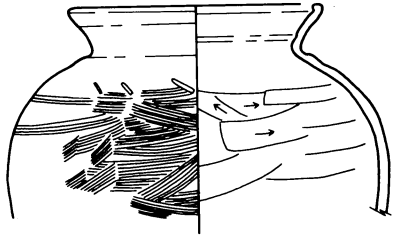
挿図248 S I 123遺構図 (S = 1/80)



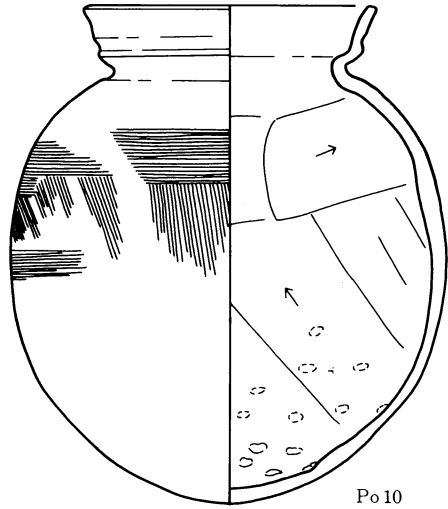
挿図249 S I 123遺物図その1 (S = 1/1)



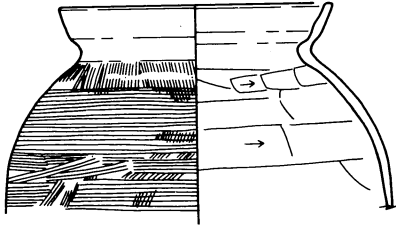
挿図250 S I 123遺物図その2 (S=1/4)



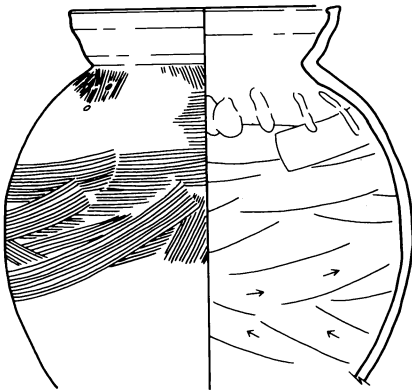
Po 11



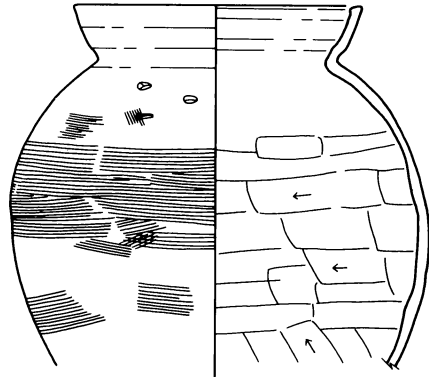
Po 10



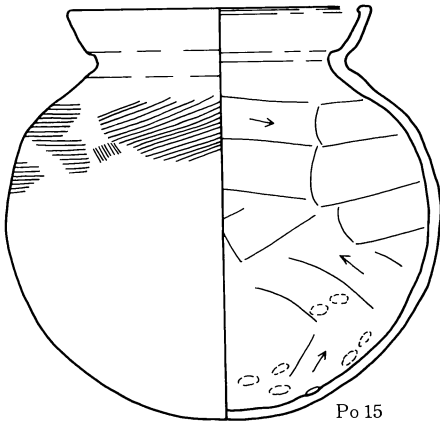
Po 12



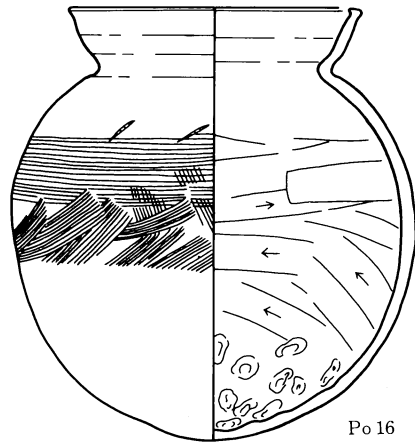
Po 13



Po 14



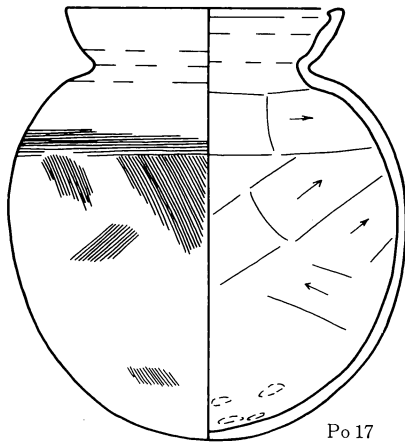
Po 15



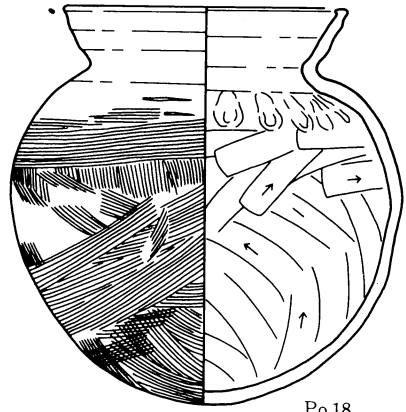
Po 16



挿図251 S I 123遺物図その3 (S=1/4)



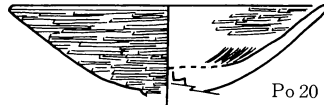
Po 17



Po 18



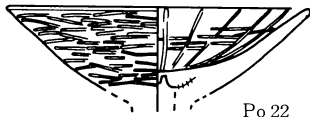
Po 19



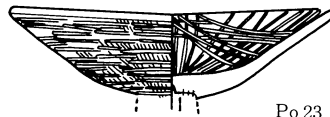
Po 20



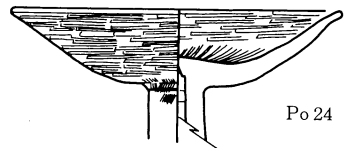
Po 21



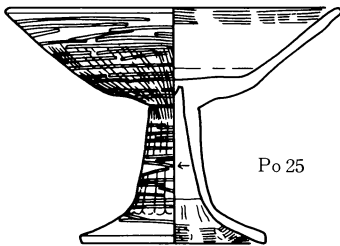
Po 22



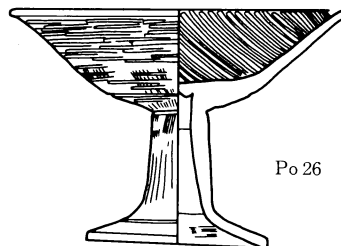
Po 23



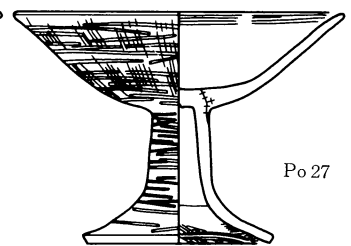
Po 24



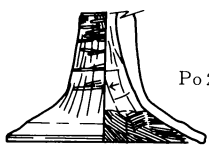
Po 25



Po 26



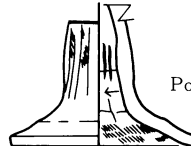
Po 27



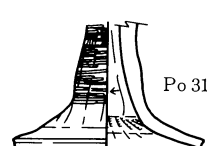
Po 28



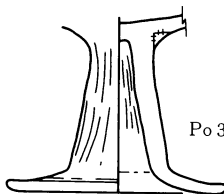
Po 29



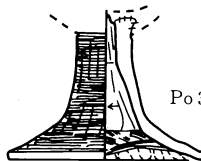
Po 30



Po 31



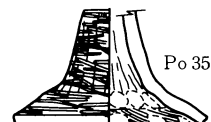
Po 32



Po 33



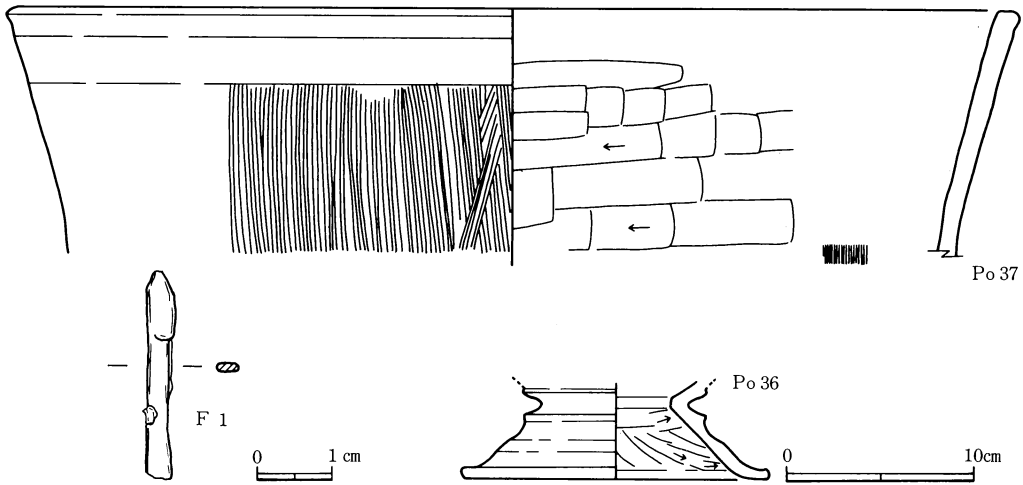
Po 34



Po 35



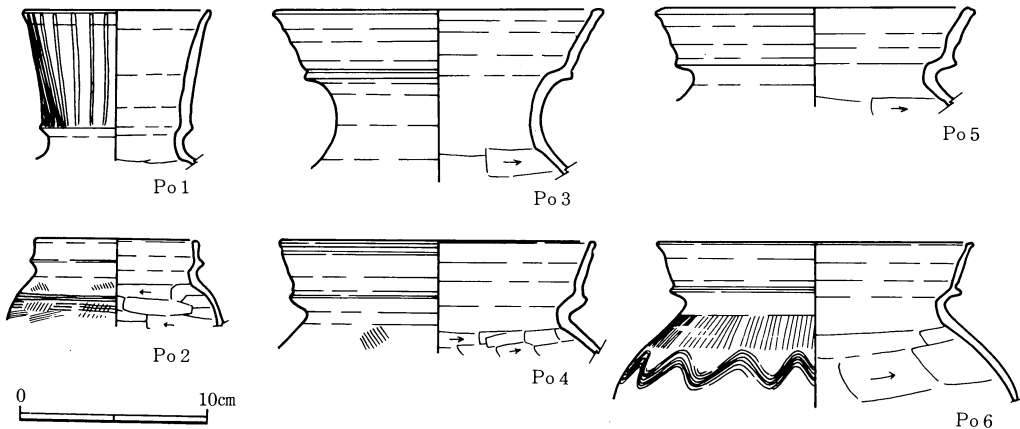
挿図252 S I 123遺物図その4 (S = 1/4)



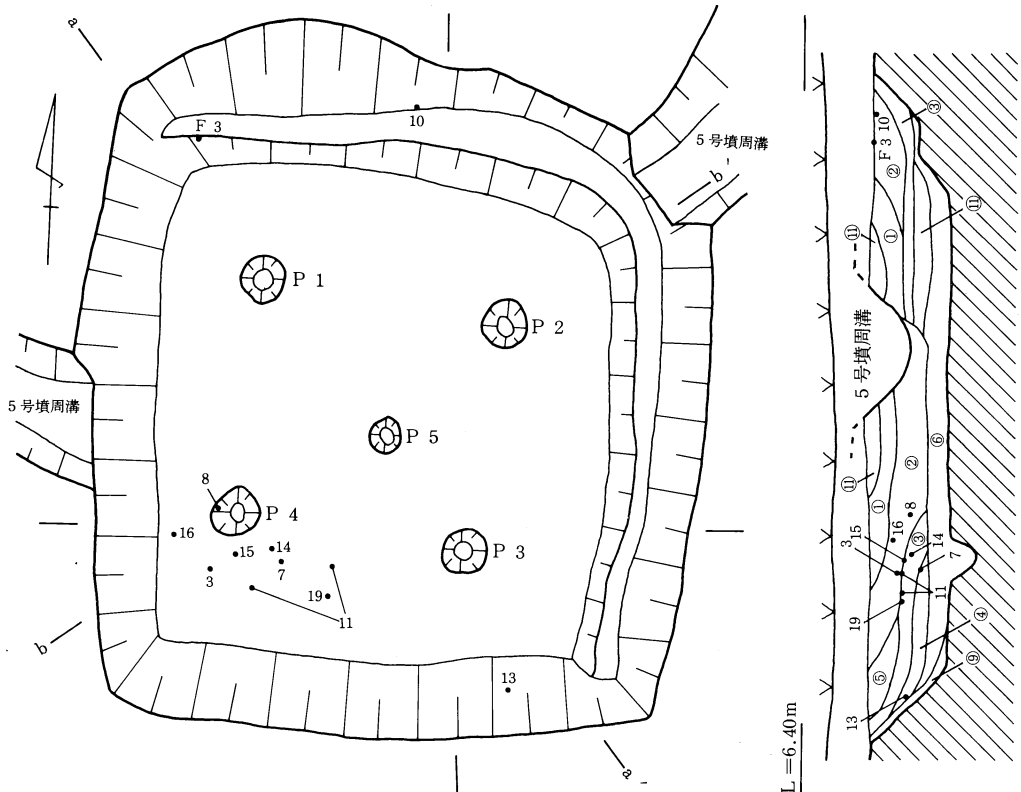
挿図253 S I 123遺物図その5 (土器S = 1/4、鉄S = 1/1)

S I 124 (挿図254~256, 図版59・73)

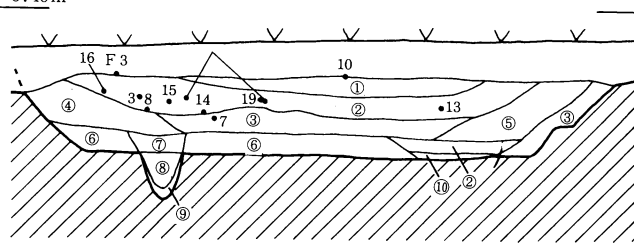
11H地区と11I地区にまたがり、東にはS I 125があり、住居跡の北半分を5号墳の周溝が切っている。平面形は方形を呈し、北・東側にテラス状の段が認められた。床面の大きさは一辺約4.4mで、テラスを含めた大きさは長辺7.3m、短辺6.7mを測る。床面積は約19.4㎡で、テラスを含めると約48.9㎡である。主軸はN-173°-Eである。壁高はテラスまでは北西側で最大値33cm、北東側で最小値24cmを測る。床面からテラスまでは約30cmの高さである。測溝はみられない。ピットは床面で5個検出したが柱穴と考えられるものはP 1~4の4個である。プランはP 1から順に(50×44-33), (52×48-43), (48×46-31), (54×48-64) cmで、柱穴間距離はP 1-P 2間から、2.62, 2.42, 24.4, 2.54 mを測る。P 5 (40×35-25)は特殊ピットと考えられる。遺物は土師器の他に剣先型鉄製品(F 3)を1点検出している。時期は遺物より、長瀬Ⅱ期新と考えられる。



挿図254 S I 124遺物図その1 (S = 1/4)

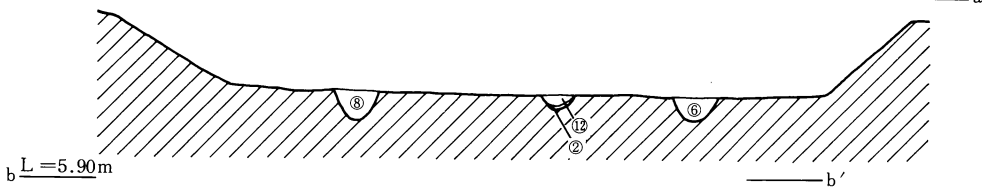


L = 6.40m

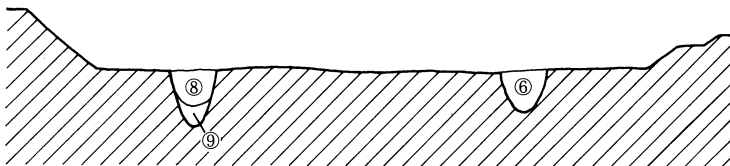


a L = 5.90m

- ① 褐色砂
- ② 淡褐色砂
- ③ 黄褐色砂 (茶の斑点混入)
- ④ 淡褐色砂 (茶の斑点混入)
- ⑤ 淡茶褐色砂
- ⑥ 茶灰色砂
- ⑦ 淡茶褐色砂 (茶の斑点混入)
- ⑧ 黄灰色砂
- ⑨ 淡茶褐色砂
- ⑩ 茶褐色砂 (茶の斑点混入)
- ⑪ 暗褐色砂
- ⑫ 茶褐色砂に黒褐色砂のブロック混入
- ⑬ 淡黄茶褐色

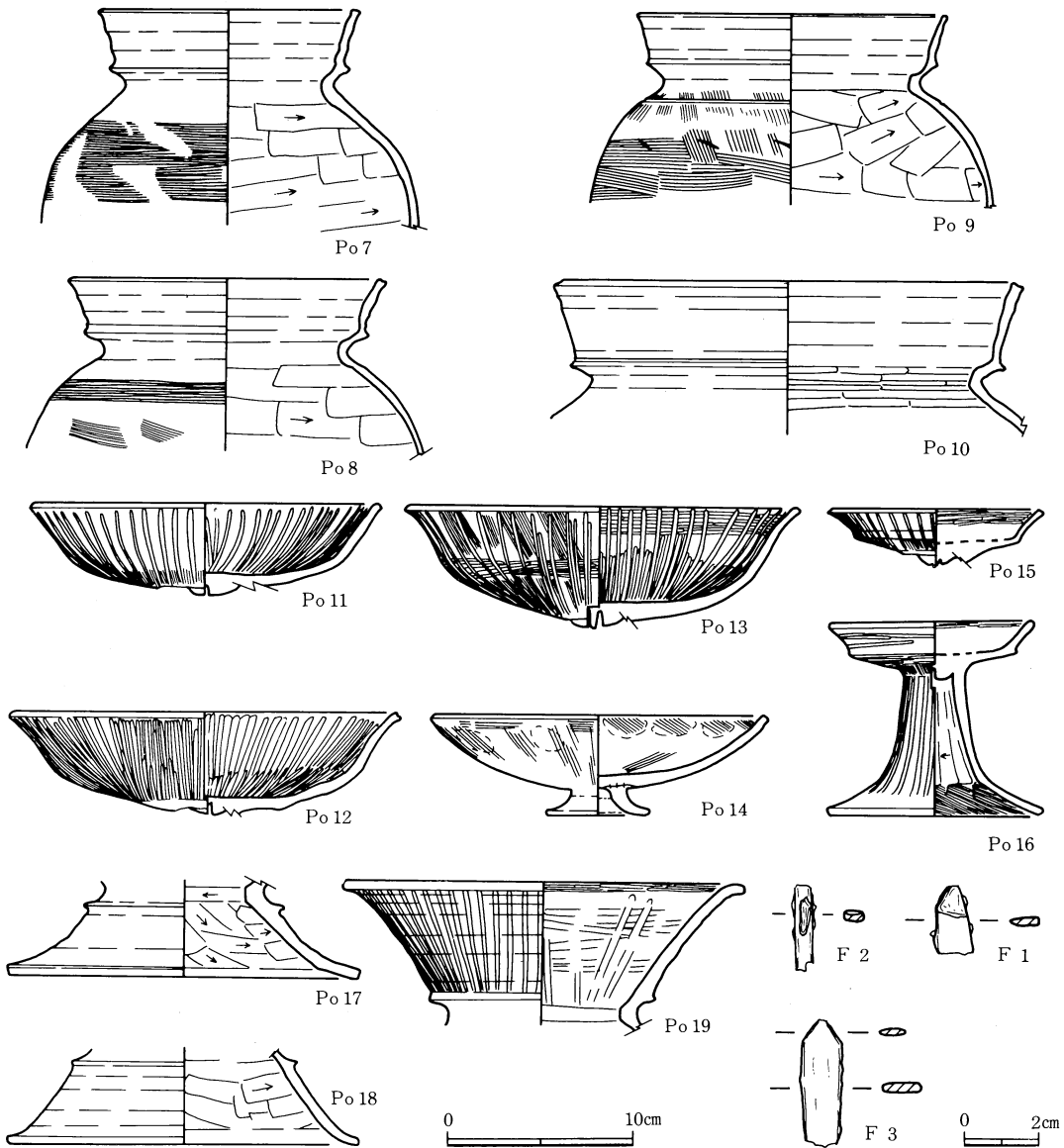


b L = 5.90m



0 2m

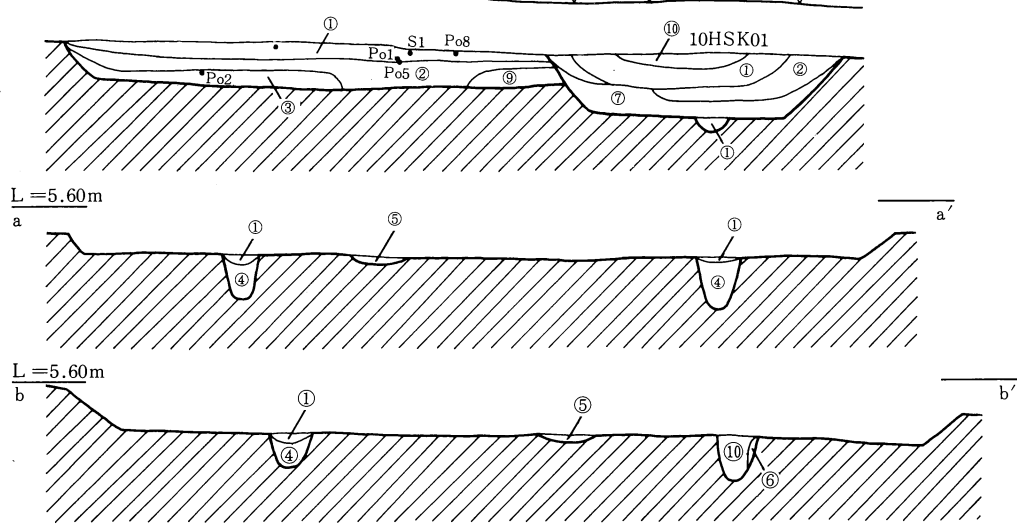
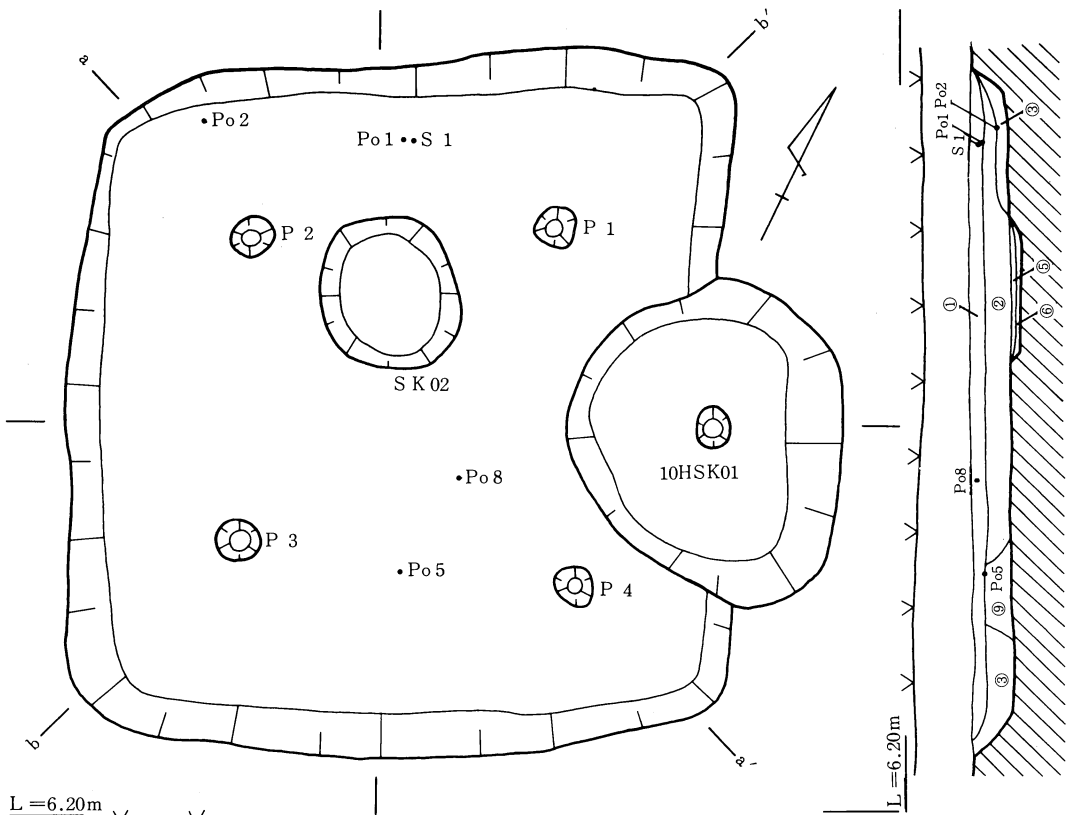
挿図255 S I 124遺構図 (S = 1/80)



挿図256 S I 124遺物図その2 (土器S = 1/4、鉄S = 1/2)

S I 125, 10H S K 01 (挿図257~261, 図版59・73)

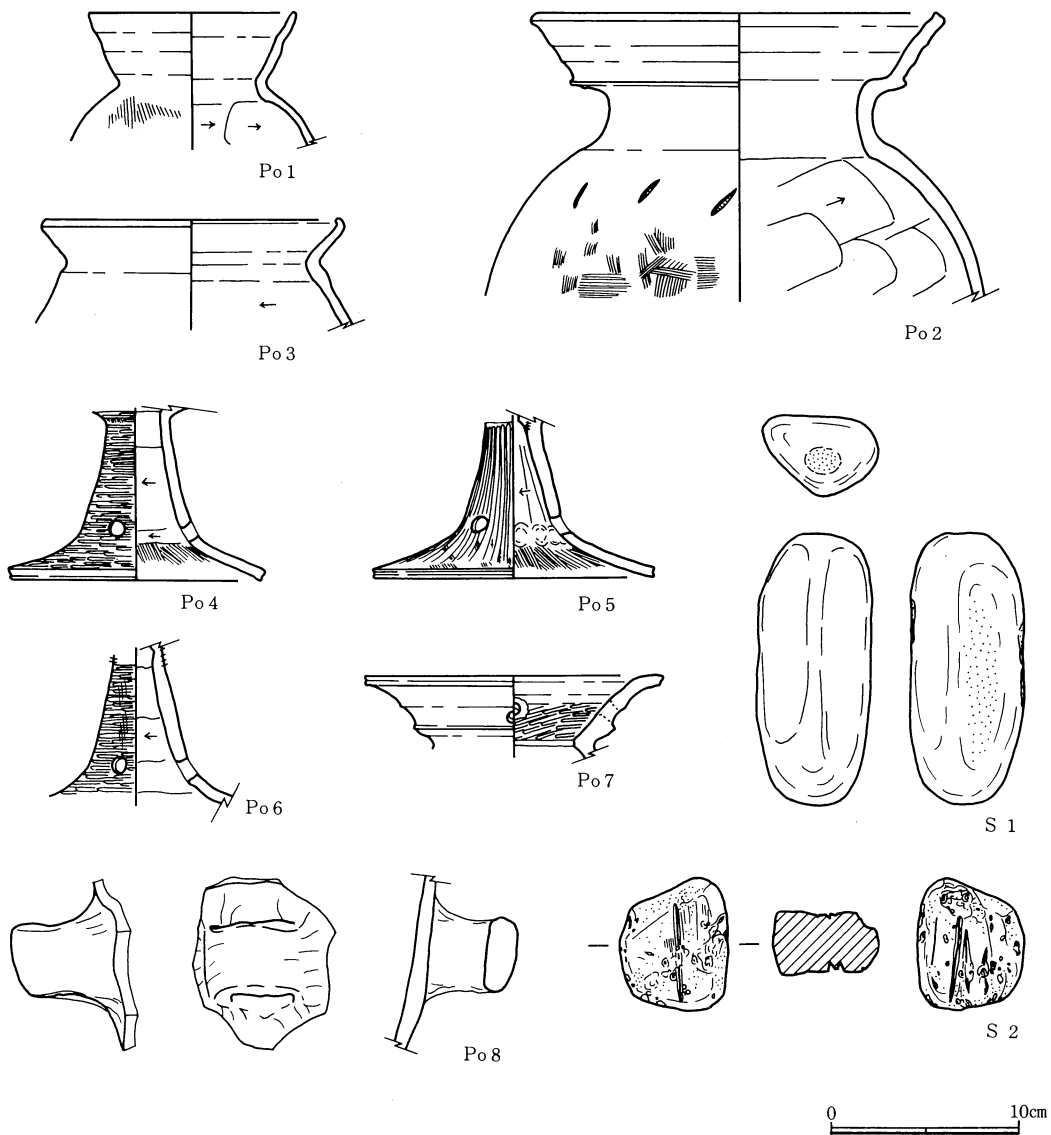
11H地区の北東区にあり、5号墳の南東、S I 124の東に位置する。10H S K 01に東側を切られる。上層でS I 125より新しい箱式石棺墓S X 69を検出している。S I 125の平面形は方形を呈し、床面の大きさは長辺6.5、短辺6.2mを測り、主軸はN-25°-Wである。床面積は約40.3m²を測る。壁高は南西側で43cm、北西側で19cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で4個検出し、P 1~4の4個とも柱穴である。プランはP 1 (45×42-52), P 2 (45×45-50), P 3 (47×44-37), P 4 (45×40-56) cmを測る。柱穴間距離はP 1-P 2間から、3.2, 3.2, 3.6, 3.8mを測る。床面中央よりやや北寄りにS K 02がある。



- ① 褐色砂
- ② 淡褐色砂
- ③ 淡茶褐色砂
(茶の斑点混入)
- ④ 薄褐色砂
- ⑤ 黒褐色砂
- ⑥ 黄灰色砂
- ⑦ 黄茶褐色砂
(茶の斑点混入)
- ⑧ 淡黄茶褐色砂
- ⑨ 淡茶褐色砂
- ⑩ 黄褐色砂



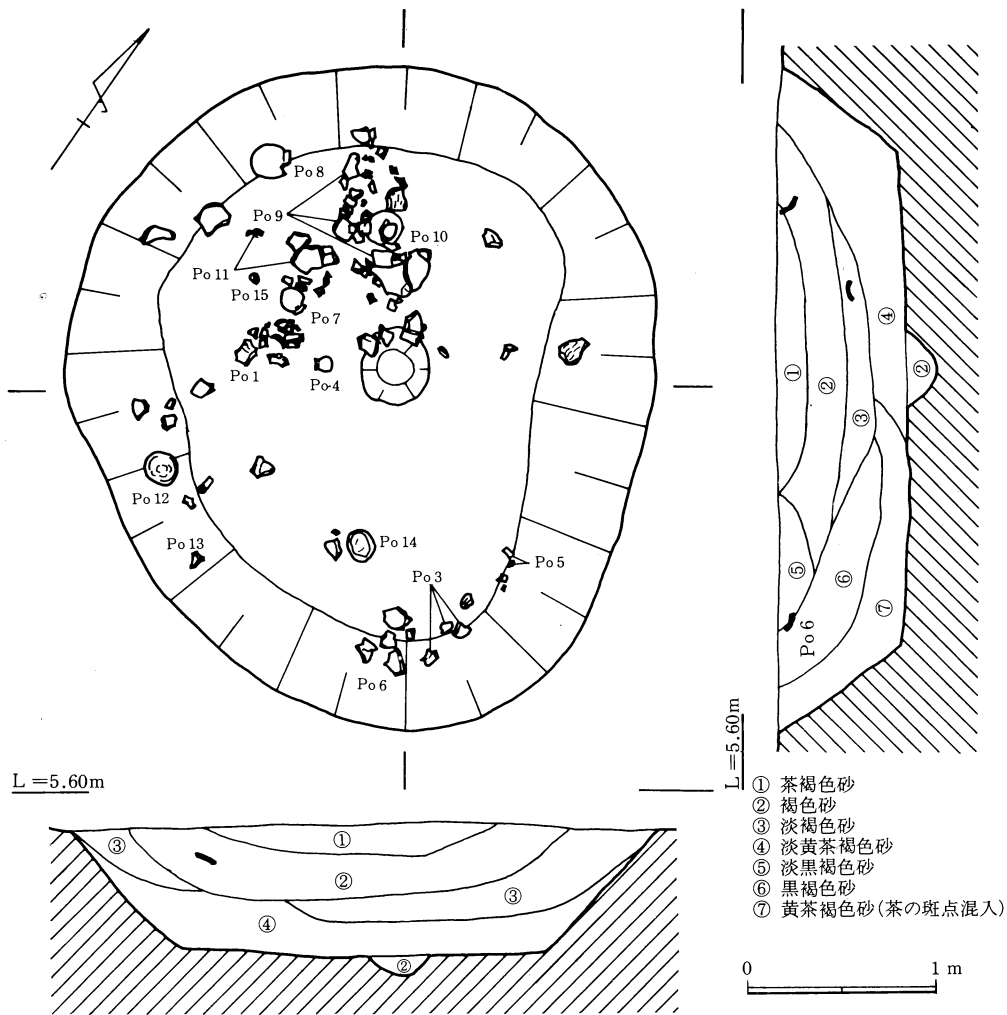
挿図257 S I 125遺構図 (S = 1 / 80)



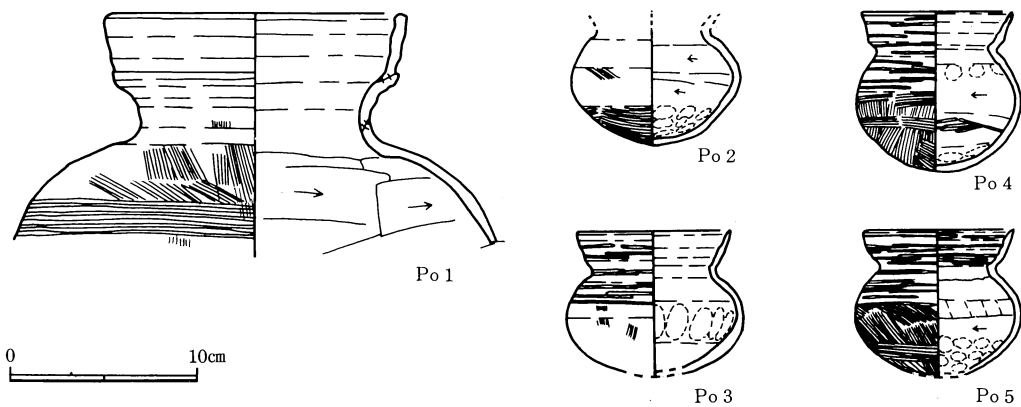
挿図258 S I 125遺物図 (S = 1/4)

S K02はS I 125に伴うものと思われる。時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。

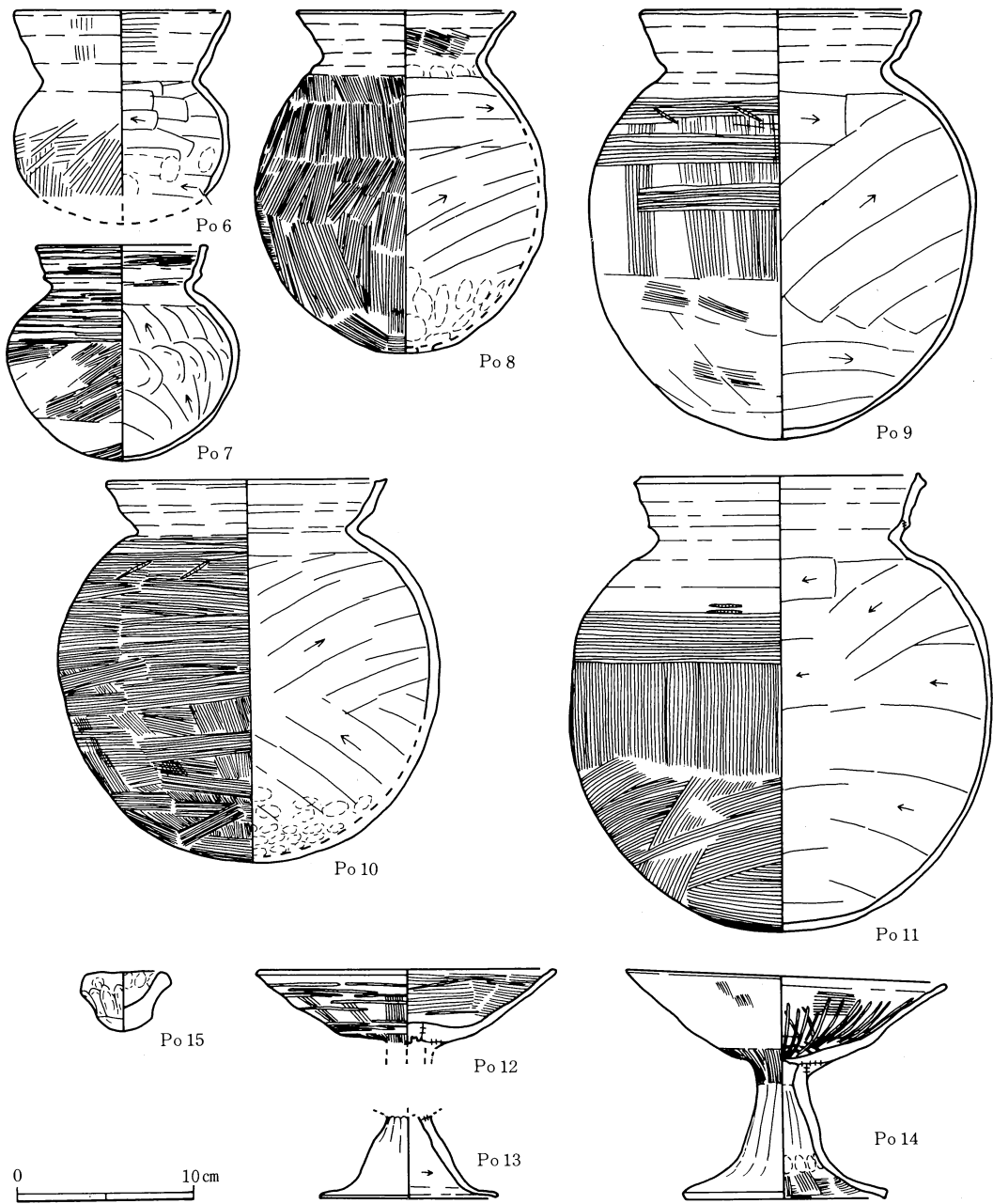
10H S K01は10H地区の北西にあり、S I 125の東側と切り合う。新旧関係はS I 125より新しい。平面形はほぼ卵形で、北が広く南が狭い。上縁部で長軸3.6、短軸3.2、深さ0.7mを測る。底面は不規則な卵形で、長軸2.6、短軸2.0mを測る。中央部に38×42-17cmのピットがある。遺溝の性格ははっきりしないが、S I 125と関係があるようにも思える。遺物は、多くの土師器の他、手捏ね土器 (Po15)、桃の種等を検出した。時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考えられる。



挿図259 10H S K 01遺構図 (S = 1 / 40)



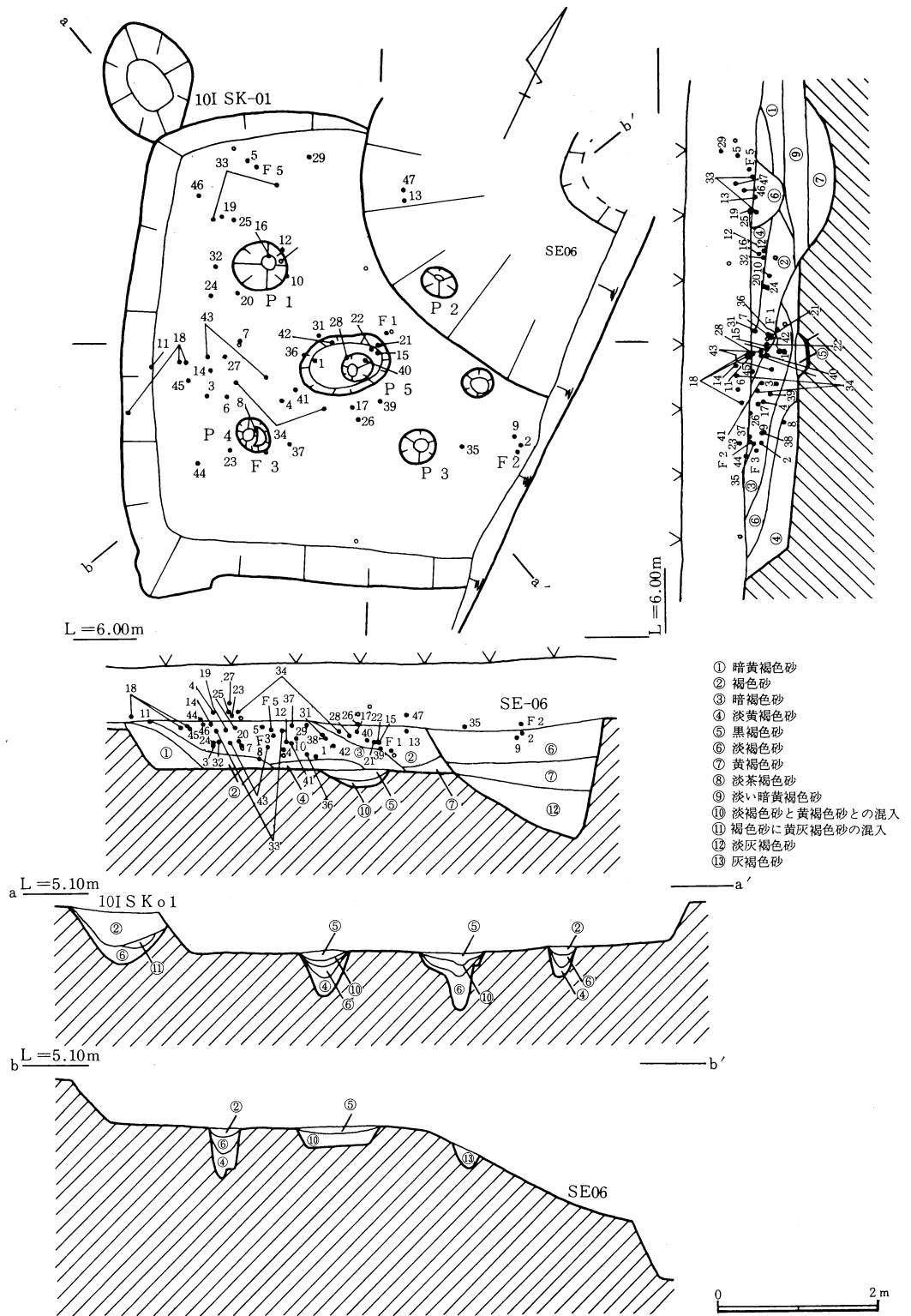
挿図260 10H S K 01遺物図その1 (S = 1 / 4)



挿図261 10H S K 01遺物図その2 (S = 1/4)

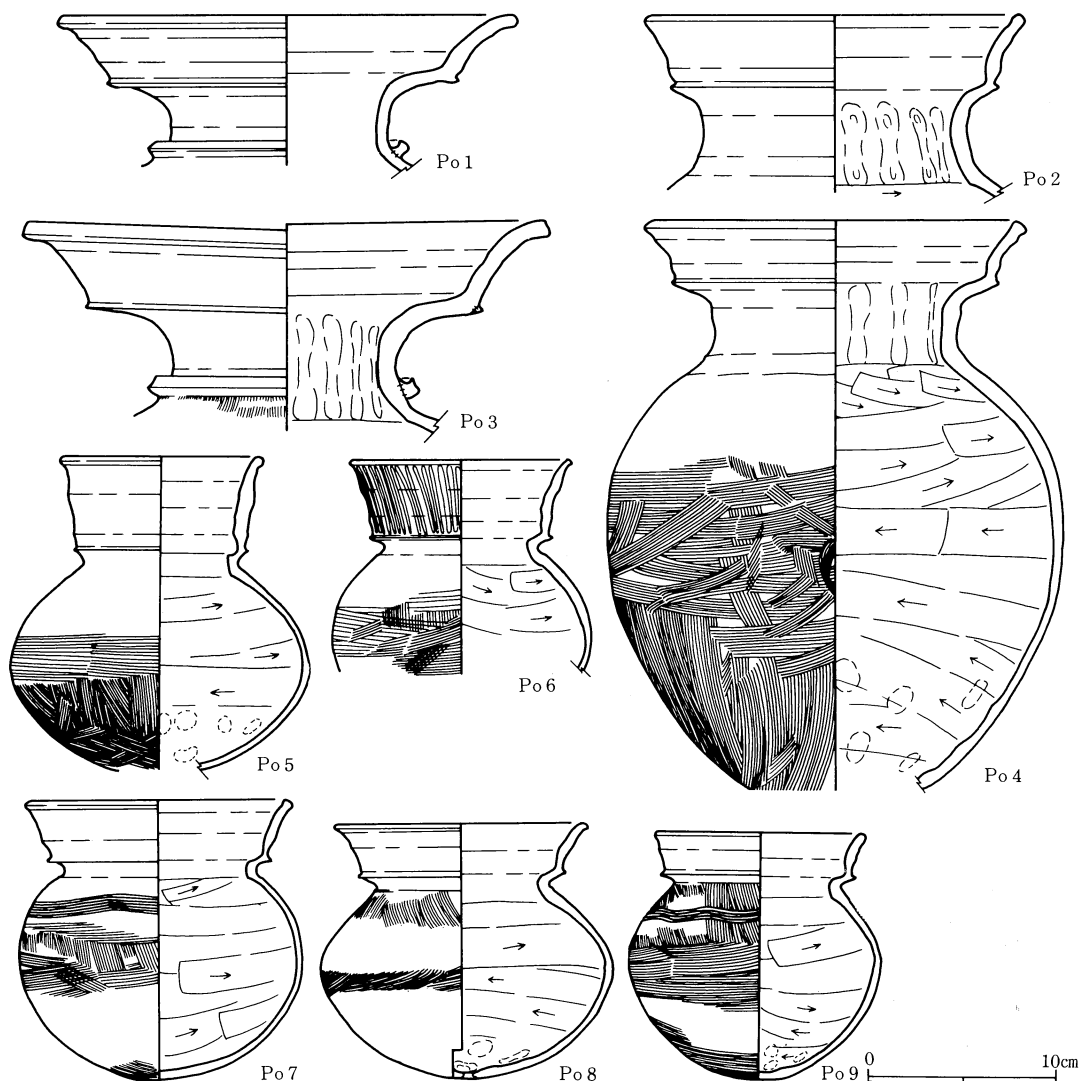
S I 126 (挿図262~267, 図版60・74・75)

9 I 地区の南西側で検出し、一部10 I 地区にかかる。地形は南側から北側のS E 06にかけてゆるやかに傾斜している。周辺には北側にS I 123, 西側にS I 127・138がある。切り合いは西側のS B 29・北側のS E 06との間に認められるが、新旧関係はS B 29→S I 126→S E 06である。東側は調査区域外のため全体を調査することができなかったが、平

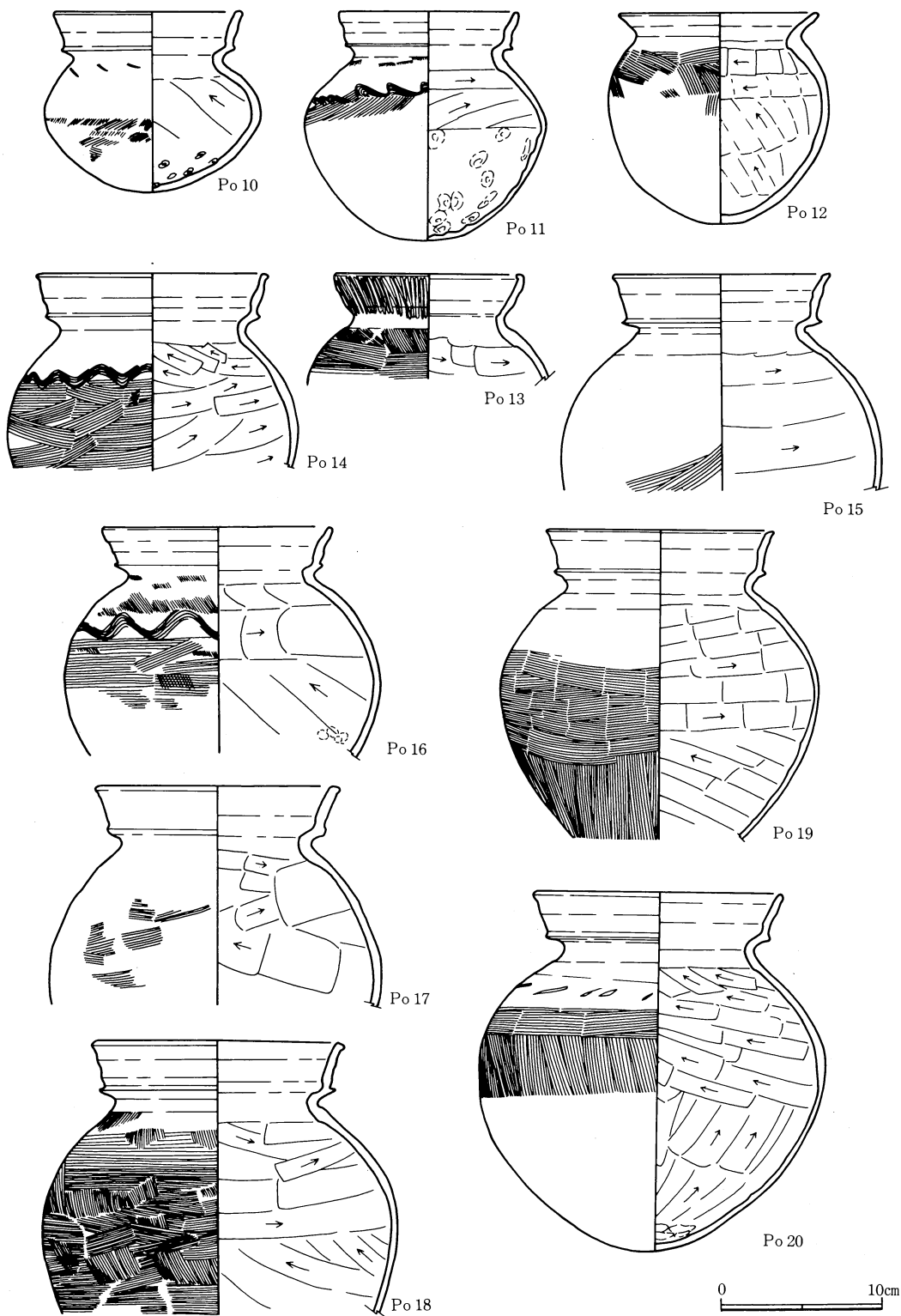


挿図262 S I 126遺構図 (S = 1/80)

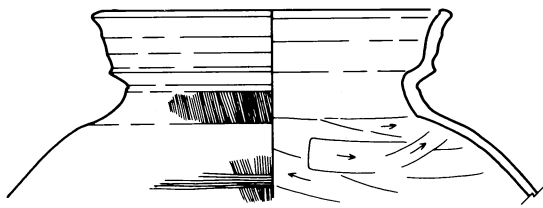
面形は方形で4本柱の竪穴住居跡であろう。主軸はN-25°-Wを振り,長辺4.80mを測る。床面積は不明。壁高は南西側で最大値70cmを測る。ピットは床面で5個, S E 06の斜面で1個検出したが, 構造柱はP 1 (69×59-52), P 2 (45×36-37), P 3 (42×43-39), P 4 (47×39-55) cmでP 4からは(22×18-10) cmの柱痕を検出した。柱穴間距離はP 1より順に, 2.16, 2.12, 2.15, 2.15mを測る。P 5 (113×73-76) cmはS I 126の中央に位置し, ピット内から長さ25cm大の丸石が出土していることから特殊ピットと思われる。またP 6の上面より淡赤色砂が検出されたが焼砂ではないようだ。遺物には多くの土師器, 釣針(F 1), 刀子(F 5), 剣先型鉄製品(F 4), 鎌がある。尚, S I 126の上方より石囲い遺構(本書P 296参照)を検出しているが, S I 126とは関係しないと思われる。時期は遺物より長瀬Ⅱ期と考える。



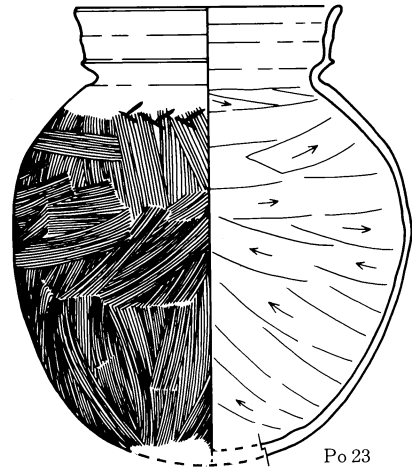
挿図263 S I 126遺物図その1 (S = 1/4)



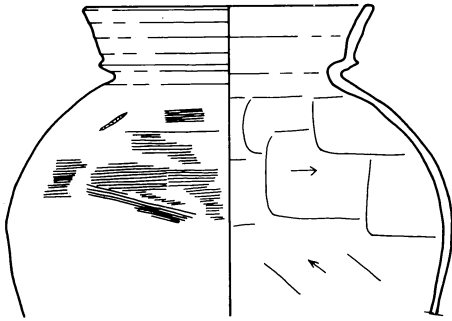
挿図264 S I 126遺物図その2 (S=1/4)



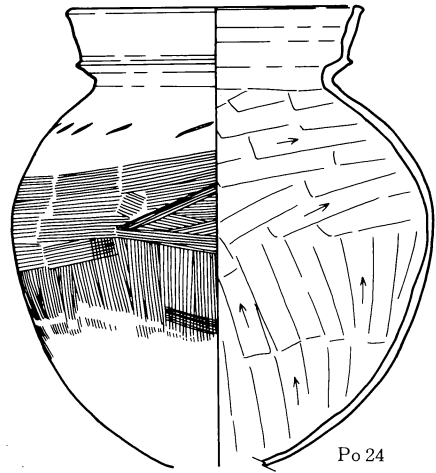
Po 21



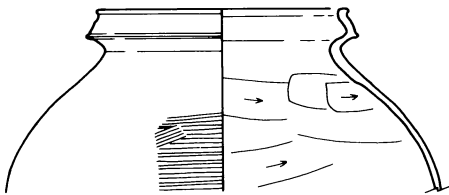
Po 23



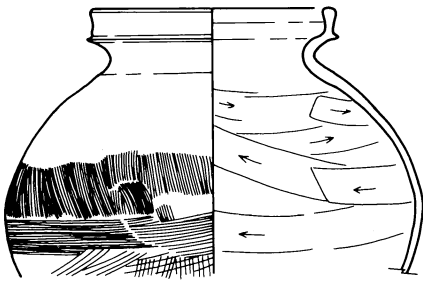
Po 22



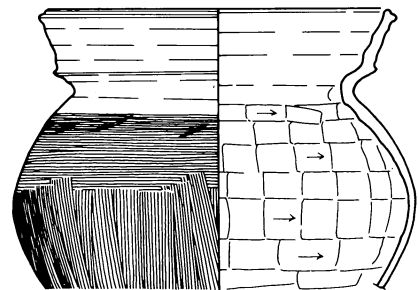
Po 24



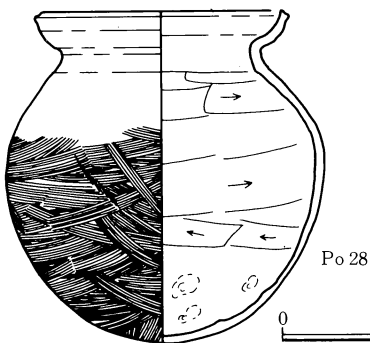
Po 26



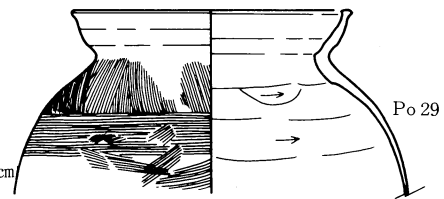
Po 27



Po 25



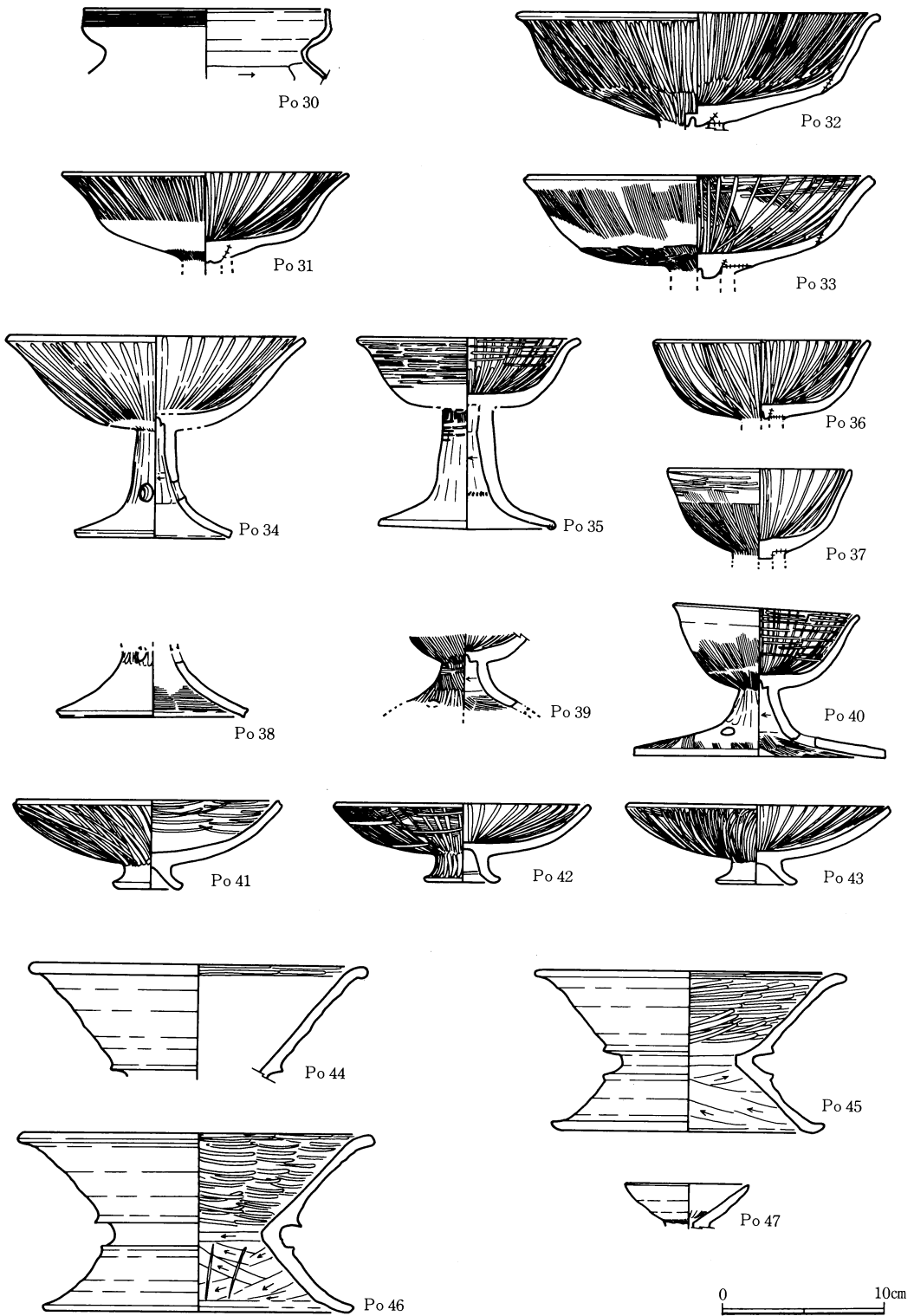
Po 28



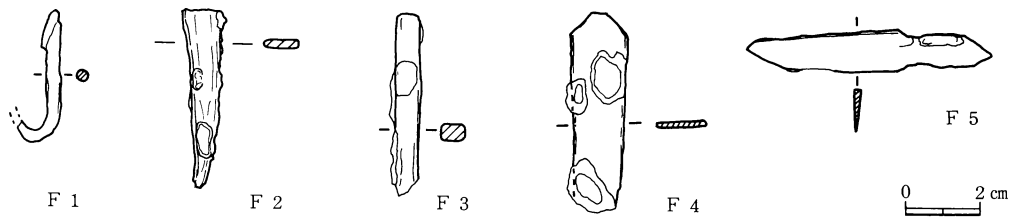
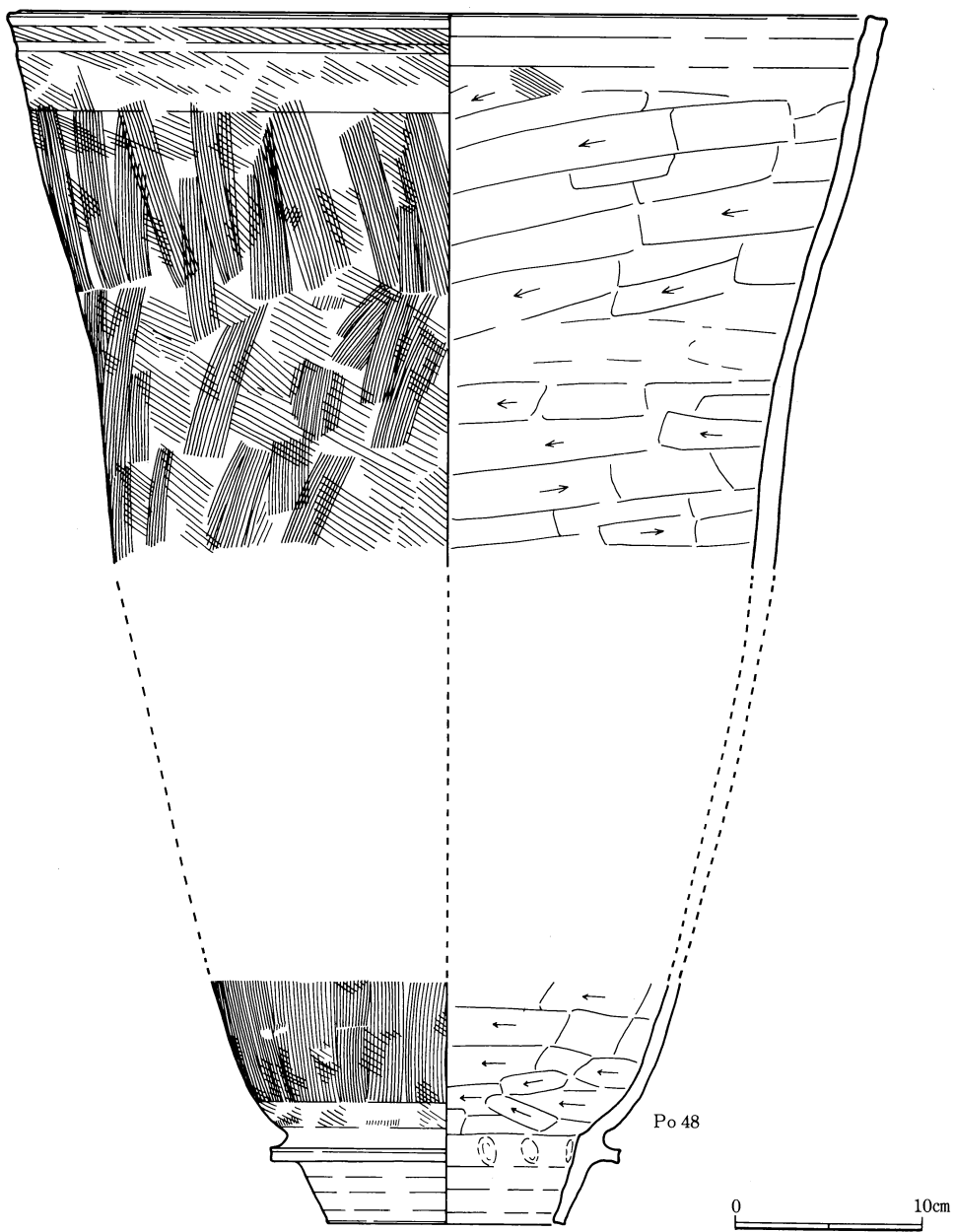
Po 29

0 10cm

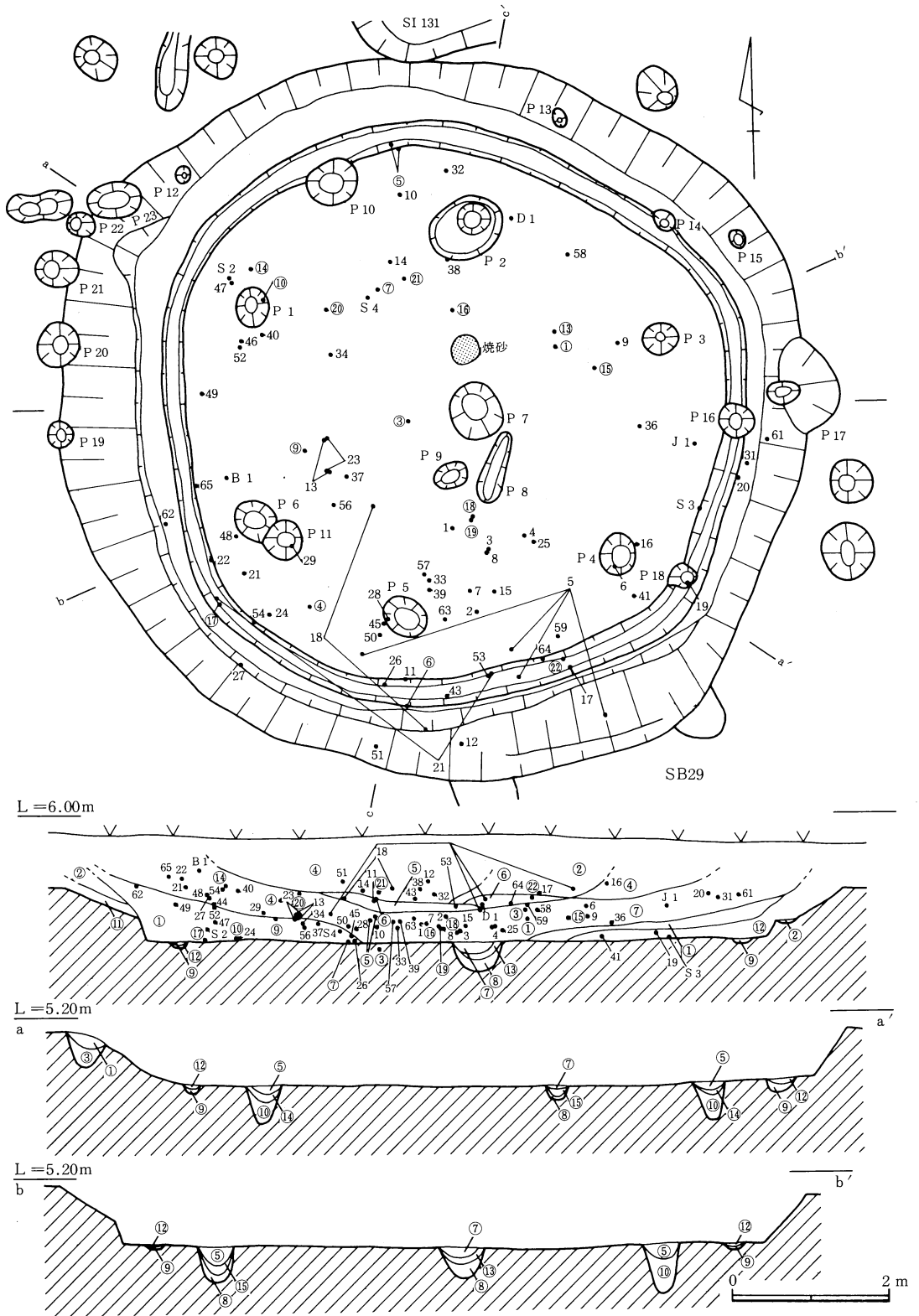
挿図265 S I 126遺物図その3 (S = 1/4)



挿図226 挿図266 S I 126遺物図その4 (S = 1/4)



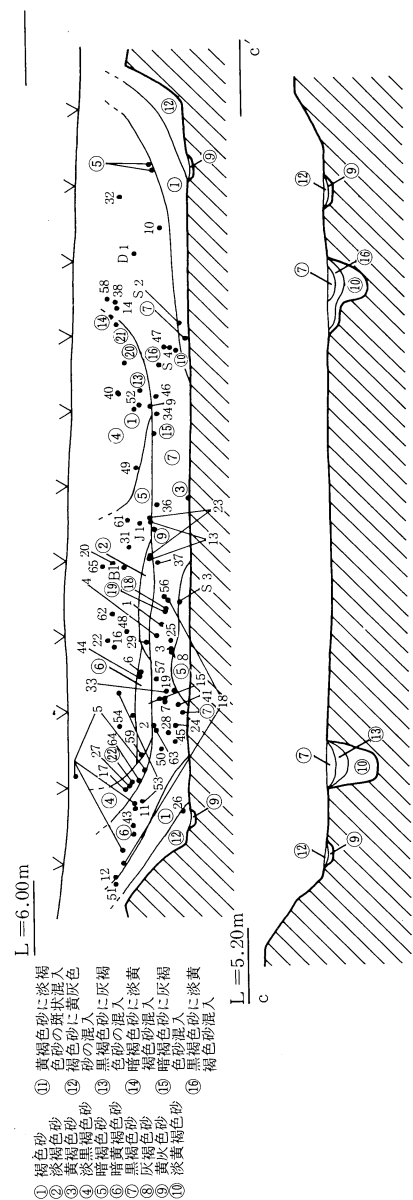
挿図267 S I 126遺物図その5 (土器S = 1/4、鉄S = 1/2)



挿図268 S 1127遺構図その1 (S = 1/80)

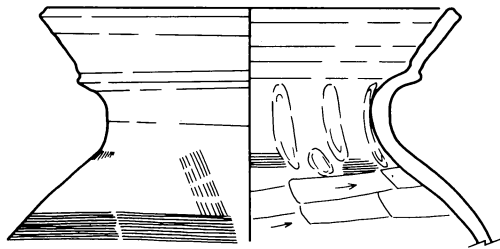
S I 127 (挿図268~277, 図版60・74・75)

10 I 地区のほぼ中央部に位置し, S B40の東, 75号墳の北, S E06の西, 71号墳の南に当る。切り合いはS I 131・S B29との間に認められ, S I 127はS I 131より古く, S B29より新しい時期に建てられたと考える。規模は長軸9.4m (東西), 短軸9.1m (南北), 最大壁高0.72m (南西側) 最小壁高0.70m (東側) を測る。床面積は49.7^{注1}m²と広く当遺跡ではS I 13・29に次ぐ大規模な住居跡である。プランは六角形であるが, 上面は円形に近い。構造柱跡はP 1~6の6本で, 規模はP 1 (50×45-68), P 3 (46×44-61), P 4 (53×44-50), P 5 (56×52-55), P 6 (52×49-48) cmで, P 2には(94×80-9) cmの掘り込み内に(44×40-31) cmの柱痕が認められた。床面には壁際に側溝(幅35~24, 深さ16~8 cm)が巡っていて, その所々にピット状のおちこみがみられる。側溝を持つ住居跡は当遺跡では珍しく, かつそれが完全な状態で検出されたのはS I 25に次いで2例目である。また6本柱の住居跡としてはS I 113(弥生前期中~後葉), S I 117(古墳中期初頭)について3例目になる。床面の中央部には3個の特殊ピットがあって, P 7の北隣りには焼砂が認められた。また北側の側壁には床面より30~10cmの高さの所に壁面に直角に掘り込んだ小さなピットが4個ある。深さは最大20cmで, 補助柱跡とするには問題があるが, 場所的にみてS I 127に伴うものと思われる。周辺には特にS B40との間に多くのピットがあるが, S I 127との関係は不明である。

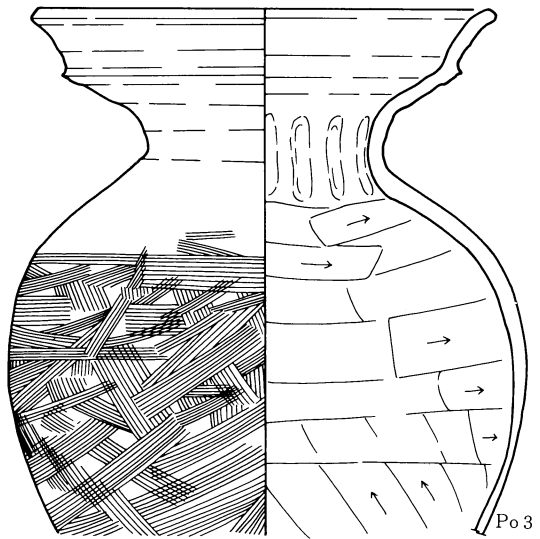


挿図269 S I 127遺構図その2 (S = 1/80)

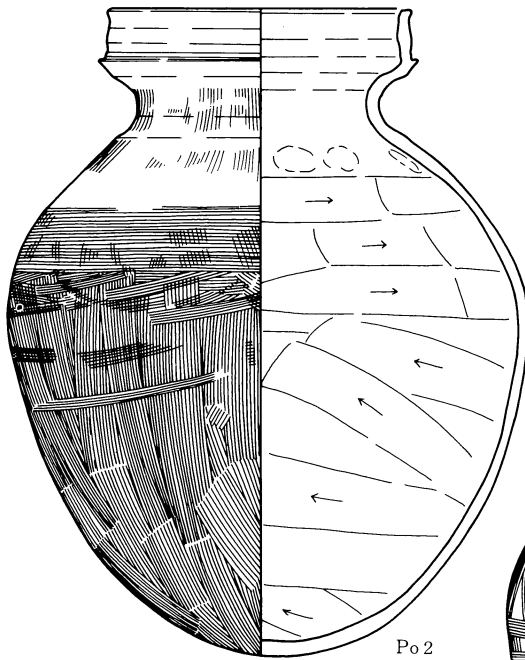
遺物は厚く堆積した黒褐色砂層内より多数出土しているが, それは質・量ともに他の竪穴住居跡とは大いに異なる。遺物の分布状況は南側の高坏・小型丸底壺群を除くと, 他はほぼ同心円状であり, 竪穴の埋没が穏やかだった事を推定させる。手捏ね土器 (P o64・65), 傘形土製品 (D 1), 石のみ (S 2) といった遺物があるが, 鉄器は比較的残りもよく多数出土し図化できるものだけでも鉈4点, 刀子4点, 鎌2点, 剣先型鉄製品3点を数



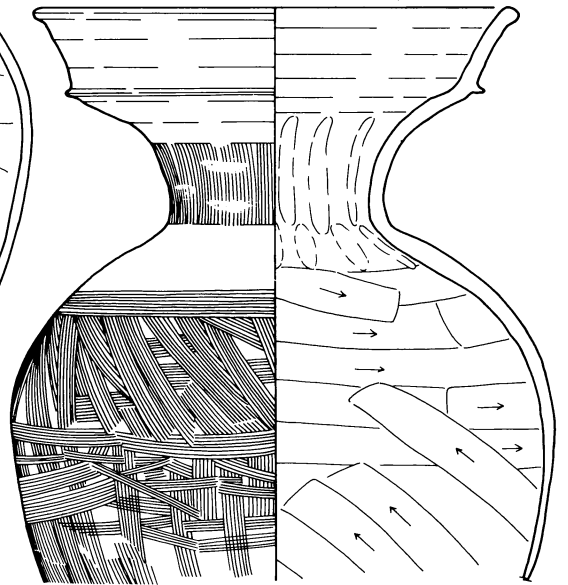
Po1



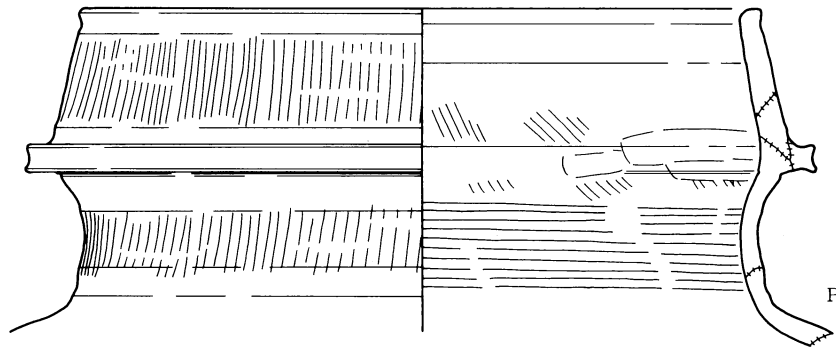
Po3



Po2

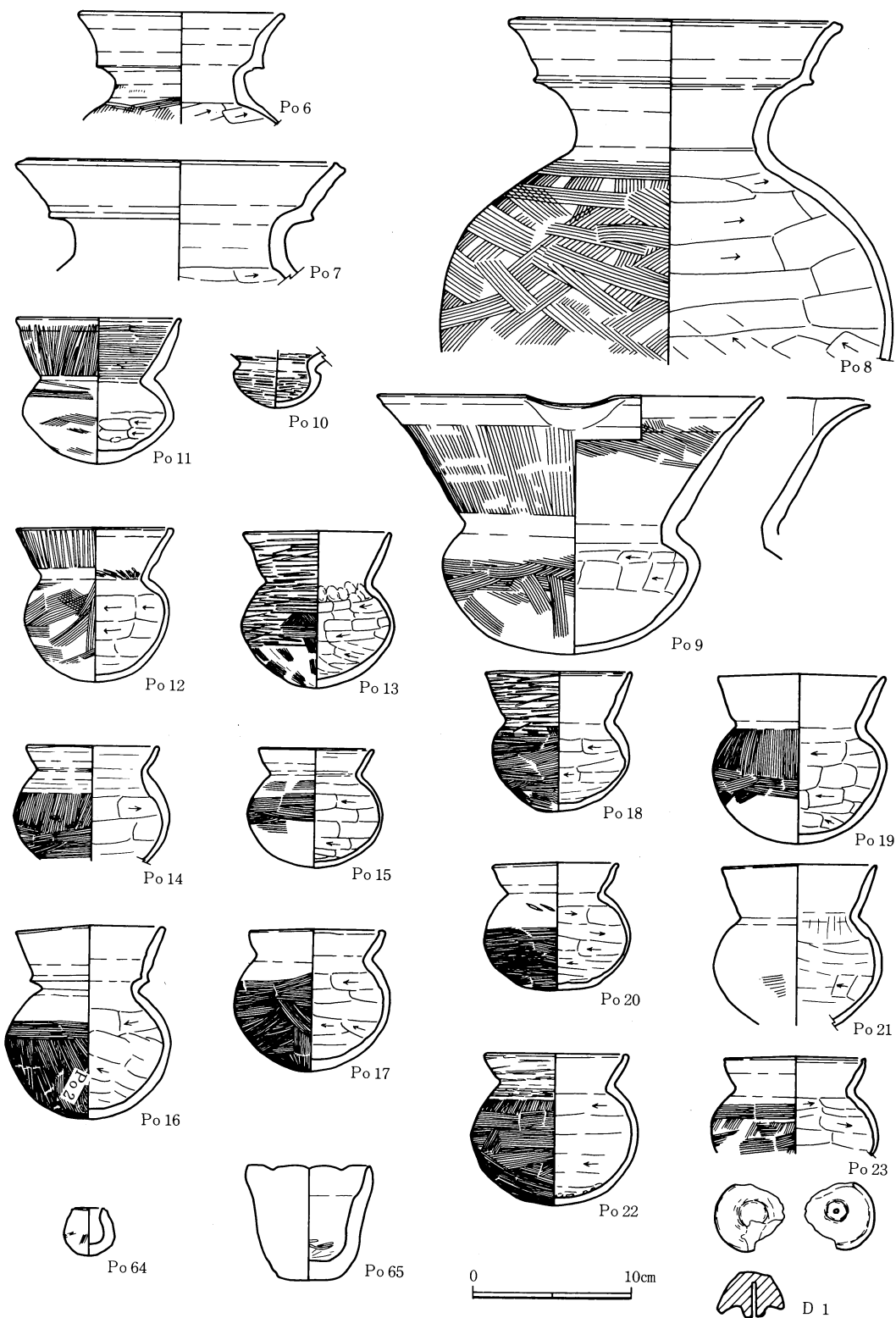


Po4

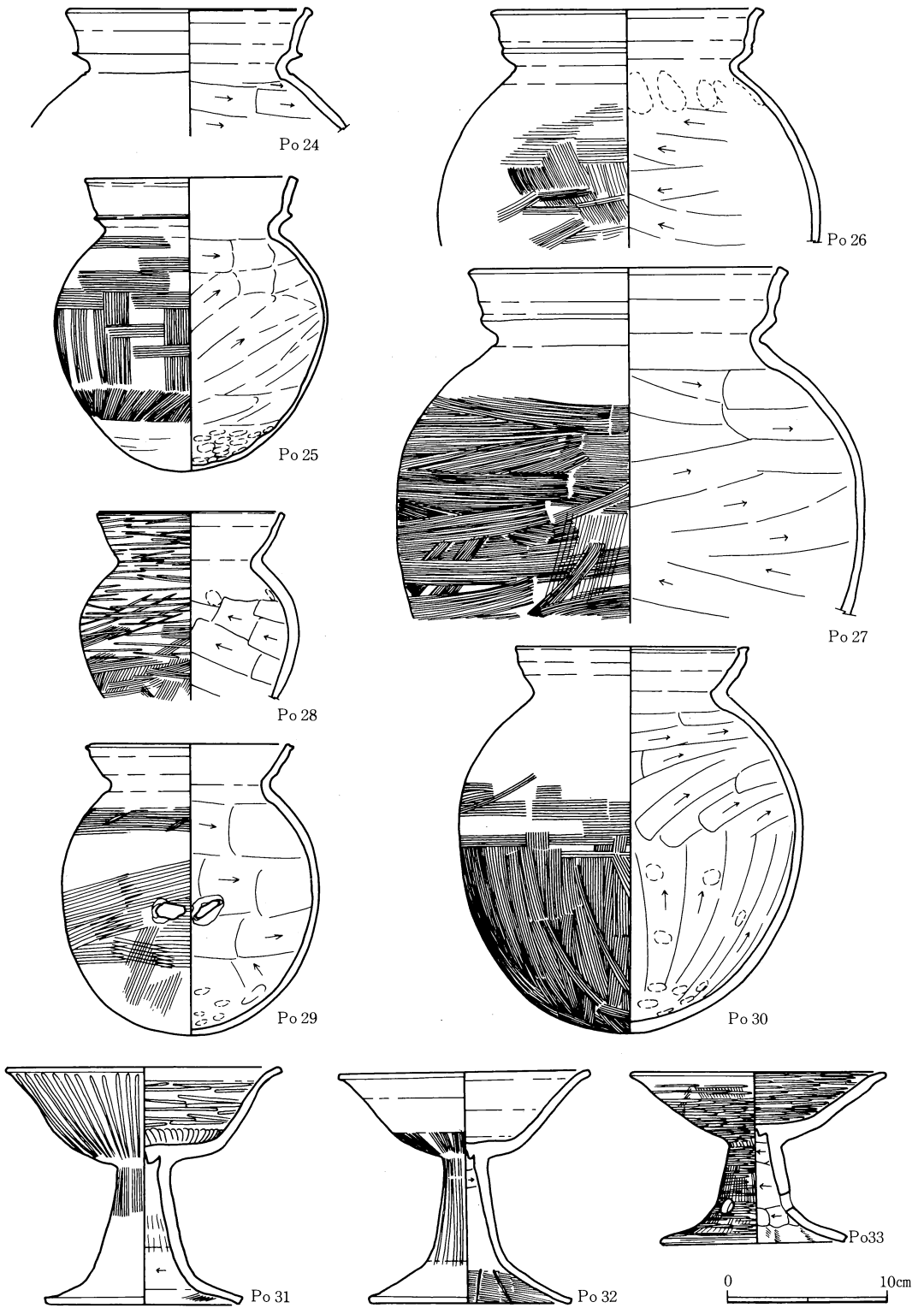


Po5

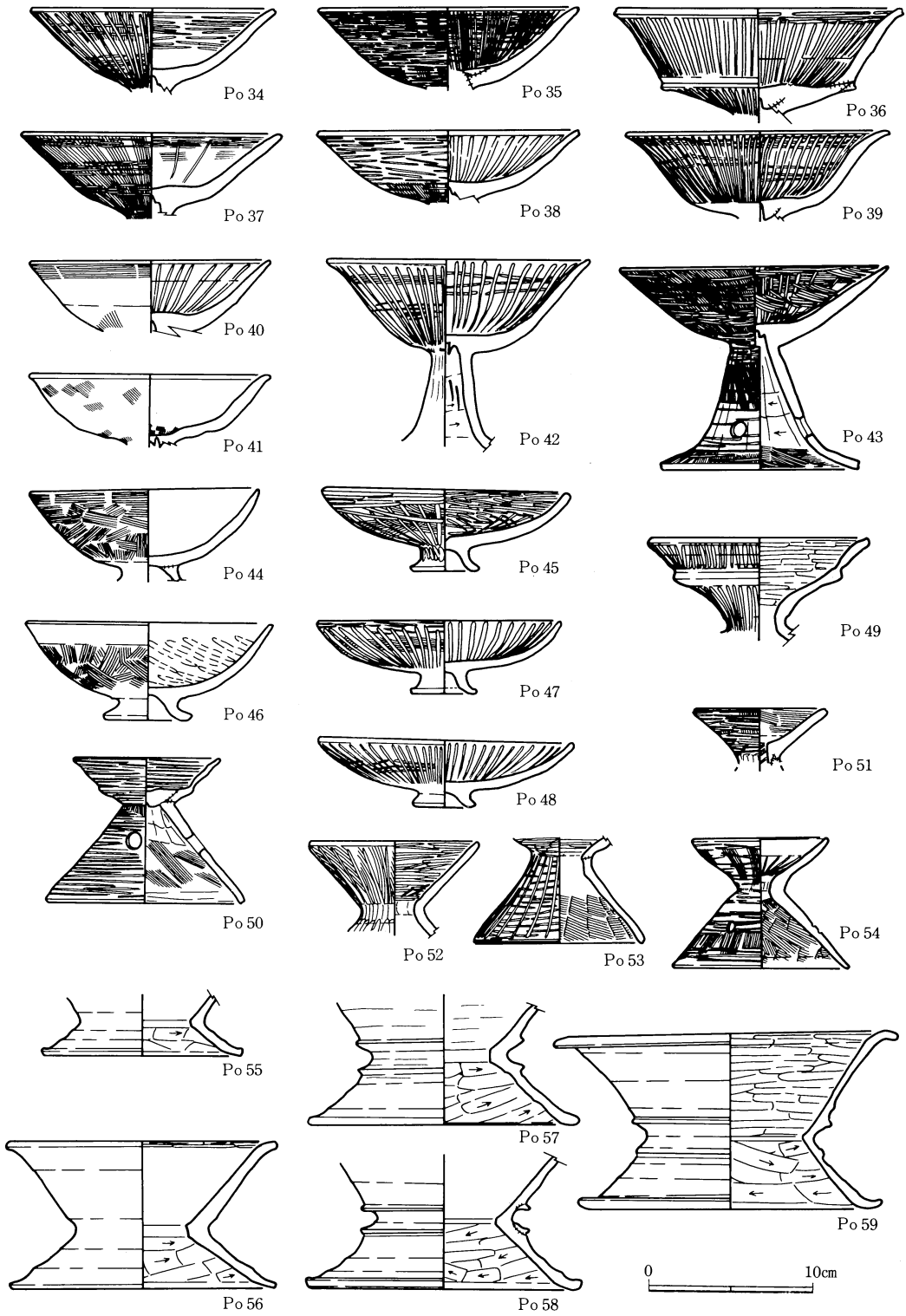
挿図270 S I 127遺物図その1 (S = 1/4)



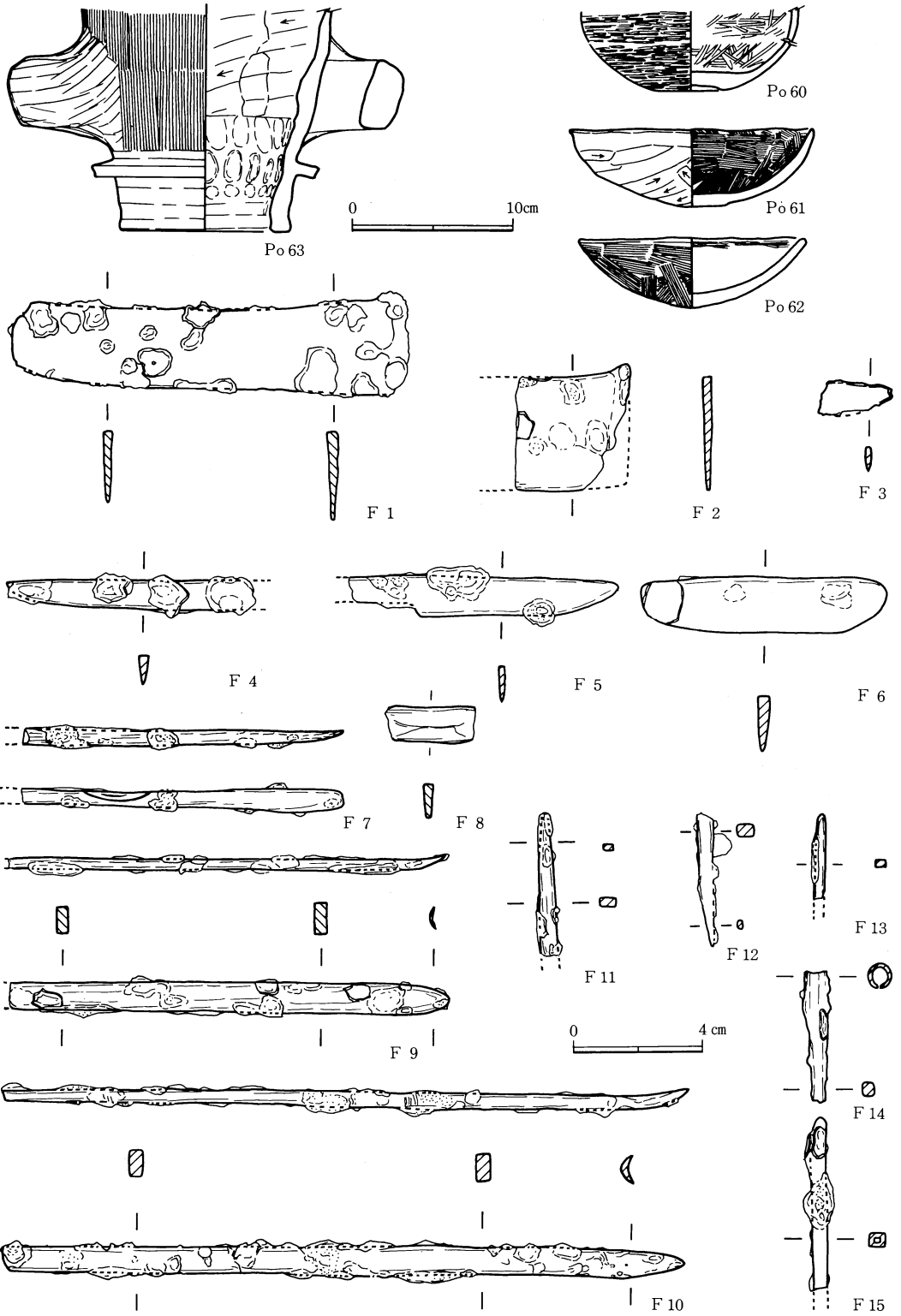
挿図271 S I 127遺物図その2 (S = 1/4)



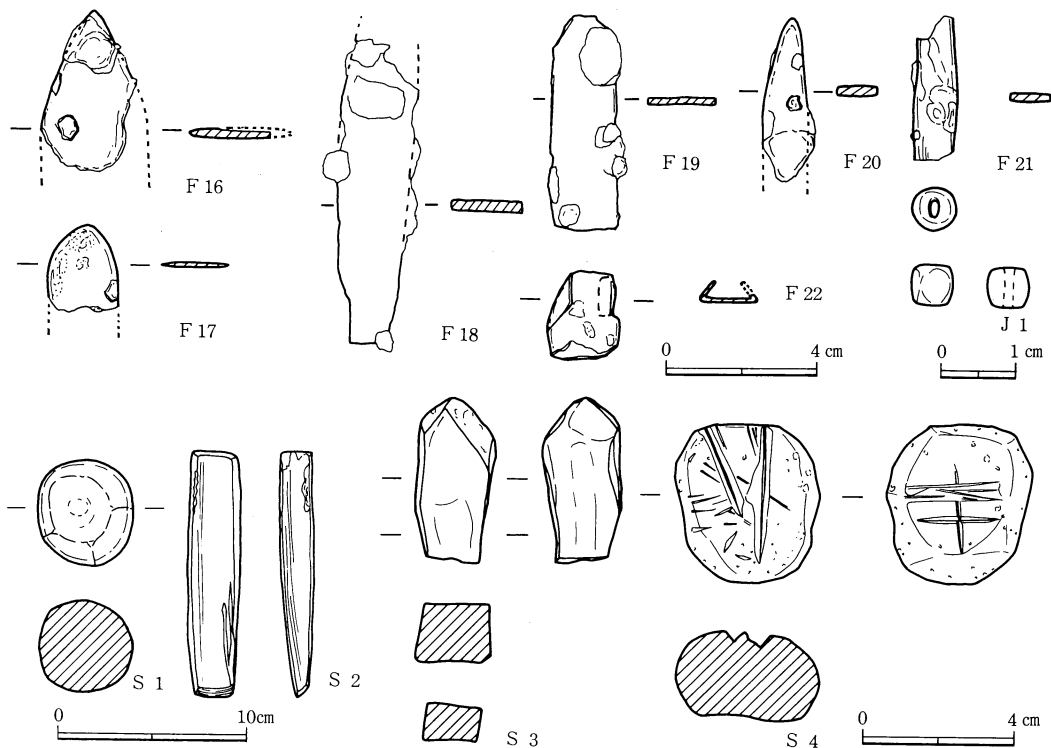
挿図272 S I 127遺物図その3 (S = 1/4)



挿図273 S 1127遺物図その4 (S = 1/4)



挿図274 S I 127遺物図その5 (土器S = 1/4、鉄S = 1/2)

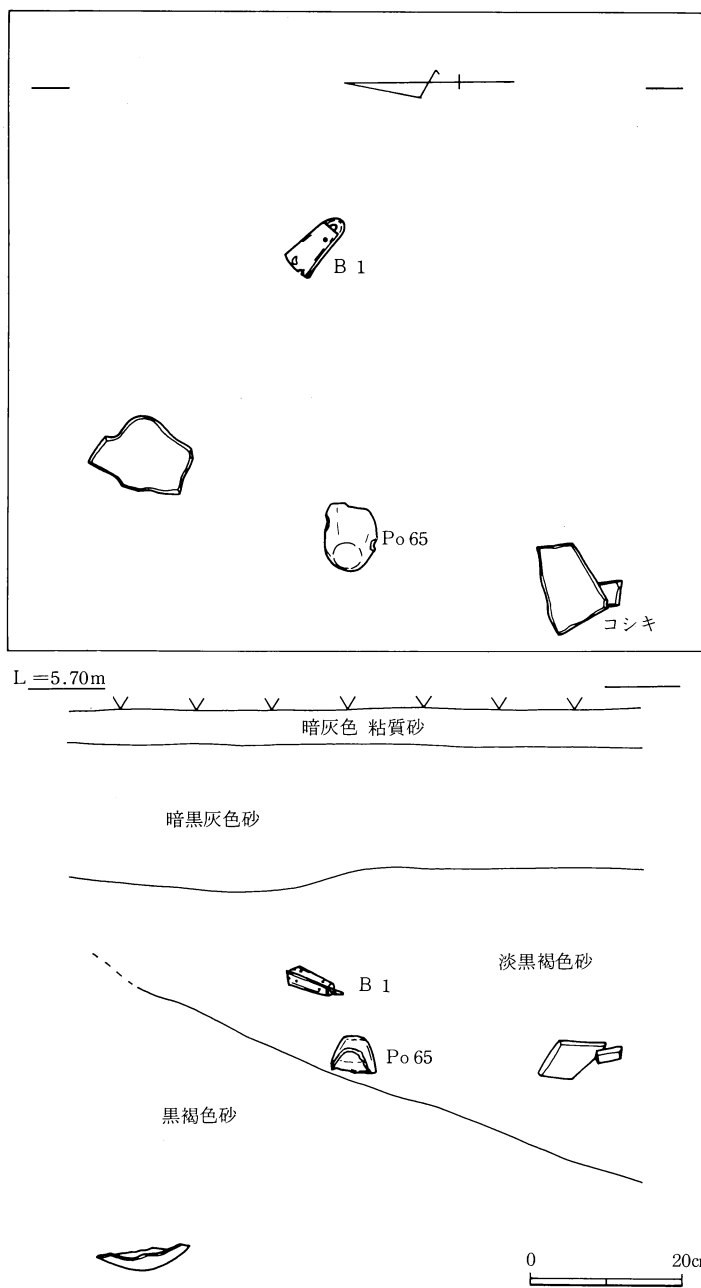


挿図275 S I 127遺作図その6 (鉄S = 1/2、玉S = 1/1、石S = 1/2・1/4)

える。時期は床面直上のP o 19・24・26・41・45等より長瀬Ⅱ期と考える。

S I 127の調査開始前その上面より小銅鐸が出土している。出土位置は10 I 地区のほぼ中央部であり、平面的に言えばこのS I 127のP 6の68cm北西にあたる。出土位置の高さはS I 127の床面から98cm上、S I 127の平面プラン検出面からは28cm上方、地表面から黒砂層を35cmほりさげた淡黒褐色砂層中より出土している。出土状況は紐部に渦巻文様のよく残っている方を上にし、紐部を南東側にして低く、舞部を北西側にして高くした状態であった。鱗部も北東側が低く南西側が若干高い。掘り方等の遺構・伴出遺物を持たず、埋納という状況とは異なるようだ。周辺には土師器片が散在するが図化できたのは手づくね土器(P o 65)のみである。一般に小銅鐸は銅鐸と比べ集落内出土が多く、今回も上面ではあるがS I 127というこの辺りでは中心的な竪穴住居跡より出土している。しかし、この小銅鐸はS I 127が完全に埋没する直前の埋砂(淡黒褐色砂)に包含されている事から考えて、一概にS I 127と結びつけることはできない。とはいえ、これの紐部の中央部の磨滅が著しい事は、それが集落内で長期間使用された事を物語る。おそらく村落全体の祭祀用具として長期間に渡り使用されS I 127埋没後、かの地に置かれた、あるいは捨てられ人々の記憶から消されていったものと思われる。

全長8.8，鐸部高6.5，鈕部高2.3cm，重量約140gを測る。鐸身の断面は銀杏形で舞部は長軸3.3，短軸2.4，裾部は長軸5.7，短軸4.0cmである。鈕は，中央部の磨滅が著しく鈕孔が欠けており，鈕紐をかけた際の磨滅かと思われる。文様は鈕部分のみに認められ，文様の明瞭な面（A面）では外縁に連続渦卷文，内縁にS字状渦卷文が施されている。B面は微に渦卷文様の痕跡がみられるだけだが，A面の文様の逆とみられる。菱環は隆起をもつが文様帯を有さない。鈕の厚さは1～3mmである。鐸部は鈕に連なる形で鑄出され，鐸身とともにやや内反りする。きれいに研磨され厚さ2mmで均一である。舞部は中央に5×3.5mmの長方形の型持孔があり，鑄型合わせの際のハリ状凸起が残る。舞部の紐線を中心とした両側はややへこんでおり，鑄型が石型であったかと思われる。鐸身全体の1/3高位に片面について左右1個ずつの孔が計4孔ある。径約5mmの円形であるが鑄出しでは作れぬ正円形で内面が僅かに突出していることから，鑄造後外面から回転穿孔したものと考えられる。裾の両面左右に1個ずつの凹入が計4孔ある。また，A面鐸身下半に瓢箪形の孔があるが，これは鑄出しの際の湯まわりの悪さに起因している。



挿図276 銅鐸出土状況図 (S = 1/10)

舞部の紐線を中心とした両側はややへこんでおり，鑄型が石型であったかと思われる。鐸身全体の1/3高位に片面について左右1個ずつの孔が計4孔ある。径約5mmの円形であるが鑄出しでは作れぬ正円形で内面が僅かに突出していることから，鑄造後外面から回転穿孔したものと考えられる。裾の両面左右に1個ずつの凹入が計4孔ある。また，A面鐸身下半に瓢箪形の孔があるが，これは鑄出しの際の湯まわりの悪さに起因している。

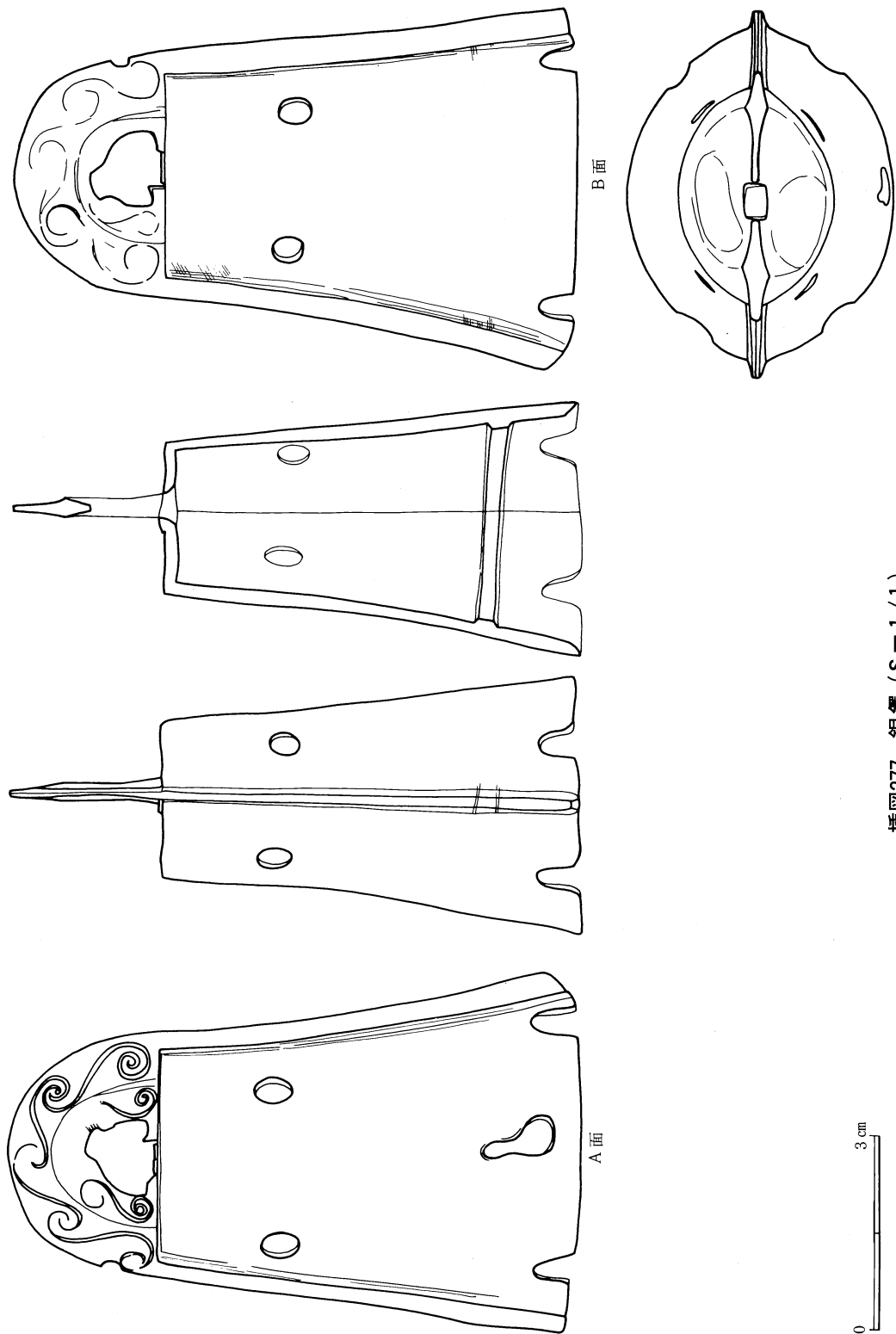


插图277 铜彝 (S=1/1)

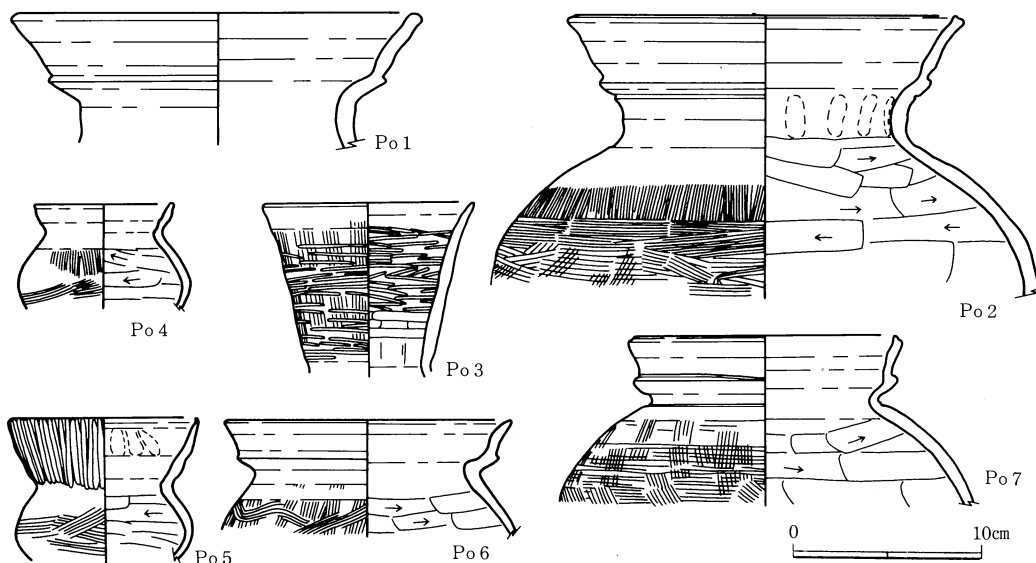
両側の鐸身と鑿部との境には縦方向の研磨の痕跡がみられる。厚みはA面左側（B面右側）部の方が僅か厚く、型のずれによるものと思われる。内面突帯は1条で幅2.5~3.0、厚さ1.0cmである。緑色錆は検出時下側になっていた側に認められ、表・裏面とも同様に錆びている。内面の砂を取り除いた際に単子葉植物と思われる繊維が1・2本残っていた。これは舌を下げた紐の一部ではなく、偶然に入りこんだものが鐸内で保存されたものと推定される。本銅鐸は型式的には、外縁付鈕Ⅰ式の範疇に含まれるものと考えられる。

S I 129（挿図278~281，図版60・77）・**S I 134**（挿図279・282，図版60）

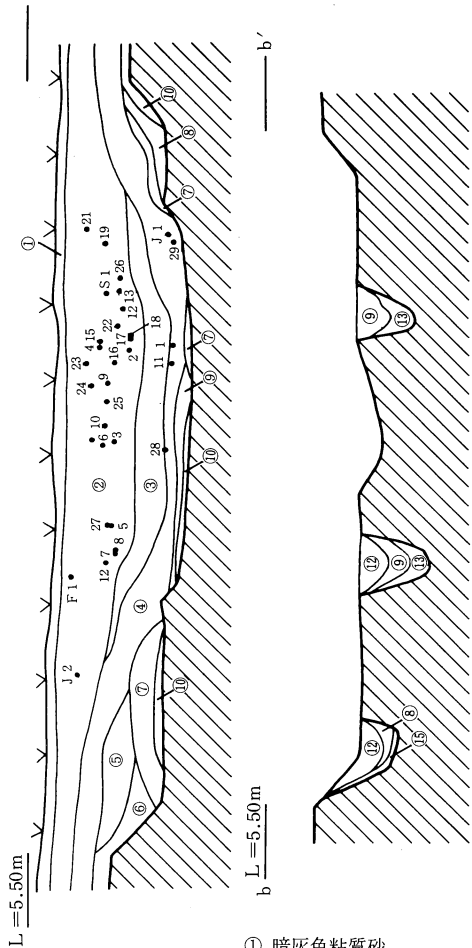
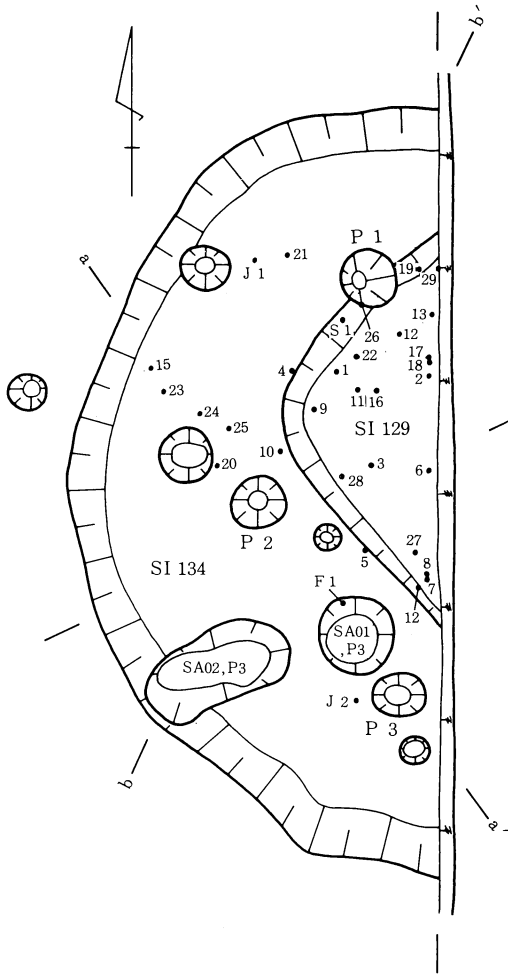
9 I 地区と9 J 地区にまたがり，S I 123の北東，71号墳・S I 133の東に位置する。S I 129はS I 134を切っている。東側は調査区域外のため全体を把握することができなかった。

S I 129は検出したコーナー部よりプランは隅丸方形で，構造柱跡が未調査区域にある2本柱の住居跡と思われる。壁高は西側で最大値29.8cm，北側で最小値16.3cmを測る。側溝はなく，ピットも検出できなかった。遺物は上層の黒褐色砂層中より土器が多出している。時期は長瀬Ⅲ期と考える。

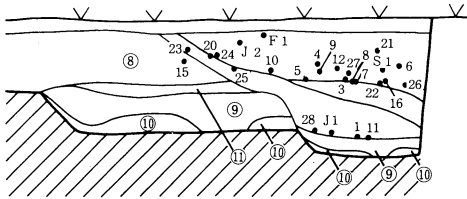
S I 134は平面形は円形に近い六角形で，P 1（55×45-68），P 2（60×54-73），P 3（64×58-58）cmを構造柱とする6本柱の住居跡と考える。柱穴間距離はP 1-P 2間より2.52，2.60mを測る。遺物は棒状鉄製品（F 1），床面直上より検出した勾玉（J 1），砥石（S 1）がある。尚，床面下でS I 134に切られた状態で検出した2ピットは9 I・9 J 地区にまたがる柵列（S A 01・02）の一部である。時期は遺構の切り合いより長瀬Ⅱ期と考える。



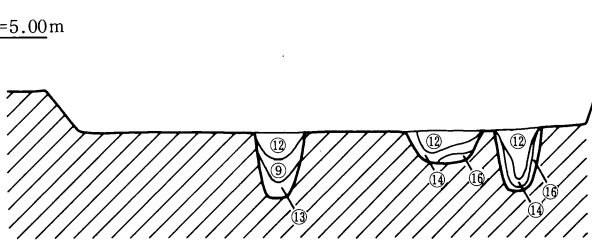
挿図278 S I 129遺物図その1（S = 1/4）



L = 5.00m



a L = 5.00m



- ① 暗灰色粘質砂
- ② 黑褐色砂
- ③ 黑黄褐色砂
- ④ 暗褐色砂
- ⑤ 灰褐色砂
- ⑥ 暗灰褐色砂
- ⑦ 暗黄褐色砂
- ⑧ 黄褐色砂
- ⑨ 淡褐色砂
- ⑩ 淡黄褐色砂
- ⑪ 淡黄灰色砂
- ⑫ 褐色砂
- ⑬ 黄灰褐色砂
- ⑭ 淡褐色砂と暗黄灰色砂混入
- ⑮ 黄褐色砂と灰褐色砂混入
- ⑯ 暗黄灰色砂

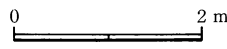
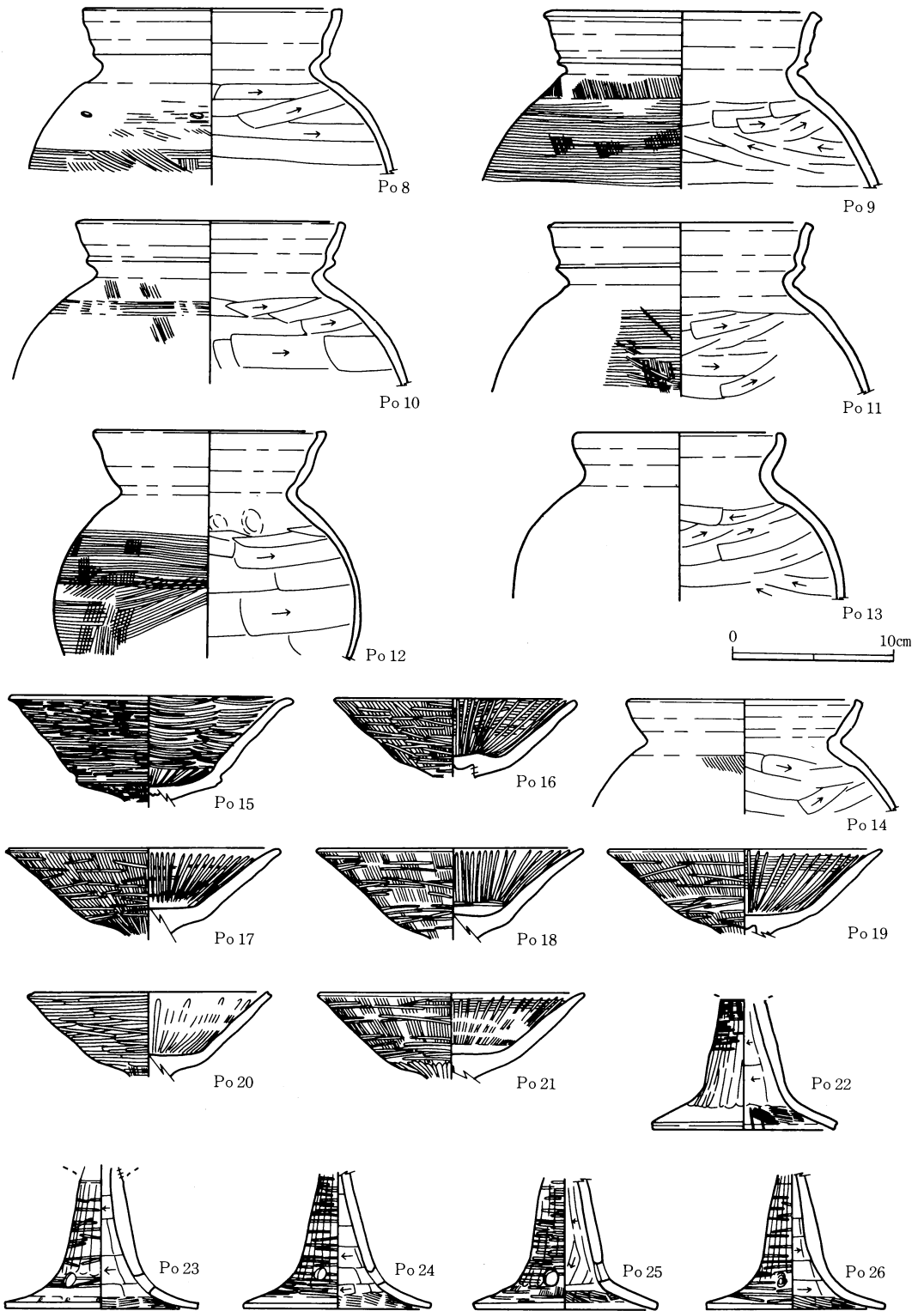


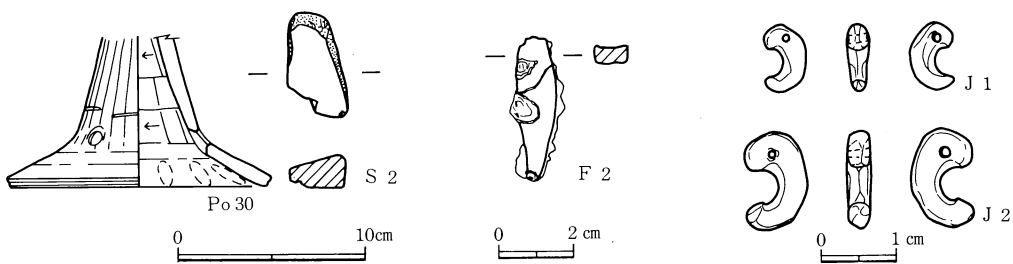
插图279 S I 129 · 134遺構図 (S = 1/80)



挿図280 S I 129遺物図その2 (S = 1/4)



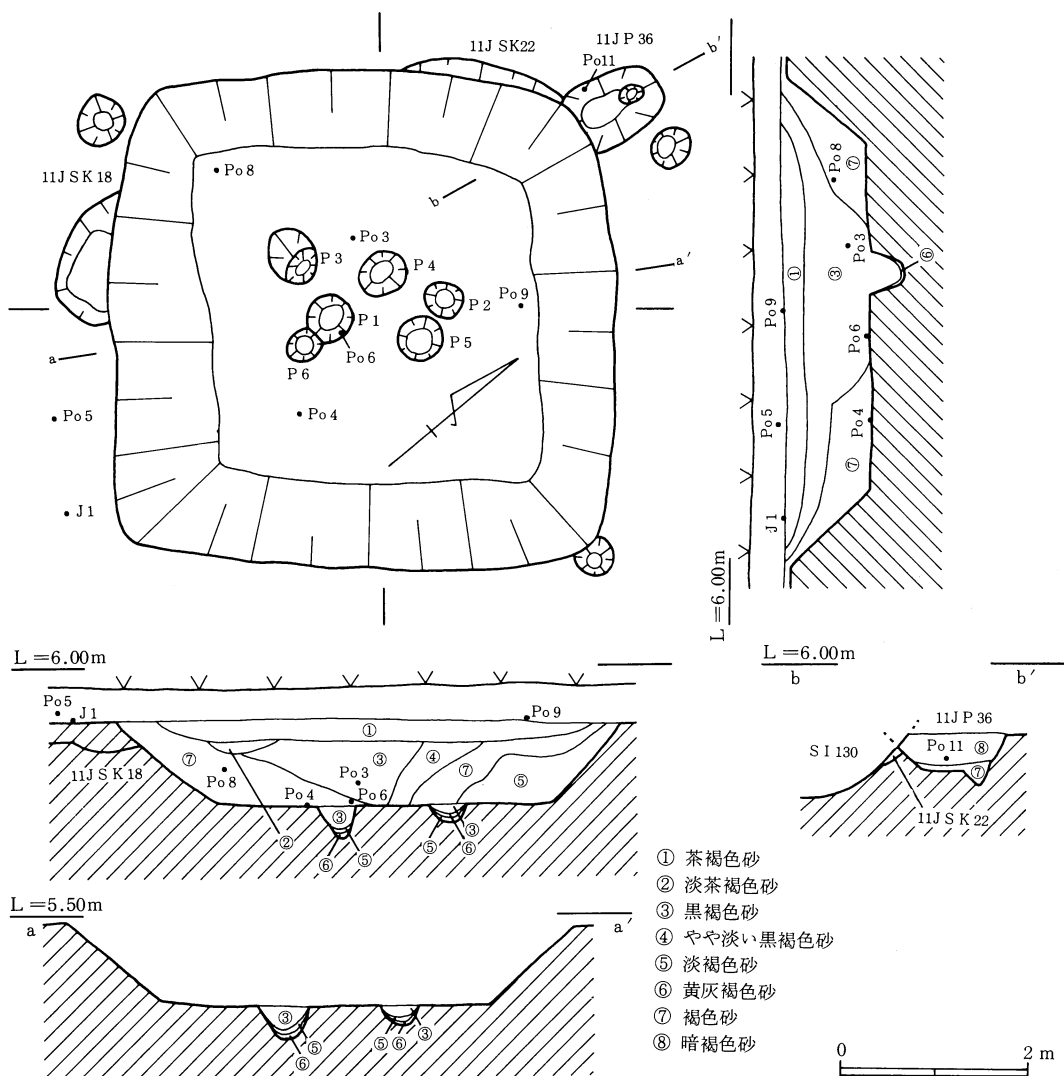
挿図281 S I 129遺物図その3 (土器・石S=1/4、鉄S=1/2)



挿図282 S I 134遺物図 (土器・石S=1/4、鉄S=1/2、玉S=1/1)

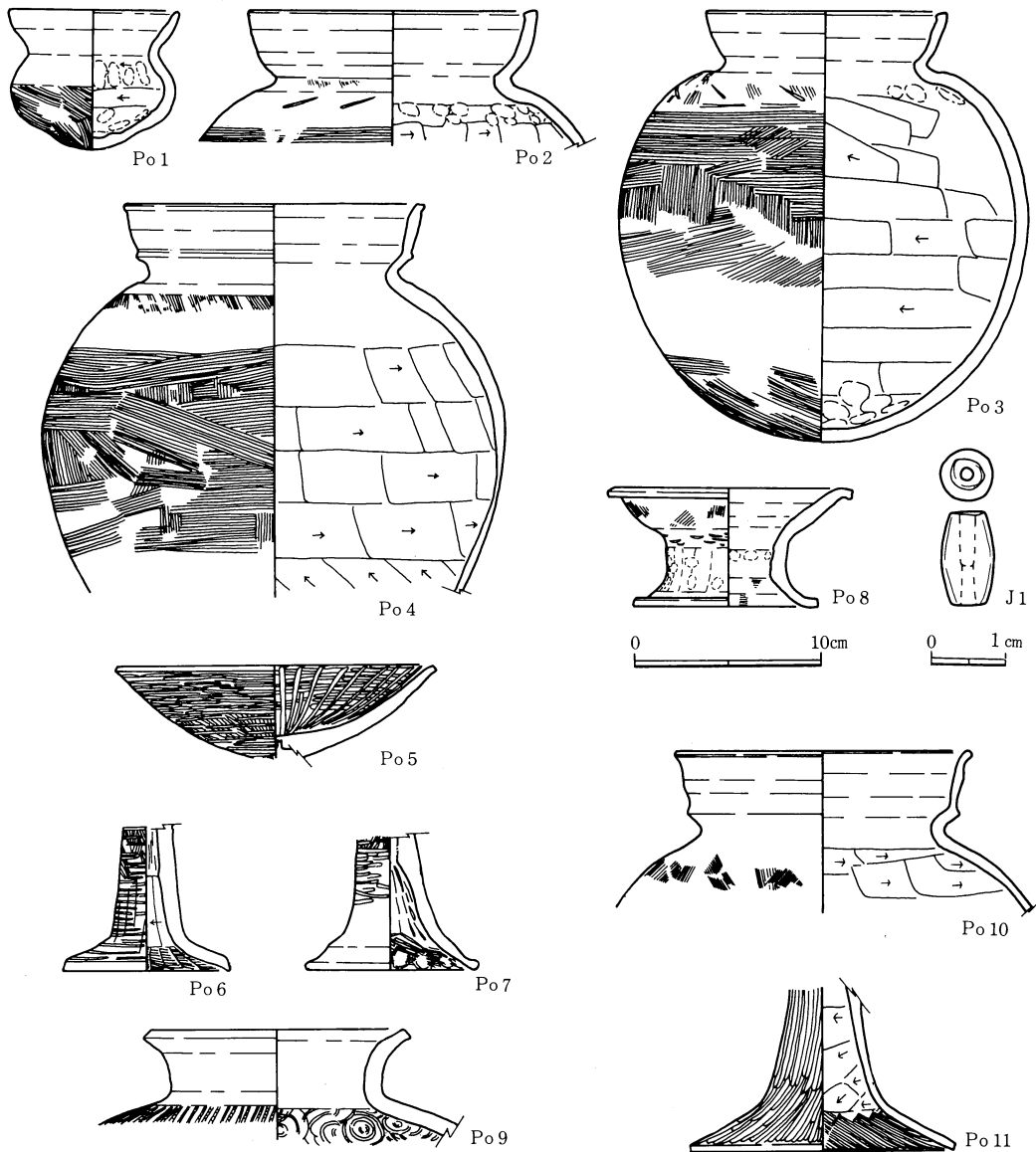
S I 130 (挿図283・284, 図版60・77)

11 I 地区南西・南東区にまたがり、S I 136とわずかに切り合い、S I 135の北東に位置する。切り合い関係は、S I 136の方が古く、肩にあるピット、土壌は住居より古い。平面形は、方形を呈する。床面の大きさは長辺3.64m、短辺3.48mを測り、主軸はN-29°-Eである。床面積は12.7㎡である。壁高は南西側で最大値85.5、北東側で最小値76.5cmを測る。側構はみられない。ピットは床面で6個検出したが、構造柱と考えるものはP 1



挿図283 S I 130遺構図 (S = 1/80)

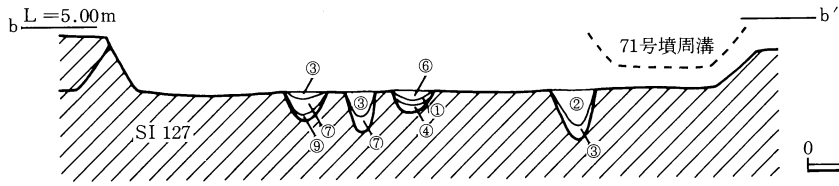
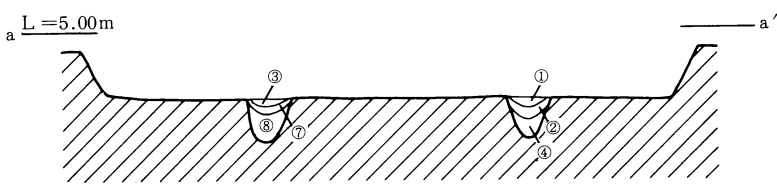
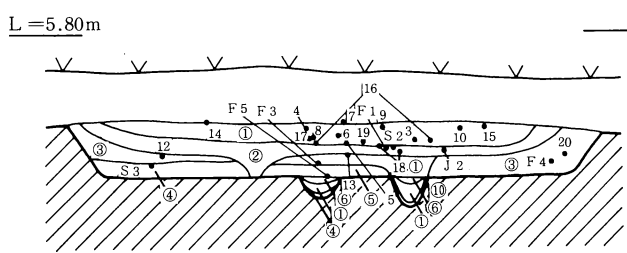
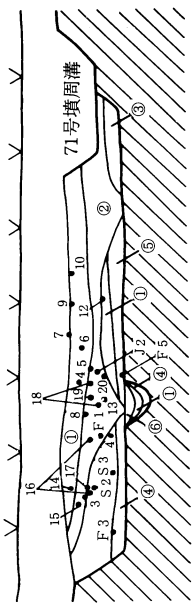
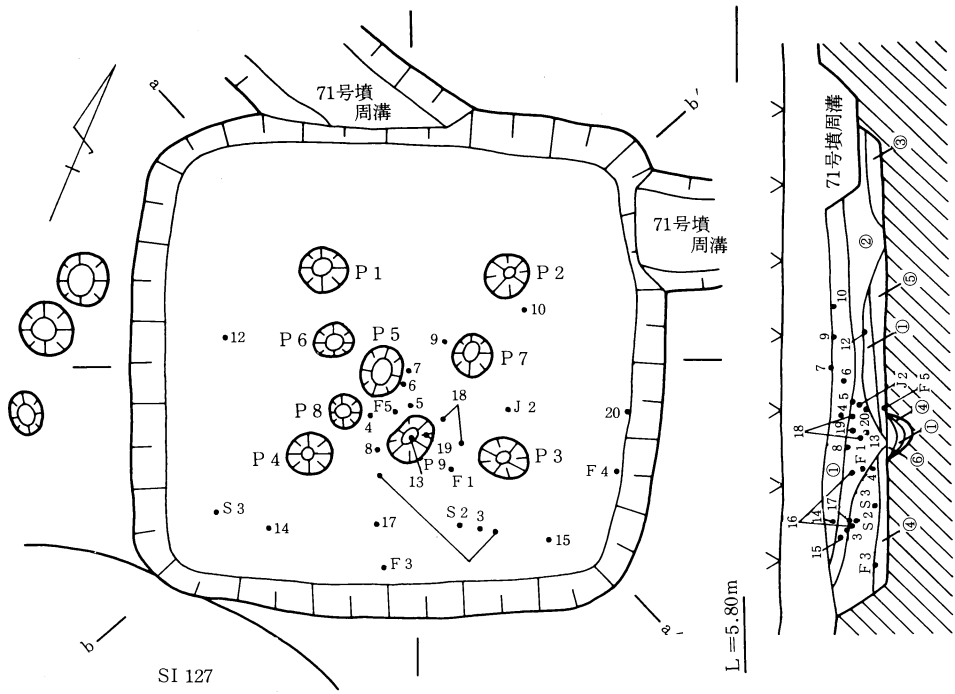
とP 2の2本である。プランはP 1が(44×36-36), P 2が(48×46-20) cmで, 柱穴間距離は1.2mを測る。他のピットの用途は不明である。住居跡内及び上面より須恵器破片(Po 9)を検出したが埋没時の混入とみられる。住居跡付近から黍玉(J 1) 1点が出土している。尚, 北東肩部下層のP 36内より甕(Po 1)・高坏(Po 2)が出土している。S I 130の時期は遺物より長瀬Ⅲ期と考える。



挿図284 S I 130・11 J P 36遺物図 (土器S = 1/4、玉S = 1/1)

S I 131 (挿図285~288, 図版61・77・78)

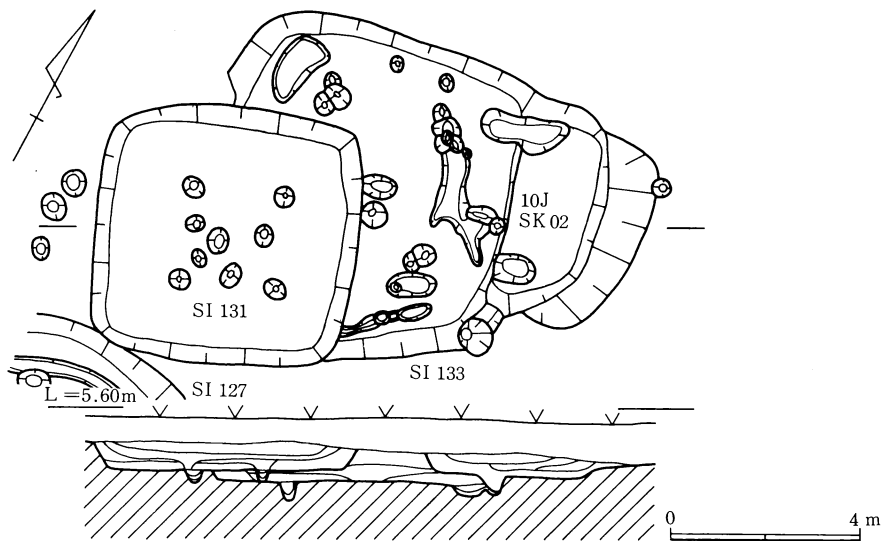
10 I・10 J 地区にまたがり, S I 133の西, S B40の東に位置する。北東側でS I 133, 南側でS I 127を切り, 北側で71号墳に切られている。平面形は隅丸方形。床面の広さは長辺5.00m, 短辺4.66m, 床面積23.3m²。壁高は西側で最大値54cm, 東側で最小値47cmである。主軸はN-65°-Eである。ピットは9個検出されたが, P 1~P 4の4本の構造柱をもつ竪穴住居跡と考えられる。柱穴プランはP 1 (52×48-46), P 2 (48×46-50), P 3 (52×44-44), P 4 (48×42-32) cmで柱穴間距離P 1-2間から2.00, 1.96, 2.08,



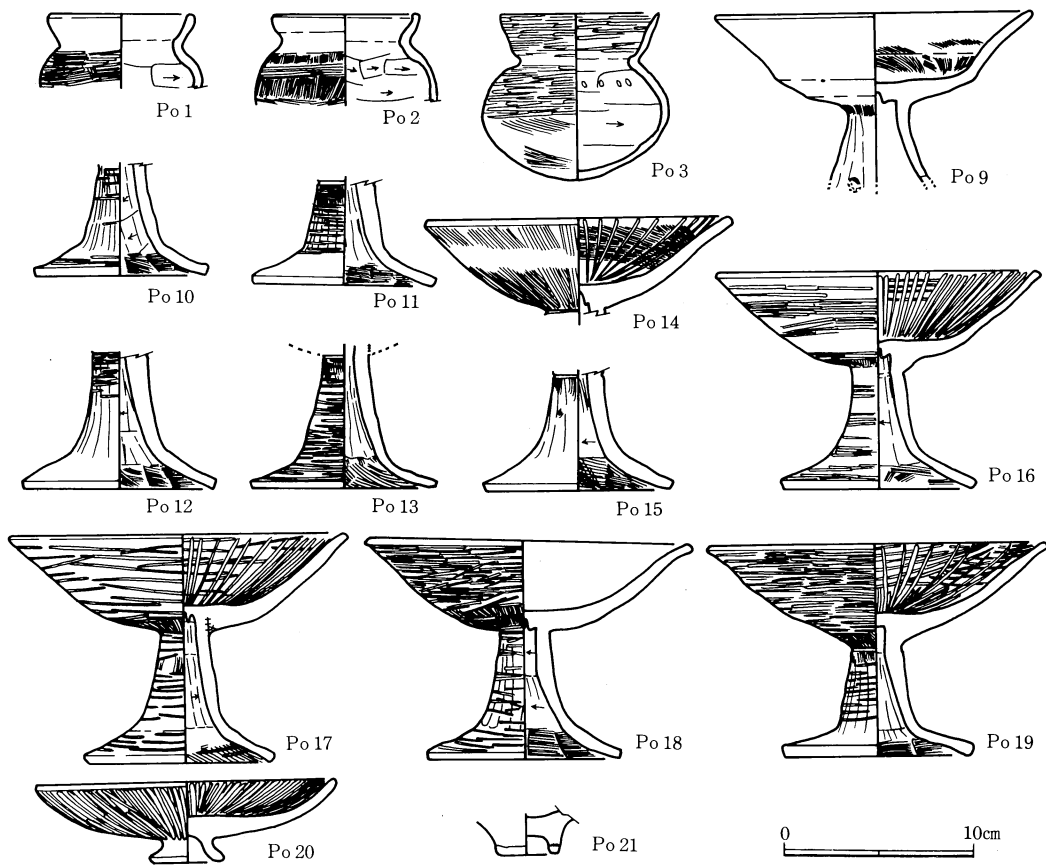
- ① 黒褐色砂
- ② 暗褐色砂
- ③ 褐色砂
- ④ 黄褐色砂に褐色砂混入
- ⑤ 黄褐色砂に黒褐色砂混入
- ⑥ 暗黒褐色砂
- ⑦ 淡褐色砂
- ⑧ 黄褐色砂に淡黄褐色砂混入
- ⑨ 黄褐色砂に淡褐色砂混入
- ⑩ 黄褐色砂に暗褐色砂混入

挿図285 S I 131遺構図 (S = 1/80)

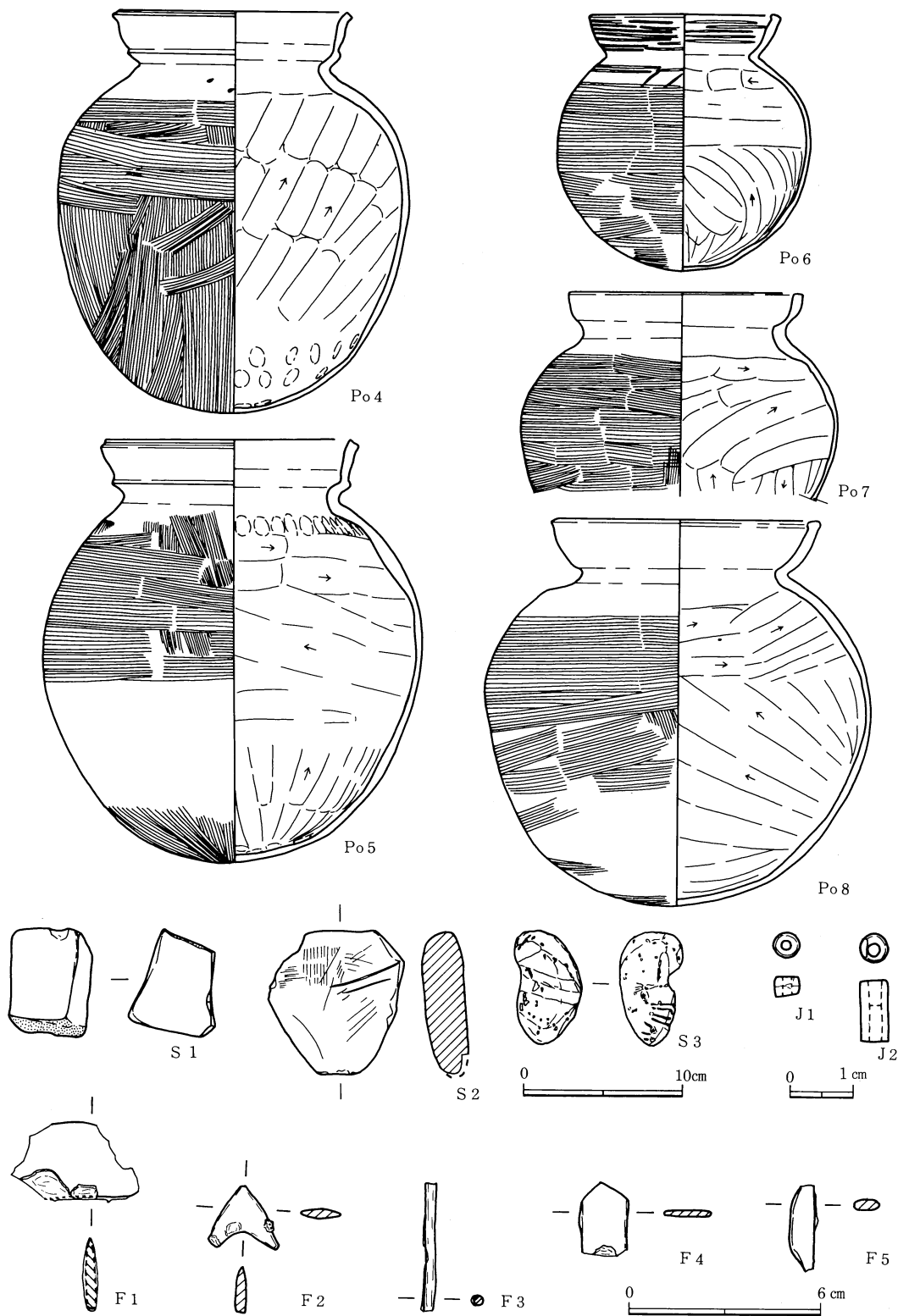
2.00mを測り、ほぼ2m間隔である。P 5 (46×52-26) cmは特殊ピットと考えられる。他のピットは性格不明。遺物は管玉 (J 1), 甕 (P o 4) 内より出土した小玉 (J 2), その他多数の土師器が出土している。時期は長瀬Ⅲ期と考える。



挿図286 S I 131・133、10J K 02遺構図 (S = 1/160)



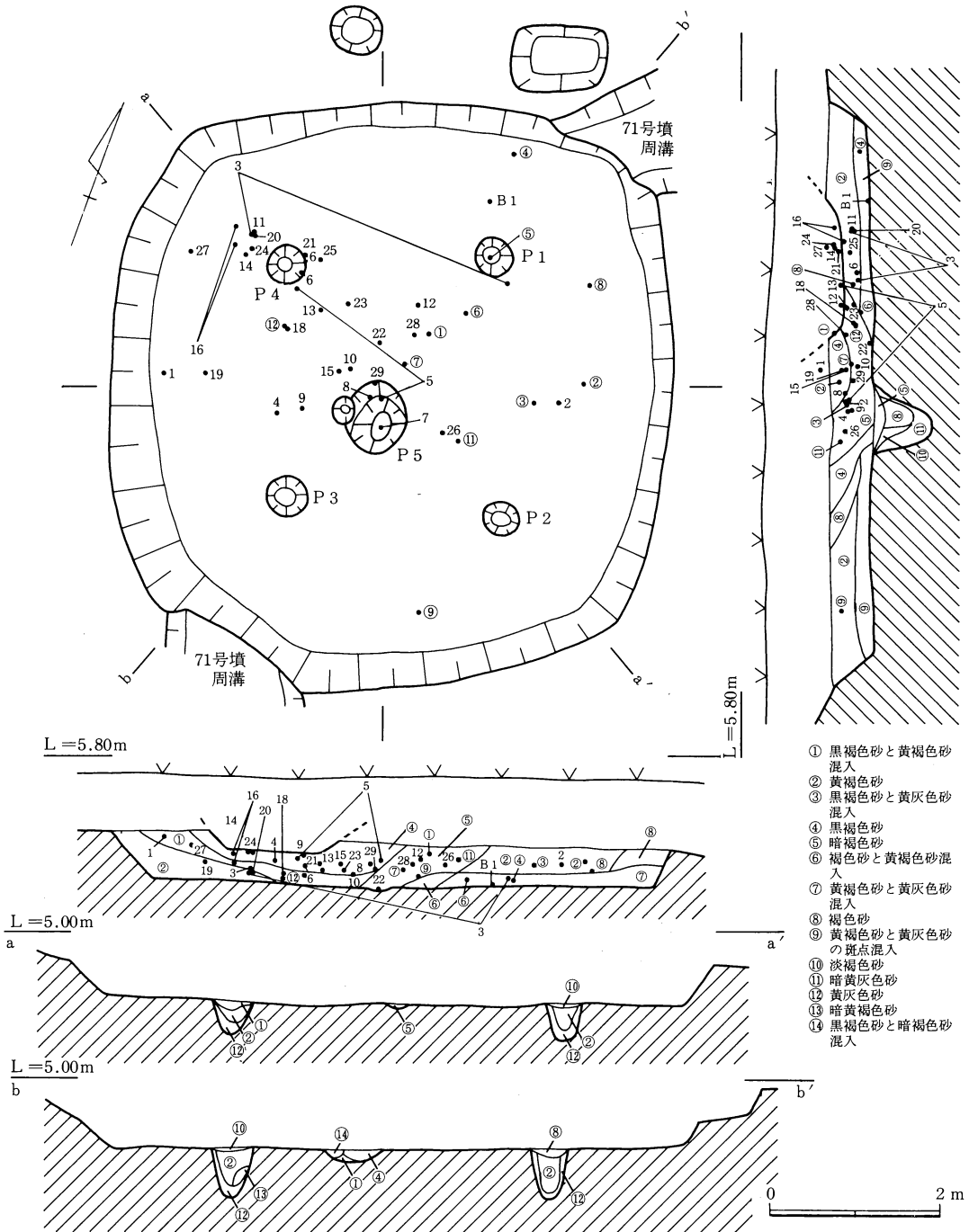
挿図287 S I 131遺物図その1 (S = 1/4)



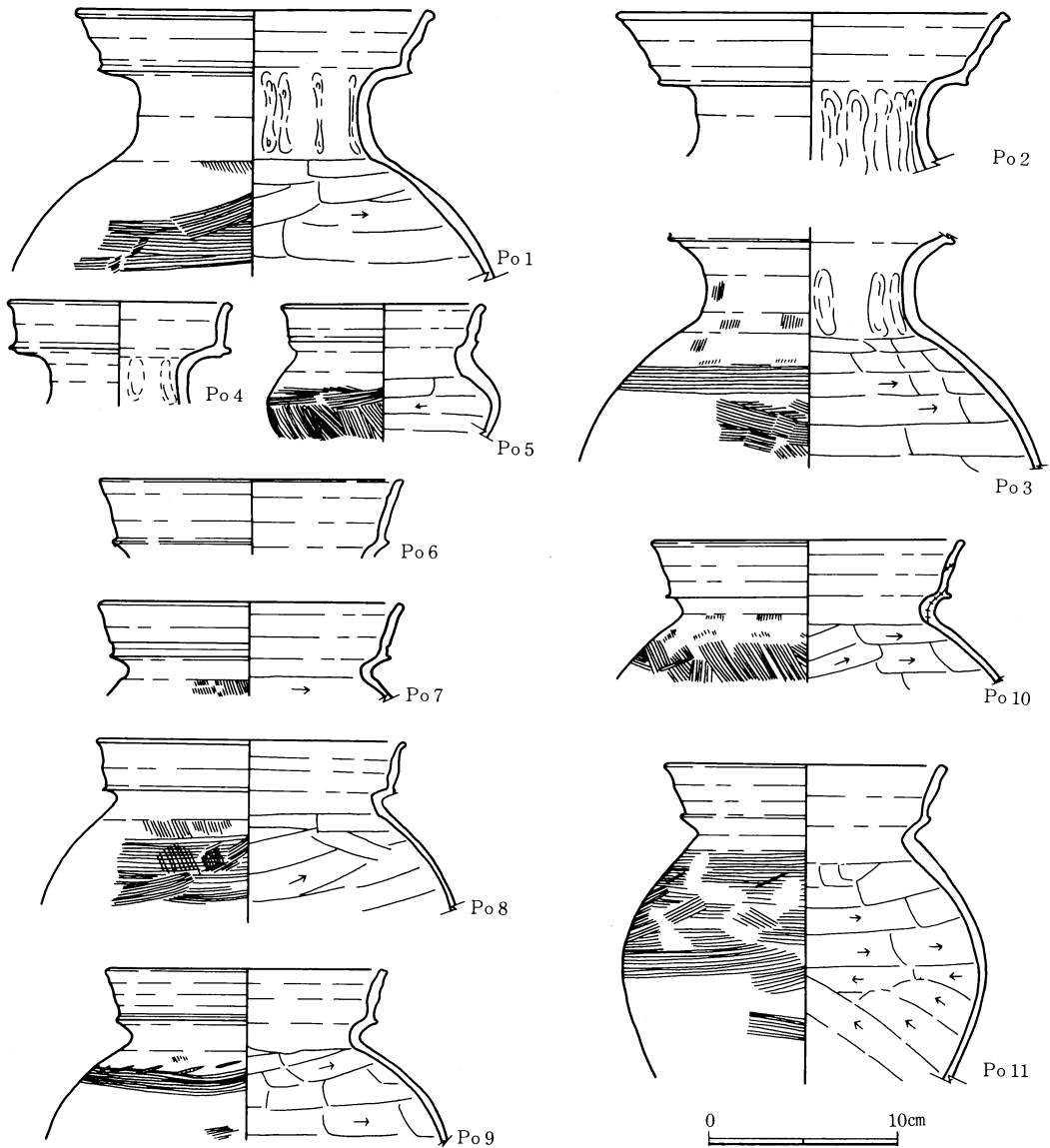
挿図288 S I 131遺物図その2 (土器・石S=1/4、鉄S=1/2、玉S=1/1)

S I 132 (挿図289~292, 図版61・78)

10 J地区の南西に位置し, S I 133の北西, S I 137の南東にあたる。東側は71号墳墳丘下であり, その周溝が住居跡の中央を走っている。平面形は隅丸方形で, 主軸はN-21°-Wである。床面は東西5.92, 南北6.28mを測り, 床面積は約31m²である。壁高は西側で

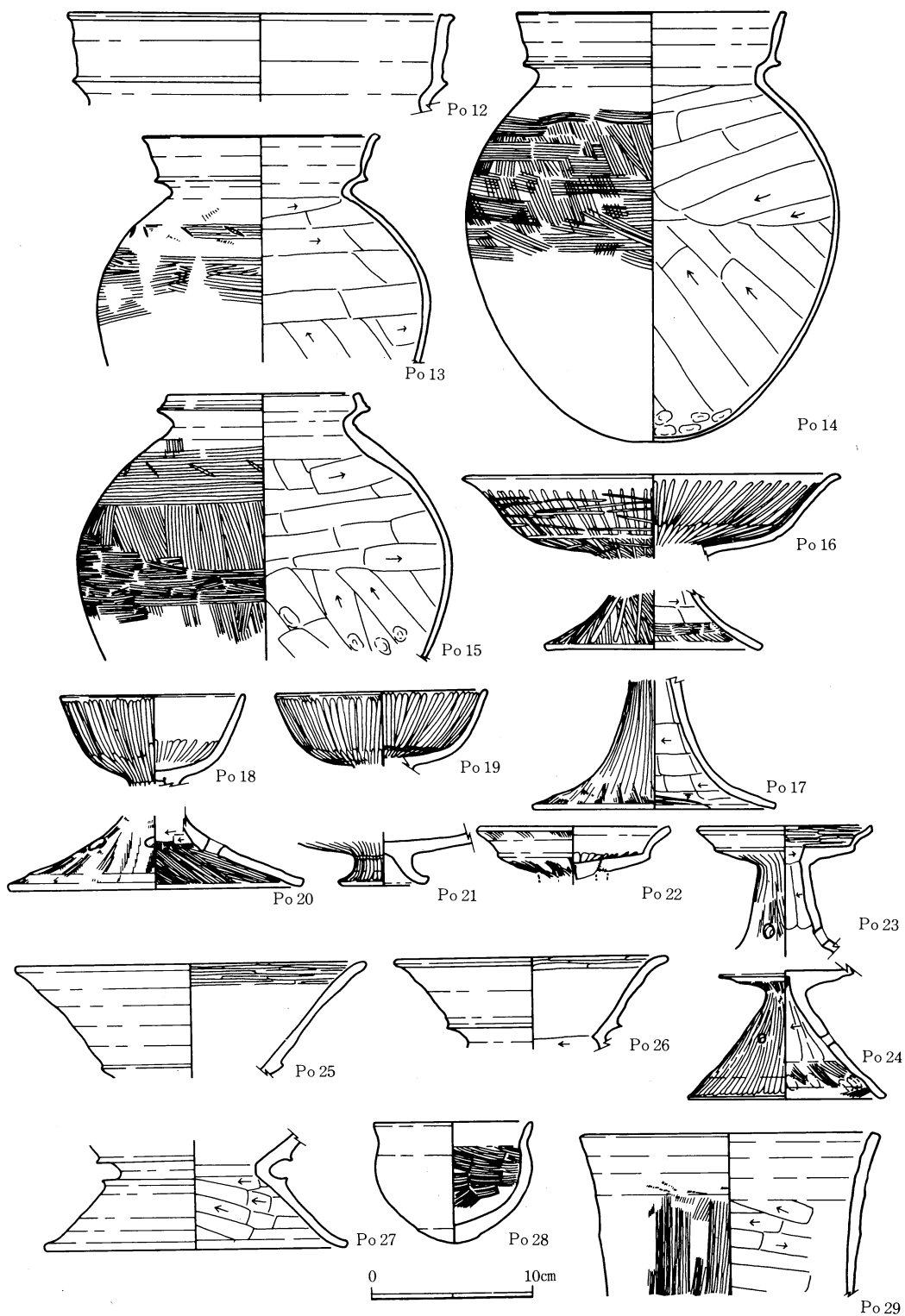


挿図289 S I 132遺構図 (S = 1/80)

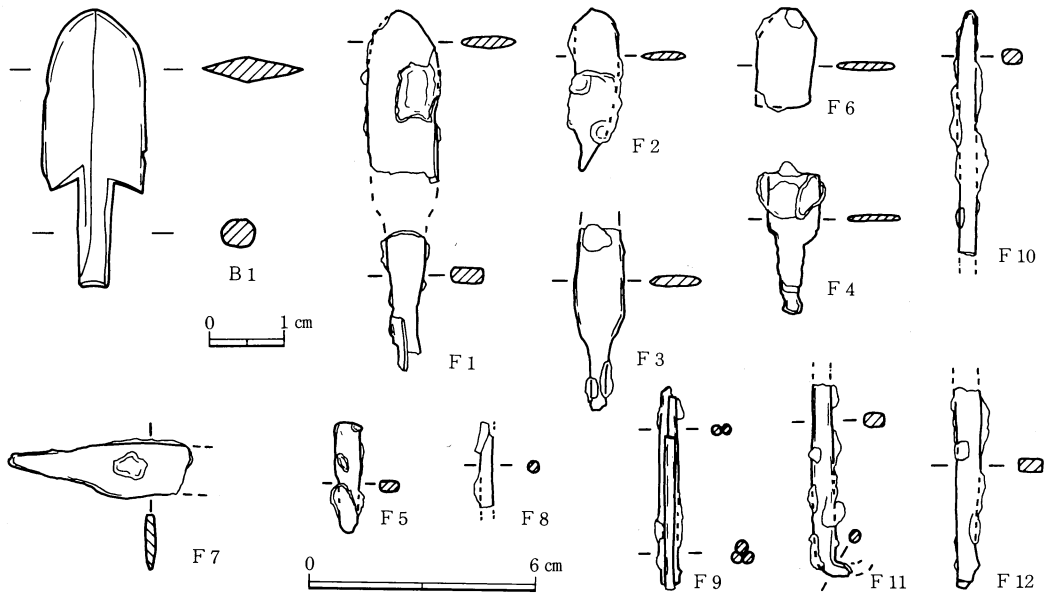


挿図290 S I 132遺物図その1 (S=1/4)

最大値58cm, 東側で最小値43cmを測る。側溝及びテラスはみられない。ピットは床面で5個検出したが, P 1 (51×50-60), P 2 (43×42-58), P 3 (46×45-61), P 4 (47×45-42) cmを構造柱跡と考える。柱穴間距離はP 1より順に2.52, 3.12, 2.44, 2.80mである。P 5は場所的に特殊ピットの可能性がある。なおこの住居跡の床面直上より銅鏃(B 1) 1点を検出し, 他にも鉄鏃と思われる鉄製品(F 1~4), 剣先型鉄製品(F 6), 釣針(F 10・11, F 9は3個体の釣針の可能性はある), その他多くの鉄製品を検出した。土器は黒褐色砂層中より多く出土しているが, 珍しいものでは鉢(P o28)がある。時期は遺物より長瀬I~II期と考える。



挿図291 S I 132遺物図その2 (S = 1/4)

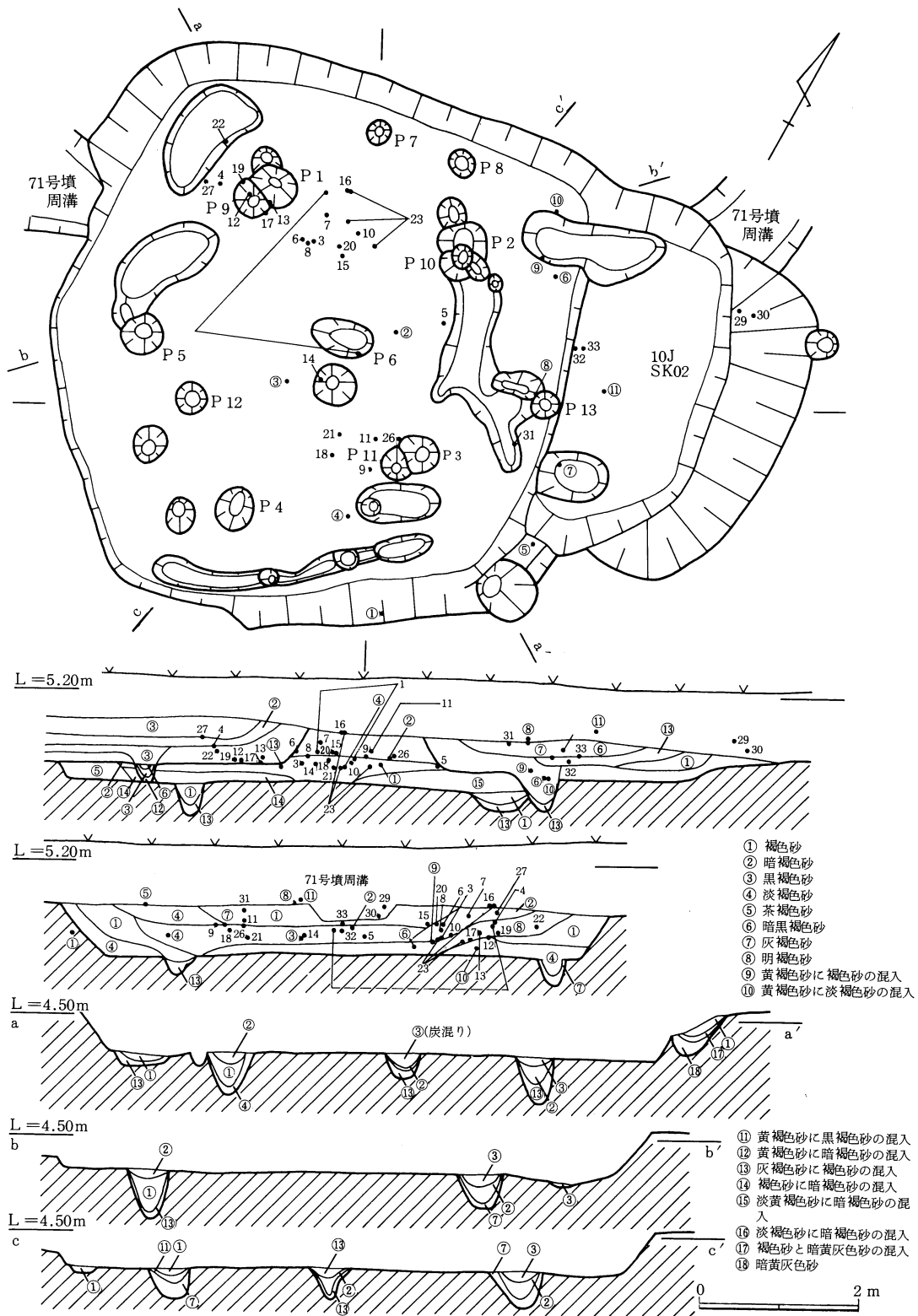


挿図292 S I 132遺物図その3 (銅鑊S = 1/1、鉄S = 1/2)

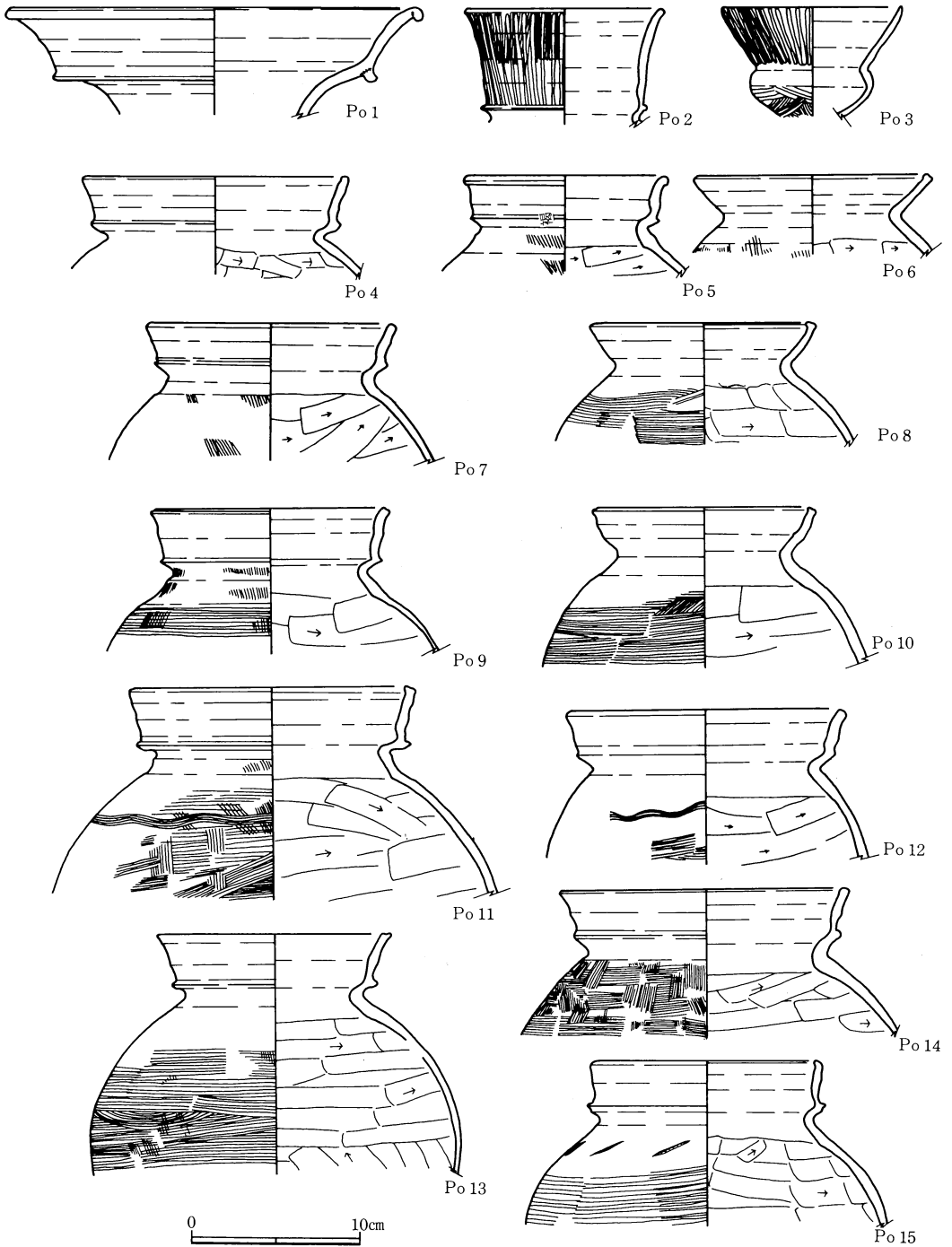
S I 133, 10 J S K 02 (挿図286・293・296, 図版61・78)

10 I・10 J 地区にまたがり、S I 123の北、S I 134の西に位置する。S I 133はS I 131, 10 J S K 02, 61号墳の周溝と切り合い、新旧関係はこれらの遺構より古い。平面形はやや変形の五角形である。床面の大きさは、東-西軸6.4m, 北西-南東軸6.6m, 床面積30.9m²である。壁高は南側で最大値68cm, 北側で最小値56cmである。南側床面の溝は幅約20cm, 深さ約4cm, 長さ3.5mで側溝とも考えられる。ピットは床面より18個と多く検出されたが、柱穴はP 1～P 5で5本柱の住居と考える。プランはP 1から(58×52-52), (60×56-44), (50×48-58), (56×52-38), (52×52-60)cm, 柱穴間距離はP 1-P 2間から2.48, 2.8, 2.4, 2.52, 2.52mである。P 6(76×48-38)cmは炭が混っており特殊ピットと考える。北側のP 7・P 8と南側溝の中のピットは補助柱と考えられる。柱穴P 1～P 3の横には、それぞれに古いピットP 9～P 11が検出され、これらに対応するものとしてP 12を考えると、4本柱の住居を5本柱の住居に建て替えた可能性もある。他のピット・土壇は用途不明である。遺物は鎌(F 1), 釣針(F 2), 刀子(F 4)等多くの鉄器が出土した。時期は長瀬Ⅱ期と考える。

10 J S K 02は、S I 133と71号墳の周溝と切り合う。新旧関係は71号墳より古い。S I 133との新旧関係、切り合いが平面において不明で同時に調査を行ったが、遺構断面によりS I 133より新しいものと判断される。大きさは上縁部東-西軸4.6, 南-北軸4.7mである。壁高は西側で40.2(推定), 東側で36cmである。平面形は西側が不明であるが、東側をみるに隅丸方形と考えられる。P 13と底辺より検出された土壇は用途不明である。遺

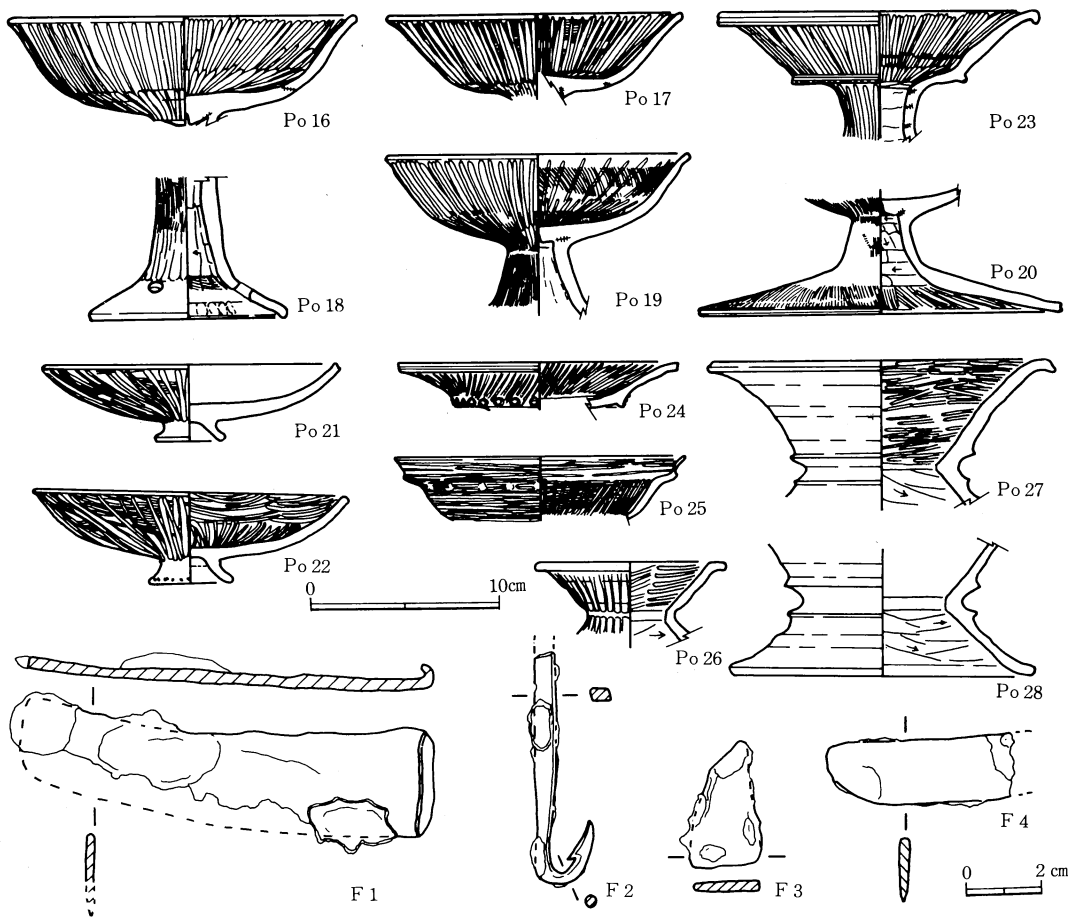


挿図293 S I 133 · 10 J S H 02遺構図 (S = 1/80)

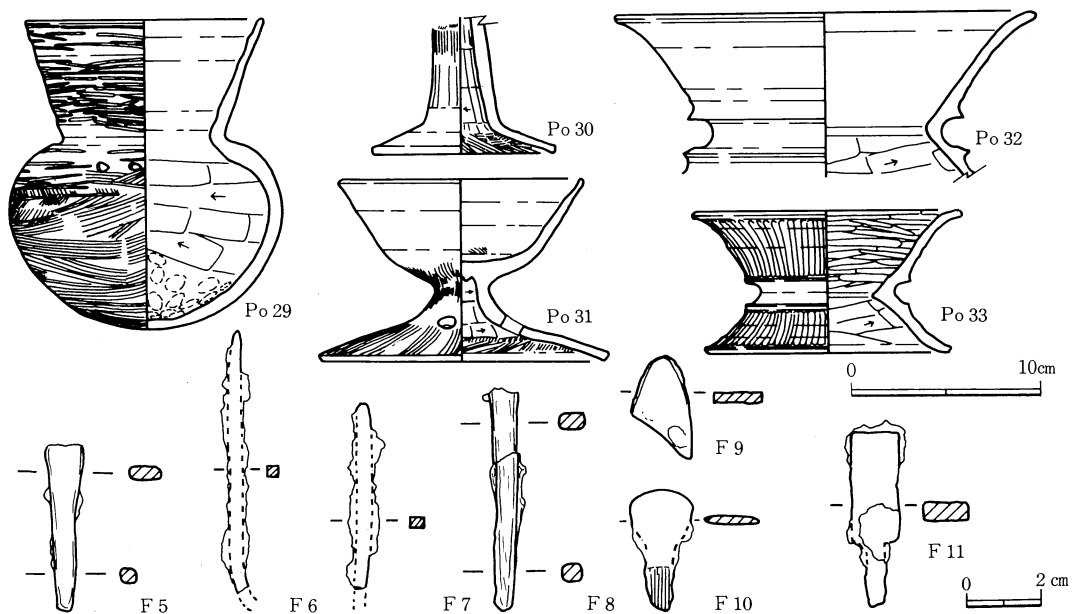


挿図294 S I 133遺物図その1 (S = 1/4)

物は鉄鏃 (F 6・7) 他多数の鉄器と土師器が出土しており、遺構の大きさにおいても住居跡と考えられるが、柱穴は検出されず、近くの住居に関する土壌状遺構と考える。層的には切り合いが認められるが、遺物より S I 133と大きな時期差はないと考える。



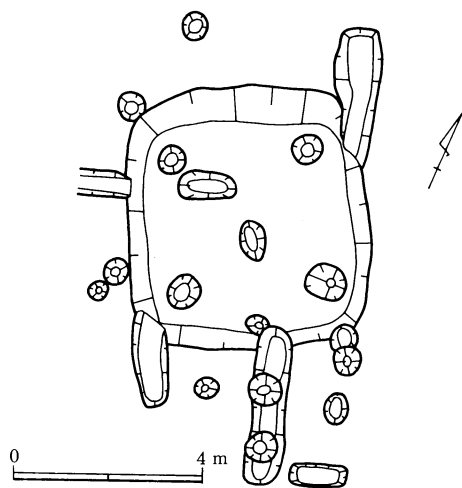
挿図295 S1133遺物図その2 (土器S=1/4、鉄S=1/2)



挿図296 10JSK02遺物図 (土器S=1/4、鉄S=1/2)

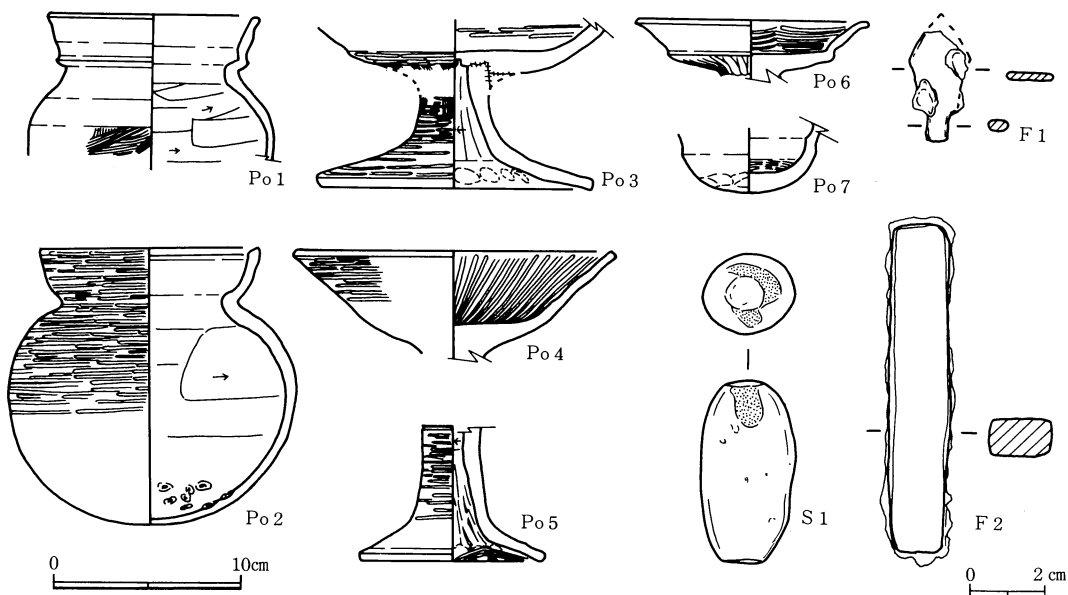
S I 135 (挿図297~299, 図版61・79)

11 J 地区の南東にあり, S B 40の北, S I 136の西, S I 130の南西に位置する。床面は一辺4.5mで面積20.3m²の隅丸方形をなす。主軸はN-28°-Wである。壁高は西側で最大値60cm, 東側で最小値40cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で6個検出したが, 構造柱の柱穴と考えられるものはP 1~P 4の4個である。プランはP 1より順にP 1(58×60-60), P 2(66×61-52), P 3(88×80-53), P 4(72×70-68)cmで, 柱穴間距離はP 1-P 2間から順に2.96, 2.92, 3.20, 2.88mを測る。P 5(84×52-48)cmは場所的にみて特殊ピットと考えられる。S

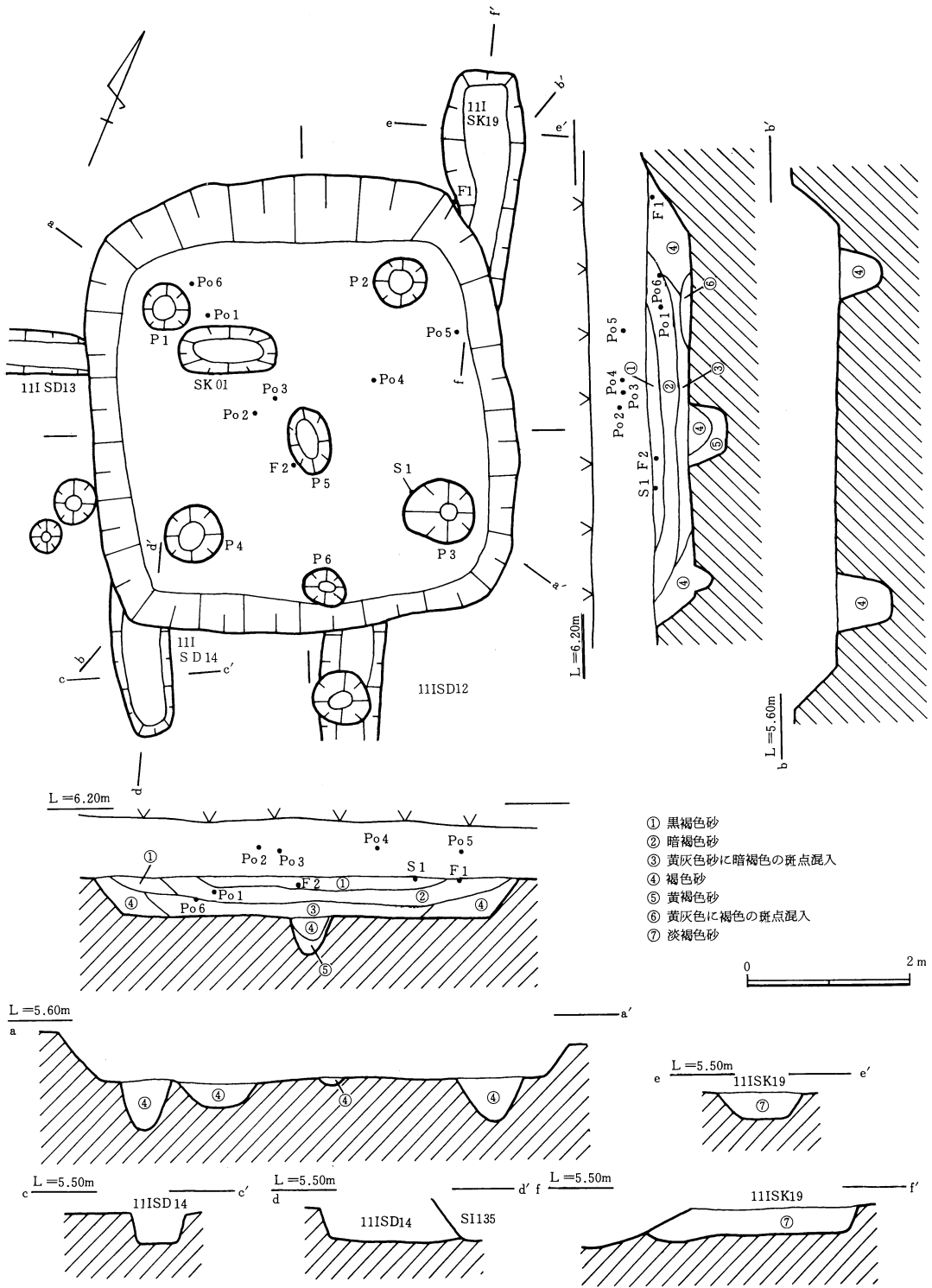


挿図297 S I 135周辺遺構図 (S = 1/160)

I 135肩部周辺で南北にのびる溝を3本検出したが, 遺物は土師器片が数片出土しただけで図化できるものはなかった。南側のS D 12は長さ3.30, 幅0.75, 深さ0.30mを測り, 中央部に径約0.65mのP 37, 36をもつ。S D 12上肩よりの深さはそれぞれ0.87, 0.60mである。S I 135はこれらの溝よりも新しい。遺物は土師器の他に丹付きの敲石 (S 1), 住居跡周辺部で鉄鏃 (F 1) を検出した。時期は遺物より長瀬Ⅱ期と考える。



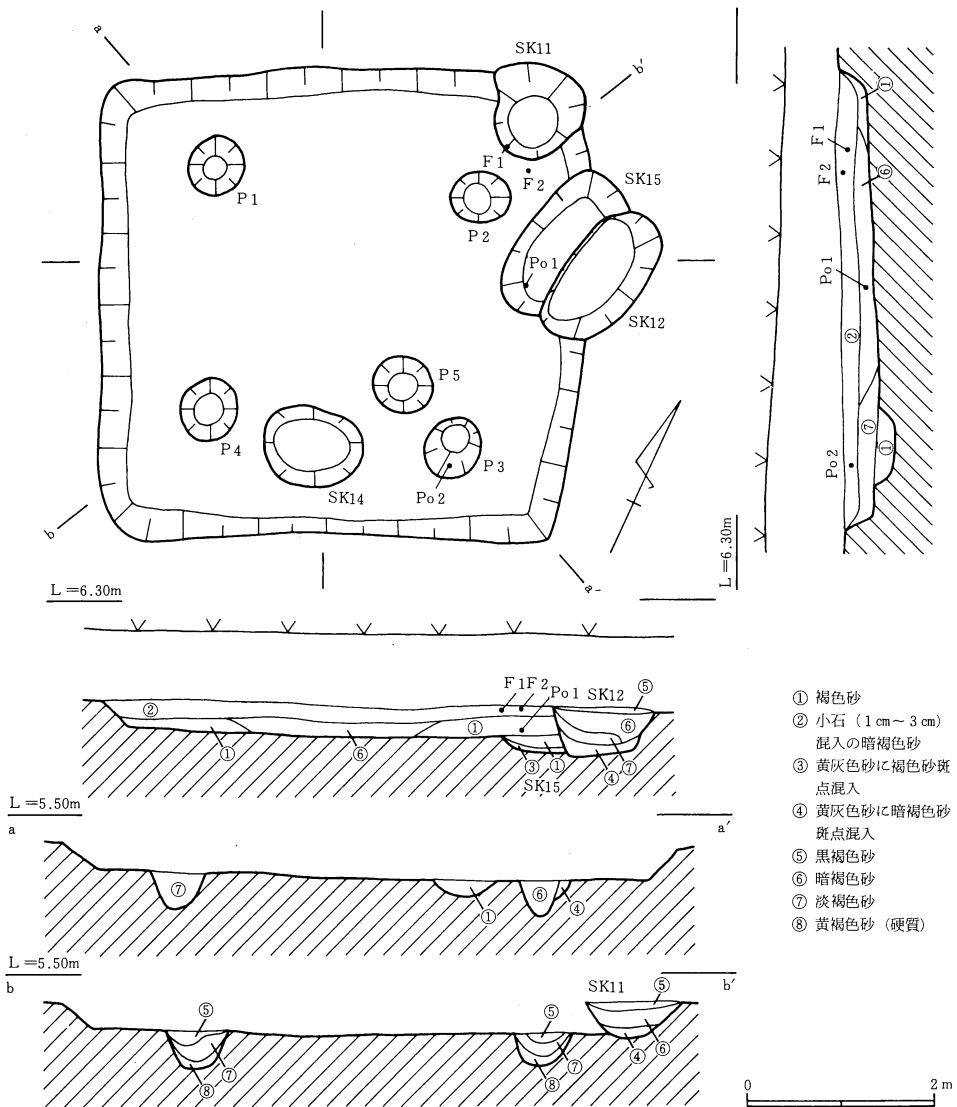
挿図298 S I 135遺物図 (土器・石 S = 1/4、鉄 S = 1/2)



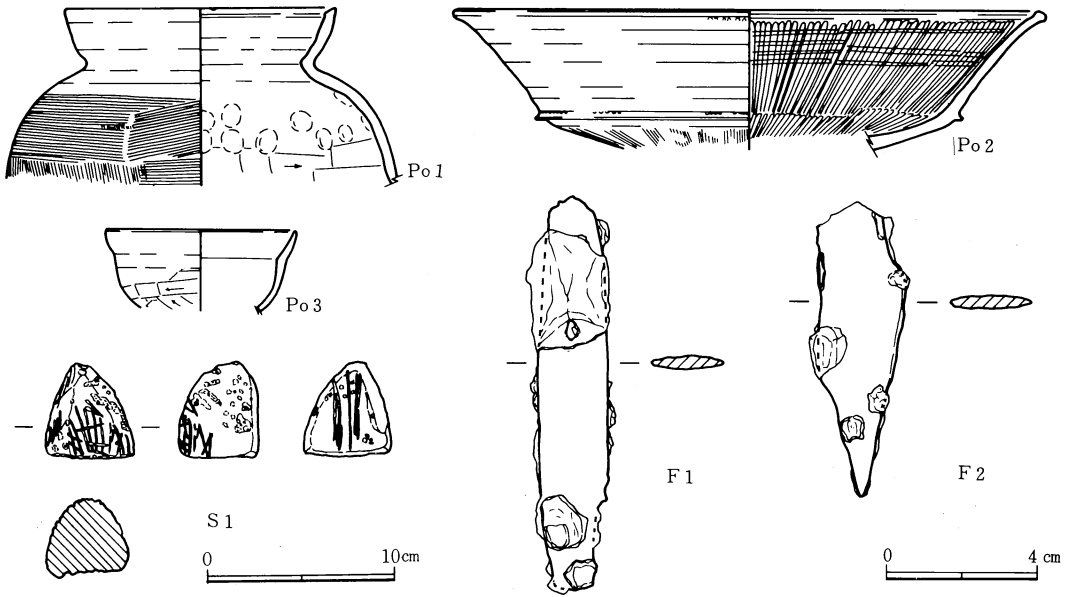
挿図299 S1135遺構図 (S = 1/80)

S I 136 (挿図300・301, 図版62・79)

11 J 地区の南東にあり S I 130 の南, S B 40 の北に位置する。平面形は方形で長辺 4.70, 短辺 4.50 m, 床面積 21.2 m² を測る。主軸は N-21°-W である。壁高は南東側で最大 32 cm, 南西側で 26 cm を測る。側溝はみられない。ピットは床面で 5 個検出したが柱穴は P 1 (64×60-42), P 2 (68×54-37), P 3 (68×60-43), P 4 (66×62-41) cm の 4 本である。柱穴間距離は P 1-P 2 から 2.8, 2.6, 2.7, 2.6 m を測る。北東肩部には S K 11・12・15 があり, S K 11・12 は S I 136 より新しく, S K 15 は S I 136 より古い。S K 11 内より鉄 (F 1・2) を検出した。床面上部には粗い小石が混っていた。尚, 高坏 (P o 2) は S B 40 内からも出土しており混入の可能性が強い。時期は長瀬 II 期頃と考える。



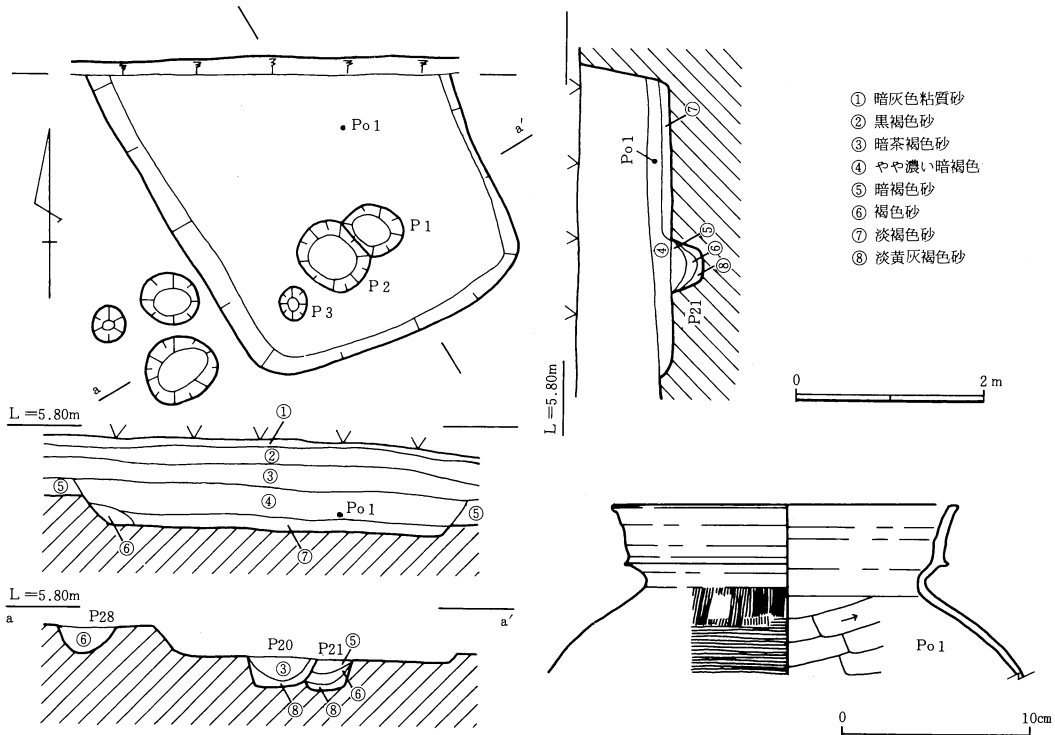
挿図300 S I 136遺構図 (S = 1/80)



挿図301 S I 136遺物図 (土器・石S = 1/4、鉄S = 1/2)

S I 137 (挿図302, 図版62)

10 J 南西区, 北西区にまたがり, 71号墳の北西, S I 130の北東に位置する。北側は調査区域外のため未調査である。平面形は長方形になる。床面の大きさは長辺は未調査の

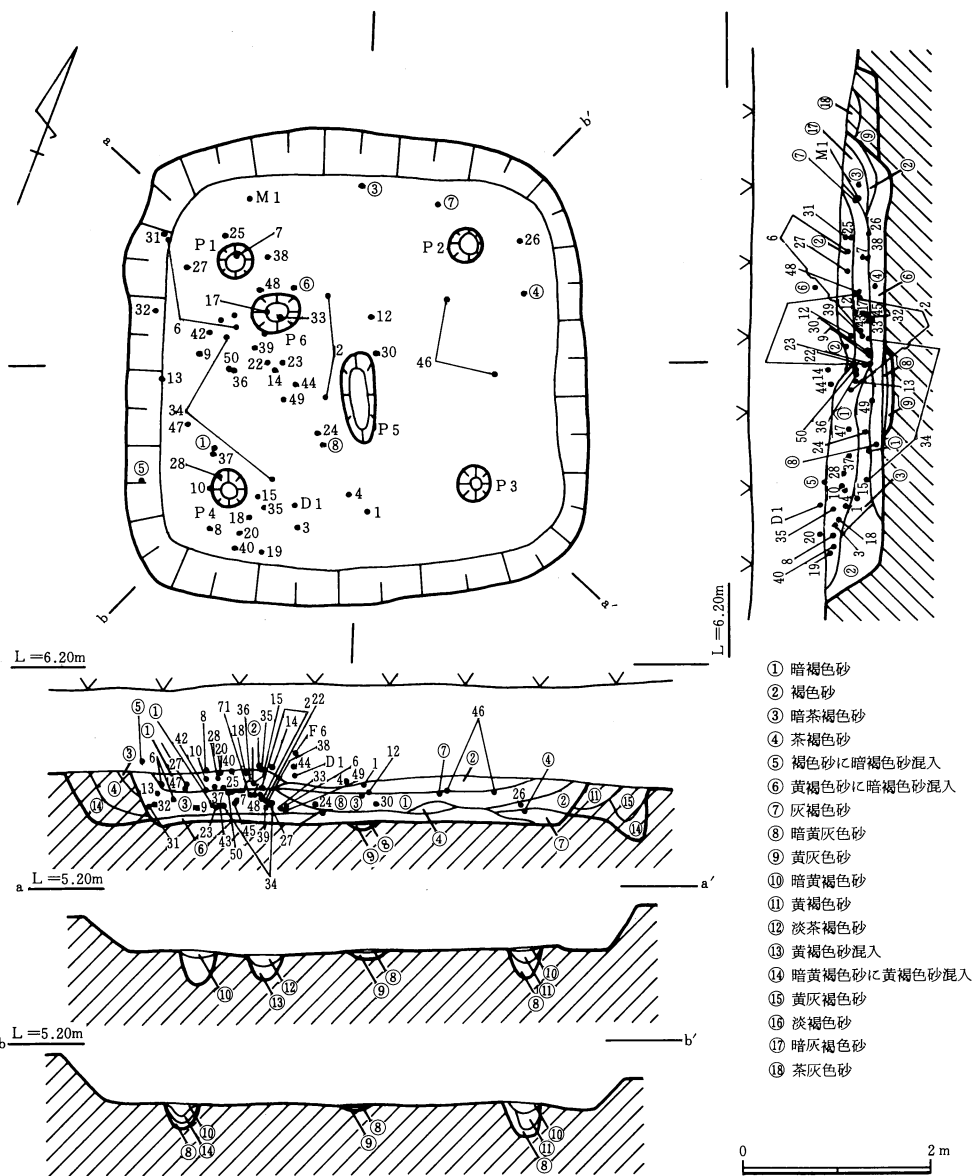


挿図302 S I 137遺構図 (S = 1/80)・遺物図 (S = 1/4)

ため不明，短辺3.22mを測る。主軸はN-31°-Wである。壁高は北西側で最大値44，南東側で最小値16cmを測る。側溝はみられない。ピットは床面で3個検出したが構造柱の柱穴はP1である。対応する柱穴は調査区域外にあると思われる。プランはP1（60×52-36）cmを測る。特殊ピットはみられない。遺物は甕（P01）が1点出土している。遺物が少なく時期は即断しがたいが長瀬Ⅰ～Ⅱ期と考える。

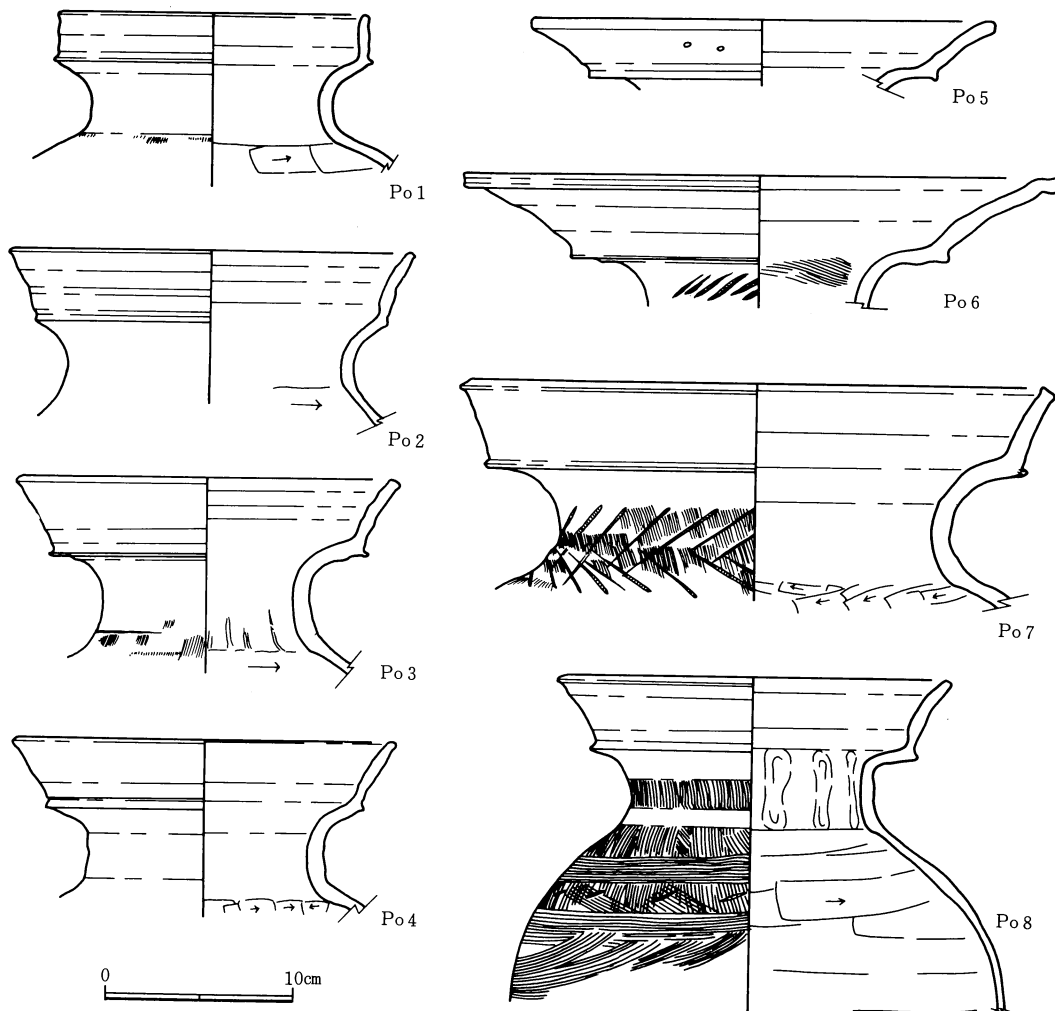
S I 138（挿図303～307，図版62・79・80）

10 I 地区の南東に位置し，一部10 H 地区にかかる隅丸方形の竪穴住居跡である。主軸はN-18°-Wを振る。周辺には北側にS I 127，西側にS I 139，東側にS I 126が近接して

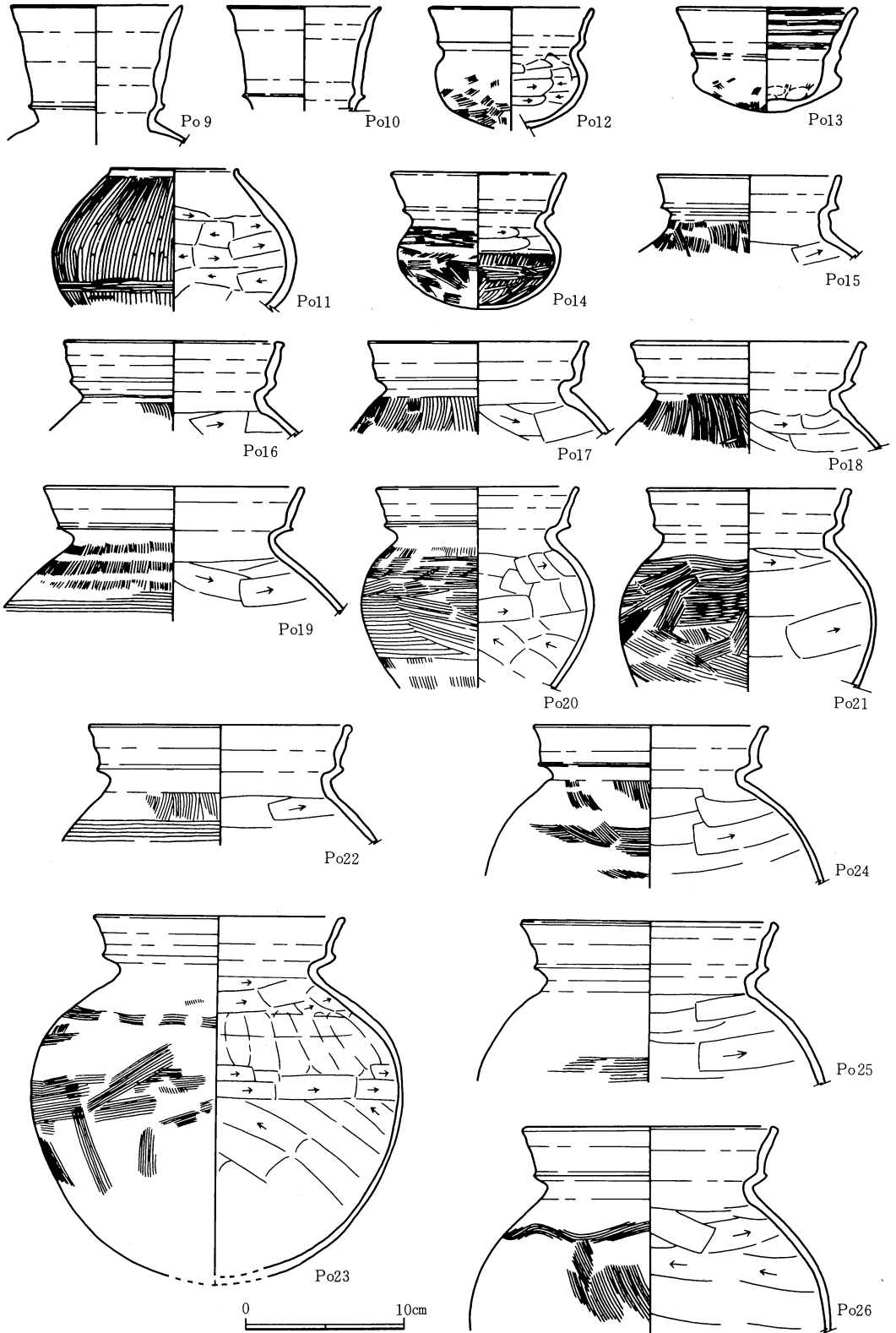


挿図303 S I 138遺構図 (S = 1/80)

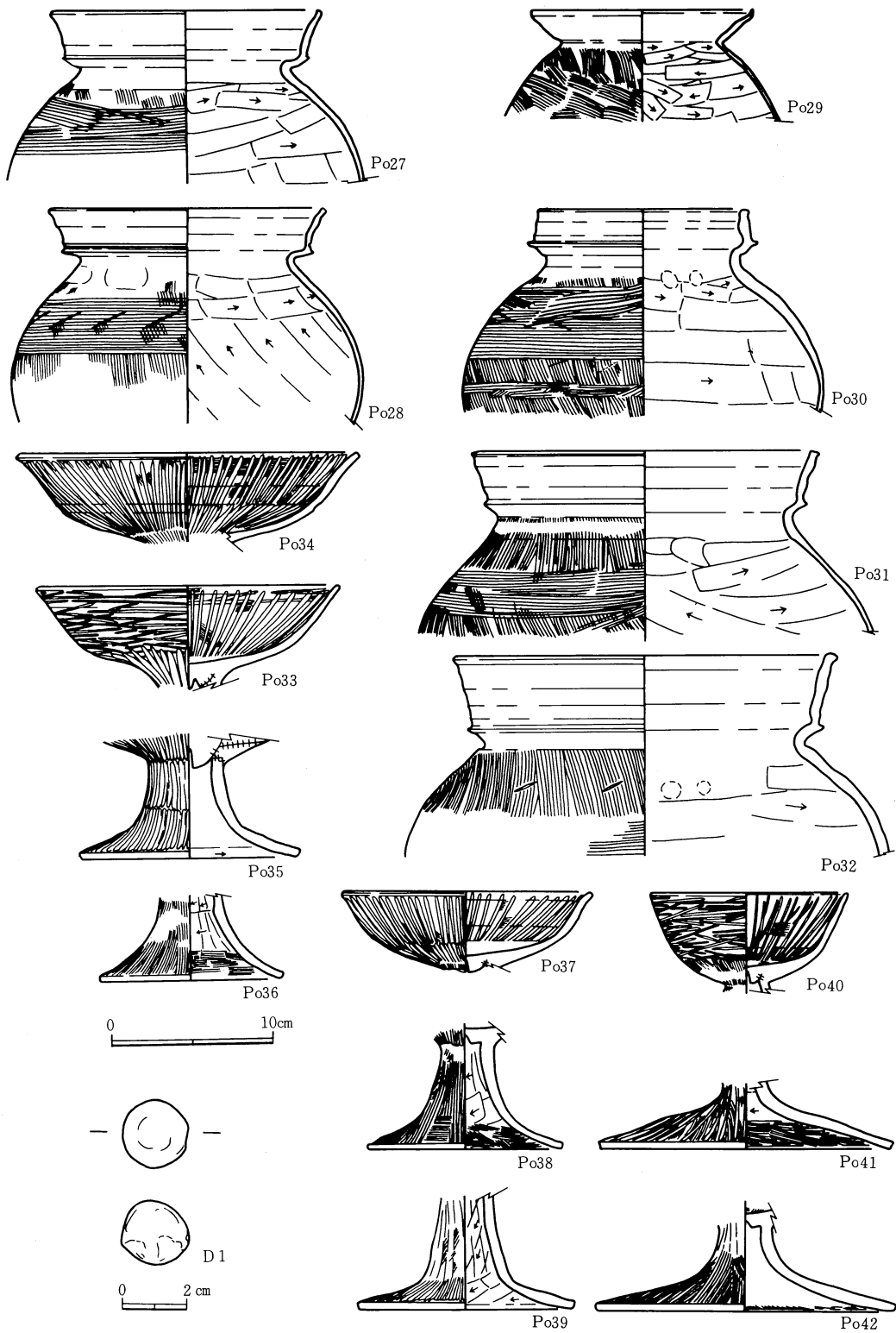
存在し、周囲をS B 29の柱穴群がめぐっている。また南西側には75号墳の埋葬施設があり、S I 138の上面をその周溝が走っていたと思われる。構造柱跡はP 1 (36×37-35), P 2 (37×37-35), P 3 (37×39-34), P 4 (38×39-31) cmで、柱穴間距離はP 1より順に2.50, 2.56, 2.66, 2.44mを測る。規模は長辺5.98, 短辺4.90m, 床面積17.6m²で最大壁高63cm(南側), 最小壁高36cm(北側)を測る。床面には他にピットが2個あるが、P 5 (95×35-13) cmは場所的に特殊ピットの可能性がある。またP 1内の砂は赤っぽくて軟かかった。床面は壁側が低く、中央部が盛り上がり気味である。北・東・西側にはテラス状の遺構があるが、これはS B 29のものと考えた。S I 138は、このテラス状の遺構を切っていた。従ってS B 29よりS I 138の方が新しいということになる。遺物は南・西側に集中している。珍しいものでは素文鏡(M 1), 土玉(D 1), 庄内式と思われる甕(P o 29)が埋砂内より出土している。時期は遺物より長瀬Ⅱ期と考える。



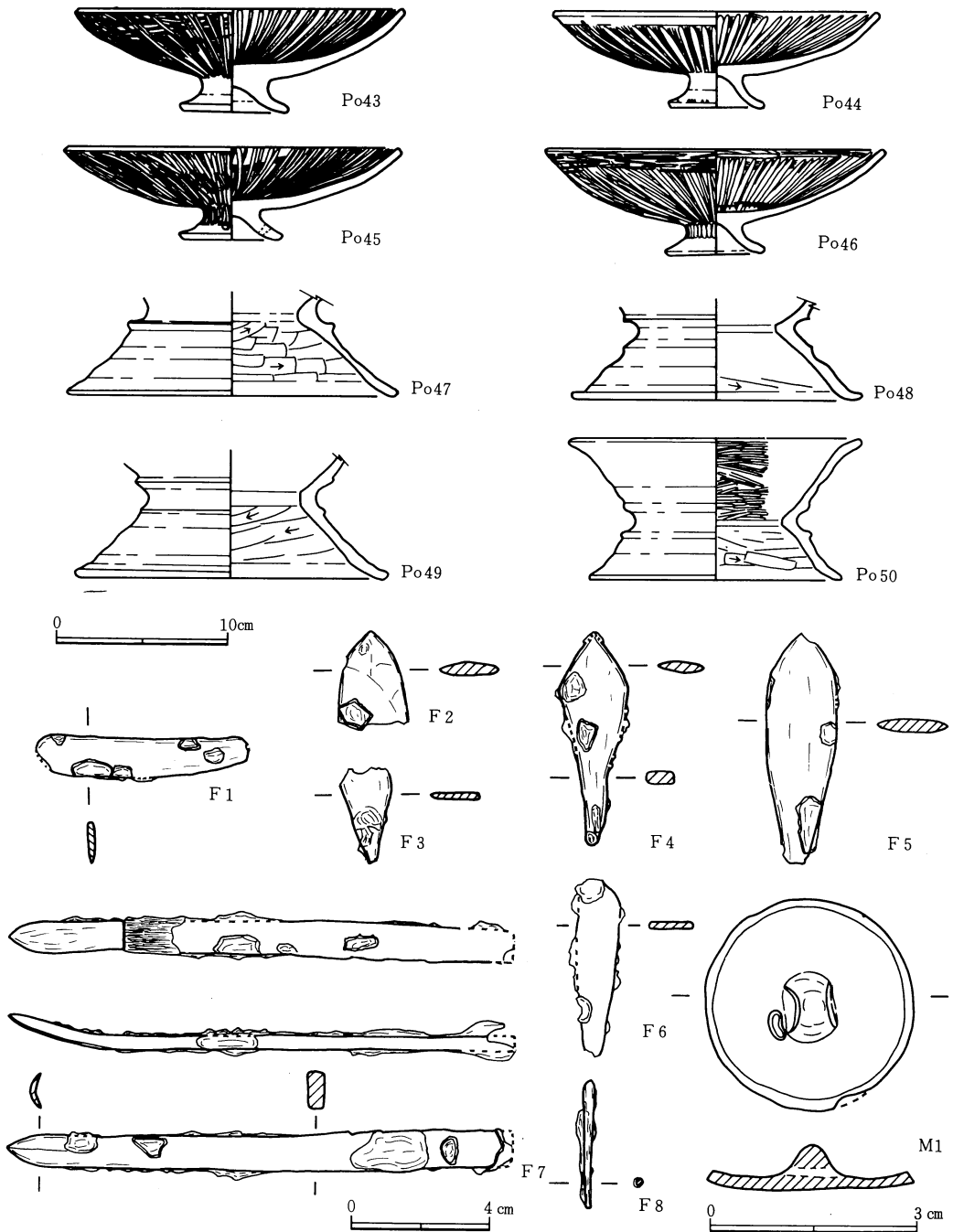
挿図304 S I 138遺物図その1 (S = 1/4)



挿図305 S I 138遺物図その2 (S = 1/4)



挿図306 S I 138遺物図その3 (土器 S = 1/4、土玉 S = 1/2)



挿図307 S I 138遺物図その4 (土器S = 1/4、素文鏡S = 1/1、鉄S = 1/2)

S I 139 (挿図308・309, 図版62・80)

10 I 地区, 10 H 地区にまたがり, 75号墳の下方に位置する。周辺には北側に S I 121・S I 127, 東に S I 138 があり, 75号墳第 1 埋葬, 10 H S K 05 に切られ, S B 29 を切ってつくられている。プランは一辺 4.64 m の方形で, 壁高は西側で最大値 32 cm, 北側で最小値 13 cm

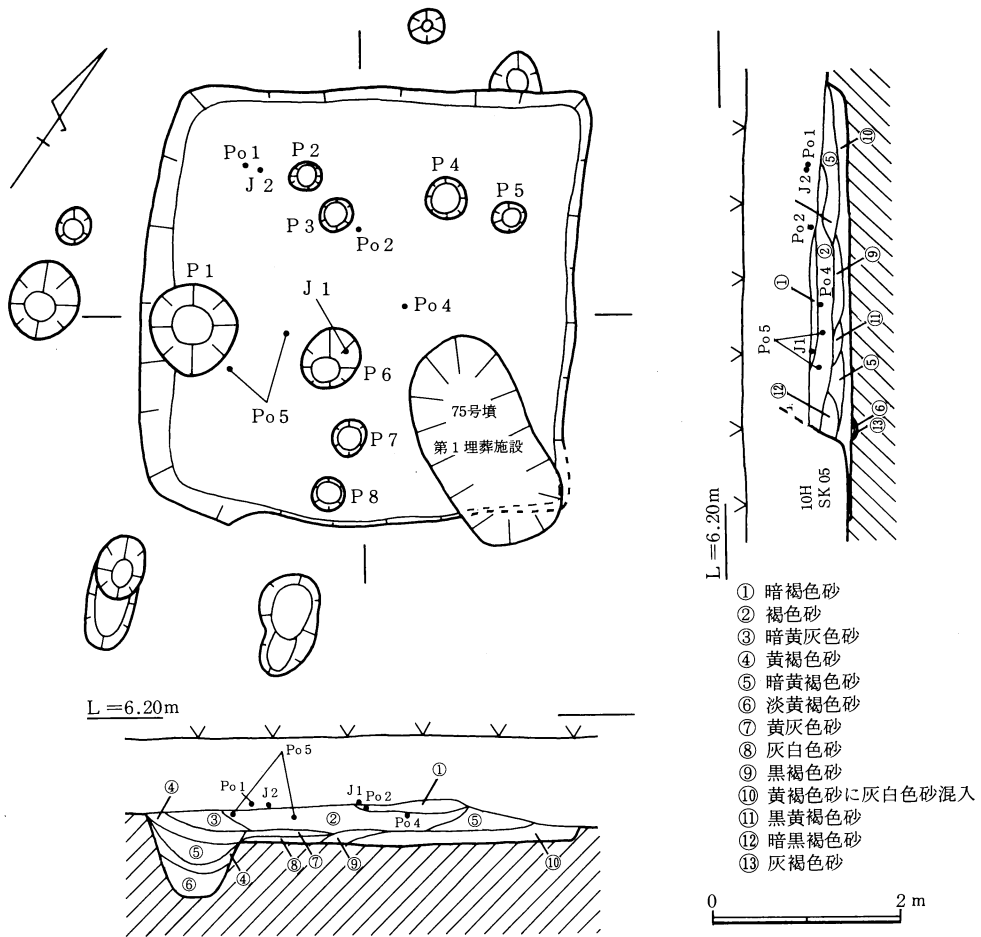


插图308 S I 139遺構図 (S = 1/80)

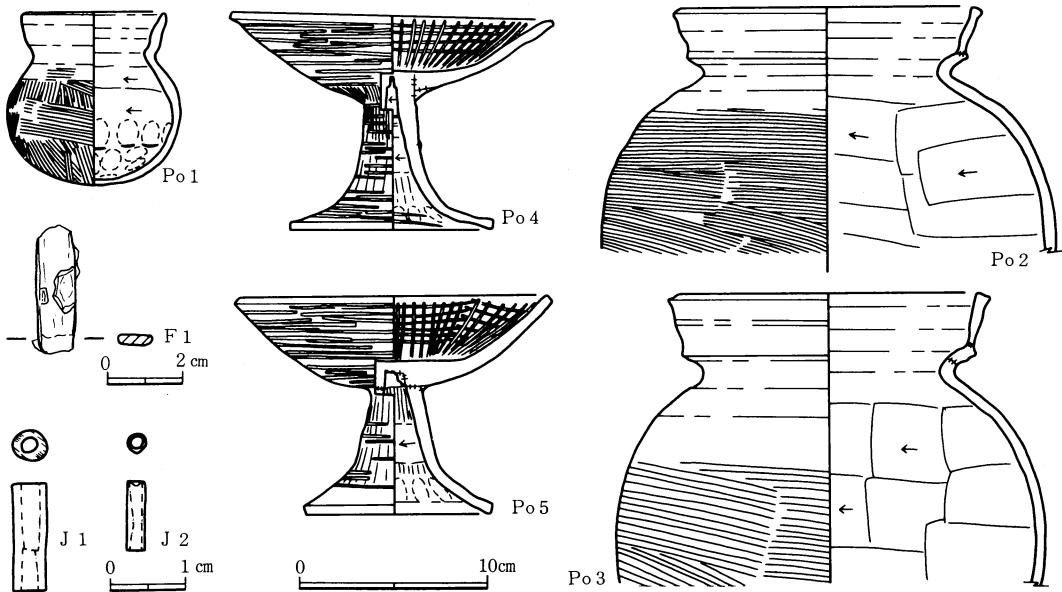
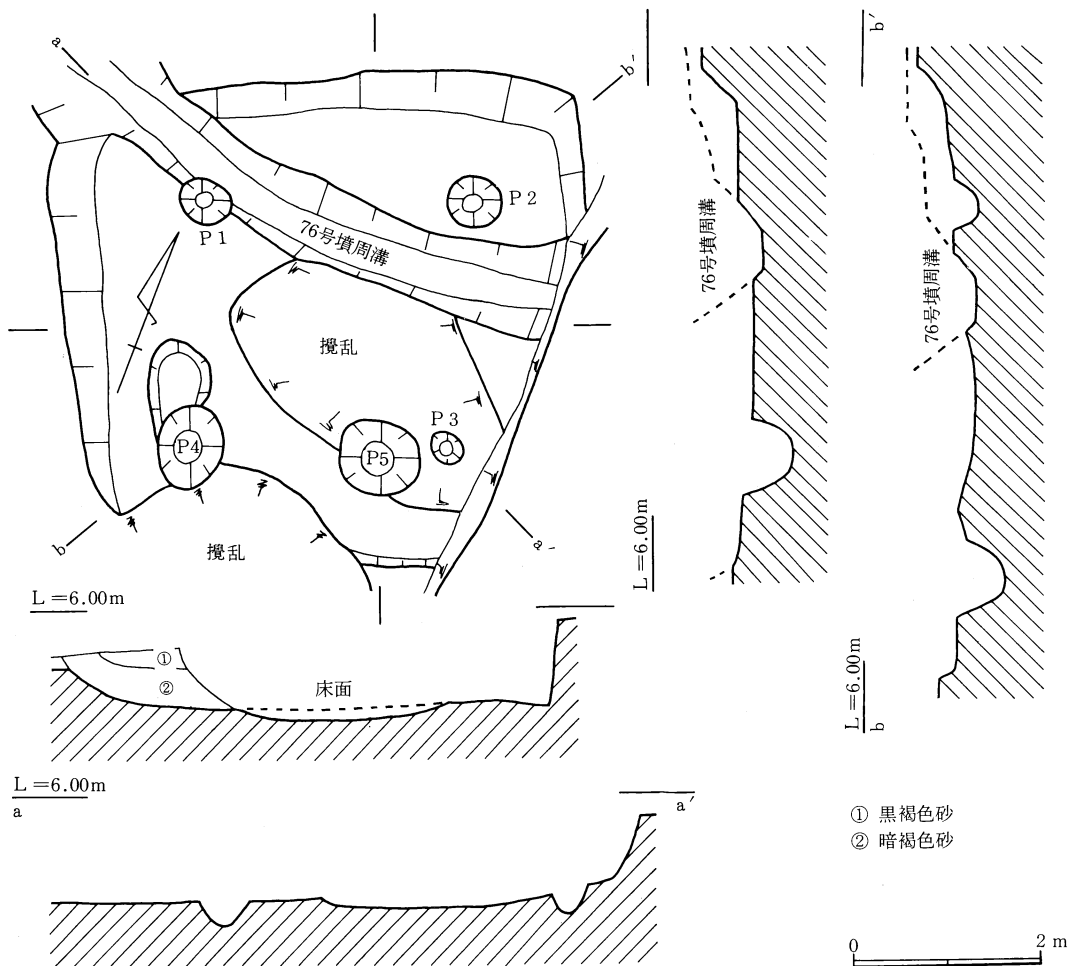


插图309 S I 139遺物図 (土器S = 1/4、鉄S = 1/2、玉S = 1/1)

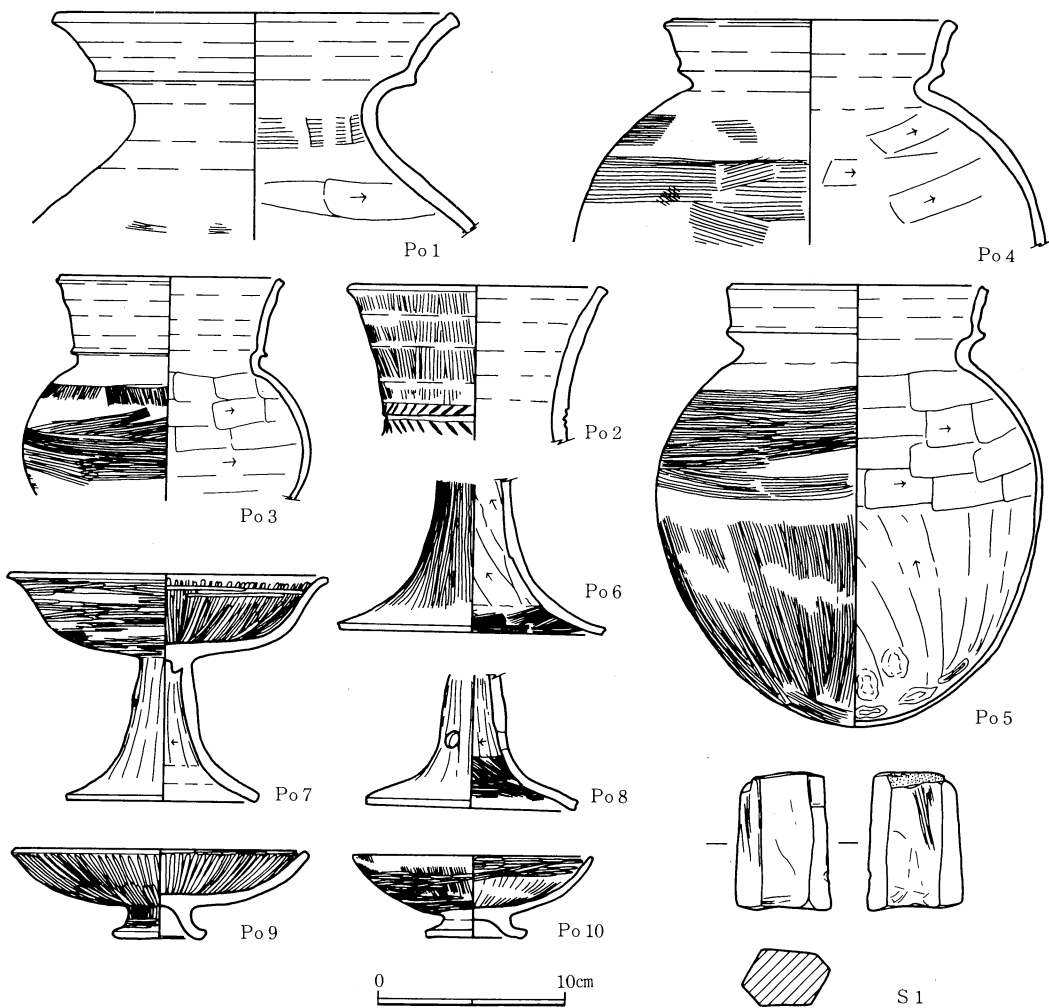
を測る。床面積は17.6㎡と推定される。ピットは床面で8個検出したが、位置・深さとも対応するものは見い出せず、構造柱跡は不明である。周辺にも多くのピットがあるがそれらとS I 139との関係は分からない。時期は長瀬Ⅲ期であろう。

S I 140 (挿図310・311, 図版63・80)

9 H 南西区にあり、77号墳の南東に位置し76号墳の周溝と切り合っている。切り合い関係は76号墳の方が新しい。また中央・南側は重機によって破壊され、東側は調査地域外のため未調査である。平面形は方形になろう。床面の大きさは、長辺4.94m、短辺4.74mを測り、主軸はN-19°-Wである。床面積は約23.4㎡であろう。側溝はみられない。ピットは床面で6個検出したが構造柱と考えるものはP1～P4である。プランはP1から順に(56×44-35), (56×54-28), (38×32-29), (84×68-51) cmを測り、柱穴間距離はP1-P2間から2.82, 2.60, 2.70, 2.60mを測る。特殊ピットは検出できなかったが中央部にあり破壊されたとも考えられる。遺物は土器類のほかに砥石(S1)1点が出土し



挿図310 S I 140遺構図 (S = 1/80)



挿図311 S I 140遺物図 (S = 1/4)

ている。時期は遺物より長瀬Ⅱ期と考える。

注1 『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書 Ⅲ』 P34・54 鳥取県教育文化財団 1981

注2 『 〃 』 P48 〃 〃

注3 本書 P113, 133

第3節 建物跡・柵列等

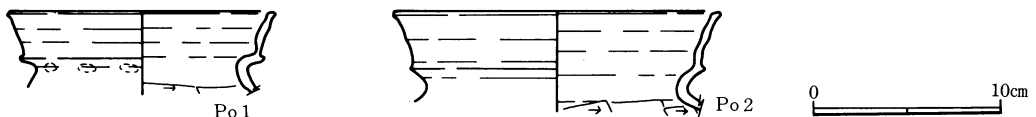
56年度後期調査地区で検出した建物跡は、 2×1 間1棟、 2×2 間1棟、前方後方状の溝を有する 1×1 間1棟の計3棟である。その他柵列、建物跡状の遺構等を検出した。

S B 29 (挿図312~313, 図版63)

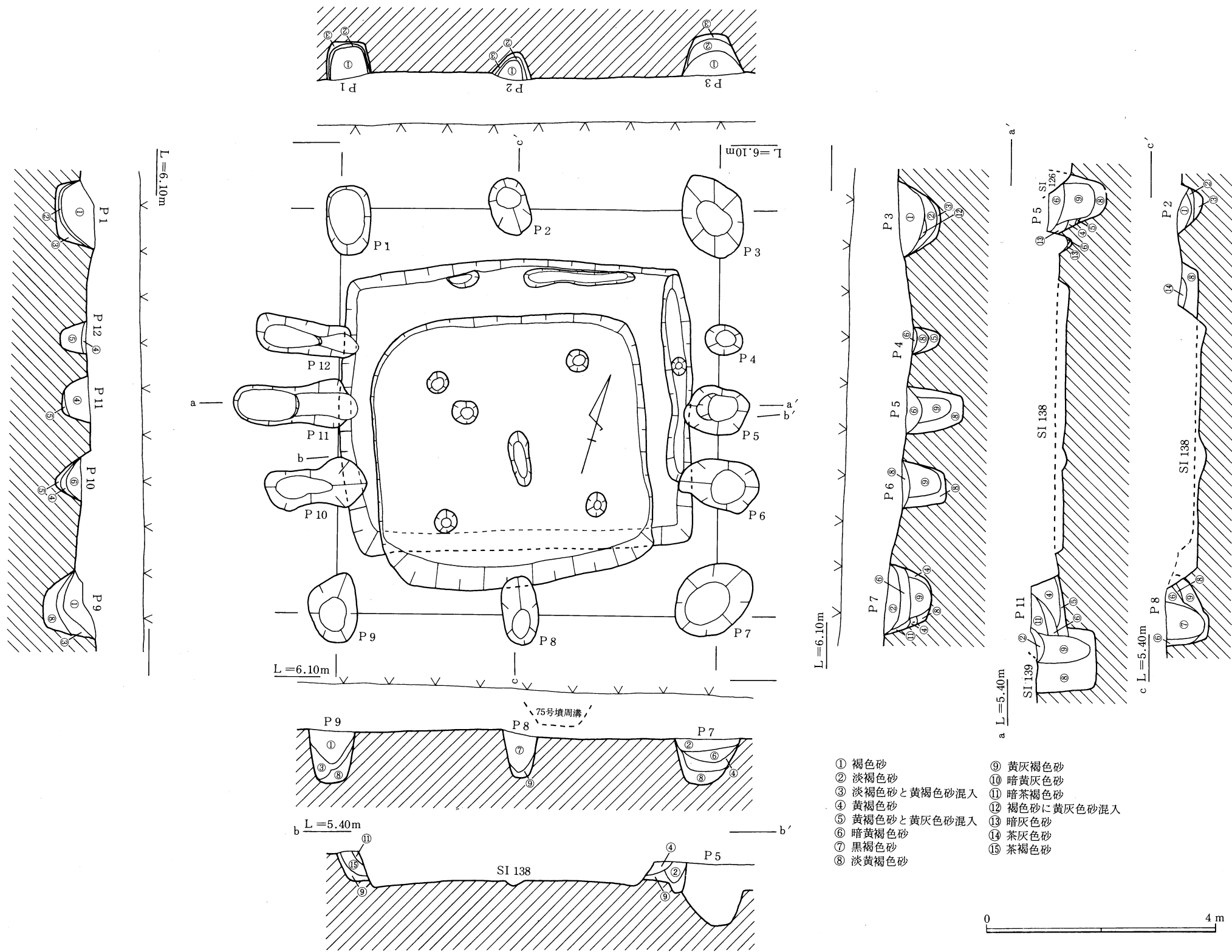
10 I 地区の南東端に位置し、一部9 I・10 H地区にまたがる。周辺には北西へ約10mの所にS B 40、南西へ約8mの所にS B 30がある。切り合う遺構はS I 126, 127, 138, 139, 75号墳と沢山あるが、S B 29はそれらより古いと考えられる。主軸は $N-15^{\circ}-W$ を振る。柱穴と考えられるピットは計12であるが、そのうち構造柱跡と確信できるピットは、P 1 ($120 \times 76-67$)、P 3 ($152 \times 104-75$)、P 7 ($152 \times 108-82$)、P 9 ($120 \times 80-94$) cmである。またP 2 ($100 \times 64-59$)、P 8 ($120 \times 56-85$) cmもその可能性が強い。以上のように考えてS B 29は桁行2間、梁間1間の建物と思われる。柱穴間距離はP 1より順に3.12, 3.48, 7.12, 3.40, 3.20, 7.12mを測る。それぞれの柱穴底の絶対高はP 1より順に4.35, 4.39, 4.18, 4.27, 4.35, 4.26mで21cmの差がある。ところでP 3-P 7間、P 1-P 9間にもピットが各々3個ある。西側のそれはS B 29の主軸に垂直方向に延びているが東側は楕円形に近い。おそらくS I 126築造前は西側と同じ形態をとっていたと思われる。これらのピットは位置的に補助柱の可能性が強い。各ピット底の絶対高はP 4より順に4.12, 3.74, 4.02, 4.10, 3.85, 4.30mと、P 5・P 11が極めて深い。最深部がP 3-P 7線上、P 1-P 9線上から外れること、その中間的位置にあることから棟持柱的役割を果たす柱穴と思われる。各ピットの規模はP 4 ($68 \times 52-55$)、P 5 ($112 \times 84-100$)、P 6 ($136 \times 104-76$)、P 10 ($180 \times 108-75$)、P 11 ($216 \times 68-100$)、P 11 ($180 \times 64-58$) cmである。これら計12個の柱穴群は長辺6.1、短辺4.8mの最大壁高42cm(南西側)、最小壁高25cm(北側)の方形の掘り込みを囲む配置をとり、この掘り込みはS I 138のテラスではなく、S B 29に伴う遺構と考えられる。

以前当遺跡より多くの埴輪が検出されたが、その中の家形埴輪の原形はかつて当地に実在したと推定されよう。S B 29あるいはS B 30・40といったおそらく高床建造物の実像を考える上で、こういった家形埴輪群は大きなヒントを与えてくれよう。

さてS B 29の遺物であるが、各ピットより土師器片、弥生片が出土しているが図化できるものはない。結局方形の掘り込み内より検出した甕口縁部破片(Po1・2)を載せた。時期は長瀬I~II期と考える。



挿図312 S B 29遺物図 (S = 1/4)



- ① 褐色砂
- ② 淡褐色砂
- ③ 淡褐色砂と黄褐色砂混入
- ④ 黄褐色砂
- ⑤ 黄褐色砂と黄灰色砂混入
- ⑥ 暗黄褐色砂
- ⑦ 黑褐色砂
- ⑧ 淡黄褐色砂
- ⑨ 黄灰褐色砂
- ⑩ 暗黄灰色砂
- ⑪ 暗茶褐色砂
- ⑫ 褐色砂に黄灰色砂混入
- ⑬ 暗灰色砂
- ⑭ 茶灰色砂
- ⑮ 茶褐色砂

插图 313 SB 29 遺構図 (S = 1/80)

S B 30 (挿図314・315, 図版63)

10H地区の西側に位置し、一部11H地区にまたがる。他の遺構との位置関係で言えば、S I 124の南東、S I 121・139の南西、5号墳の南東、75号墳の南西、76号墳の西方に位置する。切り合い関係はS I 125, 10H S K 01, S B 40に伴う前方部の溝状遺構、75号墳、77号墳の間に認められるが、そのいずれよりもS B 30の方が古いと考える。主軸はN-17°-Wである。構造柱跡をP 1~8と見て、桁行2間、梁間2間の掘立柱建物跡と考える。柱穴規模はP 1 (2.5×1.45-1.40), P 2 (1.75×1.72-1.49), P 3 (1.60×1.03-1.57), P 4 (1.51×0.91-1.49), P 5 (2.07×1.48-1.58), P 6 (2.17×1.05-1.48), P 7 (1.82×1.35-0.83), P 8 (1.09×0.98-0.44)mである。柱穴間距離はP 1より4.64, 4.65, 3.88, 3.60, 4.80, 4.40, 3.52, 3.88mを測る。東桁側に当るピットからはP 1 (50×49-46), P 2 (59×51-43), P 3 (101×79-6)cmの柱痕を、又西桁側に当るピットからはP 6 (125×104-85), P 7 (122×85-58)cmの柱痕が検出された。おそらく、東側の桁には直径40cm, 西側には55cm位の柱木が使用されたものと推定される。これらの桁側に当たるピット群は溝状の遺構S D 01・02を伴っている。S D 01は長さ9.72, 幅2.32(南側)~1.96(北側)m, 壁高68(最大), 17(最小)cmを測り、東壁際には6個のピットが列をなす。規模はP 13より順に(38×35-49), (33×27-29), (25×22-52), (47×36-23), (42×32-32), (32×26-34)cmである。間隔には規則性を認めがたい。S D 02は長さ9.68, 幅1.80(南側)~1.56(北側)m, 壁高82(最大), 48(最小)cmを測り、その中央部にはS D 01と同様6個のピットが列をなす。規模はP 19より順に(34×32-25), (29×24-20), (27×27-19), (30×29-23), (26×26-22), (28×26-16)cmである。間隔には規則性を見い出せない。これらP 13~24はS D 01・02に切られているからその築造前にあったと考えられる。またP 1~3, P 5~7も溝との切り合いは認められず、築造時において、これらの柱穴より溝は古くはならないと思われる。溝が掘られたのはおそらく建物体時であり、建物自体はP 1~8を基本として建てられたかなり大規模な掘立柱建物であろう。P 13~24はそれに付随する柱穴、例えば床を支える柱、あるいは柵列のような役割を果たすピットと考えたい。ところでP 4, P 8の南側、北側にもやや浅めではあるがピットが2個ずつある。P 9, 12は構造柱跡に近接しすぎるくらいがあるが棟持柱の可能性がある。これに対しP 10, P 11は建物の内側にあり南北に根太^{ネダ}を渡す柱跡の可能性もあろうか? 建物のほぼ中央にはS K 01がある。規模は南北4.04, 東西1.72m壁高48(南側), 35(北側)cmを測る。S B 30との関係は不明である。このようにS B 30は当遺跡の中でもかなり大規模で、風変わりな建物である。そのことは柱穴の大きさ、深さ、配置、柱穴間距離の長さ等によっても推定される。また北に隣接するS B 40が複雑な施設を持つ巨大な高床建物であるのに対し、S B 30がそれより古く、簡素であるということは、S B 30はS B 40築造前に、その役割を

果した建物であろうか？。

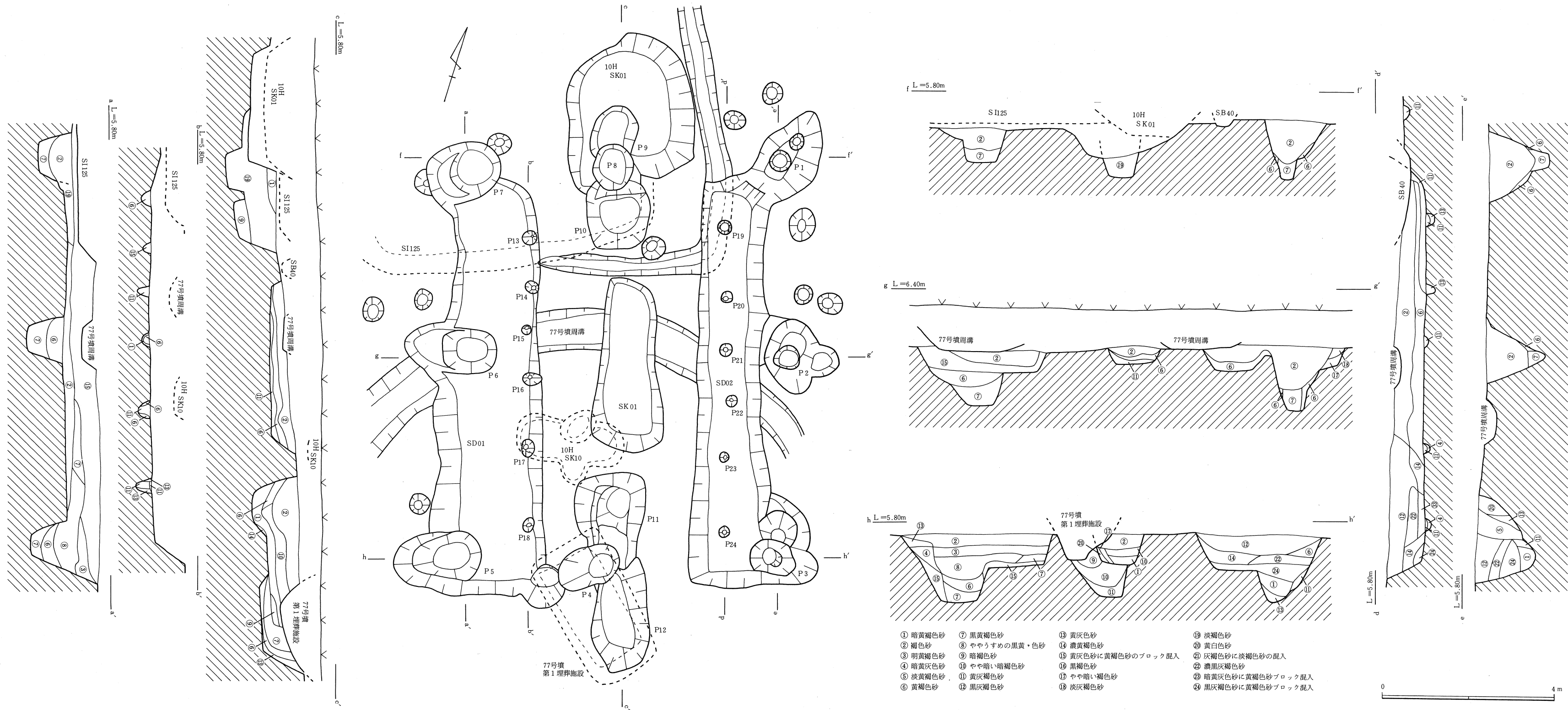
建物は破片ばかりで、図化できたのは甕口縁部破片 (Po1, S D02出土), 高坏坏部 (Po2, P3出土), 高坏型器台 (Po3, P6出土) のみであった。時期は切り合い関係, 遺物より長瀬 I 期と考える。



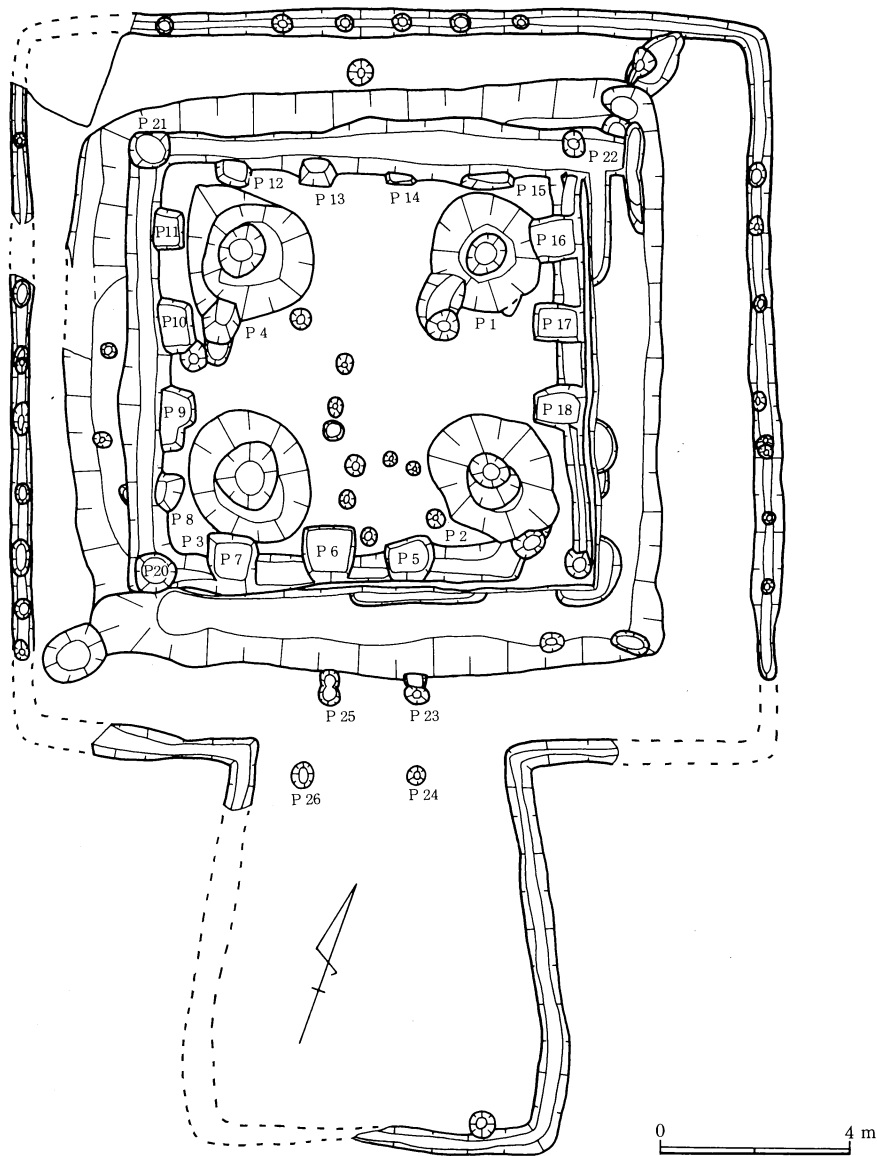
挿図314 S B30遺物図 (S = 1/4)

S B40 (挿図316~321, 付図3, 図版63・80・81)

10 I・11 I・10 H・11 H 地区にまたがり, 71号墳の南西, S I 127の西に位置する。西側で5号墳, 南西側でS I 124, 南側でS I 125, S B30, 東側でS I 121と切り合っている。S B40はS I 121・122・124・125・5号墳より古く, S B30より新しい。この建物はほぼ正方形に掘り込まれた竪穴住居状の中に建てられている。主軸はN-158°-Eにとる。竪穴住居状の掘り込みは一辺約12.6mを測る。この中にP1~4の4本の大きな柱穴があり, それぞれ2段に掘り込まれている。1段目のプランはP1から順に(2.56×2.15-1.19), (3.12×2.14-2.03), (2.80×2.48-1.75), (2.72×2.60-1.34)mである。2段目の柱穴のプランはP1から(68×48-66), (84×64-41), (144×96-77), (108×96-72)cmを測る。柱間距離はP1-P2間より4.56, 5.00, 4.72, 4.80mを測る。竪穴状の掘り込みの中, P1~4の外側に方形にめぐる溝を検出した。この溝には内側に向けて四角形のピット(P5~P18)が対面にほぼ対応するかたちで検出した。(P8, P15に対応するピットは検出されなかった。)これらのピットは縦0.6×1.4, 横0.2~1.04, 深さ0.33~0.65mでピット間距離は1.8~2.1mを測る。南・東側のピットは溝より深い, 北・西側では溝より浅い。P5~P18に柱痕と思われるものはみあたらなかった。方形にめぐる溝の四隅にP19~P22の柱穴を検出した。プランはP19から順に(56×56-64), (92×88-78), (86×76-30), (48×52-55)cmで柱穴間距離は約9mを測る。方形にめぐる溝, 溝の内側にある四角形のピット, 溝の四隅にある柱穴はこの建物に付随する遺構と考えられ, 構造的には「縁」, 「軒先柱とその支柱」, 「扉」, 「壁」などの建築物が考えられる。方形にめぐる溝の外側の東と南側にL字状の溝を検出した。このL字状の溝は方形にめぐる溝より新しく, 一部方形にめぐる溝を切る。この溝は竪穴状の落ち込みのすぐ下に位置し, 長さ10m, 幅1.2~1.8m, 深さ0.58~1.17mを測る。溝は急激に掘り込まれ, 南側で深くなっている。この溝は, 建物を建てた後溝を掘ったものと思われる。P1とP16, 構造柱の柱穴と四角

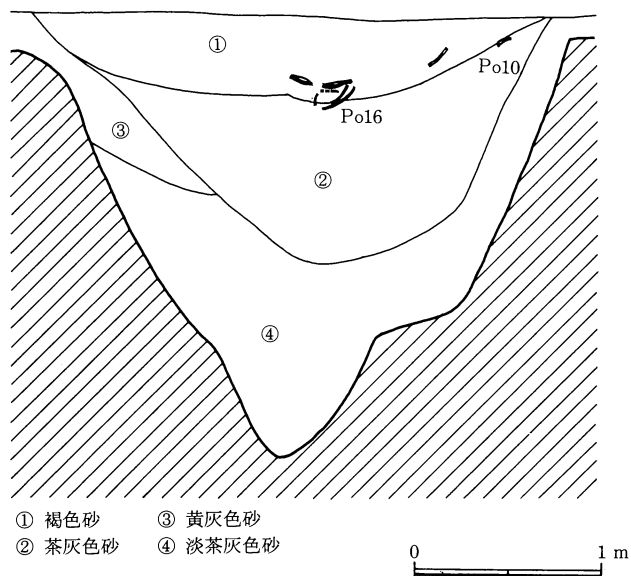
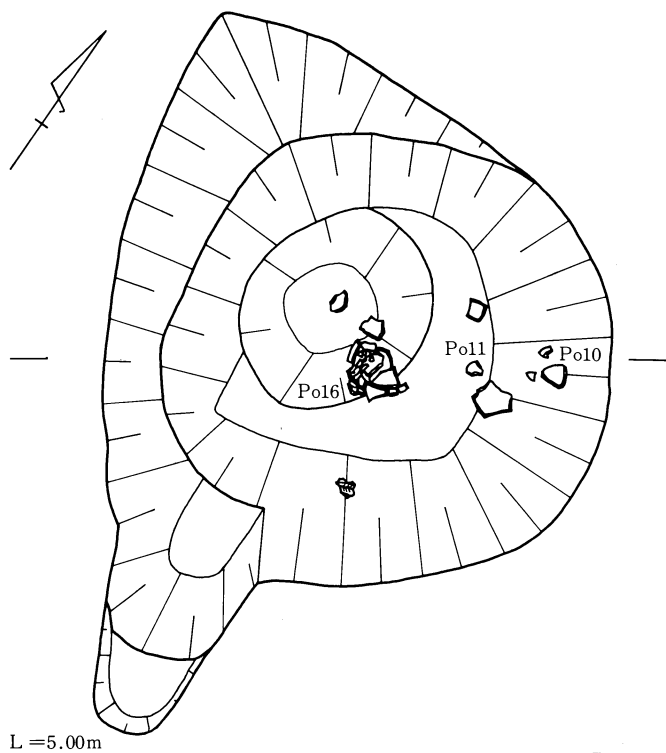


挿図315 SB30遺構図 (S=1/80)



挿図316 SB40遺構図 (S=1/160)

形ピットは、P1とP16、P3とP7とが切り合っている。調査時にはP1・P3が新しくなかったが柱は抜きとったとみられ建築時の切り合いは不明である。しかし、四角形ピットを先に造れば柱を入れる時に壊れる可能性があるため、構造柱の柱穴を先に掘り、柱を入れた後四角形ピットを掘ったものと考えられる。四角形ピットと内側の溝との関係は不明である。南・東側の逆L字状の溝と内側の溝はP7付近で少し切り合っている。切り合い関係は、逆L字状の溝が新しい。この建物は、堅穴住居状に掘り込んだ後柱穴を掘り柱を立てたその後四角形ピット及び溝を掘り最後に逆L字状の溝を掘っている。SK01・02は、P1、P4に対しいずれも斜めに掘られている。P2、P3にはみられなかった。これは、



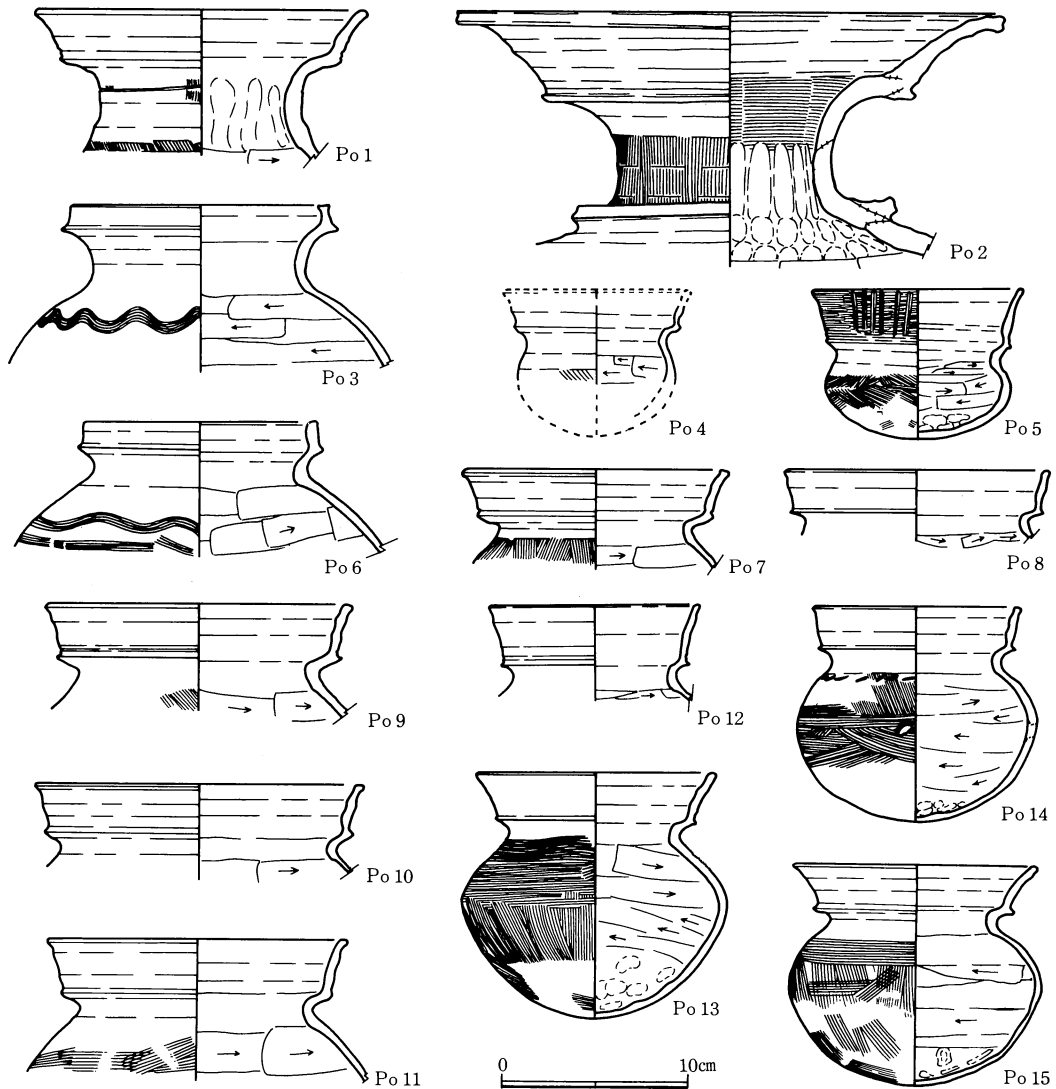
挿図317 S B40、P 4 遺物出土状況図 (S = 1/40)

この建物を廃棄する時の抜き取り穴とも考えられる。この建物は、柱穴が深く大きなものであり、柱そのものも大きかったと思われる。また、このことからかなり高くしっかりした建物と考えられ、高床式建物を想像させる。この建物の外側には前方後方状の溝がまわる。建物は後方部にある。大きさは長さ24.6m、前方部幅12.3m（推定）、後方部16mで幅36～68、深さ9～30cm（溝底より）を測る。後方部の溝の中にはピットがある。東側で7、北側で6、西側で8個計21個検出した。プランは長径68、短径36、深さ23cmのものが多い。ピット間距離は1.0～2.12mを測る。このピットは柵列の柱穴と考えられ、建物を柵で囲っていたものと思われる。しかし、前方部の溝から柱穴は検出できなかった。前方後方状の括れ部中央にはP23～26があり、プランはP23から順に(48×36-26)、(40×40-20)、(44×44-21)、(60×44-21)を

測る。P23-P24は、建物に対して直交するが、P25-P26はややずれる。しかし、その直線上に建物の中央部が当たることから梯子状のものがあ、その柱穴とも考えられる。

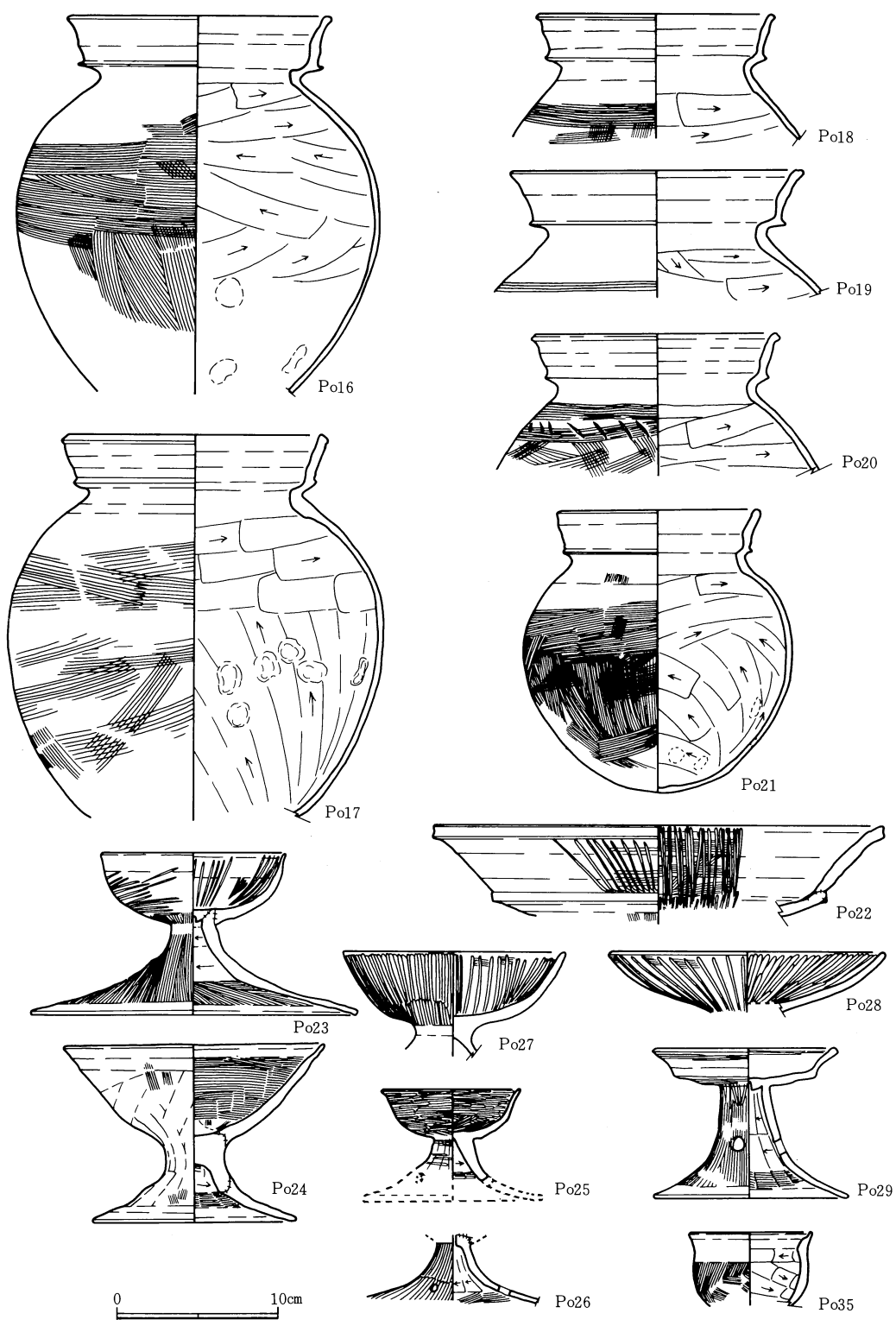
S B40は当遺跡の中で最も大きな建物であり、当時のシンボリックな建物であろう。

遺物は遺構内からあまり出土していないが北側の溝から鉄斧（F2）、逆L字状の溝の

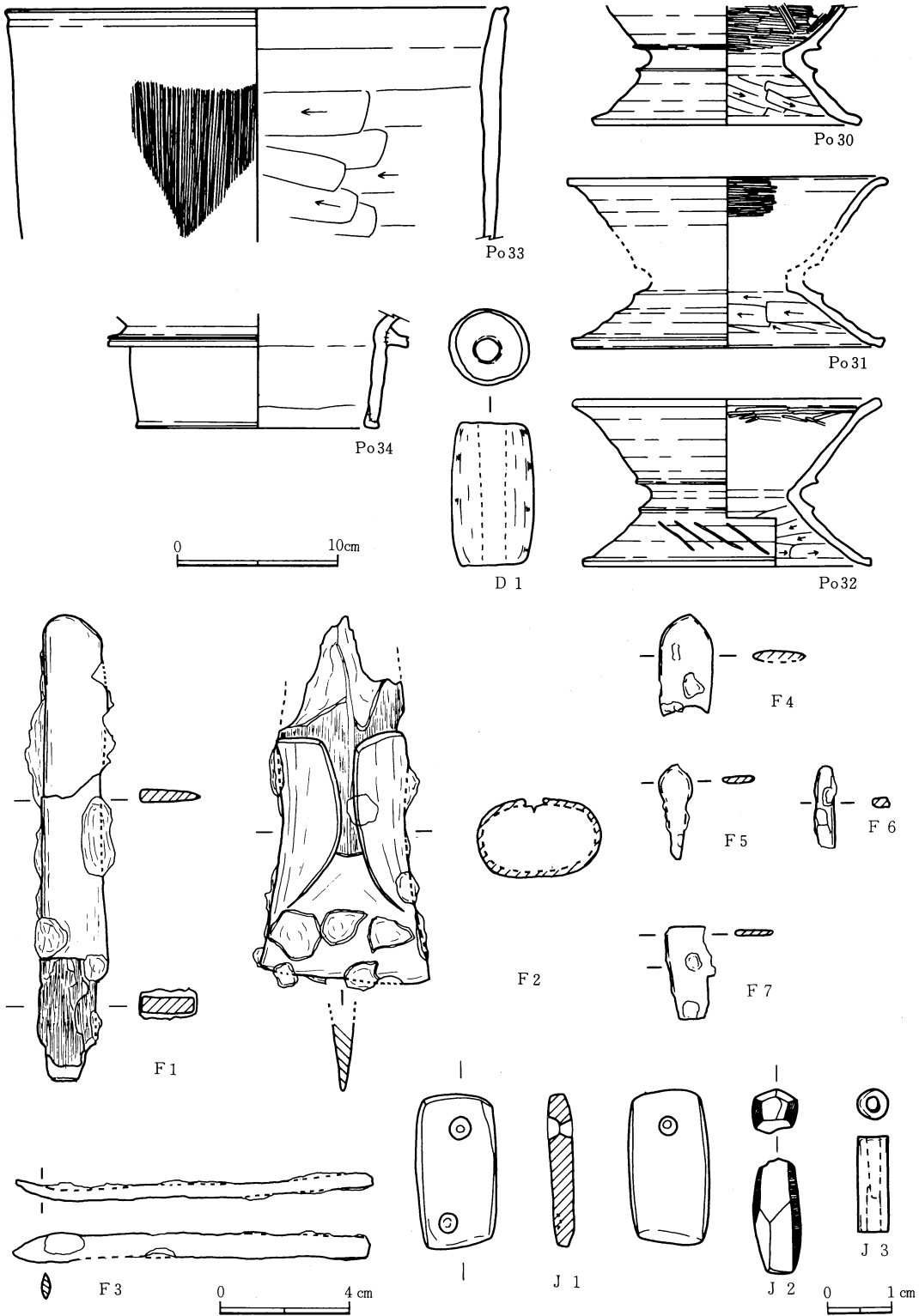


挿図318 S B40遺物図その1 (S = 1/4)

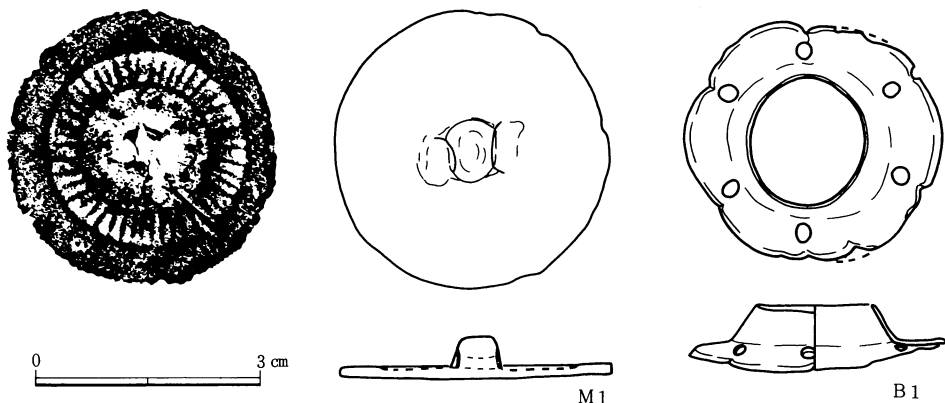
南側で管玉未製品 (J 2) が出土している。柱穴内遺物としては、P 4 から比較的まとまって土師器片が出土した (P o 4 ・ 7 ・ 10 ・ 16 ・ 18 ・ 31)。P 1 内では鉄鏃 (F 5)，大型の土錘 (D 1) が浅い位置で出土している。低脚坏 (P o 27) は P 1 ・ 2 ・ 3 から，甕 (P o 6) は P 1 ・ 4 から分割した状態で出土した。同一個体となるこれらは意図的なものと推定される。その他，壺口縁部 (P o 3) と高坏坏部 (挿図301, P o 2) は S I 136 内で，大型器台 (挿図243, P o 51) は S I 122 内で検出しているが，S B 40 との遺構関係に一概に結びつけることはできない。尚，S B 40 の上層で B 1，同じく上層にある S D 02 の肩部で M 1 を検出した。S B 40 の周辺から銅鏃・素文鏡が多く出土している。これらは S B 40 に関する遺物とも考えられる。S B 40 の時期は長瀬 II 期の古い時期と考える。



挿図319 S B 40遺物図その2 (S = 1 / 4)



挿図320 S B40 遺物図その3 (土器・土製品S=1/4、鉄S=1/2、玉S=1/2)

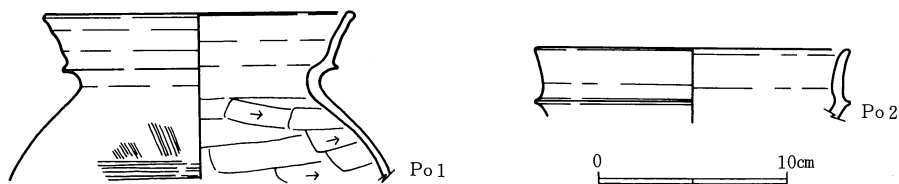


挿図321 SB40遺物図その4 (S=1/1)

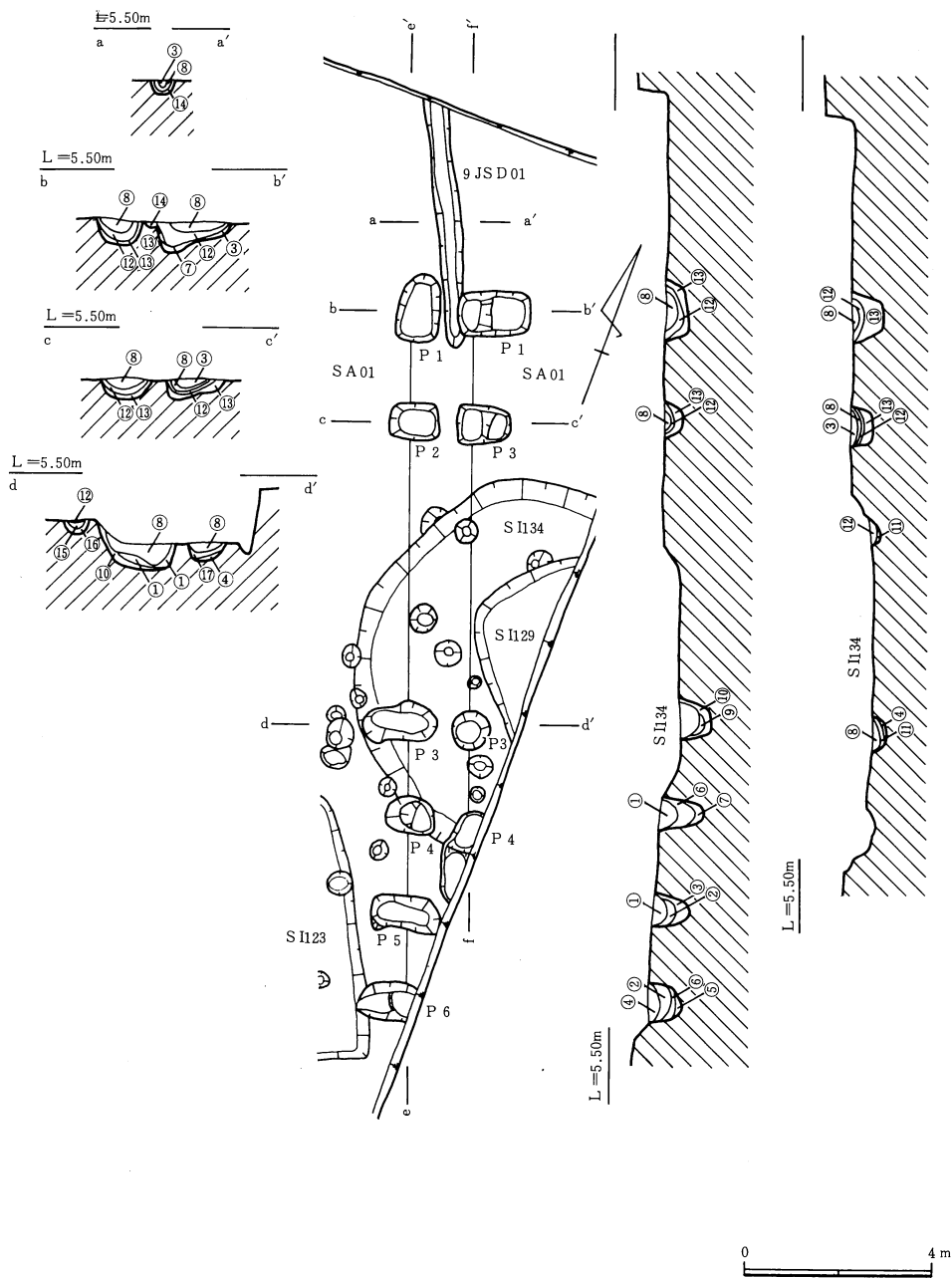
S A01・02 (挿図322・323, 図版64)

S A01・02は9 J地区南西から9 I地区北西に位置し、71号墳とS I 123の東にあり、やや北西に傾いた2列の平行な柵列である。西側の列(S A01)と東側の列(S A02)の間は1.2mで共にP 1の北側と、P 2, P 3の間にピットは見あたらない。S A01は4つのピットが検出されており、プランはP 1から(160×90-64), (110×80-40), (80×80-32), (96×?-16)を測り、各ピットの底の絶対高はP 1より3.74, 3.88, 3.74, 3.82mである。各ピット間距離はP 1より2.4, 6.5, 2.1mを測る。S A02は6つのピットが検出されており、プランはP 1から(88×136-56), (104×80-44), (160×80-56), (104×80-88), (146×72-72), (120×80-72)cmである。各ピットの底の絶対高は3.90, 3.88, 3.50, 3.58, 3.82, 3.98で差は48cmである。各ピット間距離はP 1より2.4, 6.4, 2.1, 2.1, 2.1mを測る。

S A01とS A02は平行で同じ部分のピットが欠落しており、同一のものに附属する柵列と考えられる。この柵列のピットは他の遺構の柱穴より大きく、また方形ないしは隅丸の長方形を呈し、これら近くの遺構に関係するものとは考えられない。これより西22mに位置する大型の建物跡SB40に平行して並び、またSB40の南側には同様に2列の柵列と考えられるものが検出されており、S A01・S A02は共にSB40に関連する可能性が強い。S A01・P 3, S A02・P 3からそれぞれP o 2, P o 1が出土した。



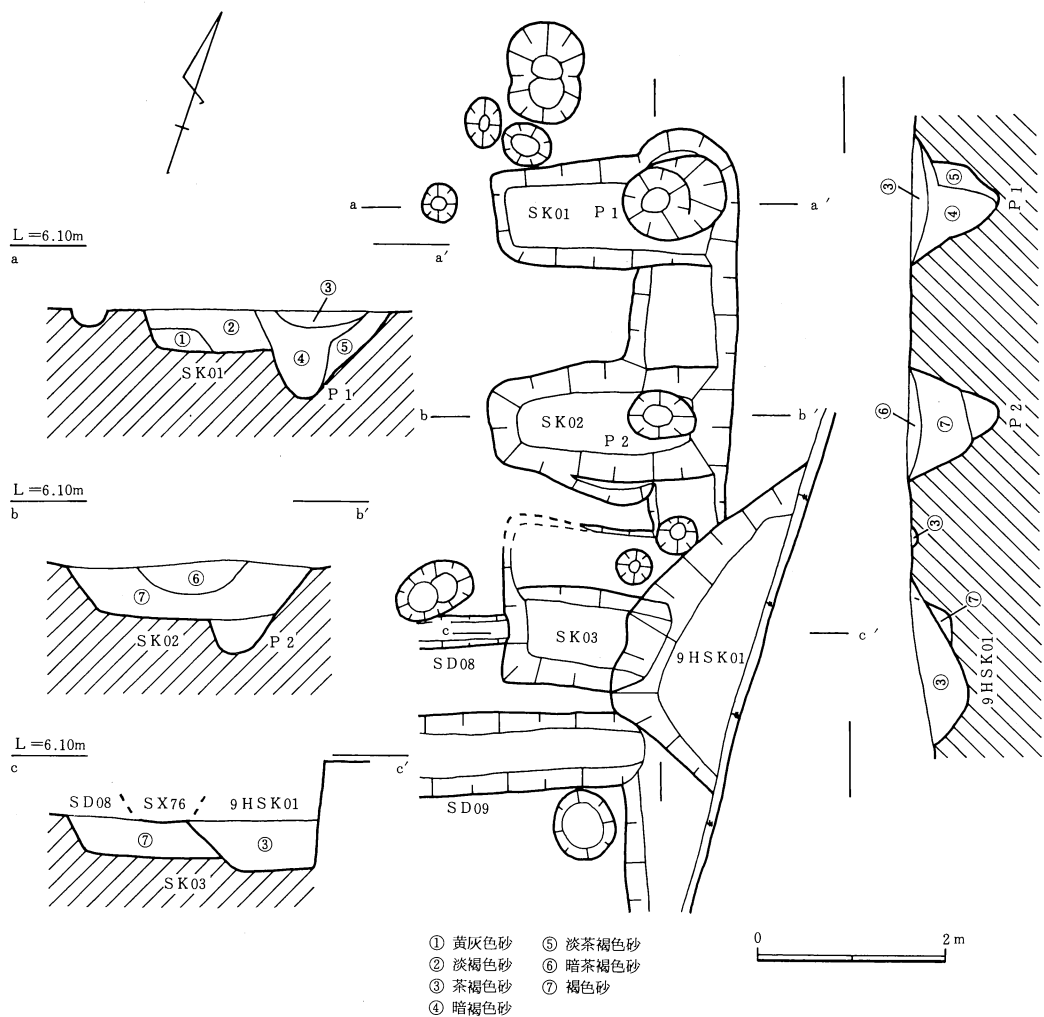
挿図322 S A01・02遺物図 (S=1/4)



挿図323 SA01・02遺構図 (S = 1/160)

76号墳下層SK01~03, P1・2 (挿図324)

9H北西区にあり、77号墳の西、76号墳の直下に位置する。N-27°-Wの方向に溝があり、その溝にほぼ垂直に土壌が3基(SK01~03)存在する。SK01, 02は東側にピットがあるが、SK03は9H SK01によって切られピットを確認することができなかった。



挿図324 76号墳下層SK01~03、P1~P3遺構図 (S=1/80)

土壌のプランは、SK01から順に(2.60×1.16-0.49)，(2.56×1.24-0.57)，(—×1.08-0.49)mを測る。土壌間距離はSK01-02間が2.40m，SK02-03間が2.32mを測る。ピットのプランは、P1から(1.08×0.84-0.33)，(0.72×0.52-0.51)mを測る。溝・土壌・ピットは関連するものとする。それぞれの土壌に対応するものは西側にはみられず東側は調査区域外のため不明である。東側に、それに対応する、あるいは関連する遺構がある可能性も考えられる。遺構の性格は現時点では不明である。図化できる遺物はなかったが、古墳時代の遺構と考える。

第4節 その他の遺構

S D01～09 (挿図325～327, 図版64)

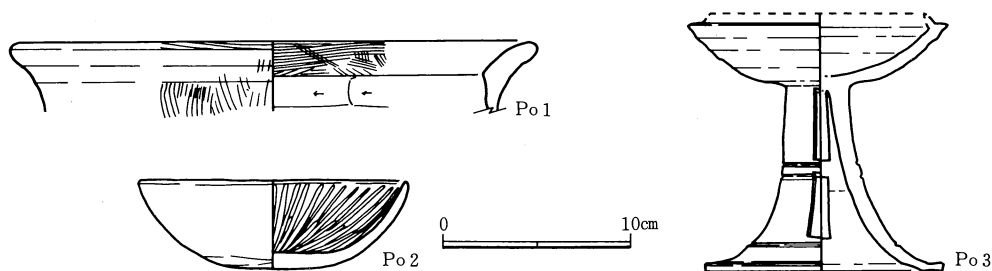
g地区の黒砂層の中層から上層に長短9本の溝を検出した。S D01はほぼ南北の溝で11ラインの東8mを走る。北端は東へ曲がり、南側は57年度調査地区に続く。全長約46m、幅約150cm、深さ約40cmを測り、南側でS D9を切る。S D02はHラインの北を東西に走る溝で、西はS D05を切り、S D01に続く形で終り、東は調査区域外へ続く。長さ約24m、幅約80cm、深さ約40cmを測る溝で、S I 121, 139, 126などの上層を走る。S D03は、11I地区にあり、南はS D01の北端から北へ14m伸びて北東に曲がり調査区域外に続く。全長32m以上、幅約80cm、深さ約30cmを測り、S B40, S I 136, 137の上層を走る。S D01, 02, 03はS B40のP2の上から放射状に伸びているように見え、層位的に見てもこの3本の溝は同時期とみられ、何らかの関係があるとみられるが、不明である。

S D04はS D01とS D02の間の陸橋部の南に位置する溝で、長さ約3.2m、幅約30cm、深さ約6cmを測る。S D05はS D01とS D02の間に位置する溝で、全長2.2m、幅約30cm、深さ約8cmを測る。南端はS D02に切られる。S D04・05は用途・時期とも不明である。

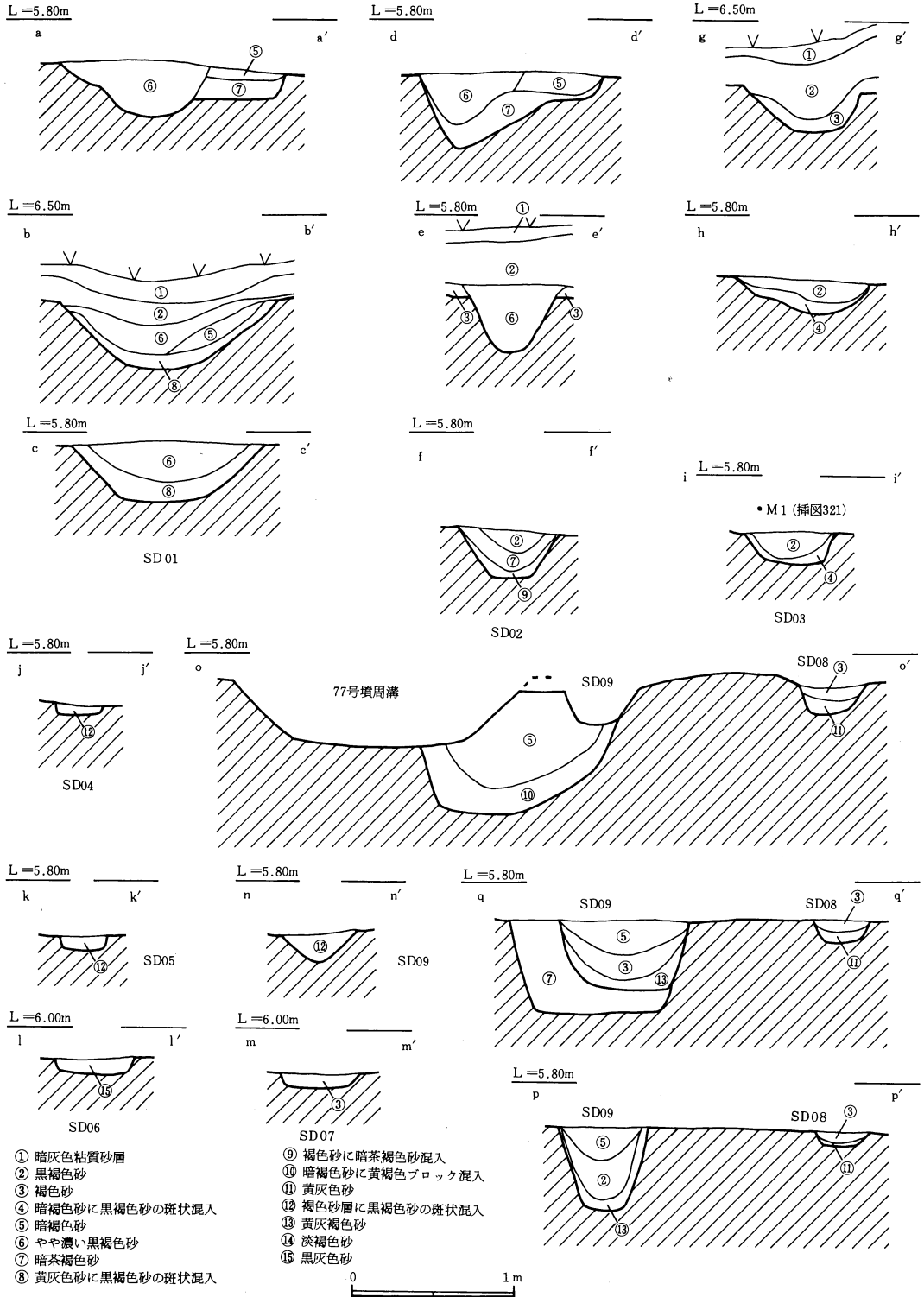
S D06・07は11H地区にあり、下層の溝で、北で2本の溝が交わる。S D06は南は11H S K01に切られる。残存長8m、幅約60cm、深さ約8cmを測る。S D07は南側をS D01に切られ、残存長6m、幅約60cm、深さ約8cmを測る。S D06・07は性格が不明である。

S D08・09は9H地区から、10Hの南西に平行に伸びる溝で、76・77号墳に切られる。主軸はN-72°-Eを振る。S D08は残存長22m、幅約50cm、深さ約14cm、S D09は残存長33m、幅約90cm、深さ60cmを測る。S D08・09は同じ層内にあり、平行であることから深い関係があると思われる。

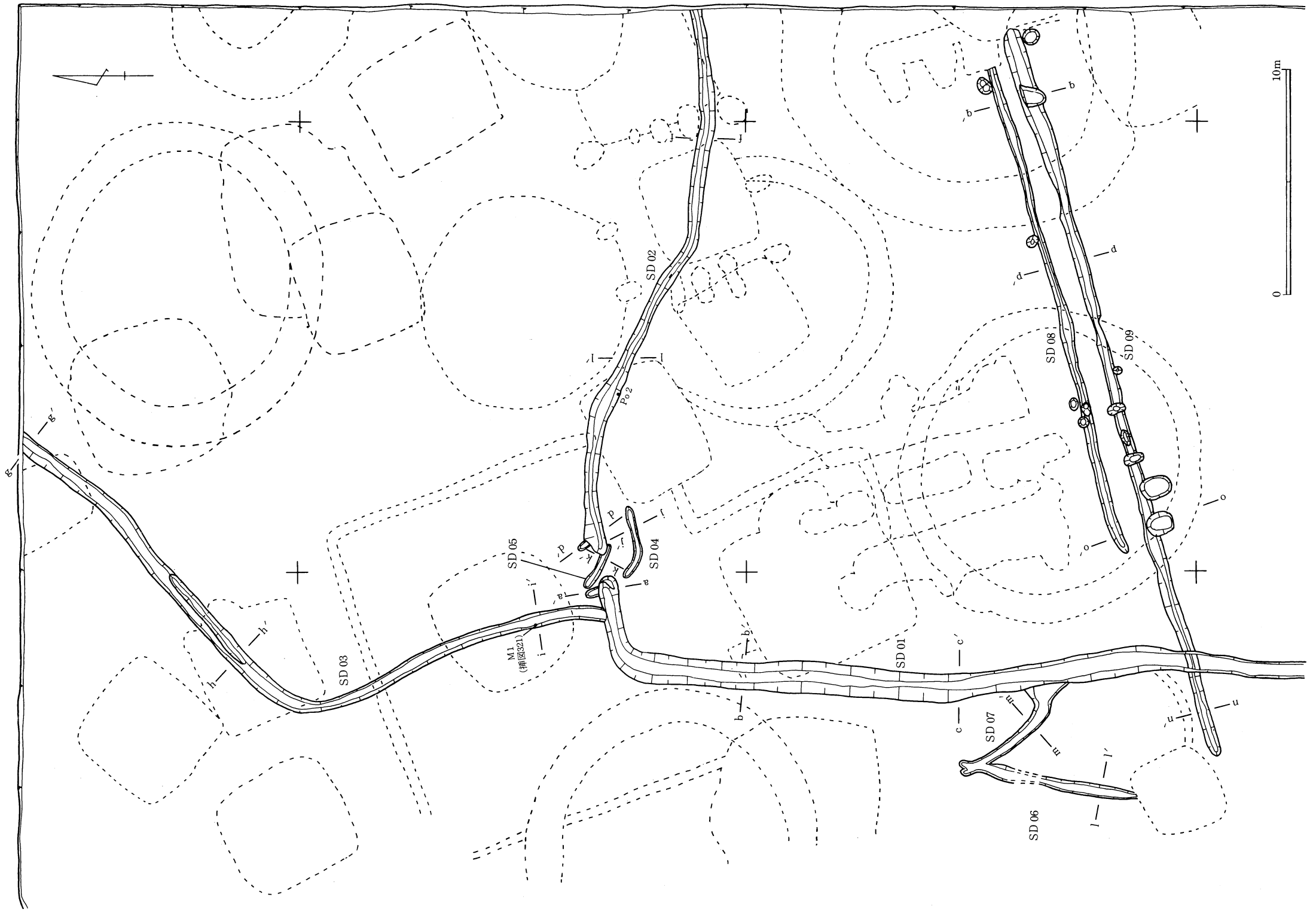
以上9本の溝はいずれも水が流れたような形跡もなく、直接伴う遺溝も現在見つからない。またS D01を除いて溝内から遺物がほとんど出土していない。S D01からはPo1・3が出土している。これらの遺物からS D01は6世紀以降の溝と考えられ、S D02・03も同様の時期と推定する。S D06～09はS D01との切り合い、層位から4世紀後半から5世紀頃の溝と考える。



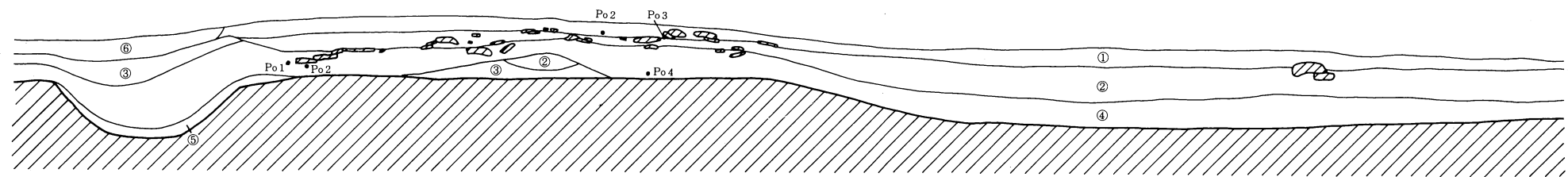
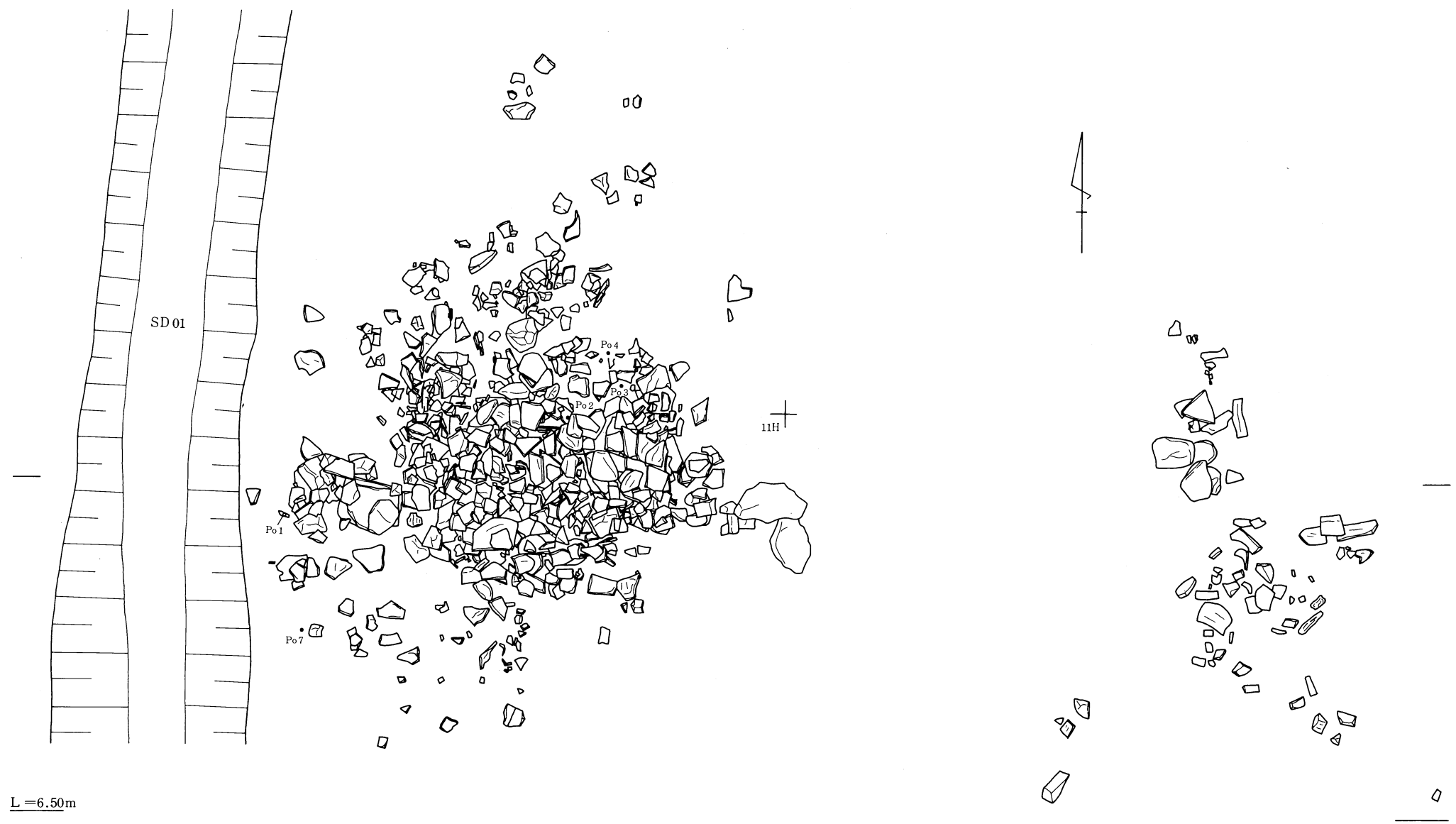
挿図325 S D01～09遺物図 (S = 1/4)



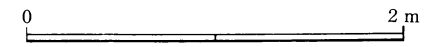
挿図326 S D01~09遺構図その1 (S = 1/40)



挿図 327 SD 01~09遺構図その 2 (S = 1/200)



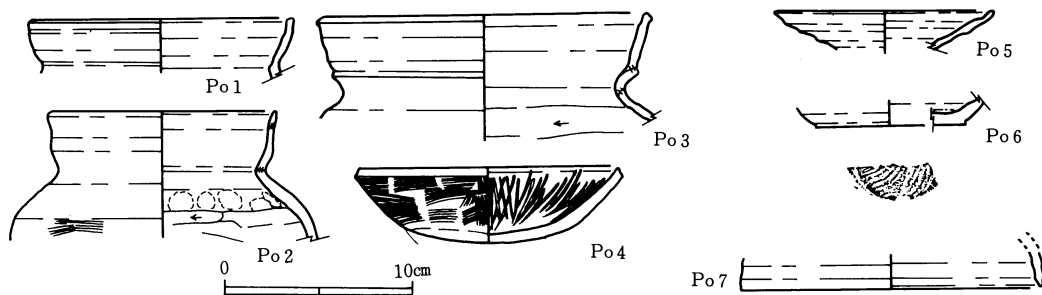
- ① 暗灰色粘質砂
- ② 黒褐色砂
- ③ 固い粘質の暗褐色砂
- ④ 暗褐色砂
- ⑤ 淡褐色砂(少し黄色混じり)
- ⑥ 暗黄灰色(土管をうめるための穴)



挿図328 11H・11I 板石集積遺構遺構図 (S = 1/40)

11H・11I 板石集積遺構 (挿図328・329, 図版65)

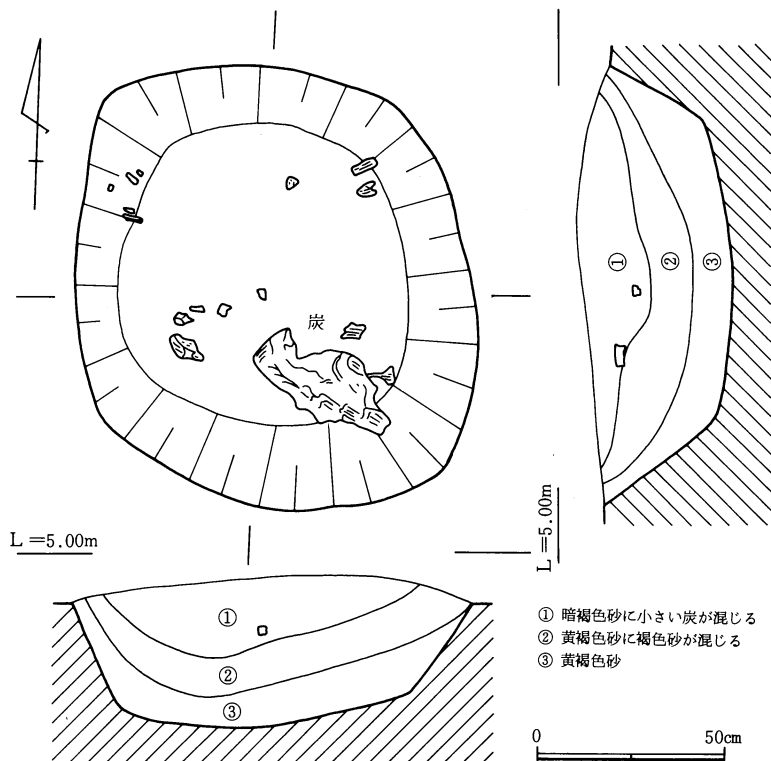
11H地区よりの黒砂層の上層で検出された。最大8mの広がりの中で、特に11H20Sの地点を中心として、半径2mの範囲に板石の大小の破片がかなり密集していた。意図的に配列した形跡はうかがえなかった。集積の厚みは約30cmだが、中央部で特に厚く堆積しているという状況ではなく、ほとんど同じ厚みで広く散在していた。石群内より土師器細片を数点、また特に板石取除き後に土師器碗(Po4)を検出した。Po4以降の時期にこの石群が推積した事が確認できる。この集石群の上層からPo5・6の土師質土器が出土している。すぐ西を南北に走る溝SD01は古墳時代の後期以降に下るものであるが、それよりこの集石群は新しいものと思われる。



挿図329 11H・11I 板石集積遺構遺物図 (S = 1/4)

10J S K 01 (挿図330, 図版65)

10J地区の南東にあり、71号墳墳丘下より検出された。長軸1.15m、短軸1.05m、深さ0.4mを測る。埋砂内より多量の炭片が出土した。炭片は小さいものが多いが、1個木の根の炭と考えられる大きいものが混じる。出土遺物は炭のみで、時期を示すものはない。西1mにS I 132が、南5mにS I

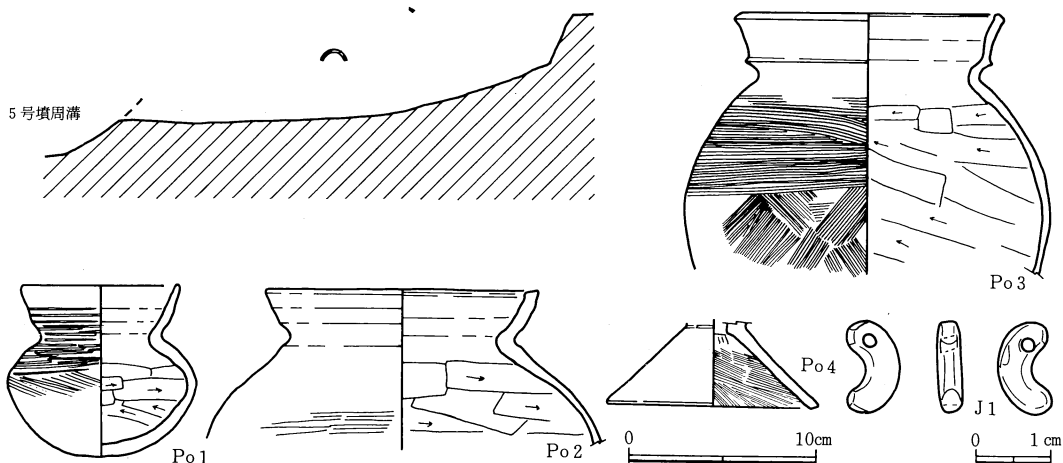
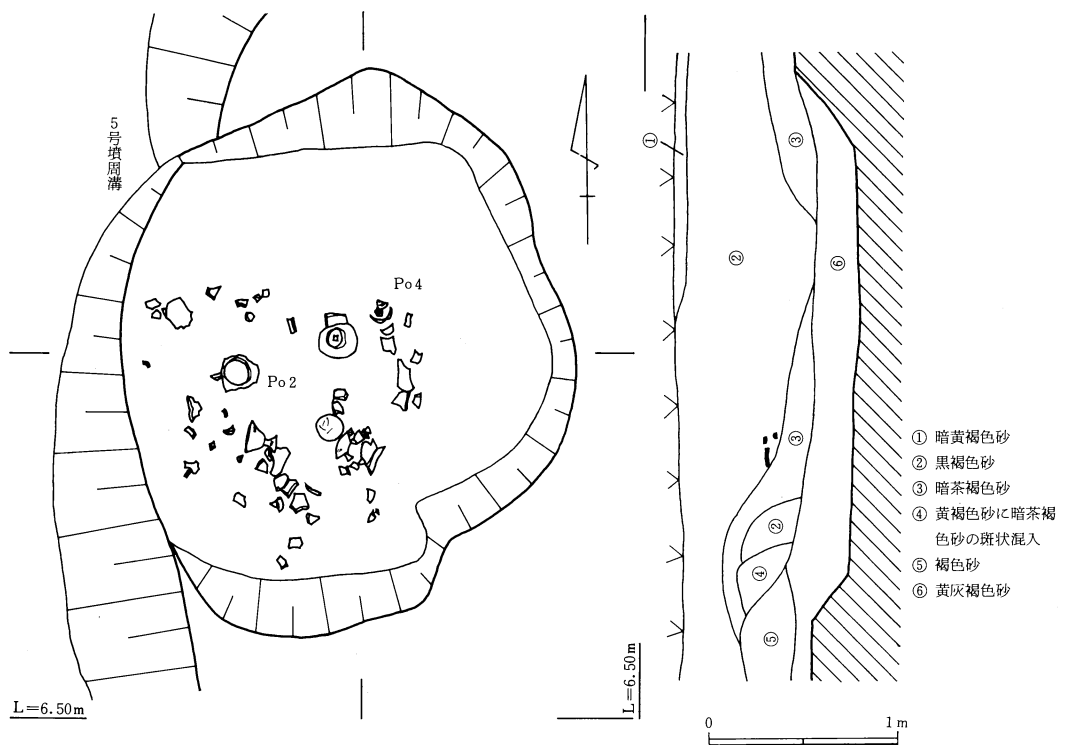


挿図330 10J S K 01遺構図 (S = 1/20)

133があり、これらに関連する遺構と考える。

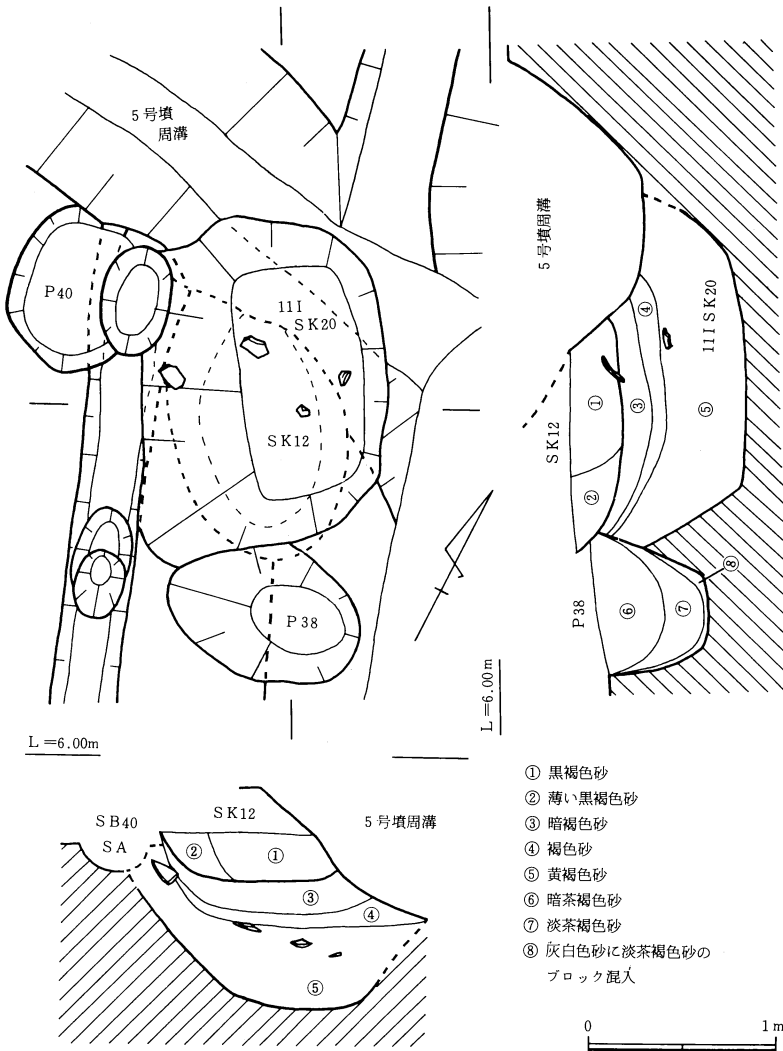
11 I SK01 (挿図331)

11 I 地区の南西にあり、5号墳の周溝に西側を切られている。遺構は一部張り出す方形をなし、床面は平坦でピットはなかった。床面は東西残存長2.2m、南北2.2m、深さ26cmを測る。床面に近い部分から土師器 (Po1~3) 他が出土した。S I 10・12・124などに伴う遺構と考えられる。時期は出土遺物から長瀬Ⅱ期と考える。



挿図331 11 I SK01遺構図 (S=1/40)・遺物図 (土器S=1/4、玉S=1/1)

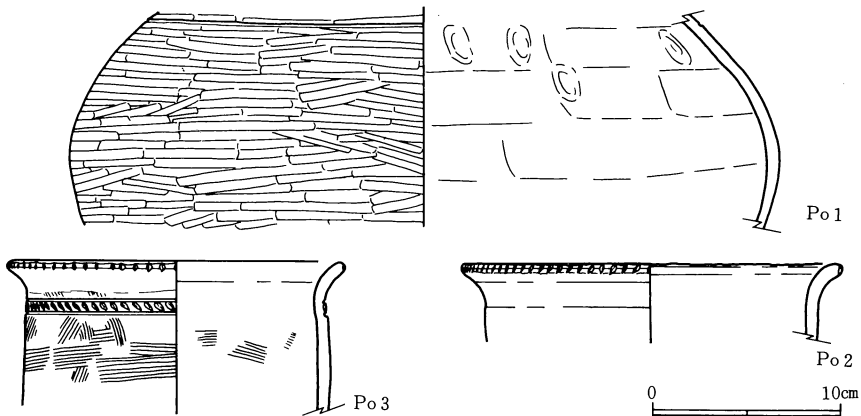
11 I SK20 (挿図332・333, 図版65)



11 I 南東区にあり、S I 124の北、S I 122の西に位置し、5号墳の周溝、SB40、11 I SK12によって切られている。床面の平面形は隅丸の長方形を呈する。大きさは長辺1.22m、短辺0.62mを測り、床面積は約0.75m²である。主軸はN-29°-Wにとる。土壙内及び周辺から弥生時代前期の土器が出土していることからこの時期の土壙と考える。

挿図332

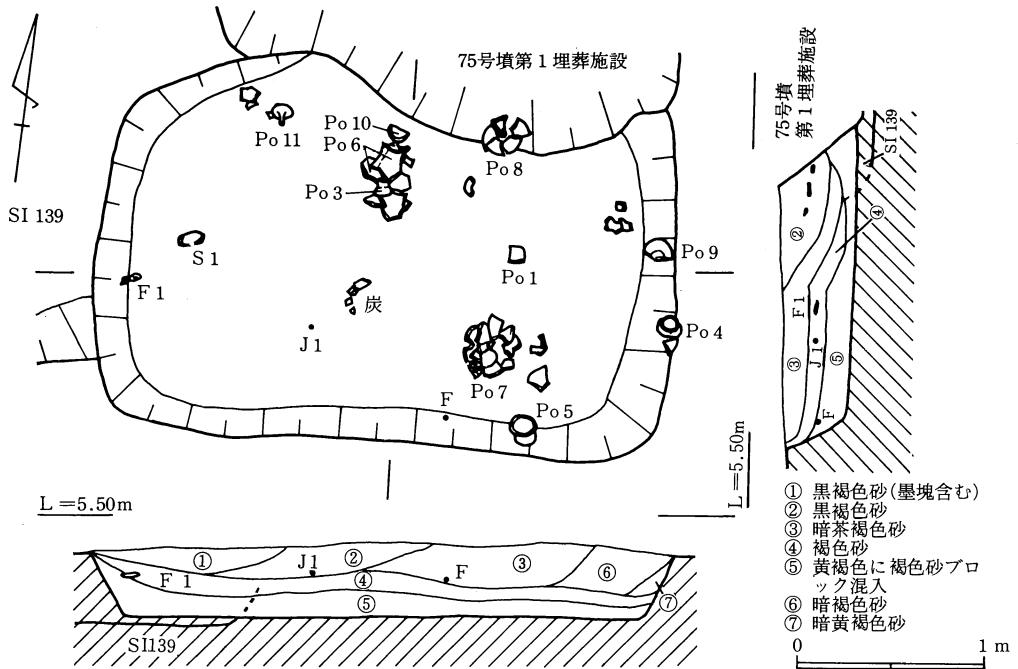
11 I SK20遺構図
(S = 1/140)



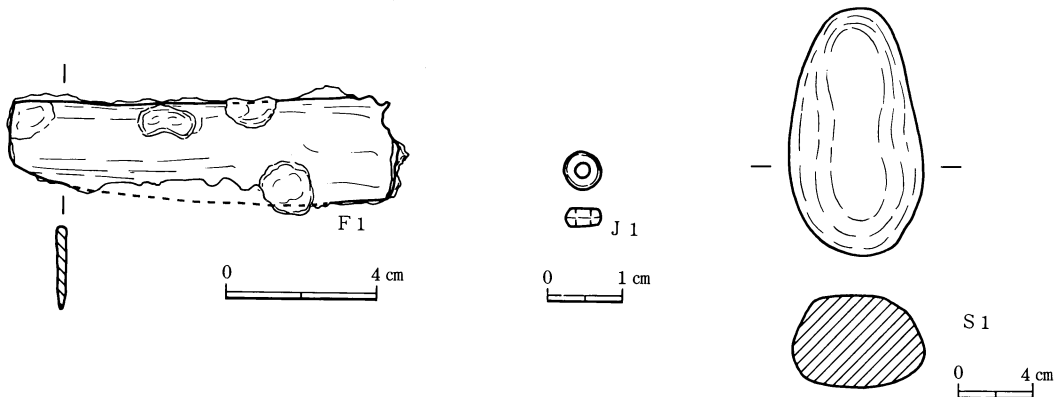
挿図333 11 I SK20遺物図 (S = 1/4)

10H S K 05 (挿図334~336, 図版66・81・82)

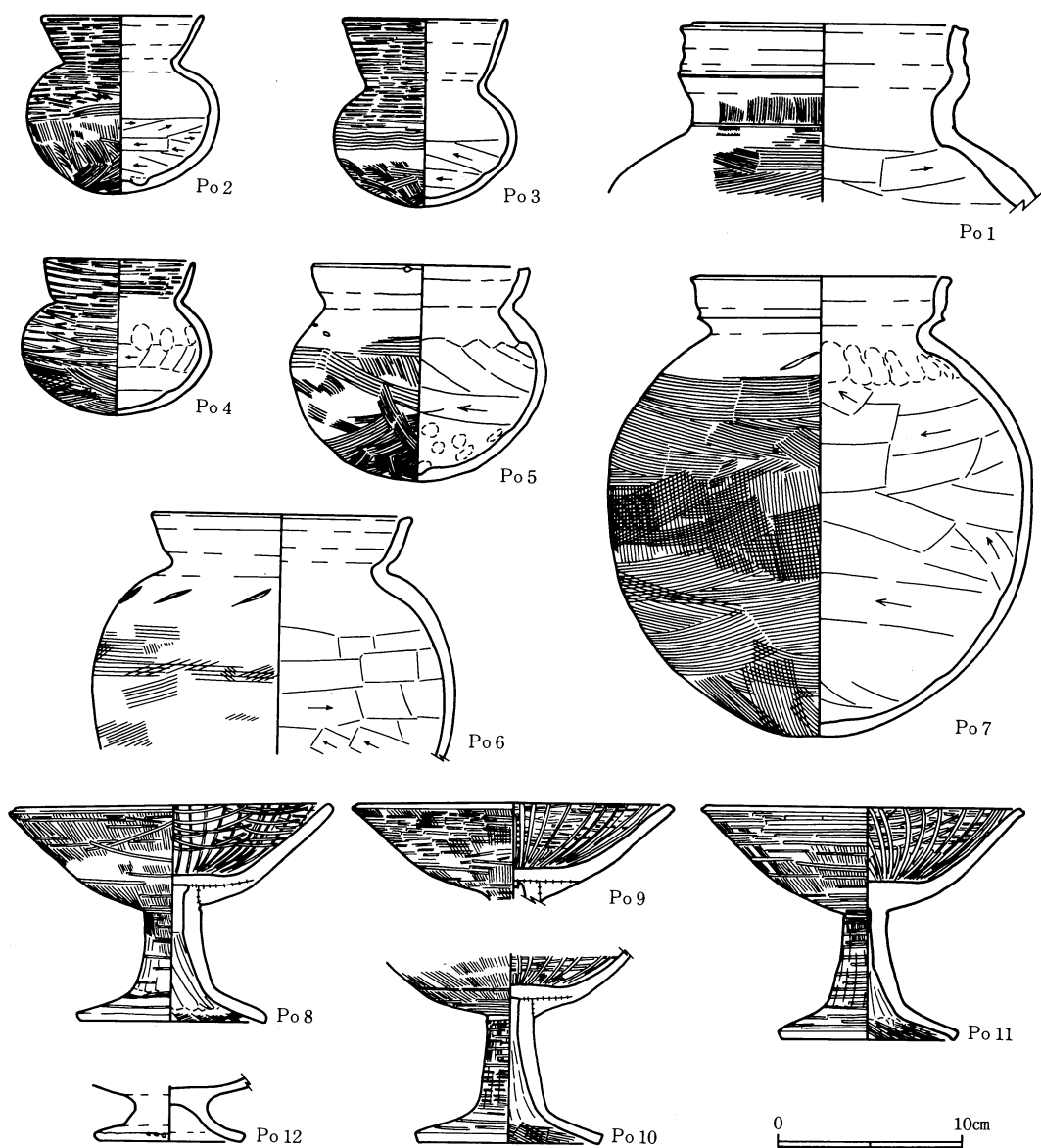
10H地区の北東側, 75号墳墳丘下方より検出した。北側は75号墳の埋葬施設築造時に壊されているが, コーナーから東西に長い方形をなすと思われる。北西側にはS I 139があり, 北東側にはS B 29があるが, 切り合い関係から10H S K 05の方が新しいと考える。規模は長辺3.07, 短辺2.05 (推定), 深さ0.33mを測り, 底面積は4.42 m^2 と推定する。底面にはピットはない。出土遺物には完形, あるいは復元可能な土師器, 曲刃鎌 (F 1), 小玉 (J 1) がある。上面からは長さ20cm程の炭も出土している。時期は古墳時代中期前半と考えられ, 出土状況から住居跡に密接な関係のある遺構と考える。



挿図334 10H S K 05遺構図 (S = 1/40)



挿図335 10H S K 05遺物図その1 (鉄S = 1/2、玉S = 1/1、石S = 1/4)



挿図336 10H・SK05遺物図その2 (S=1/4)

11H SK01 (挿図337・338, 図版66・82)

11H地区南側で検出した。床面310×290cmのやや歪な隅丸の正方形をしている。床面には長辺側にP 1 (76×60-21), P 2 (60×52-24) cmをもつ他に、壁ぎわに浅いP 3 (76×68-63)をもつ。P 1・2の2つを構造柱跡とみなして小形の竈穴住居と考えてもよいだろう。P 3は断面図ではうまく表わされていないが、壁ぎわからその周辺だけに黒褐色砂が流入堆積し、最終的に土壙状の窪みになったものである。炭などは検出されなかったがやや上の壁ぎわにはりつくような形でPo1・4・6が集中して検出された。最も遺構に伴うもの、と考えてよいだろう。土器の時期は長瀬Ⅱ期であろう。

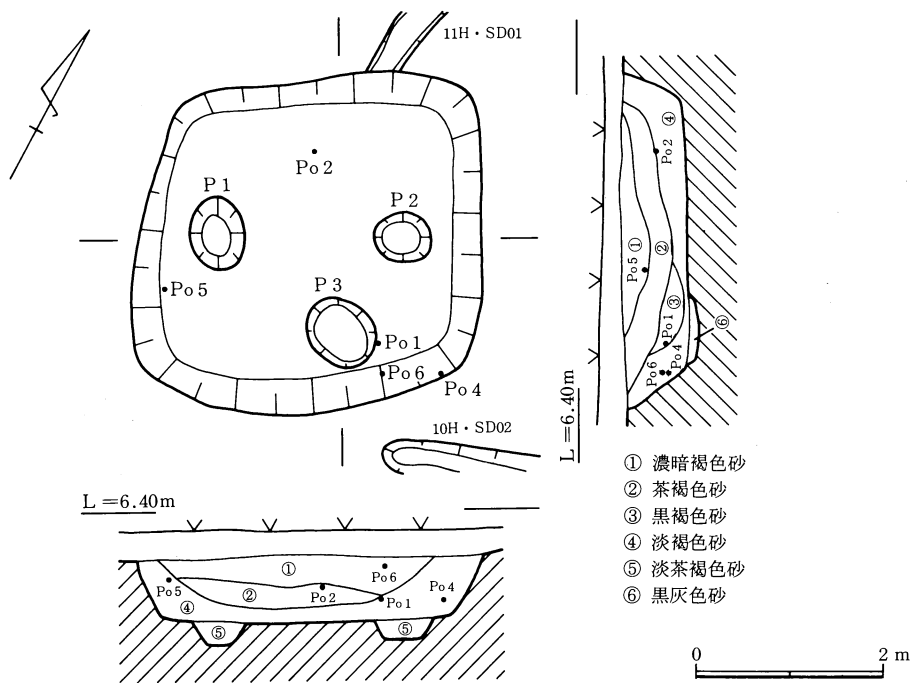


插图337 11H S K 01遺構図 (S = 1/80)

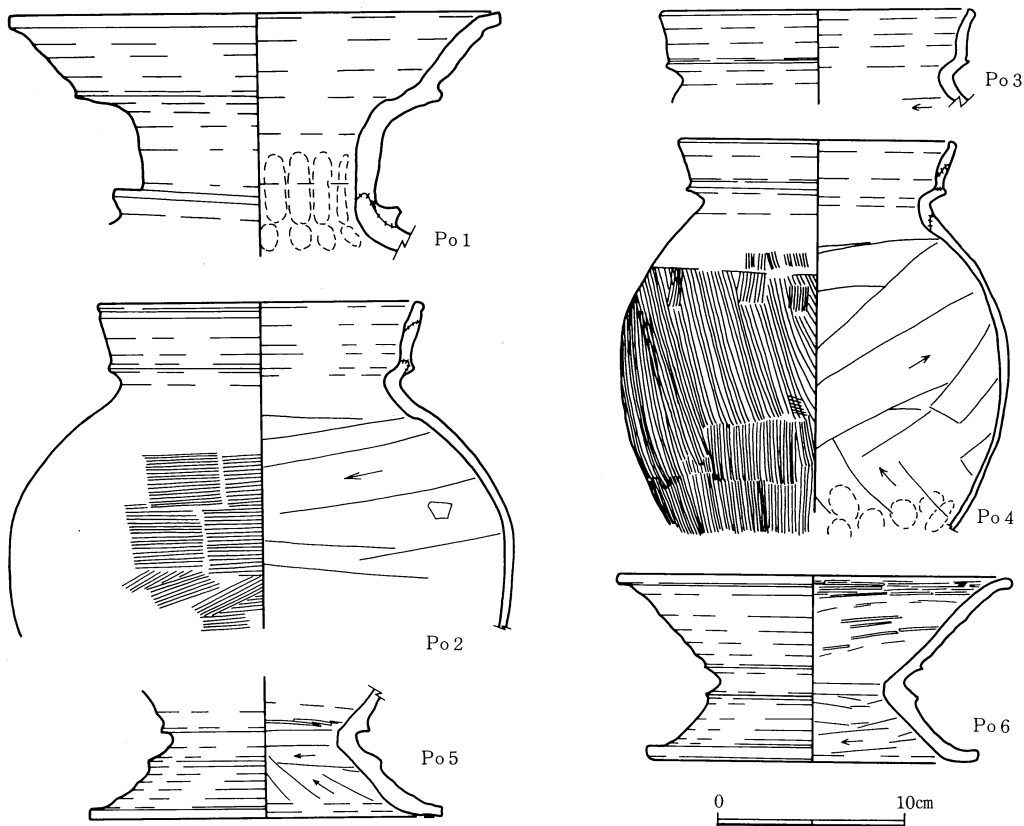
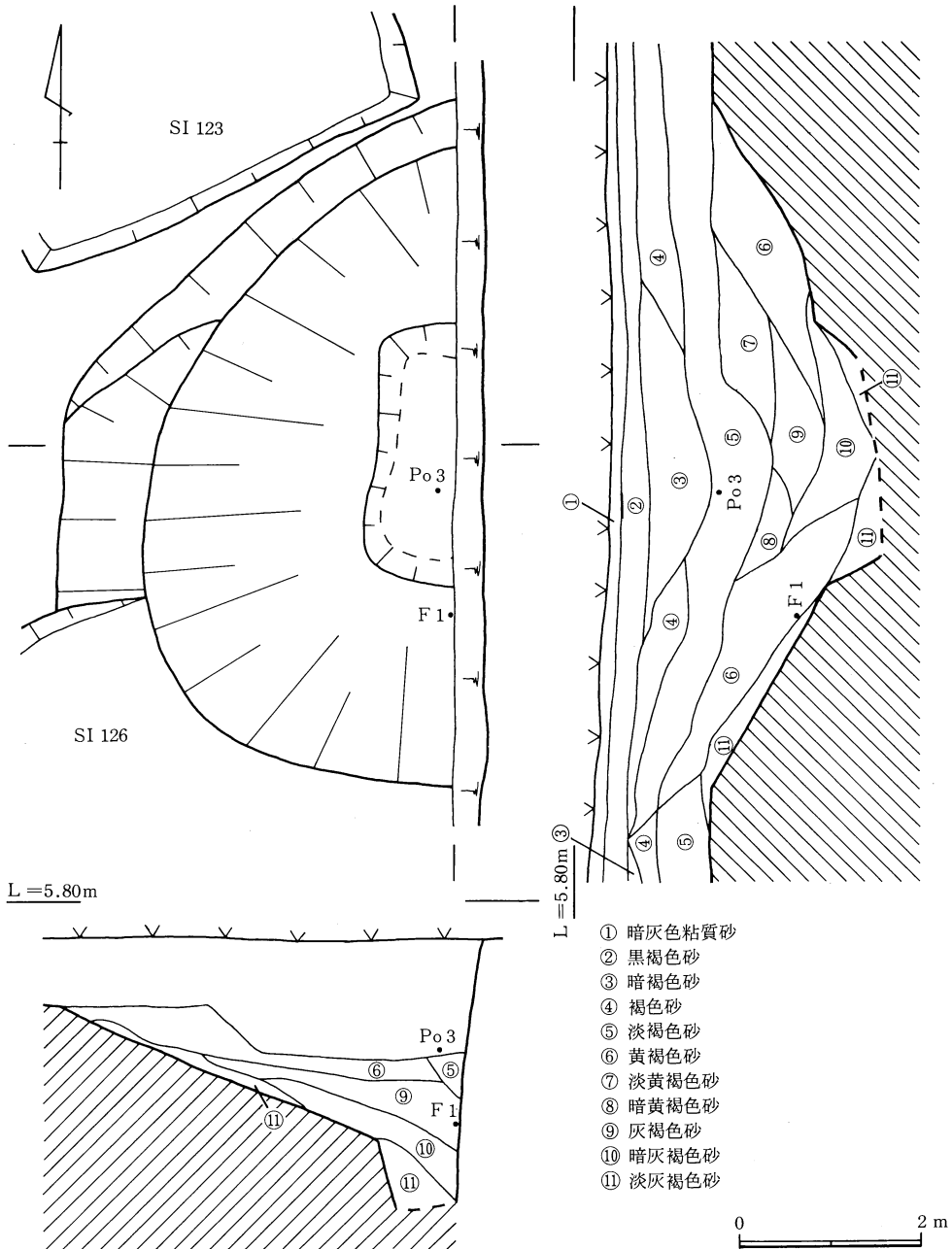


插图338 11H S K 01遺物図 (S = 1/4)

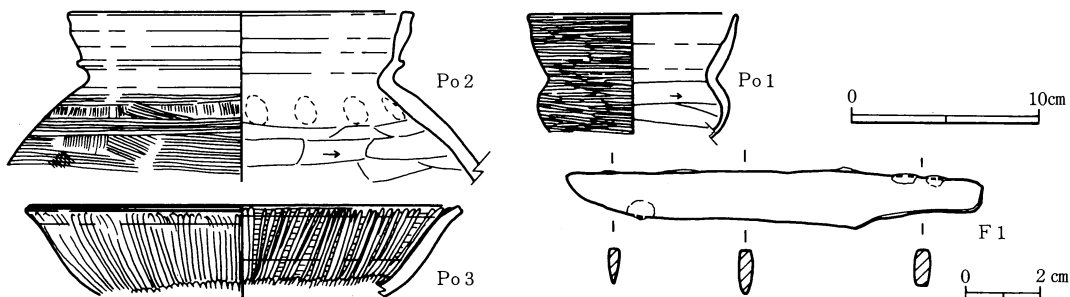
SE06 (挿図339・340, 図版66)

9 I 地区に位置し、南側でS I 126と切り合う。新旧関係はSE06の方が新しい。東側は未調査地域であり、調査部分は西側のみである。平面形は円形にちかい。約30°のゆるい角度ですり鉢状に掘り込まれ、海拔3.20mでさらに長方形に急角度で掘り込まれている。海拔3.70~3.00mの間で掘り込みに沿って酸化鉄を含む固い砂が検出された。調査部分が

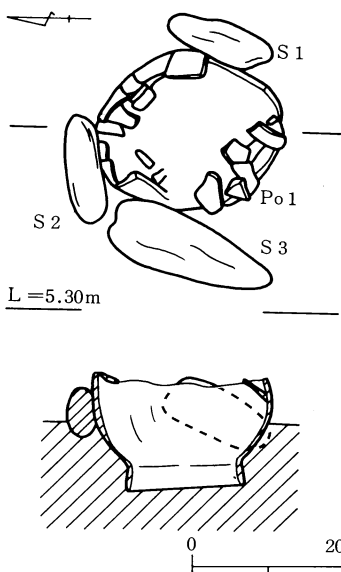


挿図339 SE06遺構図 (S=1/80)

狭いため底部まで掘り下げることが出来なかったが、底部はさらに少し下るものと思われ、土器を敷きつめることはしていない。遺物は刀子（F1）1点、その他土器片が少量出土しているが、砂に混じって埋れたものと思われ、時期はこれと切り合うS I 126により長瀬Ⅱ期以降と考えられる。



挿図340 S E 06遺物図（土器S = 1/4、S = 1/2）



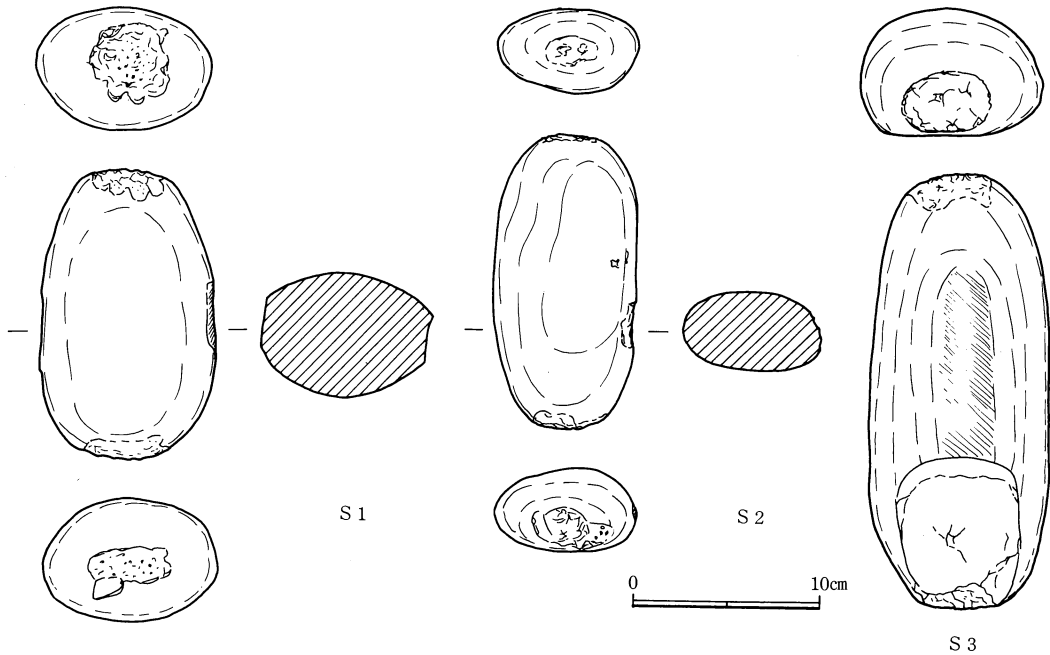
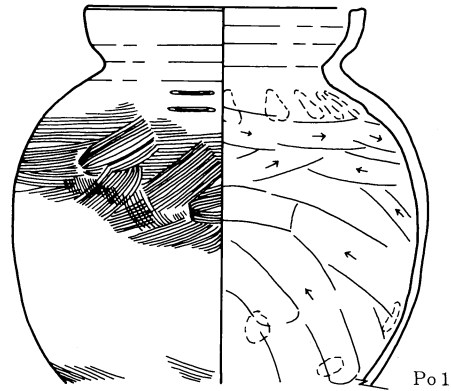
石囲い遺構（挿図341・342，図版66・82）

9 I 地区の南西側にあり、S E 06の南、S I 138・S B 29の東に当たる。下方にはS I 126があり、高さで言えばその床面より71cm上方、検出面からは16cm上方に位置する。また黒砂上層上面からは57cm下方にあたる。掘り方は検出できず、甕（Po1）は逆さに立てられてから、胴部中位くらいまで黒砂を盛られ、さらに3個の河原石（S1～3）で囲まれたものと思われる。河原石はどれも両端に敲石としての使用痕が残り、S1の表面には擦石として使用された跡も残っていた。さらにS2では片側、S3では両側に握り易くするための浅い抉りがつくられている。時期は古墳時代中期前半代と考える。

挿図341 石囲い遺構遺構図（S = 1/10）

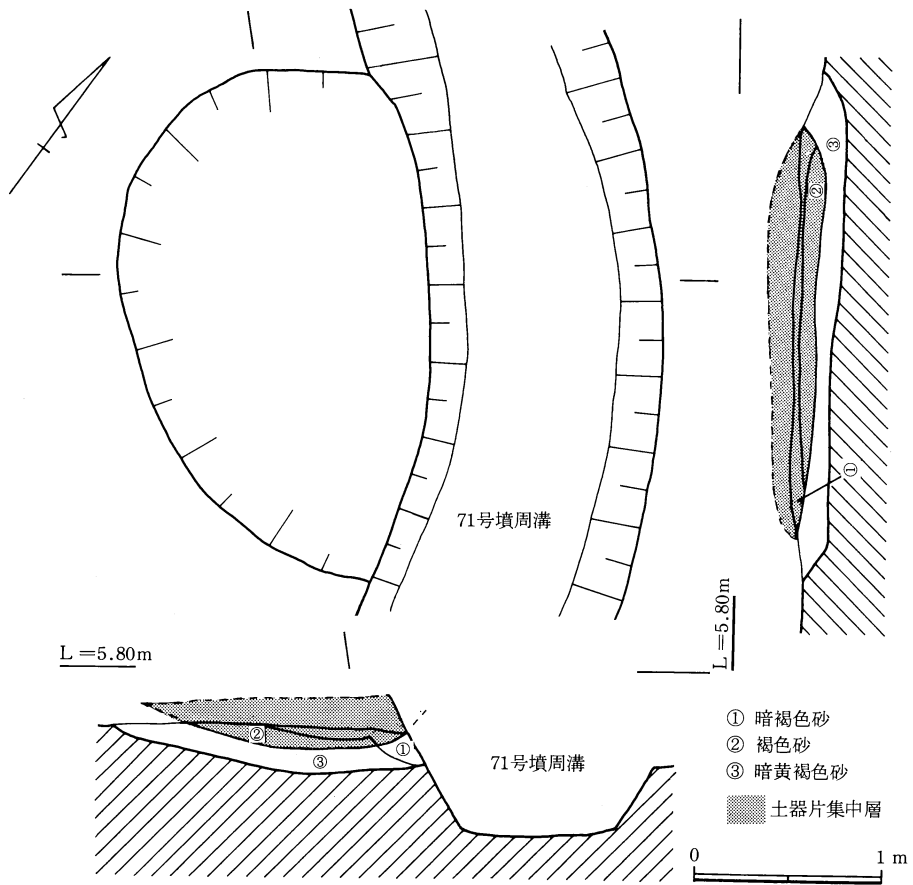
土器片集積遺構（挿図212・343，図版67）

10 J 地区の東に位置し、71号墳の墳丘内北東の裾部にある。71号墳の墳丘上周溝にそって長辺2.2m、短辺1.4mの浅い土壇状の中に厚さ28cmにおよぶ土師器細片の密集地が検出された。密集地上部の土器片は約2cm角の破片が、下部は甕の口縁部のやや大きい破片が出土した。その多くの土器は甕片であるが、壺、小形丸底壺、高坏、器台が少し混り、その他鮫の歯を1点検出した。これら土器片の出土量は、長瀬高浜遺跡でこの面積においては最高の量である。この大量の土器片は71号墳の墳丘上に置かれたものか、あるいは捨てられたものか不明であるが、約2cm角に砕かれた土器片をみれば、小さく砕くことに意味



挿図342 石囲い遺構遺物図 (S = 1/4)

をもつものとも考えられ、祭祀的なものに使用された可能性もある。土器片の時期は長瀬 I・II 期の古墳時代前期後半である。これら土器片の検出時の状態をみるにこの上に 71 号墳が築造されたとは考えられず、築造後に置かれたか、捨てられたものと思われ、71 号墳の築造時期は古墳時代中期中葉であり、土器片の時期との間に差がある。この時期差の理由は不明である。同じような土師器片密集地が、出土量は少ないが、71 号墳の墳丘上南側と、71 号墳の南側外 S I 131 の中、上部より検出された。これらの土器片の大きさも同じく約 2 cm 角で、ほとんど甕片である。



挿図343 土器片集積遺構遺構図 (S = 1/40)

	平面 プラン	主 柱 数	面積(m ²)	規 模 (m) (床 面)	時 時 期	そ の 他		平 面 プラン	主 柱 数	面 積	規 模	時 期	そ の 他
SI121	長 方 形	4	18.4	4.84×3.80	長瀬Ⅲ		SI132	隅丸方形	4	31.0	6.28×5.92	I~II	
122	隅丸方形	2	21.6	4.84×4.46	II~III		133	五 角 形	5	30.9	6.4×6.6	II	
123	方 形	2	25.6	5.28×4.84	III	テラス	134	六 角 形	6	不 明	不 明	II	
124	方 形	4	19.4	4.4×4.4	II	テラス	135	隅丸方形	4	20.3	4.5×4.5	II	
125	方 形	4	40.3	6.5×6.2	III		136	方 形	4	21.2	4.7×4.5	II	
126	方 形	4	不 明	4.80×不明	II		137	長 方 形	2	不 明	不明×3.22	I~II	
127	六 角 形	6	49.7	9.1~9.1	II		138	隅丸方形	4	17.6	5.98×4.90	II	
129	隅丸方形	2?	不 明	不 明	II		139	方 形	?	17.6	4.64×4.64	III	
130	方 形	2	12.7	3.64×3.48	III		140	方 形	4	23.4	4.94×4.74	II	
131	隅丸方形	4	23.3	5.00×4.66	III								

表 2 56年度後期調査地区 (g 地区) 竪穴住居跡表

第V章 長瀬高浜遺跡出土人骨の報告・花粉分析の報告

当遺跡の墳墓から出土した人骨を京都大学池田次郎先生・鳥取大学井上晃孝先生に観ていただいた。またf1地区の粘土層の花粉分析を岡山理科大学三好教夫先生に依頼した。以下はその報告である。

第1節 昭和54~56年度出土人骨の報告（井上晃孝先生の報告を表にまとめた。）

遺構	出主人骨部位	歯 牙	年 令	性 別	備 考
5号墳第1埋葬施設	頭骨、左上肢骨、左寛骨、大腿骨、脛骨	永久歯、摩耗は弱い	若年者	顔面の形態学的特徴から女性と推定	前頭部に赤色顔料の付着を認める。 血液型はB型
28号墳第1埋葬施設	複数埋葬 1. 下顎骨 2.	永久歯 永久歯	磨耗はエナメル質まで20才代 摩耗は極めて弱い20才代	下顎骨の発達弱い、女性の疑い。 不明	
30号墳第1埋葬施設 第2埋葬施設		大臼歯5個 犬歯、小臼歯 大臼歯	磨耗が全く認められない。若年者 歯牙に磨耗が全くみられない。若年者	不明	
32号墳		大臼歯3個と歯片少数	臼歯に磨耗がみられない。若年者	不明	
S X33		歯片のみ残存	不明	不明	
S X34		歯牙23個残存	乳歯と永久歯のはえかわりの時期に相当し、10才前後	不明	
35号墳第1埋葬施設		歯牙片1個残存	不明	不明	
S X36	頭蓋骨、頸椎骨、下肢骨	歯牙はすべて永久歯	上下、左右とも第2大臼歯まで萌出している若年者	頭蓋骨の形態から女性と推定	
47号墳	左右の下顎骨のみ残存	歯牙は全体的に咬耗が進行	第3臼歯の萌出と磨耗度から40才代	下顎結節隆起が発達男性と推定	
S X56	骨片残存	歯牙残存	小臼歯、大臼歯とも磨耗がみられない若年者		
S X61	骨片残存	歯牙片残存	不明	不明	
S X69		永久歯	第2大臼歯まで萌出、磨耗が全く認められない10~14才位	不明	
S X70		小臼歯、大臼歯片	磨耗が極めて弱いことから若年者	不明	
71号墳第1埋葬施設	骨片残存部不明	歯牙片残存	不明	不明	
75号墳第1埋葬施設	頭骨片左右の大腿骨片左右の脛骨片	歯牙残存	歯牙に全く磨耗がみられない。若年者	不明	頭骨に赤色顔料の付着を認める。
77号墳第1埋葬施設	頭蓋骨片	歯牙残存	切歯、犬歯、小臼歯の磨耗は浅いが大臼歯の咬頭は平坦化、象牙質が帯状に露出30~40才位	不明	
77号墳第2埋葬施設		歯牙片残存	不明	不明	
78号墳第1埋葬施設	顔面、前頭骨を残す。	歯牙残存	歯牙の象牙質の露出が帯状を呈す30~40才代	形態学的特徴から男性と推定	
S X79	頭蓋骨、椎骨、胸骨、上肢骨、下肢骨の一部が残存。	乳歯20個、永久歯27個	永久歯の萌出前期にあたり5~6才位と推定する。	頭蓋骨の形態学的特徴から女性と推定	石棺内に用いられていた赤色顔料はベンガラであった血液型はB型身長は約1m位
S X80	歯牙片2個残存		不明	不明	
S X14	頭蓋骨、上肢骨、下肢骨の一部が残存する。	永久歯が残存	大臼歯は咬頭が平坦化し、象牙質が露出30~40才位	頭蓋骨から男性と推定	
S X16	骨片残存	歯牙片残存	不明	不明	
S X18	残存骨は定形のものはないが、屈位の状態ではほぼ骨格順に配列している。	永久歯が残存	上顎の左右の犬歯に象牙質の露出、左右の第3臼歯は萌出しているが磨耗がみられない。	頭骨、下顎骨、歯牙から女性と推定	
S X19	頭蓋骨、上下顎骨、肩甲骨、椎骨、骨盤、肋骨上下肢骨	永久歯が残存	上下顎の大歯、小臼歯に磨耗が認められた。若年者	骨、歯牙が全般的に小さいので女性が疑われる。	
S X20	屈葬で、ヒザを胸骨の方に曲げた状態で骨はほぼ骨格順に配列	永久歯が残存	第3大臼歯の萌出はあるが磨耗が認められない。切歯小臼歯大臼歯の磨耗はエナメル質まで、20~30才位	下顎骨の発達から男性と推定	左大腿骨が42.5cmあることから身長は161cm位
S F71	長管骨片、肋骨片		不明	不明	
S F72	小骨片部位不明		不明	不明	

表3 54~56年度出土人骨